論律部

第二十巻

BL 1411 T8J3 1929 v.24

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
v. 24

昭和新纂 國譯大藏經 論律部 第十二卷

四分律第三目次

卷第四十二

藥揵度之一……一

卷第四十三

藥揵度之二……三一

迦絺那衣揵度第八……四六

拘睒彌揵度第九……五三

卷第四十四

瞻波揵度第十……七六

呵責揵度第十一之一……九〇

卷第四十五

呵責犍度之餘……一〇九
人犍度第十二之一……一一九
卷第四十六
覆藏犍度第十三……一四六
遮犍度第十四……一五四
破僧犍度第十五……一六八
卷第四十七
滅諍犍度第十六之一……一八六
卷第四十八
滅諍犍度之二……二一三
比丘尼犍度第十七……二二三
卷第四十九
比丘尼犍度之下……二四四
法犍度第十八……二五五
卷第五十

房舍揵度初……二八一
卷第五十一
房舍揵度之餘……三一三
雜揵度之一……三一八
卷第五十二
雜揵度之二……三四三
卷第五十三
雜揵度之三……三七六
卷第五十四
集法毘尼五百人……四〇六
七百集法毘尼……四一七
卷第五十五
調部之一……四三〇
卷第五十六
調部之二……四六一

卷第五十七
調部之三……四九四
毘尼增一之一……五一〇
卷第五十八
毘尼增一之二……五二四
卷第五十九
毘尼增一之三……五五三
卷第六十
毘尼增一之四……五七八

四分律

第三

論律部
第十二卷

四分律 卷第四十二 三分之六

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

藥犍度之一

【一】爾時、佛、波羅㮈國に在したまふ。時に五比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却きて一面に住し、佛に白して言さく、『大德、當に何の食をか食すべき。』佛言はく、『乞食して五種食を食するを聽す。』爾時、比丘、乞食して飯を得。佛言はく、『食するを聽す。』種種の飯、粳米飯、大麥飯、【床】床米飯、粟米飯、俱跋陀羅飯を得。佛言はく、『是の如くの種種の飯を食するを聽す。』麨を得。佛言はく、『種種の麨を食するを聽す。』乾飯を得。佛言はく、『種種の乾飯を食するを聽す。』魚を得。佛言はく、『種種の魚を食するを聽す。』羹を得、佛言はく、『種種の羹を食するを聽す。』修步を得。佛言はく、『食するを聽す。』乳を得。佛言はく、『種種の乳を食するを聽す。』酪を得。佛言はく、『種種の酪を食するを聽す。』酪漿を得。佛言はく、『種種の酪漿を飲むを聽す。』吉羅羅を得。佛言はく、『食するを聽す。』蔓菟を得。佛言はく、『種種の蔓菟を食するを聽す。』菜を得。佛言はく、『種種の菜を食するを聽す。』佉闍尼食を得。佛言はく、『種種の佉闍

【一】食物に關することを說く。戒律にては食物を藥といふ。

【床】高粱のこと

【修步】青豆羹のこと。

【吉羅羅】筍のこと。

尼食を食するを聽す。』佉闍尼食とは、根食、莖食、葉食、華食、菓食、油食、胡麻食、石蜜食、蒸食なり。爾時、世尊、波羅㮈國に在したまふ。時に五比丘卽ち座より起ち、前んで佛の足を禮し、却きて一面に住す。佛に白して言さく、『當に何の藥をか服すべき。』佛言はく、『腐爛藥を服するを聽す。病比丘因緣あれば、盡形壽應に服すべし。』爾時、世尊、繩床の中に在す、時に病比丘有り、醫呵梨を服せしむ、佛言はく、『病比丘因緣あれば、盡形壽呵梨勒を服するを聽す。』爾時、佛、舍衞國に在したまふ。時に比丘有り、風を患ふ。醫酢麥汁を服せしむ。佛言はく、『服するを聽す。』云何が作らんかを知らず。佛言はく、『淨人器を淨洗し、麥を漬し、乃至爛せしめ、漉して汁を取りて飮ましむ。若し麥汁臭ければ應に覆すべし、若し汁滓倶に出づれば、漉器を作るを聽す。』云何が器を作るを知らず。佛言はく、『若は銅、若は木、若は竹にて漉器を作るを聽す。漉六筩の如く作れ。若は三角、若は大、若は小なり。若し麥中にて燥けば、淨人をして更に水を益さしめよ。』時に病比丘、多人の前に在りて麥漿を飮む。餘の比丘見て皆共に之を惡穢す。佛言はく、『多人の前に在るべからず、應に屛處に在りて飮むべし。』時に一切の僧皆須ふ。佛言はく、『應に一切共に飮むべし。』時に諸の比丘あり、各各別に器を用ひて飮む、衆器皆臭し。佛言はく、『各別器にて飮むべからず、共に一器を用ひて飮むべし。』時に比丘有り、飮み已りて器を洗はず、餘の比丘に與ふ。佛言はく、『爾るべからず、應に器を洗ひ已りて、餘の比丘に與ふべし。』爾時、佛、舍衞國に在したまふ。比丘有りて吐下す。粥を

煮る比、日時已に過ぐ。佛言はく、『完全麥若は完全稻穀を以て、煮て熟せしむるを聽す。破漉汁を飲ましむる勿れ。』爾時、病比丘有り、醫鞞醯勒を服せしむ。佛言はく、『服するを聽す。』醫阿摩勒を服せしむ。佛言はく、『服するを聽す、若し比丘病の因緣あれば、盡形壽服せよ。』爾時、病比丘有り、醫蓽茇羅を服せしむ、佛言はく、『比丘病の因緣有れば、盡形壽服するを聽す。』爾時、病比丘有り、醫藥を服せしむ、佛言はく、『服するを聽す。若は是れ常に食する者に非ず。比丘病の因緣有れば、盡形壽應に服すべし。』爾時、病比丘有り、大五種根藥を須ふ。佛言はく、『服するを聽す。』小五種根藥を須ふ。佛言はく、『服するを聽す。比丘に病の因緣有れば、盡形壽服せよ。』爾時、病比丘有り、醫質多羅藥を服せしむ。佛言はく、『病比丘因緣有れば、盡形壽服するを聽す。』爾時、病比丘有り、醫罽沙藥を服せしむ。佛言はく、『病比丘因緣有れば、盡形壽服するを聽す。』此中の罽沙とは、根莖葉花果の罽沙なり。爾時、病比丘有り、醫婆梨婆婆藥を服せしむ。佛言はく、『病比丘服するを聽す。』婆梨婆婆とは、根莖葉花果、若は堅鞕なる者なり、式渠も亦是の如し、帝菟も亦是の如し。爾時、病比丘有り、醫華茇椒を服せしむ。佛言はく、『比丘に病の因緣有れば、盡形壽服するを聽す。』爾時、病比丘、種種細末藥を用ひて洗ふ。佛言はく、『種種の細末藥を用ふるを聽す。』是中の細末藥とは、胡桐樹末、馬耳樹末、舍摩羅樹末にて洗ふ。若は自ら作り、若は更互に作る、杵臼を須ふ。佛言はく、『畜ふるを聽す。』篏箕篵掃帚を須ふ。佛言はく、『畜ふるを聽す。』時に諸の比

丘、畏慎し、敢て塗香を以て末藥中に著けず。佛言はく、『著くるを聽す。』時に末藥、器の盛る無し。佛言はく、『瓶を作るを聽す。』若し坌塵を患ふ。『蓋を作るを聽す。』若し堅牢ならしめんと欲すれば、『常に床下に著き、若は壁上の象牙杙上に串すべし。』爾時、病比丘、塵末藥を以て身を洗ひ痛を患ふ。佛言はく、『細末、若は細泥、若は葉、若は華、若は菓より取り、病者をして藥を得しむるを聽す。』是中の病者とは、若は體に瘡、若は癬、若は癘、若は疥癩、乃至身臭なり。爾時、比丘病む、鹽を須ひて藥と爲す。佛言はく、『服するを聽す。』是中の鹽とは、明鹽、黑鹽、丸鹽、樓魔鹽、支頭鞞鹽、鹵鹽、灰鹽、新陀婆鹽、施盧鞞鹽、海鹽あり。若し比丘病の因緣あれば、盡形壽服するを聽す。』爾時、病比丘灰藥を須ふ。佛言はく、『灰藥を用ふるを聽す。』是中の灰藥とは、薩闍灰、賓那灰、波羅摩灰なり。比丘病の因緣有れば、盡形壽用ふるを聽す。』爾時、病比丘、闍婆藥を須ふ。佛言はく、『用ふるを聽す。』是中の闍婆とは、蘗牛、蘗莪、婆提尸婆黎陀歩、梯夜婆提、薩闍羅婆なり。比丘病の因緣有れば、盡形壽應に服すべし。』爾時、比丘病み、眼藥を須ふ。佛言はく、『用ふるを聽す。』是中の眼藥とは、陀婆闍那、耆羅闍那なり。比丘に病の因緣有れば、盡形壽應に服すべし。』爾時、比丘、眼に白瞖有りて生ず。人血を須ふ。佛言はく、『用ふるを聽す。』爾時、比丘、眼白瞖を患ふ。人骨を須ふ。佛言はく、『用ふるを聽す。』爾時、比丘、眼白瞖を患ふ、細軟髮を須ふ。『燒末を眼中に著くるを聽す。』爾時、畢陵迦婆蹉、眼病を患ふ。琉璃篦を得たり。佛言はく、『眼病を治せん

為の故に畜用するを聽す。』爾時、舍利弗、風を患ふ。醫藕根を食せしむ。爾時、大目揵連、舍利弗の所に往き、問訊し已りて、一面に坐す。舍利弗に語りて言はく、『所患差ゆるとせんや不や。』答へて言はく、『未だ差えず。』復問はく、『舍利弗、何の須ふる所ぞ。』答へて言はく、『藕根を須ふ。』目連言はく、『東方に阿耨大池有り、水清澄にして塵穢有ること無し、之を飲むに患無し。此を去ること遠からず、更に池有り、廣さ五十由旬、其水清澄にして塵穢有ること無し。藕根有り、車軸の如し。若し取りて之を折らば、其汁乳の如し、之を食するに蜜の如し。池を去ること遠からず、金山有り、崖の高さ五十由旬、是中に七大龍王兄弟有りて共に住す。其最少の者は一閻提王に供給す。其次に大なる者は、二天下王に供給す。其次に轉大なる者は、四天下轉輪聖王に供給す。伊羅婆尼龍象王は、天帝釋に供給す。彼諸の龍象王、來下して池に入り、淨澡浴して水を飲み、鼻を以て藕根を拔取し、泥穢を淨洗して之を食ひ、好容色と氣力充足とを得、彼池の藕根之を食するを得べし。』時に舍利弗、默然として之を可す。時に目連、舍利弗の默然たるを見て、即ち舍衛國に於て沒して現ぜず、人の臂を屈伸する頃の如きに彼池邊に至り、化して大龍象王となり、彼七象王の中に於て、形色最勝なり。時に彼七龍象王見て皆恐怖して毛堅ち、彼來りて我池を奪はんことを恐る。爾時、大目連、彼七龍象王の心に恐怖を懷くを見、即ち故身を還復す。彼即ち目連に問うて言はく、『比丘何の須欲する所ぞ。』答へて言はく、『我藕根を須む。』語りて言はく、『汝藕根を須めんには、何んが早く語られず、我をして

【諸の比丘等】下殘食を食することを聽す。

恐怖して毛堅たしむる。」彼即ち池に入りて澡浴して水を飲み、鼻を以て藕根を拔取し、泥を洗ひ去り、目連に授與す。目連藕根を得已りて、此池より忽然として現せず、舍衞國に還り、祇桓中に至り、舍利弗に授與して語りて言はく、『此は是れ藕根なり。』舍利弗、食し已りて病即ち除差するを得たり。殘藕根有り、看病人に與ふ、看病人先に已に受請し肯て之を食せず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『看病人は受請と不受請と、病人の殘食を食するを聽す。』諸の比丘、先に食を受け已りて彼聚落に至る、檀越有りて便ち食を請ず。食し已りて來り還りて僧伽藍の中に至り、向の食を持して諸の比丘に與ふ。

諸の比丘、先に已に受請し、敢て受けず、人の食する者無し、便ち之を棄つ。時に衆鳥烏有り、食を諍つて喚呼す。爾時、世尊、知りて故に阿難に問ひたまはく、『諸の烏鳥何が故に喚呼する。』阿難、此事を以て具に世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、餘食法を作して食するを聽す、彼應に食を持して彼比丘の前に至りて語りて言ふべし、「大德、我已に受請す、若は已に食す、是を看よ、是を知れ」と。』餘食法を作すには、彼應に少を取りて之を食し、語りて言ふべし。『我已に食す。止めよ、爾之を食すべし。』應に是の如きの餘食法を作して食すべし。爾時、長老上座有り、知識多し、村間に乞食し來り、聚りて一處に在りて食す。食し已りて、殘食を持して僧伽藍の中に來至して諸の比丘に與ふ。

諸の丘比先に已に受請す、肯て之を食せず、人の食する者無し、便ち之を棄つ。時に衆烏鳥有り、食を諍うて喚呼す。世尊知りて故に阿難に問ひたまはく、『諸の烏鳥何が故

に喚呼する。」阿難、此事を以て、具に世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、自ら食を持して來り、餘食法を作すを聽す。食を得ば應に是の如く作すべし。』食を持して彼比丘の所に至り、語りて言はく、『大德、我已に受請す、若は已に食す、是を看よ、是を知れ。』餘食法を作すには、彼應に、少食を取りて食し已り、語りて言ふべし、「我止めん、汝食すべし」と。應に是の如く餘食法を作すべし。』爾時、毘佉舍無夷羅母、大に新菓を得、彼是の如きの念を作さく、『我今寧ろ食を作すに、佛及び僧を請じ、菓を以て布施すべし。』即ち人を遣して僧伽藍の中に往き、白して言はく、『願くば諸の大德、我明日の請食を受けたまへ。』即ち其夜に於て種種の美食を辨じ、明日往いて、『明至る。』と白す。爾時、世尊、衣を著け鉢を持し、千二百五十の比丘と倶に、毘舍佉無夷羅母の請に就き、座に就きて坐す。毘舍佉、種種の多くの美飲食を以て、佛及び僧に飯す。食し已りて鉢を捨て、更に一卑床を取り、却りて一面に坐す。時に世尊、種種に方便開化說法して、歡喜を得しめたまふ。爾時、世尊、說を爲し已りて、座より去りたまふ。時に毘舍佉無夷羅母、食を行じて忘れて菓を與へず。彼是の如きの念を作さく、『我新菓の爲の故に、佛及び僧を請じて飯を設く、今正に食を行じて、忘れて菓を與へず。』時に即ち人を遣して、菓を送りて僧伽藍の中に至り、諸の比丘に與ふ。諸の比丘、已に食し竟る。肯て之を受けず、往いて佛に白す。佛言はく、『若し彼より來らば、應に餘食法を作して之を食すべし、上の法の如し。』

【二】下病因緣あれば生肉を食ふも不犯なるを說く。

【三】下病に非ずして肉を食ふの非なるを說く。

（二）爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に癲狂病の比丘有り、殺牛處に至りて、生肉を食ひ血を飲む。病卽ち差えて本心に還復し、慚愧す。諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『不犯なり。若し餘の比丘ありて、是の如きの病有り、生肉を食し血を飲みて、病差ゆるを得ば、食するを聽す。』

（三）爾時、世尊、波羅㮈國に在したまふ。時に世穀貴く、乞食得難し、時に諸の比丘、乞食して得ず、往いて象廐に至りて乞ふ。時に彼に鬼神有り、沙門を信敬する者なり、卽ち象をして死せしめ、彼に於て象肉を得て之を食せしむ。世尊慈念して諸の比丘に告げたまはく、『此は是れ王の兵衆なり、王若し聞かば、必ず歡喜せず、自今已去、象肉を食すべからず。』時に諸の比丘、波羅㮈國に在りて乞食して得ず。馬廐に往いて乞ふ。時に沙門を信敬する鬼神有り、卽ち馬をして死せしめ、彼に於て馬肉を得て之を食せしむ。世尊、慈念して諸の比丘に告げたまはく、『此は是れ王の兵衆なり。聞かば必ず歡喜せず、自今已去、馬肉を食すべからず。』爾時、比丘、波羅㮈國に於て乞食して得ず。能く水底を行く人の所に至りて乞ふ。時に沙門を信敬する鬼神有り、諸龍をして死せしめ、彼に於て龍肉を得て之を食せしむ。爾時、善現龍王、己の池より出で、世尊の所に往き、頭面に足を禮し已りて、卻りて一面に住し、佛に白して言さく、『世尊、龍有りて能く一國土を燒く、若は一國土を滅ずるあり、諸の比丘、此龍肉を食す、善い哉、世尊、比丘をして龍肉を食せしむる勿れ。』時に世尊、善現龍王の語を聞き、默然として之を受けたまふ。時に善現

佛の聽許したまふを見、頭面に佛を禮し已りて本處に還往す。爾時、世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、『此龍に大神力有り、威德有り、能く一國土を燒き、若は一國土を滅ず、諸の比丘の肉を食す。自今已去、龍の肉を食すべからず。』時に比丘有り、波羅㮈國に住して乞食して得ず、旃陀羅の家に往き、彼に於て狗肉を得て之を食す。諸の比丘、乞食するに、諸狗憎みて逐うて之を吠ゆ。諸の比丘、是念を作さく、『我等或は能く狗肉を食す、故に衆狗をして憎み逐うて我を吠えしむるのみ。』と。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『自今已去、狗肉を食するを得ざれ、若し食すれば突吉羅を得。』

時に世尊、波羅㮈國に在したまふ。時に比丘有り、吐下藥を服す。優婆私有り。蘇卑と字く。僧伽藍の中に至りて房舍を看、病比丘の所に至りて問うて言はく、『何の患苦する所ぞ。』答へて言はく、『吐下藥を服す。』と。問ふ、『比丘何の須欲する所ぞ。』答へて言はく、『肉を須ふ。』答へて言はく、『我當に肉を送るべし。』即ち波羅㮈に還り、人を遣し、錢を持して肉を買はしむ。語りて言はく、『男子、此錢を以て肉を買ひ來れ。』時に波羅㮈、屠殺せず、彼人周く行いて肉を求むるも得ず、還りて優婆私の所に至りて、白して言はく、『大家、知るや不や、今は此れ不殺なり、遍く行いて肉を求むるも得ず。』優婆私、是の如きの念を作さく、『我吐下比丘に肉を與ふるを許す、恐らくは此比丘肉を得ざれば、或は能く命過せん。若し是生死の比丘命過せば、出家法の中に於て退せん。若し是れ學人ならば前進するを得ず、若し是れ羅漢ならば、則ち世間をして福田を失はしめん。即ち後室に入

り、利刀を持して自ら髀裏の肉を割き、婢に與へて煮せしめ已り、持して僧伽藍中に往き、吐下比丘に與へしむ。婢即ち勅の如く持して比丘に與ふ。比丘食し已りて、病即ち除差す。彼優婆私、肉を割く時、擧身痛を患ひ、極めて苦惱と爲す。時に優婆私の夫、先に出でて行き、還りて蘇卑を見ず。即ち問はく、『蘇卑優婆私何處に在るや。』答へて言はく、『病んで内に在り。』即ち問はく、『何の患ふる所ぞ。』即ち具に因緣を答ふ。彼夫主言はく、『未曾有なり、蘇卑。沙門の所に於て是の如きの信樂有り、愛惜する所無くして、乃ち身肉に至る。』蘇卑優婆私、是念を作さく、『我今患苦極めて重し。或は能く此を以て斷命せん。我今寧ろ種種の飲食を辦具し、佛及び僧を請ずべし。最後に佛及び僧を見るの因緣を作すべし。』時に人を遣して僧伽藍の中に往きて白して言さく、『大德、明日我請食を受けたまへ。』時に世尊、默然として之を受けたまふ。即ち其夜、種種美好の飲食を辦具し、明日往いて、『時到る。』と白す。時に世尊、衣を著け鉢を持ち、諸の比丘僧と倶に、蘇卑優婆私の家に往き、座に就いて坐す。知りて故に問ひたまはく、『優婆私蘇卑何處にか在る。』答へて言はく、『病んで内に在り。』佛言はく、『優婆私蘇卑を喚び來れ。』彼即ち語りて言はく、『佛、汝を喚びたまふ。』「是の如きの念を作さく、『世尊我を喚びたまふ。』即ち速に起きぬ、身痛即ち止み、瘡復故の如く異ならず。時に優婆私、蘇卑佛の所に往き頭面に足を禮し、却りて一面に住す。佛告げて言はく、『是を作すべからず、是を作すべからず。蘇卑優婆私、當に是の如きの施、是の如きの學を作すべし、自ら苦痛ならず、亦

【四】下比丘と住せしめんために一切の所須を具ふべきを說く。

彼を惱さず。」時に蘇卑優婆私、手ら自ら美好の飲食を斟酌す。食し已りて鉢を捨て、小床を取りて一處に在りて坐す。時に世尊、優婆私の爲に、種種に方便說法して歡喜を得しめたまふ。世尊、爲に說法し已りて座より起ちて去りたまひ、還りて僧伽藍の中に至り、吐下比丘の所に往き問うて言はく、『蘇卑優婆私肉を送りて汝に與ふるや不や。』答へて言はく、『我に肉を與ふ。』問うて言はく、『汝食するや不や。』答へて言はく、『食す。』復問はく、『美なるや不や。』答へて言はく、『美なり、是の如きの美肉は得難し。』佛、言はく、『汝は癡人なり、人肉を食ふ。自今已去、人肉を食するを得ざれ。若し食すれば偸蘭遮なり、及び餘の可惡の肉は食すべからず、若し食すれば突吉羅なり。』

(四)爾時、世尊、波羅㮈に在したまふ。居士有り、耶輸迦の父なり。往いて佛の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に坐す。爾時、世尊、無數方便の爲に說法開化し、歡喜を得しめたまふ。耶輸迦の父、佛の說法開化を聞き、心大に歡喜し已りて座より起ち、佛に白して言さく、『願くば我請を受けたまへ。』時に耶輸迦、世尊の後に侍從す。時に世尊、默然として請を受けたまふ。耶輸迦請を受けず、『佛未だ我等に別請を受くるを聽したまはず。』佛言はく、『二種の請有り、受くるを聽す。若は請僧、若は別請。』爾時、異居士有り、是念を作さく、『何の福德を作してか僧をして常に供養を得しめ、我施斷絕せざる。』即ち佛に白す。佛言はく、『僧の爲に常に食を作すを聽す。』彼是の如きの言を作さく、『我常に衆僧の爲に食を作す能はず。何の福德を作してか僧をして常に供養を得しめ、

我施をして斷絶せざらしむる。」佛に白す。佛言はく、『比丘、其舍に往き、常に食を與ふるを聽す。』彼是言を作さく、「我常に道人の爲に食を作す能はず。何の福德を作してか、僧をして常に供養を得しめて我施斷絶せざる。」佛に白す。佛言はく、『僧差し往いて食するを聽す、若は食を送りて僧中に至らば、若は八日、若は布薩日、若は月初日に食するを聽す。』時に居士有り、是念を作さく、『云何が福を作して衆僧を供養し、便ち施業を成ずる。』佛に白す。佛言はく、『衆僧に藥錢を施すを聽す。』時に居士有り、新に房舍を作る、道人の住する無し、念じて言はく、『云何が衆僧を供養し、比丘をして此房に在りて住せしめん。』佛に白す。佛言はく、『房中に在りて粥を作すを聽す。若し復住せざれば、房に在りて、種種の餅及び菓を作し、若し故住せざれば、當に爲に飯食を作すべし、若し住せざれば、房錢を與ふるを聽す、若し故住せずんば、繩床、木床、坐褥、臥褥、枕、地敷を與ふるを聽す。若し故住せずんば、應に襯體衣を與へ、氈と被とを與ふべし。若し故住せざれば、鉢を與へ三衣を與へよ。若し故住せずんば、應に爲に房舍戸鉤を作り、杖を與へ、革屣を與へ、蓋を與へ、房を與へ、水瓶を與へ、洗瓶器、若は盛水器を與へ、浴室の瓶と床とを與へ、刮汚刀を與へ、香熏を與へ、丸香を與へ、房衣を與ふべし。若し故住せざれば、沙門一切所須の者を應に與ふべし。』爾時、世尊、繩床の中に在り、時に諸の比丘乞食す。時に人有り、牛乳を搆り、犢子をして飲ましめ已りて復搆るを見る。犢子の口中より涎沫出で、乳と相似たり。後遂に疑うて復乳を飲まず、佛に白す。佛言はく、

【五】下五種の藥を服することを聽す

飲むを聽す、穀乳の法應に爾るべし。』

（五）爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に諸の比丘、秋月に病を得、顏色憔悴し、形體枯燥癬白なり。時に世尊、靜室に在りて、是の如きの念を作したまはく、『諸の比丘、秋月に病を得、顏色憔悴し形體癬白枯燥す。我今諸の比丘に、何等の味を食するを聽すべき。當に常藥を食すべし、麤現せしめず。』即ち念じて言はく、『五種の藥有り、是れ世の常に用ふる者、酥、油、蜜、生酥、石蜜なり。我今寧ろ諸の比丘をして之を食せしむべし。當に常藥を食すべし。麤現せしめず。飯麨の法の如し。』是念を作し已りて、哺時に靜處より起ち、此事を以て比丘僧を集め、向に靜處に在りて、思念する所の事を以て、具に諸の比丘に告ぐ、『自今已去、諸の比丘、病の因緣有れば、五種の藥、酥、油、生酥、蜜、石蜜を服するを聽す。』諸の病比丘、種種の肥美の食を得、中に至りて食する能はず、況んや復五種の藥中に至りて能く食せんや。爾時、藥多しと雖も、病人時に服するに及ぶ能はず。時に諸の比丘、患遂に增して形體枯燥し顏色憔悴す。爾時、世尊知りて故に阿難に問ひたまはく、『諸の比丘、何が故に形體顏色是の如くなる。』阿難具に上の因緣を以て世尊に白す。佛言はく、『自今已去、若し比丘、病の因緣有らば、若は時、若は非時に、五種藥を服するを聽す。』時に諸の病比丘、肥美食を得て食する能はず。盡く看病人に與ふ。看病人受請し、食せずして即ち之を棄つ。諸の烏鳥、食を諍うて大に喚呼す。佛知りて故に阿難に問ひたまはく、『烏鳥何が故に爾る。』阿難、具に因

縁の事を以て佛に白す。佛言はく、『看病の比丘、若は受請も、若は不受請も、病人の殘食を食するを得るを聽す、無犯なり。』爾時、舍利弗、風を患ふ。醫五種脂を服せしむ。羆脂、魚脂、驢脂、猪脂、失守摩羅脂なり。佛に白す。佛言はく、『服するを聽す。時に受け、時に漉し、時に煮、油法の如く服す。非時に受け、非時に漉し、非時に煮る、服すべからず、若し服すれば法の如く治す。』爾時、世尊、舍衞國に在し、人間に遊行したまふ。千二百五十の比丘と倶なり。時に世穀貴く、人民飢餓し、乞食得難し。五百の乞人有り、常に佛後に隨ふ。爾時、世尊、行くこと未だ遠からず、往いて道邊の樹下に至り、尼師壇を敷いて坐したまふ。時に居士有り、私呵毘羅と名く、記像師なり。五百の乘車に乘じ、石蜜を載せて道より過ぐ。道中に於て佛足の跡、千輻輪相の光明了了たるを見、即ち迹を尋ねて去り、遙に世尊の樹下に在りて坐したまふを見る。顏貌端正、諸根寂靜にして上調伏を得ること、猶し龍象王の如く、最勝にして比無し、譬へば澄淵の如し、濁穢あること無し。世尊を見已りて信敬の心生じ、即ち前んで頭面に足を禮し、卻りて一面に坐す、時に世尊、私呵居士の爲に、種種方便もて説法開化して、歡喜を得しむ。時に私呵居士、佛の説法を聞き、極めて大に歡喜し、即ち諸の比丘に、人別に一器の黒石蜜を施す。諸の比丘受けず、『世尊未だ我曹に、黒石蜜を受くるを聽したまはず。』佛に白す。佛言はく、『黒石蜜を受くるを聽す。』佛、私呵に語りたまはく、『一器の黒石蜜を以て、諸の比丘に分與せよ。』即ち佛の教を受け、一器の黒石蜜を以て、諸の比丘に分與す。餘の

【摩飡緻】 濃石蜜のこと。

黑石蜜有り。佛、言はく、『應に第二第三、隨意に重ねて與ふべし。』故復殘有り。佛、私呵に語りて乞兒に與へしむ。乞兒に與へ已りて、故復殘有り。佛、私呵に語りたまはく、『更に第二第三、飽くまで乞兒に與へよ。』故復殘有り。佛、私呵に語りたまはく、『殘黑石蜜を以て、淨地若は無虫水中に著け。何を以ての故に。未だ諸天、世人、諸魔、梵王、沙門、婆羅門の、此黑石蜜を食して能く消する者を見る有らず、如來無所著等正覺を除く。』時に私呵卽ち敎の如く、餘の黑石蜜を持ち、無虫水中に著く。水卽ち煙出で、聲を作して、猶し大熱鐵を燒いて水中に著くが如く、此聲振裂す。餘の黑石蜜を水中に著くに亦是の如く、水沸きて聲を作す。爾時、私呵、此を見已りて恐怖して毛竪つ。往いて佛の所に至り、頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、向の因緣を以て、具に世尊に白す。世尊、爾時、私呵の、心に恐怖を懷き、毛竪つを知り、種種方便もて說法開化して歡喜を得しめたまふ、卽ち座上に於て遠塵離垢し、法眼淨を得、法を見、法を得、增上果を得、世尊に白して言さく、『大德、我佛法僧に歸依して優婆塞と爲らん、自今已去、殺生せず、乃至飲酒せず。』私呵、佛の說法を聞き、極めて大に歡喜し、頭面に佛を禮して去る。時に比丘乞食の時、白衣の黑石蜜を作り、罽尼を著くるを見る。諸の比丘、疑うて敢て過中食せず、佛に白す。佛、言はく、『食するを聽す。作法應に爾るべし。』時に諸の比丘、乞食して軟黑石蜜を得、佛に白す。佛、言はく、『食するを聽す。』黑石蜜漿を得。佛、言はく、『飲むを聽す。』摩飡緻を得。佛、言はく、『食するを聽す。』白石蜜を得。佛、言はく、『食するを聽す。』

【烏婆陀頗尼】薄甘蔗糖のこと。

烏婆陀頗尼を得。佛言はく、『食するを聽す。』水を甘蔗汁に和するものを得。佛言はく、『飲むを聽す。醉はざる人は、非時に飲むを聽す。若し醉ふ人は飲むべからず、若し飲まば法の如く治す。』甘蔗を得。佛言はく、『時食するを聽す。』爾時、世尊、摩竭提に在し、人間に遊行して王舍城に至りたまふ。畢陵伽婆蹉、知識多く徒衆多し、多く酥油、生酥、蜜、黑石蜜を得、持して徒衆に與へ、遂に多く積聚貯畜して衆器皆滿ち、大盆、小盆、大鉢、小鉢、匳、大釜は絡囊、漉囊を持して、橛上、龍牙杙上、繩上に串し、或は屋間に懸著し、下漏上濕して房舍臭穢なり。時に衆多の居士、僧伽藍中に來至し、行いて房舍を見、畢陵伽婆蹉の徒衆の、是の如く多く飲食藥藥を積聚して房に在り、共宿して臭穢不淨なるを見、皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子、多食にして厭く無し、自ら稱すらく、「我正法を知る」と。是の如き、何れに正法か有る。是沙門を見るに、多く飲食藥藥を積み、瓶沙王の厨庫の如し。』諸の比丘聞く。其中に小欲知足にして頭陀を行じ、慚愧を知り、戒を學せんと樂ふ者有り、畢陵伽婆蹉を嫌責して言はく、『云何が多く飲食藥藥を積みて房に在り、共宿して臭穢不淨なる。』時に諸の比丘、往いて佛に白す。爾時、世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、畢陵伽婆蹉の徒衆を呵責したまはく、『汝等の所爲は非なり。威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず。應に爲すべからざる所なり。云何が多く飲食藥藥を積みて房に在り、共宿して臭穢不淨なる。』無數方便を以て呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、若し病比丘、酥、油、蜜、生酥、黑石蜜を須

【六八】下漬麥汁等を服するを聽すと明す。

ひんには、乃至七日に應に服すべし、若し過ぎて服すれば、法の如く治す。爾時、世尊、王舍城より人間に遊行したまふ。此一條の事、上の如く展轉し、食或異なること無し、故に出さず。

(六)爾時、比丘、風を患ひ、藥を須ふ。醫、漬麥汁を教ふ。佛言はく、『服するを聽す。』油漬麥汁を須ひ、頗尼漬麥汁を須ふ。佛言はく、『服するを聽す。』『若し時藥を時藥に和し、非時藥を時藥に和し、七日藥を時藥に和し、盡形壽藥を時藥に和し、應に受けて時藥と作すべし。非時藥を非時藥に和し、七日藥を非時藥に和し、盡形壽藥を非時藥に和し、應に受けて非時藥と作すべし。七日藥を七日藥に和し、盡形壽藥を七日藥に和し、應に受けて七日藥と作すべし。盡形壽藥を盡形壽藥に和し、應に受けて盡形壽藥と作すべし。』

爾時、比丘、瘡を患ふ。唾を以て塗り、銚底を以て熨す。比丘、佛に白す。佛言はく、『用ふるを聽す。』時に比丘あり、吐を患ふ。細軟髮を須ふ。佛言はく、『燒き已りて之を末とし、水を和し、漉し受けて之を飲むを聽す。』時に比丘有り、自ら塚間に往き、人髮人脂を取りて持ち去る。時に諸の居士、見て皆憎惡汚賤す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『靜にして無人の時取るを聽す。』爾時、比丘有り、身熱を患ふ。醫、栴檀を用ひしむ、病を差すが爲の故に、比丘、佛に白す。佛言はく、『用ふるを聽す。』若は沈水、若は栴檀、畢陵祇、伽羅、菟婆羅は、佛言はく、『用て身に塗るを聽す。』時に諸の比丘、蛇の屋に入るを患ふ。未離欲の比丘恐怖す。佛言はく、『驚かすを聽す。』若は筒を以て盛り、若は繩を以て繫いで之を棄てよ。』而も彼繩を解かずして地に置き、蛇遂に死す。佛言

【皮刀】　大銭のこと。

はく、『解かざるべからず。應に解くべし。』時に諸の比丘、鼠の屋に入るを患ふ。未離欲の比丘、皆驚畏す。佛言はく、『應に驚かして出でしむべし。若は鼠檻を作りて、盛りて出して之を棄てよ。』竟に出さずして置く、檻内に即ち死す。佛言はく、『之を出すべし、出さざるべからず。』爾時、諸の比丘、蠍、蜈蚣、蚰蜒の屋に入るを患ふ。未離欲の比丘驚畏す。佛言はく、『若は弊物、若は泥團、若は掃帚を以て、盛り裹んで之を棄てよ。』而も解かずして放ち、便ち死す。佛言はく、『解放せざるべからず、解放すべし。』爾時、佛、王舍城に在したまふ。諸の比丘、浴室の薪を破る、空木中より蛇出で、比丘を螫して殺す。時に世尊、慈念して諸の比丘に告げたまはく、『彼比丘、慈念を彼八龍王蛇に生ぜず、是を以ての故に、蛇の爲に殺さる。何等か八なる。毘樓勒叉龍王、次を伽寧と名く、次を瞿曇冥と名く、次を施婆彌多羅と名く、次を多奢伊羅婆尼と名く、次を伽毘羅濕波羅と名く、次を提頭賴託龍王と名く。比丘若し彼八龍王蛇に慈心有れば、螫殺せられず、若し此比丘、一切衆生に慈心有らば、亦彼蛇の爲に螫殺せられず。』佛、自護慈念呪を作すを聽したまふ、毘樓勒叉慈、伽寧慈、瞿曇冥慈、施婆彌多羅慈、多奢伊羅摩尼慈、伽毘羅濕波羅慈、提頭賴吒慈、諸の龍王、乾闥婆、羅刹娑を慈念す。今我慈心を作して、諸の毒惡を滅す、是より平復を得、毒を斷じ、毒を滅し、毒を除く、南無婆伽婆。』佛言はく、『刀破して血を出し、藥を以て之を塗るを聽す。亦鈹刀を畜ふるを聽す。』爾時、比丘、病毒有り、醫、腐爛藥を服せしむ。若し是れ已に腐爛藥地に墮つる者は、應に器を以て水を盛り、

【七】大小便道等の療治を說く。

之に和し、漉して受け、然る後に服すべし。若し未だ地に墮ちざれば、器を以て之を承け、水を和し、漉して之を服し、受くべからず。爾時、病毒の比丘有り、醫、田中の泥を服せしむ。佛、言はく、『器を以て水を盛り、之に和して漉し、然る後に受けて飲むべし。』

(七)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に耆婆童子、比丘の大小便處、兩腋下の病を刀治す。時に世尊慈念して諸の比丘に告げたまはく、『此耆婆童子、比丘の大小便處及び兩腋下の病を刀治す。刀を以て治すべからず。何を以ての故に。刀利にして肉を破り、深く入るが故に。自今已去、筋若は毛縄を以て急に之を結び、若は爪にて取りて皮を斷ぜしめ、然る後に藥を著くべし。』佛、言はく、『灰藥を作るを聽す。』手に持ち堅牢ならず。佛、言はく、『盛灰藥器を作るを聽す。』『時に器若し破れ易ければ、角にて作るを聽す。』爾時、世尊、風を患ひたまふ。醫、三種の藥を和せしむ。阿難を喚び、三種和藥を取り來らしむ。時に阿難、佛の教を受け、自ら三種和藥を煮、已りて佛に授與す。時に世尊知りて故に阿難に問はく、『誰か此藥を煮る。』答へて言はく、『我自ら煮る。』佛、阿難に告げたまはく、『自ら煮て服すべからず、若し自ら煮れば法の如く治す。』

【八】淨食所淨食に就いて。

爾時、世尊、王舍城に在し、千二百五十の比丘僧と倶に人間に遊行したまふ。時に世穀貴く人民飢餓し、乞求得難し。時に六百の乘車有り、飲食を載滿して、世尊に隨逐す。世尊、爾時、波闍國より人間に遊行し、毘舍離に至る。時に諸の淨人、淨食を辦具し、高聲にして大に語り、或は穢器物を盜ふ。時に世尊、知りて故に阿難に問ひたまはく、『諸

の比丘、何を以て此大聲を作すこと、猶し捕魚人の聲の如くなる。』阿難、佛に白して言さく、『諸の淨人淨食を辨具し、高聲にして大に語り、或は藏器物を盜ふ、故に是の如きの大聲有り。』佛、阿難に告げたまはく、『界内共食し、宿煮食を食すべからず、若し食すれば法の如く治す。』爾時、諸の比丘、食飲を以て露地に著きて牢藏せず。牧牛羊人、若は賊持ち去る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『應に邊房の靜處に在りて、淨厨屋を結作すべし。』爾時、世尊、毘舍離に在したまふ。時に私呵將軍有り、是れ尼揵の弟子なり。時に斷事堂に五百の梨者あり、共に坐して食す、無數方便もて佛法僧を讚歎す。爾時、私呵將軍、座中に在りて、無數方便もて佛法僧を讚歎するを聞き、心に信樂を生じ、往いて佛を見んと欲し、是の如きの念を作さく、『我今寧ろ師尼揵に白し、瞿曇の所に往くべし。』時に私呵、卽ち往いて尼揵に白して言はく、『我瞿曇沙門の所に往かんと欲す。』尼揵語りて言はく、『汝は作法有りと說く。瞿曇は作法無しと說き、以て弟子を化す、止めよ、須く往くべからず。』爾時、私呵將軍、本より佛を見んの心有り、卽ち退く。梨者是の如く第二第三、佛法僧を讚歎す。時に私呵將軍、第二第三に讚するを聞き、是の如きの念を作さく、『我今寧ろ尼揵師に辭せずして、往いて瞿曇を見ん、師能く我をして何等をか作さしむる。』時に私呵卽ち佛の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に坐す。時に世尊、爲に無數方便もて說法開化し、歡喜を得しめたまふ。私呵佛の方便說法を聞き、心に大に歡喜し、佛に白して言さく、『我聞く、瞿曇は作法無しと說き、以て諸の弟子を化すと。若し

人有りて、大德作法無しと說き、以て諸の沙門を化すと言はば、是れ實語法語とせんや不や。』佛私呵に語りたまはく、『或は因緣有りて、方便もて我作法無しと說き、以て諸の弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。或は因緣有りて、方便もて我作法有りと說き、以て諸の弟子を化すと言はば、是れ實語法語す。或は因緣有りて、方便もて我斷滅を說き、以て弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。或は因緣有りて、方便もて我穢惡の法を說き、以て弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。或は因緣有りて、方便もて我調伏の法を說き、以て弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。或は因緣有りて、方便もて我滅闇の法を說き、以て弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。或は因緣有りて、方便もて我生已盡不受後身と說き、以て弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。或は因緣有りて、方便もて我無畏處に到り、無畏法を說き、以て弟子を化すと言はば、是れ實語法語なり。何を以ての故に。我作法無し、乃至無畏處に到ると說き、以て諸の弟子を化すと言ふは、是れ實語法語なり。我不作を說くは、身に惡を行じ、口に惡を言ひ、心に惡を念ず、三種の惡不善の法は、作すべからず。我作法を說くは、三種の善法は應に作すべし。我斷滅の法を說くと言ふは、貪欲瞋恚愚癡を斷滅するなり。我穢惡の法を說くとは、身に意業の不善の法を穢惡するなり。我調伏の法を說くとは、貪欲瞋恚愚癡を調伏す。我滅闇を說くとは、諸惡不善の闇法を滅す。我我生已盡と說くとは、我生已に盡きて胞胎を受けず、亦復人を化して生死を斷ずるなり。我無畏處に到ると說くとは、自ら所畏無し、

復衆生を安慰す。是を以ての故に私呵、因縁有るが故に、我作法無し、乃至無畏處に到ると說き、以て弟子を化す、是れ實語化語なり。」私呵、世尊に白して言さく、「我佛法僧に歸依す、自今已去、不殺生乃至不飲酒。」佛、私呵に語りたまはく、『好く自ら宜きを量りて、然る後に戒を受けよ。汝は國の大臣たり、人の知識する所、當に衆人を益すべし。輕しく舉動して、後に悔ゆること有る莫れ。』私呵、答へて言はく、「我外道の沙門婆羅門に於て弟子と作る時、幡を持して國中に唱令して言はく、『私呵、尼揵の爲に弟子と作る』と。我今世尊の重ねて我に勅して言ふを聞くに、『好く自ら宜しきを量りて然る後に戒を受けよ、汝は國の大臣たり、人の知識する所、當に衆人を益すべし、輕しく舉動する莫れ』と。倍信樂を增せり。』復佛に白して言さく、『大德、我今第二に、盡形壽佛法僧に歸依す、不殺生乃至不飲酒、自今已去、我門中に於て、尼揵外道の來入を聽さず、佛の諸弟子、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷は、我門中に於て罣礙する所無し。」佛、私呵に語りたまはく、『先に尼揵外道、汝が家中に於て晝夜供養を受くること泉水を取るが如し、今何ぞ便ち斷ずるを得ん。』復佛に白して言さく、『我外人より聞く、沙門瞿曇自ら稱して言はく、「布施は應に我に與ふべし、餘人に與ふべからず、我に與ふれば大に果報を得、餘人に與ふれば、果報を得ず。應に我弟子に與ふべし、餘人の弟子に與ふべからず。我弟子に與ふれば大に果報を得、餘の弟子に與ふれば果報を得ず」と。』佛、私呵に語りたまはく、『我に是語無し、若し人慈心有れば、米泔汁、若は湯滌汁を以て、不淨水虫の中に棄著

し、彼虫をして此食氣を得しむ。我說く、彼猶福あり。況んや復人に與ふるをや。我は說く、布施持戒の人は大果報を得ること破戒に勝る。』私呵、佛に白して言さく、『世尊の說きたまふ所の如し。世尊の說きたまふ所の如し、我曹自ら之を知る。』爾時、世尊、無數方便もて爲に說法開化し、歡喜を得しめ、即ち座上に於て、遠塵離垢して法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得、佛に白して言さく、『我今第三に、盡形壽、佛法僧に歸依す。不殺生乃至不飮酒。唯願くば世尊、我明年の請食を受けたまへ。』世尊、默然として之を受けたまふ。時に私呵、佛の許したまふを見已りて、即ち起ちて佛の足を禮して去る。其夜に於て種種の美食を辦具し、明日往いて、『時到る』と白す。世尊、衣を著け鉢を持し、千二百五十の比丘と俱に其家に往き、尼師壇を敷いて座に就いて坐す。爾時、尼揵子等、往いて離奢の住處に詣り、手を擧げて大に哭して怨言を稱ふらく、『此私呵將軍、自ら大牛を殺し、沙門瞿曇及び諸の比丘に與へて飯食を設け、已が爲に殺すを知りて、故之を食ふ。』爾時、人有り、即ち私呵の所に往いて語りて言はく、『當に知るべし、諸の尼揵子有り、離奢の住處に往き、手を擧げて大哭し、怨言を稱ふらく、「私呵將軍自ら牛を殺し、沙門瞿曇及び比丘僧に與へて飯食を設く。」』私呵言はく、『此は常に日夜に、佛と比丘僧の爲に怨家たり。我終に命の爲の故に、衆生の命を斷せず。』爾時、私呵將軍、多くの美飮食を以て、佛及び比丘僧に飯し已りて鉢を攝し、更に一卑床を取りて、一面に在りて坐す。佛、方便の爲に方便して說法開化し、歡喜を得しめ、說法を爲し已りて、坐より起ちて去りた

【九】旻茶居士の因縁を説いて道路食を受くることを聽す。

まふ。僧伽藍中に還りて、此因縁を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『自今已去、若し故に殺す者は、食すべからず。是中故に爲に殺すとは、若は故見、故聞、故疑なり。此の如きの三事の因縁有るは不淨肉なり、我食すべからずと説く。若し我爲に故に殺すを見、若は可信人の邊より、我爲に故に殺すと聞く。若は家中に頭有り、皮有り、毛有り、若は脚血有るを見る。又復此人能く十惡業を作す、常に是れ殺者なり、能く我爲に故に殺すならん。是の如く三種の因縁不淸淨の肉は食すべからず、三種の淨肉有らば食すべし。若は故見ならず、故聞ならず、故疑ならざれば食すべし。若し我爲に故殺するを見ず、我爲に故殺するを聞かず、若は家中に頭脚皮毛血有るを見ず、又彼人は是れ殺者に非ず、乃至十善を持ち、彼終に我爲の故に衆生の命を斷ぜず。是の如きの三種の淨肉は應に食すべし。若し大祀を作す處の肉は食すべからず、何を以ての故に。彼是の如きの意を作さく、「辨具し來る者は當に與ふべし」と。是故に食すべからず、若し食すれば法の如く治す。』

(九)爾時、世尊、毘舍離より人間に遊行し、千二百五十比丘と俱に蘇彌に至り、蘇彌より跋提城に至りて住したまふ。時に跋提城に大居士有り、旻茶と名く。是れ不蘭迦葉の弟子なり、大富にして諸の珍寶多し、多く象馬車乘有り、奴婢僕使食飮は食庫に溢滿し、大威力有り、意の所欲に隨ひ、周く人物に給す。彼居士、倉に入る時、車軸の孔の如く、自然に穀出でて休まず、乃ち居士出でて去るに至る、其婦も復是の如きの福力有り。八斗の米を以て食を作り、四部の兵及び四方來の乞者に供して皆飽足せしめ、食故盡きず。乃ち遣

ちて去るに至る。其兒も亦是の如きの福力有り、嚢に千兩金を盛り、四部の兵及び四方來の乞者に與へ、隨意に足らしめて故盡きず、乃ち起ちて去るに至る。其兒の婦も亦是の如きの福力有り、一裹の香を以て、四部の兵及び四方來の乞者に塗り、隨意に足らしめて香故盡きず、乃ち起ちて去るに至る。其奴も是の如きの福力有り、一犁を七壟出を耕す。其婢も是の如きの福力有り、八斗の穀を以て四部兵に與へて盡きず、乃ち起ちて去るに至る。其家裏各に諍うて言はく、『是れ我福力なり。』爾時、旻荼居士、佛の蘇彌より人間に遊行し、跋提城に至りたまふと聞き、彼是の如きの念を作さく、「我今寧ろ師不蘭迦葉を辭して、沙門瞿曇の所に至らん。」念じ已りて師の所に往いて白して言さく、「大師、我佛の蘇彌より人間に遊行し、跋提城に至ると聞く、我今往いて沙門瞿曇を見んと欲す。』不蘭迦葉語りて言はく、『居士、汝大福力有り、隨意自在なり、往いて沙門瞿曇を見るべからず。沙門瞿曇、應に來りて汝を見るべし。又法應に爾るべし、出家人應に來りて白衣を問訊すべし。」彼是の如きの念を作さく、『未曾有の沙門なり、沙門の爲に刺を作す、我何んが不蘭迦葉を辭するを用ひん。辭せずして去るも、能く我をして何等をか作さしめん。』即ち往いて瞿曇を見ん。』旻荼居士、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に住す。世尊、爲に種種方便もて說法開化し、歡喜を得しめたまふ。爾時、旻荼、佛の說法を聞き心大に歡喜し、佛に白して言さく、『我は是れ跋提城の居士にして、是れ不蘭迦葉の弟子なり。』共に己の家業福力の事を以て世尊に白して言さく、『我家中各各諍うて言はく、「是れ我福

力なり」と。唯願くば世尊、爲に說きたまへ、是れ誰の福力ぞ。』佛、曇茶居士に語りたまはく、「汝、往過去世の時波羅捺國に於て居士と作り、大に富みて諸の財寶多し、庫藏に溢滿す。前世の時に婦、兒、兒婦、及び奴婢は卽ち今の者是なり。居士、爾時、時世穀貴く人民飢饉し乞求得難し。時に居士の家中、共に食す。時に辟支佛有り、多呵樓支と字く、來り入りて乞食す。居士言はく「汝曹但食せよ。我分を持して此仙人に與へん」婦是の如きの言を作さく「居士但食せよ。我分を以て此仙人に與へん」共兒、復是の如きの言を作さく「父母但食したまへ。我分を以て此仙人に與へん」兒婦及び奴婢亦是の如きの言を作さく「大家但食したまへ。我分を以て此仙人に與へん」是に於て各食分を分ちて辟支佛に施せり。居士知るや不や、是因緣果報を以て、今日等しく共に是の如きの福力有り。」爾時、世尊、無數方便もて爲に說法開化し、歡喜を得しめ、卽ち座上に於て遠塵離垢して法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得たり。佛に白して言さく、「我に自今已去、盡形壽佛法僧に歸依し、優婆塞と爲るを聽したまへ。不殺生乃至不飮酒、唯願くば世尊、我跋提城中七日請を受けたまへ。」時に世尊、默然として之を受けたまふ。時に居士、世尊及び比丘僧默然として受請し已るを以て、卽ち跋提城中に於て、衆味を自ら具し、七日佛及び比丘僧を供養す。時に世尊、七日の受請已りて曠野に往かんと欲す。時に曇茶居士、千二百五十の牸牛を以て人を遣し、象を以て種種飮食の具を載せ、道路に於て佛及び比丘僧に供養す。世尊、爾時、七日供養を受け已りて卽ち曠野に往く。諸の比丘、道に在りて行く、人有

【一〇】施盧婆羅門の例によつて八種の漿を受くることを聽す。

り、牛を犛し、犢子をして飲ましめ、已りて復犛す。犢子口中より涎出でて乳に似たり。諸の比丘、後終に乳を飲まず、佛に白す。佛言はく、『飲むを聽す、犛乳の法應に爾るべし。五種の牛乳有り、乳、酪、生酥、熟酥、醍醐なり。』行いて曠野を過ぎ已りて故餘の飲食有り。彼人をして是の如きの念を作さしむ。「居士大富多く財寶有るが故に、比丘の爲の故に此飲食を送る、我今寧ろ都て此飲食を以て諸の比丘に與ふべし」と。時に卽ち飲食を以て諸の比丘に與ふ。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我曹に、道路糧を受くるを聽したまはず。』諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『自今已去、檀越食受を作すを聽す、淨人をして掌擧せしめ、自ら受くべからず、若し所須有れば、隨意に索取せよ。』

〔一〇〕爾時、世尊、阿牟多羅國より人間に遊行し、阿摩那城に至り、翅寃編髮婆羅門園中に在りて住したまふ。爾時、編髮婆羅門、沙門釋種の出家、阿牟多羅國より阿摩那城に至り、我園中に在りて住したまふと聞き、是の如きの念を作さく、『沙門瞿曇大名稱有り、是れ如來無所著應供正遍知明行足爲善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と言ふ。善い哉、我今當に是の如きの無著人を見るべし。』爾時、編髮婆羅門、往いて世尊の所に往き、恭敬問訊し已りて、却りて一面に坐す。佛爲に無數方便もて說法開化し、歡喜を得しむ。時に婆羅門、佛の說法を聞き、極めて大に歡喜して佛に白して言さく、『願くば佛及び比丘僧、我明日の請食を受けたまへ。』佛言はく、『今比丘僧多し、汝は外道を信ず。』婆羅門言はく、『我外道を信ずと雖も、衆僧多しと雖も、但我明日の請食を受けたまへ。』世尊是の如

く再三之に語る。婆羅門も亦是の如く再三世尊に白す。世尊、爾時、默然として請を受けたまふ。婆羅門佛の受けたまふを見已りて、座より起ちて去りて家に還り、親屬に語りて言はく、『我明日、佛及び比丘僧を請じて供養す、施設すべき所、願くば當に我を助くべし。』其諸の親屬之を聞いて皆喜ぶ。或は薪を破る者有り、或は飯を作る者有り、或は水を取る者有り。時に婆羅門、自ら堂舍を莊嚴し、床座を敷き、佛及び比丘僧、當に此座に在るべしと。時に阿摩那城中に施盧婆羅門有り、五百の婆羅門と共に往く。翅㝹婆羅門常に恭敬し之を宗仰す。時に施盧婆羅門、五百の婆羅門と俱に其家に往く。翅㝹婆羅門の常法、其來るを見れば、起ちて出でて之を迎へ、請じて屋に入りて坐せしむ。其日來るを見るも亦出でて迎へず、亦座に請ぜず、但自ら堂舍を莊嚴し、好床座を敷く。施盧問うて言はく、『婦を娶らんと欲すとせんや、女を嫁せんと欲すとせんや、王を請ぜんと欲すとせんや、大祠せんと欲すとせんや。』彼即ち答へて言はく、『我亦婦を娶り、乃至王を請はず、我大祠を作さんと欲す、佛及び比丘僧千二百五十人を請ず、瞿曇は大名稱有り。如來無所著應供正遍知明行足爲善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊なり。』施盧、翅㝹に問うて言はく、『實に是れ佛なりや。』答へて言はく、『實に是れ佛なり。』問うて言はく、『佛は何處に在して住したまふや、我今見んと欲す。』時に翅㝹、右手を擧げて示して言はく、『乃ち彼青林の中に在して住したまふ。』施盧是の如きの念を作さく、『我空しく往くべからず。當に何物を持して往いて沙門瞿曇を見るべき。』即ち自ら念じて言はく、『今八種

の漿あり、是れ古昔無欲仙人の飲む所、梨漿、閻浮漿、酸棗漿、甘蔗漿、蕤菓漿、舍樓伽漿、婆樓師漿、蒲桃漿なり。爾時、施盧婆羅門、此八種の漿を持ちて佛所に往詣し、恭敬問訊して却りて一面に坐す。時に世尊、爲に方便もて說法開化し、歡喜を得しむ。施盧法を聞いて極めて大に歡喜し、卽ち八種の漿を以て比丘僧に施す。比丘僧敢て受けずして言はく、『佛未だ我曹に、八種の漿を受くるを聽したまはず。』比丘、佛に白す。佛言はく、『八種の漿を飲むを聽す。若し醉はざる人は、應に非時に飲むべし、若し醉ふ人は飲むべからず、若し飲めば法の如く治す。亦今日を以て漿を受け、留めて明日に至るべからず、若し留むれば法の如く治す。』

【二】前食に餅を受くることを聽す

(二)爾時、世尊、此住處より摩羅に至り、人間に遊行し、波婆城に向ふ。自共制を作し、世尊當に來りたまふべし、皆應に迎ふべし、若し迎へざれば、金百兩を罰すと。時に摩羅子有り、盧夷と字く。佛法僧に信樂有ること無し、是れ阿難白衣の時の親友なり。時に阿難、遙に盧夷を見て語りて言はく、『甚だ善し盧夷、汝能く自ら出でて佛を迎ふ。』彼答へて言はく、『大德、我是を以て出でて迎へず、波婆城中、皆共に制を作し、若し出でて佛を迎へざれば、金百兩を罰すと。是因緣を以ての故に來る、信敬の故に來るには非ず。』阿難之を聞いて樂まず、卽ち世尊の所に往き白して言さく、『此波婆城中に摩羅子有り、盧夷と字く、是れ我白衣の時の親友なり。善い哉世尊、願くば佐助を爲し、彼をして信樂を得しめたまへ。』佛、阿難に語りたまはく、『此れ何の難きことか有らん、若し復是の如き者

【一三】剃髪刀を蓄ふることを聴す

有らば、猶難しと爲さず。」爾時、世尊、即ち慈心を以て盧夷摩羅を感じて世尊に詣らしむ。猶人の牽導するありて往くが如し。是の如く盧夷、佛の所に往き、頭面に足を禮し已りて、却りて一面に住す。爾時、世尊、無數方便もて其が爲に法を開化し、歡喜を得しめ、即時に遠塵離垢にて法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得たり。佛に白して言さく、「大德、我自今已去、佛法僧に歸依し、優婆塞と爲りて不殺生乃至不飲酒せん。唯願くば世尊常に我衣服飲食醫藥臥具を受けたまへ」と。佛、盧夷に告げたまはく、「汝今學人、明智あるを以て遠塵離垢して法眼淨を得、便ち言はく「常に我衣服飲食醫藥臥具を受けたまへ」と。復更に餘の學人有り、已に明智有り、遠塵離垢して法眼淨を得、亦當に言ふべし「常に我衣服飲食醫藥臥具を受けたまへ」と。」爾時、世尊、波婆城中にて偏に一人の請を受けず。時に城内の家家各飲食を斂めて聚めて一處に在り、佛及び僧を飯す。時に盧夷食を作る處に往き、唯餅無きを看、彼即ち夜に於て種種の餅を辦具し、明日諸の比丘に與ふ。諸の比丘、受けずして言はく、「佛未だ我曹に、前食に餅を受くるを聽したまはず。」諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「受くるを聽す。」

(一三)時に世尊、波婆城より阿頭に至る。時に阿頭の住所に二の比丘有り、是れ常剃髪の人なり。父子出家の時、二比丘佛の波婆より阿頭に至りたまふと聞き、彼是の如きの念を作さく、「我曹當に何等を辦具して、世尊を供養したてまつるべき。」其父、兒に語りて言はく、「我今當に剃髪處を求むべし。汝作錢處に往き、求め作すべし。若し所得有らば、當に粥を

【一三】根藥、盡形壽藥等を受くることを聽す。

辨具し、世尊を供養すべし。』時に父卽ち往いて人の爲に剃髮し、兒は卽ち往いて錢を作し賃作す。所得の物有れば、盡く爲に粥を辨じ、持して往いて世尊を供養す。世尊知りて故に阿難に問ひたまはく、『何の處より此粥を得たる。』阿難、卽ち此事を以て具に佛に白す。佛言はく、『出家人は、白衣の爲に剃髮すべからず、出家せんと欲する者を除く。若し剃髮人出家せんに、剃刀を畜ふべからず、若し畜ふれば法の如く治す。』時に衆僧、剃髮刀を得たり、佛に白す。佛言はく、『畜ふるを聽す。』

(一三)爾時、世尊、阿頭より迦摩羅に至りたまふ。諸の比丘是の如きの根藥を得たり、阿漏、彌那漏、比那漏、提婆檀豆檀盧乾漏、私羅漏なり。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我曹に是の如きの根藥を受くるを聽したまはず。』佛に白す。佛言はく、『受くるを聽す。』是中、迦摩羅國の諸の比丘、是の如きの盡形壽藥を得たり、沙蔓那、摩訶沙蔓那、杏子人、兜兜漏、秦敵梨蔓なり。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我等に、是の如きの盡形壽藥を受くるを聽したまはず。』比丘、佛に白す。佛言はく、『受くるを聽す。』爾時、世尊、迦摩羅より迦維羅衞國に至りたまふ。畢陵伽婆蹉、彼國に在りて住し、脚の劈破を患ふ、醫脚を塗らしむ、佛に白す。佛言はく、『塗るを聽す。』何の藥を以て塗らんかを知らず。佛に白す。佛言はく、『酥、油、若は脂を以て塗るを聽す。』手に酥油を捉りて臭し。佛言はく、『塗藥筩を用ふるを聽す。』時に手にて脚を塗る。手に膩す。佛言はく、『脚脚相塗るを聽す。』塗脚藥淺器の中に著くに、堅密ならず。佛言はく、『瓶を作るを聽す。』若は

坌塵を患ふ。佛言はく、『蓋を作るを聽す。』時に油瓶の擧處堅牢ならず。佛言はく、『牀下に著く、若は壁上、龍牙杙上に懸著するを聽す。』時に諸の比丘、頭痛を患ふ。醫頂上に油を著けしむ。佛に白す。佛言はく、『著くるを聽す。』彼畏愼して、敢て香油を用て著けず。佛言はく、『著くるを聽す。油法應に爾すべし。』時に比丘、風を患ふ、醫除風藥を作らしむ。是中の除風藥とは、稻穀を蒸し、酒糟を蒸し、若は大麥、若は諸の治風草、若は麩糠、若は煮小便なり。佛に白す。佛言はく、『聽す。』時に畢陵伽婆蹉銚を須ひて煮る。佛言はく、『畜ふるを聽す。』衆僧大銚を得。佛言はく、『畜ふるを聽す。』畢陵伽婆蹉、三種の釜を得たり、銅釜、鐵釜、土釜なり。佛言はく、『畜ふるを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふるを聽す。』後に瓶を得たり、銅瓶、鐵瓶、瓦瓶なり。佛言はく、『畜ふるを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふるを聽す。』畢陵伽婆蹉煎餅鏊を得たり。佛言はく、『畜ふるを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふるを聽す。』と。畢陵伽婆蹉銅杓を得、樽を得たり。佛言はく、『畜ふるを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふるを聽す。』

四分律卷第四十二

【一】以下前卷に續いて藥犍度を明す。先づ僧伽藍中に淨地を結すると淨不淨地食とに就いて。

四分律 卷第四十三 三分之七

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

藥犍度之二

(一)爾時、吐下の比丘有り、舍衞城中の人をして粥を煮しむ。時に因緣有りて城門晚く開く。未だ粥を得るに及ばずして便ち死す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧伽藍内に在りて淨地を結するを聽す。白二羯磨して、應に是の如く結すべし。應に房、若は處、若は溫室、若は經行處と唱ふべし。衆中能く羯磨を作すに堪能なる者を差す、若は上座、若は次座、若は誦律、若は不誦律なり。羯磨を作すに堪能なる者是の如く白すらく、「大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今某處を結して淨地と爲す、白是の如し」と。「大德僧聽け、僧今某處を結して淨地と作す、誰か諸の長老、僧某處を結して淨地と作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某處を結して淨地と作すを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。四種の淨地あり、一には檀越若は經營人、僧伽藍を作る時、分に處して是の如く言はく、「某處に僧の爲に淨地を作る」と。第二には、若し僧の爲に僧伽藍を作りて、未だ僧に施さず。第三には、若は半籬障有り、若は

多く籬障無し、若は都て籬障無し。若は垣牆、若は塹も亦是の如し。第四には、僧白二羯磨結を作すとなり。』諸の比丘、是念を作さく、『比丘の房も、應に結して淨地と作すべきや不や。』佛に白す。佛言はく、『應に作すべし、比丘、比丘尼を除いて、若は式叉摩那、沙彌、沙彌尼の房も亦是の如し、若し鬼神の廟屋も亦是の如し、淨地と作すを得。』時に諸の比丘、何の處か是れ淨地なりやを知らず、佛に白す。佛言はく、『應に結すべし、若し先に淨地あるを疑はば、應に解いて然る後に結すべし。』爾時、比丘、故僧伽藍を治す。淨地と作すを得んや不やを知らず、佛言はく、『作すを得。』爾時、不淨地に樹の生ずる有り、枝葉淨地に蔭覆す。時に諸の比丘、淨物を安んじて上に著けんと欲す、淨地とせんや不やを知らず。佛言はく、『根不淨地に在れば卽ち不淨なり。』時に樹根、淨地に在る有り、枝葉不淨地を蔭覆す。諸の比丘、淨物を安んじて上に著けんと欲す、淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『根淨地に在れば淨なるを得。』時に樹有り、根不淨地に在り、枝葉淨地を覆ひ、菓墮ちて淨地に在り。諸の比丘、淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『若し人の觸るるなく、自ら墮つる者は淨なり。』風吹き雨打ち、獼猴諸鳥有りて觸れて墮つ、淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『若し意を作して、墮ちしめんと欲せされば淨なり。』樹根淨地に在り、菓不淨地に墮つ。比丘淨とせんや不やを知らず。佛言はく『淨なり。』時に諸の比丘、不淨地に在りて、胡瓜甘蔗菜を種ゑ、枝葉淨地を覆ふ。比丘淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『不淨なり。』時に淨地に在りて、胡瓜甘蔗菜を種ゑ、

枝葉不淨地を覆ふ、淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『淨なり。』時に六群比丘、不淨菓を便ち食す。諸の居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧を知らず、厭足有ること無し、自ら稱して言はく、「我正法を知る」と。是の如きは何くに正法かある、菓を食して淨を作さず。』諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『不淨菓は卽ち食すべからず、應に淨し已りて之を食すべし。應に五種淨法を作して食すべし。火淨、刀淨、瘡淨、鳥啄破淨、不中種淨なり。此五種淨は應に食すべし。是中の刀淨、瘡淨、鳥淨は、應に子を去りて食すべし、火淨、不中種淨は、都て食せよ。復五種淨有り、若は皮剝、若は皮剝、若は腐、若は破、若は瘀燥なり。爾時、衆僧菓園を得たり。佛言はく、『受くるを聽す。』復誰か料理すべきかを知らず、佛言はく、『若は守僧伽藍民、若は沙彌、若は優婆塞なり。』彼の守視人分を得んと欲す。佛言はく、『應に食を計りて價を作し、直を與ふべし。』爾時、比丘、不破菓を食し、大便已りて子生ず。比丘畏愼して言はく、『我食して種を生ず。』佛に白す。佛言はく、『不犯なり、卽ち是れ淨なり。』時に諸の比丘菜を種ゑ、自ら種子を散す。後に疑つて言はく、『我自ら種う。』敢て食せず。佛に白す。佛言はく、『種子已に變じ盡す、食するを聽す。』時に比丘、菜を餘處に移して殖う。疑つて言はく、『自ら殖う。』敢て食せず。佛に白す。佛言はく、『重生を以ての故に、食するを聽す、若し自ら胡瓜、甘蔗、蒲桃、梨、奈、呵梨勒、鞞醯勒、阿摩勒、椒、薑、蓽茇を種ゑ、及び移殖するは食すべし。』爾時、小沙彌有り、淨食を取りて水を過す、自ら擧ぐるに勝へず。佛言はく、『大比丘、沙彌を扶けて

過せしむるを聽す。』時に小沙彌有り、淨食を持して岸に上ること能はず。佛言はく、『大比丘扶けて上らしむるを聽す。』時に沙彌有り小なり、淨食を擧げて、壁上若は龍牙杙上に懸著する能はず、又下す能はず。佛に白す。佛言はく、『下に床若は机を安んじ、蹬上して上下するを得しむるを聽す。』時に諸の比丘、酥瓶油瓶有りて覆はず。佛に白す。佛言はく、『淨人をして覆はしむるを聽す、若し淨人無ければ、應に自手蓋を捉り、其上に懸置すべし、手觸すべからず。』時に六群比丘、不淨菜を噉ふ。諸の居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し、衆生の命を斷ず。自ら言ふ、「我正法を知る」と。是の如きは何くに正法かある。不淨菜をば便ち之を食す。』諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『不淨菜を噉ふべからず、應に淨すべし。』時に彼便ち自ら淨を作す。佛言はく、『自ら淨を作すべからず、應に淨人をして淨を作さしむべし。』時に比丘、自手に食を捉り已りて、人をして淨を作さしむ。佛言はく、『自手に食を捉り已り、人をして淨を作さしむべからず、應に地に置いて、人をして淨を作さしむべし。』彼淨を作し已りて受けずして便ち食す。佛言はく、『淨を作し已りて、受けずして便ち食すべからず、應に淨を作し已らば、手を洗つて受けて食すべし。』彼蓮根菜を洗ひ已りて、更に淨を作す。佛言はく、『洗ひ已りて更に淨を作すべからず、此洗は即ち是れ淨なり。』時に比丘有り、先に相嫌ひ、便ち他の淨食に觸れて、是の如きの意を作さく、「比丘をして不淨食を得しめん」と。彼比丘、淨不淨を知らず。佛に白す。佛言はく、『觸るる者に於ては是

れ不淨なり、觸れざる者は淨なり、觸る者は突吉羅を犯す。』時に比丘有り、彼比丘を嫌ひ、彼小沙彌の邊に於て、彼淨食に觸れ、是の如きの意を作さく、『彼和尚阿闍梨をして、不淨食を得しめん。』彼比丘、淨不淨を知らず。佛に白す。佛言はく、『觸る者は不淨なり、觸れざる者は淨なり、觸る者は突吉羅を得。』時に淨人是の如きの意を作さく、『強ひて多く比丘に與へんに、彼食して盡きず、餘あらば我曹當に食すべし。』彼比丘、應に口に遮して、『著くる莫れ。』と言ふべし。若し止まざれば、彼應に小しく食器草を離すべし。彼比丘、淨不淨を知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり。』時に諸の居士、食飲の具を持して僧伽藍に往き、諸の比丘に與へて掌擧せしむ。後の諸の居士來り、若は自ら食し、若は持して歸り、若は比丘に與へて食せしむ。比丘畏愼して敢て食せず、是の如きの意を作さく、『我曹先に自ら掌擧す。』諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『此は是れ檀越の所有なり、檀越の爲の故に、手を洗つて食を受くるを聽す。』時に病比丘、粥を須ふ。佛言はく、『煮るを聽す、若し人無ければ、自ら煮、若は更互に煮るを聽す。』云何が煮んかを知らず。佛言はく、『淨人をして器を淨洗せしめ、水を著け、米を著け、煮て沸せしめ、手を洗ひて受け、然る後に自ら煮て熟せしめよ。』時に熟するや熟せざるやを知らず。佛言はく、『應に勺を以て揚げ看よ、若し流下し勺に順へば則ち熟す、若し熟すれば、應に餘の器中に瀉著すべし。』彼粥を瀉ぐ者、復器を具し、疲極す。佛言はく、『粥を瀉ぐ者は、幷に器を具すべからず、應に更に一人器を具すべし、若は熱くして手を燒か

んには、應に鑷熱巾若は草を捉るべし。若し虫粥中に墮ちなば、應に卻くべし。』彼手を燒く。佛言はく、『應に勺を以て之を去るべし。』彼分たんと欲す。佛言はく、『分つを聽す。』復何の器に分たんかを知らず。佛言はく、『若は鍵鎡、若は小鉢、若は次鉢、若は勺を以て分を作せ。鉢若し正しからざれば、應に鉢支を作るべし。若し墮坌すれば、應に蓋を作るべし。』彼鉢器を洗はずして擧す。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『應に淨洗して後に擧すべし。』既に洗ひ、灰と澡豆を以て不淨を洗はず。佛言はく、『應に灰と澡豆とを用ひて洗ふべし。』洗ひ已りて乾かさず。便ち器を擧するに、便ち虫生ず。佛言はく、『乾かさずして擧すべからず、應に乾燥して然る後に擧すべし。』彼器に陷孔處有りて食を中に入る、數摘して穿壞を洗ふ。佛言はく、『洗ふべき處に隨ひて洗ひ、餘らば無犯なり。』

諸の比丘、是の如きの念を作さく、『界內共粥宿界內煮、自煮するを得るや不や。』佛言はく、『界內共宿し、界內にて煮、自ら煮るべからず。』諸の比丘、是の如きの念を作さく、『重ねて粥を煮るに、界內共宿、界內煮、自煮するを得るや不や。』佛言はく、『界內共宿、界內煮すべからず、自煮するを聽す。』諸の比丘、是の如きの念を作さく、『盡形壽藥は、界內共宿、界內煮、自煮するを得るや不や。』佛言はく、『盡形壽藥は、界內共宿、界內煮、自煮するを聽す。』時に比丘有り、酥を受けんと欲して錯りて油を受く、受を成ずるや不やを知らず。佛言はく、『受を成ぜず。』此を受けんと欲して、錯りて彼を受く、受を成ずるや不やを知らず。佛言はく、『受を成ぜず。』比丘有り、忘れて食を受け

【二】界内共食宿界内煮等を明す。

ず、便ち持ちて道に在りて行く。水を渡り已つて憶念すらく、『我當に云何がすべき。』即ち佛に白す。佛言はく、『若し是の如く忘れて食を受けず、卽ち持して道に在りて行くは、若し淨人有るを見れば、應に食を置いて地に著け、手を淨洗して更に食を受くべし。

(三)爾時、世尊、波羅㮈國に在したまふ、時に世穀貴く、人民飢餓して乞食得難し。諸の比丘、食を以て露處に著き、蓋藏せず、放牛羊人、若は賊、持し去る。諸の比丘是の如く念ずらく、『國土飢餓す、世尊應に界內共食宿を聽したまふべし。』佛に白す、佛言はく、『若し穀貴き時は、界內共食宿を聽す。』時に諸の比丘、露處に食を煮て蓋藏せず。放牛羊人、若は賊見て持し去る。比丘是の如きの念を作さく、『穀貴き時は、界內にて應に煮食するを聽したまふべし。』佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、界內煮を聽す。』時に諸の比丘、淨人をして食を煮しむるに、或は分に食を取り、或は都て食し盡す。諸の比丘是の如きの念を作さく、『穀貴き時は、應に自煮食を聽したまふべし。』佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、自煮食を聽す。』時に諸の比丘、道路を行き、地に菓有るを見る。比丘、淨人を求むる頃に、他人已に取り去る。佛に白す。佛言はく、『草若は葉を以て菓上を覆ふを聽す。』而も人故取り去る。佛に白す。佛言はく、『取るを聽す。若し淨人を見れば、應に地に置き、手を洗つて受けて食すべし。』諸の比丘是の如く念ずらく、『穀貴き時は、世尊應に我曹に自ら食を取るを聽したまふべし。』佛言はく、『穀貴き時は、自ら取りて食するを聽す。』時に諸の比丘、早く起きて食を受け已り、食を置きて村に入り、

彼請を受けて還り、餘の比丘の邊に餘食法を作し、彼或は分に食し、或は食し盡す。比丘、是の如きの念を作さく、『穀貴き時は、世尊應に我等に、早く起きて食を受け已り、餘食法を作さずして食するを聽したまふべし。』佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、餘食法を作さずして食するを聽す。』時に多知識の長老比丘有り、村に入りて乞食す。食を得已りて持して一處に往き、食し已りて、餘食を持して還りて僧伽藍の中に至り、餘の比丘の間に於て、餘食法を作して更に食し、彼比丘或は分に食し、若は都て食し盡す。諸の比丘、是念を作さく、『穀貴き時は、世尊應に我曹に、食處より食を持ち來り、餘食法を作さずして食するを聽したまふべし。』佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、食處より食を持ち來り、餘食法を作さずして食するを聽す。』時に諸の比丘、食を受け已りて、菓、胡桃、椑桃、婆陀、菴婆羅阿婆梨を得、餘の比丘の邊に於て餘食法を作し、彼或は分に食し、或は都て食し盡す。諸の比丘、是の如きの念を作さく、『穀貴き時は、世尊應に我曹に、是の如きの菓を得て、餘食法を作さずして食するを聽したまふべし。』佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、是の如きの菓を得て、餘食法を作さずして食するを聽す。』時に諸の比丘、食し已りて水中可食を得たり、藕根、迦婆陀、菱芰藕子なり。比丘の邊に於て餘食法を作し、或は分に食し、或は都て食し盡す。諸の比丘、是の如きの念を作さく、『世尊應に我曹に、穀貴き時は、食し已りて是の如き水中可食物を得、餘食法を作さずして食するを聽したまふべし。』佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、食し已りて是の如き水中可食物を得、餘食

物を得、餘食法を作さずして食するを聽す。』時に世穀還賤し。世尊知りて故に阿難に問ひたまはく、『我穀貴き時に於て、諸の比丘を憐愍するが故に八事を聽す、界內共宿、界內煑、自煑、自手取食、早起受食、食處より餘食を持ち來る、胡桃菓等の食、水中可食物は、足食已りて餘食法を作さずして食するを聽す、諸の比丘今故食するや。』答へて言はく、『故食す。』佛言はく、『食すべからず、若し食する者は法の如く治す。』

【三】淨處食の處を移せし時の淨不淨に就いて、並に秤を蓄ふるに就いて。

(三)爾時、衆僧の食厨壞す。諸の比丘、木を以て之を拄ふ。木は不淨地に在り、疑有り、淨なるや不やを知らず。佛言はく、『淨なり、食するを得。』時に夜食移して不淨地に墮つ。諸の比丘淨なるや不やを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり。』夜食を移す、食淨不淨地の間に墮つ。諸の比丘、淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり。』時に狗有り、淨處より食を銜んで不淨地に至る。諸の比丘、淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり、諸の惡獸鳥銜み去ること亦是の如し。』時に比丘有り、彼比丘を嫌ひ、便ち他の食を移して不淨地に著き、是の如きの念を作さく、『彼をして淨を得ざらしめん。』比丘、淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『觸るる者は不淨なり、突吉羅を得、觸れざる者は淨なり。』時に比丘、彼比丘を嫌ひ、是の如きの意を作さく、『淨地に觸れて彼をして不淨を得しめん。』諸の比丘、淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『觸るる者は不淨、突吉羅を得、觸れざる者は淨なり。』時に客比丘有り、來りて淨地を覓め、食を安んぜんと欲す、未だ淨地に至らずして明相出づ。彼淨か不淨かを知

らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり、遠行せんと欲する者も亦是の如し。』時に六群比丘、升斗斛秤を畜ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず。』時に諸の比丘、胡麻、粳米を得、大豆、小豆、大麥、小麥を得、自ら量らんと欲し、佛に白す。佛言はく、『手にて抄量し、若は鍵鎡、若は鉢、若は小鉢にて量るべし。』卽ち此器の大小を以て、准じて斛斗と爲す。時に諸の比丘、酥油蜜黑石蜜を得、稱量せんと欲し、佛に白す。佛言はく、『木に刻して銖兩を作すこと秤の如くし、四五兩を齊限し、准じて以て斤數と爲すを聽す。』彼上好房を結びて淨處と爲す。酥油脂塗りて泥汚し、或は烟熏汚す。佛に白す。佛言はく、『上房を結んで淨と作すべからず、應に下なる者を結んで淨處と作すべし。』諸の比丘、藥を得たり。佛言はく、『一一分つを聽す、若し足らざれば、應に次第を憶し、若し更に得れば、續いて與ふべし。若し多藥を得ば、應に一人に四五枚を與へ、若は一抄、若は一鍵鎡、若は次鉢、若は能噉者に隨つて與ふべし。若し故餘有らば、應に更に與ふべし。』時に彼白衣若は外道に與ふ。佛言はく、『外道白衣に與ふべからず。』彼比丘、後愼して、敢て父母、若は病人、小兒、若は妊身の婦人、若は被繫閉者、若は白衣の僧伽藍中に來至する者に與へず。佛に白す。佛言はく、『是の如き人には應に與ふべし。若し故餘有らば、應に壓して汁を取りて飮むべし。』時に壓具を須ふ。佛言はく、『畜ふるを聽す。若し汁未だ沸せざるは、醉はざる人は飮むを得、若し醉ふ人は飮むべからず、若し飮まば法の如く治す。』

【四】濕頭痛等の藥を明す。

(四)爾時、世尊、毘舍離に在り、時に衆僧多く供養の飲食有り、諸の比丘濕を患ふ。佛に白す。佛言はく、『吐下藥を作るを聽す、羹粥を須むれば羹粥を與へ、野鳥肉を須むれば、應に與ふべし。』爾時、比丘有り頭痛を患ふ。醫灌鼻せしむ。佛言はく、『聽す。』何物を灌ぐかを知らず。佛言はく、『酥油脂を以て灌ぐ。』云何が灌ぐかを知らず。佛言はく、『羊毛若は劫貝鳥毛を以て油中に漬し、然る後に滴して鼻中に着くべし。』四邊に流出す。佛言はく、『灌鼻筒を作るを聽す。』彼便ち寶を持して筒を作る。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず、應に骨、若は牙、若は角、若は鐵、若は銅、若は白鑞、若は鉛錫、若は葦、若は竹、若は木を用ふべし。』彼洗はずして便ち擧置す。佛言はく、『洗はずして擧置すべからず。』洗ひ已りて燥かさず、後虫生ず。佛言はく、『洗ひ已りて燥かさざるべからず、應に燥かさしめて擧置すべし。』時に比丘有り、頭痛を患ふ。醫、鼻に灌がしむ、藥入らず。佛言はく、『手にて摩頂し、若は脚の大指を摩し、若は凝酥を以て鼻を塞ぐを聽す。』爾時、比丘有り、風を患ふ。醫煙を用ひしむ。佛言はく、『煙を用ふるを聽す。』時に煙筒を須ふ。佛言はく、『作るを聽す。』彼寶を以て作る。佛言はく、『寶を用ひて筒を作るべからず、應に骨、若は牙、若は角、若は鐵、若は銅、若は白鑞、若は鉛錫、若は木にて作るべし。若し火燒を患ふれば、煙出處に鐵を安んずるを聽す。』若は筒の零落を患ふ。佛言はく、『囊を作りて盛るを聽す。』手持堅ならず、佛言はく、『帶を作りて肩上に繫著すべし。』彼丸藥を須ふ。佛言はく、『作るを聽す。』手持堅ならず、『應に熏筒囊

中に塗著すべし。」時に比丘有り、瘡を患ふ。醫塗瘡藥を作らしむ。佛言はく、「作るを聽す。」彼瘡熱す、應に刀を以て破りて藥を著くべし。「自今已去、刀を以て瘡を破るを聽す。瘡を患ひて臭ければ應に洗ふべし。若し根湯、草藥羊菓湯及び小便を以て洗へ。洗ふ時、手を以て洗ひ瘡を患ふれば、鳥毛を以て洗へ。若し藥汁を流し棄つるには、物を以て四邊を擁障せよ。若し燥を患ふれば、油を以て塗れ、若し上り棄つるには、物を以て覆へ。若し瘡臭ければ香を塗れ。」時に諸の比丘、瘡を患ふ。佛言はく、「厚衣にて覆ふを聽す。若し故寒ければ、應に臥具氈褥を以て上を覆ふべし、若し寒止まざれば、一比丘共に臥すべし。」彼畏愼して、敢て病者と共に臥さず。佛言はく、「病人と共に臥すを聽す。」時に白衣有り、病みて僧伽藍に來至す。比丘爲に看病す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「應に方便もて喩し遣すべし、若し佛法僧を稱擧する者にして、能く事を作さば爲に作せ。」病人死す。諸の比丘、畏愼して敢て棄てず、世尊、是の如きの語有り、「白衣の喪を棄つべからず。」諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『應に僧伽藍淨の爲の故に之を棄つべし。』時に六群比丘、三處毛を剃る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「三處毛を剃るべからず。」時に六群比丘、互に尾を看る。「誰の尾か長く誰の尾か短き、何の藥をか著く。」諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「更る尾を相見、其長短と何等の藥を著くるやを問ふべからず。」時に六群比丘、酥油を以て大便道に灌ぐ。佛言はく、『灌ぐべからず。』彼人をして灌がしむ。佛言はく、「人をして灌がしむべからず。」爾時、比丘、北

【共宿鹽合食】鹽を貯へて經宿の時これを食物に合して食ふこと。

方に在りて住し、安居し已りて、形體枯燥し顏色憔悴す。祇桓精舍に至りて佛の所に詣り、頭面に足を禮し、却りて一面に坐す。世尊、客比丘を慰問したまはく、『汝、住處安樂なりや、和合するや不や、乞食を以て疲苦せざるや。』答へて言さく、『住處安樂なり、和合して諍ひ無し。彼國に粥無し、粥を得ざるが故に氣力羸乏す。』佛問うて言はく、『彼國にては、常に何等の食を食するや。』答へて言さく、『彼國、常に餅を食す。』佛言はく、『餅を食するを聽す。』爾時、波羅㮈國の市馬人有り、舍衛國に來至し、衆僧の爲に餅を作り、豆麨を作り、麨を作り、麨籢を與へ、量麨器を與へ、鹽を與へ、盛鹽籢を與へ、苦酒と苦酒瓶とを與へ、木槽を與へ、巵を與へ、匕を與へ、勺を與へ、摩嘗を與へ、巵椀を與へ、食を與ふ。根食、莖食、葉食、華食、菓食、油食、胡麻食、石蜜食、細末食なり。佛言はく、『一切受けて食するを聽す。』諸の比丘、是の如く食し、此粥は是れ食か非食か、是れ請か非請か、是れ足食か非足食かを知らず。佛言はく、『若し草葉を持して畫して跡無ければ、非食非請非足食なり。』時に比丘、是の如きの念を作さく、『煮飯汁を飲むは、是れ食か非食か、請か非請か、是れ足食か不や。』佛言はく、『若し滓を合して飲まざれば、非食非請非足食なり。』時に諸の比丘、是の如きの念を作さく、『餅は是れ食か非食か、是れ請か非請か、是れ足食か不やを知らず。』佛言はく、『非食乃至非足食なり。』時に六群比丘、共宿鹽合食を以て食す。佛言はく、『共宿鹽合食を食すべからず。』時に優波離、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『何等か是れ盡形壽藥の應に服す

べき。』佛優波離に語りたまはく、『食を爲すに任へざる者は、比丘病の因緣有り、盡形壽應に服すべし。』藥犍度具足し竟る

迦絺那衣犍度第八

【五】以下第八犍度を明す。迦絺那衣とはカチナ(Kaṭhina)功德と譯す、比丘九十日安居の後其功により人によつて供養されたる衣との意である。先づ功德衣を受くる因緣を明す。

(五)爾の時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に衆多の比丘有り、拘薩羅國に在りて安居し、十五日自恣竟り、十六日往いて世尊を見る。彼道路に天雨に値ひ、衣服皆濕ひ、僧伽梨重くして疲極す。舍衞國の世尊の所に詣り、頭面に足を禮し已りて、却りて一面に坐す。爾時、世尊、諸の比丘を慰勞して言はく、『汝等の住止和合して安樂なりや不や、乞食を以て苦と爲さざるや不や、道路疲極せざるや。』答へて言さく、『住止和合して安樂なり、乞食を以て苦と爲さず。大德、衆多の比丘有り、拘薩羅國の異處に在りて夏安居し竟る。十五日自恣已り、十六日に便ち衣鉢を持し來りて、世尊を見る。道路に天雨に遇ひ、衣服濕ひ、僧伽梨重くして疲極す。』衆多の糞掃衣の比丘有り、寒雪國の異處に在りて夏安居す。十五日自恣竟り、十六日所得の新故の衣を持ち、便ち往いて世尊を見る。道路天雨に遇ひ、衣服濕ひ重くして疲極す。祇桓精舍に詣り、佛の所に到りて頭面に足を禮し已りて、却りて一面に坐す。佛、諸の比丘を慰勞して言はく、『汝等住止和合して安樂なりや不や、乞食を以て苦と爲さざるや。』『大德、衆多の持糞掃衣の比丘有り、寒雪國の異處に在りて夏安

居し、十五日自恣竟り、十六日新故の衣を持し、來りて世尊を見る。道路に天雨に遇ひ、衣服濕ひ、重くして疲極す。」爾時、世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘に告げたまはく、「安居竟らば、四事有り、應に作すべし。何等か四と爲す。自恣すべし、界を解くべし、界を結すべし、功德衣を受くべし、此四事有り、應に作すべし。五事の因緣有りて功德衣を受く、何等か五なる。長衣有り、失衣せず、別衆食す、展轉食す、食前食後比丘に囑せずして聚落に入る、此の如きの五事の因緣有り、功德衣を受く。功德衣を受け已りて五事を得、何等か五なる。長衣を畜ふるを得、離衣宿す、別衆食す、展轉食す、食前食後比丘に囑せずして聚落に入る、功德衣を受け已りて五事を作すを得、衆僧應に是の如くにして功德衣を受くべし。若は新衣、若は檀越施衣、若は糞掃衣を得、若し是れ新衣、若し是れ故衣、新物帖は作淨せよ。若し已に浣ひ、浣ひ已らば納して作淨せよ。邪命を以て得ざれ、相を以て得ざれ、激發して得ざれ、經宿して得ざれ。捨墮せずして作淨し、卽日來り、法に應ず、四周に緣有り、五條に十隔を作る、是の如きの衣は、僧應に受けて功德衣を作るべし。若し復是に過ぐる者も亦應に受くべし。應に自ら浣染舒張[illegible]治し、裁して十隔に作りて縫治すべし、應に衆僧の前に在りて受くべし、僧已に功德衣を受け竟る。云何が僧功德衣を受くるを成ぜざる。但浣ひ已るは功德衣を受くるを成ぜず。但[illegible]治せず、但安緣せず、但裁隔已ず、但編邊せず、但安紐せず、但作葉せず、但安鉤せず、若は邪命にして得、若は諂曲にして衣を得、相にて衣を得、激發して衣を得、經宿して衣

【六八】功德衣の種類並に受作法。

を得、捨墮して作淨せず、即日來らず、法に應ぜずして衣を受け、四周安縁せず、僧前に在りて受けず、若は有難に僧伽梨無し、若は僧如法に功德衣を受け、而も彼は界外に在りて作し、自ら衣を受く、是の如きは功德衣を受くるを成ぜず。云何が功德衣を受くるを成ずる。若し新衣、檀越衣、糞掃衣を得、若は是れ新衣、若は是れ故衣、新物を帖するは作淨し、若し已に浣ひ、浣ひ已りて納して作淨し、邪命に得るに有ず、諂曲して得るに非ず、相を以て得るに非ず、激發を以て得るに非ず、經宿せず、捨墮せずして作淨し、即日來り、法に應じ、四周に縁を安んじ、五條に十隔を作り、若は過ぐ、是の如きの衣を受けて功德衣を作る。自ら浣ひ染め舒張し襵治して、裁して十隔と作して縫治し、衆僧の前に在りて受け、衆僧已に功德衣を受け竟り、若は如法に功德衣を受けて界內に在り、是の如きは功德衣を受くるを成ず。

(六)時に六群比丘、大色の染衣を以て、僧の爲に受けて功德衣を作る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「大色の染衣を以て功德衣を作るべからず。」彼錦を用ひて作る。佛言はく、「錦を用ふべからず。」彼白色を用ふ。佛言はく、「白色を用ふべからず、自今已去、袈裟色を用ふるを聽す。」爾時、異住處有り、現前僧大貴價の功德衣を得たり。彼比丘、云何せんを知らず。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「白を作すを聽す。應に是の如く白すべし。「大德僧聽け、今日衆僧功德衣を受く、若し僧時到らば、僧衆僧の和合して功德衣を受くるを忍聽せよ、白是の如し」と。是の如く白し已りて、一比丘を差し、應に問うて

言ふべし。「誰か能く僧の爲に功德衣を持つ」と。能くする者答へて、「我能くせん」と言はば、衆中羯磨を作すに堪能なる者を差し、是の如く白す。「大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧、某甲比丘を差し、僧の爲に功德衣を持つ。白是の如し」と。「大德僧聽け、僧、某甲比丘を差し、僧の爲に功德衣を持つ。誰か長老、僧某甲比丘を差し、僧の爲に功德衣を持つを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧、已に某甲比丘を差し、僧の爲に功德衣を持つを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。僧即ち應に羯磨衣衣を、功德衣を持つ比丘に與へ、是の如きの言を作すべし。「大德僧聽け、此住處の僧、可分衣を得たり、現前僧應に分つべし。若し僧、時到らば僧忍聽せよ、僧今此衣を持して某甲比丘に與へ、此比丘、當に此衣を持して僧の爲に受けて功德衣を作り、此住所に於て持つべし、白是の如し」と。「大德僧聽け、此住處の僧、可分衣を得たり、現前僧、應に分つべし。僧今此衣を以て某甲比丘に與ふ、此比丘、當に此衣を持して、僧の爲に受けて功德衣を作り、此住處に於て持つべし。誰か諸の長老、僧此衣を持して某甲比丘に與へ、某甲比丘、當に此衣を持して、僧の爲に受けて功德衣を作り、此住處に於て持するを忍せざる者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に此衣を持して某甲比丘に與へ、某甲比丘當に此衣を持して、僧の爲に受けて功德衣を作り、此住處に於て持するを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是事是の如く持つ。彼比丘應に起ちて、衣を捉りて諸の比丘に隨ひ、手衣に及ぶを得ば、相了るを得たり」と言ひ、應に是の如きの言を作

すべし。「此衣衆僧、當に受けて功德衣を作るべし、此衣衆僧、今受け功德衣を作れ、此衣衆僧、已に受け、功德衣を作り竟る」と。是の如く第二第三說く。彼諸の比丘、應に是の如きの語を作すべし。「其受くる者は已に善く受く、此中の所有の功德は名稱は我に屬す」と。』彼應に答へて『爾り。』と言ふべし。爾時、優波離、座より起ちて、偏に右の肩を袒ぎ、革屣を脫し、右膝を地に著け、世尊に白して言さく、『過去の三句を以てせんや、未來を以てせんや、現在を以て功德衣を受くるとせんや。』佛、優波離に語りたまはく、『滿足語の爲の故に九句を說く、過去の三句を以て功德衣を受けず、亦未來の三句を以て功德衣を受けず、現在の三句を以て功德衣を受けず。何を以ての故に。優波離、過去は已に滅し、未來は未だ至らず、是故に現在の三句を以て功德衣を受けず、何を以ての故に。優波離、過去は已に滅し、未來は未だ至らず、是故に現在の三句を以て功德衣を受く。若し未成衣を得ば、應に衆僧中に羯磨して、比丘を差して作らしむべし。若し已成の者を得ば、應に如法に受くべし。』六群比丘、春夏冬一切時中、僧の爲に功德衣を受く。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『春夏冬一切時中、功德衣を受くべからず、自今已去、自恣竟りて功德衣を受けず、一月功德衣を受くるを聽す。』五月、彼六群比丘、功德衣を出さず、是の如きの意を作さく、『久しく五事放捨を得るを以ての故に』と。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『是の如きの意を作すべからず、「久しく五事放捨を得るを以ての故に」と。而も功德衣を出さず。自今已去、冬四月竟りて、僧應に功德衣を出すべきを聽す、應に是の如く

【七】功德衣を捨するに就て。

出すべし。僧集りて和合し、未受大戒の者も出で、來らざるものは欲を説く。「僧今何の作爲する所ぞ」と、答へて言ふべし「功德衣を出す」と。「大德僧聽け、今日衆僧功德衣を出す、白是の如し」と。應に是の如きの白を作して、功德衣を出すべし。若し出さざれば、功德衣の分齊を過ぐ、突吉羅なり。八の因緣有りて功德を捨つ。去と竟と不竟と、失と斷望と聞と、出界と共出となり。若し比丘、功德衣を受け竟りて界外に出で、不還意を作して出で去り、去れば便ち功德衣を失ふ。若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に出でて衣を作る、彼衣を作り竟れば、便ち功德衣を失ふ。若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に出でて是の如きの念を作さく、「亦衣を作らず、亦還らず」と。衣不竟なり、功德衣を捨つ。若し比丘、功德衣を受け已り、界外に出でて衣を作り竟り、彼比丘、衣を失すれば、功德衣も亦失ふ。若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に出でて、衣を得んと悕望す。彼比丘、界外に出でて、衣を得んと悕望する處に至る、比丘、見已りて衣を得ず、望み斷ゆ。更に有望の處無し、彼れ望み斷ゆれば功德衣を失ひ已る。若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に去りて衣を作る、衣を作り竟りて、衆僧功德衣を出すと聞く、彼れ聞けば便ち功德衣を失ひ已る。若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に出でて衣を作り竟り、數還意を作して界外に在り、衆僧功德衣を出せば、彼界外に在りて功德衣を失ひ已る。若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に在りて衣を作る、彼衣、若は竟り、若は竟らず、住處に還りて、彼比丘、和合して衣を出す。是を八事と爲す。」

(七)復六事有り、若し比丘、功德衣を受け竟り、界外に出でて不還意を作して去る、未だ衣

を得ずして去れば便ち功德衣を失ふ。（上の八事中の、失衣及び斷望の二句を除き、餘は上の如し。）復六事有り、若し比丘、功德衣を受け竟り、衣を持して界外に出でて衣を作る、衣を作り竟りて便ち功德衣を失ふ。（上の八事中の、去及び望斷の二句を除き、餘は上の如し。）未得衣に復十五句有り（次に已得衣にも亦十五句あり。）得衣未得衣に復十五句有り（此は上の八事を錯互す、更異に無し、故に出さず。）復十二事有り、若し比丘功德衣を受け已りて出でて去り、悕望衣を求めて所望衣を得、界外に在りて衣を作る、衣を作り竟れば功德衣を失ふ。（不竟の句も亦是の如し。失も亦是の如し、望斷上の如し）若し比丘功德衣を受け竟り、出でて去りて衣を得んと望む、人に語らず、當に還るべし。界外に出でて、所望衣處にて而も所望の衣を得ず、乃ち非所望衣を得、界外に在りて衣を作る、衣を作り竟れば便ち功德衣を失ふ。（不竟も亦是の如し、失も亦是の如し、望斷上の如し。）若し比丘、功德衣を受け竟り、出で去りて人に語らず、當に還るべし、亦還意を作さず、界外に在りて望衣處に至り、所望の衣を得、所望の衣を得ず、界外に在りて衣を作り、衣を作り竟れば便ち功德衣を失ふ。（不竟も亦是の如し、失衣も亦是の如し、望斷は上の如し。）復十二事有り、所望の衣を得、所望の衣を得ず、上の十二事に同じ。復九事有り、若し比丘功德衣を得竟りて出で去り、未だ衣を得ずして界外に在り。餘の比丘、問うて言はく、「汝、何處に在りて宿する。衣は何處に在る、何んが持ち來らざる、汝衣を作るとせんや。」彼比丘、還りて住處に至り、衆僧功德衣を出すと聞き、彼是の如きの念を作さく、「僧今功德衣を出す、方に衣を作らん。」彼即ち衣を作り竟れば功德衣を失ふ。（不作衣も亦是の如し、失衣も是の如し、此は是れ界内に在りて聞くの三句、衣を持って界外に出で、道路に聞くの三句も亦是の如し。衣を持ちて彼比丘の所に至るの三句も亦是の如し。是を九句事と爲す。次に已に衣を得るの九句も亦是の如し。衣を得衣を得ざる、各九事あり、亦是の如し。）若し比丘功德衣

を受け已り、界外に出でて餘方に至る、彼是念を作して言はく、『若し善伴を得ば當に去るべし、若し善伴を得ざれば當に還るべし。』中道に至りて衆僧功德衣を出すと聞き、彼是の如く念ずらく、『我當に衣を作るべし』と。衣を作り竟れば、彼功德衣を失ふ。（不竟も亦是の如し、失衣も亦是の如し。界外も亦是の如し。聞も亦是の如し。五句あり。）若し比丘功德衣を竟り、靜處に往かんと欲す、清淨若は樂ならば、彼當に住すべし、樂ならずんば當に還るべし。彼比丘、彼間に至り、衆僧功德衣を出すと聞き、彼是言を作さく、『我曹當に衣を作るべし。』衣を作り竟れば、功德を捨つ。（不竟も亦是の如し、失衣も亦是の如し、界外も亦是の如し、聞も亦是の如し、五句あり。）二種の捨功德衣あり。功德衣を持して比丘界外に出でて宿すると衆僧和合して共出するとなり。（迦絺那衣犍度具足し竟る。）

【八】下第九犍度を明す。拘睒彌國に於て比丘の闘諍があつた時、如法に之を制止する方法を説いたものである。先づ比丘間の闘諍を制止すべき所以を明す。

拘睒彌犍度第九

（八）爾時、世尊、拘睒彌に在したまふ。時に比丘有りて戒を犯す。或は言ふ有り、『犯戒なり。』或は言ふ有り、『不犯なり。』是中見犯の比丘、不見犯の比丘に語りて言はく、『此比丘、實に犯す、是れ不犯に非ず。』彼不見犯の比丘意に解し、即ち言はく、『是の如し、是比丘、實に戒を犯す、是れ不犯に非ず。』彼即ち和合して擧罪す。犯罪の比丘言はく、『我不犯なり、擧を成ぜず、非法に我を擧するも羯磨成ぜず。』彼れ即ち人間に往いて朋黨を求め、餘の比丘に語りて言はく、『我不犯なり、擧を成ぜず、非法に我を擧するも羯磨成ぜず。』彼

比丘の見も是の如し。『此比丘不犯なり、擧を成ぜず、非法の擧羯磨は成ぜず。』犯罪の比丘、卽ち餘の部黨の隨擧の比丘を將ゐ、來りて先に不見犯と言ひし比丘の所に至り、語りて言はく、『長老、此比丘は戒を犯さず、擧を成ぜず、非法に他を擧するも羯磨成ぜず。』彼比丘、還不犯を見、便ち言はく、『彼不犯なり、擧を成ぜず、非法の擧羯磨は成ぜず。』彼被擧隨擧の比丘、見犯の比丘と別部說戒羯磨す。時に擧罪比丘、世尊の所に往き、頭面足を禮し、却りて一面に坐し、佛に白して言さく、『此被擧隨擧の比丘、我等と別部說戒羯磨す。』佛、言はく、『此擬人僧を破す。若し彼、我所說の如く、羯磨說戒せんには、羯磨成就す、不犯なり。汝等も若し我所說の如く羯磨說戒せば、亦成就して不犯なり。何を以ての故に。二の不同住處有り。何等か二なる。彼比丘、自ら不同住を作すと、若は僧與に不同住を作すとなり。云何が比丘、自ら不同住を作す。若し比丘、僧破して外の朋黨を求む、是を比丘自ら不同住を作すと爲す。云何が僧、與に不同住を作す。僧與に不見羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を作す、是を僧與に不同住を作すと爲す。是を二種の不同住と爲す。二種の同住處有り、是比丘、自ら同住處を作すと、若は僧與に同住處を作すとなり。云何が自ら同住を作す。此比丘、僧自ら部黨を破し、外の善部黨を求め、此比丘、自ら同住を作す。云何が僧與に同住を作す。衆僧和合して、先に與に不見羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を作し、後に和合して僧還解く、是を僧與に同住を作すと爲す。是を二種の同住處と爲す。』彼被擧の比丘、隨擧の比丘、此擧比丘と鬪諍し、共に相罵詈誹謗して互に長

短を求む。時に衆多の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、世尊に白して言さく、『大德、彼被擧の比丘、隨擧の比丘、此擧比丘と鬪諍し、共に相罵詈誹謗して互に長短を求む。我等當に云何がすべき。』佛、言はく、『衆僧に非法和合を破するを聽す。應に是の如き處に在りて坐し、身口をして惡を出さざらしむべし。應に一人を隔てて坐すべし。』爾時、世尊、被擧比丘の所に往き、是の如きの言を作したまはく、『汝曹、罪を犯して、而も犯さずと言ひて、懺悔せざる莫れ、何を以ての故に。若し比丘、罪を犯さば、餘の比丘言はく「長老、罪を犯す、自ら見るや不や」と。答へて言はく「見ず」と。彼比丘、多聞にして阿含を知り、法を持し律を持し摩夷を知り、多く伴黨を得、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の沙門外道なり。彼犯罪の比丘、是念を作さく「彼比丘、多聞にして阿含を知り、法を持し、律を持し、摩夷を知り、多く伴黨有り、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の沙門外道なり。我若し罪を見ざれば、此比丘、今即ち當に我爲に不見罪羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を爲すべし。若し彼比丘、我爲に、不見罪羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を作さば、彼比丘復我と與に羯磨說戒を共にせず、我と共に自恣し、同一屋に住し、一處に坐し、一床一板に在りて前食後食せず、亦歲數の大小に隨うて、恭敬禮拜執手迎逆せず、若し彼比丘、我と同一羯磨し、共に說戒せず、乃至手を執り、迎逆せざれば、衆僧便ち鬪諍の事生ずるあり、共に相罵詈誹謗して長短を伺求し、僧便乃ち破すべし、僧をして塵垢せしめ、僧をして別異に住せしむ」と。若し比丘、

此破僧事を重んずる者は、應に彼言の如くすべし、罪有らば應に如法に懺悔すべし。止めよ止めよ比丘、共に鬪諍罵詈し、共に相誹謗し、其長短を伺求する莫れ。汝等一切應に共に和合して、齊しく集り、同一師學にして水乳の合するが如くし、佛法を利益して安樂に住すべし。』爾時、世尊、被擧比丘、隨擧比丘に告げて是の如く言ひ已り、便ち擧他比丘の所に往きて語りて言はく、『汝等數他の比丘の事を擧する莫れ、何を以ての故に。是中の比丘、事を犯さば、彼比丘問うて言はん、『長老自ら犯罪を見るや不や』と。彼れ『見ず』と言はば、彼比丘、若し多聞にして阿含を知り、法を持し、律を持し、摩夷を知り、朋黨多く、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の沙門外道ならば、彼比丘、是の如きの念を作さん、「彼比丘、多聞にして阿含を知り、法を持し、律を持し、摩夷を知り、朋黨多く、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の沙門外道なり。若し彼罪を見ずと言はじ、我等今卽ち當に擧して不見罪羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を作すべし。我等若し與に不見罪羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を作さば、我等便ち彼と羯磨說戒を共一にせず、共に自恣せず、乃至執手迎逆せず、我等共一に羯磨說戒せず、乃至執手迎逆せざれば、衆僧便ち當に鬪諍して、共に相罵詈誹謗して長短を伺求すべし、僧をして破せしめ、僧をして塵垢せしめ、僧をして別住せしむ」と。若し比丘此破僧事を重んずる者は、彼比丘の事を擧すべからず。止めよ止めよ比丘、鬪諍して共に相罵詈誹謗し、長短を伺求する莫れ、汝等一切當に共に齊しく集り、同一師學にして水乳の合するが如くし、佛法を利益して安樂に住すべし。』

【九】比丘鬪諍の因緣を明す。

（九）爾時、世尊、彼比丘に語り已りて此夜過ぎ、明旦衣を著け鉢を持ち、拘睒彌に入りて乞食し已り、還りて僧伽藍の中に至り、此因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、「乃往過去世に、伽奢王梵施有り、拘薩羅王長生の父祖の怨仇なり。梵施王、兵衆威力勇健にして財寶復多し。長生王兵衆威力如かず、財寶も復少し。後異時に梵施王、四部の兵と拘薩羅國に來至し、長生王を罰し、一切の國土兵衆庫藏珍寶を奪ふ。時に王長生第一夫人と逃走して波羅㮈國に來至し、假に螺髻婆羅門と作り、夫婦陶師の家に在りて住す。後異時に長生王第一の夫人、心に是の如きの念を生ずらく、「其地平整にして、四交道頭に、日初出の時、四部兵の共に闘うて、刀を洗ふ汁を見て飲むを得んと欲す」と。即ち王の所に至りて白して言さく「王知らんと欲するや不や、我今是の如く念ず、其地平整にして、四交道頭に、日初出の時、四部兵の共に闘うて刀を洗ふ汁を見て飲むを得んと欲す」と。王言はく、「汝何によりてか、是の如きの願に從ふを得ん。梵施王は我父祖と怨仇なり、我國土兵衆庫藏珍寶を奪ひて遺餘有ること無し」と。夫人言はく、「我若し是の如きの願に從ふを得ずんば、便ち死時に當る」と。梵施王に大臣有り、富盧醯侈と字く、是れ長生王の伴なり。長生王婦に語りて言はく、「我伴に語りて知らしむべし」と。時に長生王、即ち富盧醯侈の所に至り、是の如きの言を語らく、「伴今知るや不や、我第一の夫人、是の如きの念を作さく、「其地平整にして、四交の道頭に於て、日初出の時、四部兵の闘うて刀を洗ふ汁を見て、飲むを得んと欲す」と。念じ已りて即ち來りて我に白して是の如きの事を說く。我語りて言

はく、「汝今何によりてか是の如きの願に從ふを得る。梵施王、我父祖と怨仇なり、我一切の國土兵衆庫藏財寶を奪つて都て盡く」と。夫人言はく、「是の如きの願に從ふを得ざれば、便ち當に死すべし」と。我即ち言はく、「我此因緣を以て、伴に語りて知らしむべし」と。』富盧醯修言はく、『小しく止めよ、我共腹内を瞻ん』と。時に富盧醯修、往いて長生王の第一夫人の腹内を瞻已りて、即ち偏に右の肩を露し、長跪して手を執り、三反稱へて言はく、『拘薩羅王腹内に在り』と。夫人に語りて言はく、『當に共地平整にして、四交の道頭に於て日初出の時、四部の兵の共に鬪うて刀を洗ふの汁を見て、飲むを得、某處に在りて住すべし』と。時に富盧醯修、梵施王の所に往き、白是の如し。言はく、『王知らんと欲するや不や、是の如きの星ありて出づ、時應に淸旦日初出の時に、四交道頭に在りて四部の兵をして、共に鬪うて刀刃を洗はしむべし」と。王言はく、『富盧醯修今正に是れ時なり』と。時に富盧醯修、即ち四部の兵を集め、四交道頭に於て共に鬪つて刀刃を洗ふ。時に長生王の夫人、共地平整にして、四交道頭に於て、日初出の時、四部兵共に鬪つて刀刃を洗ふを見るを得、時に夫人洗刀汁を得て飲む、已りて胞胎足るを成じ、遂に便ち男兒を生む、顏貌端正なり、即ち字けて長と爲す。其年長大なり、王長生甚だ之を愛念す。時に王梵施、拘薩羅王長生と、第一夫人と逃走し、螺髻婆羅門と作り、陶師の家に在りて住すと聞き、即ち傍人に勅して言はく、『汝陶師の家に往き、長生王及び第一夫人を收め取り、堅牢に執持して將來し、幷に惡聲鼓を打ち、爲に死相を現じ、右門より出で、破して七分となし、

尖標頭に著けよ』と。時に王長生、梵施王の是の如きの教勅を作すと聞き、即ち兒の長を喚びて語りて言はく、『汝知るや不や、伽奢國王梵施は、是れ我父祖の怨仇なり、彼れ我一切の國土兵衆財寶を奪ひて都て盡く、幷に傍人に勅して我等を殺さしむ、汝は逃走すべし、梵施王の爲に殺さざる勿れ」と。時に王子長即ち逃走す。時に梵施王、人をして即ち王長生及び第一夫人を收めしめ、執へ縛し、幷に惡聲鼓を打みて死相を現ず。衆人聚集す。時に長生王子、微服して父母の後を趁ね、啼泣淚を流す。時に王長生、顧みて其子を見、是の如きの言を作さく、『怨に輕重無し、皆報ずるに足らず、怨を以て怨に報ずれば、怨終に除かず、唯怨無くして怨を除く有るのみ』と。是の如く再三言ふ。時に衆人、是の如きの念を作さく、『拘薩羅王、顚狂心亂す、今日方に長摩納を教ふ、今誰か是れ長摩納ならんや』と。時に衆人亦是の如く三たび言ふ。時に梵施王、人をして長生王を將ひて右門より出で、分ちて七分と作し、尖標頭に著けしむ、時に長生王子長、彼より還りて波羅㮈城に入り、種種の技術を學び、書を學び、瞻相星宿祕讖算數を學び、及び諸の形像を畫き、音樂戲笑も、衆中に在りて最も第一たり。爾時、梵施王の妓女所住の處、邊を去ること遠からずして調象師有り。時に王子長、象師の所に往いて語りて言はく、『我調象を學ばんと欲す』と。答へて言はく、『學ぶべし』と。時に長摩納、夜時半を過ぎ、琴を彈じて歌戲し美音聲を出す。時は王梵施、夜に於て彈琴歌戲の聲を聞く、其音調美なり、聞き已りて即ち傍人に問うて言はく、『誰か夜過半に於て、彈琴歌戲し其音調好き』と。答へて言はく、

『王今知るや不や、王の妓女を去ること遠からずして調象師有り、彼に弟子有り、長摩納と名く、是れ彼夜の過半に於て、彈琴歌戯するの聲なり、其音調好し』と。聞き已りて即ち言はく、『喚び來れ、我之を見んと欲す』と。即ち教を受けて往いて喚び來る。頭面に王の足を禮し、已りて一面に住す。王問うて言はく、『汝實に夜過半に於て、彈琴歌戯して美音聲を出せるや』と。答へて言はく、『爾り』と。王言はく、『汝今我前に於て、彈琴歌戯して美音聲を出すべし』と。時に即ち王の前に於て、彈琴歌戯して美音聲を出す。王之を聞いて極めて大いに歡喜す。王言はく、『此に住せよ、當に汝に食を與ふべし』と。答へて言はく、『爾り』と。時に王梵施の第一夫人、屋に住して人の入るを得る者無し。唯王と夫人と及び長摩納のみ。後異時に、夫人摩尼珠を失ふ。夫人王の所に至りて白して言さく、『王知るや不や、我摩尼珠を失ふ』と。王言はく、『誰か入る者有る』と。夫人言はく、『更に人の入る無し、唯王と及び我長摩納のみ』と。時に王、即ち長摩納を喚びて問うて言はく、『我第一夫人珠を失ふ、汝取るや』と。彼是の如きの念を作さく、『王夫人の屋は、更に人の入る無し、唯王と夫人と及び我のみ有り、若し我取らずと言はば、恐らくは王必ず當に我を治すべし、我由來樂を習ふ。苦毒に堪へず』と。即ち報へて言はく、『我取る』と。王言はく、『誰と共にか取る』と。答へて言はく、『王の太子と共にす』と。『更に復誰か有る』と。答へて言はく、『復第一有智慧の大臣と共にす』『更に復誰か有る』と。答へて言はく、『王の國中の第一の長者と與にす』と『更に復誰と共にする』と。答へて言はく、『第一の婬女と共に

す』と。時に王、即ち長摩納と太子と大臣と、長者と第一婬女とを收めて之を繫ぐ。王の太子、長摩納に語りて言はく、『汝、我は實に珠を取らざるを知る、而も我取れりと虛言するや』と。長摩納言はく、『汝實に取らず、我も亦取らず、汝は是れ王の第一の太子、王の愛重する所、必ず珠の爲の故に汝の命を斷ぜず、是を以ての故に、相引くのみ』と。第一有智慧の大臣、長摩納に語りて言はく、『汝實に我珠を取らざるを知る、而も我取ると虛言するや』と。長摩納言はく、『汝實に取らず、我も亦取らず、汝は是れ有智慧の大臣、能く覓むれば珠を得ん、是故に相引くのみ』と。大長者、長摩納に語りて言はく、『汝實に我珠を取らざるを知る、而も我取ると虛言するや』と。長摩納答へて言はく、『汝實に取らず、我も亦取らず、汝は國の大長者なり、大富にして財寶無數なり、若し王珠を須むれば、汝能く之を與へん、是を以ての故に相引くのみ』と。第一の婬女、長摩納に語りて言はく、『汝等珠を取らざるを知る、而も我取れりと虛言するや』と。答へて言はく、『汝實に取らず、我も亦取らず、汝は是れ第一の婬女、多人意を繫けて汝に在り、未だ汝を得ざるものは、必ず求覓して珠を得ん、是を以ての故に相引くのみ』と。時に波羅㮈國の白賊、王の第一夫人珠を失ひ、王は摩納と太子と大臣と大長者と婬女とを收繫すと聞き、即ち長摩納の所に來至して問うて言はく、『王夫人、實に珠を失ふや不や』と。答へて言はく、『珠を失ふ』と。問うて言はく、『誰か夫人の屋に入る』と。答へて言はく、『唯王と夫人と及び我となり』と。問うて言はく、『誰か中に在りて行く』と。答へて言はく、『獼猴有り、

中に在りて行く』と。彼言はく『今珠得べきのみ』と。時に賊即ち梵施王の所に行き、王に白して言さく、『王今知るや不や、今珠得べし、王女人の莊嚴具を出すべし』と。王即ち種種の莊嚴具の瓔珞を出す。衆の獼猴を集め、瓔珞を著けしめて、置きて宮中に在り。時に彼れ先に内に有る獼猴、諸の獼猴の皆瓔珞を著くるを見、便ち倚む所の夫人の珠を出し、以て自ら身を嚴る。時に賊、即ち四方圍遶して獼猴を捕取し、以て王に白して言さく、『王今知るや不や、我已に珠を得たり』と。時に王梵施、長摩納を喚び來らしめて言はく、『汝珠を取らず、何が故に取ると言ふや』と。即ち王に答へて言はく、『我是の如きの念を作す。夫人の屋、人の入る者無し、唯王と夫人と及び我のみ。我若し取らずと言はば、恐らくは我を治めて苦毒せん。而も我は苦毒に堪へず、故に之を取ると言ふのみ』と。『汝何が故に太子を引くや』と。答へて言はく、『我是念を作す、太子は王甚だ愛念す、必ず珠を以ての故に、而も其命を斷ぜず、是を以ての故に、太子を引くのみ』と。『汝何が故に第一大臣を引く』と。答へて言はく、『我是念を作す、大臣は多知、必ず能く方便を作して、還求して珠を得ん、是を以ての故に引くのみ』と。『汝復何が故に大長者を引く』と。答へて言はく、『我是念を作す、王若し寶を須むれば、長者大富、能く王に珠を與ふるに足る、是故に引くのみ』と。『汝復何が故に婬女を引く』と。答へて言はく、『我是念を作す、國中の人と及び衆賊と、心を繫けて彼婬女に在り、其未だ得ざる者は、必ず能く婬女の爲の故に、還覓して珠を得ん、是故に引くのみ』と。王言はく、『未曾有なり長摩納、是の如きの智慧

有り、王即ち長摩納を用ひて一切處の尊と爲す。後異時に於て、梵施王四部の兵を嚴にして出行遊獵す。時に王及び四部の兵、各各衆亂して鹿を逐ふ。時に大熱くして疲極す。時に長摩納即ち王車を將て屏處に至りて止息す。王車を下りて車陰中に在り、長摩納の膝上を枕にして眠る。時に長摩納是の如きの念を作さく、『此王は是れ我父祖の怨仇なり、我國土を破り、我父祖の四部の兵及び庫藏の寶物を奪ひて一切皆盡く、我父母を殺し、拘薩羅の王種を斷ず。昔日の怨みを念ずるが故に、即時に劍を拔ゐて王の頭を斷ぜんと欲す。父の往言を念ずるに『怨は輕重無し、報ゆるに足らず、怨を以て怨を除けば、怨は已む時無し。唯無怨有りて怨は自ら除くのみ』と。即ち還劍を內る。時に梵施王驚き覺む。長摩納王に問うて言はく『何が故に驚くや』と。王言はく『拘薩羅王に兒有り、長摩納と字く、劍を拔ゐて我命を斷ぜんと欲す』と。即ち王答へて言はく『今何の處にか長生王の子長摩納有る、唯王と及び我と有るのみ、王唯安眠せよ』と。王第二に眠るに亦是の如し。乃至第三に眠る。長摩納前の如く思惟し、復劍を拔く、王即ち驚き覺む。時に長摩納即ち王の頭を撮る。王言はく『汝我を殺さんと欲するや』と。答へて言はく『爾り』と。『何を以ての故に』と。答へて言はく『我は是れ長生王の子長摩納なり、王は是れ父祖の怨仇、我國土を破り、我父の一切の兵衆庫藏の寶物を奪ひて都て盡く、我父母を殺し、拘薩羅の王種を斷ず、此怨仇を念ずるが故に、是故に王を殺さんと欲するのみ』と。王即ち語りて言はく、『今汝が父祖の兵衆國土一切の珍寶を還さん、我を殺すを得る莫れ』と。答へて言はく『我

當に王命を活かすべし、王も亦我を殺す莫れ」と。王答へて言はく「亦汝の命を赦さん」と。時に彼共に父祖の時の怨を除き、即ち共に和合して猶父子の如し、共に同一乘して波羅㮈國に還る。時に王梵施諸の大臣を集めて是の如きの言を告ぐ「若し長生王の子長摩納を見ば、當に取るべきや云何」と。或は言ふ者有り「之を治めて如是ならしめよ」と。或は言ふ有り「刀を以て之を殺せ」と。或は言ふ有り「之を車轢せよ」と。或は言ふ有り「高く其頭を懸けよ」と。或は言ふ有り「然して炬の如くならしめよ」と。或は言ふ有り「熱油に之を煎よ」と。或は言ふ有り「其身を剗せよ」と。或は言ふ有り「利鉤にて肉を鉤せよ」と。或は言ふ有り「蜜を以て之を煮よ」と。或は言ふ有り「身を纏うて火を放て」と。或は言ふ有り「衣に裹んで之を燒け」と。或は言ふ有り「手を截り脚を截り、耳を截り鼻を截れ」と。或は言ふ「生貫して尖標頭に著けよ」と。或は言ふ「頭を截れ」と。王即ち諸臣に示して言はく「此は是れ長生王の子長摩納なり、自今已去、一切の衆人論說するを得ざれ、何を以ての故に。彼我命を活かせり、我も彼の命を活せり」と。時に王即ち其父の時の兵衆及び一切の國土、庫藏の珍寶を還し、即ち其女を莊嚴して之に與ふと。汝等諸の比丘、彼刀劍を執れる長摩納すら、父祖の怨仇有るも還共に和合すること、猶し父子の如し。汝等出家して道を爲す。同一師同一學にして水乳の和合するが如し、佛法を利益し、安樂に住止せよ。止めよ、諸の比丘、共に鬪諍し、共に相罵詈し誹謗し、互に長短を求むる莫れ、和合して共に諍ふ莫れ、同一師學は水乳の合するが如し、佛法を利益し安樂に住

せよ。」中に異比丘有り、佛に白して言さく、『世尊、但自ら安住したまへ、如來は是れ法主なり、諸の比丘鬪諍の事は自ら當に知るべし。』時に世尊、第二第三拘睒彌比丘に語りたまはく、『止めよ止めよ。共に鬪諍罵詈誹謗して、互に長短を求むる莫れ、和合共住同一師學にして、水乳の合するが如し、佛法を利益し安樂に住せよ。』彼比丘、是の如く言さく、『世尊、但自ら安住したまへ、如來は是れ法主、比丘鬪諍の事自ら當に知るべし。』爾時、拘睒彌の比丘の與に、此偈を說いて言はく、

衆の惡聲流布し、尊上の法を求めず
衆僧を破する時は、亦餘事を以てせず
骨を斷じ生命を害し、牛馬財を盜取し
國土鬪諍して亂るるも、亦還つて和合有り
汝曹種種の罵詈する者、有ることなかるべし
其れ是の如き者有れば、彼の怨終に除かず
種種の惡罵詈も、終に還報を加へざれ
其れ能く忍默すれば、彼の怨は自ら除くを得
怨を以て怨仇を除くも、怨仇は終に除かず
無怨なれば怨自ら息む、其法は勇健にして樂し
亦他をして作さしめず、己身も亦爲さず

能く是の如きを行ず、雨の衆塵を淹すが如し
無堅にして堅牢を說く、堅牢も堅を見ず
彼堅牢を解せず、邪憶念中に墮つ
堅牢にして堅牢を知り、不堅にして不堅を知る
彼堅牢の法を解す、正念中に入る
猶人の箭を執るが如し、執る緩なれば自ら手を傷く
沙門善良ならざれば、地獄を增益す
若し能く箭を執れば、執ること急なるも手を傷けず
沙門善く自ら良ければ、便ち善道に生ずるを得
袈裟服有りと雖も、結使の懷抱し
怨害を除く能はず、彼袈裟に應せず
結使已に除滅すれば、持戒自ら莊嚴し
怨仇を調伏す、彼即ち袈裟に應ず
處處に遍く伴を求むるも、己に稱ふ者有ることなし
寧ろ獨り其心を堅うし、愚者と同じうせず
若し處處に伴を求むるも、已の如き者を得ず
寧ろ獨り自ら善を行ひ、愚惡を伴せず

【一〇】鬪諍比丘に對する扱ひ方を明す。

獨行惡を作す無きこと、山頂の野象の如くなれ
若し審かに善伴を得、共に行ずれば勇健に住す
遊處は諸樂に在り、其心常に歡喜す
若し善伴を得ざれば、獨行常に勇健なり
郡國邑を捨つれば、無事なること野象の如し

（一〇）爾時、世尊、拘睒彌の比丘、鬪諍して共に相誹謗し罵詈して、衆僧惱亂するを以て、世尊喜びたまはず、衆僧及び供養人に語らず、自ら臥具を擧げて本處に著き、衣鉢を執持して、神足力を以て拘睒彌より舍衛國に還りたまふ。時に拘睒彌の諸の優婆塞、世尊の諸の比丘鬪諍して、共に相誹謗罵詈して、僧衆惱亂するを以て、世尊喜びたまはず、衆僧及び供養人に語らずして、自ら臥具を擧げて本處に置き、衣鉢を執持して、神足力を以て、拘睒彌國より舍衛國に還りたまふと聞く。時に諸の優婆塞、自ら共に制限を作す。我等衆人は、都て拘睒彌の比丘を見ては、起つて迎へ、恭敬禮拜問訊語言し、及び衣服飮食病瘦の醫藥を供養すべからず』と。彼諸の比丘は、被擧して住するに似たり。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の沙門外道、悉く皆遠離して、與に語るもの有ること無し。彼諸の鬪諍の比丘、遂に利養有ること無し。是の如きの念を作さく『我等世尊の所に於て、此鬪諍事を滅すべし』と。即ち舍衛國に往く。時に舍利弗、拘睒彌の比丘鬪諍して、共に相誹謗罵詈して、口刀劍の如く、拘睒彌より舍衛國に來ると聞き、即ち五百

の比丘と與に佛所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に住し、世尊に白して言さく、『此拘睒彌の比丘、鬪諍して共に相誹謗罵詈して口刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至す、我曹當に云何がすべき。』佛、舍利弗に告げたまはく、『應に二部の所說を聞くべし。若し比丘如法に語る有らば、則ち應に彼語を受くべし、稱擧長養して、與に伴黨となるべし。』舍利弗、復佛に白して言さく、『云何が彼比丘の、是れ法語非法語を知らん。』佛、舍利弗に告げたまはく、『十八事の破僧有り、法非法、毘尼非毘尼、犯不犯、輕に重と言ひ、有餘無餘、麤惡不麤惡、應行を以て不應行し、制不制、說不說なり。佛、舍利弗に告げたまはく、『汝、此事を觀れば、則ち彼比丘の如法語非法語を知る。』復佛に白して言さく、『云何が拘睒彌比丘に房舍臥具を與へん。』佛、言はく、『應に屏處の房舍臥具を以て與ふべし、若し屏處無ければ、應に屏處を作りて與ふべし。衆僧分臥具法の如き、等しく與へよ。』舍利弗言はく、『衆僧の衣物は、云何が拘睒彌比丘に分を與へん。』佛、言はく、『上座の次に隨つて、到らば應に與ふべし。』舍利弗、佛に白して言さく、『拘睒彌比丘、若し小食に粥を與ふる時は、當に云何が坐すべき。』佛、舍利弗に告げたまはく、『我先に是の如きの語を作さずや、衆僧破して非法に和合すれば、應に身口に惡を生ぜざる處に在りて坐すべし、衆僧破して如法に和合し、事已に滅すれば、應に間の一人の坐處を闕きて坐すべし。』爾時、摩訶波闍波提比丘尼、拘睒彌比丘鬪諍誹謗し、共に相罵詈して、互に長短を求め、拘睒彌より舍衞國に來至すと聞き、即ち五百の比丘尼と俱に世尊の所に詣り、頭面に足を禮し、

【阿難邠坻】アナータピンダダ(Anatha-pindada)給孤獨長者のこと。

却りて一面に住し、佛に白して言さく、『大德、此拘睒彌比丘、鬪諍誹謗して共に相罵詈し、互に長短を求め、拘睒彌より舍衞國に來至すと、我等當に云何がすべき。』佛、瞿曇彌に告げたまはく、『應に二部の語を聽くべし、若し比丘如法に語る者有れば、則ち應に彼の語を受け、稱譽長養して與に伴黨と爲るべし。』復佛に白して言さく、『云何が彼比丘の法語非法語を知らん。』佛、瞿曇彌に告げたまはく、『十八事の破僧有り、法非法乃至說不說上の如し。汝、此事を觀ば、則ち彼比丘の如法語非法語を知らん。瞿曇彌比丘尼、應に衆僧に從うて教授を乞ひ、如法比丘部の中に在りて求むべし。』爾時、阿難邠坻、拘睒彌比丘の鬪諍誹謗して相罵詈し、互に長短を求めて口刀劍の如く、拘睒彌より舍衞國に來至すと聞き、五百の優婆塞と倶に世尊の所に詣り、頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、佛に白し言さく、『拘睒彌の比丘、鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求め、口刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至すと、我等當に云何がすべき。』佛、言はく、『應に二部の語を聽くべし、上の如し。若し檀越の布施有らば、應に分ちて二分を作すべし、此も亦是れ僧、彼も亦是れ僧なり。居士、金杖を破して二分と爲すが如し、二倶に是れ金なり。是の如く居士、布施物は應に分ちて二分と爲すべし、此も亦僧、彼も亦僧なり。』爾時、毘舍佉無夷羅母、拘睒彌の比丘、鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求め、口刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至すと聞き、五百の優婆私と倶に世尊の所に詣り、頭面に足を禮して却りて一面に住し、佛に白して言さく、『拘睒彌比丘、鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求め、口

【二】鬪諍比丘の懺悔法を明す。

刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至すと、我等當に云何がすべき。』佛、言はく、『應に彼二部の所說を聽くべし、上の如し、若し布施の衣物有らば、應に分ちて二分と爲すべし、此も亦僧、彼も亦僧なり、金杖を破して二分と爲すが如し、彼此是れ金なり。若し布施の衣物有らば、應に分ちて二分と爲すべし、此も亦僧、彼も亦僧なり。』

(二)爾時、被擧比丘道路に行き、靜處に心自ら念じて言はく、『我此諍事、當に修多羅、毘尼、阿毘曇を引いて佛法を檢校すべし、是擧か非擧か是れ如法擧にして羯磨成就すとせんや、是れ不如法擧にして羯磨成就せずとせんや。』時に卽ち修多羅、毘尼、阿毘曇を看て、佛の法律を檢校して是念を作さく、『是れ犯にして不犯と爲すに非ず、是れ擧にして不擧と爲すに非ず、如法擧にして羯磨成就す、不如法擧にして羯磨成就せずと爲すに非ず。』彼卽ち隨擧比丘の所に至り、是の如きの言を作さく、『我道路に在りて行く、靜處に在りて思惟して是念を作さく、「我今此鬪諍の事、是れ犯か是れ非犯か」と。卽ち修多羅、毘尼、阿毘曇を看て佛の法律を檢校するに、是れ犯にして不犯と爲すに非ず、是れ擧にして不擧と爲すに非ず、如法擧にして羯磨成就す、不如法擧にして羯磨成就せずと爲すに非ず。』時に隨擧の比丘、卽ち被擧の比丘を將ゐ、擧罪の比丘の所に至りて白して言はく、『此被擧の比丘、我に語りて是の如く言ふ、道路に在りて行き、靜處に思惟して心に自ら念じて言はく、上の所說の如し』と。爾時、擧罪の比丘卽ち隨擧の比丘、被擧の比丘を將ゐて世尊の所に詣り、頭面に足を禮し已りて、卻りて一面に坐し、佛に白して言さく、『此隨擧の比丘、被擧の比

丘を將ゐて我所に來至し、被擧の比丘の因緣を以て具に我に向つて說く、今卽ち復此因緣を以て具に世尊に白す。』世尊、諸の比丘に告げたまはく、『是れ犯にして不犯に非ず、是れ擧にして不擧に非ず、如法擧にして此比丘の羯磨成就す、若し彼比丘、衆僧に順從にして、懺悔改過し、不見羯磨を解かんと求索すれば、卽ち應に白四羯磨すべし、應に是の如く解くべし。應に僧中に至り、偏に右の肩を露し、革屣を脫し僧足を禮し、已りて右膝地に著け、合掌して是の如きの言を白す、「大德僧聽け、我某甲比丘、僧我を擧して不見羯磨を作す。我今衆僧に順從し改過懺悔す、不見羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧慈愍の故に我爲に解け」と。是の如く第二第三說く。是中應に能く羯磨を作すに堪能なる者を差すべし、若は上座、若は次座、若は誦律、若は不誦律なり。羯磨を能くする者是の如く白さく、『大德僧聽け、此某甲比丘、僧不見羯磨を作す、今衆僧に順從して改過懺悔し、不見羯磨を解かんと乞ふ。若し僧時到らば、僧某甲比丘に、與に不見羯磨を解くを忍聽せよ、白是の如しと。大德僧聽け、某甲比丘、僧與に不見羯磨を作す、彼衆僧に順從して改過懺悔す、今僧に求めて不見擧羯磨を解かんと乞ふ、誰か諸の長老、彼某甲比丘の不見擧羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說けと。』是れ第一羯磨なり、是の如く第二第三說く。僧已に某甲比丘の爲に、不見擧羯磨を解くを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。佛、言はく、『白羯磨和合を作すを聽す。應に是の如く白すべし。「大德僧聽け、所因の事、僧をして鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求めしむ。彼人の

【二二】五種犯罪並に其料理法に就て

犯事擧せられ、今已に還解き已る、僧の塵垢を滅す、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧和合を作すを、白すること是の如し」と。應に是の如きの白和合を作すべし。』時に優波離座より起ちて、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、右膝を地に著け、合掌して世尊に白して言さく、「所因の事、僧をして鬪諍誹謗し、罵詈して互に長短を求めしめ、僧をして破せしめ、僧をして別異に住せしめ、僧をして塵垢せしむ。彼事未だ料理せず、未だ處分せず、未だ僧の塵垢の滅せざるに、頗し如法に和合するを得るや不や。」佛、言はく、『如法に和合するを得ず、優波離、彼所因の諍事、僧をして鬪諍誹謗し、互に長短を求めしめ、僧をして破せしめ、僧をして別住せしめ、僧をして塵垢せしむ。彼諍事已に料理し、已に分處し、已に僧の塵垢を滅し、如法に和合するを得たり。』佛、言はく、『白今已去、白羯磨和合布薩を作すを聽す、應に是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、彼所因の事、僧をして鬪諍誹謗し、罵詈して互に長短を求めしめ、僧をして破せしめ、僧をして別住せしめ、僧をして塵垢せしむ。彼人は僧爲に擧罪を作し已りて還解を爲し、已りて僧の塵垢を滅す。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧和合布薩を作すを、白すること是の如し」と。應に是の如く白し已りて和合布薩すべし。』

（二二）爾時、佛、優波離に告げたまはく、『五種の犯罪人有り、何等か五なる。比丘是の如く犯罪す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。彼れ此比丘に語りて言はく、「若し此罪を見ば、應に懺悔すべし」と。此は是れ第一の犯罪人なり。比丘是の如く罪を犯す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答

【阿菟婆陀】アヌッパダ（Anupada）隨喜と譯す。僧の布薩等に於ける一定の時以外の時にする集會をいふ。

へて言はく「見ず」と。彼比丘言はく「汝若し罪を見ば、應に僧中に懺悔すべし」と。是れ第二の犯罪人なり。比丘是の如きの罪を犯す、餘の比丘語りて言はく「汝罪を犯す、見るや不や」と。彼比丘言はく「見ず」と。彼比丘言はく「汝若し罪を見ば、當に此僧中に於て懺悔すべし」と。是れ第三犯罪人なり。比丘是の如く罪を犯す。餘の比丘語りて言はく「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく「見ず」と。衆僧應に捨棄して問ふ無く、是の如きの言を語るべし。汝今罪を見ず、汝所往の處、彼も亦當に汝の罪を擧し、汝が爲に白言を作すべし「汝に阿菟婆陀を作すを聽さず、布薩自恣を聽さず。調馬師の惡馬の調し難きは、即ち所繫の杙を合せて之を棄つるが如し。汝比丘も自ら罪を見ざる、亦復是の如し、一切捨棄す、汝所往の處、乃至汝の布薩自恣を聽さず、是の如き人は求聽に從ふべからず、是の如きは此れ即ち是れ聽なり、此は是れ第四の犯罪人なり。比丘是の如く罪を犯す。餘の比丘語りて言はく「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく「見ず」と。彼應に衆僧中に、不見擧白四羯磨を作すべし。此は是れ第五の犯罪人なり。」時に長老優波離、座より起ちて偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『幾法有りて、應に料理事人と作すを得べき。』佛言はく、『五法有り、應に料理すべし。何等か五なる。事を作さんと欲する比丘、應に此事實なりやを觀察すべし。或は事不實なる有り、彼比丘、若し此事不實なりと知らば作すべからず。彼比丘、若し此事實なりと知らば、應に更に、此事利益有りや、利益無きやを觀察すべし。或は事の利益無き

有り、彼比丘若し此事利益無しと知らば作すべからず。若し比丘、此事利益有りと知らば、應に更に時作と非時作とを觀察すべし。或は事の非時作なる有り、彼比丘、若し是事非時作と知れば作すべからず、彼比丘若し此事是れ時作と知れば、更に重ねて觀察すべし、若し此事を作し、僧をして鬪諍誹謗して言はしめ、僧をして破せしめ、僧をして別住せしめ、僧をして塵垢せしむるか、僧をして鬪諍せしめず、乃至僧をして塵垢せしめずと爲んやと、若し彼比丘、事を作して僧をして鬪諍せしめ、乃至僧をして塵垢せしむと知らば作すべからず、若し比丘、事を作して僧をして鬪諍せしめず、乃至僧をして塵垢せしめずんば、彼比丘應に重ねて更に觀察すべし。若し比丘事を作して伴黨を得と爲んや、伴黨を得ざるやと。或は事を作して、比丘の伴黨を得ざる有り、彼比丘、若し事を作して、比丘の伴黨を得ずと知らば、作すべからず、彼比丘若し比丘の伴黨を得と知らば、應に時を知るべし、好心善念して應に作すべし。優波離、比丘此五法を知らば、應に料理事人と作すを得べし。爾時、優波離、即ち座より起ちて、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひて偈を說いて言はく、

　僧の爲に此語を說く、　義利決定するが故に
　云何が勝を知るを得、　比丘堅持するを得ん

爾時、世尊、偈を說いて優波離に答へて言はく、

　第一に持戒して毀壞せず、　比丘の威儀自ら身を端うす
　怨家も如法に呵する能はず、　彼能く是他の無語を得

彼是の如き淸淨戒に住し、無畏を得て說き疑難無し
衆に在りて怖れず變異無し、義を失はず問に隨うて答ふ
是の如く衆中にして義を問ふ、卒答不思にして憂慮無し
時に隨つて義を問ふに皆能く答ふ、諸問に應答して心異無し
長老と諸の比丘、上座中座及び下座を恭敬し
能く因本を說き善く分別し、諸の怨家欺詐の語を解く
怨家も其勝を得る能はず、亦能く多人を調伏す
常に師となり敎へて虧かず、智慧を莊嚴し衆の可する所なり
若し是の如き事を犯す、犯さざれば罪除くを得
此垢二俱に知る、垢を知れば懺悔して除く
悔いざれば衆に遣され、若し悔ゆれば衆驅らず
是の如き人は應に勸むべし、分別して是の如く知る
信有れば卽ち能く受け、僧の爲の故に而も遣す
衆遣せば能く語を用ふ、能く作して自ら高ぶらず
恭敬す長老と、上中及び下座と
智慧は利益多し、是人能く法を護す　拘睒彌犍度具足し竟る。

四分律卷第四十三

四分律　卷第四十四　三分之八

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

瞻波犍度第十

（一）爾時、世尊、瞻波城伽尸國婆婆婆聚落し在したまふ。時に異住處に舊比丘有り、常に業人に接して猶し泉水の如し、是の如きの言を作さく、「若し未だ來らざる客比丘には、我當に所須を供給すべし、爲に洗浴飲食の供養を作さん」。時に衆多の比丘あり、伽尸國に在りて人間に遊行し、婆婆婆聚落に至る。時に彼比丘、即ち所須の食飲を供給して供養す。彼比丘、異時に是の如きの念を作さく、「我能く常に白衣より飲食供具を乞索し、洗浴を作し、粥を作りて供養する能はず。此客比丘、道路遠くより來る、今已は懈怠す。本未だ知識あらず、今已に知識あり、我今寧ろ復求索すべからず」と。是に於て即ち止む。彼客比丘是念を作さく、「此比丘、我曹を憎む、本我所須の飲食洗浴の具を供給す、今止めて復我に與へず、我等寧ろ此比丘を擧すべきや」と。即ち和合して此比丘を擧す。彼比丘是念を作さく、「我今自ら是れ犯か非犯か、是れ擧か非擧か、如法擧羯磨成就とせんや、不如法擧羯磨不成就とせんやを知る能はず、我今寧ろ瞻波の世尊の所に往き、此因緣を以て具に世尊に

【一】瞻波犍度とはチャムパイ(Campā)國(中印度、恒河畔)に在て羯磨法の如非を明せるもの、二十犍度中の第十犍度である。今、如法非法の各種羯磨を明す。

白すべし、世尊若し言教あらば、世尊の教へたまふ所に隨つて、我當に施行すべし』と。爾時、此舊比丘、衣鉢を持して瞻婆に詣り、世尊の所に往き、頭面に禮を作し已りて、却りて一面に住す。爾時、世尊、客比丘を慰勞したまはく、『乞求得易きや不や、住止和合するや不や、道路疲極せざるや不や。』答へて言はく、『住止和合し乞求得易し、道路疲極せず。』『汝比丘何所より來る。』彼比丘言はく、『我伽尸國の婆娑婆聚落に在り、異住處に於ける舊比丘なり、常に衆客に接す、所須猶し泉水の如し。若し未だ來らざる客比丘ありて來らば、所須の飲食、若は作粥、洗浴の具を供給せん」と。後に衆多の比丘あり、伽尸國に在りて人間に遊行し、婆娑婆聚落に至る。我時に即ち所須の飲食、若は作粥、洗浴の具を供給す。大德、我時に是の如きの念を作さく、「我常に白衣の家に至りて、飲食所須の具を乞索する能はず、此諸の比丘は今已に懈息す、本未だ知識あらず、今已に知識あり、我今寧ろ復求索せざるべし」と。是に於て即ち止む。彼客比丘是の如きの語を作さく、「舊比丘我等を憎む、先に常に我所須の飲食作粥洗浴の具を供給す、今復供給せず、我曹寧ろ彼比丘の罪を擧すべし」と、即ち共に和合して共に擧す。大德、我是の如きの念を作さく、「是れ犯か非犯か、是擧か非擧か、是れ如法擧羯磨成就とせんや、是れ不如法擧羯磨不成就とせんやを知る能はず、我寧ろ瞻婆往き、世尊の所に詣り、此因縁を以て具に世尊に白すべし、世尊若し言教あらば、世尊の教に隨つて施行せん」と。』佛、彼比丘に告げたまはく、『汝比丘は無犯なり。非犯非擧不成擧非法擧なり、汝比丘の羯磨は成就せず、汝比丘

還り去りて、婆娑婆聚落に至るべし。還りて衆客の所須を供給すること猶し泉水の如くせよ、比丘、我汝と共に伴と作らん、如法にして不如法にあらず。」時に彼客比丘、婆娑婆聚落より人間に遊行し、伽尸國に至りて世尊の所に往き、頭面に足を禮して却りて一面に住す。爾時、世尊、客比丘を慰勞したまはく、「汝曹住止和合するや不や、乞食を以て疲苦とせざるや。」彼比丘答へて言はく、『住止和合す、乞食を以て苦と爲さず。』問うて言はく、『汝何所より來る。』答へて言はく、『我婆娑婆聚落より來る。』問うて言はく、『彼に頗し舊比丘の常に衆客の所須を供給すること、猶し泉の如きあり、汝等擧するや。』答へて言はく、『實に擧す。』世尊、佛問うて言はく、『汝等何事を以ての故に擧する。』答へて言はく、『事無く緣無し。』爾時、世尊、無數方便を以て彼比丘を呵責したまはく、『汝の所爲は非なり、威儀にあらず、沙門の法にあらず、淨行にあらず、隨順行にあらず、應に爲すべからざる所なり、云何が癡人、舊比丘の客比丘に供給すること猶し泉水の如し、而も汝等事無くして而も擧するや。』爾時、世尊、比丘を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『四の羯磨あり、非法羯磨、非法別衆羯磨、非法和合羯磨、法別衆羯磨なり。是中の二羯磨、非法羯磨、別衆羯磨は作すべからず、若し作せば法の如く治す。法羯磨、和合羯磨は作すべし。四の滿數あり、人あり、滿數を得れば呵すべからず、人あり、滿數を得ざれば呵すべし。人あり、滿數を得ざるも亦呵すべからず、人あり、滿數を得るも亦呵すべし。何等か人滿數を得れば呵すべからざる。若し呵責羯磨、擯羯磨、依止羯磨、遮不至白衣家

羯磨を作さんに、彼人、滿數を得れば呵すべからず。何等か人滿數を得ざれば應に呵すべき。若し大戒を受けんと欲する人は、此人、滿數を得ざれば呵するを得。何等か人滿數を得ざるも亦呵するを得ざる。若し比丘の爲に羯磨を作さんに、比丘尼、滿數を得ざるも呵することを得ず。式叉摩那沙彌沙彌尼、若は言はく邊罪を犯す、若は比丘尼を犯す、若は僧を破す、若は惡心にて佛身より血を出す、若は非人畜生、若は二根、若は被擧、若は滅擯、若は應滅擯、若は別住、若は戒場上にあり、若は神足空に在り、若は隱沒、若は見聞處を離る、若は爲に羯磨を作す所の人、是の如き等の人は、滿數を得ざるも呵すべからず。何等か人滿數を得るも亦呵するを得る。若し善比丘、同一界に住し、神足を以て空にあらず、隱沒せず、見聞處を離れず、乃至傍人に語る、是の如き等は、人滿數を得るも呵すべし。』

時に六群比丘、一人にして一人を擧し、一人にして二人を擧し、或は三人を擧し、或は僧を擧す。二人にして一人を擧し、二人にして二人を擧し、或は三人を擧し、或は僧を擧す。三人にして一人を擧し、或は二人を擧し、或は三人を擧し、或は僧を擧す。僧僧を擧す。

諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『一人にして一人を擧し、二人三人にして僧を擧するを得ず。二人にして一人二人三人を擧し、僧を擧するを得ず。三人にして一人二人三人を擧し、僧を擧するを得ず、僧僧を擧するを得ず。若し一人にして一人を擧すれば、非法羯磨、非毘尼羯磨なり、爾すべからず。若は一人にして二人三人僧を擧し、若は二人にして

一人二人三人僧を擧し、若は三人にして一人を擧し、二人を擧し、三人を擧し、僧を擧し、僧僧を擧すれば、非法羯磨、非毘尼羯磨なり、爾すべからず。爾時、六群比丘、重ねて羯磨を作し、呵責羯磨を作し已りて復擯羯磨を作し、依止を作し、遮不至白衣家を作し、爲に擧を作し、爲に波利婆婆を作し、爲に本日治を作し、摩那埵を與へ、阿浮呵那を與へ、現前毘尼を與へ、憶念毘尼を與へ、不癡毘尼を與へ、自言治を與へ、爲に多覓罪を作し、爲に多覓罪相を作し、如草覆地を與ふ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「重ねて羯磨を作すべからず。呵責羯磨を作し已りて、復擯羯磨乃至如草覆地を作すべからず。」爾時、佛、諸の比丘に告げたまはく、「四種の僧あり、四人僧、五人僧、十人僧、二十人僧なり、是中四人僧とは、自恣と受大戒と出罪とを除き、餘の一切の如法羯磨は應に作すべし。是中の五人僧とは、中國に在りて、受大戒と出罪とを除き、餘の一切如法の羯磨は應に作すべし。是中の十人僧とは、出罪を除いて、餘の一切の如法羯磨は應に作すべし。是中の二十人僧とは、一切の羯磨は應に作すべし。況んや復二十を過ぐるをや。若し四人羯磨すべきは、四人に一人を少き羯磨を作さば、非法非毘尼羯磨なり。若し比丘尼を以て第四人と爲し、若は式叉摩那、沙彌、沙彌尼を以てし、若は邊罪を犯す、若は比丘尼を犯す、若は賊心受戒、若は壞二道、若は黃門、若は父母を殺し、阿羅漢を殺し、悪心出佛身血、若は非人、若は畜生、若は二根、若は被擧、若は滅擯、若は應滅擯、所爲作羯磨人と言ふ、是の如きの人を以て、足して四人を滿ずれば、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。五人僧、

十人僧、二十人僧も亦是の如し。』爾時、六群比丘、非法非毘尼羯磨を作し、彼れ非法別衆羯磨、非法和合羯磨、法別衆羯磨、法相似別衆羯磨、法相似和合羯磨を作し、呵不止羯磨を作す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨を作すべからず、非法別衆羯磨を作すべからず、非法和合羯磨を作すべからず、法別衆羯磨を作すべからず、法相似別衆羯磨を作すべからず、法相似和合羯磨を作すべからず、呵不止羯磨を作すべからず。云何が非法非毘尼羯磨、白二羯磨に、白を作し已つて羯磨を作さず、是を非法非毘尼羯磨と名く、爾すべからず。二白を作して羯磨を作さず、三白を作して羯磨を作さず、衆多白を作して羯磨を作さざるは非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に、一白二羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一白三羯磨、一白衆多羯磨を作し、二白一羯磨を作し、二白二羯磨を作し、二白三羯磨を作し、二白衆多羯磨を作し、三白一羯磨を作し、三白二羯磨を作し、三白三羯磨を作し、三白衆多羯磨を作し、衆多白一羯磨を作し、衆多白二羯磨を作し、衆多白三羯磨を作し、衆多白衆多羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に一羯磨を作して白を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。二羯磨を作して白を作さず、三羯磨を作して白を作さず、衆多羯磨を作して白を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に、一羯磨二白を作すは非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一羯磨三白を作し、一羯磨衆多白を作し、二羯磨一白を作し、二羯磨二白を作し、二羯磨三白を作し、二羯磨衆多白を作し、三羯磨一白を作

し、三羯磨二白を作し、三羯磨三白を作し、三羯磨衆多白を作し、衆多羯磨一白を作し、衆多羯磨二白を作し、衆多羯磨三白を作し、衆多羯磨衆多白を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に、不如白法に白を作し、不如羯磨法に羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白四羯磨に、一白を作して羯磨を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。二白を作して羯磨を作さず、三白を作して羯磨を作さず、衆多白を作して羯磨を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一白一羯磨を作し、一白二羯磨を作し、一白衆多羯磨を作し、二白一羯磨を作し、二白二羯磨を作し、二白三羯磨を作し、二白衆多羯磨を作し、三白一羯磨を作し、三白二羯磨を作し、三白三羯磨を作し、三白多羯磨を作し、衆多白一羯磨を作し、衆多白二羯磨を作し、衆多白三羯磨を作し、衆多白衆多羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白四羯磨に、一羯磨を作して白を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。二羯磨を作して白を作さず、三羯磨を作して白を作さず、衆多羯磨を作して白を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一羯磨一白を作し、一羯磨二白を作し、一羯磨三白を作し、一羯磨衆多白を作し、二羯磨一白を作し、二羯磨二白を作し、二羯磨三白を作し、二羯磨衆多白を作し、三羯磨二白を作し、三羯磨三白を作し、三羯磨衆多白を作し、衆多羯磨一白を作し、衆多羯磨二白を作し、衆多羯磨三白を作し、衆多羯磨衆多白を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白四羯磨を作すに、不如白法にて白を作し、不如三羯磨法にて羯磨を

作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。是中に比丘あり、無罪を見る。餘の比丘語りて言はく、『汝罪を見るや不や。』答へて言はく、『見ず。』彼れ即ち不見罪羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、懺悔罪無し、體の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、懺悔すべし。』答へて言はく、『我懺悔せず。』彼即ち擧して不懺悔羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、惡見無ければ捨てず、餘の比丘語りて言はく、『汝惡見有り、應に捨つべし。』答へて言はく、『我捨てず。』彼即ち擧して惡見不捨羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、無罪を見、罪の懺悔する無し。餘の比丘語りて言はく、『汝罪を見るや不や、汝應に懺悔すべし。』答へて言はく、『我罪を見ず、我懺悔せず。』彼即ち擧して不見罪不懺悔羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、無罪を見、惡見無し、捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あるを見る、惡見應に捨つべし。』答へて言はく、『我罪を見ず、惡見無ければ捨てず。』彼即ち不見罪惡見不捨羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪の懺悔する無し、惡見無ければ捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有り、應に懺悔すべし、惡見を捨てよ。』答へて言はく、『我懺悔せず、我惡見無ければ捨てず。』彼れ即ち擧して、不懺悔不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪有るを見る。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あり、見るや不

や。」答へて言はく、『見る。』彼れ即ち擧して不見罪羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪有りて懺悔す。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有り、應に懺悔すべし。』答へて言はく、『我當に懺悔すべし。』彼れ即ち擧して不懺悔羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、惡見有りて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝惡見有り、應に捨つべし。』答へて言はく、『當に捨つべし。』彼れ即ち擧して不捨惡見羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪有るを見る、罪有るは應に懺悔すべし。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有るを見る、應に懺悔すべし。』答へて言はく、『我罪を見る、當に懺悔すべし。』彼れ即ち擧して、不見罪不懺悔羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪有るを見る、惡見有りて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有るを見る、惡見應に捨つべし。』答へて言はく、『我罪を見る、當に惡見を捨つべし。』彼比丘即ち擧して、不見罪惡見不捨羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪有りて懺悔し、惡見有りて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有り、懺悔すべし、惡見當に捨つべし。』答へて言はく、『我當に懺悔すべし、當に惡見を捨つべし。』彼即ち擧して不懺悔不捨惡見羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是中に比丘有り、罪有るを見て懺悔し、惡見捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪を見る、當に懺悔すべし、惡見應に捨つべし。』答へて言はく、『我

罪を見る、當に懺悔し、惡見を捨つべし。』彼れ卽ち擧して不見罪不懺悔不捨惡見羯磨を作す。佛、言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。』是を非法非毘尼羯磨と爲す。『云何が如法如毘尼羯磨なる。白二羯磨に、白法の如く白を作し、羯磨法の如く羯磨を作す、如法如毘尼羯磨なり、應に爾すべし。白四羯磨に、白法の如く白を作し、三羯磨法の如く羯磨を作すは、如法如毘尼羯磨なり、應に爾すべし。』是中に比丘有り、罪有るを見る。餘の比丘問うて言はく、『汝罪有り、見るや不や。』答へて言はく、『見ず。』彼卽ち擧して不見罪羯磨を作す。佛、言はく、『如法如毘尼羯磨なり、當に爾すべし。』是中に比丘有り、罪有りて應に懺悔すべし。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有り、應に懺悔すべし。』答へて言はく、『我懺悔せず。』彼卽ち擧して不懺悔羯磨を作す。佛、言はく、『如法如毘尼羯磨なり、爾すべし。』是中に比丘有り、惡見にして捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝惡見有り、應に捨つべし。』答へて言はく、『捨てず。』彼卽ち擧して惡見不捨羯磨を作す。佛、言はく、『如法如毘尼羯磨なり、應に爾すべし。』是中に比丘有り、罪有るを見、罪有り、懺悔する有り。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有るを見る、罪有り、懺悔せよ。』答へて言はく、『見ず、懺悔せず。』彼卽ち其所犯の如く、不見罪、不懺悔羯磨を作す。佛、言はく、『如法如毘尼羯磨なり、應に爾すべし。』是中に比丘有り、罪有るを見、惡見有りて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有り、惡見有り、應に捨つべし。』答へて言はく、『我罪を見ず、惡見は捨てず。』彼れ卽ち其所犯の罪の如く、爲に不見罪、惡見不捨羯磨を作す。佛

言はく、『如法毘尼羯磨なり、應に爾すべし。』是中に比丘有り、罪有り、懺悔する有り、惡見捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有り、懺悔すべし、惡見當に捨つべし。』答へて言はく、『我懺悔せず、惡見を捨てず。』彼卽ち其所犯の如く、不懺悔、不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『如法毘尼羯磨なり、應に爾すべし。』是中に比丘有り、罪有るを見、懺悔する有り、惡見捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪有るを見る、應に懺悔すべし、惡見應に捨つべし。』答へて言はく、『我罪を見ず、懺悔せず、惡見を捨てず。』彼れ卽ち所犯の罪の如く、不見罪、不懺悔、不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『如法毘尼羯磨なり、應に爾すべし。』是を如法毘尼羯磨と爲す。云何が非法別衆羯磨。同一住處に羯磨の時、來らざる者有れば應に欲を與ふべし、而も欲を與へず、現前に在りて呵すべき者は便ち呵す。彼白二羯磨を作し、白四羯磨を作し、此事を白して乃ち彼事の爲に羯磨を作す、是を非法別衆羯磨と爲す。云何が非法和合羯磨。同一住處に在りて、和合して一處に羯磨する時、來らざる有り、應に欲を與ふべき者は欲を與ふ。現在前に在りて呵を得べき者を呵せず、白二羯磨を作し、白四羯磨を作し、此事を白して、乃ち彼事の爲に羯磨を作す。是を非法和合羯磨と作す。云何が法別衆羯磨。同一住處に羯磨する時、來らざる者有り、應に欲を與ふべきに欲を與へず、現前に在りて呵を得べき者は彼を呵し、白二白四羯磨を作し、如法に作す、是を法別衆羯磨と爲す。云何が法相似別衆羯磨、同一住處に羯磨の時、來らざる者有り、應に欲を與ふべきに欲を與へず、現前に在りて呵すべき者は呵し、白二白四

羯磨を作し、前に羯磨を作して後に白を作す、是を法相似別衆羯磨と爲す。云何が法相似和合羯磨。同一住處に羯磨の時、來らざる者有り、欲を與ふべき者は欲を與ふ、現前に在りて呵を得べき者を呵せず、白二白四羯磨し、前に羯磨を作し、後に白を作す、是を法相似和合羯磨と爲す。何等の人か呵責を作して呵を成ずる。或は人有り、呵して呵を成ず、或は人有り、呵して呵を成ぜず。何者か呵して呵を成ぜざる。比丘の爲に羯磨を作すに、比丘尼呵して呵を成ぜず。式叉摩那、沙彌、沙彌尼、若は邊罪を犯し、比丘尼を犯し、或は賊心受戒、或は壞二道、黃門、殺父母、殺阿羅漢、惡心佛身出血、破和合僧、非人、畜生、二根、若は被擧、若は滅擯、若は應滅擯、若は戒場上に在り、若は別住を作す、若は神足を以て空に在り、若は隱沒、若は離見聞處、若は所爲作羯磨人と言ふ、是の如き人は、呵して呵を成ぜず。云何が呵して呵を成ずる。若し善比丘、同一界內に在りて住し、空に在らず、隱沒せず、見聞處を離れず、乃至比丘に語る。是の如き人は、呵して呵を成ず。是を呵羯磨と爲す。『爾時、優波離、座より起ち、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、「應に呵責羯磨を作すべきに、乃ち爲に擯羯磨を作さば、如法如毘尼羯磨なりや不や。」佛、優波離に語りたまはく、「此れ不如法羯磨なり。」優波離、復佛に白して言さく、「應に爲に、呵責羯磨を作すべきに、乃ち爲に依止羯磨を作し、若は乃ち遮不至白家家羯磨、乃至如覆草地を作すは、是れ如法如毘尼羯磨なりや不や。」佛言はく、「不如法なり、爲に呵責羯磨を作すに、乃ち擯羯磨乃至如草覆地を作すべからず、非

法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。是の如く展轉して、乃ち如草覆地に至るは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。」佛、優波離に語りたまはく、「若し呵責羯磨をなすべきに、爲に呵責羯磨を作すは、此は是れ如法如毘尼羯磨なり、應に爾すべし。是の如く乃ち如草覆地羯磨に至るまで、如法如毘尼羯磨なり、應に爾すべし。」爾時、異住處有り、衆僧比丘の爲に呵責羯磨を作し、乃ち非法別衆羯磨を作す。餘の衆僧、彼衆僧の、比丘の爲に呵責羯磨を作し、乃ち非法別衆羯磨を作し、羯磨成ぜずと聞き、我曹當に呵責羯磨を作すべしと、即ち呵責羯磨を作し、非法和合なり。復餘處の僧有り、彼衆僧比丘の爲に呵責羯磨を作し、非法和合にして羯磨成ぜずと聞き、我曹當に爲に呵責羯磨を作すべしと、彼即ち呵責羯磨を作し、法別衆なり。餘處の僧、彼衆僧比丘の爲に呵責羯磨を作し、法別衆羯磨にして羯磨成ぜずと聞き、我曹當に爲に呵責羯磨を作すべしと、即ち呵責羯磨を作す、法相似別衆なり。餘處の僧、彼衆僧比丘の爲に呵責羯磨を作し、法相似別衆にして羯磨成ぜずと聞き、我曹當に爲に呵責羯磨を作すべしと。法相似和合羯磨なり。彼比丘是の如きの念を作さく、『我當に云何がすべき』と。即ち諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『諸の是の如き不如法羯磨は成就せず、是の如き一切の羯磨に亦成就せず。』爾時、住處有り、衆僧比丘の爲に非法別衆羯磨を作す。爾時、衆多の僧皆共に諍ふ。或は言はく『非法別衆羯磨なり。』或は言はく、『非法和合なり。』或は言はく、『法別衆なり。』或は言はく、『法相似別衆なり。』或は言はく、『法相似和合なり。』或は言はく、『羯磨成就す。』或

【法語】五人の異說と成不成の七人の中非法別衆と不成との二人についていふ。而し全體を非法とすることの正しきについてここに法語と言つたのである。
【十三種の人】邊罪乃至二根までの十三難ある人。
【驅出】擯出のこと。

は言はく、『成就せず。』諸の比丘云何せんを知らず、餘の比丘に告ぐ。餘の比丘、往いて佛に白す。佛、言はく、『彼住處の衆僧、比丘の爲に呵責羯磨を作して非法別衆なり。是中の衆多僧、各共に諍ひ、或は言はく、「非法別衆」と、或は言はく、「非法和合」と、乃至「成ず」「成ぜず」と言ふ。是中の僧非法別衆と言ふ者は、此は是れ法語なり、乃至法相似和合とは、此れ亦是の如く、是れ法語なり。』

爾時、優波離、座より起ちて偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『若し比丘有り、僧先に羯磨を與へ、後に衆僧解を與ふ、解を成ずるや成ぜざるや。』佛、優波離に語りたまはく、『或は成じ、或は成ぜず。』復問ふ、『云何が成じ成ぜざる。』佛、優波離に告げたまはく、『十三種の人有り、僧先に爲に羯磨を作せば、解を成ぜず、此十三種人を除き已れば、餘人の爲に羯磨を作し已り、若し僧解を與ふれば、解を成ずるを得。』優波離、復佛に問ふ、『若し僧先に羯磨を作し、解羯磨を爲し已りて、驅出すれば、驅出を成ずるや、成ぜずとせんや。』佛、言はく、『或は驅出を成ずる有り、或は驅出を成ぜざる有り、若し十三種人の爲に羯磨を作し已りて驅出を成ず、此十三種を除き、餘人の爲に羯磨を作し、後羯磨を解かば解くを得、若し驅出すれば驅出を成ぜず。』

瞻波犍度具足し竟る。

【二】此揵度には比丘の治罰を明す二十揵度中の第十一揵度。先づ二比丘の鬪諍を擧げて呵責羯磨を說く。

呵責揵度第十一之一

(二)爾時、佛、舍衛國に在したまふ。二比丘有り、一を智慧と名け、二を盧醯那と名く。鬪諍を憙みて共に相罵詈し、口刀劍を出し、互に長短を求む。彼自ら共に鬪諍罵詈し、若し復餘の比丘有りて鬪諍すれば、卽ち復彼に往いて勸めて言はく、「汝等好く自ら勉力して他に如かざる莫れ、汝等多聞にして、智慧財富も亦勝れ、多くの知識有り、我等汝が爲に伴黨と作らん。」是中の衆僧未だ諍事有らざるに便ち諍事有り、已に諍事有れば、而も除滅せず。諸の比丘是の如きの念を作さく、『何の因緣を以てか衆僧未だ諍事有らざるに、諍事をして起らしめ、已に諍事有れば、而も除滅せざる』と。諸の比丘、卽ち此二比丘、智慧と盧醯那と、憙んで共に鬪諍し、共に相罵詈して口より刀劍を出し、互に長短を求めて自ら共に鬪諍罵詈し、若し餘の比丘有りて鬪諍すれば、卽ち彼に往いて勸めて言はく、『汝等好く自ら勉力して他に如かざる莫れ、汝等多聞にして智慧財富も亦勝れ、多く知識あり、「我等當に汝が爲に伴黨と作るべし」と、是故に僧未だ諍事有らざるに便ち諍事有り、已に諍事有れば、而も除滅せざるを知る。時に衆中に比丘有りて聞く。少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんと樂ふ者なり。彼二比丘を嫌責し已りて、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を

以て比丘僧を集め、彼二比丘を呵責したまはく、「汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、應に爲すべからざる所なり。云何が智慧と盧醯那、共に相鬪諍罵詈して、口より刀劍を出し、互に長短を求め、僧未だ諍事有らざるに、而も諍事有り、已に諍事有れば、而も除滅せざらしむる。」世尊無數方便を以て呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『諸の比丘、智慧と盧醯那の爲に、呵責白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて、智慧等の爲に擧を作し、擧を作し已りて、爲に憶念を作し、憶念を作し已りて應に罪を與ふべし。衆中應に能く羯磨を作すに堪へたる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。大德僧聽け、此智慧と盧醯那の二比丘は、憙んで共に鬪諍し、共に相罵詈して、口に刀劍を出し、互に長短を求む。彼自ら共に鬪諍し已りて、若し復餘の比丘有りて鬪諍すれば、即ち復彼に往いて勸めて言はく、「汝等勉力して他に如かざる莫れ、汝等多聞にして智慧財富も亦勝れ、多く知識有り、我等も當に汝が爲に伴黨と作るべし」と。僧をして未だ諍事有らざるに、而も諍事有り、已に諍事有れば、而も除滅せざらしむ。若し僧時到らば、僧智慧等二比丘の爲に、呵責羯磨を作すを忍聽せよ。若し後に更に鬪諍して共に相罵詈せば、衆僧當に更に罪を增して治すべし、白是の如し」と。大德僧聽け、此智慧、盧醯那の二比丘、憙んで共に鬪諍し、共に相罵詈して口に刀劍を出し、互に長短を求め、彼自ら共に鬪諍し已り、若し復餘の比丘有りて鬪諍すれば、即ち復彼に往いて勸めて言はく、「汝等勉力して他に如かざる

莫れ、汝等智慧多聞にして財富亦勝る。多く知識有り、我等も當に汝が爲に伴黨となるべし』と。二僧をして未だ諍事有らざるに、而も諍事有り、已に諍事有れば、而も除滅せざらしむ。僧智慧等二比丘の爲に、呵責羯磨を作す。誰か諸の長老、僧智慧等二比丘の爲に、呵責羯磨を作し、若し後に復更に闘諍し共に相罵詈せば、衆僧當に更に罪を増して治するを忍せよ、忍する者は默然せよ、忍せざる者は說け』と。此は是れ第一羯磨竟る。是の如く第二、第三說く、僧已に智慧等の爲に、呵責羯磨を作すを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是事是の如く持つ、爲に呵責を作し竟らば、五事作すべからず。一には人に大戒を授くべからず、二には人の依止を受くべからず、三には沙彌を畜ふべからず、四には僧差を受けて、比丘尼を敎授すべからず、五には若し僧差するも敎授すべからず、是を呵責羯磨竟りて、五事作すべからずと爲す。復五事有りて作すべからず。說戒すべからず、若し僧中に毘尼の義を問ふも答ふべからず、若し衆僧差して羯磨を作すも作すべからず、若し僧中智慧者を揀集して、共に衆事を評論するも、共例に在るを得ず、若し僧差して信命を作すも作すべからず、是を呵責羯磨竟りて、五事作すべからずと爲す。復五事有り、作すべからず、早く聚落に入るを得ず、暮に逼りて還るを得ず、比丘に親近すべし、外道に親近すべからず、應に好く諸の比丘の教に順從すべし、異語を作すべからず、呵責竟りて五事作すべからず。復五事有り、作すべからず。衆僧所犯に隨つて爲に呵責羯磨を作し已り、復更に此罪を犯すべからず、餘も亦犯すべからず、若は相似、若は此より生ずる者、

若は此より重き者なり。羯磨及び羯磨人を嫌ふべからず。呵責竟りて五事作すべからず。復五事有り、作すべからず。善比丘爲に座を敷いて供養を爲すも受くべからず、他の洗足を受くべからず、他の洗足物を安んずるを受くべからず、他の革屣を拭ふを受くべからず、他の身を摩揩するを受くべからず、呵責羯磨竟らば、五事作すべからず。復五事有り作すべからず。善比丘の禮拜し、合掌し、問訊し、迎逆し、衣鉢を持つを受くべからず。呵責羯磨竟りて五事作すべからず。復五事有り、作すべからず。善比丘を舉して爲に憶念を作し、自言を作すべからず、他の事を證すべからず、布薩自恣を遮すべからず、善比丘と共に諍ふべからず。是を呵責し竟りて、五事作すべからずと爲す。應に是の如く作すべし。衆僧智慧と盧醯那の爲に、呵責白四羯磨を作し竟る。諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『三法有りて呵責羯磨を作すも、非法非毘尼にして羯磨成就せず。云何が三なる。舉を作さず、憶念を作さず、首罪に伏せず。復三事有り、無犯と、犯して懺悔すべからざると、若は罪を犯し已りて、懺悔し竟るとなり。復三事有り、舉を作さざると、非法と別衆となり。復三事有り、憶念を作さざると、非法と別衆となり。復三事有り、罪に伏せざると、非法と別衆となり。復三事有り、不犯と非法と別衆となり。復三事有り、不應懺罪を犯すと非法と別衆となり。復三事有り、罪を犯し已りて懺悔竟ると非法と別衆となり。復三事有り、不現前と非法と別衆となり。是の如きの三法は、呵責羯磨を作すも、非法非毘尼にして羯磨成就せず。復三事有り、呵責羯磨を作し、如法如毘尼にして羯磨成就す。何等か

三なる。爲に擧を作し、憶念を作し、自言を爲す。復三事有り、犯罪と可懺罪を犯すと、犯して未だ罪を懺せざるとなり。復三事有り、擧を作すと、法と、和合となり。憶念を作すと、法と和合となり。自言を作すと、法と和合となり。犯罪と法と和合となり。可懺罪を犯と法と和合となり。犯して未だ罪を懺悔せざると、法と和合となり。現前と法と和合となり。是を三法の呵責羯磨を作して、如法如毘尼にして羯磨成就すと爲す。五法有り、呵責羯磨を作し、非法非毘尼にして羯磨成就せず。現前に在らず、自言せず、淸淨の爲にす、非法、別衆なり。是を五事と爲す、呵責羯磨を作して、非法非毘尼にして羯磨成就せず。五法有り、如法如毘尼にして羯磨成就す。何等か五なる、現前に在り、自言す、淸淨ならず、法、和合なり。是を五法と爲し、呵責羯磨を作して、如法如毘尼にして羯磨成就す。若し衆僧小食上後食上に在り、若は說法、若は布薩に、被呵責羯磨人、衣服を正し、革屣を脱し、一面に在りて住し、胡跪合掌して是の如く言して白さく、「大德、我懺悔を受けたまへ、自今已去、自ら心を責め、止めて復作さず」と。時に智慧と盧醯那比丘と、衆僧と隨順して違逆する所無し、呵責羯磨を解かんことを求む。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「若し衆僧に隨順して違逆する所無く、呵責羯磨を解かんことを求むる者は、解くを聽す、白四羯磨を作せ。五法有り、呵責羯磨を解くを爲すべからず。人に大戒を授くべからず、乃至善比丘と共に闘ふ。呵責する者、是の如きの五法有り、呵責羯磨を解くを爲すべからず。五法有り應に解くべし。人に大戒を授けず、乃至善比丘と共に闘は

【三】次に惡行比丘にする呵責羯磨を明す。

ず。呵責羯磨とは、是の如きの五法行りて、應に解くべし。應に是の如く解くべし、彼呵責羯磨人、應に衆僧中に至り、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して白して言すべし。『大德僧聽け、我比丘某甲、僧爲に呵責羯磨を作す、我今衆僧に隨順して違逆する所無し、僧に從つて呵責羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧慈愍の故に、我爲に呵責羯磨を解け』と。是の如く第二、第三白す。衆中當に作羯磨なるものを差し、上の如く是の如きの白を作すべし。『大德僧聽け、某甲比丘、僧爲に呵責羯磨を作す、彼比丘衆僧に隨順して違逆する所無し、衆僧に從つて呵責羯磨を解かんと乞ふ。若し僧時到らば、僧某甲比丘の呵責羯磨を解くを忍聽せよ、白是の如し』と。『大德僧聽け、此某甲比丘、僧爲に呵責羯磨を作す、彼比丘衆僧に隨順して違逆する所無し、今衆僧に從つて呵責羯磨を解かんと乞ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に、呵責羯磨を解かんと忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは解け』と。此は是れ第一羯磨なり、第二、第三も亦是の如く說く。僧已に某甲比丘の呵責羯磨を解くを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。

〔三〕爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に軻離那國に二の舊住の比丘有り、一を阿濕卑と名け、二を富那婆娑と名く。軻離那國に在りて惡行を行じ、他家を汚す。惡行を行ずるを亦見亦聞く、他家を汚すも亦見亦聞く。自ら華樹を植ゑ、他をして植ゑしめ、自ら溉ぎ、他をして溉がしめ、自ら華を摘み、他をして摘ましめ、自ら華鬘を作り、他をして作らし

め、自ら種種の華を持ちて往き、他をして持ちて白衣の家に往かしめ、男有り女有り同一床に坐し、同一器に食し、同一器に飲み、歌舞戲笑して衆伎樂を作し、若し他作せば、卽ち復唱和して共に作し、或は脣を吹き、或は鼓簧を彈じ、或は吹貝の聲を作し、或は孔雀の聲を作し、或は衆鳴を作し、或は走り、或は佯りて跛行を作し、或は嘯き、或は俳說人となり、或は雇を受けて戲笑す。時に衆多の比丘、伽尸國より人間に遊行し、羇離那國に至り、淸旦衣を著け鉢を持ち、城に入りて乞食す。行步進止威儀庠序たり。視瞻安諦屈伸俯仰し、衣鉢を執持し、直視して前み、諸根亂れず、羇離那國に以て乞食す。諸の居士見已りて是の如きの言を作さく『此復是れ何等の人ぞ、諦視して戲笑せず、左右を顧視せず、相親近娛樂せず、亦相慰問せず、我曹此人に食を與ふべからず、我曹の沙門阿濕卑、富那婆娑の、亦諦視せず、言語戲笑し、左右顧視し、共に相娛樂して相慰問するに如かず、是の如き人は、我曹當に飲食を與ふべし。』時に諸の比丘、羇離那國に在りて乞食し、飽足を得難し、彼比丘、是の如きの念を作さく『此中の舊住の比丘若し惡比丘中に在りて住し、善比丘を遠離し、彼是の如きの惡行を作し、若干の華樹を種ゑ、乃至他の雇使を受く』と。時に諸の比丘羇離國より人間に遊行して舍衞國に還り、世尊の所に詣りて、頭面に足を禮し、却つて一面に坐す。爾時、世尊、諸の比丘を慰勞したまはく、『汝曹住止和合して安樂たりや不や、飲食を以て疲苦を爲さざるや。』佛に白して言さく、『衆僧住止和合して安樂なり。我曹伽尸國より人間に遊行し、羇離那國に至る。』其に因緣を以て世尊

に白す。世尊、爾時、無數方便を以て呵責して言はく、『汝の所爲は非なり、威儀にあらず、沙門の法にあらず。淨行にあらず、隨順行にあらず、應に爲すべからざる所なり、云何が阿濕卑、富那婆婆、他家を汚し、惡行を行ずる他家を汚すを亦見亦聞く、惡行を行ずるも亦見亦聞く。衆の惡行を作して、雜華樹を種ゑ、乃至他の雇使を受く。』爾時、世尊、阿濕卑、富那婆婆を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『僧阿濕卑、富那婆婆の爲に、擯白四羯磨を作すを聽す、應に是の如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて、阿濕卑、富那婆婆の爲に擧を作し、擧を作し已りて憶念を作し、憶念を作し已りて罪を與ふ。『是中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。『大德僧聽け、此阿濕卑、富那婆婆比丘、羇離那國に於て、他家を汚し惡行を行ず。彼他家を汚すを亦見亦聞く、惡行を行ずるも亦見亦聞く。若し僧時到らば、僧阿濕卑、富那婆婆の爲に擯羯磨を作すを忍聽せよ、汝他家を汚し惡行を行ず。他家を汚すを亦見亦聞く、惡行を行ずるも亦見亦聞く。汝此住處を離れて去るべし、此住處に在るべからず、白是の如し』と。『大德僧聽け、此阿濕卑、富那婆婆比丘、羇離那國に在りて、他家を汚し惡行を行ず。他家を汚すを亦見亦聞く、惡行を行ずるを亦見亦聞く。僧今阿濕卑、富那婆婆の爲に擯羯磨を作す、汝他家を汚し惡行を行ず、他家を汚すを亦見亦聞く、惡行を行ずるも亦見亦聞く。汝此住處を離れて去れ、此に在りて住すべからず。誰か諸の長老、僧阿濕卑、富那婆婆比丘の爲に擯羯磨を作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け』と。此は是れ初羯磨竟

る、第二、第三も亦是の如く說く。僧已に阿濕卑、富那婆娑の爲に、擯羯磨を作すを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。擯羯磨を作す者は、五法有り、作すべからず。人に大戒を授くるを得ず、乃至善比丘と鬪ふを得ず。應に是の如く作すべし、上の呵責羯磨の如し、餘の衆中說戒を除く、衆僧已に阿濕卑、富那婆娑比丘の爲に擯白四羯磨を作し已る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、「三法有り、五法有り、擯羯磨を作すは非法非毘尼なり、羯磨成就せず、上の如し。三法有り、五法有り、擯羯磨を作せば、如法如毘尼なり、羯磨成就す、上の如し。彼被擯比丘喚ばざるに自ら來りて界內に至る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、「喚ばざるに界內に來至すべからず、外に在りて住し、好信を遣して僧中に來至して白するを聽す。『大德僧懺悔す、自今已去、自ら心を責め、更に復爾せず』。彼阿濕卑比丘等、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんと乞ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、「若し衆僧に隨順して違逆する所無く、僧に從つて擯羯磨を解かんと乞はば、應に解を與へて白四羯磨を作すべし。五法有り、解擯羯磨を與ふべからず、人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふ。復五法有り、應に解擯羯磨を與ふべし、人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はず。是の如くにして被擯比丘を解く。應に僧中に至り、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して是の如く白さく、『大德僧聽け、我某甲比丘。僧我が爲に擯羯磨を作す。我今衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧慈愍の故に、我が爲に擯羯磨

【四】次に癡比丘の爲の呵責羯磨を明す。

是の如く第二、第三も說く。衆中當に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘。僧爲に擯羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんと乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今某甲比丘の爲に擯羯磨を解かんことを、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比。丘僧爲に擯羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんと乞ふ、僧今某甲比丘の爲に擯羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に擯羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く第二、第三も說く。僧已に某甲比丘の爲に、擯羯磨を解くを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。

(四)爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。比丘有り、僧芻と名く。癡にして知る所無し、多く衆罪を犯す。諸の白衣と共に雜住して相親附し、佛法に順ぜず。諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんと樂ひ、慚愧を知る者有り、僧芻比丘を嫌責して言はく、『汝癡にして知る所無し、多く衆罪を犯す。云何が諸の白衣と共に雜住して相親附し、佛法に隨順せざるや。』諸の比丘世尊の所に往き、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、比丘僧を集め、無數方便を以て僧芻比丘を呵責したまはく、『汝の所爲は非なり、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、應に爲すべからざる所なり、云何が汝諸の白衣と共に雜住して相親附し、癡にして

知る所無く、多く衆罪を犯し、佛法に順ぜざる。』呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『僧、僧錫比丘の爲に、依止白四羯磨を爲すを聽す。應に是の如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて爲に擧を作せ、擧を作し已りて爲に憶念を作せ、憶念を作し已りて罪を與へよ。衆中當に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此僧錫比丘、癡にして知る所無し、多く衆罪を犯す。白衣と共に雜住して相親附し、佛法に順ぜず。若し僧時到らば、僧錫比丘の爲に依止羯磨を作すを忍聽せよ、白是の如し」と。「大德僧聽け、僧錫比丘、癡にして知る所無し、多く衆罪を犯し、白衣と共に雜住して相親附し、佛法に順ぜず。僧、今僧錫比丘の爲に依止羯磨を作す、誰か諸の長老、僧、僧錫比丘の爲に、依止羯磨を作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。此は是れ第一羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧已に僧錫比丘の爲に、依止羯磨を作すを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。』依止羯磨を作し竟りて、五事作すべからず。人に大戒を授くるを得ず、乃至善比丘と共に鬪ふを得ず、應に是の如く作すべし。是中の衆僧、僧錫比丘の爲に、依止白四羯磨を作し竟る。佛、言はく、『三法有り、五法有り、依止羯磨を作すを得、依止羯磨を作すを得ず、上の如し。彼れ稱すらく、『方を依止羯磨と作す。』「彼方は破壞し人民反叛す。」佛、言はく、『方を依止羯磨と作すと稱すべからず。』彼稱すらく、『國土を依止羯磨と作す。』「彼國土は破壞して人民散亂す。」佛、言はく、『國土を依止羯磨と作すと稱すべからず。』彼稱すらく、『住處を依止

羯磨と作す。」彼住處は人民破壞す。佛言はく『住處を依止羯磨と作すと稱すべからず。』彼稱すらく、『人を依止羯磨と作す。』彼人或は破戒し、或は破見し、或は破威儀し、或は擧せられ、或は滅擯し、沙門の法を增益する能はず。佛言はく、『人を依止羯磨と作すと稱すべからず。』彼稱すらく、『安居を依止羯磨と作す。』彼人安居中に智慧を得。佛言はく、『安居に依りて依止羯磨と作すべからず。語言は、汝應に依止を受けて住すべきを聽す。』爾時、僧芻比丘、聚落中の比丘と親厚なり、多聞にして智慧有り、善く語言す。僧芻比丘即ち彼所に往き、法と毘尼とを學び、安居中に智慧を得、衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて依止羯磨を解かんと乞ふ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し僧芻比丘、衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて依止羯磨を解かんと乞はば、應に解を與へて白四羯磨を作すべし。五法有り、爲に依止羯磨を解くべからず、人の爲に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふまでなり。五法有り、應に爲に依止羯磨を解くべし。人の爲に大戒を授けざるより、乃至善比丘と鬪はざるまでなり。是の如きの五法は、應に爲に依止羯磨を解くべし。應に是の如く解くべし。彼被依止羯磨の者、應に僧中に來りて、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、我比丘某甲、僧我爲に依止羯磨を作す、我今衆僧に隨順し、僧に從つて依止羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧慈愍の故に、我爲に依止羯磨を解け」と。是の如く第二第三白す。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大

【五】嫉妬し瞋恚ある比丘にする阿責羯磨を明す。

德僧聽け、某甲比丘、僧爲に依止羯磨を作す、彼れ衆僧に隨順し、敢て違逆せず、僧に從つて依止羯磨を解かんと乞ふ。僧若し時到らば、僧忍聽せよ、僧、今某甲比丘の爲に依止羯磨を解くと、白是の如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘。僧爲に依止羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて依止羯磨を解かんと乞ふ。僧、今某甲比丘の爲に依止羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に、依止羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、是の如く第二第三說く、僧已に某甲比丘の爲に、依止羯磨を解くを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ」と。

(五三一上)爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に舍利弗、目連、五百の比丘と倶に、伽尸國より人間に遊行し、密林中に至る。時に舍利弗、目連、阿摩梨園中に在り。時に質多羅居士有り、舍利弗、目連の、伽尸國より人間に遊行して密林中に至り、阿摩梨園中に在りて住すと聞く。時に彼居士、舍利弗、目連の所に至り、頭面に足を禮し、却つて一面に坐す。舍利弗、目連、爲に種種に說法開化して歡喜を得しむ。時に居士舍利弗等の說法を聞き、開解歡喜し已りて白して言さく、『願くば大德、衆僧と倶に、我明日の請を受けたまへ。』舍利弗、目連、默然として之を受く。居士、舍利弗、目連の許すを知り已りて、坐より起ちて禮を作して去る。卽ち其家に還り、種種の飲食世間の美膳を辦具し、味として有せざる無し。爾時、阿摩梨園中の舊住の比丘を善法と名く。是の如きの念を作さく、「我寧ろ質多羅居士の家に往き、其辦具飲食を看るべし。云何が客比丘の爲に食を作り、云何が舊住比丘の爲

に食を作る。」と。爾時、善法比丘、即ち其家に往いて作食處に至りて看る。其辨ずる所は、最上世間の所有にして飲食の具味として有せざる無し。見已りて是の如きの言を作さく、『居士客比丘の爲に、異種の飲食を作り、舊住比丘の爲には、異種の飲食を作る。』彼嫉妬して心に瞋恚を生じ、便ち是の如きの惡言を作さく、『居士辨具する所は、飲食中の最勝、世間所有の飲食の具、味として有せざる無し、唯胡麻滓無し。』彼質多羅居士即ち語りて言はく、『長老善法、是の如きの多寶なる根力覺意禪定正受を懷き、是の如きの麤言を作す。善法、我是の如きの美食を辨ずるに、胡麻滓を用ひて何等をか作さん。』即ち復言はく、『我今當に譬喩を說くべし。有智の人は喩を以て自ら解す。譬へば國土有りて雞無きが如し。是中に賈客有り、雌雞を持ちて來りて國中に至る。時に彼雌雞、雄雞有ること無く、烏と共に通ず。時に雞便ち卵を生み、子有りて出づ、雞鳴を作さず、復烏喚せず、即ち之を名けて烏雞と爲す。是の如く善法、是の如きの多寶の根力覺意禪定正受を懷いて此麤言を作す、是の如き上饌の美食を辨具し、方に胡麻滓を求む、用ひて何等をか作す。』彼れ是の如きの言を作さく、『居士我を罵る。我今去らんと欲す。』居士言はく、『大德善法、我は惡言せず、亦罵詈せず。大德善法、樂んで此密林の中に在りて住すべし、我當に衣被臥具、飲食湯藥を供給すべし。』彼是の如きの言を作さく、『居士、我を罵る、我去らんと欲す。』即ち問うて言はく、『大德、何處に至りて去らんと欲する。』答へて言はく、『我舍衛國の世尊の所に至らんと欲す。』居士言はく、『我所に共に言語するが如く、具に世尊に

白せ、增減せしむる無れ、何を以ての故に。汝當に還りて我所に來至すべし。」爾時、善法比丘、衣鉢を持ちて世尊の所に詣り、頭面に足を禮し已りて、却りて一面に坐す。時に世尊、諸の比丘を慰問したまはく、「住止安樂なりや不や、飮食を以て疲苦と爲さざるや。」答へて言はく、「住止安樂なり、飮食を以て苦と爲さず。」居士所言の事を以て、具に世尊に白す、增減有る無し。爾時、世尊、無數方便を以て善法比丘を呵責して言はく、「汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、應に爲すべからざる所なり。云何が善法、彼居士信樂有り、檀越と爲して多く利益有り、衆僧に供給す、乃ち下賤の言を以て他を罵る。」時に世尊、善法を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、「諸の比丘、善法比丘の爲に、遮不至白衣家白四羯磨を作すを聽す。五法有り、比丘爲に遮不至白衣家羯磨を作すべからず。父母を恭敬せず、沙門、婆羅門を敬せず、持つべき所の者を、而も堅持せず、是の如きの五法有り、僧、爲に遮不至白衣家羯磨を作すべからず。五法有り、應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。父母沙門、婆羅門を恭敬し、持つべき所の者は、堅持して捨てず、是の如きの五法有り、僧應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。比丘に十法有り、應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。惡說して白衣の家を罵る、方便して白衣家をして損減せしむ、無利を作す、無住處を作す、白衣を鬪亂せしむ、白衣の前に於て佛法僧を謗る、白衣の前に在りて下賤の罵りを作す、如法に白衣に許して而も實ならず、比丘是の如きの十法有り、應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。是

の如く、九法八法乃至一法有りて、惡說して白衣を罵らば、應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。應に是の如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて爲に擧を作し、擧を作し已りて爲に憶念を作し、憶念を作し已りて罪を與ふ。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く、是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此善法比丘、質多羅居士は信樂の檀越なり、常に布施を好みて衆僧に供給す、而も下賤の言を以て之を罵詈す、若し僧、時到らば僧忍聽せよ。僧今善法比丘の爲に、遮不至白衣家羯磨を作す、白是の如し」と。「大德僧聽け、善法比丘、質多羅居士は信樂の檀越なり、常に布施を好み、衆僧に供給す、而も下賤を以て之を罵詈す、僧今善法比丘の爲に遮不至白衣家羯磨を作す、誰か諸の長老、僧善法比丘の爲に、遮不至白衣家羯磨を作すに忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、第二第三亦是の如く說く。僧已に善法比丘の爲に、遮不至白衣家羯磨を作すを忍し竟る、僧默然たるが故に、是事是の如く持つ。」彼遮不至白衣家羯磨を作し已り、五法有り、作すべからず。人に大戒を授くるを得ず、乃至善比丘と共に鬪ふを得ず。應に是の如く作すべし。僧善法比丘の爲に、遮不至白衣家白四羯磨を作し竟る。諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『三法有り、五法有り、遮不至白衣家羯磨を作すは、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。三法有り、五法有り、遮不至白衣家羯磨を作すは、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し。』佛、言はく、『使を差して質多羅の家に至り、善法比丘の爲に、質多羅居士に懺悔し、白二羯磨を作すを聽す。八法有り、應に使を

差すべし。一には聞く、二には能く說く、三には己自ら解す、四には能く人の意を解す、丘には人の語を受く、六には能く憶持す、七には闕失無し、八には善惡の言義を解す。是の如きの八法有り、應に使を差すべし。即ち偈を說いて言はく、

　衆智人の前に在りて、言に錯謬有る無く
　亦增減有る無し、所言の教を失はず
　言破壞すべからず、聞いて以て傾動せず
　此の如きの比丘有り、能く爲に使と作すに堪ふ

是の如きの八法有り、阿難は盡く能く持ち聞く、能く說く、己身自ら解す、能く人の意を解す、人の語を受く、能く憶持して闕失有る無し、善惡の言義を解す。佛言はく、「僧、阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲に質多羅居士に懺悔し、白二羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし。衆中羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲に、質多羅居士に懺悔するを忍聽せよ。白是の如し」と。「大德僧聽け、今僧阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲に質多羅居士に懺悔す、誰か諸の長老、阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲に、質多羅居士に懺悔するを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲に、質多羅居士に懺悔するを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。僧使を差し竟り、居士の家に至りて、是の

如く語る。「居士懺悔す、僧已に善法比丘の爲に罰謫を作す」と。彼若し懺悔を受くれば善し、若し受けざれば、應に眼見耳不聞處に至り、羯磨比丘を安じて眼見耳不聞處に著き、教へて如法懺悔せしむ。復來りて居士に語りて言はく「居士、懺悔す、彼比丘先に罪を犯す、今已に懺悔を爲す、罪已に除く」と。彼若し懺悔を受くれば善し、若し受けざれば、犯罪の比丘、應に自ら往いて懺悔すべし。』是の如く阿難、世尊の教を聞き已り、善法比丘を將ゐ、質多羅居士の家に至りて語りて言はく「懺悔す居士、彼比丘は、僧已に爲に謫罰を作す。」質多羅居士卽ち共に懺悔す。時に善法比丘、衆僧に順從して敢て違逆せず、衆僧に從つて遮不至白衣家羯磨を解かんと乞ふ。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『若し善法比丘、衆僧に隨順して違逆する所無く、遮不至白衣家羯磨を解かんと乞はば、應に解白四羯磨を與ふべし。五法有り、爲に遮不至白衣家羯磨を解くべからず。人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふまでなり。五法有り、應に爲に遮不至白衣家羯磨を解くべし。人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はず、是の如きの五法有り、應に爲に遮不至白衣家羯磨を解くべし。應に是の如く解くべし。彼被羯磨人、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大徳僧聽け、我比丘某甲、僧爲に遮不至白衣家羯磨を作す、我今衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて遮不至白衣家羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧慈愍の故に、我爲に遮不至白衣家羯磨を解け」と。是の如く、第二第三說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く

是の如く白すべし。「大德僧聽け、某甲比丘、僧爲に遮不至白衣家羯磨を作す、彼比丘、衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて、遮不至白衣家羯磨を解かんと乞ふ、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、今僧爲に遮不至白衣家羯磨を解くと、白是の如し」と。「大德僧聽け、彼某甲比丘、僧爲に遮不至白衣家羯磨を作す、彼比丘、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて遮不至白衣家羯磨を解かんと乞ふ、僧今某甲比丘の爲に、遮不至白衣家羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に、遮不至白衣家羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く第二第三說く。僧已に某甲比丘の爲に、遮不至白衣家羯磨を解くを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。』

四分律卷第四十四

【一】前卷に續いて呵責犍度を明す。先づ不見罪比丘のための呵責羯磨を明す。

四分律 卷第四十五 三分之九

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

呵責犍度之餘

〔一〕爾時、拘睒彌に在したまふ。時に闡陀比丘、罪を犯す。餘の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、見るや不や。』答へて言はく、『見ず。』時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんと樂ひ、慚愧を知るもの有り、闡陀比丘を嫌責して言はく、『云何が罪を犯す。』諸の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、見るや不や。』答へて言はく、『見ず。』是に諸の比丘、卽ち世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に住し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、闡陀比丘を呵責したまはく、『云何が闡陀比丘、汝罪を犯し、諸の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。』世尊、無數方便を以て闡陀比丘を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『衆僧、闡陀比丘の爲に不見罪擧白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし、應に僧を集むべし、僧を集め已りて擧を作せ、擧を作し已りて爲に憶念を作せ、憶念を作し已りて罪を與ふ。衆中當に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く

是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此闡陀比丘、罪を犯す」餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。若し僧、時到らば、僧忍聽せよ、今、僧闡陀比丘の爲に、不見罪擧羯磨を作すと、白是の如し」と。「大德僧聽け、闡陀比丘、罪を犯す」餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく「見ず」と。今僧、爲に不見罪擧羯磨を作す、誰か諸の長老、僧闡陀比丘の爲に、不見罪擧羯磨を作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く、第二第三說く。僧已に闡陀比丘の爲に、不見罪擧羯磨を作すを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」不見罪擧羯磨を作し已らば、五法有り、作すべからず。人に大戒を授くるを得ず、乃至善比丘と共に鬪ふを得ず。應に是の如く作すべし、衆僧闡陀比丘の爲に、不見罪擧羯磨を作し已る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『三法有り、五法有り、不見罪擧羯磨を作すは、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。復三法有り、五法有り、不見罪擧羯磨を作さば、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し。』彼不見罪擧の比丘、衆僧若は小食大食上に在り、若は說法、若は布薩の時、當に衆僧中に往き、一面に在りて住し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して白して言さく、『大德、我懺悔を受けよ、自ら心意を責め、今より已去、敢て復作さず、闡陀比丘衆僧に隨順して、敢て違逆せず、僧に從つて不見罪擧羯磨を解かんと乞ふ。』諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し闡陀比丘、衆僧に隨順して違逆有る無く、僧に從

【二】次に不懺悔比丘のために呵責羯磨を擧ぐ。

つて不見罪擧羯磨を解かんと乞はば、應に爲に白四羯磨を作して解くべし。五法有り、爲に不見罪擧羯磨を解くべからず。人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に闘ふまでなり。五法有り、應に不見罪擧羯磨を解くべし。人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に闘はざるまでなり。應に是の如く解くべし。衆中應に羯磨を作すに堪能なるものを差し、上の如く、是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、彼某甲比丘。僧爲に不見罪擧羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、今僧に從つて不見罪擧羯磨を解かんと乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、今僧某甲比丘の爲に、不見罪擧羯磨を解くを忍聽せよ、白是の如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘、僧爲に不見罪擧羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不見罪擧羯磨を解かんと乞ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に、不見罪擧羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と、是は初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧已に某甲比丘の爲に、不見罪擧羯磨を解くを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」

(二)爾時、世尊、拘睒彌に在したまふ。時に闡陀比丘、罪を犯す。諸の比丘語りて言はく、『汝罪有り、懺悔せよ。』答へて言はく、『懺悔せず。』諸の比丘聞く、中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんと樂ひ、慚愧を知る者有り、闡陀比丘を嫌責して言はく、『云何が罪を犯す。』餘の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、懺悔せよ。』答へて言はく、『懺悔せず。』諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、此因緣を以て

具に世尊に白す。世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、無數方便を以て闡陀比丘を呵責したまはく、「汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、應に爲すべからざる所なり、云何が罪を犯し、餘の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、懺悔せよ』と。答へて言はく、『懺悔せず』と。』呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、「衆僧闡陀比丘の爲に、不懺悔罪擧白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし。應に僧を集むべし、僧を集め已りて僧に擧を作せ、擧を作し已りて爲に憶念を作せ、憶念を作し已りて罪を與ふ。衆中、應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如く白すべし。「大德僧聽け、此闡陀比丘、罪を犯す、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、懺悔せよ」と、答へて言はく、「懺悔せず」と。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今闡陀の爲に不懺悔罪擧羯磨を作すと、白是の如し」と。「大德僧聽け、此闡陀比丘罪を犯す、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、懺悔せよ」と、答へて言はく、「懺悔せず」と。誰か諸の長老、僧闡陀の爲に、不懺悔擧罪羯磨を作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二第三是の如く說く。僧已に闡陀比丘の爲に、不懺悔罪擧羯磨を作すを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ」と。彼不懺悔罪擧羯磨を作し已りて、五法有り、作すべからず。人に大戒を授くるを得ずより、乃至善比丘と共に鬪ふを得ずまでなり。應に是の如く作すべし、衆僧闡陀の爲に、不懺悔擧白四羯磨を作し已る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『三法有り、五法有り、不懺悔罪擧羯磨を作

す、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。三法有り、五法有り、不懺悔罪擧羯磨を作し、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し。』彼被作不懺悔罪擧羯磨人、若し衆僧小食大食上に在らんに、若は說法、若は布薩の時、應に僧中に至りて一面に在りて住し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して白して言さく、『大德、我懺悔を受けよ、自ら心意を責め、今より已去、敢て復作さず。』彼闡陀比丘、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不懺悔罪擧羯磨を解かんと乞ふ。諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し闡陀比丘、衆僧に隨從して敢て違逆せず、不懺悔罪擧羯磨を解かんと乞はば、應に解を與へて白四羯磨を作すべし。五法有り、爲に不懺悔罪擧羯磨を解くべからず。人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふまでなり。五法有り、應に爲に不懺悔罪擧羯磨を解くべし、人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はざるまでなり。應に是の如く解くべし、彼不懺悔罪擧の比丘、應に僧中に往いて偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して白して言さく、「大德僧聽け、我某甲比丘、僧爲に不懺悔擧羯磨を作し、衆僧に隨順して敢て違逆せず、今僧に從つて、不懺悔罪擧羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧慈愍の故に、我爲に不懺悔罪擧羯磨を解け、白是の如し」と。第二第三說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く、是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘。僧爲に不懺悔罪擧羯磨を作す、彼れ衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不懺悔罪擧羯磨を解かんと乞ふ、若し僧時到らば、僧今僧某甲比丘の爲に、不懺悔罪擧羯磨を

【三】次に惡見比丘のために呵責羯磨を擧ぐ。

解くを忍聽せよ、自ら是の如し」と。「大徳僧聽け、某甲比丘。僧、爲に不懺悔罪擧羯磨を作し、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不懺悔罪擧羯磨を解かんと乞ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に、不懺悔罪擧羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は説け」と。是れ初羯磨なり、第二第三も亦是の如く説く。僧已に某甲比丘の爲に、不懺悔罪擧羯磨を解くを忍し竟る。僧默然するが故に、是事是の如く持つ。」

【三】爾の時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に比丘有り、阿利吒と字く。是の如きの惡見有りて生ず。「我佛所説の法義を知る。婬欲を犯すも障道の法に非ず」と。時に諸の比丘、阿利吒比丘惡見の生ずるを聞き、即ち阿利吒比丘の所に往き、恭敬問訊し已りて、一面に在りて坐し、阿利吒に語りて言はく、「汝實に佛所説の法、婬欲を行ずるも障道の法に非ずと知るや。」答へて言はく、「我實に、佛所説の法は、婬欲を行ずるも障道の法に非ずと知る。」時に諸の比丘、阿利吒比丘の惡見を諫めんと欲し、即ち慇懃に之を問はく、「阿利吒、是の如きの語を作す莫れ、世尊を謗ずる莫れ、世尊を謗ずる者は不善なり、世尊は是の如きの語を作したまはず、阿利吒、世尊、無數方便もて、欲を斷ずるの法と、欲想を斷じ、欲念を滅し、欲熱を除散し、愛結を越度するを説きたまふ。世尊、無數方便もて、欲は大火坑の如し、草炬を執るが如し、亦熟果の如し、亦假借の如し、猶し枯骨の如し、欲は段肉の如し、夢の所見の如し、鋒刃を履むが如し、欲は新瓦器に水を盛りて日中に置くが如し、欲は毒蛇の頭の如し、刀を輪轉するが如し、利戟に如似すと説きたまふ、世尊

は是の如く說きたまふ。阿利吒、如來は是の如く善く法を說き、欲を斷じて欲無く、垢を去りて垢無く、渴愛を調伏して巢窟を除滅し、一切の諸の結縛を出離して愛盡涅槃なりと。」佛は是の如く說法したまふ。汝云何が行欲は障道の法にあらずと言ふ。』時に諸の比丘、慇懃に阿利吒比丘に問ひ、是の如く說く時、阿利吒比丘惡見を堅持して、審定して言はく、『此は是れ眞實なり、餘は皆虛妄なり。』時に諸の比丘、阿利吒の惡見を除く能はず、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、異比丘に告げて言はく、『汝、我言を持つて、往いて阿利吒比丘を喚び來れ。』時に彼比丘、世尊の敎を受け、阿利吒比丘の所に往いて、是の如きの言を語る。『世尊、汝を喚びたまふ。』阿利吒、世尊の喚びたまふを聞き、卽ち世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐す。世尊、阿利吒に告げて言はく、『汝、實に是語有りや、我世尊の說法を知る、婬欲を行ずるも障道の法に非ずと。』答へて言はく、『大德、實に是の如きの語有り。』問うて言はく、『汝云何が我所說是の如しと知るや、我無數方便もて、欲愛を斷ずるの法を說くこと、上の所說の如くならずと。』爾時、世尊、無數方便もて阿利吒比丘を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『僧、阿利吒比丘の爲に、呵諫を作すを聽す、此事を捨つるが故に、白四羯磨を作し、應に是の如く諫むべし。衆中當に羯磨に堪能なるもの差し、上の如く是の如く白すべし。「大德僧聽け、此阿利吒比丘、是の如きの語を作さく、「婬欲を行ずるも障道の法に非ず」と。若し僧、時到らば僧忍聽せよ、僧、今

阿利吒比丘の爲に呵諫を作す、此事を捨つるが故に。阿利吒、是語を作す莫れ、世尊を謗ずる莫れ、世尊を謗ずるは善からず。世尊は是の如きの語を作したまはず、世尊、無數方便もて、婬欲を行ずるは是れ障道の法を說きたまふ。若し欲を犯さば卽ち道を障ふと爲す、白是の如し」と。『大德僧聽け、此阿利吒比丘、是の如きの語を作さく、「我佛所說の法は、欲を行ずるも障道の法に非ずと知る」と。僧今爲に呵諫を作す、此事を捨つるが故に、阿利吒、是の如きの語を作す莫れ、世尊を謗ずる莫れ、世尊を謗ずるは善からず、世尊は是語を作したまはず、世尊、無數方便もて、欲は是れ障道の法と說きたまふ、若し欲を犯せば、卽ち障道の法なり、誰か諸の長老、僧阿利吒比丘の爲に、呵諫を作し、此事を捨つるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧、阿利吒比丘の爲に、呵諫を作し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。』僧爲に呵諫を作し已る、故惡見を捨てず。時に比丘聞く、中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者有り、阿利吒比丘を呵責して言はく、『云何が僧爲に呵諫を作し已る、故惡見を捨てざる。』時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、阿利吒比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、應に爲すべからざる所なり、云何が僧呵諫を作し已り、故惡見を捨てざる。』無數方便を以て呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、

『諸の比丘に、阿利吒比丘の爲に、不捨惡見白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて爲に擧を作し、擧を作し已りて爲に憶念を作し、憶念を作し竟りて、應に罪を與ふべし。衆中當に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如く白すべし。「大德僧聽け、阿利吒比丘の惡見、僧爲に呵諫を作す、故惡見を捨てず、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧、今阿利吒比丘の爲に惡見不捨羯磨を作すと、白是の如し」と。「大德僧聽け、阿利吒比丘、惡見を捨てず、僧爲に呵諫を作す、故惡見を捨てず、今阿利吒比丘の爲に、不捨惡見擧羯磨を作す、誰か諸の長老、僧今阿利吒比丘の爲に、惡見不捨羯磨を作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、第二、第三も亦是の如く說く。僧已に阿利吒比丘の爲に、不捨惡見羯磨を作すを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。惡見不捨を作し已りて、五事有り、作すべからず、人に大戒を授くるを得ざるより、乃至善比丘と共に鬪ふを得ざるまでなり。應に是の如く作すべし、僧阿利吒比丘の爲に、惡見不捨白四羯磨を作し竟る。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「三法有り、五法有り、惡見不捨擧羯磨を作して、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。復三法五法有り、惡見不捨擧羯磨を作し、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し。」復被惡見不捨擧の比丘、若は僧小食大食上に在らん、說法の時、若は布薩の時、應に彼に往いて一面に在りて住し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大德、我懺悔す、自ら心意を責め、今より已去復作さず。』

役阿利吒、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不捨惡見擧羯磨を解かんと乞ふ。諸の比丘、僧に白す。佛言はく、「若し阿利吒比丘、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不捨惡見羯磨を解かんと乞はば、僧當に白四羯磨を與へて解くべし。復五法有り、應に爲に不捨惡見羯磨を解くべし。人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はざるまでなり。應に是の如く解くべし、彼被惡見不捨擧羯磨の比丘、應に僧中に往き、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白すべし。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧爲に惡見不捨擧羯磨を作す、今、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて惡見不捨擧羯磨を解かんと乞ふ、願くば僧我爲に、不捨惡見擧羯磨を解け、慈愍の故に」と、第二第三も說く。衆中當に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如く白すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧爲に惡見不捨擧羯磨を作す、今、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不捨惡見擧羯磨を解かんと乞ふ、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今某甲比丘の爲に、惡見不捨擧羯磨を解くと。白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧爲に惡見不捨擧羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて惡見不捨擧羯磨を解かんと乞ふ、僧今某甲比丘の爲に、不捨惡見擧羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲に、不捨惡見擧羯磨を解くを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く第二第三も說く。僧已に某甲比丘の爲に、不捨惡見擧羯磨を解くを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。「呵責揵度具足し竟る。」

【四】比丘の犯罪に對して覆藏なき時、其人に懺悔をなさしめ之を洗淨するの法を明す。第十二の犍度である。先づ僧殘を犯せる者の覆藏日に隨ふ者に對する羯磨を明す。

人犍度第十二之一

(四)爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に比丘有り、僧殘罪を犯して覆藏し、是の如きの念を爲さく『我云何がすべき』と。諸の比丘に白す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧、彼比丘の爲に、覆藏日に隨つて、爲に覆藏罪を治するを聽す。白四羯磨を作して、應に是の如く與ふべし。彼比丘、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、僧足を禮し、合掌胡跪して是の如きの言を白すべし。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す、我某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨つて、今僧に隨つて覆藏羯磨を乞ふ、願くば僧、我に隨覆藏日羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘。僧殘罪を犯して覆藏す、彼某甲比丘。僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に覆藏日羯磨を與ふと、白是の如し」と。大德僧聽け、某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す。彼某甲比丘。僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧、今某甲比丘に覆藏日羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふるに忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨

を與へ竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」彼覆藏を行ずる時、更に重ねて犯す。彼是の如きの念を作さく『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧、彼比丘の爲に、本日治白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く治すべし。彼比丘、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、僧の足を禮し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す、我某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に覆藏羯磨を乞ふ。僧已に我に隨覆藏日羯磨を與ふ。我某甲、覆藏を行ずる時、更に重ねて犯す。我某甲、今僧に從つて、覆藏本日治羯磨を乞ふ、願くば我某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す、此某甲比丘。僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に覆藏日羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。今僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧、某甲比丘に本日治羯磨を與ふ、白是の如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、此某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏日羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す、彼僧に從つて、覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧、今某甲比丘に覆藏本日治羯磨を與ふ。誰か諸の長老、僧、某甲比丘に覆藏本日治羯磨を與ふるを忍する者

は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く第二第三說く。僧、已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふるを忍し竟る。僧、忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。』彼比丘、覆藏を行じ竟り、諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧彼比丘の爲に、六夜摩那埵白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く與ふべし。彼比丘、應に僧中に至り、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、僧の足を禮し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す、我某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏日羯磨を乞ひ、僧已に我に隨覆藏日羯磨を與ふ。我覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す、僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に我に覆藏本日治羯磨を與ふ。我某甲比丘、覆藏本日治を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、願くば僧我に六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す。某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す、此某甲比丘、僧に從つて、覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此某甲比丘、覆藏本日治を行じ竟り、六夜摩那埵羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧、某甲比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふと、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す、此某甲比丘、僧殘罪を犯し、

覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此某甲比丘、覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ひ、僧已に此比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此某甲比丘、覆藏本日治を行じ竟り、今、僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ふ。僧、今某甲比丘に、六夜摩那埵羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧、某甲比丘に、六夜摩那埵羯磨を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧已に某甲比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふるを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是事是の如く持つ。」彼摩那埵を行じ竟り、諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『僧、彼比丘の爲に、白四羯磨出罪を作すを聽す。應に是の如く出罪すべし。彼比丘、應に僧中に至り、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大德僧聽け、我某甲比丘。僧殘罪を犯して覆藏す。我某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨つて、已に僧に從ひ覆藏日羯磨を乞ふ。僧已に我に隨覆藏日羯磨を與ふ。我某甲比丘、覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に我に覆藏本日治羯磨を與ふ。我某甲比丘、覆藏本日治を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ふ。僧已に我に六夜摩那埵羯磨を與ふ。我比丘某甲六夜摩那埵を行じ竟り、今、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、慈愍の故に」と、是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を

【五】僧殘罪を犯して覆藏なき者に對する羯磨を明す

犯して覆藏す、此某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此某甲比丘、覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此比丘、覆藏本日治を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふ。此比丘、六夜摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。若し僧、時到らば僧忍聽せよ、僧、今某甲比丘の爲に出罪すと。白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す。某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此比丘、覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に、覆藏本日羯磨を與ふ。此某甲比丘、覆藏本日治を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ふ。僧已に比丘某甲に六夜摩那埵羯磨を與ふ。此某甲比丘、六夜摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。僧、今比丘某甲の爲に出罪す、誰か諸の長老、僧此某甲比丘の爲に、出罪するを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。此は是れ初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く、僧已に某甲比丘の出罪を忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是事是の如く持つ。」

(五)爾の時、比丘有り、僧殘罪を犯して覆藏せず、是の如きの念を作さく、「我當に云何がすべき」と。諸の比丘に白す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、「僧、彼比丘に六夜摩那

埵白四羯磨を與ふるを聽す。應に是の如く與ふべし。彼比丘、應に僧中に往り、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、僧の足を禮し已り、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、願くば僧六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と、是の如く第二第三說く。僧中應に羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、今、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧、某甲比丘に六夜摩那埵を與ふ、白是の如し」「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、今、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧、今某甲比丘に六夜摩那埵を與ふ、誰か諸の長老、僧、某甲比丘に六夜摩那埵を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く第二第三說く。僧已に某甲比丘に六夜摩那埵を與ふるを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是事是の如く持つ」と。彼摩那埵を行じ、中間に更に犯す。彼比丘、是の如きの言を作さく、「我當に云何がすべき。」と。諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、「僧、彼比丘の爲に、摩那埵本日治白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く與ふべし。彼比丘、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に我に六夜摩那埵を與ふ。我六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。今僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ。願くば僧、我に摩那

埵本日治羯磨を與へよ、慈愍の故に」と、是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。彼比丘、六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧、某甲比丘に摩那埵本日治羯磨を與ふと、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。此比丘、六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ、僧今某甲比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧已に某甲比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふるを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」彼摩那埵を行じ竟りて、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、「僧、彼比丘の爲に出罪して白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし。彼比丘、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、合掌して白して言ふべし。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に我に六夜摩那埵を與ふ。我六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて六夜摩那埵本日治羯磨を乞ふ、僧已に我に摩那埵本日治羯磨を與ふ、我某甲比丘、摩那埵本日治を行じ竟

【一八】衆多の僧殘罪を犯せる比丘に對する羯磨。

る。今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、願くば僧我に出罪羯磨を與へよ、慈愍の故に」と、是の如く第二第三說く。僧中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。彼比丘、六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ。僧已に彼比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふ。彼摩那埵本日治を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧、某甲比丘の爲に出罪す、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。彼摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ、僧已に摩那埵本日治羯磨を與ふ。此比丘、摩那埵本日治を行じ竟る、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。僧、今某甲比丘に出罪羯磨を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に出罪羯磨を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。第二第三も亦是の如く說く。僧、已に某甲比丘に出罪羯磨を與ふるを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」

(六)時に一比丘有り、衆多の僧殘罪を犯す、或は犯して覆藏一夜なる有り、或は犯して覆藏二夜なる有り、是の如く乃ち十夜に至る。彼比丘に是の如きの念を作さく、『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『僧、彼比丘の爲に、共に犯衆多僧殘罪覆藏十夜白四羯磨を作すを聽す。應に是の如く與ふべし。彼比丘、應に

僧中に來至し、偏に右の肩に露し、革屣を脱し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、合掌して白して言ふべし。「大德僧聽け、我某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、或は覆藏一夜、或は覆藏二夜、乃至十夜なる者有り、今僧に從つて、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く、第二第三も說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作す。「大德僧聽け、此某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、或は覆藏一夜乃至十夜なる有り、今僧に從つて覆藏一夜、乃至十夜羯磨を乞ふ、若し僧、時到らば僧忍聽せよ、僧、某甲比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與ふと、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、或は覆藏一夜乃至十夜なる有り、今僧に從つて、覆藏一夜乃至十夜羯磨を乞ふ、今僧某甲比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧彼比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、是の如く第二第三も說く。僧已に某甲比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與へ竟る、僧忍して默然するが故に、是事、是の如く持つ。彼比丘、覆藏を行じ竟りて諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛、言はく、『僧、彼比丘に六夜摩那埵白四羯磨を與ふるを聽す。彼比丘、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脱し、僧足を禮し已り、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。「大德僧聽け、我某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、覆藏一夜、或は二夜乃至十夜なり、僧に從つて覆藏一夜乃至十夜羯磨を乞ふ、僧已に我に覆藏羯磨を與ふ。我某甲比丘、已に覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六

夜摩那埵を乞ふ、願くば僧我に六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と、是の如く、第二第三說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜、乃至十夜なり。僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に此某甲比丘に覆藏十夜羯磨を與ふ。此比丘、覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。若し僧、時到らば僧忍聽せよ、僧、今某甲比丘に六夜摩那埵を與ふ、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、覆藏、或は一夜、或は二夜乃至十夜なり、已に僧に從つて、覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に覆藏十夜羯磨を與ふ。彼比丘、十夜羯磨を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧今彼に六夜摩那埵を與ふ。誰か諸の長老、僧彼比丘に、六夜摩那埵を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、第二第三も亦是の如く說く。僧已に彼比丘に、六夜摩那埵を與ふるを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」彼摩那埵を行じ竟りて、諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧、彼比丘に、出罪白四羯磨を與ふるを聽す。彼比丘、應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、是の如きの言を白す。「大德僧聽け、我某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜、乃至十夜なり、僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に我に覆藏十夜羯磨を與ふ。我覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧已に我に六夜摩那埵を與ふ、我六夜摩那埵を行じ竟り、今

〔七〕二僧殘罪を犯せる比丘に對する羯磨。

僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、願くば僧、我に出罪羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く、第二第三說く。衆中應に羯磨に堪能なる者を差し、上の如く、是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、衆多僧殘を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜乃至十夜なり。僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に十夜羯磨を與ふ、彼某甲比丘、十夜羯磨を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧已に彼比丘に六夜摩那埵を與ふ、彼比丘、六夜摩那埵を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧、今某甲比丘に出罪羯磨を與ふと、白是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜乃至十夜なり、僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に十夜羯磨を與ふ。某甲比丘、十夜覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧已に彼比丘に六夜摩那埵を與ふ、彼某甲比丘、六夜摩那埵を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。今僧彼某甲比丘に出罪羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧彼某甲比丘に、出罪羯磨を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是の如く、第二第三說く。僧已に彼某甲比丘に、出罪羯磨を與ふるを忍し竟る。僧忍して默然たるが故に、是事是の如く持つ。[二]

(七〇)時に一比丘有り、二僧殘罪を犯し、二俱に覆藏し、一罪を憶して一罪を憶せず。彼比丘、所憶の罪に隨ひ、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏日羯磨を乞ふ。僧、彼比丘に、隨所憶罪隨覆藏日羯磨を與ふ。彼比丘、覆藏を行ずる時、第二罪を憶す、云何せんを知らず、諸

の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す、佛言はく、『僧に彼比丘の爲に、第二罪覆藏日を憶するに隨ひ、覆藏羯磨を與ふるを聽す。』時に比丘有り、二僧殘罪を犯して二倶に覆藏す。一は疑有り、二は疑無し。彼疑無き罪の中に於て、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏日羯磨を乞ふ。僧、彼比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼比丘、覆藏を行ずる時、第二罪中に於て卽ち疑無きを得たり。自ら念ずらく、『我當に云何すべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧に覆藏日に隨つて、覆藏羯磨を與ふるを聽す。』時に比丘有り、二僧殘罪を犯して、二倶に覆藏す。一罪を識りて一罪を識らず。彼所識の罪に、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧隨覆藏日羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、卽ち還第二罪を識る、自ら念ずらく、『我當に云何がすべき』と。卽ち諸の比丘に白す、諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『僧、彼比丘の爲に、所還識第二罪覆藏日に隨つて、覆藏羯磨を與ふるを聽す。』と。時に比丘有り、二僧殘罪を犯して、二倶に覆藏す。彼覆藏を乞ふ時、一罪を說いて一罪を覆藏す。彼所說の罪に隨つて、僧に從ひ覆藏羯磨を乞ふ。僧、覆藏羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、第二犯に於て慚愧の心生じ、自ら念ずらく、『我當に云何かすべき』と。諸の比丘に白す、諸の丘丘、佛に白す。佛言はく、『僧應に所犯の第二罪覆藏日に隨ひ、覆藏羯磨を與ふべし。』佛言はく、『汝曹善く聽け、若し比丘二僧殘罪を犯して二倶に覆藏し、一罪を憶して一罪を憶せず。彼比丘、所憶の罪、不憶の罪、倶に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧彼に二罪の覆藏羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、客比丘

の來る有り、法を知り、律を知り、摩夷を知る。彼客比丘、舊比丘に問ふ。「此比丘、何の犯す所ぞ。何が故に覆藏を行ずる」と。舊比丘答へて言はく「長老、此比丘、二僧殘罪を犯して二倶に覆藏す。一罪を憶して一罪を憶せず。二倶に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧、彼に倶に覆藏羯磨を與ふ。是故に彼比丘、覆藏を行ず」と。客比丘言はく「長老、彼覆藏羯磨を與ふるを成ぜず、何を以ての故に、彼比丘所憶の罪に、覆藏羯磨を與ふるは善からず、非法なり、羯磨成就せず、衆僧應に突吉羅懺を作すべし、彼應に摩那埵を與ふべし、疑と不疑と、識と不識とも亦是の如し」と。「時に比丘有り、僧殘罪を犯して覆藏すること兩月なり、彼一月を憶して一月を憶せず。彼所憶の一月に隨つて、僧に從ひ覆藏羯磨を乞ふ。僧一月の覆藏羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、第二月を憶す、自ら念ずらく『我云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧彼比丘に、隨憶第二月覆藏羯磨を與ふるを聽す。疑と不疑も亦是の如し、識と不識も亦是の如し。覆藏を乞ふ時、一月を覆藏し、一月を發露するも亦是の如し。』「佛、諸の比丘に告げたまはく、『善く聽け、若し比丘僧殘罪を犯し、覆藏兩月なり、一月を憶して一月を憶せず、二倶に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧彼に兩月覆藏羯磨を與ふ。彼覆藏を行ずる時、客比丘有りて來る、法を知り、律を知り、摩夷を知る。彼客比丘、舊比丘に問うて言はく「長老、彼何の犯す所ぞ」と。答へて言はく「此比丘僧殘罪を犯す、覆藏すること兩月なり、一月を憶して一月を憶せず、彼憶と不憶との二倶に僧に從つて兩月覆藏を乞ふ、僧彼に隨

つて兩月の覆藏羯磨を與ふ。是故に彼比丘覆藏を行ず」と。彼客比丘、舊比丘に語りて言はく、「善からず覆藏を與ふること。何を以ての故に、彼比丘一月を憶す、覆藏を與ふるは善し、一月を憶せず、覆藏を與ふるは善からず、非法にして羯磨成せず、僧應に突吉羅懺を作すべし。彼比丘には、應に摩那埵を與ふべし」と。疑と不疑とも亦是の如し、識と不識とも亦是の如し」と。時に比丘有り、二僧殘罪を犯して、二俱に覆藏す。彼道を罷め、道を罷め已りて復還りて大戒を受け、大戒を受け已りて一罪を覆藏す。自ら念ずらく、『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛、言はく、「若し比丘二僧殘罪を犯して一罪を覆藏し、彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏せば、僧應に先に犯すところの覆藏日、及び後の覆藏日に隨つて、覆藏羯磨を與ふべし、覆藏羯磨を與へ已りて摩那埵を與へよ」と。時に比丘有り、二僧殘罪を犯して二俱に覆藏す。彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を發露せば、僧應に彼比丘の先の所覆藏日に隨ひ、覆藏羯磨を與ふべし、覆藏羯磨を與へ已りて摩那埵を與へよ」と。時に比丘有り、二僧殘罪を犯して三俱に覆藏せず。彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏す。彼自ら念じて言はく、『我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『若し比丘二僧殘罪を犯し、二俱に覆藏せず、彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏せば、僧應に彼比丘の、後の覆藏日に隨つて覆藏羯磨を與ふべし、然る

後に摩那埵を與へよ。』時に比丘有り、『二僧殘罪を犯し、二俱に覆藏せず、彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を發露せば、僧即ち應に二罪摩那埵を與ふべし。』時に比丘有り、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を覆藏せず、彼道を罷め、道を罷め已りて復還つて大戒を受け、大戒を受け已りて先に一罪を發露するに、後に二俱に覆藏す。彼是念を作さく『我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を覆藏せず、彼道を罷め道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、先に一罪を發露するに、後には二俱に覆藏せば、僧彼比丘に、所犯に隨ひて、一罪前後覆藏と一罪後覆藏日羯磨を與ふべし。』時に比丘有り、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を發露す。彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、先に覆藏する所は、後に復覆藏し、先に發露する者は、後にも亦發露す。『僧應に前後所覆藏の一罪に隨つて、覆藏羯磨を與ふべし。覆藏せざるところの第二罪は應に摩那埵を與ふべし。』時に比丘有り、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を發露す。彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、先に覆藏するところは後に發露し、先に發露するところは、後に便ち覆藏す。『僧應に先に覆藏する所に隨ひ一罪を與へ、覆藏羯磨を與ふべく、後に覆藏する所の第二罪に隨つて、覆藏羯磨を與ふべし。』時に比丘有り、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を發露す。彼道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、先に覆藏するところは、

【八】覆藏を行じて休道せる比丘に對する規定。

一倶に發露す。『僧應に彼比丘に、前に犯すところの一罪覆藏日に隨つて覆藏羯磨を與ふべし、第二罪は、二倶に摩那埵を與ふべし、一罪を憶し、一罪を憶せずも、四句を作れば亦是の如し。一罪を疑ひ、一罪を疑はず、四句を作るも亦是の如し。一罪を識り、一罪を識らず、四句を作るも亦是の如し。覆藏を乞ふ時、一罪を覆藏し、一罪を發露する四句を作るも亦是の如し。（此中覆藏一罪不覆藏一罪より、此に至るまで、凡そ五句あり、一句に各四句あり、覆一不覆一の如き、四句を作れば、凡そ二十句あり。）覆藏を行ずる時二十句亦是の如し、覆藏を行じ竟りて二十句亦是の如し、摩那埵を行ずる時二十句亦是の如し、摩那埵を行じ竟りて二十句亦是の如し。沙彌還大戒を受くるの百句を作るに、亦是の如し、顚狂百句亦是の如し、心亂百句亦是の如し、痛惱百句亦是の如し、僧爲に作見罪擧を作す百句亦是の如し、不懺悔罪百句亦是の如し。惡見不捨罪、百句亦是の如し。』

（八）爾時、覆藏を行ずる比丘道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて白らく、『我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す、佛言はく、『覆藏を行ずる比丘道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて應に續いて前日の次行の覆藏を行ずべし。』時に比丘有り、應に爲に本日治を作すべし。彼比丘道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、僧應に彼比丘の爲に、本日治白四羯磨を作すべし。時に比丘有り、覆藏を行じて道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、僧應に六夜摩那埵白四羯磨を與ふべし。時に比丘有り、摩那埵を行じて道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、摩那埵を行ずる日

は便ち止め、未だ行ぜざる日は、應に還續行すべし。時に比丘有り、摩那埵を行じ竟りて道を罷め、道を罷め已りて還大戒を受け、大戒を受け已りて、僧應に彼に出罪白四羯磨を與ふべし。還沙彌の五句を作るも亦是の如し、癲狂の五句も亦是の如し、心亂の五句も亦是の如し、痛惱の五句も亦是の如し、僧爲に不見罪擧、不懺悔、惡見不捨擧羯磨を作す、各五句亦是の如し。時に覆藏を行ずる比丘有り、中間に罪を犯し、日數を知りて覆藏す。彼自ら念ずらく『我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す。佛言はく、『若し覆藏を行ずる比丘、中間に罪を犯し、日數を知りて覆藏すれば、僧應に中間犯罪に隨つて覆藏羯磨を與ふべし、覆藏羯磨を與へ竟りて本日治を與へ、覆藏本日治を行じ竟りて摩那埵を與へ、摩那埵を與へ竟りて應に出罪を爲すべし。日數を知らずして覆藏するも亦是の如し、數を知り數を知らず覆藏するも亦是の如し、覆藏を行じ竟るも亦是の如し、爾時摩那埵を行ずる比丘有り、中間に罪を犯し、日數を知りて覆藏せず、彼是念を作さく『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し摩那埵を行ずる比丘、中間に重ねて犯し、日數を知りて覆藏せざれば、僧應に摩那埵を與ふべし、摩那埵を與へ已りて、應に摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を行じ已りて、應に出罪羯磨を與ふべし、日數を知らずして覆藏せざるも亦是の如し。日數を知り日數を知らず覆藏せざるも亦是の如し。摩那埵を行じ竟り、日數を知りて覆藏せざるも亦是の如し、日數を知らずして覆藏せざるも亦是の如し。日數を知り、日數を知らず覆藏せ

ざるも亦是の如し。』爾時比丘有り、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、覆藏す、覆藏せず、等覆し、等覆せず、一名と多種、自性と非自性、別異に住するとなり、彼是の如きの念を作す、「我當に云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼比丘の爲に、覆藏する所の日に隨ひ、覆藏羯磨を與ふるを聽す。應に是の如く與ふべし。彼比丘應に僧中に至り、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、合掌して白して言すべし。「大德僧聽け、我某甲比丘僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、覆藏す、覆藏せず、等覆し、等覆せず、乃至別異に住す。覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、願くば我に覆藏日羯磨を與へよ、慈愍の故に」と、是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、覆藏す、覆藏せず、等覆し、等覆せず、乃至別異に住す、彼覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧彼比丘に、覆藏日羯磨を與ふるを、白すること是の如し」と。「大德僧聽け、彼某甲比丘、僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。彼覆藏日に隨ひ、僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ、僧今某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧彼某甲比丘の爲に、覆藏日羯磨を作すを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是の如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふるを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ』と。彼覆藏を行

ずる時、中間重ねて更に罪を犯し、日數を知りて覆藏し、彼是の如きの念を作す、「我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『僧彼比丘に、前罪中間覆藏を與へ、本日治白四羯磨を與ふべし、應に是の如く與ふべし。彼比丘應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、僧足を禮し已り、右膝を地に著け、合掌して是の如きの白を作す。「大德僧聽け、我某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。我覆藏する所の日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ひ、僧已に我に覆藏羯磨を與ふ、我某甲比丘、覆藏を行ずる時、重ねて更に罪を犯し、日數を知りて覆藏し、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、願くば僧我に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與へよ、慈愍の故に。」是の如く第二第三說く。衆應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし「大德僧聽け、此某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す、此比丘僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ。此比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて更に罪を犯し、日數を知りて覆藏す。今僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧此比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふるを、白すること是の如し」と、「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。此比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に此比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此比丘羯磨を行ずる時、中間更に罪を犯し、日數を知りて覆藏す。今僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧今此比丘に、前犯中間

重犯覆藏本日治羯磨を與ふ、誰か長老、某甲比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是の如く第二第三說く。僧已に某甲比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與へ竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ」。彼比丘覆藏を行ずる時、中間に第二に重犯するも亦是の如し。彼比丘覆藏を行じ竟り、佛に白す。佛言はく、「僧此比丘に、六夜摩那埵白四羯磨を與ふることを聽す。應に是の如く與ふべし。彼比丘應に僧中に來至し、偏に右の肩を露し、革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝を地に著け、合掌して白して言ふべし。「大德僧聽け、我某甲比丘、僧殘罪を犯す。日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。覆藏日に隨ひ、僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ。僧已に我に隨覆藏日羯磨を與ふ。我覆藏を行ずる時、中間重ねて犯す、日數を知りて覆藏す。僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に我に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。我覆藏を行ずる時中間更に第二犯し、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に我に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ。我某甲比丘覆藏を行じ竟る。今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、願くば我に六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く第二第三說く。衆中應に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此某甲比丘僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。此某甲比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に此比丘に覆藏羯磨を與ふ。此比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて

覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に此比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。此比丘覆藏を行ずる時、中間更に第二重犯す。僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に六夜摩那埵を與ふるを、白すること是の如し」と。「大德僧聽け、此某甲比丘、僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に此比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す。僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧此比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて第二犯を犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧此比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧今彼比丘に六夜摩那埵を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に六夜摩那埵を與ふるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是の如く第二第三說く。僧已に某甲比丘に六夜摩那埵を與ふるを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。」時に彼比丘摩那埵を行じ竟り、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、「僧應に彼比丘に、出罪白四羯磨を與ふべし。上の如く是の如く出罪すべし。」若は衆僧彼比丘の爲に出罪すること如法ならず。佛、諸の比丘に告げたまはく、「善く聽け、比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、

乃至別異に住す、彼比丘僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ、僧隨覆藏日羯磨ふ與ふ。彼覆藏を行ずる時、中間に重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、彼僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧彼比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行ずる時、中間に第二犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふるに非法なれば、彼比丘謂ふ便ち覆藏を行じ竟ると、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧彼比丘に六夜摩那埵を與ふるも非法なり。彼比丘謂へらく、便ち摩那埵を行じ竟ると、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼比丘に出罪を與ふるは非法なり。我は此比丘は非清淨なり、罪は不出なりと說く。是中比丘有り、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。彼比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に彼比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ、彼比丘覆藏を行ずる時、中間に第二犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從ひ前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ如法なり。彼比丘覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふるに不如法なり、彼比丘謂へらく、摩那埵を行じ竟ると、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼比丘に出罪を與ふれば非法なり。我彼比丘は不淸淨なり、罪不出なりと說く。時に比丘有り、僧

殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す、彼比丘所犯に隨ひ、僧に從つて覆罪羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ、彼比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行ずる時、中間第二に重犯す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與へて如法なり。彼比丘覆藏を行じ已り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に彼比丘に六夜摩那埵を與へて如法なり。彼比丘摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼比丘に出罪を與へて非法ならば、我此人は不清淨なり、罪不出なりと說く。此中日數を知りて覆藏せざる三句も亦是の如し。日數を知りて覆藏し、覆藏せざる三句も亦是の如し。日數を知りて覆藏する三句も亦是の如し。日數を知らず、覆藏せざる三句も亦是の如し。日數を知らず、覆藏し、覆藏せざる三句も亦是の如し。日數を知り、日數を知らず覆藏する三句も亦是の如し。日數を知り、日數を知らず、覆藏せざる三句も亦是の如し。日數を知り、日數を知らず、覆藏し、覆藏せざる三句も亦是の如し。是中比丘有り、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異なり。彼比丘覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に彼比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に彼比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼比丘覆藏を行ずる時、中

【九】罪を犯せるを誤認して覆藏せるに對する羯磨

間第二に重犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧彼比丘に、前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ、如法なり。彼比丘覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼比丘に六夜摩那埵を與ふ、如法なり。彼比丘摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼比丘に出罪を與ふ、如法なり。我は此清淨にして無犯なり、罪出づるを得と說く。數を知りて覆藏せず三句亦是の如し、數を知りて覆藏し、覆藏せず三句亦是の如し、數を知らず、覆藏し、覆藏せず三句亦是の如し。數を知り、數を知らず、覆藏す三句も亦是の如し、數を知り、數を知らず、覆藏せず三句も亦是の如し、數を知り、數を知らず、覆藏す、覆藏せず、三句亦是の如し。

(九三)爾時異住處有り、二比丘有り僧殘罪を犯す、彼比丘卽日住處より出て去りて言はく、『若し清淨比丘を得ば、我當に懺悔すべし。』一比丘初め去る時覆藏す。第二比丘、異比丘の便ち覆藏するを見、是れ二俱に覆藏すと爲す。一は罪を憶し、第二は憶せず、彼憶して覆藏する者は、是を覆藏と爲す、憶せざる者は覆藏に非ず。一は疑ひ、二は疑はず、彼疑つて覆藏する者は、是を覆藏と爲す、疑はずして覆藏する者は、是を覆藏と爲す。一は知り、二は知らず、彼知つて覆藏する者は、是を覆藏と謂ひ、彼知らずして覆藏する者は、是を不覆藏と爲す。時に比丘有り、僧殘罪を犯し、波羅夷を犯すと謂ひて覆藏す。彼是の如きの念を作す、『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘僧殘罪を犯し、是れ波羅夷と謂ひて覆藏するは、應に爲に突吉羅懺を作し、

後に摩那埵を與ふべし」と。時に比丘有り、僧殘罪を犯し、彼は是れ波逸提、波羅提提舍尼、偸蘭遮、突吉羅、惡說と謂ひて覆藏す。彼是の如きの念を作す『我當に云何すべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す、佛言はく、『若し比丘僧殘罪を犯し、是れ波逸提、乃至惡說と謂ひ、故に覆藏する者は、應に敎へて突吉羅懺悔を作さしめ、已りて摩那埵を與へよ。』時に比丘有り、波逸提を犯し、是れ波羅夷と謂ひて覆藏す。佛言はく、『若し比丘波逸提を犯し、是れ波羅夷と謂ひて覆藏せば、敎へて突吉羅懺を作さしめ、後に如法に懺せよ。』時に比丘有り波逸提を犯し、僧殘乃至惡說と謂ひて覆藏す。佛言はく、『應に突吉羅懺せしめ、懺し已りて後如法に懺せよ、波羅提提舍尼、偸蘭遮、突吉羅、惡說も亦是の如し。應に敎へて突吉羅懺を作さしめ、懺し已りて覆藏を與ふべし、波逸提乃至惡說を犯すも亦是の如し。』時に異住處に比丘有り、衆多の僧殘罪を犯す、彼比丘犯數を憶せず、日數を憶せず、彼是の如きの念を作す『我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘僧殘罪を犯し、犯數を憶せず、日數を憶せざれば、應に清淨已來覆藏を與ふべし。若し犯數を憶せざるも、亦應に清淨已來覆藏を與ふべし。若し日數を憶して犯數を憶せざれば、應に日を數へて覆藏を與ふべし。疑と不疑も亦是の如し、識と不識も亦是の如し。彼比丘或は一罪の數を憶し、或は一罪の數を憶せず、或は一罪の日數を憶し、或は一罪を日數の憶せず、應に清淨已來覆藏を與ふべし。若し犯數を憶し、或は一罪の日數を憶し一罪の日數を憶せず、應に清淨已來覆

藏を與ふべし。若し日數を憶し、或は犯數を憶し、或は犯數を憶せず、應に日を數へて覆藏を與ふべし。疑と不疑も亦是の如し、識と不識も亦是の如し。時に比丘有り、僧殘罪を犯し、數を知りて覆藏せず、彼僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧六夜摩那埵を與ふ。其日に於て中間に重ねて犯す、數を知りて覆藏す。彼是の如きの念を作す「我當に云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、「若し比丘僧殘罪を犯し、數を知りて覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧六夜摩那埵を與ふ。即ち其日に於て中間重ねて犯し、數を知りて覆藏す、僧應に更に彼比丘に摩那埵を與ふべし、語りて言へ「汝比丘、應に更に摩那埵を行ずべし」」と。若し摩那埵を行じて一夜乃至六夜の中間に重ねて犯し、數を知りて覆藏せば、僧應に此比丘に摩那埵を與ふべし、摩那埵を與へ已りて、應に摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を行じ已りて、應に出罪を與ふべし。時に比丘有り。僧殘罪を犯す、數を知りて覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼比丘に六夜摩那埵を與ふ。後比丘其日に於て、中間重ねて犯す、數を知らずして覆藏す、僧應に彼比丘に六夜摩那埵を與ふべし、語りて言へ「比丘汝更に摩那埵を行せよ」と。若し行ずること一夜、乃至六夜の中間に重ねて犯す、數を知らず、覆藏す、僧應に彼に摩那埵を與ふべし、彼に摩那埵を與へ已りて、應に摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を與へ已りて應に出罪を與ふべし。時に比丘有り僧殘罪を犯す、日數を知りて覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼比丘に六夜摩那埵を與ふ、彼比兵卽ち其日に於て、中間重

ねて犯す、數を知り、數を知らず、覆藏す、僧應に彼比丘に六夜摩那埵を與ふべし、語りて言へ「汝比丘更に摩那埵を行ぜよ」と。若し行ずること一夜乃至六夜の中間に重ねて犯し數を知り、數を知らず覆藏す、僧應に彼比丘に六夜摩那埵を與ふべし、彼摩那埵を行じ已り、應に摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を與へ已りて、應に出罪を與ふべし。數を知らず、覆藏せず、亦是の如し。數を知り、數を知らず、覆藏せず、亦是の如し。「一人犍度具足し竟る。

四分律卷第四十五

【一】比丘の犯罪するも覆藏して懺悔せざる者に對して治する法を説く。今犯罪比丘の覆藏するを治する法を一一について明す。

四分律　卷第四十六　三分の十

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

覆藏犍度第十三

（一）爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に六群比丘覆藏を行じ、更互に覆藏羯磨、本日治、摩那埵、出罪羯磨を與ふ。諸の比丘佛に白す。佛、言はく、「自ら覆藏を行じ、他に覆藏羯磨、本日治、摩那埵、出罪を與ふべからず」と。彼本日治を行ずる比丘、更互に覆藏、本日治、摩那埵、出罪を作す。佛、言はく、「自ら本日治を行じ、更互に覆藏、本日治、摩那埵、出罪を作すべからず」と。彼自ら摩那埵を行ずる比丘、更互に覆藏を作す。佛、言はく、「自ら摩那埵を行じ、他のために覆藏羯磨乃至出罪を作すべからず」と。彼、自ら出罪す、更互に覆藏羯磨乃至出罪を作す。佛、言はく、「自ら出罪し、他に覆藏羯磨乃至出罪を與ふべからず」と。彼覆藏を行じ、更互に覆藏羯磨、本日治、摩那埵を作し、足滿二十人出罪す。佛、言はく、「爾すべからず、自ら覆藏本日治を行ずるも亦是の如し、自ら摩那埵を行ずるも亦是の如し、自ら出罪を行ずるも亦是の如し。彼覆藏を行ずる者は、他のために大戒を受けしめ、他に依止を與へ、沙彌を畜へ、僧差を受け、差し已りて比丘尼

を教授す。佛、言はく、『覆藏を行ずる者は爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、餘の比丘能く說戒する者有るを知り、而も他のために說戒す。僧中に於て或は毘尼の義を問ひ、或は答ふ。衆僧の作羯磨人の數中に在りて僧羯磨を受け、差して事を平斷す、衆僧の差使を受く。佛、言はく、『覆藏を行ずる者は爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、或は早く聚落に入り、暮遲りて還り、或は沙門に親附せずして外道に親近し、比丘に隨順せず、異教を說く。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、若は此罪を犯し、若は相似、若は此より生じ、若は彼より重し、他の羯磨及び作羯磨者を呵す。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、清淨比丘の敷座、洗脚、拭革屣、揩摩身を受く。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、清淨比丘の起迎逆、禮拜、執手、恭敬問訊、爲持衣鉢を受く。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、清淨比丘を擧して、憶念を作し、自言を作し、他の爲に遮を作し、說戒を遮し、自恣を遮し、清淨比丘と共に鬪ふ。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、清淨比丘と共に白衣の家に入り、或は他の比丘に隨つて行き、或は他の比丘を將ゐて行き、或は他の供養を受け、或は清淨比丘の剃髮を受け、或は清淨比丘の作使を受く。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる比丘、清淨比丘と行き、前食後食の上に至り、前に在りて行き、或は並び語り、並び行き、或は衣を反抄し、或は通肩に衣を披き、或は裹頭し、或は兩肩を覆ひ、或は革屣を著く。佛、言はく、『爾すべからず、自今已去、偏

に右の肩を露し革屣を脫し、後へに隨從して行くことを聽す』と。彼覆藏を行ずる者、是の如きの意を作す、『食上に行かざれば、恐らくは餘の比丘我覆藏を行ずるを知らん』と。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、是の如きの意を作す。『食上に至りて坐せずんば、恐らくは餘の比丘、我覆藏を知らん』と。彼覆藏を行ずる比丘、是の如きの意を作す、『請うて食を取りて食せば、恐らくは、餘の比丘我覆藏を行ずるを知らん』と。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、清淨比丘と次に隨つて坐す。佛、言はく、『爾すべからず』末行に在りて坐することを聽す、世尊是の如きの教有り、犯罪人は下行に在りて坐せよ』と。彼白衣の下に在りて坐す、佛、言はく、『爾すべからず』と。彼沙彌の下に在りて坐す。佛、言はく、『爾すべからず、應に大比丘の末行に在りて坐すべし』と。彼覆藏を行ずる者、清淨比丘と共に經行處に行き、彼下經行處に在り、己高經行處に在り、或は前に在りて行き、或は並び語り、或は共に行き、衣を反抄し、通肩に衣を披き、或は裹頭し、兩肩を覆ひ、革屣を著く。佛、言はく、『爾すべからず』と。佛、言はく、『偏に右肩を露し革屣を脫し、後に在りて行くことを聽す』と。彼覆藏を行ずる者、道路を行き、是の如きの意を作す。『正道に在りて行かざれば、恐らくは餘の比丘、我覆藏を行ずるを知らん』と。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、道に在りて行く、是の如きの意を作す『後に在りて行かば、恐らくは餘の比丘我覆藏を行ずるを知らん』と。佛、言はく、『爾すべからず』と。彼覆藏を行ずる者、清淨

比丘と共に、一座一床一板に坐す。佛、言はく、『爾すべからず』と。若は長床板は、佛言はく、『隔斷を作りて然る後に坐することを聽す。若し餘床を取らば、後に在りて坐せよ』と。彼覆藏を行ずる者は、若は求食大食上に在りて、應に掃灑し、坐具を敷き、水瓶洗瓶を具し、盛殘食器を具すべし。應に清淨比丘の爲に、坐具を敷き、乃ち洗足器物、拭足巾、盛水器に至るべし。清淨比丘來らば、應に出でゝ、遠く迎へ、爲に衣鉢を持つべし。若し鉢床、鉢支有らば、應に上に安置すべし。若し僧伽梨頭上肩上に在らば、應に取りて之を看るべし。垢穢無きや不やと。若し塵垢穢汚有らば、應に却くべし、便ち却けて應に浣ふべきは當に浣ふべし、浣ひ已らば、曬して繩床上に著け、應に清淨比丘に、洗足器、拭足巾、盛水器を與ふべし。革屣を拭ひ已らば、左面に著て之を看よ、泥水をして汚さしめざるや不やと。若し汚水の汚す有らば、當に移して之を遠くべし。清淨比丘の爲に、足を洗ひ已らば、行水器を除去し、本處に安置せよ。彼應に手を淨洗し、清淨比丘に與へて食を過し、清淨比丘食する時は、應に所須を供給すべし、若は酪漿、若は蔓菟、苦酒、鹽、菜、應に與ふべし、若し熱ければ應に扇ぐべし、水を須むれば應に水を與ふべし、若し時の過ぐるを恐るれば、當に俱に食すべし。清淨比丘食し已らば、當に爲に鉢を取り、與に手を洗ひ、若し自ら食し已りて殘食有れば、人若は非人に與へ、若は無虫水中、若は無草處に著き、食器を洗ひ、本處に還復すべし。應に食堂を掃灑し、糞土を除去すべし。彼比丘便ち用ひ已りて、常食の鉢に、糞掃を盛りて棄つ。餘の比丘見て之

を懸む。佛、言はく、『鉢を用ひて糞掃を棄つべからず、瓫若は澡盤、若は掃帚鉢を以て、應に淨潔に畜ふべし。彼覆藏を行ずる比丘、若し僧洗浴すれば、應に淸淨比丘の所に至りて問うて言ふべし。『大德、洗ふや不や』と。若し彼れ答へて、『當に洗ふべし』と言はば、此比丘便ち應に先づ浴室を看るべし。『塵穢無きや不や』と。若し塵穢有らば、應に掃ふべきは便ち掃ふべし、應に水灑すべきは、便ち灑げ、應に薪を取るべければ便ち取れ、應に破るべきは便ち破れ、應に火を然やすべければ便ち火を然せ、應に薪を著くべきは便ち著け、應に淸淨比丘の爲に、洗浴瓶、若は浴床、若は刮汗刀、若は水器、若は泥器、若は樹皮、若は細末藥、若は泥を具すべし。應に上座に問ひ已りて燃火すべし。若し淸淨比丘病み、若は老羸ならば、應に扶け將ひて浴室所に至るべし。若し行く能はざれば、繩床、木床若は衣を以て舁ぎ、浴室所に至り、應に淸淨比丘の衣を取り、衣架上若は龍牙杙上に安んずべし、若し油有らば、應に爲に身に塗るべし。彼油器安處無くして堅牢ならず、佛、言はく、『龍牙杙上に安著し、若は壁上に懸著せよ』と。若し淸淨比丘病み、老羸せば、應に扶け將ひて浴室の中に入り、繩床、木床、浴瓶、刮汗刀、水器、泥器を與へ、樹皮、細末藥、泥を與ふべし。若し煙來りて眼を熏すれば、當に爲に障を安んずべし。若し頭熱く背熱ければ、應に覆を爲すべし。若し洗浴せんと欲して浴室に入らば、應に淸淨比丘に白すべし。若し是の如きの意を作さんには、『淸淨比丘を白さんと欲するも、恐らくは炊亂して共に相逼迮せん』と。直爾に浴室に入り、淸淨比丘の後に在りて

住し、身を揩摩せよ、彼れ即ち浴室に入り、清淨比丘の後に在りて住し、應に餘の比丘の爲に身を揩摩すべし、他の身を揩摩するを受くべからず。清淨比丘の爲に洗浴し已り、然る後に自ら浴せよ。若し清淨比丘老ゆれば、應に將ひ出づべし、若し病まば、繩床若は木床を以て、舁いで浴室を出でよ。應に清淨比丘に敷座を與へ、洗脚器、拭巾、洗脚、革屣を與ふべし。應に清淨比丘の衣を取り、舒看抖擻すべし、蛇蝎諸の毒虫有らしむるなかれ。然る後授與せよ。若し眼藥丸香有らば與ふべし、若し甜、蒲桃漿、蜜、石蜜有らば、手を淨洗して受けて、清淨比丘に授與せよ。若し清淨比丘にして氣力に乏しければ、應に扶けて、若は繩床、木床若は衣を以て、舁いで房に還るべし。應に先づ清淨比丘の房内に入り、臥具を敷くべし。若くは氈を手にて捫摸して看、清淨比丘を扶けて臥せしめ、襯僧衣を以て内に著け、被を上に覆へ。若し房を出づる時は、應に戸を閉づべし。浴室の中に至りて看よ、若し繩床、木床、若は浴瓶、若は刮汗刀、水器、泥器、樹皮、細末藥、泥あらば、本處に還復し、應に浴室を洗ふべければ便ち洗へ。不淨水有らば、應に出すべきは便ち出せ。火有りて應に滅すべければ便ち滅し、應に覆ふべきは便ち覆へ。若し浴室の戸は、應に閉づべきは便ち閉ぢ、應に脫舉すべきは便ち舉せよ。應に日に三時清淨比丘を見るべし。彼れ應に作すべきは如法に作すべし。若し清淨比丘所作有らば、違逆すべからず、若し違逆すれば如法に治すべし。彼覆藏を行ずる者は、布薩日に至らば、應に布薩處を掃灑し、坐を敷き、水瓶、洗脚瓶、然燈を具し、舍羅を具す

べし。彼覆藏を行ずる者は、布薩竟らば、應に床座、水瓶、洗脚瓶、舍羅を還復して本處に著くべし。彼覆藏を行ずる比丘、上好房中に在りて住し、餘の客比丘住處無し。諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『覆藏を行ずる比丘、上好房中に在りて住すべからず、小房中に在りて住することを聽す』と。客比丘來りて、覆藏を行ずる比丘を遣りて出でしむ。佛、言はく、『遣るべからず、亦去るべからず、是の如きの語を作すことを聽す。「大德、我曹二三人共宿することを得ず」と。』覆藏を行ずる比丘是の如きの念を作す、『衆僧の衣物、次に隨つて取るとせんや、坐處にて取るべきや』と。佛、言はく、『次に隨つて取り、已りて下行に在りて坐すべし』と。彼覆藏を行ずる比丘、是の如きの念を作す、『我曹更互に作使することを得るや不や』と。佛、言はく、『聽す』と、『我曹自ら相恭敬禮拜し、迎逆執手問訊することを得るや不や』と。佛、言はく、『聽す』と。彼れ是の如く念ず、『我曹僧伽藍人、沙彌を使ふるを得るや不や』と。佛、言はく、『聽す』と。『我等僧伽藍人、沙彌の禮拜、迎逆執手問訊を受くるを得るや不や』と。佛、言はく、『受くることを得』と。彼覆藏を行ずる者、淸淨比丘に白さず、佛、言はく、『白すことを聽す、應に是の如く白すべし、布薩の日、彼比丘應に僧中に至りて偏に右肩を露し革屣を脫し、右膝を地に著け、是の如きの白を作す。「大德僧聽け、我某甲比丘僧殘罪を犯す、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に我に隨覆藏日羯磨を與ふ。我某甲已に若干日を行じ、餘は若干日の在る有り、大德に白す「我覆藏を行ずるを知らしめよ」と。』若は大衆集まり

難く、若は行くを欲せず、若は彼人軟弱にして多く羞愧有らば、應に清淨比丘の所に至りて白して言すべし、『大德上座、我今日教勅を捨てて作さず』と、若は作さんと欲する時は、清淨比丘の所に至りて白して言すべし、『我今日教勅する所に隨つて作すべし』と。彼覆藏を行ずる者、餘處に至りて餘の比丘を見て白せず。佛、言はく、『應に白すべし、白せずして一夜を失へば突吉羅を得』と。世尊既に白すことを聽す。餘の比丘便ち此より餘處に至る。白する此處より餘處に至りて疲極す。佛、言はく、『此處より餘處に至りて白すべからず。若し因緣有り往かば、應に白すべきことを聽す、若し復白せずして一夜を失へば突吉羅罪を得。』彼覆藏を行ずる者、客比丘有りて來るに白せず。佛、言はく、『白すべし、若し白せずして一夜を失へば突吉羅罪を得』と。世尊既に彼に客比丘に白すことを聽したまふ。便ち道路に至り、諸の疾行の比丘に白して疲極す。佛、言はく、『道路に往いて疾行の比丘に白すべからず、應に僧伽藍内に在り、徐行の者に白すべし、若し白せずして一夜を失へば、突吉羅罪を得』と。覆藏を行ずるもの病む、信を遣して白せず。佛、言はく、『白すべし、若し白せずして一夜を失へば、突吉羅罪を得』と。彼覆藏を行ずる者二三人、一屋を共にして宿す。佛、言はく、『爾すべからず、若し二三人一屋を共にして宿し、一夜を失へば突吉羅罪を得。』彼覆藏を行ずる者、比丘なき處に在りて住す。佛、言はく、『爾すべからず、若し住して一夜を失へば突吉羅罪を得』と。彼覆藏を行ずる者、半月半月說戒の時、白せず。佛、言はく、『白すことを聽す、若し白せずして一夜

を失へば突吉羅罪を得』と。八事の失夜行り、餘寺に往いて白せず、客比丘の來る行り白せず、緣事行り、自ら外に出でて白せず、寺内徐行の者に白せず、病んで信を遣して白せず、二三人一屋を共にして宿す、無比丘の處に在りて住す、半月半月說戒の時白せず、是を八事の失夜と爲す。佛半月半月說戒の時白すを聽す。應に是の如く白すべし。彼覆藏を行ずる者、應に僧中に至りて、偏に右肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して白して言すべし。『大德僧聽け、我某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す。我某甲比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏日羯磨を乞ふ。僧已に我に隨覆藏日羯磨を與ふ。我某甲比丘已に若干日を行じ、未だ若干日を行ぜず、大德に白す。我覆藏を行ずるを知らしむ』と。摩那埵を行ずる比丘も、亦行ずること上の諸事の如くすることを聽す。摩埵那を行ずる者は、應に常に僧中に在りて宿し、日々白すべし。應に是の如く白すべし。偏に右肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して白せ。『大德僧聽け、我某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に我に六夜摩那埵を與ふ、我某甲比丘已に若干日を行じ、未だ若干日を行ぜず、諸の大德に僧に白す、我摩那埵を行ずることを知らしむと。』覆藏犍度具足し竟る。

遮犍度第十四

【二】比丘說戒の時、不如法の比丘を遮し之を列するを聽さざる法を說く。第十四犍度にある。今先づ如法に說戒を遮すると不如法にするとを明す。

（二）爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に六群比丘是の如きの念を作す。『世尊無數に方便して諸の比丘を教へたまひ、展轉して相教へ、更る相受語せしむ』と。便ち清淨無罪の比丘を擧す。佛、言はく、『清淨無罪の比丘を擧すべからず』と。佛、言はく、『先づ求聽することを聽す』と。六群比丘、佛の先づ求聽せしむるを聞き、彼れ即ち清淨比丘の、先づ六群比丘に從つて求聽する者に求聽す。佛、言はく、『爾すべからず、自今已去、內に五法有らば、求聽すべきを聽す。時を知りて非時を以てせず、眞實にして不實を以てせず、利益有りて損減を以てせず、柔軟にして麤獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず』と。時に六群內に五法無し、餘の比丘內に五法有り、六群比丘に從つて求聽す、而も聽を與へず。諸の比丘佛に白す、佛、言はく、『若し內に五法有りて聽を求むる者は、應に與ふべし』と。時に六群比丘、他求聽すれば便ち去り、他の聽を許し已れば亦去る。佛、言はく、『爾すべからず、自言を作すことを聽す』と。時に六群比丘、他自言を求むるを許し已れば便ち去る、自ら自言を作し已れば復去る、佛、言はく、『爾すべからず』と。佛、言はく、『布薩說戒の時、應に說戒を遮すべきことを聽す』と。時に六群比丘、佛の說戒を遮するを聽したまふと聽き、便ち清淨比丘の說戒を遮す。佛、言はく、『爾すべからず』と。佛、言はく、『爾等、善く聽け、如法に說戒を遮する有り、不如法に說戒を遮する有り、一非法一如法、二非法二如法、三非法三如法、四非法四如法、五非法五如法、六非法六如法、七非法七如法、八非法八如法、九非法九如法、十非法十如法有り。何等か一非

法なる。若し無根作を遮すれば是を一非法となす。何等か一如法なる。有根作を遮すれば、是を一如法と爲す。何等か二非法なる。無根作不作を遮すれば、是を二非法となす。何等か二如法なる。有根作不作を遮すれば、是を二如法と爲す。何等か三非法なる。無根破戒破見破威儀を遮すれば、是を三非法と爲す。何等か三如法なる。有根破戒破見破威儀を遮すれば、是を三如法と爲す。何等か四非法なる。無根破戒破見破威儀無根邪命を遮すれば、是を四非法と爲す。何等か四如法なる。有根破戒破見破威儀有根邪命を遮すれば、是を四如法と爲す。何等か五非法なる。無根波羅夷僧殘波逸提波羅提提舍尼を遮し、無根突吉羅を遮すれば、是を五非法と爲す。何等か五如法なる。有根波羅夷僧殘波逸提波羅提提舍尼有根突吉羅を遮すれば、是を五如法と爲す。何等か六非法なる。無根破戒作不作破見作不作破威儀作不作を遮する、是を六非法と爲す。何等か六如法なる。有根破戒作不作破見作不作破威儀作不作を遮す、是を六如法と爲す。何等か七非法なる。無根波羅夷僧殘波逸提波羅提提舍尼偸蘭遮突吉羅惡說を遮す、是を七非法と爲す。何等か七如法なる。有根波羅夷僧殘波逸提波羅提提舍尼偸蘭遮突吉羅惡說を遮す、是を七如法と爲す。何等か八非法なる。無根破戒作不作破見破威儀無根邪命作不作を遮する、是を八非法と爲す。何等か八如法なる。有根破戒作不作破見破威儀破有根邪命を遮する、是を八如法と爲す。何等か九非法なる。無根破戒若は作、若は不作、若は作不作、破見若は作若は不作、若は作不作、破威儀若は作若は不作、若は作不作を遮する、是を九非法と爲す。何等か九如法なる。有根

破戒、若は作、若は不作、若は作不作、破見破威儀若は作若は不作、若は作不作を遮するは、是を九如法と爲す。何等か十非法なる。非波羅夷波羅夷說中に入らず、非捨戒、捨戒說中に入らず、如法僧要に隨ふ、如法僧要に隨つて違逆せず、如法僧要違逆說中に入らず、破戒不見不聞不疑、破見破威儀不見不聞不疑なり、是を十非法と爲す。何等か十如法なる。波羅夷、波羅夷說中に入る。捨戒、捨戒說中に入る、如法僧要は如法僧要に違犯す、如法僧要呵說、如法僧要呵說中に入る、捨戒見聞疑有り、破見破威儀見聞疑有り、是を十如法と爲す。云何が波羅夷を犯す。相貌に因緣して波羅夷を犯せる。比丘を、此相貌を見て波羅夷を犯すと知るが如し。若は此比丘波羅夷を犯すを見ず、彼比丘に波羅夷を犯すを聞く、比丘若し此見聞疑を以て、彼比丘の前に於て布薩せんと欲する時、坐より起ちて、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す、「此某甲比丘波羅夷を犯す、衆僧此比丘の前に在りて說戒すべからず、今此比丘の說戒を遮す、說戒を遮することを成ず」と。說戒を遮する時、衆僧八難事有り、一々の難事起る、王難、賊難、火難、水難、病難、人難、非人難、蟲難なり。此比丘若し此見聞疑を以て、此住處、彼住處に說戒せんと欲する時、彼比丘の前に於て、坐より起ちて偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す、「某甲比丘波羅夷說中に入り、此事未だ決定せず、今應に決定すべし、此比丘の前に在りて說戒すべからず、今此比丘の說戒を遮す、說戒を遮することを成ず」と。云何が捨戒。相貌に因緣するに、是れ捨戒の比丘なりと知り、是相貌を見て、

此比丘の捨戒を知る、若は此比丘の捨戒を見ず、彼某甲比丘に捨戒を聞く、若し此見聞疑を以て、布薩の時に於て、比丘の前に在り、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作さんと欲す。「某甲比丘捨戒す、此比丘の前に在りて説戒すべからず、我今此比丘の説戒を遮す、遮を成ず」と。説戒を遮する時八難事の起る有り、王難乃至悪蟲難なり。彼比丘若し此見聞疑を以て此住處彼住處に布薩せんと欲する時、彼比丘の前に在り、坐より起ちて偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す。「某甲比丘捨戒説中に入る、此事未決定せず、今應に此事を決定すべし、此比丘の前に在りて説戒すべからず、今此比丘の説戒を遮す、遮を成ず」と。如何が如法僧要不隨なる。相貌に因縁するに如法僧要不隨なるが如し、比丘此相貌を見て、此比丘如法僧要不隨なりと知る。若は此比丘の如法僧要不隨なるを見ず、彼某甲比丘に如法僧要不隨なりと聞く。比丘若し此見聞疑を以て布薩せんと欲する時、此比丘の前に在りて、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す。「某甲比丘、僧要に隨はず、此比丘の前に在りて説戒すべからず、我今此比丘の説戒を遮す、遮を成ず」と。云何が如法僧要違逆なる。相貌に因縁するに、如法僧要違逆なるが如し、比丘此相貌を見て、此比丘如法僧要違逆なりと知る。若は此比丘の如法僧要違逆を見ず、彼某甲比丘、如法僧要違逆を聞く。比丘若し此見聞疑を以て布薩せんと欲する時、彼比丘の前に在りて坐より起ち、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す。「某甲比丘如法僧要に違逆す、

【三】擧他比丘の如法說戒を明す。

此比丘の前に在りて說戒すべからず、我今此比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。說戒を遮する時、八難事中の一一の事起る有り、王難乃至惡蟲難なり。彼比丘若し此見聞疑を以て、此住處彼住處に布薩せんと欲する時、此比丘の前に在りて坐より起ち、偏に右の肩を露し右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す。「某甲比丘、如法僧要逆逆中に入り、此事に未だ決定せず、今應に決定すべし。此比丘の前に在りて說戒すべからず、我今此比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。云何が破戒する。相貌に因緣するに是れ破戒なるが如し。比丘此相貌を見て彼比丘の破戒を知る。若は此比丘の破戒を見ず、彼某甲比丘に破戒を聞く。此比丘若し此見聞疑を以て布薩せんとする時、此比丘の前に在りて、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作す、「某甲比丘破戒す、此比丘の前に在りて說戒すべからず、我今此比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。破見、破威儀も亦是の如し。是を十如法と爲す」と。

(三)若し比丘、他を擧せんと欲せば、内に五法有りて應に他を擧すべし、何等か五なる。時を以てして非時を以てせず、眞實にして不實を以てせず、有益にして損減を以てせず、柔軟にして麤獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず。比丘此五法有りて、應に他を擧するを得べし。何を以ての故に。我比丘の他を擧するを見るに、非時を以てして時を以てせず、不實にして實を以てせず、或は損減を以てして利益を以てせず、或は麤獷を以てして柔軟を以てせず、或は瞋恚を以てして慈心を以てせず。彼餘の比丘應に此比丘に語りて言

ふべし。『汝を擧するに、非時にして時を以てせず、瞋恚を起すこと莫れ。不眞實を以てして實を以てせず、損減を以てして利益を以てせず、麤獷を以てして柔軟を以てせず、瞋恚を以てして慈心を以てせず、此語を以て瞋恚すること莫れ』と。若し比丘他の不實擧を被らば、當に此五事を以て解喩すべし、『汝を擧するに、非時と不眞實と損減と麤獷と瞋恚となり、是を以て愁憂すること莫れ』と。不實擧を被る者も、應に此五事を以て解喩すべし。彼不實にして他を擧する者は、應に五事を與へて呵責すべし。『汝他を擧するに、非時にして時を以てせず、不實を以てして實を以てせず、損減を以てして利益を以てせず、麤獷を以てして柔軟を以てせず、瞋恚を以てして慈心を以てせず、慚愧すべし』と。不實を以て他を擧する者は、此五事を以て呵責すべし。何を以ての故に。後に復不實を以て淸淨比丘を擧せざらしむ。呵責し已りて、如法に治すべし。眞實擧を被る比丘は、應に五事を以て呵責すべし。『汝を擧するに時を得非時を以てせず、瞋恨を生ずること莫れ、眞實にして不實を以てせず、利益にして損減を以てせず、柔軟にして麤獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず、瞋恨を生ずること莫れ』と。眞實擧を被る比丘、應に此五事を以て呵責すべし。呵責し已りて如法に治せよ。彼眞實に他を擧する者は、應に五事を以て讃美すべし。『他を擧するに時を得、非時を以てせず、悔恨を生ずること莫れ。眞實にして不實を以てせず、利益にして損減を以てせず、柔軟にして麤獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず、悔恨を生ずること莫れ』と。眞實に他を擧する者は、應に五事を以て讃美すべし。何を以

ての故に。後に復他を舉すれば、當に眞實を以て舉すべし。説戒を遮する比丘、上座の前に至りて是の如きの語を作す。『我某甲比丘の説戒を遮せんと欲す、願くば聽されよ』と。上座應に問ふべし。『汝内に五法有りや不や』と。若し『無し』と言はば、當に教へて遮するなからしめよ、若し『有り』と言はば、當に問ふべし『何等か五なる』と。若し説く能はずんば、語りて遮する莫らしめよ、若し能く説かば、應に問うて言ふべし。『汝已に中座に問うや未だしや』と。若し『未だ問はず』と言はば、應に教へて問はしむべし。彼應に中座比丘の前に至り、語りて言ふべし。『我某甲比丘の説戒を遮せんと欲す、願くば長老聽せ』と。中座應に問ふべし、『汝内に五法ありや不や』と。若し『無し』と言はば、應に語りて遮する莫らしむべし。若し『有り』と言はば、應に問うて言ふべし。何等か五なる。若し説く能はずんば、應に語りて遮する莫らしむべし。若し能く説かば、應に問うて言ふべし。『汝已に上座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はば、應に語りて問はしむべし。若し『已に問ふ』と問はば、應に問うて言ふべし、『汝復下座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はば、應に教へて問はしむべし。彼應に下座比丘の前に至りて、是の如きの言を作すべし。『我某甲比丘の説戒を遮す、願くば聽されよ』と。彼應に問ふべし。『汝内に五法ありや不や』と。若し『無し』と言はば、應に語りて遮する莫らしむべし。若し『有り』と言はば、應に問うて言ふべし、『何等か五なる』と。若し説く能はざれば、應に教へて遮するなからしむべし。若し能く説かば、應に問うて言ふべし、『汝上座

【四】犯罪の種類に隨つて說戒も亦[illegible]に遮すべきを明す。
【五】波利婆沙 パリヴァーサ(Parivash) 別住と譯す。僧と別處に住せしむること。

に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はば、應に教へて問はしむべし。若し『已に問へり』と言はば、應に問うて言ふべし、『汝中座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はば、應に教へて問はしむべし。若し已に『問へり』と言はば、『汝已に彼比丘に問ふや未だしや』と。若し未だ『問はず』と言はば、教へて問はしむべし。此比丘、應に彼比丘の所に往きて語りて言ふべし、『我長老の說戒を遮せんと欲す、願くば聽されよ』と。彼應に問うて言ふべし、『汝內に五法有りや不や』と。若し『無し』と言はば、應に教へて遮するなからしむべし。若し『有り』と言はば、應に問うて言ふべし、『何等か五なる』と。若し說く能はざれば、應に教へ遮するなからしむべし。若し能く說かば、應に問うて言ふべし、『汝上座に問ふや未だしや』と。若し未だ問はざれば、應に教へて問はしむべし、中下座も亦是の如し。彼比丘應に自ら觀察すべし、『我此事比丘の伴を得るや不や』と。若し伴を得ざれば、應に彼比丘に語つて言ふべし、『遮すること莫れ』と。比丘の伴を得れば、應に語りて言ふべし、『便ち時に隨ふべし』と。

(四)爾時、異住處有り、布薩の時比丘有りて僧殘を犯す。是の如きの念を作す、『我當に云何がすべき』と。卽ち諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『若し異住處有り、比丘有りて僧殘罪を犯さば、衆僧應に波利婆沙を與ふべし。波利婆沙を與へ已りて、應に本日治を與ふべきは、便ち與へよ、應に摩那埵を與ふべきは、便ち與へよ、應に出罪を與ふべきは、便ち出罪を與へよ』と。爾時、異住處有り、比丘有り波逸提を犯す、是中

比丘有り、或は波逸提を犯すといひ、或は波羅提提舍尼を犯すといふ。彼比丘是念を作す、『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『異住處有り、比丘有り波逸提を犯す、或は言ふ波逸提を犯すと、或は言ふ波羅提提舍尼を犯すと。是中波逸提を犯す比丘を見る者有らば、彼比丘を將ゐて眼見不聞處に至り、如法に懺悔せしむ、懺悔し已りて、彼比丘の所に至りて語りて言はく「此比丘已に如法に懺悔す」と。是の如く作し已りて說戒せよ』と。時に異住處有り、比丘有り偸蘭遮を犯す、是中の比丘、或は偸蘭遮を犯すと言ひ、或は波羅夷を犯すといふ。是中偸蘭遮を犯すといふ者は、皆是れ多聞にして阿含を學し、法を持し、律を持し、摩夷を持し、伴黨を得、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の外道、沙門、婆羅門なり。是中波羅夷を犯すといふ者も、皆多聞にして阿含を學し、法を持し、律を持し、摩夷を持し、伴黨を得、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、國王、大臣、種種の外道、沙門、婆羅門なり。彼是の如きの念を作す、『若し今日說戒すれば、僧をして鬪諍して共に相誹謗せしめ、僧をして破壞せしめ、僧をして塵垢せしめ、僧をしに別異に住せしめん、我當に云何すべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『若し異住處の比丘有りて偸蘭遮を犯す、是中或は偸蘭遮を犯すといひ、或は波羅夷を犯すといふ。偸蘭遮を犯すといふ者は、皆是れ多聞にして乃至摩夷を持し、比丘、比丘尼の伴黨を得、乃至沙門、外道、婆羅門なり。波羅夷を犯すといふ者も、皆是れ多聞にして乃至摩夷を持し、比丘、比丘尼の伴黨を得、乃

至沙門、外道、婆羅門なり。彼是の如きの念を作す、「若し今日說戒せば、僧をして鬪諍して共に相誹謗せしめ、僧をして破壞せしめ、僧をして塵垢せしめ、僧をして別異に住せしめん」と。若し比丘此破僧事を重んぜば、此日に說戒すべからず』と。佛、言はく、『說戒を遮することを聽す』と。時に六群比丘、佛の說戒を遮するを聽したまふと聞き、便ち清淨比丘の說戒を遮す。佛、言はく、『清淨比丘の說戒を遮すべからず、汝曹善く聽け、說戒を遮すと雖も、遮を成ぜず、無根作を遮すれば遮を成ぜず、有根作を遮すれば遮を成ず。無根不作を遮すれば遮を成ぜず、有根不作を遮すれば遮を成ず。無根作不作を遮すれば遮を成ぜず、有根作不作を遮すれば遮を成ず。無根有餘作不作も亦是の如し。無根無餘作不作も亦是の如し。若し五種說戒は、未說戒に說戒を遮するも遮を成ぜず、若し說戒竟りて說戒を遮すれば遮を成ぜず、若し說戒の時說戒を遮すれば遮を成ず。若し說戒を遮する比丘、身に不清淨を行じ、口に不清淨を行じ、邪命に、癡にして言ふこと能はず、方便を知らず、問答を解せざれば、餘の比丘應に語りて言ふべし、「長老止めよ、此鬪諍を作すべからず」と。應に作すこと是の如くし已りて說戒すべし。比丘身に清淨を行じ、口に不清淨を行じ、邪命、癡にして言ふ能はず、方便を知らず、問答を解せざれば、餘の比丘應に語りて言ふべし、「長老止みね、此鬪諍を作すべからず」と、應に是の如くし已りて說戒すべし。若し說戒を遮する比丘、身に清淨を行じ、口に清淨を行じ、邪命、癡にして言ふこと能はず、方便を知らず、問答を解せざれば、餘の比丘應に語りて言ふべし、

「長老止めよ、此鬪諍を作すべからず」と。應に作すこと是の如くにし已りて說戒すべし。說戒を遮する比丘、身に淸淨を行じ、口に淸淨を行じ、不邪命にして智慧有り、能く言ひ、方便を知り、能く問答す。餘の比丘應に問うて言ふべし、「長老、此比丘の說戒を遮す、何事を以ての故とする。破戒と爲さんや、破見、破威儀と爲さんや」と。若し破戒と言はば、問うて言ふべし「何等の戒を破する」と。若は波羅夷と言ひ、若は僧殘、若は偸蘭遮と言はば是を破戒と爲す。若し破戒せず、破見の故に遮すと言はば、應に問うて言ふべし「何等の見をか破する」と。若し「六十二見」と言はば、此は是れ破見なり。若し破見せず、破威儀の故に遮すと言はば、應に問うて言ふべし「何等の威儀を破す」と。若し波逸提、波羅提提舍尼、突吉羅、惡說を破すと言はば、是を破威儀と爲す。應に問うて言ふべし「何を以ての故に、此比丘の說戒を遮する、見を以ての故か、聞疑を以ての故か」と。若し見と言はば、應に問うて言ふべし「何事をか見る、云何が見る、汝何處に在り、彼れ何處に在りて見る。何等か是れ波羅夷とする、是れ僧殘とする、是れ波逸提とする、是れ波羅提提舍尼、偸蘭遮、突吉羅、惡說とするや」と。若し見ず聞くと言はば、應に問うて言ふべし「何事をか聞く、誰に從つて聞く、是れ比丘とせんや、是れ比丘尼とせんや、是れ優婆塞とせんや、是れ優婆夷とせんや、何の聞く所ぞ、此比丘波羅夷を犯すとせんや、僧殘とせんや、波逸提とせんや、波羅提提舍尼とせんや、偸蘭遮とせんや、突吉羅とせんや、惡說とせんや」と。若し聞かず、疑を爲すが故に遮すと言はば、應に問うて言ふべ

し。何事を以て疑ひ、云何が疑ひ、誰の許に從つて疑を聞くや、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷とせんや、何事を犯すと疑ふとする、波羅夷とせんや。僧殘、波逸提、波羅提提舍尼、偸蘭遮、突吉羅、惡說とせんや」と。說戒を遮する比丘、答へて智慧持戒の比丘をして歡喜せしむること能はざれば、若し波羅夷を遮すれば、應に僞に僧殘を作し、已りて便ち說戒すべし。若し僧殘を遮すれば、應に波逸提を與へ、已りて便ち說戒すべし。若し波逸提を遮すれば、應に餘罪を以て、懺悔し已りて便ち說戒すべし、若し說戒を遮する比丘、能く答へて、智慧持戒の比丘をして歡喜せしむれば、若し波羅夷を以て遮すれば、應に滅擯を與へ已りて說戒すべし、若し僧殘を遮すれば、應に覆藏を與へ已りて說戒すべし。若し本日治を與ふべきは、本日治を與へ已りて說戒し、若し摩那埵を與ふべきは、摩那埵を與へ已りて便ち說戒し、出罪羯磨を與ふべきは、出罪を與へ已りて說戒せよ。若し波逸提を以て遮する者は、當に如法に懺悔し已りて說戒すべし。若し餘事を以て遮すれば、應に如法に懺悔し已りて、說戒すべし』と。爾時異住處に說戒す。病比丘、病比丘の說戒を遮す。病比丘是の如きの念を作す。『我當に云何がすべき』と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛、言はく、『若し病比丘、病比丘の說戒を遮すれば、餘の比丘應に語りて言ふべし、「世尊是の如きの教有り、病比丘を遮すべからず」と。長老の病差え、彼比丘の病亦差ゆるを須ちて、長老如法に說け」と。彼比丘亦當に如法に說くべし、應に作すこと是の如くにし已りて說戒すべし。時に異處の說戒有り、時に病比丘、不病比丘の說戒を遮

す。餘の比丘應に語りて言ふべし。「世尊是の如きの教有り、病人は他の說戒を遮すべからずと。病差ゆるを須ちて如法に說くべし」と。彼れ亦當に如法に說くべし。應に作すこと是の如くし已りて說戒すべし』と。時に異處の說戒有り、時に無病の比丘有り、病比丘の說戒を遮す。餘の比丘應に語りて言ふべし、『長老、世尊是の如きの教有り、病比丘を遮すべからずと、病差ゆるを須ちて如法に問へ、彼比丘も如法に答へん」と。應に作すこと是の如くにし已りて說戒すべし。時の異處有り、衆多比丘說戒の日、彼處に比丘有り、喜んで鬪諍罵詈し、共に相誹謗し、口より刀劍を出す、『此に來りて說戒せんと欲すと、我曹當に云何がすべき』と、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し此の如き事有りて起らば、應に二三種の布薩を作すべし。若は十五日說き、十四日作すべし、若は十四日說き、十三日作すべし。若し今日來ると聞かば、卽ち應に疾疾に一處に集まりて布薩すべし。若し已に界內に至ると聞かば、應に外に出でて布薩すべし。若し已に僧伽藍に入ると言はば、便ち應に浴室を掃除し、浴床、浴瓶、刮汗刀、水器、泥器、樹皮、細末藥、若は泥を具し、上座に問ひ已りて爲に火を然やし、彼客比丘、浴室に入りて浴する時、應に一一浴室中より界外に出でて說戒すべし。若し客比丘、舊比丘を喚び共に說戒せんには、應に答へて言ふべし「我曹已に說戒し已る」と。客比丘說戒を遮すれば遮を成ぜず。若し說戒の時、舊比丘說戒を遮すれば遮を成ず。若し能く是の如くする者は善し、若し能はざれば、應に白を作して說戒日を却くべし。應に是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、僧今說戒せず黑

月に至りて當に説戒すべし、白すること是の如し」と、應に是の如きの白を作して、説戒を却くべし。若し客比丘便ち待ちて去らざれば、彼比丘應に白を作して、第二却説戒を作すべし。應に是の如きの白を作すべし。「大徳僧聽け、僧今説戒せず、白月に至りて當に説戒すべし」と、應に是の如く第二却説戒を白すべし。若し客比丘去らずして白月に至らば、舊比丘應に如法に、強ひて客比丘と問答すべし。』遮犍度具足して竟る。

【五】破法輪僧破羯磨僧のことを明す。第十五の犍度。今提婆の破僧の事を明す。

破僧犍度第十五

(五)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。因縁有りて衆僧集會す。時に提婆達多座より起ちて舍羅を行ず、「誰か、諸の長老此五事は是れ法なり、是れ毘尼なり、是れ佛の所説と忍する者は籌を捉れ」と。時に五百の新學無智の比丘籌を捉る。爾時阿難座より起ち、鬱多羅僧を以て一面に著け、是の如きの言を作す。「誰か、諸の長老、此五事は、法に非ず、毘尼に非ず、佛の教に非ることを忍する者は鬱多羅僧を以て一面に著けよ」と。是中に六十の長老比丘有り、鬱多羅僧を以て一面に著く。時に提婆達多諸の比丘に語りて言はく、「長老、我曹但佛及び衆僧と、自ら共に羯磨説戒を作すことを須ひず」と。即ち往いて伽耶山中に至る。爾時提婆達多伽耶山中に至り、佛及び僧を離れて、自ら羯磨説戒を作す。爾時衆多の比丘世尊の所に往き、足を禮し已りて却つて一面に坐し、世尊に白して言はく、「王舍

城中因緣の事有り、衆僧集會す。時に提婆達多座より起ちて籌を行じて言はく、「誰か諸の長老、此五事は是れ法なり、是れ毘尼なり、是れ佛の所教なりと忍する者は、便ち籌を捉れ」と。中に五百の新學無智の比丘有り、卽ち籌を捉る。時に長老阿難卽ち坐より起ち、鬱多羅僧を以て一面に著けて言はく、「誰か諸の長老、此五法は法に非ず、毘尼に非ず、是れ佛教にも非ざることを忍する者は、鬱多羅僧を捨てて、一面に著け」と。時に六十の長老比丘有り、鬱多羅僧を捨てて一面に著く。時に提婆達多諸の比丘に語らく、「我等佛及び僧を捨てて、自ら羯磨說戒を作すべし」と。卽ち伽耶山中に往き、佛及び僧を捨てて羯磨說戒を作す』と。佛、言はく、『此癡人僧を破す。八非正法有りて纏縛覆障し、善心を消滅し、提婆達多非道に趣き、泥梨中に在りて一劫救はず。何等か八なる。利と無利と、譽と不譽と、恭敬と不恭敬と、惡知識と樂惡友と、是の如きの八非正法有り、纏縛覆障して善心を消滅し、提婆達多非道に趣き、泥梨中に在りて一劫救はず。我若し提婆達多に、毛髮の如き善法だも有るを見ば、終に記して言はず、泥梨中に在りて、一劫救はずと。提婆達多に毛髮の如き善法だも有ることを見ざるが故に、記して泥梨の中に在りて一劫救はずといふ。譬へば人有りて屎中に沒在す、人有りて出さんと欲するに、毛髮の如き處の淨の、手を以て捉りて之を出すべき有るを見ざるが如し、今提婆達多を觀るに亦復是の如し、毛髮の如きの白法有るを見ず、是故に我、提婆達多は泥梨の中に在りて、一劫救はずと言ふ』」と。爾時舍利弗、目連、伽耶山中に往く、比丘有り、見て涕泣して淚を

詣し、世尊の所に往き、頭面に足を禮して却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、「世尊第一の弟子も亦伽耶山中に往く」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝恐怖すること莫れ、舍利弗、目連の伽耶山中に往くは、利益を求むるが故なり」と。爾時提婆達多伽耶山中に在り、無數の衆の爲に圍遶せられて説法す、遙に舍利弗、目連の來るを見、即ち言はく、「善來、汝大弟子、先に忍せずと雖も、而も今忍せば、後るると雖も而も善し」と。舍利弗、目連到り已りて座を敷いて坐す。爾時提婆達多大衆の前に於て、佛の常法の如くし、舍利弗に告げ、衆僧の爲に説法せしむ、「我今背痛す、小しく自ら停息せん」と。時に提婆達多の法、世尊に像どり、自ら僧伽梨を疊み四重と爲し、右脇を以て地に著け、猶弟子の如し。覺えず左脇地に著く、猶野干の偃臥して鼾眠するが如し。時に舍利弗、目連に語りて言はく、『今此大衆の爲に、示して厭離の心を生ぜしむべし』と。目連、舍利弗の語を聞き已りて、即ち神通を以て虛空に上昇し、或は形を現じて說法す。或時は烟を出し、或時は火を出し、或時は身下に火を出し、或時は身上に水流を出す。或時は身上に火を出し、身下に水流を出す。或時は火然え、毛孔より水を出す。時に舍利弗、大目連の、此大衆の爲に、示して厭離の心を生ぜしむることを知り已り、即ち爲に四諦の法、苦集盡道を說く。時に諸の比丘、即ち座上に於て遠塵離垢して法眼淨を得たり。爾時舍利弗、目連、諸の比丘に告ぐ、『其れ是れ世尊の弟子なる者有らば、便ち我に隨つて來れ』と。時に舍利弗、目連、五百の比丘と與に即ち座より起ちて去る。舍利弗、目連外に出でて未だ久しからず、

三聞達多、提婆達多の脚指に觸れて言はく、『提婆達多起つべし、舍利弗、目連、五百の比丘を將ゐて座より去る』と。彼即ち驚怖して起ち、熱血面孔より出づ。諸の比丘、舍利弗、目連の五百の比丘を將ゐて來るを見、歡喜して佛の所に往詣し、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『舍利弗、目連、五百の比丘を將ゐて來る』と。佛、比丘に告げたまはく、『舍利弗は、直に今提婆達多を破するのみに非ず、此は是れ第二の舍利弗の破提婆達多なり、乃往過去世の時、年少の婆羅門有り、散若と名く。「往いて射師の所に詣りて白して言はく、「師、我射術を學ばんと欲す」と。師答へて言はく、「學ぶべし」と。時に散若、七年の中に於て射を學び、七年を過ぎ已りて便ち是の如きの念を作す。「我今射を學ぶも何の時か已るべけん」と。即ち師の所に往いて白して言はく、「我今故幾時か射を學ばん」と。師即ち教へて弓を牽いて、箭を著けしめて語りて言はく、「我因緣有りて村に入る、我還るを須ちて乃ち箭を放つべし」と。時に師勅し已りて便ち村に入る。時に散若是念を作す、「師何が故に我をして弓を牽き箭を著け、還るを待つて放たしむるや、我今箭を放つべし、知る何事か有らんや」と。散若の前に大婆羅樹有り、即ち箭を放ちて樹に著く、箭過つて地に入りて現ぜず。時に師村に入り、事訖りて便ち還る。散若の所に至りて問うて言はく、「汝未だ箭を放たざるや」と。答へて言はく、「已に放つ」と。師、言はく、「汝の作善からず、若し汝箭を放たざれば、閻浮提に於て最も大師たらん。今我閻浮提に於て、第一の大師たり、若し我死せば、次には當に汝有るべし」と。時に師、

其女を莊嚴し、五百枚の箭と、幷に一馬車とを以て之に與ふ。時に散若受け已りて、當に曠野を度るべし。散若即ち其婦を安んじて車上に著け、五百枚の箭を持つて曠野を度る。時に五百の群賊有り、曠野の中に於て食す。時に散若、即ち婦に語りて言はく、「汝賊所に往いて食を乞へ」と。時に婦即ち往いて賊に語りて言はく、「散若汝に從つて食を乞ふ」と。時に賊師言はく、「今其所使を觀るに、是れ常人に非ず、宜しく食を與ふべし」と。時に一賊有り、便ち起ちて是言を作す、「我曹猶活く、此人婦を將ゐ、車に乘じて去るをや」と。時に散若即ち箭を放つ、箭に應じて死す。餘の者も復起ち、是の如きの言を作す。「我曹猶活く、此人婦を將ゐ、車に乘じて去るをや」と。散若復一箭を放つ、箭に應じて死す。是の如く其一一起つもの有れば、箭に應じて死す。時に散若餘すに一箭有り、唯賊帥の在る有り、未だ其便を得ずして箭を放たず、即ち婦に語りて言はく、「汝衣を脱して地に置け」と。婦即ち衣を脱す。即ち賊の便を得て箭を放つ、箭に應じて死す』と。佛、諸の比丘に告げたまはく、『汝知らんと欲するや不や、若し五百の賊とは、即ち今の五百の比丘是なり、賊帥とは提婆達多是なり。散若婆羅門とは、豈異人ならんや、即ち舍利弗是なり。舍利弗昔日の破の爲に、今は第二破なり』と。爾時舍利弗、目連、五百の比丘を將ゐて往いて佛所に至り、頭面に足を禮して卻つて一面に坐し、佛に白して言さく、「此五百の比丘、提婆達多に隨順して別業を作す、今應に更に大戒を受くべし』と。佛、舍利弗と目連とに告げたまはく、『提婆達多に隨順するは、先戒即ち是なり、但應に教へて偸蘭遮懺

悔を作さしめよ』と。目連、佛に白して言さく、『世尊無數衆中に在りて舍利弗に告げたまはく、「汝說法すべし、我今背痛む、小しく自ら停息せん」と。提婆達多も亦復是の如し、法世尊に傚どりて、僧伽梨を疊んで四重と爲し、右脇を以て地に著け、猶し師子の如し。覺えず左脇地に著け、猶し野干の偃臥鼾眠するが如し』と。佛、目連に告げたまはく、『提婆達多は、但今日法我に傚どりて此苦惱を得るのみに非ず、此は是れ第二の苦惱なり。目連、乃往過去世に、雪山王の右面に大池水有り、一大象有りて邊に在りて止住す。時に彼大象、池水の中に入りて洗浴して水を飲み、鼻を以て藕根を拔取し、洗つて淨ならしめて之を食し、氣力充足し、形體光澤有り。復一小象有り、常に相隨逐す。彼小象法大象を學ぶ。池水に入りて洗浴し、藕根を拔取し、洗はずして泥を合せて食す。彼藕根を食して氣力足らず、形に光澤なし、遂に便ち病を致す。而も偈を說いて言はく、

　我曹大に欲なし、藕を食するも甚だ清淨
　小象泥を雜へて食す、我を學んで病を致す
　死屍の臭は息むこと有り、食消すれば噫も自ら止む
　人非法を行ずれば、長夜に氣滅せず
　貪欲瞋恚と癡と、丈夫惡心有り
　癡人は自ら毀傷す、果繁りて枝折るるが如し
　芭蕉は實を以て死し、竹葦亦復然なり

傭人利養を傷り、驅驢は懷妊して死す

佛、目連に告げたまはく、『時に大象とは我身是なり、小象とは提婆達多是なり』と。

佛、目連に告げたまはく、『此は是れ提婆達多の、第二に我を學して此苦惱を致すなり』と。時に諸の比丘是の如きの念を爲さく、『未曾有なり、提婆達多は是れ世尊の弟子なり、乃ち是の如く恩に背くことを作し、非法を作し、邪教を以て五百の弟子を破壞す』と。爾時世尊、諸の比丘の所念を知り、即ち諸の比丘に告げたまはく、『提婆達多は、但今日我弟子を破壞するのみに非ず、乃往過去世に、二閻浮提王有り、一を月と名け、二を月益と名く。十四日に生るるが故に、名けて月と爲し、十五日に生るるが故に、名けて月益と爲す。彼此同意として嫌隙有ることなし。閻浮提中一河水有り、修羅吒と名け、其兩邊に各四萬二千の城有り、國土平博にして嚴好、人民財富熾盛にして飲食豐饒なり。時に月益王、修羅吒河水の邊に城有り、亦修羅吒と名く。東西十二由旬、南北七由旬なり。二王要を作す、若し我男を生まば、當に汝の女を取るべし、若し汝男を生まば、當に我女を取るべしと。時に王月益男女を生まず、兒を求めんが爲の故に、水神を祠祀し、種種の諸天に禮事す。滿善天、寶善天、日月釋梵地水風神、摩醯首羅天、園神、林神、空野神、市神、鬼子母神、城郭神なり。天の爲に福を作して兒有らんことを希望す。時に修羅吒河邊に、二五の通仙人有りて住す。時に河水神、王に白して言はく、『修羅吒河邊に二五の通仙人有りて住す、若し彼王家に生れんことを求願すれば、王當に兒有るべし』と。時に月

徭即ち河邊に至り、漸く行いて求覓者、仙人の所に至り、仙人に語りて言はく、『知るや不や、我家に兒無し、若し汝等我家に生れんと求願すれば、命終して便ち生るることを得ん、若し我家に生るれば、五欲自ら恣にして快樂乏しきこと無し』と。仙人答へて言はく、『爾るべし』と。時に王月徭歡喜して還歸す。時に一仙人後七日に於て命終し、即ち彼第一夫人の胎中に處す。女人に三種の智有り、娠時を知り、從得する所を知り、男子に欲意有りて著るるを知る。時に夫人王に白して言さく、『王今知るや不や、我今娠める有り』と。王言はく、『善快なり、當に重く供養すべし』と。即ち一切に勅し、供具増益すること一倍す。時に第二仙人七日にして復命終し、即ち第二夫人の胎中に處す。夫人王に白さく、『王今知るや不や、我今娠める有り』と。王即ち供具を増すこと上の如し、時に王即ち人を遣して、往いて修羅陀河邊に幾仙人有るかを看せしむ。使即ち往いて看、二仙人の已に死するを見、即ち還りて王に白して言はく、『仙人已に死せり』と。王自ら念じて言はく、『彼二仙人命終し、我二夫人の胎中に生る』と。彼九月滿じて一男兒を生む、顏貌端正なり。王の第一夫人男兒を生む時、衆善自ら至り、五百賈客有りて來至し、五百の賈客海より寶を取りて還り、五百の伏藏有り、悉く自ら發出し、五百の死囚有り、獄より出づることを得。時に王月徭自ら思惟して言へらく、『當に此兒の爲に何等の字をば作すべき。彼國法、若し初に男兒を生まば、或は父母、若は沙門、婆羅門字を作す。』時に王自ら念ずらく、『何ぞ沙門婆羅門の字を作すことを須つことをせん。此兒生るる日多く善事

有りて現ず。即ち字けて善行と爲さん』と。時に王即ち四種の母を與ふ、一には治身、二には洗浴浣濯、三には乳を與ふ。四には當に娛樂を爲すべし。象馬車乘、衆の伎樂種種の戲笑を作し、又孔雀の尾を持つて後へに在り、是の如く嚴飾して娛樂す。善行王子年八九に至り、種種の伎藝、書數、印畫、戲笑、歌舞、伎樂を敎ふ、又象馬車乘に騎し、射御闘戰の事を學ぶ。時に彼王子一切皆學す。時に王の第二夫人子を生む。時に多く衆惡事の起る有り、野干鳴き、阿修羅日を捉へ、五百應に死すべき者來至す。彼國の法、若し初て兒を生む、當に沙門、婆羅門をして字を作さしむ。王自ら念ずらく、『何ぞ沙門、婆羅門の字を作すことを須たん、此兒生るる日、多く衆惡事出づ、即ち之を字けて惡行と爲す。王亦四母を與ふ。一には治身、二には洗浴浣濯、三には乳を與ふ、四には當に娛樂を爲すべし、象馬車乘、衆伎樂と種種の戲笑を作すと、乃至闘戰の事を學ばしむ。時に善行王子を王甚だ愛念す、及び諸の餘の小國王子夫人大臣侍從一切の人民亦愛念せざるなし。而も惡行王子は、王愛念せず、諸の餘の一切も亦愛念せず。時に惡行王子是の如きの念を作す。『善行王子は、王及び一切の人民甚だ之を愛念す、而も我は獨り爾も王愛念せず、及び餘の一切も亦愛念せず、我方便を伺求して、當に其命を斷ずべし』と。爾時隣國の王月の第一夫人女を生む。即ち使を遣して月盆王の所に來至し、語りて言はく、『我第一夫人女を生む、當に汝の兒善行に與へて婦と作すべし』と。異時に於て善行王子是の如きの念を作す。『閻浮提の衆生は皆多く貧苦なり、我當に海に入りて如意珠を取り、閻浮提の衆生

をして、貧者有ること無らしめん』と。時に即ち王の所に至りて白して言さく、『閻浮提の衆生は皆多く貧苦なり、我海に入りて如意珠を取り、閻浮提の衆生をして、貧者有ること無らしめん』と。王即ち答へて言はく、『我大に金銀七寶有ること無數なり、庫藏盈滿す、意の與ふる所に隨ふべし』と。即ち王の答へて言はく、『能はず、必ず大海に入りて如意珠を取り、閻浮提の衆生をして、貧者有ることなからしめんと欲す』と。王言はく、『汝の意のままにせよ』と。時に惡行王子即ち是念を作さく、『今正に是れ時なり、其便を得て其命を斷つべし』と。即ち王所に至りて白して言さく、『善行は是れ我敬重する所、今海に入らんと欲す、若し我見ずんば、將に恐らくは命を失はんとす、今與に相隨つて海に入らんと欲す」と。王言はく、『意のままにせよ』と。時に王子、王及び夫人眷屬と辭別し已り、往いて修婆羅城中に詣り、鈴を搖がして唱へて言はく、『誰か能く父母、妻子、兄弟姉妹及び諸の親屬を捨離し、金銀珍寶無價の寶珠を須めんと欲する者は、我に隨つて海に入れ、一切の所須飲食莊嚴の具は、我當に供給すべし』と。時に即ち五百の賈客有り、其所に來集す。時に善行五百の賈客と俱に修婆羅城に至り。彼城中に於て船を買ひ、并に船師を求む。船師は海中の諸難、涌浪難、洄澓難、大魚難を知る。船を莊嚴し已りて、復重ねて唱ふること上の如くならしむ。即ち船を放ちて海に入る。善行福德を以ての故に、風其船を吹き、七寶所に詣り、諸の賈人に告げて言はく、『今已に寶渚に至る、好く堅牢に船を莊ひ、自ら恣に寶取りて船に滿たし、沈沒せしむること勿れ』と、時に諸の

賈人教を受けて寶を取る。善行衆賈人を教授し已り、更に餘處に至る。惡行王子惡言を以て衆賈人に向つて之を說く。『善行王子若し安隱に還り至らば、當に汝等の寶を奪ふべし、寧ろ未だ還らざるに、船を推して海に置いて去るべし』と。時に惡行五百の賈人に說く、賈人已に其說を受け、船を推して海に入りて去る。彼薄福の果報、風其船を破り、五百賈人海に沒して死す。惡行王子一船板を得、風吹いて展轉して還ることを得て岸に趣く。彼海邊に於て貧賤聚落に在り。家家に乞食して自活す。時に善行還りて故處に至るに、衆賈人を見ず、亦船を見ず、卽ち椎胸して啼泣懊惱す。『恐らくは諸の賈人、惡鬼羅刹等の爲に寄せらる』と。時に寶渚神、善行に詣りて言はく、『五百の賈人惡鬼羅刹等に寄せらるるに非ず、是れ惡行王子惡言して五百の賈人を破壞し、船を推して海に入りて去らしむ、薄福の果報、風其船を破り、五百の賈人海に沒して死す、惡行王子は、一船板を得、風吹いて岸に至り、彼海邊に於て、乞食して自活す』と。善行自ら念ずらく、『我今寧ろ前んで海龍王宮に至りて、如意珠を乞ふべし』と。卽ち道を引いて去り、羅刹渚に到る。時に五百の羅刹女出でて迎へ、遙に見て慰問す。『善來童子、何所に至らんと欲する』と。答へて言はく、『閻浮提の衆生皆多く貧苦なり、海龍王宮に往き、如意寶珠を乞ひ、閻浮提の衆生をして、貧苦の者なからしめんと欲す』と。卽ち復問うて言はく、『何の乘を取らんと欲する』と。答へて言はく、『大乘を取らんと欲す』と。羅刹女言はく、『善い哉、若し汝最正覺を成ぜば、我當に出家して汝の弟子と作るべし』と。報へて言はく、『爾るべ

し』と。彼遙に金城を見る、中に一金床有り、龍其上に坐す。時に、善行王子卽ち金城に行き、彼龍の所に至る。時に龍王遙に見て慰問す。『善來童子、何の所に至らんと欲する』と。答へて言はく、『龍王知るや不や、閻浮提の衆生、皆多く貧苦なり、我海龍王の宮に至り、如意寶珠を取り、閻浮提の人をして、貧苦有ることなからしめんと欲す』と。彼卽ち答へて言はく、『海龍王宮は、至るを得べきこと難し、七日中水を行き、常に膝に至る。復七日中水を行きて臍に至り、七日中行いて水腋に至り、七日中は浮んで過ぎ、七日中は蓮華上を行き、七日中は毒蛇の頭上を行き、然る後乃ち海龍王宮に至る。汝今止むべし、我に寶珠有り、能く東方二千由旬に七寶を雨らす、今當に汝に與ふべし』と。答へて言はく、『取らず、要ず當に海龍王宮に至るべし』と。卽ち復問うて言はく、『何の乘を取らんと欲する』と。答へて言はく、『大乘を取らんと欲す』と。復言はく、『若し汝最正覺を成ぜば、我當に出家して、汝が爲に第一智慧の弟子とならん』と。卽ち金城を捨てて遙に銀城を見る。中に龍王有り、銀床の上に在りて坐す。時に善行王子銀城に往詣し、龍王の所に至る。龍王遙に見て慰問す。『善來童子、何の所に至らんと欲する』と。答へて言はく、『龍王知るや否や、閻浮提の衆生、皆多く貧苦なり、我海龍王宮に至り、如意珠を取りて、閻浮提の人をして、貧苦有ることなからしめんと欲す』と。答へて言はく、『海龍王宮は至るを得べきこと難し、七日中水を行き、常に膝に至り、七日中は臍に至り、七日中は腋に至り、七日中は浮びて過ぎ、七日中は蓮華上を行き、七日中は毒蛇の頭上を行き、然る後

乃ち海龍王宮に至る。汝今止むべし、我に寶珠有り。能く南方四千由旬に七寶を雨らす、今當に汝に與ふべし』と。答へて言はく、『取らず、我要ず當に海龍王宮に至るべし』と。即ち復問うて言はく、『何の乘を取らんと欲する』と。答へて言はく、『大乘を取らんと欲す』と。復言はく、『汝若し最正覺を成せば、我當に出家して、汝が爲に第一神足の弟子と作らん』と。即ち銀城を捨てて去る。復琉璃城有るを見る、龍王有りて坐すること上の如し。即ち如意珠を與ふ、能く西方六千由旬に寶を雨らす。答へて言はく、『取らず、我要ず當に海龍王宮に至るべし』と。復問うて言はく、『何の乘を取らんと欲する』と、答へて言はく、『大乘を取らんと欲す』と。『若し汝最正覺を成ずる時は、我當に出家して、汝が爲に第一多聞の弟子と作るべし』と。時に善行即ち復前行して、七日中水膝に至り、乃至蓮華上を行き、乃ち毒蛇の處に至る。是の如きの念を作す。『何の行の報いを以て毒蛇の中に生るる、豈前世瞋毒の報いに非ずや、當に何の法を以て之を降伏すべき、唯慈心有り』と。即ち慈心三昧を思惟する時、諸の毒蛇皆悉く頭を垂れ、上を行いて過ぎ、海龍王宮に至る。時に海龍王遙に見て、慰問して言はく、『善來童子、何の須欲する所有る』と。答へて言はく、『我今汝の髻中の如意寶珠を得んと欲す』と。答へて言はく、『汝等短壽なり、此珠價大なり、相與へざるに非ず、今當に汝に與ふべし、但汝命終らんと欲する時、珠を還送し來れ』と。即ち珠を解いて、之を與へ、并に二龍を遣し、後より珠を持ちて還らしむ。時に善行珠を捉りて求願して言はく、『若し是れ如意珠ならば、便ち當に

忽然として還りて修婆羅城に至るべし』と。如意念の頃に即ち修波羅城に還る。時に惡行王子、善行の海より安隱にして還ると聞き、即ち善行の所に往いて語りて言はく、『汝知るや否や、我今貧窮聚落に在り、家家乞食して以て自ら生活す、汝大海より安隱にして還る。何の得る所とする』と。即ち答へて言はく、『此如意寶珠を得來る』と。時に善行語りて言はく、『我今疲極す、小しく眠息せんと欲す』と。即ち惡行の膝上に枕して眠る。時に惡行佉陀羅木の刺を以て其兩眼を刺し、珠を持ちて去る。彼兩眼を傷け、血流れて身を汚し、東西に慞惶して道を見ず、遂に月王の園中に至る。時に守園の老母に二小兒有り、遙に其來るを見る、血流れて身を汚し、行くに道を見ず、即ち之を愍傷し、問うて言はく、『汝何が故に、乃ち月王の園中に於て東西に行き、慞惶して道を見ざる』と。即ち共に爲に因縁を說く。老母語りて言はく、『我に二兒有り、汝と共に戲るべし、汝今此に在りて住すべし、當に相看視すべし、猶二兒の如し』と。時に惡行即ち修羅吒城に還り、王月益の所に至り、王に白して言さく、『王今知るや不や、我海中大風に遇ひて船を破り、五百賈人海中に沒在す、唯我安隱にして還る』と。王言はく、『汝海より安隱にして還る。何等をか得るとせん』と。答へて言はく、『此如意寶珠を得たり』と。王即ち問うて言はく、『此珠何の能く作す所ぞ』と。答へて言はく、『知らず』と。時に王即ち珠を取り、藏に付して之を掌らしむ。時に惡行即ち使を遣して隣國の王月に語る、『善行五百の賈人と海に入りて寶を取り、水に漂沒せらる、汝今我に女を與ふべし』と。王即ち

報へて言はく、『須らく我女に語るべし』と。王即ち女を喚びて之に告ぐ。『善行五百の賈人と海に入りて寶を取り、水の爲に漂はされ、惡行は安隱にして還る。今汝を索めて婦と爲さんと欲す』と。答へて言はく、『能はず、我自ら出でて夫を求めんと欲す』と。時に王即ち國中をして皆聚集せしめ、其女を莊嚴して外に出で、東西に夫を求覓す。時に善行即ち其琴を調して之を彈じ、美音聲を出して園中に在りて住す。時に王女之を見て、即ち往いて王に白して言はく、『王今知るや不や、我此人を得て夫と爲さんと欲す』と。王言はく、『此は是れ盲人なり』と。女、王に答へて言はく、『苦無し』と。時に王月、即ち善行を喚び問うて言はく、『童子汝は是れ何人ぞ』と。答へて言はく、『王、今知るや不や、我は是れ王月益の第一の太子善行なり』と。王言はく、『何が故に眼を傷ふや』と。即ち上の因緣を以て具に王に白す。王言はく、『汝若し是れ王月益の子ならば、今當に發願して眼をして平復せしむべし』と。善行即ち誓願を發し、若し我閻浮提の衆生の貧苦苦厄の爲の故に、海に入りて如意寶珠を求め、閻浮提の衆生をして、窮乏有るなからしめんと欲す。幷に及び惡行王子、惡言を以て五百の賈人を破壞し、我を捨てて還り復佉陀羅木刺を以て我兩眼を刺し、我如意珠を持つて還る。我彼人に於て惡心有ること無し、若し我眞誠に虛り無くんば、眼當に平復すること故の如くなるべし』と。時に發願亦竟りて眼も請で平復す。時に王即ち極好に其女を莊嚴し、以て之に適かしむ。王即ち使を遣して王月益に語りて言はく、『汝今知るや不や、王子善行 安隱海より還り、今極好に我女を莊嚴して以

て之に適かしむ。今當に修羅吒城に往くべし』と。時に王月氏、即ち國内に勅し、種種に莊嚴す。是に於て王子善行修羅吒城に往き、頭面に王足を禮し已りて、具に因緣を以て王に白す。王即ち人に勅して惡行を殺さしむ。善行王に白して言さく、『王願くば殺すことを須ひざれ』と。時に王月氏惡行を遣して國を出でしむ。善行王に問うて言はく、『惡行珠を持ち來るや、今所在とせんや』と。王言はく、『今庫中に在り』と。王に白して言さく、『珠を出したまふべし』と。王即ち珠を出す。善行即ち淨く身を洗浴し、新白淨衣を著け、珠を取りて幢頭に安置し、高好殿上に著け、發願して言はく、『若し審かに是れ如意珠ならば、當に閻浮提に七寶を雨滿すべし、其れ病者有らば皆除愈せしめよ』と、發願頃の間に、即ち閻浮提に七寶を雨滿す。後異時に於て王月氏喪す。即ち善行を以て王と爲す。時に王子惡行、善行の所に來至して白して言さく、『我今外に在り、家家乞食して以て自ら存活す』と。王答へて言はく、『汝我頭を守護すべし、當に我食ふ所を以て汝に與ふべし』と。王に答へて言はく、『爾り』と。後異時に於て王小しく睡眠す。惡行念じて言はく、『今命を斷ずべし』と。即ち刀を拔いて之を斫る。時に惡行の臂蹉で自ら墮つ、即ち自ら禍と稱す。王便ち覺めて問うて言はく、『童子何が故に禍と稱する』と。王に答へて言はく、『天自ら其業を造る』と。王言はく、『何が故ぞや』と。此因緣を以て王に白す。王言はく、『實は是れ汝自ら其業を造る』と。佛諸の比丘に告げたまはく、『王月氏とは豈異人ならんや、今の白淨王是なり、第一の夫人とは、即ち今の母摩耶是

【一八】破僧の種類に就て。

なり、爾時の月王とは、今の毘杖羅種是なり、時に月王の女とは、今の瞿夷是なり。時に守園の老母とは、今の摩訶波闍波提比丘尼是なり、二兒とは今の難陀と阿難是なり、時に善行とは我身是なり、時に惡行とは、今の提婆達多是なり、五百の賈人とは、今の五百比丘是なり。昔は惡教を以て此諸人を破し、今亦復惡教を以て之を破す』と。

（一八）爾時優波離、即ち座より起ち、偏に右の肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『云何が破僧、幾人を齊り名けて破僧と爲す、誰か和合僧を破する』と。佛、言はく、『優波離、二事の破僧有り、妄語と相似語なり。此二事を以ての故に破僧す。優波離復二事の破僧有り。羯磨を作すと舍羅を取るとなり。優波離、一比丘は破僧すること能はず、方便を求むと雖も、亦破僧すること能はず、亦比丘に非ず、式叉摩那、沙彌、沙彌尼の破僧に非ず、方便を求めて破僧すと雖も、破僧すること能はず。優波離、此衆一比丘、彼衆一比丘、彼破僧舍羅を行じ、羯磨を作すも、是の如きは破僧すること能はず、但僧をして塵垢せしむ、二人三人も亦是の如し。優波離、若し此衆四人若は過ぎ、彼衆四人若は過ぐれば、破僧舍羅を行じ、若は羯磨を作さば、優波離、是を齊りて名けて破僧と爲し、是を破和合僧と爲す。優波離復問ふ、『破和合僧は、何等をか得ると爲す』と。佛、言はく、『破和合僧は、泥梨中に罪を受け、一劫療せず』と。僧破已りて能く和合すれば、何等をか得る』と。佛、言はく、『梵天の福を得、一劫樂を受く』と。偈を說いて言はく、

衆僧和合して樂む、和合すれば諍ひ競はず

　和合すれば則ち法行り、常に修道を勤むるを得
　能く衆僧を和合すれば、一劫天の樂を受く

優波離復問ふ『一切破僧する者は、皆地獄に墮ちて一劫苦を受くるや不や』と。佛、優波離に語りたまはく、『一切破僧の人、必ずしも地獄に墮ちて苦を受くること一劫ならず。優波離、若し比丘非法を法と言ひ、此法を堅持して和合僧を破し、彼自ら非法の想を知りて破し、便ち非法想を作して是の如きの言を說く、『此は是れ法、此は是れ毘尼、此は是れ佛の所教と。異見異忍にして破僧舍羅を行ず。優波離、此の如きの破僧は、一劫泥梨中に苦を受けて療せず。若し比丘、非法を法と說き、此事を堅持して方便して僧を破す、非法想、破法想して說く、此は是れ法、是は毘尼、是は佛の所教と、破僧舍羅を行じ、羯磨を作す。優波離、是の如き破僧の人は、一劫泥梨の中に苦を受けて療せず、法想して破し、非法想して說くも亦是の如し。優波離、若し比丘、非法を法と說き、此事を堅持して和合僧を破し、彼法想して破し、法想して說く、此は是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教と、不異見、不異忍にして破僧舍羅を行じ、羯磨を作す、是の如きは優波離、此人は地獄に墮して一劫苦を受けず、疑と不疑の四句も亦是の如し。非法想と疑の四句も亦是の如し。是の如く乃至說と不說も亦是の如し。（破僧犍度具足して竟る。）

四分律卷第四十六

【一】七種淨論を滅するを明す。第十六の犍度なり。先づ現前毘尼滅諍に就て。

【二】次に憶念毘尼滅諍について。

四分律 卷第四十七 四分の十一

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺念佛等と共に譯す

滅諍犍度第十六之一

(一)爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に迦留陀夷、六群比丘と、阿夷羅跋提河中に往いて浴す。時に迦留陀夷浴し竟りて岸に上り、六群比丘の衣を著け、是れ己の衣と謂ひ、看ずして去る。六群比丘洗浴し已りて岸に上り、己の衣を見ず、正しく迦留陀夷の衣を見る。卽ち言ふ『迦留陀夷我衣を偸む』と。人現在前せざるに、便ち滅擯羯磨を作す。迦留陀夷聞き已りて疑あり、卽ち世尊の所に往き、頭面に禮足して、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に佛に白す。佛問うて言はく、『汝何の心を以て取る』と。答へて言はく、『是れ我衣と謂ひて取る、賊心を以てせず』と。佛言はく、『不犯なり、衣を看ずして著くべからず、人不現前にして、而も羯磨を作すべからず。呵責羯磨、擯羯磨、依止羯磨、遮不至白衣家羯磨、擧羯磨、滅擯羯磨なり。若し作すも、羯磨成ぜず、突吉羅を得。自今已去、諸の比丘の爲に、現前毘尼滅諍を結す。應に是の如く現前毘尼を說くべし。

(二)爾時、世尊王舍城に在したまふ。時に沓婆羅摩子、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯

さず。時に諸の比丘皆言ふ、『重罪を犯す』と。即ち問うて言はく、『汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶するや不や』と。彼波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶せず。答へて言はく、『我是の如き罪を犯すことを憶せず』と。即ち諸の比丘に語りて言はく、『長老、數我を詰問すること莫れ』と。諸の丘丘、故詰問して止まず。彼是の如きの念を作す、『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『自今已去、沓婆羅摩子のために、憶念毘尼白四羯磨を作すことを聽す。應に是の如く與ふべし。沓婆羅摩子、應に僧中に往き、偏に右肩を露して革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白す。『大德僧聽け、我沓婆羅摩子重罪を犯さず、諸の比丘言はく、我重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すと。諸の比丘我に問うて言はく、汝、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すを憶するや不やと。我重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶せず、答へて言はく、我是の如き重罪を犯すことを憶せず、諸の長老數數難詰して我に問ふことを須ひざれと。而も諸の長老故難詰して止まず、我今憶念せず、僧に從つて憶念毘尼を乞ふ、願くば僧我に憶念毘尼を與へよ、慈愍の故に」と。是の如く第二、第三乞ふ。衆中羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是の如きの白を作すべし。『大德僧聽け、此沓婆羅摩子、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯さず、諸の比丘皆言ふ、重罪波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すと。諸の比丘問うて言はく、汝重罪波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すを憶するや不やと。彼重罪を犯すことを憶せ

【三】不癡毘尼滅諍を明す。

す、諸の長老、我を難詰することを須ひざれと、而も諸の比丘故難詰して止まず。彼罪を犯すことを憶せず、今、僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧時到らば、僧彼に憶念毘尼を與ふることを忍聽せよ、白すること是の如し』と。『大德僧聽け、此沓婆摩羅子、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯さず、諸の比丘皆言ふ、波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すと。即ち問うて言はく、汝重罪波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すを憶するや不やと。彼重罪を犯すことを憶せず、即ち答へて言はく、我、重罪を犯すことを憶せず、諸の長老、數數難詰して我に問ふことを須ひざれと。而も諸の比丘故數數難詰して疑はず、彼、罪を憶せず、今僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。今僧沓婆摩羅子のために憶念毘尼を作す、誰か諸の長老、僧沓婆摩羅子に憶念毘尼を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け』と。此は是れ初羯磨なり、第二、第三も亦是の如く說く。『僧已に沓婆摩羅子に、憶念毘尼を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。自今已去、諸の比丘のために、憶念毘尼滅諍を結す、應に是の如く說くべし』と。

(三)爾時、世尊王舍城に在したまふ。時に比丘有り。難提と名く、癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、沙門の法に非ず言に齊限無し、行來出入威儀に順せず、後還心を得る時、諸の比丘言はく『彼、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯す』と。諸の比丘問うて言はく、『難提、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶するや不や』と。彼、即ち答へて言はく、『我先に癲狂心亂の時、多く衆罪を犯す、行來出入威儀に順ぜず、我故

に作すにあらず、是れ癲狂の故のみ、諸の長老、數數難詰せらるべからずと。諸の比丘故難詰して止まず。彼比丘是の如きの念を作す、『我當に云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧難提比丘に、不癡毘尼白四羯磨を與ふることを聽す。應に是の如く與ふべし。難提比丘應に僧中に至り、偏に右肩を露して革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの白を作して言はく「大德僧聽け、我難提比丘、癲狂心亂の時、多く衆罪を犯す、行來出入威儀に順ぜず、後に還心を得、諸の比丘我に問うて言はく、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偷蘭遮を犯すことを憶するや不やと。我答へて言はく、先に癲狂心亂の時多く衆罪を犯し、行來出入威儀に順ぜず、我故作するに非ず、是れ癲狂心亂の故なり、諸の長老、數數難詰して我に問ふことを須ひざれと。而も諸の比丘、故難問して止まず、我今は不癡なり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ、願くば僧我に不癡毘尼を與へよ、慈愍の故に」と是の如く第二、第三說く。衆中應に羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此難提比丘、癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、言に齊限無し、出入行來威儀に順ぜず、後還心を得、諸の比丘語りて言はく、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偷蘭遮を犯すを憶せりや不や」と。即ち答へて言はく、『我先に癲狂の時多く衆罪を犯す、言に齊限無し、出入行來威儀に順ぜず、此は是れ癲狂なり、是れ故作にあらず、諸の長老、數數我を難詰すること莫れ」と。而も諸の比丘故難詰して止まず。『此比丘今は不癡なり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ、若し僧時到

【四】自言治滅諍を明す。

らば、僧難提比丘に、不癡毘尼を與ふることを忍聽せよ、白すること是の如し」と。「大德僧聽け、此難提比丘、癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、言に齊限無く、出入行來威儀に順ぜず、後に還心を得」諸の比丘語りて言はく「汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すを憶するや不や」と。即ち答へて言はく「我、先に癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、出入行來威儀に順ぜず、此は是れ我癲狂心亂にして、是れ故作に非ず。諸の長老、數數難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘、故難詰して止まず。此比丘今は不癡なり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。僧今難提比丘に不癡毘尼を與ふ。誰か諸の長老、僧難提比丘に不癡毘尼を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、是の如く第二第三說く。僧已に難提比丘に不癡毘尼を與ふることを忍し竟る、僧默然するが故に、是事是の如く持つ。自今已去、諸の比丘のために不癡毘尼滅諍を結す、應に是の如く不癡毘尼を說くべし。

爾時世尊瞻波城に在し、伽渠池邊に在したまふ。時に世尊、十五日布薩し、白月滿ずる時、前後圍遶せられ、衆僧の前に在り、露地に於て坐したまふ。時に阿難初夜過ぎ已りて座より起ち、偏に右肩を露して右膝を地に著け、合掌して白して言さく、「初夜已に過ぐ、願くば世尊說戒したまへ」と。時に世尊默然たり。阿難即ち還座に復す。時に阿難中夜後夜過ぎて明相已に出づ。復坐より起ちて偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、「中夜後夜已に過ぎ、明相已に出づ、衆僧坐すること久し、唯願くば說戒したま

へ』と。佛、阿難に告げたまはく、『衆中不淸淨なり、如來をして不淸淨の衆中に於て、羯磨說戒せしめんと欲す、此處有ること無し』と。時に阿難默然として復座に復す。爾時長老目連是の如きの念を作す。『衆中何等の人有りて不淸淨なる、如來是の如きの言をなしたまふ、「衆中不淸淨なり、如來をして不淸淨の衆中に於て、羯磨說戒せしめんと欲す、是處あることなし」と。』時に目連卽ち自ら思惟して衆中を觀察し、天眼淸淨を以て彼比丘の坐するを見る。佛を去ること遠からず、沙門に非ずして、自ら是れ沙門なりといひ、淨行に非ずして、自ら是れ淨行なりと言ふ、但破戒の諸惡不淨あり、白法あることなし、邪見所犯の衆惡を覆藏して、空中樹の如し、外に枝葉ありと雖も而も內に實無し。見已りて念じて言はく、『世尊此比丘を見たまふ、故に是の如きの言を作したまふ、「如來をして不淸淨衆中に於て羯磨說戒せしめんと欲するは、是處有ること無し」と。』時に目連座より起ちて、彼比丘の所に往いて語りて言はく、『汝今起つべし、世尊汝を知り、汝を見たまふ、出で去れ滅し去れ、汝此中に住すべからず』と。時に目連彼比丘の臂を捉り、牽いて門外に著け、還りて世尊に白して言さく、『衆已に淸淨なり、願くば世尊說戒したまへ』と。世尊目連に告げたまはく、『是の如くすべからず、若し異時に於ても亦是の如くすべからず。目連、彼をして罪に伏せしめ、然ろ後に罪を與へよ、自ら罪に伏せざるに、而も罪を與ふべからず。自今已去、諸の比丘の爲に、自言治滅罪を結す、應に是の如く自言治を說くべし』と。

【五】用多人語滅諍について。

【六】罪處所滅諍法を明す。

(五)爾時、佛、舍衛國に在したまふ。時に舍衛の諸の比丘諍ふ。衆僧罪を求覓すること、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如くす。爾時、佛、諸の比丘に告げたまはく『應に多く罪を求覓し、多人知法の者の語を用ふべし。自今已去、諸の比丘の爲に、用多人語滅諍法を結す、應に是の如く多人語を用ふべし』と。

(六)爾時、世尊、釋翅瘦に在したまふ。比丘有り象力と字く。論議を憙び、外道と共に論ず。切問を得る時は、前後の言語相違す。僧中に於て問ふ時も、亦復是の如し、前後の言語相違し、衆中に在りて、故に妄語を作す。時に諸の外道皆共に譏嫌す『沙門釋子慚愧を知らず、但妄語を作す、自ら言ふ「我正法を知る」と。是の如き何の正法かある。切問を得る時は、前後の言語相違す、故に妄語を作す』と。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者有り、象力釋子を嫌責して言はく、『云何ぞ外道と論じ、切問を得る時は、前後の言語相違する、衆僧中に在りて問ふ時も、前後の言語相違するや』と。諸の比丘佛の所に往き、頭面に足を禮し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、象力釋子を呵責し言はく『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何ぞ汝外道と論議し、切問を得る時は前得の言語相違する、衆中に在りて問ふに亦復前後の言語して、故に妄語を作すや』と。世尊無數の方便を以て象力を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく『應に彼比丘のために、罪處所白四羯磨を作すべし。

【七】如草覆地滅諍法について。

應に是の如く與ふべし。僧を集め、僧を集め已りて爲に擧を作し、擧を作し已りて爲に憶念を作し、憶念を作し已りて罪を與へよ、衆中應に羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大徳僧聽け、此象力釋子論議を好み、外道と論じ、切問を得る時は前後の言語相違し、設し衆僧中に於て問ふも、亦前後の言語相違し、衆中に故に妄語を作す。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今象力釋子の爲に、罪處所羯磨を作す、汝象力利なくして不善を得。汝切問を得る時、前後の言語相違す、設し衆中に問ふ時も亦復是の如し、衆中に在りて故に妄語を作す、白すること是の如し」と。「大徳僧聽け、此象力釋子、論議を好み外道と論じ、切問を得る時は前後の言語相違す。衆僧中に在りて問ふ時も亦復是の如し。衆中に在りて故に妄語を作す。今僧象力釋子の爲に、罪處所羯磨を作す、汝象力、利なくして不善を得。汝切問を得る時前後の言語相違す。衆中に在りて問ふ時も亦復是の如し、衆中に在りて故に妄語を作す。誰か長老、僧象力釋子の爲に、罪處所羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是は初羯磨なり、第二第三も是の如く說く。僧已に象力釋子の爲に、罪處所羯磨を忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ。自今已去、諸の比丘の爲に、罪處所滅諍法を結す。應に是の如く罪處所を結することを說くべし』と。

(七)爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に舍衛の諸の比丘共に諍ふ。諸の比丘多く衆戒を犯す、沙門の法に非ず、亦は作し、亦は說く、出入限無し。彼諸の比丘自ら是の如

【四八】四種諍を明す。

きの念を作す。『我曹多く衆戒を犯す、沙門の法に非ず、亦は作し、亦は説く、出入限無し。若し我曹還た自ら共に善く此事を問はば、或は能く此諍事をして、轉た深重ならしめて、年月を經歷せん。法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く諍事を除滅することを得ず、僧をして安樂を得ざらしめん』と。時に諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應に此諍を滅すべし、猶し草覆の如し。自今已去、諸の比丘の爲に、如草覆地滅諍法を結す。應に是の如く如草覆地を説くべし』と。

〔八〕爾時、世尊、拘睒彌に在したまふ。拘睒彌の比丘、比丘と共に諍ひ、比丘、比丘尼と共に諍ひ、比丘尼、比丘と共に諍ひ、比丘尼、比丘尼と共に諍ひ、闡陀比丘有り、比丘を捨てて比丘尼を助けて伴黨と作る。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者有り。諸の比丘を嫌責し已りて世尊の所に往き、頭面に足を禮し一面に在りて坐し、此因縁を以て具に世尊に白す。世尊爾時此因縁を以て比丘僧を集め、無數の方便を以て諸の比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ拘睒彌の比丘共に諍ひ、比丘は比丘と共に諍ひ、比丘は比丘尼と共に諍ひ、比丘尼は比丘と共に諍ひ、比丘尼は比丘尼と共に諍ひ、闡陀比丘、比丘を捨てて比丘尼を助けて與に伴黨と作るや』と。無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまふ。四種の諍有り、言諍と覓諍と犯諍と事諍となり。云何が言諍なる。比丘と比丘と共に諍ひ、言十八諍事

【六諍】瞋惱、不語結、慳嫉、諂誑、無慚愧、惡欲邪。

を引き、法と非法、若は毘尼と非毘尼、乃至說と不說なり。若し是の如きの相を以て、共に言語を諍ひ、遂に彼此共に鬪ふ、是を言諍と爲す。云何が覓諍なる。若し比丘、比丘の爲に罪を覓むるに三擧事を以てす。破戒と破見と破威儀と見聞疑なり。是の如きの相を作して罪を覓め、共に安ならずと語り、作の勢力を求めて其意を安慰す。若し擧すれば憶念を作し、若は此事を安んず。此事を安んぜず、不癡、不脫是を覓諍と爲す、云何が犯諍なる。七種の罪波羅夷、僧伽婆尸沙乃至惡說を犯す、是を犯諍と爲す。云何が事諍なる。言諍中の事作、覓諍中の事作、是を事諍と爲す。言諍は何を以て根とする。貪恚癡を根と爲し、無貪、無恚、無癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲し、六諍を根となし、十八破事を根と爲す、是を言諍根と爲す。覓諍は何を以て根と爲す。貪恚癡を根となし、無貪、無恚、無癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲し、三擧事を根と爲す。是を覓諍の根と爲す。犯諍は何を以て根と爲す。貪恚癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲し、三擧事を根と爲し、六犯所起を根と爲す、是を犯諍の根と爲す。事諍は何を以て根と爲す、貪恚癡を根と爲し、無貪、無恚、無癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲す、是を事諍の根と爲す。言諍は是れ善不善無記なりや。言諍は或は善、或は不善、或は無記なり。云何が言諍は是れ善なる。比丘と比丘と善心にて言を諍ひ、法、非法、乃至、說、不說なりと、是の如きの相を作して、共に彼此言を諍ふ。是を言諍善と爲す。云何が言諍不善なる。若し比丘、比丘と、不善心にし

【十八事】法、非法、律、非律、犯、不犯、輕、重、有殘、無殘、麤惡、非麤惡、常所行、非常所行、制、非制、說、非說。

て言を諍ひ、法、非法、乃至、說、不說なりと、是の如き相を以て共に言を諍ひ、此を以て遂に鬪諍を成す、是を言諍不善と爲す。云何が言諍無記なる。若し比丘無記心を以て言を諍ひ、十八事を引き、法、非法、乃至、說、不說なりと。此の如き事を以て互に言を諍ふ、是を言諍無記と爲す。云何が覓諍は是れ善、不善無記なりや。覓諍は或は善、或は不善、或は無記なり。云何が覓諍は是れ善、是中比丘善心にて共に相伺覓し、三擧事を以てす、破戒、破見、破威儀と見聞疑なり。內に五法有り、此人をして無犯、無垢汚、清淨にして、罪出づることを得しめ、此人をして惡名稱流布あらしむる莫れと。是の如きの相を以て覓罪して共に語り、妄に伴の勢力を求めて其心を安慰せず、擧を作し憶念を作し、此事を安んじ、此事を安んぜず、不癡にして脫せしむ、是を覓罪事善と爲す。云何が覓罪事不善なる。若し比丘、比丘と共に、不善心を以て罪を覓むるに三擧事、破戒、破見、破威儀と見聞疑とを以てし、內に五法なく、此人をして有犯垢穢不清淨にして、罪をして不出ならしめんと欲し、此人をして、不善名を流布せしめんと欲す。是の如き相を以て、罪を覓めて共に語り、妄に伴の勢力を求めず、其心を安慰せず、擧を作し、憶念を作し、此事を安んじ、此事を安んぜず、癡にして脫せず、是を覓諍事不善と爲す。云何が覓諍事無記なる。比丘、比丘と共に無記心にして罪を覓むるに三擧事、破戒、破見、破威儀を見聞疑とを以てす。是の如き相を以て、罪を覓めて共に語り、妄に伴の勢力を求めて其心を安慰せず、擧を作し、憶念を作し、此事を安んじ、此事を安んぜず、無癡にして脫せしむ、是を

覓諍事無記と爲す。犯諍は是れ善、是れ不善、是れ無記なりや。犯諍は或は不善、或は無記なり。云何が犯諍は是れ不善なる。若し凡夫人の學人、故に罪を犯す、是を犯諍不善と爲す。云何が犯諍無記なる。若し凡夫人の學人、故に戒を犯さず、無著人故に戒を犯さず、是を犯諍無記と爲す。事諍は是れ善、是れ不善、是れ無記なりや。事諍は或は善、或は不善、或は無記なり。云何が事諍善なる。比丘善心を以て言諍中に事を作し、覓諍中に事を作し、犯諍中に事を作す、是を事諍善と爲す。云何が事諍不善なる。不善心を以て言諍中に事を作す、覓諍中に事を作す、犯諍中に事を作す、是を事諍不善と爲す。若し無記心を以て作せば、是を事諍無記と爲す。

【九】言諍の滅法に就て。

言、言諍、言諍言、言諍諍言、

(九)或は言有り、是れ言諍。或は言有り言諍にあらず、或は言諍有り、即ち是れ言、或は言有り、即ち是れ諍、或は諍有り、諍に非ず、或は諍有り、即ち是れ言、或は諍有り、言に非ず。云何が言有り、即ち是れ言諍。若し比丘と比丘と、共に言を諍ひ、十八事を以て、法、非法、乃至說、不說と、是の如きの相を以て共に言を諍ひ、互に共に闘ひて彼此和せず、是を言有り、即ち是れ言諍と爲す。云何が言有りて言諍に非る。若し父、兒と共に語り、兒、父と共に語り、兒、母と共に語り、母、兒と共に語り、兒、弟と共に語り、弟、兒と共に語り、妹、姉と共に語り、姉、妹と共に語り、若は復餘人共に語る、是を言有り、言諍に非ずと爲す。云何が言諍即ち是れ言。若し比丘、比丘と共に言を諍ひ、十八事を以

て、法、非法、乃至、說、不說と。是の如き相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪つて彼此和せず、是を言諍即ち是れ言と爲す。云何が言即ち是れ諍。若し比丘、比丘と共に言を諍ひ、十八事を以てし、法、非法、乃至、說、不說と、是の如きの相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪ひて彼此和せず、是を言有り、即ち是れ諍となす。云何が言にして不諍。兒、父と共に語り、父、兒と共に語り、兒、母と共に語り、母、兒と共に語り、弟、兄と共に語り、兄、弟と共に語り、妹、姉と共に語り、姉、妹と共に語り、若は復餘人と共に語る、是を言にして不諍と爲す。云何が諍にして即ち是れ言。若し比丘、比丘と共に諍ひ、十八事を以てし、法、非法、乃至、說、不說と、是の如きの相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪つて彼此和せず、是を諍にして即ち是れ言と爲す。云何が諍にして言に非ざる。言諍を除いて、若は餘の諍事、覓諍、犯諍、事諍、是を諍にして言に非ずと爲す。覓覓諍、覓諍覓、覓諍、諍覓なり。（此四句、曲に解するに、上の言諍の四句の如く異ならず、故に復重ねて出さず、此言覓は、即ち是れ覓諍、犯諍、事諍、亦上の如し。）若し一比丘、一比丘の現前に在り、好言にて教へて語り、若し非法、非毘尼、非佛所教を擯けて、彼、是の如きの言をなす、『是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教なり、當に受けて是を行ずべし』と。是の如くすれば、諍事滅することを得、是を非法滅諍非法相似現前毘尼と爲す。一比丘、二比丘の爲にし、三比丘の爲にし、僧の爲にする亦是の如し。三比丘、一比丘の爲にし、二比丘の爲にし、三比丘の爲にし、僧の爲にする亦是の如し。若し僧一比丘の爲にし、二比丘の爲にし、三比丘の爲にし、僧の爲にする亦是の如し。若し一比丘、一比丘の前に在

りて、好言にて教へて語り、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如くし、彼、是の如きの言を作す。』此は是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教なり。汝當に是忍可を受くべし』と。若し作すこと是の如くなれば、諍ひ滅することを得、是を如法滅諍現前毘尼と爲す。是中云何が現前法毘尼人。云何が法現前とは、所持の法滅諍する者是なり。云何が毘尼現前とは、所持の毘尼滅諍する者是なり。云何が人現前とは、言議往返する者是なり。若し比丘諍事滅し已り、若し更に發起する者は、波逸提なり。若は後來の比丘、若は新受戒の者、是れ初諍と謂ふ、若し更に發起する者は、波逸提なり。是の如く一比丘、二比丘、三比丘の爲にし、三比丘の爲にし、僧の爲にするも亦是の如し、二比丘の一比丘、二比丘、三比丘の爲にし、僧の爲にするも亦是の如し。三比丘の一比丘、二比丘、三比丘の爲にし、僧の爲にするも亦是の如し。僧、一比丘の爲に、好言にて教へて語り、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くにし、彼是の如きの言を作す『是は法、是は毘尼、是は佛の所教なり、是を受け、是を忍せよ』と。若し、是の如くすれば諍事滅す、是を如法滅諍現前毘尼と爲す。云何が現前法、毘尼、人、僧、界なる。云何が法現前とは、所持の法滅諍する者是なり。云何が毘尼現前とは、所持の毘尼滅諍する者是なり。云何が人現前とは、同羯磨和合して一處に集まり、來らざる者は囑授し、現前に在りて應に呵すべき者を呵せざる是なり。云何が界現前とは、界内に在りて羯磨し、制限を作す者是なり。若し諍事滅して、若し更に發起するは、波逸提なり。若し後來の比丘、新受戒の者、是れ初諍と謂ふ、而も更に發起するは波

逸提なり。與欲し已りて、後に悔ゆる者は、波逸提なり。僧の二比丘、三比丘、僧の爲にするも亦是の如し」と。爾時、阿難座より起ち、偏に右肩を露して、右膝を地に著け、合掌して世尊に白して言さく、「言諍は、幾の滅を以て滅する」と。佛、阿難に告げたまはく、「言諍は二滅を以て滅す、現前毘尼を以て多人語を用ふ」と。阿難又問ふ「頗し言諍の、一滅を以て滅し、現前毘尼にして、多人語を用ひざるありや」と。佛阿難に告げたまはく、「有り」と。問うて言はく「何者か是なる」と。佛、言はく、「若し一比丘、一比丘の爲に現前に好言にて教へて「是れ法、是れ毘尼、是れ佛所教、是を受け、是を忍せよ」と言ふ、是の如くにして、諍事滅することを得、是を阿難、言諍の一滅を以て滅し、多人語を用ひずと爲す、現前の義は上の如し。一比丘の二比丘、三比丘、僧の爲にする亦是の如し。二比丘の一比丘、二比丘、三比丘、僧の爲にするも亦是の如し。三比丘の一比丘、二比丘、三比丘、僧の爲にするも亦是の如し。僧、一比丘の爲に好言にて教へて語る、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くし、是の如きの言を作す。「是れ法、是れ毘尼、是れ佛所教なり、是を受け、是を忍せよ」と。若し是の如くすれば諍事滅す、是を阿難、言諍の一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。現前の義上の如し。僧の二比丘、三比丘、僧の爲にするも亦是の如し」と。佛、阿難に語りたまはく、「彼諍比丘忍可せず、僧是の如きの滅諍を作す。異住處に好衆僧、好上座の智慧人有りと聞き、彼諍比丘、此諍事を以ての故に、應に彼住處に往くべし。若し道路に在りて、能く法の如く、毘尼の如く、佛所教

の如く滅諍することを得ば、阿難、是を言諍の、一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。是中現前毘尼は前の如し。若し彼諍比丘、道路に在りて、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍すること能はざれば、彼諍比丘、應に彼僧中の上座、有智人の前に至り、是の如きの言を作す。「我此諍事是の如くにして起り、實の如く是に因りて起る、僧是の如きの滅を爲す、我忍可せず、是故に長老の所に來至す。善い哉長老、我爲に法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅せよ、若し、長老能く我等が爲に此諍事を滅すること、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くせば、我等當に長老の前に於て此諍事を捨つべし、若し長老、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅することと能はざれば、我等自在に諍ひを作し、更に罪をして深重ならしめ、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍せず、諸の比丘住止安樂ならず」と。彼諍比丘、應に是の如く僧前に在りて此諍事を捨つべし。此僧應に彼諍比丘に語りて言ふべし、「長老の諍事、若し是の如くにして起り、實の如く、所因の如く起る。彼衆僧の諍事の如き、若し能く實の如く說かば、我等當に宜しきを量り、能く此諍事を滅すべきや不や、若し長老の諍事、是の如く起り、實の如く所因の如く起り、衆僧の滅諍の如く、而も不如實に說く、是の如くなれば長老、此諍事を滅するを得ず、諸の比丘安樂に住するを得ず」と。彼僧應に作すこと是の如くにして諍ひを受くべし、受け已りて應に斷決すべし。若し彼諍比丘是れ下座ならば、應に語りて言ふべし、「小しく出でよ、我等自ら共に此事を評し、法の如く、毘尼の如

く、佛所敎の如くせん」と。若し諍比丘是れ上座ならば、僧應に自ら避けて餘處に至り、共に此事を評斷し、法の如く、毘尼の如く、佛所敎の如くすべし。衆僧是の如きの念を作す、『我等若し僧前に在りて、此事を評せば、恐らくは更に餘事の起る有りて、彼此をして善惡の言說不了ならしめん、我等寧ろ諸の智慧人と別に一處に集まり、共に此事を評すべし」と。佛、阿難に告げたまはく、「彼時僧卽ち應に白を作して、共に此事を評すべし、是の如きの白を作せ『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今諸の智慧者を集め、共に別に事を評斷せん、白すること是の如し』と、應に是の如きの白を作し已りて、共に事を評斷すべし。若し比丘十法あらば、應に差して別に事を評斷すべし。何等か十なる。一には持戒具足、二には多聞、三には若は二部の毘尼を誦して極めて利、四には若は廣く其義を解す、五には若し善巧の言語辭辯了了にして、問答して彼をして歡喜せしむるに堪任す、六には若し諍事起れば能く滅す。七には不愛、八には不恚、九には不怖、十には不癡なり。此の如きの十法ある者は、應に差して、共に別に事を評斷すべし、彼、十法ある者は、應に別に一處に住し、共に此事を評斷すべし。斷事比丘中不誦戒の者有り、戒毘尼を知らず、便ち正義を捨てて非法語を作さば、僧應に白して此比丘を遣り出すべし。應に是の如く白すべし、『大德僧聽け、彼某甲比丘戒を誦せず。戒毘尼を知らず、便ち正義を捨てて非法語を作す、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今此比丘を遣りて出す、白すること是の如し』と。「應に是の如きの白を作して遣出すべし。佛、阿難に語りたまはく、『彼斷

事比丘中に坐し、戒を誦して、戒毘尼を誦せざる有り、彼正義を捨てて少許の文を説く」と。佛、阿難に告げたまはく、「僧應に白を作して、此斷事の比丘を遣りて出すべし、應に是の如く白すべし。「大德僧聽け、彼某甲比丘、戒を誦し、戒毘尼を誦せず、彼正義を捨てて少許の文を説く、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今此比丘を遣りて出す、白すること是の如し」と。白已りて遣出せよ。若し評斷事比丘中に、法師有りて座に在り、彼、正義を捨て、言辭の力を以て强ひて説く」と。『佛、阿難に告げたまはく、「僧應に白を作し、此比丘を遣出すべし、是の如きの白を作せ。「大德僧聽け、此某甲比丘法師、正法の義を捨て、言辭の力を以て强ひて説く、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧、今此比丘を遣り出す。白すること是の如し」と。應に是の如きの白を作し已りて遣出すべし」と。若し評斷事の比丘の坐中にて、戒を誦し、毘尼を誦し、彼正義に順じ、如法に説かば、佛、阿難に告げたまはく、「僧應に、法の如く毘尼の如く、佛の所教の如く、此比丘を佐助すべし。若し彼諍事、彼僧、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍ひを滅せざれば、今此僧應に法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅すべし。若し彼僧、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く、此諍事を滅せば、今此僧亦此事を忍可せよ。僧即ち應に彼諍比丘に語りて言ふべし。若し彼僧、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅せば、我等も亦此事を忍可し、如法に滅諍す。今、我等亦當に是の如きの滅諍を作すべし」と。若し作すこと是の如くにして滅諍を得ば、是を阿難、言諍の一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語

を用ひずと爲す。現前の義法乃至界も亦上の如し。若し諍事如法に滅し已り、後に發起すれば波逸提上の如し。彼諍比丘第二僧を忍可せざれば、是の如きの滅諍を作す。彼住處に衆多の比丘有り、法を持し、律を持し、摩夷を持す。彼諍比丘應に彼持法、持律、持摩夷の比丘の所に往くべし。若し彼比丘中道に至りて能く諍事を滅せば、是を阿難、言諍の一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。是中の現前とは、云何が現前法、毘尼、人、僧、界とは上の如し。如法に滅諍已りて、後更に發起すれば、波逸提を得ること上の如し。若し彼諍比丘、中道にして法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、諍事を滅する能はざれば、彼諍比丘、應に彼衆多比丘の、持法、持律、持摩夷者の所に往き、是の如きの言を作すべし。「長老、我此諍事、因是の如く、起ること是の如く、實に是に因りて起る、僧是の如きの滅諍を作し、第二僧亦是の如きの滅を作す、我忍可せず、故に長老の間に來至す、善い哉長老、能く法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅せば、我當に長老の間に於て、此諍事を捨つべし、若し長老、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅せざれば、我等便ち自在に諍ひを作し、更に罪をして深重ならしめん。法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅せざれば、諸の比丘住止安樂ならず」と。彼諍比丘、應に彼衆多比丘の前に在りて此諍事を捨つべし。彼衆多比丘、應に此諍比丘に語りて言ふべし。「若し長老、此諍事所起の如く、實の如く、所因の如く起らば、第二僧の滅諍の如く、實の如く說き、說き已りて諍ひを捨てよ、我等當に宜しきを量りて、此諍ひ

を滅すべきや不や。若し長老、如實に說かざれば、此諍事は自在にして、罪を作すこと更に深重に、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍せざれば、諸の比丘住止安樂ならず」と。阿難、彼衆多比丘、應に作すこと是の如くにして諍を受くべし。諍を受け已りて決斷せよ。若し彼諍比丘是れ下座ならば、應に語りて言ふべし「汝小しく避けよ、我等事を評斷せんと欲す」と。若し是れ上座ならば、應に自ら餘處に避け、共に此事を評斷すべし。「若し彼僧法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍せず、第二僧も亦法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く此諍事を滅せざれば、衆多比丘應に、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此諍事を滅すべし。若し彼僧如法に滅諍し、第二僧も亦如法に滅諍すれば、衆多比丘亦應に此事を忍可すべし。應に彼諍比丘に語りて言ふべし「彼第一僧の滅諍の如く、我等亦忍可す」と。今當に是の如きの滅諍を作すべし。是を阿難、言諍の一滅を以て滅す、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。是中の現前とは、法、毘尼、人も亦上の如し。如法に滅諍し已りて後更に發起せば、波逸提を得ること上の如し、二比丘の所に往く、持法、持律、持摩夷亦是の如し。一比丘の所に往く、持法乃至持摩夷も亦是の如し」と。爾時、舍衛國の比丘諍ふ、時に舍衛の衆僧如法に滅諍す、彼諍比丘、僧の滅諍事を忍可せず、彼聞住處亦上の如く、衆多比丘亦上の如し。二比丘、亦上の如し。彼諍比丘、舍衛の僧の滅諍を忍可せず、乃至一比丘なり。便ち往いて佛所に至り、頭面に足を禮し一面に在りて坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊即ち比丘僧を集め、無數に方便して彼諍比丘を呵

責して言はく、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ癡人、舍衞の僧如法に滅諍す、而も忍可せず、乃至一比丘の滅諍も亦忍可せざる』」と。世尊無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく『應に此諍ひを滅するに多人語を用ふべし。舍羅を行じ、行舍羅人を差し、白二羯磨することを聽す。五法有り、差して舍羅を行ぜしむべからず。愛有り、恚有り、怖有り、癡有り、已に行ずるや行ぜざるやを知らず、是の如きの五法あらば、差して舍羅を行ぜしむべからず。不愛、不恚、不怖、不癡にして、已に行ずるや、行ぜざるやを知る、是の如きの五法あらば、應に差して舍羅を行ずべし。衆中應に是の如く、羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧某甲比丘を差して舍羅を行ず、白すること是の如し」と。『大德僧聽け、僧今某甲比丘を差して舍羅を行ず。誰か諸の長老、僧某甲比丘を差して舍羅を行ずることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某甲比丘を差して、舍羅を行ずることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是事是の如く持つ』と。三種の行舍羅有り、一は顯露、二に覆藏、三に就耳語なり。云何が顯露なる。彼諸の比丘是の如きの念を作す。『衆中非法の比丘多し』と。然も彼和尚、阿闍梨、皆法の如く應に顯露に舍羅を行ずべし。摩の諸の比丘是の如きの念を作す『衆中非法の人多し、而も上座の智人、法を持し、毘尼を持し、摩夷を持する者、皆如法に語る』と。應に顯露に舍羅を行ずべし。諸の比丘是の如きの

念を作す『此諍事、如法語を作す者多きや、非法語を作す者多きやを知らず、然も彼和尚、阿闍梨、皆如法なり』と。彼比丘應に顯露に舍羅を行ずべし。諸の比丘是の如きの念を作す『此諍事、法語多きや、非法語多しとせんやを知らず、然も彼上座の智人、法を持し、毘尼を持し、摩夷を持し、皆如法に說く』と。彼比丘應に顯露に舍羅を行ずべし。彼諸の比丘、是の如きの念を作す『此諍事法語の人多し』と。即ち應に顯露に舍羅を行ずべし。應に是の如く行ずべし。應に二種の舍羅を作るべし、一は破、一は完なり。舍羅を作り已りて應に白を作すべし『是の如きの語を作す者は、不破舍羅を捉れ、是の如きの語を作す者は破舍羅を捉れ』と。舍羅を行じ已らば、應に別處に數ふべし。若し如法語の比丘多ければ、彼應に白を作すべく、『是の如きの語を作すは、諍事滅す』と。若し如法語の比丘少ければ、即ち應に禮を作し已りて便ち起ちて去るべし。應に信を遣して比丘の住處に往き、僧中に白して言すべし『彼住處非法の比丘多し、善い哉長老、能く往いて彼に至れ、若し如法語の比丘多ければ、諍事滅して功德多し』と。此比丘聞かば應に往くべし、若し往かざれば法の如く治す。若し作すこと是の如くにして諍事滅すれば、是を阿難、言諍の二滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ふと爲す。是中の現前とは、法、毘尼、人、界、僧の義上の如し。是中云何が多人語を用ふる。若し多人の說を用ふるは持法、持毘尼、持摩夷なり。若し如法に滅し已りて、後更に發起するは、波逸提上の如し。云何が覆藏行舍羅なる。諸の比丘是の如きの念を作す『此諍事如法の比丘多し、而も彼和尚、阿闍梨不如

法なり、我等若し顯露に舍羅を行ずれば、恐らくは諸の比丘、和尚、阿闍梨に隨和して舍羅を捉らん』と。彼比丘應に覆藏して舍羅を行ずべし。彼是の如きの念を作す。『此諍事如法の比丘多し、彼衆中に上座有り、標者の智人は持法、持律、持摩夷なるも、而も非法に住す。若し我等顯露に舍羅を行ずれば、諸の比丘、彼衆中の上座智人の、非法に住する者に隨つて舍羅を捉らん』と。是比丘應に覆藏にして舍羅を行ずべし。二句不知亦上の如し、應に是の如く舍羅を行ずべし。二種より乃至如法滅諍已りて、後更に發起すれば波逸提を得ること上の顯露行舍羅の如し。云何が耳語行舍羅と爲す。彼比丘是の如きの念を作す。『如法の比丘多し、彼和尚、阿闍梨は非法に說く』と。彼、應に耳語して舍羅を行ずべし。彼比丘是の如きの念を作す。此諍事は如法の比丘多し、而も彼衆中に上座の智人標首の比丘非法に住す、持法、持毘尼、持摩夷なり。彼比丘應に耳語して舍羅を行ずべし。二句不知上の如し。應に二種の舍羅を作るべし、一は破、二は完なり。應に白を作すべし。『是の如く語る者は完舍羅を捉れ、是の如く語る者は破舍羅を取れ』と。彼舍羅を行ずる時、應に稀に坐間に一人を容れ、身小しく障翳すべし。彼比丘耳語を作して語りて言はく、『汝の和尚、同和尚、阿闍梨、同阿闍梨、親厚知識は、已に舍羅を捉る。善い哉、汝も亦當に舍羅を捉るべし、慈愍の故に』と。若し如法の比丘多くして、諍事滅することを得ば、功德を得ること多し。舍羅を行じ已りて、一面に在りて之を數ふ。此より乃至如法滅諍已りて後、更に發起すれば波逸提を得ること上の如し。十六不如法有りて舍羅を捉る。不解

にして舍羅を捉る、善く作と共にせずして舍羅を捉る、非法の者をして多からしめんと欲して舍羅を捉る。非法比丘の多きを知りて舍羅を捉る、衆僧を破せしめんと欲するが故に舍羅を捉る、衆僧の破すべきを知るが故に舍羅を捉る、非法に舍羅を捉る、別衆舍羅を捉る、小犯を以ての故に舍羅を捉る、所見の如くならざる故に舍羅を捉る。云何が不解にして舍羅を捉る。此諍事に於て決了せず、是法、非法、乃至說、不說を知らず、是を不解にして舍羅を捉ると爲す。云何が善く作と共にせずして舍羅を捉る。若し比丘多聞にして、持法、持毘尼、持摩夷ならば、與に作を作さずして、法、非法、乃至說、不說なり。是を善く作と與にせずして舍羅を捉ると爲す。云何が非法比丘をして多からしむる舍羅を捉る。彼比丘是の如きの念を作す『此諍事多く如法比丘有り、我今當に非法舍羅を捉り、非法比丘をして多からしめん』と。是を非法比丘をして多からしむる舍羅を捉ると爲す。云何が非法比丘の多きを知りて舍羅を捉る。彼比丘是の如きの念を作す『此諍事は非法の比丘多し、非法の作の爲に舍羅を捉らん』と。是を非法比丘の多きを知りて舍羅を捉ると爲す。云何が僧をして破せしめんと欲して舍羅を捉る。彼れ是の如きの念を作す、『此諍事如法の比丘多し、我今非法舍羅を捉り、衆僧をして破せしめん』と。是を衆僧をして破せしめんと欲して舍羅を捉ると爲す。云何が僧の當に破すべきを知りて舍羅を捉る。彼比丘、非法比丘の多きを知り、非法作黨の爲に舍羅を捉る。是を僧の當に破すべきを知りて舍羅を捉ると爲す。云何が非法に舍羅を捉る、白二に白四羯磨し、白異に羯磨異なり、是を非法に舍羅

を捉ると爲す。云何が別衆舍羅を捉る。同一界羯磨に盡く集まらず、應に囑授すべき者は囑授せず、現前に在りて呵すべき者は便ち呵す、是を別衆舍羅を捉ると爲す。云何が小犯事を以て舍羅を捉る。或は念ず『罪を犯す』と。或は『故に犯さず』と。或は發心す、是の如くにして舍羅を捉る、是を小犯事にして舍羅を捉ると爲す。云何が所見の如くならずして舍羅を捉る。異見、異忍にして舍羅を捉る、是を所見の如くならずして舍羅を捉ると爲す。是を十種の非法捉舍羅と爲す。復十如法の捉舍羅有り。解して舍羅を捉る、乃至所見の如く舍羅を捉る、是を十種の如法捉舍羅と爲す。此れ即ち十不如法捉舍羅に反す。五種の平當人有り。或は人有り、身に作さずして口に作す、或は人有り、口に作さずして身に作す、或は人有り、身に作さず、口に作さず。或は人有り、身に作し、口に作す。或は人有り、不愛、不恚、不怖、不癡なり。云何が人有り、身に作さず口に作すとは、人有り、身に現相せずして口に言教を說く、是を人有り、身に作さず、口に作すと爲す。云何が人有り、口に作さず、身に作すとは、人有り身に相を現じて、口に言教を說かず、是を人有り、口に作さず身に作すと爲す。云何が人有り、身に作さず、口に作さずとは、人有り、身に相を現せず、口に言教を說かず、是を身に作さず、口に作さずと爲す。云何が身に作し、口に作すとは、人有り身に相を現じ、口に言教を說く、是を身に作し、口に作すと爲す。是中に人有り、不愛、不恚、不怖、不癡なり、此人、彼人の中に於て、最も尊貴殊勝第一と爲す。猶し乳の酪を出し、酪の酥を出し、酥の醍醐の最勝無比なるを出すが

如し。是の如く不愛、不恚、不怖、不癡は、彼人の中に於て尊貴殊勝無比と爲す。是を五種の平等人と爲す。

四分律卷第四十七

【一】前巻に續いて滅諍犍度を明す中、四諍の第二、覓諍の滅法に就て。

四分律 巻第四十八　三分之十二

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

滅諍犍度之二

(一)爾時、阿難、坐從り起ちて偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、「覓諍は幾滅を以てか滅するや。」佛、阿難に告げたまはく、「覓諍は四滅を以て滅す。現前毘尼、憶念毘尼、不癡毘尼、罪處所毘尼なり。」阿難、復問ひたてまつらく、「頗し有る覓諍は二滅を以て滅し、不癡毘尼と罪處所毘尼の滅を以てせざることありや。」佛、阿難に告げたまはく、「有り。」又問ひたてまつらく、「何者か是なる。」佛、阿難に告げたまはく、「若し比丘重罪波羅夷僧殘偸蘭遮を犯さざるに、諸の比丘は、波羅夷僧殘偸蘭遮を犯せりと言ひ、而も諸の比丘の詰つて言はく、『汝、波羅夷僧殘偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や』と。彼、憶はざれば卽ち答へて言はく、『我波羅夷罪乃至偸蘭遮を犯せりと憶はず、長老、數難詰して我に問ふこと莫れ』と。而も彼比丘故に難詰して止まざれば、阿難、僧は應に此比丘に憶念毘尼を與ふべし。白四羯磨は上の如し。三非法と憶念毘尼と有り。若し比丘、重罪波羅夷僧殘偸蘭遮を犯さんに、諸比丘は、『重罪波羅夷僧殘偸蘭遮を犯せり』

と言ひ、彼比丘に語つて言はく、「汝、重罪波羅夷乃至偷蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」答へて言はく、「我犯せりと憶はず、長老、數難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も彼比丘故に難詰して止まず。彼僧に從つて憶念毘尼を乞はんに、僧若し與に憶念毘尼を作さば非法なり。若し比丘、重罪波羅夷僧殘偷蘭遮を犯さんに、諸比丘、亦重罪波羅夷僧殘偷蘭遮を犯せりと言ひ、問うて言はく、「汝、重罪波羅夷乃至偷蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」答へて言はく、「我、重罪波羅夷乃至偷蘭遮を犯せりと憶はず、我、小罪を犯せりと憶ふ、當に如法に懺悔すべし。諸長老、數難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて憶念毘尼を乞はんに、僧若し憶念毘尼を與ふれば非法なり。若し比丘、重罪波羅夷僧殘偷蘭遮を犯さんに、諸比丘、亦重罪波羅夷僧殘偷蘭遮を犯せりと言ひ、問うて言はく、「汝、重罪を犯せりと憶ふや不や。」答へて言はく、「我、重罪波羅夷僧殘偷蘭遮を犯せりと憶はず、我、小罪を犯せりと憶へば、已に如法に懺悔せり。諸長老、數難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼れ僧に從つて憶念毘尼を乞はんに、若し僧憶念毘尼を與ふれば非法なり。是を三種の與非法憶念毘尼と爲す。三種の與如法憶念毘尼有り即ち上の三句に反す。是れ如法に憶念毘尼を與ふるなり。五不如法與憶念毘尼有り。不現前、不自言、不清淨、非法、別衆、是を五非法與憶念毘尼と爲す。五如法憶念毘尼有り。現前、自言、清淨、法、和合、是を五如法與憶念毘尼と爲す。若し是の如くんば諍事滅せん。是を阿難、覓諍に二滅を以て滅し、現前毘尼、憶念毘尼もてし、不癡毘尼罪處所

を用ひずと爲す。」『是中云何が現前毘尼なる。』『人僧界上の如し。』『是中云何が憶念毘尼なる。』『彼比丘、此罪を更に擧ぐべからず、應に憶念を作すべからざればなり。若し比丘、如法に諍事を滅し已つて、後更に發起せば、波逸提を得ること上の如し。』阿難、復問ひたてまつらく、『頗し覓諍の二滅を以て滅し、現前毘尼を不癡毘尼もてし、憶念毘尼罪處所を用ひざるもの有りや。』佛、阿難に告げたまはく、『有り。』問うて言さく、『何者か是なる。』佛、阿難に告げたまはく、『是中に比丘有つて、癲狂心亂にして多く衆罪を犯し、後還つて心を得たらんに、諸比丘皆言はく、「重罪波羅夷僧殘偸蘭遮を犯せり」と。即ち問うて言はく、「汝、重罪波羅夷僧殘偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や」と。彼、重罪を犯せりと憶はざれば、答へて言はく、「我重罪波羅夷乃至偸蘭遮を犯さず、我癲狂心亂の時、多く衆罪を犯せるも、此れ故に作せしに非ず。是れ我癲狂なりしが故なるのみ、諸長老、數難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼是の如きの念を作さく、「我當に云何がすべき」と。』諸比丘に白す。諸比丘佛に白す。佛、言はく、『僧は此比丘に不癡毘尼を與ふるを聽すべし。白四羯磨は上の如し。三非法もて不癡毘尼を與ふるあり。若し比丘不癡なるに、而も詐つて癡となし、多く衆罪を犯すは沙門法に非ざるに、諸比丘は、重罪波羅夷僧殘偸蘭遮を犯せりと言ひ、諸比丘即ち問うて言はく、「汝、重罪波羅夷乃至偸蘭遮を犯せりや不や」答へて言はく、「我癡狂なりし時多く衆罪を犯せるは沙門法に非ざるも、是れ我が故に作せしに非ず、是れ癡狂なりし故のみ、諸長老、數難詰して我に問うこと莫

れ」と。』而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて不癡毘尼を乞はんに、僧若し不癡毘尼を與ふれば是を非法と爲す。（此は是れ初句なり、次第二句も亦上に同じ。正しく言を以てせば、我衆罪を犯せりと憶ふ、人の夢中の所作の如きのみ。次の第三句にも亦同じ。正しく言を以てせば我衆罪を犯せりと憶ふ。人の高山より地に墮するに、少片物を攬捉するが如し。我も亦是の如し。）を與ふと爲す。三如法もて不癡毘尼を與ふる有り。（卽ち三句に反する是れ如法なり。）五非法もて不癡毘尼を與ふる有り。五如法もて不癡毘尼を與ふる有り、上の如し。若し是の如く諍事を滅する者を、是を阿難、覓諍を二滅を以て滅するに、現前毘尼、不癡毘尼とをもてし、憶念毘尼と罪處所を用ひずと爲す。是中現前は上の如し。『云何が不癡毘尼なる。』『彼比丘、此罪を更に舉ぐべからず、憶念すべからざるものの是なり。彼比丘、如法に諍事を滅し已つて後、更に發起せば、波逸提を得ること上の如し。阿難又問ひたてまつらく、『頗し覓諍を二滅を以て滅するに、現前毘尼罪處所もてし、憶念毘尼と不癡毘尼とを用ひざるもの有りや。』佛、言はく、『有り。』問うて曰はく、『何者か是なる。』『若し比丘、好んで論議し、外道を論ずる時、切難を得て、便ち前後に言語相違し、若くは僧中に在つて問ふ時も、亦前後に言語相違せば、衆中の故に妄語なり。阿難、僧は應に此比丘に罪處所を與ふべし。自門羯磨は上の如し。三非法もて罪處所毘尼を與ふる有り。舉ぐることを作さざる、憶念を作さざる、自言を作さざる、是を三と爲す。復三有り。犯無きと、不可懺罪を犯せると、若は犯罪せるも已懺せるとなり。復三有り。不舉非法の別衆と不作憶念非法の別衆と、不作自言非法の別衆となり。不犯非法の別衆と犯不可懺罪非法の別衆と犯罪已懺非法の別衆と、

【阿難復等】 次三に犯諍の滅法に就て。

不現前非法の別衆となり。是を三非法もて罪處所を與ふと爲す。復三如法もて罪處所を與ふる有り。即ち上事に反して事更に異らざるが故に是如法を出さざるなり。是を三如法もて罪處所を與ふと爲す。五非法もて罪處所を與ふる有り。不現前、不作身言、不清淨、非法、別衆、是を五非法もて罪處所を與ふと爲す。次に五句如法有り、上事に反す。是れ更に異ること無きが故に出さず。若し是の如くして諍事滅すれば、是を覓諍を二滅を以て滅するに、現前毘尼と罪處所もてし、憶念毘尼と不癡毘尼とを用てせずと爲す。是中現前の義は上の如し。『云何が罪處所なる。』『彼比丘、此罪を與に擧ぐることを作し、憶念を作す者是なり。彼比丘、若し諍事を如法に滅し已り、後更に發起せば、波逸提を得ること上の如し。』阿難、復問ひたてまつらく、『犯諍は幾滅を以てか滅すべき。』『佛、阿難に告げたまはく、『犯諍は三滅を以て滅すべし。現前毘尼と自言治と草覆地となり。』阿難、復問ひたてまつらく、『頗し犯諍有つて二滅を以て滅するに現前毘尼と自言治ともてし、草覆地を用てせざるありや。』佛、言はく、『有り。』問うて言はく、『何者か是なる。』佛、阿難に告げたまはく、『若し比丘犯罪せんに、若し一比丘の前に在つて懺せんと欲せば、應に一清淨比丘の所に至つて偏に右肩を露し、若し上座すれば、足を禮し、右膝を地に著け合掌して罪名を說き、罪種を說き、是の如きの言を作すべし、「長老一心に念じたまへ、我某甲比丘、某甲の罪を犯せり、今長老に從つて懺悔し、敢て覆藏せず、懺悔せば則ち安樂ならんも、懺悔せざれば安樂ならざらん。憶念犯も發露知して覆藏せず、長老、我清淨戒身具足清淨の布薩を憶へ」と。是の如く第二、第三說かば、彼應に語つて言ふべし、

「自ら汝が心を責むれば、應と厭離を生ずべし」と。答へて言はく、「爾り」若し是の如く諍事を滅することを作さば、是を阿難、犯諍を一滅を以て滅するに、現前毘尼と自言治とをもてし、如草覆地を用てせずと爲す。是中現前とは法毘尼なること上の如し。人現前とは、受懺悔者是れなり。是中云何が自言なる。罪名を說き、罪種を說つて懺悔する者是れなり。云何が治なる。自ら汝が心を責めて厭離を生ずるなり。若し諍事滅し已り、後更に發起せば波逸提なり。受欲を除き已つて餘も上の如し。若し二比丘の邊に在りて懺悔せんと欲せば、應に彼二清淨比丘の所に至つて、偏に右肩を露し、若し是れ上座なれば、足を禮し已つて右膝を地に著け、合掌して罪名を說き、罪種を說いて、是の如きの言を作すべし。懺法上の如し。受懺者、應に先づ彼第二比丘に問ふべし、「若し長老、我某甲比丘の懺するを受くるを聽さば、我當に受くべきや」と。彼第二の比丘、應に可爾りと言ふべし。若し三比丘の邊に在つて懺せんと欲せんも亦是の如し。若し僧中に在つて懺せんと欲せば、應に僧中に往つて偏に右肩を露し、革屣を脫し、僧足を禮し已つて右膝を地に著け、合掌し白して是の如く言へ「大德僧聽したまへ、我某甲比丘、某甲の罪を犯せり、今僧に從つて懺悔せん」と。是の如く三說せば、受懺者は應に白を作し、然る後彼懺を受くべし。應に是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、彼某甲比丘、某甲の罪を犯せり、今僧に從つて懺悔す。若し僧時到らば僧ために聽せよ、我某甲比丘の懺を受けん、白すること是の如し」應に是の如きの白を作し已つて懺を受くべし。受懺者は應に語つて言ふべし。「自ら汝が心を責む

れば、厭離を生ぜん」と。彼應に答へて爾りと言ふべし。若し是の如く諍事を滅することを作さば、是を阿難、犯諍を二滅を以て滅するに、現前毘尼と自言治もてし、如草覆地を用てせずと爲す。是中現前とは、法毘尼乃至界なり。上の如し。「是中云何が自言なる。」「罪名を說き、罪種を說く、懺悔者是れなり。」「云何が治なる。」「自ら汝が心を責め厭離を生ずる者是なり。」如法に諍事滅し已り、後更に發起せば上の如し。阿難又問ひたてまつらく、「大德、頗し犯諍を二滅を以て滅するに、現前毘尼と草覆地もてし、自言治を用ひざる有りや。」佛、言はく、「有り。」又問ひたてまつらく、「何者か是なる。」答へて言はく、「若し比丘、諍事せんに、是中の比丘、多く衆罪を犯せるは沙門法に非ず。言に齊限無く、出入行來は威儀に順せざれば、彼、是の如きの念を作さく「我等、此諍事に、多く衆罪を犯せるは沙門法に非ず、言に齊限無く、出入行來は威儀に順せず、我等、若し自ら共に尋ねて此事を究むれば、恐らくは罪をして深重ならしめ、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く、諍事を滅することを得ず。諸比丘をして住止に安樂ならざらしめん」と。阿難、彼一衆の中に、智慧堪能の比丘有つて、座より起つて偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作さん「諸長老、我等は此諍事に、多く衆罪を犯せるは沙門法に非ず、言に齊限無く、出入行來は威儀に順せず、若し我等尋ねて此事を究むれば、恐らくは罪をして深重ならしめ法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く、諍事を滅することを得ず、諸比丘をして住止に安樂ならざらしめん。若し長老にして忍ばば、我今、諸長老の爲に如

【阿難又等】次第三に事諍の滅法に就て。

【二】自言治に就て。

草覆地を作し、此罪を懺悔せん」と。第二衆中にも亦是の如く說く。阿難、彼諸比丘、應に白を作して如草覆地に懺すべし。是の如く白すべし、「大德僧聽け、若し僧時到らば僧ために忍聽せよ、僧、今此諍事に草覆地懺悔を作す。白すること是の如し」と。應に是の如きの白を作し已らば、如草覆地懺悔を作すべし。阿難、是一衆中に智慧堪能なる者有り。座より起て偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの白を作さく、「諸長老、我今、此諸の諍事已に犯す所の罪は、重罪遮不至白衣家羯磨を除き、若し諸長老の聽さば、諸長老及び已れの爲に、草覆地懺悔を作さん」と。第二衆も亦應に是の如きの說を作すべし。若し是の如く諍事を滅することを作さば、是を、阿難、犯諍を二滅を以て滅するに、現前毘尼と草覆地とをもてし、自言治を用ひずと爲す。現前の義は上の如し。『云何が草覆地なる。』罪名、罪種を稱說せずして懺悔する者是れなり。若し諍事滅し已つて後、更に發起せば上の如し。阿難、又問ひたてまつらく、『事諍は幾の滅を以てか滅せん。』佛、言はく、『一切滅を以て滅し、所犯に隨ふ』」と。

(二)爾時、長老優波離坐より起て偏に右肩を露し、右膝を地に著け、佛に白して言さく、「自言治を作さば、一切如法なるや不や。」佛、優波離に語げたまはく、「自言治もては一切如法たらず、是中に比丘波羅夷を犯さざるに、彼擧ぐることを作さず、憶念を作さず、自ら波羅夷を犯せりと言はば、諸比丘は卽ち與に波羅夷罪治を作さん。優波離、是を非法自言治と爲す。優波離、是中に比丘、波羅夷を犯さざるに、彼擧ぐることを作さず、憶念を作

さず、彼自ら僧殘を犯せりと言はば、諸比丘は即ち與に僧殘罪治を作さん。優波離、是を非法に自言治を與ふと爲す。乃至自ら惡説を犯せりと言ふも亦是の如し。優波離、是中に比丘、僧殘を犯さざるに、彼擧ぐることを作さず、憶念を作さず、彼比丘自ら波羅夷を犯せりと言はば、諸比丘は與に波羅夷罪治を作さん。優波離、是を非法自言治と爲す。優波離、是中に比丘、僧殘を犯さざるに、諸比丘は擧ぐることを作さず、憶念を作さず、彼比丘自ら僧殘を犯せりと言はば、諸比丘は與に僧殘法治と作さん。是を非法に自言治を與ふと爲す。是中に比丘、僧殘を犯さざるに、自ら波逸提乃至惡説を犯せりと言ふも亦是の如し。是中に比丘、波逸提を犯さざるに、自ら波羅夷乃至惡説を犯せりと言ふも亦是の如し。是中に比丘、波羅提提舍尼を犯さざるに、自ら波羅夷乃至惡説を犯せりと言ふも亦是の如し。偸蘭遮乃至惡説も亦是の如し。突吉羅乃至惡説も亦是の如し。惡説して自ら波羅夷を犯せりと言ふより還惡説するに至るも亦是の如し。優波離、是中に比丘、波羅夷を犯さざるに、彼れ擧ぐることを作し、憶念することを作し、便ち自ら波羅夷を犯せりと言はば、諸比丘は即ち與に波羅夷法治を作さん。是を非法に自言治を作し、乃至自ら惡説を犯せりと言ふと爲す。七句、互に頭と作るも亦是の如し。優波離、是中に比丘、波羅夷を犯せるに、彼擧ぐることを作さず、憶念することを作さず、自ら僧殘を犯せりと言はば、諸比丘は即ち與に僧殘治を作さん。是を非法自言治と爲す。乃至自ら惡説を犯せりと言ふも亦是の如し。是中に比丘、僧殘を犯せるに彼比丘は擧ぐることを作さず、憶念することを作さ

ず、便ち自ら波羅夷を犯せりと言はば、諸比丘は即ち與に波羅夷罪治を作さん。是を非法に自言治を與ふと爲す。是中に比丘、僧殘を犯せるに、彼比丘は擧ぐることを作さず、憶念することを作さず、便ち自ら波羅夷罪を犯せりと言はば、諸比丘は即ち與に波逸提罪治を作さん。是を非法に自言治を與ふと爲す。乃至自ら惡說を犯し、互に頭と作すも亦是の如し。優波離、是中に比丘、波羅夷を犯せるに、彼比丘は擧ぐることを作し、憶念することを作し、便ち僧殘を犯せりと言はば、諸比丘は即ち與に僧殘罪治を作さん。乃至惡說し、互に何を作すも亦是の如し。是を、優波離、非法に自言治を與ふと爲す。優波離、復問ひたてまつらく、『云何が如法自言治なるや。』佛言はく、『若し比丘波羅夷を犯せるに、彼擧ぐることを作さず、憶念することを作さず、彼自ら波羅夷を犯せりと言はば、諸比丘は即ち爲に波羅夷罪治を作さん。是を如法に自言治を與ふと爲す。乃至惡說も亦是の如し。優波離、是中に比丘波羅夷を犯せるに、彼擧ぐることを作し、憶念することを作して、彼自ら波羅夷を犯せりと言はば、諸比丘は即ち爲に波羅夷治を作さん。是を如法に自言治を與ふと爲す。乃至惡說するも亦是の如し。優波離、是を如法に自言治を與ふと作す。』時に比丘有り。諸比丘に語つて言はく、『我不淨行を犯せり。休道せんと欲す。』彼比丘語つて言はく、『宜しく是時を知るべし。』彼比丘、優波離を去ること遠からずして經行す。優波離聞いて、彼比丘の所に至つて問うて言はく、『何をか論說する所ぞ。』彼言はく、『彼不淨行を犯せり。休道せんと欲す。』問うて言はく、『汝、誰の邊にか犯せる。』答へて言は

く、『故に二と倶なり。』問うて言はく、『故に、何の處に在りや。』答へて言はく、「優禪國に在り。」問うて言はく、『汝、彼に往きしや。』答へて言はく、『往かず。』『彼來りしや。』答へて言はく、『來らず。』問うて言はく、『汝、云何が犯せしや。』答へて言はく、「我夢中に於て犯せり。」優波離の言はく、「汝、去れ、乃至突吉羅を犯さず。」滅諍犍度具足し竟ぬ。

【三】比丘尼に關する特殊の法を明す。第十七の犍度なり。今、女人の出家得道に就て八不可過を明す。

比丘尼犍度第十七

（三）爾時、世尊、釋翅瘦尼拘律園に在したまふ。時に摩訶波闍波提、五百の舍夷の女人と倶に、世尊の所に詣で、頭面に足を禮し、却つて一面に住し、佛に白して言さく、「善い哉世尊、願くば女人の、佛法の中に於て出家を得、道を爲すを聽したまへ。」と。佛言はく、「且く止みね、瞿曇彌、是言を作すこと莫れ、女人をして出家して道を爲さしめんと欲せず。何を以ての故に。瞿曇彌、若し女人佛法の中に於て出家して道を爲さば、佛法をして久しからざらしめん。」と。爾時、摩訶波闍波提、世尊の教を聞き已りて、前んで佛足を禮し、遶り已りて去りぬ。爾時、世尊、釋翅瘦より千二百五十人の弟子と人間に遊行し、拘薩羅國に往き、拘薩羅より還りて舍衛國の祇桓精舍に至りたまふ。時に摩訶波闍波提、佛の祇桓精舍に在したまふを聞き、五百の舍夷の女人と倶共に剃髮し、袈裟を被り、舍衛國の祇桓精舍に往き、門外に立つ。步涉したれば脚は破れ、塵土は身を坌し、涕泣して涙を流せり。

爾時、阿難、見已りて即ち往いて問うて言はく、『瞿曇彌、何故に舍衛の五百女人と剃髮し、袈裟を被り、步涉破脚し、塵土もて身を坌し、此に在りて涕泣し、淚を流して立てるや。』彼即ち答へて言はく、『我等女人は佛法の中に於て、出家して大戒を受くることを得ず』と。阿難、語つて言はく、『且く止みね、我汝が爲に佛所に往いて求請せん。』爾時阿難、即ち世尊の所に至り、頭面に足を禮し、却つて一面に住し、佛に白して言さく、『善い哉世尊、願くば女人の、佛法の中に在つて出家し、大戒を受くることを聽したまへ。』佛、阿難に告げたまはく、『且く止みね、女人をして佛法の中に於て出家して大戒を受けしめんと欲すること莫れ。何を以ての故に、若し女人、佛法の中に在りて出家して大戒を受くれば、則ち佛法をして久しからざらしめん、譬へば阿難、長者の家有り、男少く女多ければ、則ち其家の衰微を知るが如し。是の如く阿難、若し女人、佛法の中に在りて出家して大戒を受くれば、則ち佛法をして久しからざらしめん。又、好稻田にして霜雹を被れば、即時に破壞するが如し。是の如く阿難、若し女人、佛法の中に在りて出家して大戒を受くれば、即ち佛法をして久しからざらしめん。』阿難、佛に白して言さく、『摩訶波提波提は佛に於て大恩有り、佛母命過せば、乳養もて世尊を長大ならしめたり。』佛、阿難に語りたまはく、『是の如し、是の如し、我に於て大恩有り。我母命過せば、乳養もて我をして長大せしめたり、我も亦、摩訶波闍波提に於て大恩有り。若し人他に因りて佛法僧を知るを得ば、此恩報じ難し、衣食、床臥具、醫藥もてするは、能く報恩する所に非ず。我出世し、摩訶波闍波提

をして佛法僧を知らしむるも亦是の如し。佛、阿難に告げたまはく、「若し人有り、他に因りて佛法僧を信せば、此恩報じ難し。衣食、牀臥具、醫藥もてするは、能く報恩する所に非ず。我出世し摩訶波闍波提をして佛法僧を信樂せしむるも亦是の如し。佛、阿難に語りたまはく、「若し人有り、他に因りて佛法僧に歸依することを得、五戒を受持せば、苦を知り、集を知り、盡を知り、道を知り、苦集盡道に於て孤疑有ること無し。若くは須陀洹果を得、諸惡趣を斷せば、決定して正道に入ることを得、七返生死して苦際を盡す。阿難、是の如く人恩は報ずべきこと難し。衣食、牀臥具、醫藥もてするも、能く報恩する所に非ず。我出世し摩訶波闍波提をして三自歸を受けしめ、乃至決定して正道に入るを得しむるも、亦是の如し。」阿難、佛に白さく、「女人は佛法の中に於て出家し戒を受け、須陀洹果乃至阿羅漢果を得べきや不や。」佛、阿難に告げたまはく、「得べし。」阿難、佛に白さく、「若し女人、佛法の中に於て出家し、大戒を受け、須陀洹果乃至阿羅漢果を得べくんば、願くば佛、出家して大戒を受くることを聽したまへ。」佛、阿難に告げたまはく、「今女人の爲に、八盡形壽不可過法を制せん。若し能く行ずる者は即ち是れ戒を受くるなり。何等をか八とする。百歳の比丘尼と雖も、新受戒の比丘を見ば、應に起て迎逆禮拜し、與に淨座を敷き、請うて坐せしむべし。此の如きの法は、應に尊重し、恭敬し讚歎すべく、盡形壽にも過つことを得ず。阿難、比丘尼は應に比丘を罵詈し呵責すべからず、誹謗して破戒、破見、破威儀と言ふべからず。此法は應に尊重し、恭敬し、讚歎すべし。盡形壽にも過つ

ことを得ず。阿難、比丘尼は應に比丘尼の爲に擧ぐることを作し、憶念することを作し、自言することを作すべからず。應に他の覓罪を遮し、說戒を遮し、自恣を遮すべからず。比丘尼は應に比丘を呵すべからず。比丘は應に比丘尼を呵すべし。此法は應に尊重し、恭敬し、讃歎すべく、盡形壽にも過つことを得ず。式叉摩那學戒を已らば、比丘僧に從ひ、乞うて大戒を受くべし。此法は應に尊重し、恭敬し、讃歎すべく、盡形壽にも過つことを得ず。比丘尼、僧殘罪を犯さば、應に二部僧の中に在りて、半月に摩那埵を行ずべし。此法は應に尊重し、恭敬し、讃歎すべく、盡形壽にも過つことを得ず。比丘尼は半月に、僧に從つて教授を乞へ。此法は應に尊重し、恭敬し、讃歎すべく、盡形壽にも過つを得ず。比丘尼は應に比丘無きの處に在りて、夏安居すべからず。此法は應に尊重し、恭敬し、讃歎すべく、盡形壽にも過つことを得ず。比丘尼僧安居し竟らば、應に比丘僧中に、三事自恣見聞疑を求むべし。此法は應に尊重し、恭敬し、讃歎すべく、盡形壽にも過つことを得ず。是の如く阿難、我今、此八不可過法を說く。若し女人、能く行ずる者は、卽ち是れ戒を受くるなり。譬へば人有り、大水の上に於ては橋梁に安んじて渡るが如し。是の如く阿難、我今女人の爲に、此八不可過法を說く。若し能く行ずる者は、卽ち是れ戒を受くるなり。爾時阿難、世尊の教を聞き已り、卽ち摩訶波闍波提の所に往いて、語つて言はく、『女人は佛法の中に在りて、出家して大戒を受くることを得ん。世尊は女人の爲に八不可過法を制したまふ。若し能く行ずる者は、卽ち是れ戒を受くるなり』と。卽ち爲に八事を說くこと上

【四】次に比丘尼の受戒法を明す。

の如し。摩訶波闍波提言はく、『若し世尊、女人の爲に此八不可過法を說きたまはば、我及び五百の舍夷の女人、當に共に頂受すべし。阿難、譬へば、男子も、女人も年少にして淨潔莊嚴なれば、若し人有りて、與に頭を洗沐し已つて堂上に止り、優鉢羅華鬘、阿希物多華鬘、瞻婆華鬘、蘇曼那華鬘、婆師華鬘を持して彼に授與せば、彼即ち之を受けて頭上に繫置するが如し。是の如く阿難、世尊は女人の爲に八不可過法を說きたまはば、我及び五百の舍夷の女人、當に共に頂受すべし。』時に阿難、即ち世尊の所に往いて、頭面に足を禮し已り、却りて一面に住し、佛に白して言さく、『世尊、女人の爲に八不可過法を說きたまふ。摩訶波闍波提等聞き已つて聽受すること、譬へば男子も女人も年少にして淨潔莊嚴なれば、若し人有つて頭を洗沐し已つて堂上に止り、諸の華鬘を持して彼に授與せんに、彼即ち兩手もて之を受け、頭上に繫置するが如し。』『是の如し阿難、摩訶波闍波提及び五百の女人、受戒を得ん。』佛、阿難に告げたまはく、『若し女人、佛法に於て出家せずんば、佛法は當に久住すること五百歲なるを得べし。』阿難之を聞いて樂しまず。心に悔恨を懷き、憂惱涕泣流淚し、前んで佛足を禮し、遶り已つて去りぬ。

(四)時に餘の女人の受戒せんと欲する者有り、彼比丘尼、將に佛所に往かんとし、中道にして賊に遇ふ。賊即ち將ゐて毀辱戲弄せり。諸比丘尼、諸比丘に語る。諸比丘、佛に白す。佛言はく、『自今已去、彼比丘尼の即ち出家を與へ、大戒を受くることを聽さん。應に是の如く出家を與ふべし。若し比丘尼寺內に在りて剃髮せんと欲せば、應に僧に白すべし。

若し一一に語もて知らしめ然る後剃髪せんとせば、應に是の如く白を作すべし。「大姉僧聽け、此某甲は某甲に從つて剃髪を求めんと欲す。若し僧時到らば、僧忍聽して某甲の爲に剃髪したまへ。白すること是の如し。」應に是の如く白を作し、已つて剃髪を作すべし。若し比丘尼寺内に在りて出家せんと欲せば、若は僧に白し、若は一一に語もて知らしめんとせば、應に是の如く白を作すべし。「大姉僧聽け、此某甲は某甲に從つて出家を求めんとす。若し僧時到らば僧ために忍聽して、某甲に出家を與へたまへ。白すること是の如し。」應に是の如く白を作し已つて出家を與ふべし。應に是の如く出家を作すべし。教へて出家せしめし者は、與に袈裟を著け已つて右膝を地に著け合掌し、教へて是の如き言を作せ。「我阿姨某甲、佛法僧に歸依したてまつる。我今佛に隨つて出家す。和尚某甲、如來無所著等正覺は、是れ我世尊なり」と。第二第三も亦是の如く說け。「我阿姨某甲、佛法僧に歸依したてまつり竟んぬ。我今佛に隨つて出家し已んぬ。和尚某甲、如來無所著等正覺は是れ我世尊なり」と。是の如く第二、第三と說き已らば、應に戒を授くべし。盡形壽にも殺生せざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも偷盜することを得ざれ、是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも婬することを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも妄語することを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも飲酒することを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く

持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも華鬘を著け、香油もて身に塗ることを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし、盡形壽にも歌舞倡伎することを得ざれ、亦往觀することを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも高廣大床上に坐することを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも非時食することを得ざれ。是れ沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。盡形壽にも生像、金銀寶物を提持することを得ざれ是れ。沙彌尼戒なり。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。是の如き沙彌尼の十戒は、盡形壽にも應に犯すべからず。童女の十八なる者は、二年の中に學戒して、年二十に滿ぜば、比丘尼僧中に大戒を受くるを聽さん。若し年十歳にして曾て出嫡せし者は、二年學戒し十二を滿ぜば、受戒に與ることを聽さん、應に是の如く與ふべし。二歳學戒の沙彌尼は、應に比丘尼僧の中に往いて、偏に右肩を露し、革屣を脫し、比丘尼僧の足を禮し已り、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を白すべし。「大姉僧聽け、我某甲沙彌尼、僧に從つて二歳學戒を乞はんとす。和尚尼某甲、願くば僧慈愍の故に、我に二歳の學戒を與へたまへ」と。是の如く第二第三說かば、應に沙彌尼を將ゐて離聞處に往き、見處に著し已り、衆中に堪能作羯磨者を差すべし。上の如く應に白を作すべし。「大姉僧聽け、此某甲沙彌尼、今僧に從つて二歳學戒を乞はんとす。和尚尼某甲、若し僧時到らば僧ために忍聽し、某甲沙彌尼に二歳學戒を與へよ。」和尚尼某甲の白は

是の如し。「大姉僧聽け。此某甲沙彌尼は、今僧に從つて二歳學戒を乞はんとす。和尚尼某甲、僧今某甲沙彌尼に二歳學戒を與へんとす。和尚尼某甲、誰か諸大姉の僧、沙彌尼某甲に二歳學戒を與ふるを忍ばば和尚尼某甲は默然たれ。誰か忍ばざる者は說け。是れ初羯磨なり。是の如く第二第三說き、僧已に忍ばば、某甲沙彌尼に二歳學戒を與へ、和尚尼某甲竟る。僧忍んで默然たるが故に、是事、是の如く持つ。應に是の如く六法を與ふべし。「某甲諦に聽け、如來無所著等正覺は六法を說きたまへり。不淨行を犯じ、婬欲法を行ずることを得ざれ。若し式叉摩那婬欲法を行ずれば、式叉摩那に非ず。釋種女に非ず。染汚心の男子と共に、身相摩觸せば戒を犯ず。應に更に戒を與ふべし。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。若し能く持たん者は答へて能くすと言ふべし。偷盜すること、乃至草葉をも得ざれ。若し式叉摩那、人の五錢若くは過五錢を取らんに、若くは自ら取り、人をして取らしめ、若くは自ら斫り、人をして斫らしめ、若くは自ら破し、人をして破さしめ、若くは燒き、若くは埋め、若くは壞色するは、式叉摩那に非ず。釋種女に非ず。若くは減五錢を取るも戒を犯ず。應に更に戒を與ふべし。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。若し能くする者は答へて能くすと言ふべし。故に衆生の命乃至蟻子を斷ずることを得ざれ。若し式叉摩那、故に自らの手もて人命を斷じ、刀を求めば授與し、死を教へ、死を勸め、死を讃じ、若くは人に非藥を與へ、若くは人胎を墮し、厭禱呪術し、自ら作し、人をして作さしむるは、式叉摩那に非ず、釋種女に非ず。若し畜生、不能、變化者の命を斷ずるも

戒を犯す。應に更に戒を與ふべし。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。若し能くする者は答へて能くすと言ふべし。妄語乃至戯笑することを得ざれ。若し式叉摩那、眞實ならず、所有無きに、自ら稱して上人の法を得たりと言ひ、禪を得、解脱を得、定を得、正受を得、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、天來り、龍來り、鬼神來りて我を供養せりと言はば、此れ式叉摩那に非ず、釋種女に非ず、若し衆中に於て故に妄語を作すも戒を犯す、應に更に戒を與ふべし。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。若し能くする者は答へて能くすと言ふべし。非時食することを得ざれ。若し式叉摩那、非時に食せば戒を犯す。應に更に戒を與ふべし。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。若し能くする者は答へて能くすと言ふべし。飲酒することを得ざれ。若し式叉摩那飲酒せば戒を犯す。應に更に戒を與ふべし。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。若し能くする者は答へて能くすと言ふべし。式叉摩那は一切比丘尼戒の中に於て應に學すべし。比丘尼の爲に過食し、自ら食を取つて食せんをば除く。應に和尚を求めて是の如きの言を作すべし。「大姉、我某甲、今阿姨を求めて和尚と爲さんとす。願くば阿姨、我爲に和尚と作りたまへ。我阿姨に依つての故に大戒を受くることを得ん。」是の如く第二第三說かば、和尚は應に答へて爾すべしと言ふべし。若し式叉摩那學戒し已り、若し年二を滿じ、若は十二を滿ぜば、應に與に大戒を受くべし。白四羯磨もて應に是の如く戒を與ふべし。受戒人を將ゐて離聞處に見處に著す。是中に戒師は應に教授師を差すべし。「大姉僧聽け、此某甲、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。若

し僧時到らば僧ために忍聽し、某甲が教授師と爲れ、白すること是の如し。教授者は應に受戒人の所に至つて語言すべし。「汝、此は安陀會、鬱多羅僧、僧伽梨なり。此は僧竭支覆肩衣なり。此は是れ鉢なり。此は是れ汝の衣鉢なりや不や。諦に聽け。今是れ眞誠の時なり。我今汝に問はん。有らば便ち有りと言ひ、無くば當に無しと言ふべし。汝の字は何等ぞ。和尚の字は誰ぞ、年二十を滿ぜりや不や。衣鉢具せりや不や。父母、若は夫主、汝を聽せりと爲んや不や。人債を負はざるや不や。婢に非ざるや不や。是れ女人なりや不や。女人に是の如き諸病有りや。癩白癩癰疽乾疽癲狂二根二道合道小大小便常漏大小便涕唾常出、汝に是の如きの諸病有りや不や。若し答へて無と言はば、應に語つて言ふべし。我向の所問の如し。僧中も亦當に是の如く汝に問ふべし。汝亦當に是の如く答を作すべし。彼教授師問ひ已らば、應に還つて僧中に至るべし。常威儀の如く、舒手及び比丘尼處に至つて立ち、應に白を作すべし。「大姉僧聽きたまへ、此某甲、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。若し僧時到らば、僧ために忍聽せよ。我已に教授し竟り使來るを聽さん。白すること是の如し。彼應に語つて來れと言ふべし。來り已りなば應に爲に鉢を捉え、比丘尼僧の足を禮せしむべし、戒師は前に在つて胡跪合掌し、是の如き言を白すべし。「大姉僧聽け、我某甲、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。我某甲、今僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尚尼某甲、衆僧もて戒を拔濟したまへ、慈愍もての故に。」是の如く第二、第三說く。是中に戒師は應に白を作すべし。「大姉僧聽け、此某甲、和尚尼某甲に從

つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ。和尚尼某甲、若し僧時到らば、僧ために忍聽せよ、我諸の難事を問はん。白すること是の如し。汝、諦に聽け。今是れ眞誠の時なり、實語の時なり。我今汝に問はん。有らば當に有りと言ふべく、無くんば當に無と言ふべし。汝の字は何等ぞ、和尚の字は誰ぞ。年二十を滿ぜりや不や。衣鉢具せりや不や。父母、若は夫主、汝を聽せしや不や。汝、人債を負へるに非ざるや不や。汝、婢に非ざるや不や。汝は是れ女人なりや不や。女人に是の如き諸病有りや。癩白癩癰疽乾痟顛狂二根二道合道小大小便常漏大小便涕唾常出、汝に是の如きの諸病有りや不や。答へて無と言はば、應に白を作すべし。大姊僧聽け。此某甲、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尚尼某甲、某甲の所説は清淨にして、諸の難事無く、年は二十を滿じ、衣鉢は具足せり。若し僧時到らば、僧ために忍聽し、某甲の爲に大戒を受けたまへ、和尚尼某甲、白是の如し。大姊僧聽け。此某甲、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今衆僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尚尼某甲、某甲の所説は清淨にして、諸の難事無し。年に二十を滿じ、衣鉢具足せり。僧、今某甲に大戒を授くる和尚尼某甲なり、誰か諸の大姊、僧の某甲に大戒を授くる和尚尼某甲を忍する者は默然せよ。誰か忍ばざる者は說け。是れ初羯磨を竟る。第二第三も亦是の如く說く。僧已に忍ばば、某甲の與に大戒を受け竟る、和尚尼某甲、僧忍して默然たるが故に是事是の如く持つ。彼受戒者は、比丘尼僧と倶に、

比丘僧の中に至り、僧の足を禮し已り、右膝を地に著け、合掌して是の如きの言を作せ、「大德僧聽け。我某甲、和尙尼某甲に從つて大戒を受けんことを求めたり。我某甲、今僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尙尼某甲、願くば僧、ために我を拔濟せよ。慈愍もての故に。」是の如く第二第三說く。（此中に戒師は應に問ふこと上問の法の如くすべし）問ひ已らば應に問うて言ふべし。「汝、學戒未だしや。汝、淸淨なりや不や」と。若し答へて已に學戒し、淸淨なりと言はば、應に餘の比丘尼に問ふべし。「已に學戒せしや、未だしや。淸淨なりや不や」と。若し答へて已に學戒し淸淨なりと言はば、卽ち應に白を作すべし。「大德僧聽け。此某甲、和尙尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尙尼某甲、某甲の所說は淸淨に、諸の難事無し。年歲已に滿じ、衣鉢具足し、已に學戒し淸淨なり。若し僧時到らば、僧ために忍聽せよ。僧今某甲の爲に大戒を受く。」和尙尼某甲、白すること是の如し。「大德僧聽け。此某甲、和尙尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尙尼某甲、某甲の所說は淸淨、諸の難事無く、年歲已に滿じ、衣鉢具足し、已に學戒し、淸淨なり。僧、今某甲の爲に大戒を受く。和尙尼某甲、誰か諸の長老、僧の某甲の爲に大戒を受くるを忍ばば、和尙尼某甲は默然たれ。誰か忍ばざる者は說け。是れ初羯磨なり。第二第三も亦是の如く說く。僧已に忍ばば、某甲の爲に大戒を受け竟る。和尙尼某甲、僧ために忍んで默然たるが故に是事是の如く持つ。善女人、諦に聽け。如來無所著等正覺は八波羅夷法を

說きたまふ。若し比丘尼の犯ずる者は、比丘尼に非ず、釋種女に非ず。不淨行を作し、婬欲法を行ずることを得ざれ。若し比丘尼、不淨行を作し、婬欲法を行じ、乃至畜生と共ならば、比丘尼に非ず、釋種女に非ず。汝是中に盡形壽も犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく能くすと。偸盜すること乃至草葉をも得ざれ。若し比丘尼、人の五錢若くは過五錢を取らんに、若くは自ら取り、人をして取らしめ、若くは自ら斫り、人をして斫らしめ、若しは自ら破り、人をして破らしめ、若くは燒き、若くは埋め、若くは壞色せんに、比丘尼に非ず、釋種女に非ず。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく能くすと。衆生の命乃至蟻子をも斷ずることを得ざれ。若し比丘尼、自手もて人命を斷じ、刀を持し、人に授與し、死を教へ、死を讃じ、死を勸め、人に非藥を與へ、若くは墮胎、厭禱呪術し若くは自ら方便を作し、人をして作さしむるは、彼比丘尼に非ず、釋種女に非ず。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく能くすと。妄語乃至戲笑を作すことを得ざれ。若し比丘尼、眞實ならず、己有に非ざるに、自ら稱して上人法を得たり、禪を得、解脫を得、三昧正受し、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、天來り、龍來り、鬼神來りて我を供養すと言はば、彼比丘尼に非ず、釋種女に非ず。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。身相觸れ乃至畜生と共なることを得ざれ、若し比丘尼、染汚心もて、染汚心の男子と身相觸ること、腋より已下膝より已上、若くは摩り若くは捺し、逆摩し、順摩し、若く

は牽き、若くは推し、若くは擧げ、若くは下し、若くは捉へ、若くは急に捺さへば、彼比丘尼に非ず、釋種女に非ず。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や、答へて言はく「能くす」と。八事を犯じ、乃至畜生と共なることを得ざれ。若し比丘尼染汚心有り、染汚心の男子を受け、手を捉り、衣を捉り、屏處に至つて住し、若くは共に屏處に立つて語り、若くは共に行き、若くは身相近づき、若くは共に期す。此事を犯せば、彼は比丘尼に非ず、釋種女に非ず。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。應に他の重罪乃至突吉羅惡說を覆藏すべからず。若し比丘尼、比丘尼の波羅夷を犯ぜるを知るも、自ら擧げず、亦僧に白せず、人に語つて知らしめず。後異時に於て、此比丘尼、若は休道し、若は滅擯し、若は遮して僧事を共にせず。若は外道に入らんに、彼是の如きの言を作し、我先に此人、是の如き是の如きの罪を犯せるを知る」といはば、彼比丘尼に非ず、釋種女に非ず、他の重罪を覆藏せるが故なり。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。被擧比丘の語、乃至沙彌に隨ふことを得ざれ。若し比丘尼、比丘が僧の爲に擧ぐる所を知るに、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如くならんも、威儀を犯じて未だ懺悔せず、共住することを作さざるに、便ち彼比丘尼に隨順す。諸の比丘尼、此比丘尼を諫めて言はく「大姉、彼比丘、僧の爲に擧ぐる所は、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如くならんも、威儀を犯じて未だ懺悔せず、共住を作さざれば、彼比丘の語に隨順すること莫れ。」諸の比丘尼、此比丘尼を諫

むるの時、堅持して捨てざれば、諸の比丘尼は應に乃至三諫すべし。此事を捨つるが故に、乃至三諫して捨つる者は善し。捨てざる者は比丘尼に非ず、釋種女に非ず、犯隨擧なればなり。是中盡形壽にも犯ずることを得ざれ。能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。善女人、諦に聽け。如來無所著等正覺は四依法を說きたまふ。比丘尼は此に依つて出家して大戒を受く。是れ比丘尼法なり。是中盡形壽にも能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。糞掃衣に依つて出家して大戒を受くるは是れ比丘尼の法なり。是中盡形壽にも能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。若し長利もて檀越施衣割截衣を得ば、應に受くべし。乞食に依つて出家し大戒を受くるは、是れ比丘尼の法なり。是中盡形壽にも能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。若し長利もて、若は僧差食、若は檀越送食、月の八日食、十五日食、月の初日食、若は衆僧常食、檀越請食を得ば應に受くべし。樹下坐に依つて出家し大戒を受くるは、是れ比丘尼の法なり。是中盡形壽にも能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。若し長利もて別房、尖頭屋小房石室兩房一戶を得ば應に受くべし。腐爛藥に依つて出家し大戒を受くるは是れ比丘尼の法なり。是中盡形壽にも能く持つや不や。答へて言はく「能くす」と。若し長利もて酥油生酥蜜石蜜を得ば應に受くべし。汝、已に受戒し竟んぬ。白四羯磨もて如法に成就せば處所を得ん。和尚如法、阿闍梨如法、二部僧具足せり。當に善く敎法を受くべし。應に勸化して福を作し、塔を治め、佛法僧を供養すべし。和尚、阿闍梨は一切如法に敎勅して違逆することを得ざれ。應に學問誦經すべく、方便を勸求せ

ば、佛法の中に於て、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得ん。汝、始めて發心し出家せり。功唐捐ならず、果報斷ぜず。餘の未だ知らざる所は、當に和尚、阿闍梨に問ふべく、受戒人をして前に在つて去らしめよ。爾時、白四羯磨もて大戒を受けし者、舍夷拘梨の諸比丘を擧せ。『世尊に是の如きの言有り。一大戒を受くるは白四羯磨に應ず。我曹は戒を得たるも、汝等は戒を得ず」と。時に摩訶波闍波提比丘尼、之を聞いて心に疑ふ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、「摩訶波闍波提比丘尼、及び舍夷の諸比丘も亦戒を得たり」と。爾時、立つて戒を乞ふ者有り、白衣有り、見て即ち言はく、「此中に在つて立つる者は、男子を求めんと欲するなり。」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、「應に立つて戒を乞ふべからず。應に長跪して戒を乞ふべし。』時に蹲つて戒を乞ふもの有り。即ち地に倒れて形露れ、羞慚して戒を乞ふこと能はず、諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『餘の比丘、應に代りて白を爲すべし。』時に舍夷拘梨の諸の比丘尼、將に大戒を受けんと欲する者、僧伽藍に詣る。道路に賊に遇ひ、比丘尼毀犯せらる。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『使を遣し受戒の爲にするを聽す。一比丘尼の清淨無難なる者に、僧白二羯磨を作し、使と作して遣すと聽す。衆中、應に堪能羯磨者を差し、上の如く、是の如きの白を作すべし。「大姉僧聽け。若し僧時到らば、僧ために忍聽せよ。今僧、某甲比丘尼を差し、使と作し、某甲比丘尼の爲に比丘僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。」白是の如し。「大姉僧聽け。僧、今某甲比丘尼を差し、使と作し、某甲比丘尼の爲に、比丘僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。誰

か諸大姉、僧ために某甲比丘尼を差し、使と作し、某甲比丘尼の為に、比丘僧の中に從つて大戒を受けんと乞ふ者を忍ばゞ默然せよ。誰か忍ばざる者は說け」と。僧已に忍ばば、某甲比丘尼を差し、使と作し竟る。僧忍んで默然たるが故に、是事是の如く持つ。獨行無護なれば、應に二三比丘尼を差して共に去るべし。受使比丘尼は、應に比丘僧の中に至り、僧足を禮し、右膝を地に著け合掌し、是の如く白を作すべし。「大德僧聽け。此某甲比丘尼、某甲に從つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今僧に從つて大戒を受けんことを乞ふ。和尚尼某甲、願くは僧ために我を拔濟せよ。慈愍もての故に。」是の如く第二第三說く。比丘僧應に問ふべし。「彼字は何等ぞ、和尚尼は是れ誰ぞ。已に學戒せりや未だしや。清淨なりや不や。」若し答へて已に學戒し、清淨なりと言はば、復應に伴比丘に問ふべし。已に學戒し清淨なるや未だしやと。若し答へて已に學戒し清淨なりと言はば、衆中、應に堪能作羯磨者を差すべし。上の如く應に白を作すべし。「大德僧聽け。此某甲比丘尼、和尚尼某甲に從つて大戒を受けんと求む。此某甲、僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尚尼某甲、某甲は已に學戒し清淨なり。年歲已に滿じ、衣鉢具足せり。若し僧時到らば、僧ために忍聽し、僧某甲の與に大戒を受けよ。」和尚尼某甲、白是の如し。「大德僧聽け。此某甲和尚尼某甲に從つて大戒を受けんことを求む。此某甲、今僧に從つて大戒を受けんと乞ふ。和尚尼某甲、某甲は已に學戒し清淨なり。年歲已に滿じ、衣鉢具足せり。僧、今某甲の與に大戒を受く。和尚尼某甲、誰か諸の長老、僧某甲が與に大戒を受くる和尚尼

某甲を忍ばば黙然たれ。誰か忍ばざる者は説け。」是れ初羯磨なり。第二第三も亦是の如く説く。「僧已に忍ばば、某甲が與に大戒を受くる和尚尼某甲竟る。僧忍んで黙然たるが故に、是事是の如く持つ。」彼便、應に比丘尼寺の内に還つて語つて言ふべし。「大姉、汝、已に大戒を受け竟んぬ。」世尊に是の如きの教有り。使を遣して受戒するを聽したまふ。彼便ち小小顔貌を以て使を遣し戒を受く。佛、言はく、『應に小小顔貌を以て使を遣し受戒すべからず。』彼常に血出者に大戒を授く。血は身を汚し、臥具を汚す。佛、言はく、『應に血出者に大戒を授くべからず。』と。世尊に是の如き教有り。應に血出者に大戒を授くべからず。彼便ち月水不出者に大戒を授けたり。彼放逸にして情多し。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に月水不出者に大戒を授くべからず。』彼無乳者に大戒を授けたり。佛、言はく、『應に無乳者に大戒を授くべからず。』彼一乳者に大戒を授けたり。佛、言はく、『應に一乳者に大戒を授くべからず。』彼二道爛壞者に大戒を授けたり。佛、言はく、『應に二道爛壞者に大戒を授くべからず。』彼二道穢臭者に大戒を授けたり。佛、言はく、『應に二道穢臭者に大戒を授くべからず。』彼二根者に大戒を授けたり。佛、言はく、『應に二根者に大戒を授くべからず。』時に、諸の比丘、一處に集り共に法毘尼を誦せり。諸比丘尼、是の如きの念を作さく、『我等も亦當應に法毘尼を誦すべきや不や。』佛、言はく、『應に誦すべし。』『誰の間にてか受誦するかを知らず。』佛、言はく、『應に比丘の間に在つて受誦すべし。』諸比丘、是の如きの念を作さく、『我等、比丘尼の與に偈句を誦することを得るや不

や。』佛、言はく、『誦することを聽す。』『前に在りて教ふれば彼羞慚せん。』佛、言はく、『比丘の背後に在つて坐を敷き誦するを聽す。』若し十種衣中、一一衣にて聽かば諷を作す。時に六群比丘尼、小小の因緣を以て瞋恚し喜ばず、佛法僧を捨して言はく、『獨り沙門釋子種のみ有つて梵行を修すべきに不ず。更に餘の沙門婆羅門有り。我今亦、彼に於て梵行を修すべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し比丘尼、瞋恚もて戒を捨つるも、捨戒を成せず。』時に六群比丘尼、蠱道を作し他をして作さしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘は六群比丘尼の爲に羯磨を作せ。』彼比丘尼、言教に隨順して敢て違逆せず、羯磨を解せんと乞ふ。彼背て解せず。時に諸の居士、見已つて是の如きの言を作さく、『彼意に隨はざるが故に、便ち是の如きの語を作す』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘は應に比丘尼の爲に羯磨を作すべからず。』時に諸比丘尼、與に羯磨を作す。佛、言はく、『比丘尼が比丘尼の與に羯磨を作すを聽す。若し知らざる者には、比丘の邊に羯磨を誦し已り、然る後羯磨を作すを聽す。』爾時に比丘有り。休道せんと欲す。摩訶波闍波提比丘尼知るも、疑つて敢て與に說法し呵することをせず。世尊に是の如きの教有り。比丘尼は比丘を呵することを得ずと。時に摩訶波闍波提比丘尼、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却りて一面に住し、佛に白して言さく、『比丘尼は一切比丘を呵することを得ざるや。』佛、言はく、『比丘尼は、一切比丘比丘尼を呵することを得ず。應に比丘を罵るべからず。比丘を呵責することを得ず。應に若は破見、破戒、破威儀を誹謗すべからず。應に是の如

く呵すべからず。瞿曇彌、若し增上戒、增上心、增上智、學問誦經を持たしめば、是の如き事は應に呵すべし。』時に諸比丘尼の髮長し。佛、言はく、『剃るを聽す。若し自ら剃れ。』時に年少剃髮師有り。年少比丘尼の爲に剃髮せり。細滑を覺え、欲意起り。比丘尼を犯さんと欲す。比丘尼便ち高聲もて言はく、『爾すること莫れ。爾すること莫れ。』餘の比丘尼聞き、問うて言はく、『何故に高聲もて爾すること莫れ。爾すること莫れといふや。』彼即ち具に爲に之を說けり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『剃髮の時には共伴を聽す。若し但に欲意有らば、應に剃らしむべからず。』彼、男子をして鼻中の毛を除かしむ。佛、言はく、『應に男子をして鼻中の毛を除かしむべからず。』彼男子をして剪爪せしむ。佛、言はく、『應に男子をして剪爪せしむるべからず。』時に比丘尼、白衣家の內に在り。比丘有り、來つて乞食す。彼比丘尼敢て語らず。何を以ての故に。比丘の是れ比丘尼が敎化食なりと謂はんを恐るればなり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『主人に語つて知らしむるを聽す。但讚歎すること莫れ。』時に比丘尼有り。白衣家の內に在り、比丘有りて來るも起たざれば、佛に白す。佛、言はく、『應に起つべし。若し比丘尼、一坐食し、若し餘の食法を作し、食せざるに若くは病み、若くは足らば、食し已つて是の如きの語を作すを聽す。「大德、我に是の如きの因緣有るが故に起たず」と。時に比丘尼、白衣の家に在り。比丘に問はず、便ち坐せり。諸比丘佛に白す。佛、言はく、『比丘尼、白衣の家に在らば、應に比丘に問はずして便ち坐すべからず』と。爾時、六群比丘、淸旦に衣を著け、鉢を持し、白衣の家に

至る。白衣家内に常に比丘尼を教化する有り。彼比丘の來るを見、便ち起つて問うて言はく、『大德、我坐せんや。』比丘言はく、『坐すること莫れ。』と。彼比丘尼、習樂するも久立に堪へず。卽便ち地に倒れて病を得たり。諸比丘、佛に白す。佛言はく、『應に前人に相望めて、坐す可くんば便ち坐すべし。』時に諸比丘尼、比丘と共に道に在つて行くに、前に在つて行き、或は並んで語り、並び行く。或は前に在り、或は後に在り。或は反抄衣し、或は纏頸し、或は覆頭し、或は通肩に衣を披き、或は革屣を著く。諸比丘、佛に白す。佛言はく、『應に爾すべからず。應に偏に右肩を露し、革屣を脫し、比丘の後に在るべし。』時に諸比丘尼、佛法僧の事有り。病比丘尼に所須の事有るも、敢て前に在りて去らず。佛言はく、『比丘に白し已つて便ち去ることを聽す。彼命難有り、梵行難有り。畏愼敢てせざれば、問はずして便ち去りぬ。佛言はく、『若し是の如きの難事有らば、若は問ひ、若は問はざるも去ることを聽す。』時に比丘尼有り。道に在りて行くに、比丘を見るも道を避けず。佛言はく、『應に道を避くべし。』時に比丘尼有り。道に在りて行く。比丘有るを見て道を避く。天雨れば脚跌して地に倒れ病を得たり。諸比丘、佛に白す。佛言はく、『是の如きの因緣有らば、比丘尼は應に小しく身を曲め、合掌して言ふべし。「大德、我道を遮くを恕したまへ」と。』爾時、檀越有り。二部僧を請ひ、先に比丘尼に食を與へ、後、比丘に食を與へたり。佛に白せるに、佛言はく、『應に先に比丘尼僧に食を與ふべからず、應に先に比丘僧に與へ、然る後、比丘尼僧に與ふべし。』爾時、檀越有り。二部僧を請ふ。彼

是の如く念ず。「佛に教有り、應に先に比丘僧に食を與へ、然る後比丘尼僧に食を與ふべし」と。彼便ち先に比丘僧に食を與へ竟るに、日時已に過ぎたり。佛に白す。佛、言はく、『若し時過ぎんと欲せば、應に一時に與ふべし。』爾時、居士有り。比丘尼僧を請うて明日食を與へんとす。彼夜半に於て、種種の肥美食を辦具し已り、晨旦、往いて時到れると白す。時に諸比丘尼、清旦に衣を著け、鉢を持し、往いて其家に詣る。彼此、年歳大小を相問へる頃に、日時便ち過ぎぬ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し時過ぎなば、上座、八比丘尼は次第坐し、餘者は隨つて坐するを聽す。』時に諸比丘尼、來つて比丘僧伽藍の中に至る。佛、言はく、『床座を與ふるを聽す。』比丘尼、月水を出し、貯纏床木床臥具を汚し、起ちて去る。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は應に貯纏床木床に在りて上座すべからず。』彼僧伽藍の中に教授を求め、或は受請し、或は聽法するも坐處無し。佛、言はく、『若は石上に坐し、若は墼上に在りて坐し、若は杌木頭上に在つて坐し、若は草上、枯葉上に坐し、若は梁上に坐するを聽す。』比丘尼、苦を忍ばざれば、遂に便ち痔を得たり。佛、言はく、『應に比丘尼に語つて言ふべし。若し能く坐具を愛護せば、便ち坐を與へよ。』

四分律卷第四十八

四分律　卷第四十九　三分之十三

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

比丘尼犍度之下

【一】前卷に續いて比丘尼犍度を明す。先づ比丘尼に就いて特殊を説く

(一)爾時、世尊、波羅㮈に在したまふ。時に世の穀貴く人民飢餓し、乞求得難し。諸比丘尼食を受け已り、故に餘食有り。諸比丘尼、是の如きの念を作さく、『我等、此食を比丘に與ふることを得るや不や。』佛、言はく、『與ふることを得。』復念ずらく、『比丘の爲に食を授くることを得るや不や。』佛、言はく、『授くることを得。』『我等が宿食を比丘に與ふれば淨と爲すや不や。』佛、言はく、『淨なり。』時に諸比丘、食を受け已つて餘食有り。念言すらく、『我等、此食を比丘尼に與ふることを得るや不や。』佛、言はく、『與ふることを得。』『比丘尼の爲に食を授くることを得るや不や。』佛、言はく、『授與することを得。』時に宿食有り。念言すらく、『比丘尼に與ふるは淨なりや不や。』佛、言はく、『淨なり。』爾時、比丘尼、阿練若處に在りて住せり。後異時に、阿練若處に事の起れる有り。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は應に阿練若處に在りて住すべからず。』時に比丘尼有り。白衣の家内に在りて住す。他夫主の婦と共に鳴口し、身體を捫摸し、乳を捉捺せるを見た

り。年少比丘尼、見已つて便ち佛法を厭離するの心を生ぜり。諸比丘尼、諸比丘に白し、諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼の爲に別に住處を作るを聽す。』彼比丘尼、便ち別住處に在りて技を作し、他をして作さしむ、佛、言はく、『比丘尼は應に住處に在りて技を作すべからず。』比丘尼、別住處に在りて酒を酤る。佛、言はく、『應に別住處に在りて酤酒すべからず。』彼比丘尼、婬女と安んじて住處に在り。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼香華莊身の具を具するを爲す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に六群比丘尼、巷陌四衢道頭市中、糞掃聚邊に在つて立つて住す。諸の居士、見て皆共に譏嫌し呵罵して言はく、『此比丘尼、慚愧有ること無く、淨行有ること無きに、外自ら稱して我正法を知れりと言ふ、是の如くんば、何ぞ正法有らん。是の如き處に在つて立つて住するは婬女に似たり。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は應に是の如きの處に在りて立つて住すべからず。』時に六群比丘尼、牙骨を以て身を楷摩し、光澤を作す。比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘尼、細末藥を以て身を楷摩せば光澤あり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼れ身毛を摩して卷かしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼れ身毛を剪る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼比丘尼、衣を持し腰に纒ひ、細好ならしめんと欲す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼比丘尼、女人の衣を著す。佛、言はく、『應に著すべからず。』彼比丘尼、男子の衣を著く。佛、言はく、『應に著すべからず。比丘尼は比丘尼の衣を著くることを聽す。』比丘尼、多衣を以て

體に纏ひ、廣好ならしめんと欲す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼好んで衣を著けず。身をして現ぜしめんと欲す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼腰帶もて頭に鳥紆を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼蓮陀羅腰帶を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼れ鞞樓腰帶を畜ふ。佛、言はく、『應に畜ふべからず。』彼、婆腰帶を畜ふ。佛、言はく、『應に畜ふべからず。』彼、散線帶もて腰に繋ぐ。佛、言はく、『比丘尼は、編織もて作れる帶なれば、腰を繞ること一周たるを聽し、若し圓織なれば再周を聽す。』比丘尼、女人の浴處に至つて浴せり。時に賊女、婬女有り。比丘尼に語つて言はく、『汝等年少、腋下に始めて毛有り。何ぞ便ち梵行を修することを得ん。汝、今時に及んで欲樂を行ずべし。後に悔ゆとも何ぞ及ばん。老時に梵行を修すべし。是の如く始終せば失無けん。』時に年少比丘尼聞いて便ち心に厭離を生じ、佛法を樂はず。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は、應に女人の浴處に在つて浴すべからず。』彼比丘尼、白衣の男子の邊に在つて浴せり。諸の居士見て、皆譏嫌して言はく、『此比丘尼、慚愧有ること無し。梵行を修せざるに、自ら我正法を知ると稱す。云何が白衣の男子の邊に在つて浴する。賊女、婬女の如く異ること無し。是の如くんば、何ぞ正法有らんや。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は應に白衣の男子の邊に在つて浴すべからず。』時に婦女有り。夫は出行して在らず。餘人の邊に於て娠を得たり。彼自ら墮胎し已り、往いて常教化比丘尼に語つて言はく、『我が夫、行つて在らず。餘人の邊に於て娠を得たり。我

已に墮せり。汝、我が爲に之を棄つべし。答へて言はく、「爾すべし。」彼比丘尼、即ち一鉢を以て盛り、一鉢を上に覆ひ、絡囊の中に著け、持して道に在つて行く。時に舍衞の長者、常に是の如きの願を作せり。『若し先に出家人に食を與へずんば、我に終に食せざらん』と。要ず先に與へ、然る後食せり。彼長者、淸旦に事有りて餘處に往かんと欲す。即ち人を遣し語つて言はく、『汝、道路街巷に往き、出家人を見ば將來せよ』と。時に使人、教を受け已つて、即ち往いて外に出でて求覓す。比丘尼を見て語りて言はく、「阿姨來れ。汝に食を與へん。」比丘尼の言はく、「止めよ、止めよ、便ち我を供養するを爲さんを。」彼言はく、「爾らず。但來れ、我當に食を與ふべし。」比丘尼言はく、「止めよ、止めよ、須ひず。」彼使、即ち强ひて比丘尼を將ゐて家内に至る。家内の使人言はく、『過鉢もて來れ、汝に食を與へん。」彼比丘尼の言はく、「止めよ、止めよ。便ち供養を爲さんを。」復言はく、『鉢を出せ。當に汝に食を與ふべし。」彼復言はく、「須ひず。」即ち强奪して鉢を取り、鉢中を見るに、新墮胎有り。長者見已り、譏嫌して言はく、『比丘尼は慚愧を知らず。梵行を脩せざるに、外自ら稱して、我正法を知ると言ふ。是の如くんば何ぞ正法有らんや。自ら墮胎して而も之を棄つ。賊女、婬女に如似て異ること無し。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『白衣の家に死者有らば、比丘尼は應に爲に棄つべからず。若し比丘尼、村内に在りて乞食比丘を見ば、應に出鉢して之に示すべし。』時に白衣有り。病有り來つて比丘尼住處に至る。瞻視を須つて佛に白す、佛、言はく、『方便を作して之を遣すをば

聽す。若し是れ信樂して佛法僧を讃歎する者、比丘尼に隨つて能く作すべき者は瞻視せしめよ。』彼後に命過せり。諸比丘尼、畏慎して敢て棄てず。佛に白す。佛、言はく、『住處を淨ならしめん爲の故に之を棄つることを聽す。』爾時、王波斯匿、邊國反叛し、人民散亂せり。時に六群比丘尼、彼疑恐怖有る處に在つて人間に遊行せり。時に諸の賊伴、見已つて是の如きの言を作さく、『此比丘尼は、是れ王波斯匿の敬愛する所なり。我等、寧ろ妻として之を弄ばん。』時に諸の居士、見已つて皆共に譏嫌すらく、『比丘尼は慚愧有ること無し。外に自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らん。云何が乃ち有疑恐怖の處に在つて人間に遊行する。賊女、婬女の如似く異ること無し。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は邊國に在つて疑恐怖有るの處に人間に遊行すべからず。』爾時、比丘尼、阿蘭若住處に有り。比丘は聚落住處に有り、共に貿易せんと欲す。佛に白す。佛、言はく、『貿易を聽す。』時に比丘尼は阿蘭若住處に有り。居士は聚落間住處に有り。共に貿易せんと欲す。佛に白す。佛、言はく、『淨人をして貿易せしむるを聽す。』爾時、二居士有りて住處を諍ふ。彼一居士、比丘尼僧に施するに、尼僧卽ち受く。彼一居士、卽ち譏嫌して言はく、『此比丘尼は慚愧を知らず。多く受けて厭くこと無きに、外自ら稱して、我正法を知ると言ふ。今の如くんば何ぞ正法有らん。他と共に住處を諍ふに、而も便ち之を受く。施主は厭ふこと無しと雖も、受者も常に足ることを知るべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『共に諍へる住處は、應に受くべからず。』爾時、摩訶波闍波提比

丘尼、王園の中に比丘尼住處有り、中に於て夏安居せんと欲するも、畏愼して敢てせず。世尊に教有り。比丘尼は應に阿蘭若處に在りて住すべからず。然るに王園の中の比丘尼住處は牢固なりと。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『王園の中の比丘尼住處を除き、餘の阿蘭若處に住すべからず。』時に比丘尼有り。教授處に往かず。佛に白す。佛、言はく、『應に往くべし。』時に比丘尼有り。佛法僧事有り。病比丘尼の所須有り。佛に白す。佛、言はく、『與に去らんと欲するは聽す。』時に迦留陀夷、比丘尼を罵打するに、若は唾し、若は華もてし、水を擲して灑ぎ、若は麁語、詭語を說いて勸喩す。罵とは汝が道は破壞腐爛なり、燒いて爐が與に通せしめよといひ、打とは若は手、若は杖、若は石を以てし、麁語とは二道の若は好、若は惡を說き、詭語とは、若し男子、淨洗浴し、好香を以て身に塗り、鬚髮を梳治し、好華鬘を著け、瓔珞もて身を嚴り、孔雀の毛蓋を持つ。豈更に餘事の此に勝ぐるる者有らんや。女人も亦是の如しとなり。勸喩とは、語つて言はく、『大姉、汝は尙年少腋下に始めて毛有り、何ぞ便爾自ら毀ち、梵行を修すると爲すを須ひん。如かず時に及んで五欲もて自ら樂しむには、老時を待つて乃ち梵行を修すべし。』時に年少比丘尼、便ち厭離心を生じ、佛法を樂しまず。時に諸比丘尼聞く。少欲知足にして頭陀を行じ學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。迦留陀夷を嫌責して言はく、『云何が比丘尼を罵打し、乃至詭語勸喩するや。』時に諸比丘尼、諸比丘に白し、諸比丘、佛に白す。佛、爾時、比丘僧を集め、無數の方便を以て迦留陀夷を呵責すらく、『云何が比丘尼を呵罵し、打し、乃至詭言

勸喩するや。』時に世尊、無數の方便もて呵責し已り、諸比丘に告げたまはく、『比丘尼僧、迦留陀夷の爲に、不爲禮白二羯磨を作すを聽す。應に是の如く作すべし。衆中に堪能なる作羯磨者を差すべし。上に是の如きの白を作すが如し。大姉僧聽け。此迦留陀夷は比丘尼を罵打し、乃至詭語勸喩せり。若し僧時到らば、僧に忍聽し、迦留陀夷の爲に不禮羯磨を作せ。白すること是の如し。』『大姉僧聽け。此迦留陀夷は比丘尼を罵打し、乃至詭言勸喩せり。今僧、爲に不禮羯磨を作せ。誰か諸大姉、僧、迦留陀夷の爲に不禮羯磨を作すを忍ぶ者は默然せよ。誰か忍ばざる者は說け。僧已に忍んで、迦留陀夷の爲に不禮羯磨を作し竟んぬ。僧ために忍んで默然するが故に、是事是の如く持つ。爾時、迦留陀夷、比丘尼僧に隨順し、敢て違逆せず。比丘尼僧に從つて不禮羯磨を解せんことを求む。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し比丘尼僧に隨順し、敢て違逆せず、比丘尼僧に從つて不禮羯磨を解せんことを乞はば、比丘尼僧は、應に解作白二羯磨を爲すべし。應に是の如く解すべし。衆中に堪能作羯磨者を差すべし。上の如く、是の如く白を作せ、大姉僧聽け、此迦留陀夷は比丘尼僧の不禮羯磨を作せるが爲に、比丘尼僧に隨順して敢て違逆せず。今比丘尼僧に從つて不禮羯磨を解せんと乞ふ。若し僧時到らば、僧ために忍聽し、僧今爲に不禮羯磨を解せよ。白すること是の如し。』『大姉僧聽け。此迦留陀夷は比丘尼僧が、爲に不禮羯磨を作さば、比丘尼僧に隨順して、敢て違逆せず。比丘尼僧に從つて不禮羯磨を解せんと乞ふ。僧、今迦留陀夷の爲に不禮羯磨を解せよ。誰か諸大姉、僧が迦留陀夷の爲に

不禮羯磨を解するを忍ぶ者は默然せよ。誰か忍ばざる者は說け。僧已に忍べば、迦留陀夷の爲に不禮羯磨を解し竟んぬ。僧ために忍んで默然たるが故に、是事是の如く持つ。時に六群比丘、比丘尼住處に至り、六群比丘尼と共に共住せり。更に相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、或は共に戯笑し、諸の坐禪の比丘尼を亂す。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『彼を遮するを聽す。』便ち一切を遮して比丘尼住處に入るを聽さず。佛、言はく、『應に一切を遮すべからず。亂鬧處に隨つて遮すべし。若し都べて亂住處なれば、應に一切を遮すべし。』時に六群比丘沙彌、來つて比丘僧住處に至り、六群比丘と共に、更に相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、或は共に戯笑す。佛に白す。佛、言はく、『彼を遮するを聽す。』便ち一切を遮せり。佛、言はく、『應に一切を遮すべからず。應に亂鬧處に隨つて遮すべし。若し都べて亂住處なれば、應に一切を遮すべし。』時に六群比丘沙彌、來つて比丘尼住處に至り、六群比丘尼、沙彌尼、式叉摩那と共に共住し、更に相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、共に戯笑し、諸の坐禪比丘尼を亂せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『喚び來つて謫罰するを聽す。若し改めずんば、應に彼沙彌、和尙阿闍梨の爲に不禮羯磨を作すべし。』時に六群比丘尼、沙彌尼、式叉摩那、來つて寺內に至り、六群比丘沙彌と共に共住し、更に相調弄し、或は共に唄ひ、或は共に哭し、或は共に戯笑し、諸の坐禪比丘を亂せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に喚び來つて謫罰すべし。若し改めずんば、應に沙彌尼、和尙阿闍梨の爲に、捨敎授羯磨を作すべし。』時に比

丘尼住處を去ること遠からず、渠流の通水する有り。比丘尼、道を以て下に在り、流を承けて樂を覺え、疑有り。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『波羅夷を犯せず。偸蘭遮を犯ず。比丘尼は應に道を以て水流を承くべからず。』時に難陀比丘尼、華樹下の經行處に至る。賊有つて將ゐ去り、婬弄せり。彼疑有り。此因緣を以て佛に白す。佛、問うて言はく、『難陀、汝樂を覺えしや不や。』答へて言はく、『熱鐵の體に入るが如似し。』佛の言はく、『犯ずること無し。比丘尼は應に獨り、是の如きの經行處に至るべからず。』爾の時、蓮華色比丘尼、阿蘭若處に經行せり。此比丘尼、顏貌端正なり。年少婆羅門有り。見て繫心彼に在り。即ち捉えて犯さんと欲す。比丘尼言はく、『我に於てせば、當に某處に往くべし。』彼即ち放つ。蓮華色比丘尼、彼處に至り、即ち屎を以て身に塗る。彼婆羅門瞋り、石を以て頭を打てば兩眼脫出せり。蓮華色比丘尼、神足有るを憶はず、後乃ち知り、即ち神足力を以て飛んで佛所に往く。頭面に足を禮し已り、去つて一面に住す。佛、言はく、『此比丘尼は信樂有り、眼當に還復すべし。』即ち言の如く、還復せること故の如し。彼比丘尼、疑有り。佛、言はく、『犯ずること無し。比丘尼は應に阿蘭若處に至るべからず。』時に比丘尼、破戒せば娠有り、懸厠の上に在りて大小便せば、墮胎して厠中に在り。除糞人、之を見て譏嫌し、罵詈して言はく、『比丘尼は慚愧有ること無し。淨行を修せざるに、外自ら稱して我正法を知ると言ふ。是の如くんば何ぞ正法有らんや。云何が墮胎の厠中に在る。賊女、婬女の如く異らず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は

應に懸厠の上に在りて大小便すべからず。』彼比丘尼疑有り。敢て水上厠に在りて大小便せず。佛、言はく、『聽す。』時に比丘尼、結跏趺坐せるに、血不淨を出し、脚跟指奇間を汚せば、乞食を行ずる時、蟲草、脚に著く。諸居士、見て皆嗤笑せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は應に結跏趺坐すべからず。』彼疑ひ、敢て半跏趺坐せず。佛、言はく、『半坐を聽す。』爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。六群比丘尼有り、白衣家内に在り孔中に嚮ひて看る。時に諸居士、見已り、皆共に譏嫌して言はく、『比丘尼は慚愧有ること無し。外自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らん。云何が他家に在り、孔中に嚮ひて看るや。賊女、婬女の如似く異らず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘尼は應に白衣の家に在りて孔中に嚮ひて看るべからず。』爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に阿難、大比丘僧五百人と倶なりき。摩竭提に在りて人間に遊行せり。時に阿難に六十の弟子有り。皆是れ年少なれば、還捨戒せんと欲す。時に阿難、王舍城に至る。摩訶迦葉、遙に阿難の來れるを見、語つて言はく、『此衆、失はんと欲す。汝年少なれば足ることを知らず。』阿難、言はく、『大德、我頭に白髮已に現ぜり。云何が迦葉の所に於て、猶年少を免れざらんや。』迦葉報へて言はく、『汝、年少比丘と倶なり。善く諸根を閉ぢざれば、食は足ることを知らず。初夜にも後夜にも勤修せず。遍く諸家に至り、但行じて穀を破するのみ。汝衆當に失すべし。汝が年少比丘は足ることを知らず。』偸蘭難陀比丘尼、彼の語を聞き、瞋恚して喜ばず。是如きの言を作さく、『摩訶迦葉は是れ故

の外道なり。何が故に數〻阿難を罵り、是れ年少と言ひ、彼をして悅ばざらしむるや。』時に摩訶迦葉、阿難に語つて言はく、『汝、是比丘尼の瞋恚して、是の如く我を罵ることを作すと看るや。』阿難、唯世尊を除き、我佛法の外に、更に餘事の尊有ることを憶はず。』阿難の言はく、『大德、懺悔す。女人は無知なり。』迦葉、再三是の如く語る。阿難も亦再三是の如く言はく、『懺悔す。』夜過ぎ已り、迦葉、淸旦に衣を著け、鉢を持して王舍城に至り乞食す。時に偸蘭難陀比丘尼、見て之を唾す、時に諸比丘尼聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。偸蘭難陀を嫌責して言はく、『云何が乃ち大德迦葉を唾せるや。』比丘尼、諸比丘に白す。比丘、佛に白す。佛、爾時、此事を以て比丘僧を集め、偸蘭難陀比丘尼を呵責して言はく、『汝、云何が乃ち大德迦葉を唾せるや』と。世尊、無數の方便を以て呵責し已り、諸比丘に告げたまはく、『喚び來つて謫罰するを聽す。若し一の比丘、一の比丘尼を喚ばば應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。若し一比丘、二比丘尼、三比丘尼を喚ばば、若は僧應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。二比丘、一比丘尼を喚ばば、應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。二比丘、二比丘尼、若は三比丘尼を喚ばば、若は僧應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。三比丘、一比丘尼を喚ばば、應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。三比丘、二比丘尼、三比丘尼を喚ばば、若は僧應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。僧、一比丘尼を喚ばば、應に往くべし。若し

往かずんば應に如法に治すべし。僧、二比丘尼、三比丘尼を喚ばば、若は僧應に往くべし。若し往かずんば、應に如法に治すべし。時に六群比丘聞き、是の如きの言を作さく、『我等、比丘尼を喚ばんと欲すれば、便ち當に喚ぶべし。作すこと有らんと欲すれば、便ち當に作すべし。何を以ての故に。世尊に是の如きの語有ればなり。一比丘、一比丘尼を喚ばば應に往くべし。若し往かずんば應に如法に治すべし。乃至僧も亦是の如し』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に前人に相望むべし。往くべからず。應に往くべからず 尼犍度具足し竟る。

法犍度第十八

【一】比丘の坐作語法について如法の威儀を説く。今先づ客比丘舊比丘の威儀を制す。

（一）爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に客比丘有り。舊比丘を問はず、便ち空房に入る。蛇、其上に墮つ。便ち大聲もて言はく、『蛇、蛇』と。邊傍の比丘聞き、問うて言はく、『汝、何故に大聲するや』と。卽ち爲に因緣を說く。諸比丘聞く。其中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。客比丘を嫌責し已り、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、一面に在つて住し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、客比丘を呵責したまはく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず。沙門法に非ず。淨行に非ず。隨順行に非ず。爲すべからざる所なり。云何が舊比丘に語る

を知らず、客房の中に入り、蛇、其上に墮つれば、大聲もて蛇、蛇と言へるや。』無數の方便を以て呵責し已り、諸比丘に告げたまはく、『自今已去、客比丘の爲に、客比丘の法を制することを聽す。彼客比丘は應に隨順すべし。客比丘の法は、應に是の如く隨順して作すべし。若し客比丘、寺內に入らんと欲せば、應に知るべし、佛塔、若は聲聞塔、若は上座有り。應に革屣を脫し、手もて捉ふべし。』彼、革屣を抖擻せず、便ち捉ふれば、手を汚せり。佛、言はく、『應に抖擻せずして便ち捉ふるべからず、應に抖擻せずして便ち捉ふるべからず、應に抖擻すべし。』世尊既に抖擻と言へば、彼便ち樹に著けて抖擻するに、樹神嫌責せり。佛、言はく、『應に樹に著けて革屣を抖擻すべからず。應に石に著けて抖擻すべし。若は木頭に、若は籬に、若は兩革屣もて相抖擻せよ。彼、應に門中に至り手もて門を排すべし。若し關鑰有らば、應に開くべし。若し開く能はざれば、應に徐ろに打し、內人をして開かしむべし。若し聞えずば應に大打すべし。若し開かずば、應に衣鉢を持して第二比丘に與へて捉ふべし。』下籬牆處に至り、牆を踰して入る。門開く時、彼れ塔邊に於て左行して過ぐ。護塔神瞋る。佛、言はく、『應に左行して過ぐべからず。應に右に塔を遶つて過ぐべし。若は杙有り、若は龍牙杙、若は衣架、若は渠水邊、若は樹、若は石、若は草あらば、衣鉢を安んじて上に著け、洗脚處に至つて洗脚せよ。若し水無くんば問うて何處に水有るやと言へ。彼言に隨つて水有る處に便ち往いて取り、應に問うて有蟲無蟲を言ふべし。若し有蟲、若は是れ大蟲と言ひ、水に觸れて去らば、便ち瓶を持して

水を取れ。』彼手を洗はず、瓶を捉へて水を取る。餘比丘、皆之を惡む。佛、言はく、『應に手を洗はずして瓶を捉ふるべからず。兩臂もて瓶腹を捉へ、若は衣角を以て耳を穿つを聽す、彼水所に至り、應に手を淨洗し、盛滿せる器水もて洗脚すべし。彼洗脚手を以て、便ち水を捉ふ、餘比丘、見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず、應に一手もて水を捉へ。一手もて脚を洗ふべし。』彼先に右脚を洗ひ、後は左脚を洗ふ。佛、言はく、『應に先に左脚を洗ひ、後に右脚を洗ふべし。』彼革屣を拭はず、便ち著くれば、衣を汚せり。佛、言はく、『應に拭はずして便ち著くべからず。應に拭ひ已つて著くべし。』彼脚水を漉去せず、便ち著くれば革屣爛壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に漉して脚水を去り、革屣を著くべし。彼應に問うて言ふべし。「我若干歲なり。如許房有りや不や。」答へて有りと言はば、復應に問ふべし、「此房に人の住する有りや。人の住する無きや。」若し人住すること無しと言はば、應に問ふべし。「臥具有りや無しや。」若し有りと言はば、應に問ふべし「被有りや、被無しや。」若し有りと言はば、應に問ふべし「利有りや、利無しや」と。若し利有りと言はば、應に問ふべし、「器物有りや、器物無しや」と。若し有りと言はば、復問へ、「房衣有りや、房衣無しや」と。若し有りと言はば、復應に問ふべし。「福饒有りや、福饒無しや」と。若し有りと言はば、若し取らんと欲せば、應に語つて言ふべし。「我當に取るべし」と。彼應に房所に至つて戸を排すべし。若し開閉有らば應に開くべし。彼戸を開き已りなば、手もて戸の兩頰を捉へ、頭を内にし

て房中を看よ。蛇有らしむること勿れ。諸毒蟲、若し有らば、應に驅出すべし。彼戶に入り已りなば、床褥臥具枕を出し、地に氈を敷き、若は木上、若は板上を被へ、地に敷くに應に表裏を識るべし。房を淨掃し、糞土を除き、應に先に可棄處を看ば便ち棄つべし。若し針線刀子、若は弊故物乃至一丸藥を得ば、一處に安著せよ。若し主の識る有らば、彼應に取るべし。彼應に拂拭疎向すべし。若は杙、若は龍牙杙、若は衣架、若は壁の破壞する有り、若は鼠孔あらば、應に泥もて便ち泥すべし、若し地平かならざれば、應に平治すべし。泥漿灑塗もて淨ならしめ、地敷を取りて抖擻曝曬し、持して房に入れ。若し先に敷けるもの好からずば、應に更に好しきを敷くべし。若し先に敷けるも好しくば、還、本の如く敷け。床支物を取り、淨拭し、持して入り、應に床を淨掃し、抖擻し、持して房に入り、支上に安著すべし。臥具枕氈被を取り、淨め抖擻し、敷いて繩床上に著けよ。』彼常著衣と不著衣とを幷びに一處に置き、常所著衣を取り、餘衣亂る、佛、言はく、『常所著衣は應に別に一處にすべし。』彼、鉢囊革屣囊針筒盛油器を以て幷に一處に著す。餘比丘之を惡む。佛、言はく、『爾すべからず、應に各各別處すべし。應に先づ屋内に入らば戶樞の高下を看、然る後ち閉づべし。彼、出房せば、壁の四面に塵土有ること無きや不やを看よ。若し有らば、應に掃灑除去すべし、應に机を取り、淨洗すべし。應に淨水瓶洗瓶飲水器を具すべし。應に問ふべし、何れの處か大行處なる。何れの處か小行處なる、何れの處か是れ淨地なる。何れの處か不淨地なる。何者か佛塔、何者か聲聞塔、何者か是れ

第一上座房、何者か是れ第二、第三、第四上座房なる。」彼先づ應に佛塔を禮すべし。復聲聞塔を禮せよ。四上座隨次に禮せよ、彼提脚脛禮し、應に提脛禮すべからず。彼提膝禮し、提膝禮すべからず。」彼反抄衣もて頸に纏ひ、頭を裹み、通肩して衣を披き、革屣を著けて禮を作す。佛、言はく、「一切、應に爾すべからず。自今已去、偏に右肩を露し、革屣を脱し、右膝を地に著け、兩脚を捉へ、是の如く言へ、大德、我禮す」と。若し四上座房内に在らば、思惟し、應に隨坐次に房を禮すべし。彼應に問ふべし。「何れの處か是れ衆僧の大食處、小食處、夜集處、說戒處なる。何者か是れ僧差食、檀越送食、月八日食、十五日食、月初日食、檀越請食なる。次に何處に到るや」と。復問へ、「明日、何の檀越有つてか衆僧に小食、大食を請へるや。何の檀越有つてか、僧爲に覆鉢を爲す。誰が家か是れ學家なる。何れの處か拘惡なる。何れの處か是れ好人、何れの處か是れ惡人なる」と。自今已去、我客比丘の爲に法を制せん。客比丘、應に隨順すべし。若し隨順せざれば、應に如法に治すべし。自今已去、舊比丘の爲に法を制せん。舊比丘は應に隨順すべし。應に是の如く隨順を作すべし、舊比丘、客比丘の來る有るを聞かば、應に出外して迎へ、爲に衣鉢を捉ふるべし。若し温室重閣經行處有らば、中に安置し、客比丘を坐せよ。洗足水、水器拭足巾を與へ、爲に革屣を捉へ、左面に著け、看て泥水もて汚れしむること莫れ。若し泥水もて汚れなば、應に餘處に移著すべし。彼客比丘の爲に洗足し已りなば、應に還洗足の具を收め本處に還へるべし。應に問ふべし。「長老、飲水せんと欲するや不

やーと。若し飲むと言はば、彼應に瓶を持し爲に水を取るべし。』彼洗手せずして瓶を持せり。餘比丘、之を惡む。『應に兩臂もて瓶を抱くべし。若は衣角を以て耳に鉤し、水邊に至つて手を淨洗せよ。若し是れ池水流水なれば、應に手もて上を撥除し、下淨水を取るべし。』彼擔水し日中に行くに、水熱せり。佛、言はく、『應に若は草、若は樹葉を以て覆ひ、蔭と作して持ち去るべし。』彼器を洗はず、水を過む。佛、言はく、『應に淨洗すべし。』彼飲み已り、器を洗はず、與に餘人を過つ。餘比丘、之を惡む。佛、言はく、『應に洗ひ、然る後與ふべし。』彼水を與ふる時、竝んで語るに、口中に涎唾有りて水中に墮つ。佛、言はく、『竝んで語るべからず。若し所語有らば、應に廻面語すべし。』彼器を洗はずして便ち擧す。餘比丘見て皆之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。彼應に問ふべし。「大德長老幾歲なる。」若し若干歲と言はば、應に語つて言ふべし、此は是れ房、此は是れ繩床木床褥枕氈被地敷、此は是れ唾器、此は是れ小便器、此は是れ大便處、此は是れ小便處、此は是れ淨處、此は是れ不淨處、此は是れ佛塔、此は是れ聲聞塔、此は是れ第一上座房、此は是れ第二、第三、第四上座房、此は是れ衆僧の大食處、小食處、夜集處、布薩處、僧差食乃至次には某處に到る、某甲檀越は明日僧を請うて小食大食を與ふ。某甲家には、僧與に覆鉢羯磨を作せ。某甲家には、僧與に學家羯磨を作せ。某甲處は狗惡、某甲處は好、某甲處は惡なり」と。我今舊比丘の爲に法を制せん。舊比丘は應に隨順すべし。若し隨順せずんば、應に如法に治すべし。』

【三】次に便厠法を制す。

爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に舍衞に婆羅門出家比丘有り。多く惡汚あるに自ら大小便を惡み、利厠草を用ふれば、身を傷け瘡を作り、膿血出づ。身を汚し、衣を汚し、臥具を汚し、牀を汚す。諸比丘問はく、『長老、何の患ふ所ぞ』と。卽ち具に因緣を說く。時に諸比丘聞き、中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。婆羅門出家比丘を嫌責して言はく、『云何が多く惡汚有るに、自ら大便を惡み、利厠草を用ひて身を傷け膿血出で、身を汚し、衣を汚し、臥具を汚し、牀を汚せるや』と。諸比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此事を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、彼比丘を訶責して言はく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず。沙門法に非ず。淨行に非ず。隨順行に非ず。爲すべからざる所なり。汝、云何が婆羅門出家比丘なるに、多く惡汚有るに自ら大便を惡み、利厠草を用ひて身を傷け、膿血出で、身を汚し、衣を汚し、臥具を汚し、牀を汚せるや』と。無數の方便を以て訶責し已り、諸比丘に告げたまはく、『自今已去、比丘の爲に便厠法を制せん。諸比丘は當に此法に隨順すべし。應に是の如く隨順すべし。應に久しく大小便を忍ぶべからず。若し去る時は厠草を提へよ。』彼下座なるに上座の前に在りて去り、或は竝に語り、竝び行き、或は前に在り、後に在り、反抄衣もて或は頭を纒ひ、或は頭を裹み、或は革屣を著く。佛言はく、『爾すべからず。若し前に在つて去らば、前に在るを聽す。彼厠外に至らば、應に彈指し、若は謦咳すべし。若し人非人有らば知らしめよ。彼厠坊裏に至らば、若は

杙、若は龍牙杙、若は衣架衣屋、若は水邊、若は樹、若は杙、若は草に、應に衣を安んじて上に著くべし。若し雨に漬かるを畏るれば、應に無雨處に安著すべし。若し風飄雨漬衣なれば、衣を著くるを聽さんも、手もて堅く捉へ、厠の兩邊に觸れざらしめ、堅く脚を上厠に安じ、先に若し蛇蠍蜈蚣百足を看ば驅出せしめよ。』彼未だ蹲せざるに便ち衣を擧ぐれば形露る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に並び蹲り、漸く衣を擧ぐべし。蹲り已らば當に看るべし。前却に近づかしめ、兩邊に大小便涕唾して厠孔をして汚さしむること勿れ。』彼高聲もて大に鳴らす。餘比丘聞きて之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼大便する時、覺えず聲に鳴く。疑有り。佛、言はく、『犯せざるなり。』彼厠上に在り、揚枝を嚼み、若は眠り、若は入定す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼疑うて、敢て水上の厠中に在りて大小便せず。佛、言はく、『犯無し。』彼、厠草を用て身を拭かず便ち起つ。身を汚し、衣を汚し、坐具を汚せり。佛、言はく、『厠草を用ひて然る後起つ』と聽す。』世尊に是の如きの教有り、厠草を用ふるを聽すと。彼、長厠草を用ふ。佛、言はく、『應に長厠草を用ふるべからず。極く長きも一搩手なれ。』彼又奇厠草竹葉を用ひ、若は樹皮を用ひ、草牛屎搏を用ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼短厠草を用ひ、手を汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず、極短なるも長さ四指なれ。』彼厠草を用ふるも抖擻せず、厠草を著け糞便を棄つ。餘比丘見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼已用未用の厠草を以て一處に雜ふ。取る時手汚れたり。

佛、言はく、『應に別處すべし。』彼廁草を用ひて已に便し、起てば形露る。佛、言はく、「應に爾すべからず。應に徐に起ち、漸に下衣すべし。彼洗處に至りなば、應に彈指して彼若は人、若は非人をして知らしむべし。彼洗處に處らば、應に先づ看るべく、若し蛇百足毒蟲行らば、應に驅出せしむべし。』彼先づ衣を褰げて後蹲るに形露る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼水器の中に就いて洗ふ。餘比丘之を惡む。佛、言はく、「應に爾すべからず。』彼水を用ひて洗ふ時聲行り。餘比丘、聞いて之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼水を用ひ盡せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』應に留めて乃ち一人の洗ふに足るに至れ。』彼洗ひ已つて身上の水を却けず、衣を汚し、身を汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に水を去るに、若は手を以てし、若は葉を以てし、若は弊物して拭ふべし。若し手臭ければ、應に洗ふに、若は鹵土を以てし、若は灰、若は泥、若は牛屎、若は故臭もてすべし、應に石を以て揩ひ、若は土墼、若は澡豆もてすべし。』彼下衣せざるに便ち起つて形露る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に漸に下衣して起つべし。』彼洗器の空なるを見るも水を著けず、佛、言はく、『應に見ば便ち水を著くべし。』彼廁前に在つて受經し、誦經、經行し、作衣し、餘比丘の大小便を妨げたり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼廁邊に在りて誦經し受經し、經行し、作衣せり。餘比丘見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼上廁に糞掃行るを見るも除かず。佛、言はく、『見し者は應に除くべし。我今諸比丘の爲に大小便

【四】次に乞食比丘の威儀を制す。

の法を説きぬ。諸比丘應に隨順すべし。若し隨順せざれば、應に如法に治すべし。』

（四）爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。異の乞食比丘有り。年少なれば多く解せざる所あり。門相を看ずして便ち入るに、女人有つて屋中に眠れり。其女人形を露し仰いで眠り、不淨を出し女根を汚せり。彼比丘見て愧懼し、卽ち疾疾し屋より還出せり。比丘適出でしに、其夫便ち屋に入り、其婦の形を露して仰臥し、不淨もて身を汚せるを見たり。見已つて是の如きの念を作さく、『我婦形を露して仰臥し、不淨もて身を汚せり。彼比丘、屋より疾疾して出でぬ。必ず我婦を犯せり』と。卽ち往逼して問うて言はく、『汝、我婦を犯して便ち走るや。』比丘言はく、『居士、是の如きの言を作すこと莫れ。我等應に是の如き事を作すべからず。』居士言はく、『汝、我屋より出づ。云何が作さずと言はんや。』彼卽ち比丘を打つて死に次ぐ。時に諸比丘聞き、中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。彼乞食比丘を嫌責すらく、『云何が乞食比丘は、年少なれば多く解せざる所あるに、門相を看ず乃ち他女人の眠屋に入れるや。』時に諸比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却て一面し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、乞食比丘を呵責したまはく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず。沙門法に非ず。淨行に非ず。隨順行に非ず。爲すべからざる所なり。云何が乞食比丘、年少なれば多く解せざる所なるに、門相を看ず、乃ち他の女人の臥屋に入れるや。』無數の方便を以て呵責し已り、諸比丘に告げたまはく、『自今已去、乞食比丘の爲に法を制せん。乞食比

丘は應に是の如く隨順すべし。若し乞食比丘、村に入つて乞食せんに、淸旦に手を淨洗し、衣架の邊に至り、一手もて衣を擧げ、一手もて挽取し、舒張抖擻して看、蛇蟲有らしむること勿れ。然る後腰帶、僧祇支を著け、欝多羅僧は舒張し抖擻して看、僧伽梨を疊み、頭上若は肩上に著け、淨洗鉢もて絡囊中に著け、若は手巾もて裹み、若は鉢囊に盛り、襯身衣洗足革屣氈被を擧し、道路行の革屣を取れ。彼應に戶鑰を持して房を出で、去るに戶を閉ぢ推看せよ。若し堅牢ならざれば、應に更に安居すべく、若し堅牢なれば推繩して內に著け、然る後四顧して看るべし。若し人無きを見ば、戶鉤を藏擧せよ。若し人有るを見、堅牢ならざれば應に持ち去るべし。若は更に堅牢處に著くべし。道に在りて行くに、應に常に善法を思惟すべし。若し人を見ば應に問訊して善來と言ふべし。若し聚落に至らんと欲せば、小しく下道し、鉢を安じて地に置き、僧伽梨を取りて舒張抖擻し、然る後著せよ。村邊に著し賣器處有り、若は屋有り、若は作人有らば、應に道行の革屣を脫して之に寄るべし。彼村に入る時、應に巷相を看、空處を看、市相、門相、糞聚を看るべし。白衣の家に入らば、應に第一門相乃至第七門を看るべし。爾時、乞食比丘、他舍內に至れるに、風吹けば衣肩より墮つ。彼女人に向へば衣を正す。佛、言はく、『應に女人に向ひて衣を正すべからず。應に壁に向ひてすべし。』彼乞食比丘、右手もて鉢を捉へ、左手もて杖を捉ふる時に形露る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に右手もて杖を捉へ、左手もて鉢を捉ふべし。』彼乞食比丘、道に往するに當り、男子、女人をして道を避けしむ。諸居士見て、

皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず。厭足有ること無し、自ら我正法を知ると言ふも、道に在つて住するに當り、男子、女人をして皆道を避けしむ。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す、佛、言はく、『乞食比丘は、應に道に當つて住すべからず。世尊既に言はく、應に道に在りて住すべからずと。彼屏處に在りて住せり。佛、言はく、「應に爾すべからず。應に見處に在りて住すべし。」』彼乞食比丘、他の食を持して出づるを、便ち前んで迎取せり。諸居士見て皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足を知らず。自ら我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らん。急ぎ前んで食を取ること、穀貴なるが如似し。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『乞食比丘は應に前んで食を取るべからず。』若は是れ女人、若は病める、若は姙娠せる、若は兒を抱ける、若は天雨れる。若は兩手に物を捉へたる、若し地泥水なれば比丘を喚べるに、比丘疑へば、敢て前んで取らず。佛、言はく、『喚ばば應に往くべし。』乞食比丘、飯乾飯麨魚肉を得、并びに一處に著く。餘比丘見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。一處に雜著せんとせば、若し是れ一鉢なれば、應に物を以て隔つべし。若は樹葉皮、若は鍵鎡、若は次鉢、若は小鉢もてすべし。麨は手巾もて裹むべし。』彼乞食比丘、大家に往いて乞食せり。居士見て譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足を知らず。自ら我正法を知ると言ふも、乃ち大家に至つて乞食す。穀貴なるが如似し。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に大家を選んで乞食すべからず。若し次第乞なれば、應に選ぶべきことを得ざれ。』彼乞食比

丘、強ひて乞ひ、要ず得て乃ち去る。諸居士見て皆譏嫌すらく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも、強ひて人より乞ひ、要ず得て乃ち去る。穀貴なるが如似し。是の如くんば何ぞ正 法有らんや。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し得べきを知らば應に待つべし。彼出づる時、當に第一門相乃至糞聚相を看るべし。若し村を出でて還へらば、道行革屣を取りて著け、下道には鉢を安じて地に置き、僧伽梨を疊み、肩上若は頭上に著けよ。行く時は當に常に善法を思惟すべし。若し人を見ば、應に先づ善來を問訊すべし。彼乞食比丘の常所食處は、應に往いて淨掃灑し、水器、殘食器を具すべく、復應に床座洗脚石、水器拭脚巾を具すべし。若し餘の乞食比丘の有つて來るを見ば、應に起つて遠く迎逆し、爲に鉢を取るべし。若し鉢床、鉢支の頭上に有らば、衣を取り舒張して看よ。膩塵坌泥の汚、鳥糞の汚有らしむること勿れ。若し是の如きの汚有らば、應に拭くべくんば拭くべし。應に揉むべくんば便ち揉め、應に抖擻すべくんば便ち抖擻せよ、應に浣ふべくんば當に浣ふべし。浣ひ已らば應に絞るべく、水を去りて灑き、繩床、木床の上に著けよ。彼應に乞食比丘に坐を與へ、水器を與へ、水を與へ、洗足石 拭足巾を與ふべし。革屣を持し左邊に安んじて看、泥水をして汚漬せしむること勿れ。若し水の漬る有らば、應に移すべし。彼、乞食比丘の爲に洗足し已りなば、應に水器、洗足石を持し、諸物を本處に還復すべし。彼應に澡豆もて手を淨洗し已りなば、水を授けて彼乞食比丘に與ふべし。次いで食を授けて彼に與へよ。食する時には、應に看

【五】次に阿蘭若比丘の威儀法を制す

て所須を供給すべし。若は酪漿、淸酪漿、若は苦酒、若は鹽、若は菜有らば應に與ふべし。若し熱くば扇することを爲すべく、水を須ひんには應に與ふべし。若し日時過ぎんと欲せば、應に倶に食すべし。乞食比丘、食し已りなば、應に爲に鉢を取り、與に手を洗ふべし。自ら食し已りて若し餘食有らば應に人若は非人に與ふべし。若は無草地、若は無蟲水中に著けて盛殘食器を洗ひ故處に復し、應に床坐、洗足石、水器を還復すべし。諸物を故處に復しなば、食處を掃除せよ。』彼食鉢を以て除糞す。餘比丘見て皆之を惡む。佛、言はく、『應に鉢を以て除糞すべからず。應に澡盤を用て掃帚すべし。鉢は淨潔に持すべし。』時に衆多の乞食比丘有り。共に一處に食す。姙娠せる狗有り。食を看るも食を得ず。飢うるを以ての故に遂に子を墮せり。比丘、佛に白す。佛、言はく、『食する時、若は人、若は非人に食を與ふること乃至一摶もすべし。』我今、乞食比丘の爲に法を制せり。應に隨順すべし。若し隨順せざれば、應に如法に治すべし。

(五)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に阿蘭若比丘、嬾墮して都て所具無し。水器、洗足物を具せず、亦殘食を留めず。此住處を去ること遠からず、衆多の賊の過ぐる有り。時に一賊有り、餘賊に語つて言はく、『沙門釋子は常に此法有り、水器、洗足物を具し、亦餘食を留む。我等彼に往く可し。若し食を得ば、當に共に之を食すべし。』時に賊、彼に至り問うて言はく、『汝、水有りや不や。』答へて言はく、『無し。』『洗足物有りや不や。』答へて言はく、『無し。』『餘食有りや不や。』答へて言はく、『無し。』賊語つて言はく、『汝、阿

蘭若處に在りて住し、水洗足器を具せず、餘食有ること無し』と。即ち打つて死に次がしむ。諸比丘聞く。其中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。彼阿蘭若比丘を嫌責して言はく『汝、癡墮せるに、云何が阿蘭若處に在りて住し、而も水器を具せず、乃至餘食を留めざる。』時に諸比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却へて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、彼阿蘭若比丘を呵したまはく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず。沙門法に非ず。淨行に非ず、隨順行に非ず。爲すべからざる所なり。云何が癡墮せるに阿蘭若處に在りて住し、水器を具せず、乃至餘食を留めざる』と。無數の方便を以て阿蘭若比丘を呵し已り、諸比丘に告げたまはく、『自今已去、阿蘭若比丘の爲に法を制せん。應に阿蘭若法に隨順すべし、比丘は應に是の如く隨順すべし。若し阿蘭若比丘、村に入りて乞食せんに、淸旦に淨洗手もて衣架に至り已り、一手もて衣を擧げ、一手もて衣を挽いて取り、舒張抖擻して看、蛇蟲有らしむること勿れ。然る後、腰帶僧祇支を著け、鬱多羅僧は舒張し抖擻して看、僧伽梨を疊み、頭上若くは肩上に著けよ。淨洗鉢を絡囊中に著け。若は手巾もて裹み、若は鉢囊もて盛り已りなば、襯身衣、洗足革屣氈被を擧し、道路行の革屣を取り、露杖を打て、彼應に戸鑰を持して房を出で、還へらば戸を閉ぢ、推して堅牢なりや不やを看るべし。若し堅牢ならざれば、應に更に安居すべし。若し堅牢なれば、應に繩を推して内に著け、四顧して看るべし。若し人無きを見ば、應に戸鉤を藏擧すべし。若し人有るを見ば、堅牢なら

ずして持ち去るべし。若は更に堅牢處に著けよ。道に在りて行かんに、應に常に善法を思惟すべし。若し人を見ば、應に先づ問訊して善來と言ふべし。若し聚落に至らんと欲せば、小しく下道し、鉢を安じて地に置き、僧伽梨を取り、舒張し抖擻して看、然る後著けよ。若し村邊に賣器處有り、若は屋有り、若は作人有らば、應に道行革屣を脫し、露杖を打して之に寄るべし。彼村に入る時、應に巷相、若くは空處相、市相、若くは門相、若は糞聚相を看るべし。白衣の家に入らば、應に第一門相乃至第七門相を看るべし。』爾時、阿蘭若比丘、他舍內に至り。風吹いて衣、肩より墮つ。彼女人に向ひて衣を正せり。佛、言はく、『應に女人に向ひて衣を正すべからず。應に壁に向つてすべし。』彼阿蘭若比丘、右手もて鉢を提へ、左手もて杖を提ふ。時に形露る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に右手もて杖を提へ、左手もて鉢を持すべし。』彼阿蘭若比丘、道に當つて住し、男子、女人をして道を避けしむ。諸居士見て、皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は慚愧を知らず。厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも、道に在つて住するに當り、男子、女人をして道を避けしむ。是の如くんば何ぞ正法有らんや。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『阿蘭若比丘は、應に道に當つて住すべからず。』世尊既に言はく、道に在つて住すべからずと。彼屏處に在つて住す。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に見處に在つて住すべし。』彼阿蘭若比丘、他の食を持して出づるを、便ち前んで迎取せり。諸居士見て、皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し。自ら我正法を知れりと言ふも、是の

如くんば何ぞ正法有らん。急に前んで食を取る。穀の貴きに如似たり。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『阿蘭若比丘は、應に前んで食を取るべからず。』若は女人、若は姙娠せる、若は兒を抱ける、若は天雨れる、若は兩手に物を提へたる、若は地泥水なれば比丘を喚べるに、比丘疑へば敢て前まず。佛、言はく、『若し喚ばば應に往くべし。』阿蘭若比丘、飯の若は乾飯麨魚肉を得て、幷びに一處に著せり。餘比丘、見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。一處に雜へんに、若し是れ一鉢なれば、應に物を以て隔つべく、若は樹葉皮、若は鍵鎡、若は次鉢、若は小鉢もてせよ。麨は應に手巾もて裹むべし。』彼阿蘭若比丘、大家に往いて乞食せり。諸居士見て、皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも、乃ち大家を選んで乞食せるは、穀の貴きに如似たり。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に大家を選んで乞食すべからず。若し次第乞なるも選ぶべきことを得ざれ。』彼阿蘭若比丘、強ひて乞食し、要ず得れば乃ち去る。時に諸居士、見て皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも、強ひて人より乞ひ、要ず得て乃ち去る。穀の貴きに如似たり。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し得べきを知らば、應に待つべし。彼食を得し時、是の如きの念を作せ。此は賊の爲なり、此は自らの食なりと。出づる時には當に第一門相乃至糞聚相を看るべし。若し村を出でて還へらば、行道の革屣を取り、露杖を打ち、小しく

下道して鉢を安じて地に置き、僧伽梨を疊み、肩上若くは頭上に著けよ。行く時は當に常に善法を思惟すべし。若し人を見ば、應に先づ善來を問訊すべし。彼阿蘭若比丘が常所食處は、應に往いて淨掃灑し、水洗器、殘食器を具ふべし。復應に床座洗脚石、水器、拭脚巾を具すべし。若し餘の阿蘭若の來る有るを見ば、應に起つて遠く迎逆し、爲に鉢を取るべし。鉢床、鉢支の頭上に著くるあらば、衣を取り、舒張して看よ。膩塵坌泥汚鳥糞汚有らしむること勿れ。若し是の如きの汚れ有らば、應に拭くべきは便ち拭き、應に揉むべきは便ち揉み、應に抖擻すべきは便ち抖擻し、若し洗はんは洗ひ已らば、應に絞りて水を去り、曬して繩床若くは木床の上に著けよ。彼應に阿蘭若比丘に坐を與て、水器を與へ、水を與へ、洗足石拭脚巾を與ふべし。革屣を持して左邊に安じて看、泥汚水漬せしむること勿れ。若し泥汚有らば應に移すべし。彼阿蘭若比丘の爲に洗足し已りなば、應に水器洗足石諸物を持して、本處に還復すべし。彼應に澡豆もて手を淨洗すべきこと已りて淨潔なれば、別に殘食を留めよ。若し賊有りて來らば應に與ふべし。水を授けて彼阿蘭若比丘に與へ、次で食を授けて彼に與へよ。食時には、應に看て所須を供給すべし。若し酪漿清酪漿若は苦酒、若は鹽、若は菜有らば應に與ふべし。若し熱くば應に扇すべし。水を須ひんには應に與ふべし。若し日時過ぎんと欲せば應に俱に食すべし。阿蘭若比丘食し已りなば、應に爲に鉢を取りて與に洗手すべし。自ら食し已りて若し餘食有らば、應に人若は非人に與ふべし。若は無草地無蟲水中に著けて、盛殘食器を洗ひ、床座洗足石水器の諸物を本處に

【六八】次に食上法の威儀を明す。

復せば、應に食處を掃除すべし。』彼食鉢を以て除糞せり。餘比丘見て皆之を惡む。佛、言はく、『應に鉢を以て除糞すべからず。應に澡盤若は掃帚を用てすべし。鉢は應に淨潔に持すべし。若し賊有りて來らば應に語るべし。「此は是れ水、是れ洗足物、此は是れ食なり。汝等が爲の故に別に淨潔に留めたり。若し食せんと欲せば便ち食せよ」と。』時に賊、阿蘭若に問はく、『今夜は是れ何の時なるや。』彼比丘、答ふること能はざれば慚愧せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『阿蘭若比丘は應に善く夜の時節を知るべし。』時に賊、阿蘭若に問うて言はく、『此は是れ何の方ぞ。』阿蘭若比丘、答ふることを知らざれば慚愧せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『阿蘭若比丘は應に善く方相を知るべし。』賊、比丘に問はく、『今日是れ何の星ぞ。』阿蘭若比丘答ふること能はず。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『阿蘭若比丘は應に善く星を知るべし。』彼阿蘭若比丘、好臥具を敷いて安眠せり。時に諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『阿蘭若比丘は應に睡すべからず。初夜にも後夜にも警心もて思惟すべし。今、阿蘭若比丘の爲に阿蘭若法を制せり。阿蘭若比丘は應に如法に隨順すべし。若し隨順せざれば、應に如法に治すべし。』

(六八)爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に居士有り。衆僧に明日食せんことを請へり。卽ち共夜に於て種種多美の飲食を辦具し、淸旦に往いて時の到れるを白す。時に諸比丘、受請して食する時錯亂せり。或は已に坐せる者有り、方に坐せんとする者有り、或は已に食に與れる者有り、方に食に與らんとする者有り、或は已に食せる者有り、方に食せんとす

一四八三

る者有り、或は已に去れる者有り、方に去らんと欲する者有り、或は已に出でんとする者有り、方に出でんと欲する者有り、而も彼檀越、誰が已に食せるや、誰が未だ食せざるやを知らず。時に諸居士、皆共に瞋嫌すらく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも、檀越の請を受けて錯亂して去る。或は已に坐せる者、方に坐せんとする者有り、或は已に食に與れる者有り、方に食に與らんとする者有り、乃至或は已に出づる者有り、方に出でんと欲する者有り。是の如くんば何ぞ正法有らんや。我等をして、已に誰に與へしや、未だ誰に與へざるや、誰か已に食せるや、誰か未だ食せざるやを知らざらしむ』と。時に諸比丘聞く。少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。彼受請比丘を嫌責して言はく、『云何が檀越の請を受けて錯亂して去れる。或は已に坐せる者、方に坐せんとする者、乃至方に出でんと欲する者有りて、檀越をして、已に誰に與へ、未だ誰に與へざる、誰か已に食せる、誰か未だ食せざるやを知らざらしむ』と。時に諸比丘、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、一面に在つて坐し、此因縁を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因縁を以て比丘僧を集め、彼受請比丘を呵責したまはく、『云何が檀越の請を受けて錯亂して去り、或は已に坐せる者、方に坐せんとする者有り、乃至方に出でんと欲する者有つて、檀越をして已に誰に與へ、未だ誰に與へず、誰か已に食し、誰か未だ食せざるやを知らざらしむるや』と。無數の方便を以て呵責し已り、諸比丘に告げたまはく、『自今已去、諸比丘の爲に食上法を制せん。諸比丘は應に食上法に隨

順すべく、應に是の如く隨順すべし、若し比丘、往いて受請せんと欲せば、應に衆僧が常の小食處、大食處、可見處に往いて住すべし。若し檀越來つて時到れるを白せば、上座は應に前に在つて象の行くが如くにして去るべし。若し上座、大小便處に往かば、應に待つべし。彼下座、前に在りて行き、並び語り並び行き、或は前み、或は後る。或は反抄衣し、或は頸に纒ひ、或は頭を裹み、或は通肩して衣を披き、或は革屣を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に偏に右肩を露し、革屣を脫し、後に在りて行くべし。』若し佛事法事僧事を爲すこと有り、病比丘の事有り。佛、言はく、『應に上座に白して前に在りて去るべし。』彼命難、梵行難有るも、畏愼すれば敢て問はずして去らず。佛、言はく、『若し是の如きの難事有らば、若は問ひ、若は問はずして去るを聽す。』彼食處に往き、錯亂して聚住せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に隨次座すべし。上座坐し已らば、應に中座、下座を看るべし。不如法に坐し、不善もて身を覆はしむること勿れ。若し不如法に坐し、不善もて身を覆へる者有らば、應に彈指して覺らしむべく、若は人語を遣し、好如法坐を知らしめよ。中座坐し已らば、應に上座下座を看るべし。不如法に坐し、不善もて身を覆はしむること勿れ。若し不如法に坐し、不善もて身を覆へる有らば、應に彈指もて覺らしむべく、若は人語を遣り、好如法坐を知らしめよ。下座の坐し已るも亦是の如し。』時に比丘有り。食上に在るも鉢食無し。『比丘、應に鉢を借るべし。』比丘有り、洗鉢せずして食上に至れるに、蛇、鉢中に在りて吐す。比丘用食し已りて病を得たり。佛、言はく、

『應に鉢を洗はずして便ち持して食上に往くべからず。應に淨洗し已つて用食すべし。』時に六群比丘、貪りて恭敬を受けんが故に、後に在りて食上に往き、諸比丘、我等を見ば當に起つべからしめんと。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に貪利恭敬の故に後に在りて食上に往き、諸比丘をして起しむべからず。若し未だ來らざれば、比丘の坐處を開するを聽す。若し檀越、上座に果を與ふれば、應に問うて果淨なりや不やを言ふべし。若し未だ淨ならずと言はば、上座、應に語つて淨ならしむべし。若し已に淨なれば、問うて誰の爲にか送り來れるやと言へ。若し上座の爲に送り來れるは、隨意に取ることを得、若し僧の爲にと言はば、應に語を傳へしめ、遍からしむべし。若し檀越、上座に種種の菓を與へなば、應に問うて誰が爲に送り來れるやと言ふべし。若し上座の爲にすと言はば、隨意に取れ。若し僧の爲にすと言はば、應に語を傳へしめて遍からしむべし。』時に比丘有り。食を得ず。『比坐に索むることを爲すを聽す。若し比坐無くんば、應に自ら減じて半ば與ふべし。』時に諸比丘、食を得て卽ち食す。諸居士見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも食を得て便ち食すること、穀貴きこと飢餓せる時に如似たり。是の如くんば何ぞ正法有らん。』佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に唱言し、等しく得て然る後食すべし。』時に六群比丘、胵肘食して比坐を妨礙せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に胵肘食すべからず。應に斂肘食すべし。』六群比丘、食時に大咳唾す。迸唾比坐の上に墮つ。餘比丘之を惡み、佛に白す、佛、

言はく、『應に爾すべからず。應に徐徐に棄唾すべし。』彼、食する時、若は餘果、若は菜根を狼藉し地を汚せり。佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。所食の棄つ可き物は應に聚めて脚邊に著くべし。去る時持ち去つて之を棄てよ。』彼處處に洗鉢水を棄てて地を汚泥ならしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。澡盤を以て承けて外に棄てよ。』

爾時、衆多比丘、六群比丘と白衣の家內に在り。共に机上に坐して食せり。一の六群比丘有り。便ち起つて比坐に語つて知らしめざれば、機傾いて地に倒れ、餘人皆墮し、形露る。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に語つて好坐を知らしむべし。』

時に比丘有り。食し已つて默然として去る。彼檀越、食の好不好、食の足不足爲るを知らず。諸居士、皆譏嫌すらく、『諸の外道人は皆布施を稱歎し、檀越を讃美するに、而も沙門釋子は食し已るも默然として去り、我等をして、食の好不好、足不足を知らざらしむ。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に食し已りなば、默然として去るべからず。應に檀越の爲に達嚫を說くべし。乃至爲に一偈を說け。

若し利せんが爲の故に施さば、此利必ず當に得べし。
若し樂しみの爲の故に施さば、後必ず快樂を得ん。

世尊旣に言はく、『應に達嚫を說くべし』と。時に人人皆說くに、遂に便ち閙亂せり、佛、言はく、『應に人人に亂說すべからず。應に上座をして說かしむべし。若し上座說く能はざれば、應に能說者は語るべし。若し上座語らざれば突吉羅なり。若し上座語るも、而も

【七】染衣の威儀について。

誦かざれば亦た吉羅なり。』彼達嚫を說く時、餘の者皆去れるに彼は安坐し、或は靜處に在りて坐し、或は覆處に在りて坐し、或は女人と共に、無有知男子處に在りて說法することと五六語に過ぎずして媟嬻す。時人皆譏嫌して語る、諸比丘佛に白す。佛、言はく、『達嚫する時、餘比丘は去るべからず。應に上座に留めて四人相待すべし。餘は去るを聽す。若は佛法僧事の爲にし、若は病比丘の事あらば、應に白して知らしめ然る後去るべし。若は檀越の布施を說くを聞かんと欲せば、應に布施を稱歎すべし。若し檀越法を說くを聞かんと欲せば、應に爲に檀越法を讚歎すべし。若し天を說くを聞かんと欲せば、應に爲に天を讚歎すべし。若し過去せる父祖を說くを聞かんと欲せば、應に爲に過去せる父祖を讚歎すべし。應に檀越の爲に布施を讚歎し、檀越を讚歎し、佛法僧を讚歎すべし。』諸比丘の爲に食上法を說けり。諸比丘、應に隨順すべし。若し隨順せざれば如法に治せよ。

(七)爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に諸比丘の衣服垢膩なり。佛、言はく、『鹵土若は灰若は土若は牛屎を以て浣ぐ、を聽さん。』彼麤澁なる瓫石を用て衣を浣げるに衣をして壞れしむ。佛、言はく、『應に麤澁なる瓫石を用ふるべからず。應に細なる瓫石を用ふべし。若し色脫しなば、應に更に染むべし。若は泥、若は陀婆樹皮、若は婆茶樹皮、揵陀羅、若は華茇、若は阿摩勒もてし、若は樹根を以てし、若は茜草を以て染めよ。』彼日中に在りて漬汁を用て染めしに、久しきに耐へず。佛、言はく、『應に爾すべからず、應に煮るべし。』彼何處に煮るやを知らず、佛、言はく、『應に釜を以て煮るべし。若は禁滿、

若は銅瓶もて鑊煮せよ。』彼煮る時、樹皮片大なれば受けず。佛、言はく、『應に斧を以て細く斬るべく、若し湧涌して出でなば、木を以て之に按せよ。』彼熟と不熟とを知らず。佛、言はく、『應に汁の二三滴を取りて冷水の中に著くべし。若し沈まば熟せり。應に漉して汁を取るべし。』彼漉して何處に著くるかを知らず。佛、言はく、『漉しなば、盆中に著けよ。若し汁滓倶に下らば、應に掃帚を以て遮すべし。若し掃帚弱くば、應に木を以て輔くべし。』彼漉汁する時、兼ねて盆を捉へたれば遂に疲極せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に一人は盆を捉へ、一人は汁を漉すべし。若し熱くば鑷もて熱物を捉へよ。』彼冷熱を一處に著して染汁壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に冷と熱とを別處すべし。若し揚げなば、冷かならしめ、然る後和合せよ。』彼、染汁の中に就いて染むるに、染汁壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に少許を取り、別に餘器の中にて染むべし。』彼染め已れば、敷いて地に著くるに色壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼便ち敷いて草上に著くるに、草をして壞せしむ。彼敷いて草上、葉上に著くるに、色をして不調ならしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に伊梨延陀耄羅耄耄羅若は氍氀の上に敷著すべし。』十種衣の中、一一の衣を取りて地に敷著し、彼染衣を以て上に著け、若は繩上に懸著せよ。彼繩を須ひんには繩を畜ふるを聽し、橛を須ひんには作るを聽す。彼衣頭もて紐を安ずるに須ひんには、紐を作るを聽す。若し染汁偏に流るれば、偏れ易かるべし。』時に比丘有り。染衣を曬し已つて背向して煮る。

染汁、衣汁偏に流る。異比丘有り、先に與に嫌諍せば、之を見るも語らず、彼をして衣色の遂に壞せるを知らしむ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、「應に爾すべからず。」見ば、應に倒易を爲すべし、若くは語げて知らしめよ。」彼比丘、染衣し竟るも、釜、梡滿、銅瓶、瓮器、钁斧斤、繩綫、伊梨延陀耄羅、耄耄羅を舉せず、便ち捨て去る。佛、言はく、「應に爾すべからず、應に收舉し、然る後去るべし。若し餘人索めば、應に與ふべし。」彼染衣し竟れるも、染處を掃除せず、地をして不淨ならしむ、佛、言はく、「應に爾すべからず。應に掃除し已りて去るべし。」彼新衣を著けて地を掃へば、塵坌もて汚れたり。佛、言はく、「應に新衣を著くべからず。應に故者を著くべし。若し私衣無くんば、應に僧衣を著くべし。」彼逆風に掃けるに、塵來つて身を坌せり。佛、言はく、「應に爾すべからず。應に順風に掃くべし。五種の掃地有り。大福德を得ず。逆風順風を知らず、掃地は滅跡せず、除糞せず、復、本處を掃帚せず。是の如きの五法有りて、地を掃ふも大福德を得ず。五法有りて大福德を得、逆風、順風を知り。地を掃へば跡を滅し、糞を除き、本處を掃帚す。是の如きの五法有つて大福德を得。若し上座、下風に在らば、應に語つて言ふべし。「小しく避けよ、我地を掃はんと欲す」と。我今諸比丘の爲に染衣の法を說きぬ。應に隨順すべし。若し隨順せざれば、應に如法に治すべし。法犍度具足し竟んぬ。

四分律卷第四十九

【一】ここには比丘の住する房舍について說く。第十九の犍度である。先づ比丘の住すべき房舍臥具の法を說く。

【二】迦蘭陀竹園の布施及び房舍建立。寄進を聽すを明す。

四分律 卷第五十 四分之一

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

房舍犍度初

(一)爾時、世尊、波羅捺に在したまふ。時に五人は座從り起ち、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して白して言さく、『世尊、我等は當に何等の房舍臥具にか住すべき。』佛、言はく、『阿蘭若處の樹下、若は空房、若は山谷窟中、若は露地、若は草苫草積の邊、若は林間、若は塚間、若は水邊、若は敷草、若は葉に在るを聽す。』時に諸比丘、枕無くして臥して患を得たり。佛、言はく、『石若は甎若は木もて、若は枕骸を作り、十種衣の中、若は一一の衣を以て枕を作りて用ふるを聽す。』

(二)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。摩竭王瓶沙、是の如きの念を作さく、『世尊、若し初めて來りて入りたまふ所の園を、便ち當に布施して僧伽藍を作るべし。』時に王舍城に迦蘭陀竹園有り。最も第一と爲す。時に世尊、王の心念を知りたまひ、卽ち迦蘭陀竹園に往きたまふ。王、遙に世尊の來るを見たてまつり、卽ち自ら象より下り、象上の褥を取り、疊んで四重敷と爲し已り、佛に白して言さく、『願くば此座に坐したまへ。』世尊卽ち座に就

いて坐したまふ。時に瓶沙王、金の澡瓶を提へ、水を授けて佛に與へたてまつり、白して言さく、『此王舍城の迦蘭陀竹園は最も第一爲り。今、世尊に奉施せん。願くば慈愍の故に爲に納受したまへ。』佛、王に告げて言はく、『汝、今此園を以て佛及び四方僧に施さんとす。何を以ての故に。若し是れ佛の所有なり。若は園園の物、若は房房の物、若は衣鉢坐具針筒、一切諸天世人魔王梵王沙門婆羅門も、能く用ふる者無けん。應に恭敬すること塔の如くなるべし。』王、即ち佛に白して言さく、『大德、此迦蘭陀竹園を以て佛及び四方僧に布施したてまつる。慈愍の故に我爲に納受したまへ。』時に世尊、此偈を說いて、而も之を勸喜したまふ。

園及び果樹を施し、橋船を以て人を渡し
曠路に泉水を施し、幷に房舍を施す者
是の如きの諸人等は、晝夜に福增益せん
持戒樂法の者、此人は善道に生ぜん

時に王瓶沙、頭面に佛足を禮し、却つて一面に坐す。世尊、王に種種の方便もて說法を爲したまひ、歡喜を得しめたまふ。王、佛の說法を聞いて歡喜し、座より起ちて佛を禮して去りぬ。時に諸比丘、淸旦に耆闍崛山より王舍城の中に來り、大長者有り、見已つて問うて言はく、『大德、何處に在りてか宿れる。』答へて言はく、『山窟の中、水邊、樹下、石邊、若は草上に在り。』長者問うて言はく、『房舍無きや。』答へて言はく、『無し。』『若し房を

作らば得るや不や。』比丘答へて言はく、『世尊、未だ房舍を作るを聽したまはず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『房舍を作るを聽す。』爾時、長者、佛が諸比丘に房舍を作るを聽したまふと聞き、即ち耆闍崛山に於て六十の別房を作る。一切の所須を皆具足せしめ、佛及び僧に明日の食を請ひ、並に房舍を施す。即ち其夜に於て種種多美の飮食を辦じ、明日往いて時到れるを白す。世尊清旦に衣を著け、鉢を持し、大比丘千二百五十人と俱に、大長者の家に往き、座に就いて坐す。時に長者、手もて自ら種種多美の飮食を斟酌し、皆飽足ならしむ。食し已つて鉢を捨し、金瓶水を取つて世尊に授け、佛に白して言さく、『我耆闍崛山に於て、六十房舍を作り、一切の所須皆具足せしむ。福德の爲の故なり。大祠の爲の故なり。善道に生ぜん爲の故なり。今以て佛及び四方僧に奉上す。願くば慈愍の故に納受したまへ。』時に世尊、即便ち之を受け、此を以て勸喩せんとし、之を勸喩したまふ。

　寒熱を障がんが爲の故に、及以び諸惡獸
　蚊虻諸蜂蟲も、亦以て疾雨
　暴疾諸惡風を障ぐ、是の如きは障翳たるを得ん
　持戒して毀缺無く、佛法を勤修す
　堅しと爲し、樂しと爲すが故に、禪定分別觀行り
　房舍もて衆僧に施すは、世尊は第一と說く

爾時、王舍城の長者、更に卑床を取り、世尊の前に在りて坐す。世尊、無數の方便もて

【三】更に房舍臥具等の作法を説く

爲に開化說法したまひ、歡喜を得しめたまふ。長者の爲に開化說法し已り、座より去りたまふ。時に王瓶沙、世尊が衆僧に房舍を作るを聽したまふと聞き、迦蘭陀竹園に於て大講堂を作ること、王の住殿の如く、一切の所須を供給具足せんと欲す。佛言はく、『作るを聽す。』時に檀越有り、僧の爲に樓閣舍を作らんと欲す。佛言はく、『作るを聽す。』時に檀越有り。僧の爲に毘摩那房を作らんと欲す。佛言はく、『作るを聽す。』時に檀越有り、僧の爲に如象形房を作らんと欲す。佛言はく、『作るを聽す。』檀越有り、僧の爲に種種の房を作らんと欲す。佛言はく、『作るを聽す。』

(二)時に諸比丘、房を作らんと欲す。佛言はく、『作るを聽す。作房法に隨つて、所須の一切を與ふるを聽す。』房を作り竟り、若は地に塵有りて泥有るべし。敷無きに臥して病を得たり。佛言はく、『伊梨延陀耄羅耄耄羅毛氀十種衣の中、若は一一の衣を以て地に敷くことを作すを聽す。若し故に病有らば、床を作るを聽す。五種の床有ること上の如し。』彼床を織らんと欲す。佛言はく、『織るを聽す。』二種の繩、皮繩と髮繩とを除き、餘の繩を用て作れ。若し繩足らざれば、繩もて床陛を穿ち疎に織るべし。』彼床に敷無く臥して病を得たり。『褥を作るを聽す。』彼何の物を以て作るを知らず。佛言はく、『草もて作り、若は毳、若は劫貝もて作り貯ふるを聽す。若し褥小なれば、應に張縫して床の四邊に著くべし。若し褥の緣破裂しなば、應に補治すべし。若し貯聚して一處にあらば、應に縫總すべし。若し褥垢膩なれば、應に重褥を作すべし。若し重膩つけば、應に臥氈を作りて上を覆

ふべし。』時に諸丘丘、枕無し。佛、言はく、『作るを聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『若は四方、若は圓、若は三角にせよ。』爾時、王舍城の衆僧多く舍瓮麻を得たり。諸比丘疑うて敢て受けず。佛、言はく、『受くるを聽す。』用て繩牀繩、木牀繩を作せ。若し織らば褥の表裏と作せ。若は地敷と作し、若は繩を作り、若は褥貯を作れ。』時に諸比丘、跋摩草繩を得て牀を織れり。佛、言はく、『受くるを聽す。』時に諸比丘、蛇蠍蜈蚣諸毒蟲有る屋に入る。未離欲の比丘見て驚く。佛、言はく、『支牀脚有るを聽す。』時に六群比丘、高支を作れり。佛、言はく、『應に高支を作るべからず。大高なること應に高さ尺五若は一搩手なるべし。』時に比丘に衣有るも、牢堅安處無し。佛、言はく、『應に疊んで頭邊若は背後に置いて臥すべし。』輾側して衣上に墮つ。佛、言はく、『繩上若は龍牙杙上、常に安じ、若は衣架を作りて安ずるを聽す。』彼常所著衣と不著衣とを一處に在りしに、常所著衣を取る時亂る。佛、言はく、『應に常所著衣と不著衣とを共に一處に安ずべからず。』彼鉢革屣囊針筒油器を持して一處に置けり。餘比丘見て之を惡む。佛、言はく、『鉢囊針筒は一處に置き、革屣囊油器を共に一處に著けよ。』時に諸比丘、房裏に闇を患ふ。佛、言はく、『燃燈を聽す。』油を須ひんには油を與へ、燈炷を須ひんには炷を與へ、盛油器を須ひんには器を與へよ。』燈を持するも何處に置くやを知らず。佛、言はく、『若は木床若は繩床角頭若は瓶上に著け、若は壁龕の中に著くるを聽さん。』蛾子の油を飲まんを患ふれば應に障ぐべし。若し燈不明なれば、應に炷を出して高からしむべし。油もて手の

汚るるには箸を作るを聽す。燒箸を患へんには鐵もて作るを聽す。』彼房に戸無し、堅牢ならず。賊牧牛羊人有り。比丘の衣鉢針筒坐具を取りて去る。佛、言はく、『戸を作るを聽す。戸樞を須ひて作るを聽す。若し戸裏の臭氣を患ふれば、戸扇を穿つて孔を作り、氣を出すを聽す。蛇蝎蜈蚣毒蟲の孔より入るを患へんには、扉板障戸を作るを聽す。』關鑰無し。賊放牛羊人有り。比丘の衣鉢針筒坐具を取つて持ち去る。佛、言はく、『關鑰を作るを聽す。』何處に在りて安ずるやを知らず。佛、言はく、『若は邊に在り、若は上に在り、若は下に在れ。』云何が開くやを知らず。佛、言はく、『孔を開くに曲拔を作り、若は鈎を作るを聽す。若し闇を患ふれば、牖にて開くを聽す。』彼牖に障無し。賊及び放牛羊人、比丘の衣鉢針筒臥具を取る。佛、言はく、『牖扇板障を作るを聽す。』云何が作るやを知らず、佛、言はく、『若は方に作り、若は圓に作り、若は象耳形に作れ。』夜は蝙蝠を患ひ、晝は飛鳥の入るを患ふ。佛、言はく、『籠疏障を織作し、若は牖欞子を作るを聽す。』時に牖に關居無し。賊及び放牛羊人、比丘の衣鉢針筒坐具を取りて去る。佛、言はく、『關居を聽す。』彼犯戒比丘、繩を挽いて牖を開き、比丘の衣鉢針筒坐具を取りて去る。佛、言はく、『扂に橫楔を安ずるを聽す。』時に六群比丘、私に衆僧の臥具を用ふ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に私に衆僧の臥具を用ふるべからず。』幖幟を作るを聽す。』何の幖幟を作るやを知らず。佛、言はく、『摩醯陀羅像を作り、若は捲像を作り、若は蒲桃蔓像を作り、若は五色を作り、若は蓮華を作り、若は名字を作るを聽す。』時に六群比丘、方に幖幟を作らんと

し、若は半月像を作り、若は圓標幟を作る。彼如日光標幟を作り、彼如麥根標幟を作り、彼如一片葉像を作り、彼半形像標幟を作る。佛、言はく、『隨に爾すべからず。如水滯灑地標幟を作り、牛屎摸標幟を作り、輪標幟を作るを聽す。』彼、房中の定臥具を移して餘處に著けぬ。佛、言はく、『隨に移すべからず。應に名字を作りて言ふべし。是は某甲の房臥具と。』時に比丘有り、少沙彌有り、房中に隔障を安ぜんと欲す。佛、言はく、『作るを聽す。』後内房を作らんと欲す。佛、言はく、『作るを聽す。戸を須ひんには作るを聽し、壁を須ひんには壁を作るを聽し、半壁を用ひんには作るを聽す。』大床を作ることを須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。小床を須ひんには作るを聽し、縄床を須ひんには作るを聽し、小縄床を須ひんには作るを聽し、獨坐床を用ひんには作るを聽し、枕を須ひんには枕を與へ、地敷を用ひんには地敷を與へよ。』時に比丘有り。房を作るに四邊に簷を出し、上に欄楯を安せんと欲す。『作るを聽す。一切の作房に所須なるは與ふるを聽す。』時に布薩日に徒侶多く集る。堂小にして相容受せず。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『大作を聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『若は四方、若は圓、若は長に作り、若は兩坊、若は三坊、若は四坊に作るを聽す。大堂を作らば、所須の一切は應に與ふべし。』時に堂内の人、各一床なれば相容受せず。佛、言はく、『若し大三臈者なれば共に一床に坐するを聽す。若し坐するが故に受けずば、應に長床、若は長枕を作るべし。若し復受けずんば、應に縛草もて座を作るべし。』縛草もて座を作り已つて便ち衣を破る。佛、言は

く、『應に軟草を以て邊に纏ふべし。若し故に復受けざれば、應に泥漿を以て地を塗ひ、若は沙を布き、若は草樹葉もて地に敷いて上に坐すべし。』彼女人と倶に草上に在り。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼女人と共に衣を敷けり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼女人と共に倶に衣上に在り。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼女人と共に石上に上る。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し上石の一人も動かすこと能はざれば上るを聽す。』彼女人と共に船に上りて疑ふ。佛、言はく、『直に渡らんには、若は坐し、若は立ち、若は臥せんを聽す。』時に諸比丘、露地に經行す。風雨日曝を患ひて患を得たり。佛、言はく、『經行堂を作るを聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『長行に作るを聽す。堂を作らば所須の一切を給與せよ。』時に彼上座老い、病羸なるに頓に經行せる時地に倒る。佛、言はく、『繩索もて兩頭を繋け、索に循つて行くを聽す。』索を捉へて行くに、手軟く手を破る。佛、言はく、『捲若は竹筒を作るを聽す。繩を以て筒を穿ち手もて提へて循行せよ。經行の時疲極しなば、兩頭もて安床するを聽す。』時に比丘、脚を天雨に洗ふに、新染衣に雨して色壞れたり。佛、言はく、『應に別に洗脚處を作るべし。彼水盆を須ひんには水盆を與へよ。水瓶を須ひんには水瓶を與へよ。洗脚石を須ひんには石を與へ、坐具を須ひんには坐具を與へよ。』彼脚を天雨もて洗へば、泥は脚を汚し、衣坐具を汚せり。佛、言はく、『石若は甎若は木を以て道を作るを聽す。』爾時、耆闍崛山の中は水を去ること遠し。佛、言はく、『渠を作ることを聽す。』作る時、渠の崩決せんこ

【爾時等】給孤獨園の布施について

とを患ふ。佛、言はく、『石若は甎若は木を以て兩邊を障ふるを聽す。若は寺內に池を作るべし。若し池邊崩決せば、石若は甎若は木を以て四邊を障ふるを聽す。上に應に屋を作つて覆ふべし。若し池邊、泥を患へば、應に石若は甎若は板若は碎石を安ずべし。』小兒の水に墮せんを患ふ。佛、言はく、『欄を作るを聽す。』彼池水熱し。佛、言はく、『瓶に盛りて、晝日は內屋中に、夜は置いて外に在るを聽す。若し屋內に泥を患へば、別に安水屋を作るを聽す。若し地泥にして脚を汚せば、石若は甎若は階石を安ずるを聽す。彼水器を須ひんに應に與ふべし。』彼寶を用て器を作る。佛、言はく、『應に寶を用ふべからず。應に鐵若は銅若は瓦を用ひて作るべし。』彼水器の安處無ければ破壞せり。佛、言はく、『應に水屋中に別に架を作つて安ずべし。』時に衆僧、貝を得たり。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』復、安處無し、佛、言はく、『水器と共に一處に安ずるを聽す。』爾時、世尊、王舍城舍衞國に在したまふ。居士有り、須達多と名く。常に好んで孤窮乞兒に給施せり。遂に行に因つて更に名と爲し、給孤獨食と字す。彼王舍城の中に於て田業有り。年年舍衞國より王舍城に至り、田業を按行す。王舍城の中に長者有り。是れ其親厚なり。是長者は自ら堂舍を莊嚴し、佛及び僧に明日の食を請はんと欲す。時に給孤獨食、長者の家に往く。彼長者の常法は、若し給孤獨食の來る時は、輙ち起つて迎逆し、請うて與に坐を敷く。而も此日亦起つて迎へず、請うて坐せしめず。但自ら堂舍を莊嚴して佛及び僧の爲にす。時に給孤獨食既に至り已つて、長者に問うて言はく、『堂舍を莊嚴して何の所作をか欲する

や。婦を娶らんと欲する爲か、王を請せんと欲する爲か。大祠を設けんと欲する爲か。』長者報じて言はく、『我婦を娶るに非ず、亦王を請ぜず。我大祠を設け、佛及び僧千二百五十人を請じて倶にせんと欲す。彼沙門瞿曇は是の如きの大名稱有り。號して如來無所著等正覺明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と曰ふ。』給孤獨食問うて言はく、『審に是れ佛なりや。』答へて言はく、『審に是れ佛なり。』再三問ふも亦再三答ふ。審に是れ佛なりと。時に給孤獨食、再三問ひ已りて問うて言はく、『佛、何處に在りや、我今往いて問訊せんと欲す。』長者答へて言はく、『佛、今迦蘭陀竹園の中に在りて住したまふ。』時に給孤獨食、仰いで日を看、是の如きの念を作さく、『今日世尊を見たてまつるは時に非ず。明日乃ち往くべし』と。時に給孤獨食、即ち家に還り佛を念ずること心に在りて眠る。時に異天神有り。是れ給孤獨食が昔日の宗親なり。慈愍の故に、利益の故に、是の如きの念を作さく、『今給孤獨食、汝、世尊を見んと欲するに留難有るも而も佛を見ざること莫れ』と。彼即ち神力を以て闇を滅し、忽然として大明なり。時に給孤獨食、眠より覺めて明を見、是れ晝日なりと謂ひ、即ち往いて尸呵城門に趣く。時に彼門神、給孤獨食を見るに、世尊を見んと欲するに留難有ること無し。我今寧ろ開門すべしと。即便ち門を開く。時に給孤獨食、尸呵門を出で已る。時に彼神、還神力を攝するに、明曉即ち滅し、忽然として闇冥なり。時に給孤獨食、恐怖して心驚き毛竪す、將に怨家の有りて來り、我を害せんとするやを恐る。時に彼門神、給孤獨食の恐怖して心驚けるを見、即ち慰喩して言はく、

【[illegible]】かんむりのこと。

『恐怖すること莫れ、恐怖すること莫れ』と。即ち偈を說いて言はく、
　設し馬百匹、及與び百金の纓を以てし
　馬車百乘有り、童女百人有り
　七寶もて瓔珞と爲し、雪山の百の白象有り
　象に皆六牙有り、並に大聚金
　及び紫磨金沙を以てし、王及び王の供具
　王所乘の調象、是の如きを以て布施すとも
　一歩を行くの福は、十六も一を得ず。
長者但前行せよ。前行せば利益有らん。』給孤獨食問はく、『汝は是れ誰ぞ。』答へて言はく、『我は是れ伺呵神ぞ。』彼是念を作さく、『未曾有なり。天神乃ち我を安慰す。』時に給孤獨食、即ち迦蘭陀竹園の中に往く。時に世尊、露地に在りて經行したまふ。遙に給孤獨食の來るを見たまひ、本處に還つて座を敷いて坐したまふ。諸佛の常法なる圓光は身を照せり。時に給孤獨食、遙に世尊を見たてまつるに、顏貌端正、諸根寂靜に、上第一を得、諸根を調伏したまふ。堅固なること猶し大龍の若く、亦澄淵の如く清淨にして穢れ無し。見已つて敬心を生じ、信敬心を以て前んで佛所に詣り、白して言さく、『安眠せりや不や。』世尊答へて言はく、『世の安眠の如きは、我則ち彼に異る。』時に即ち偈を說いて言はく、

一切皆安眠せば、梵行に涅槃を得ん
若し欲を犯さざれば、諸縛も解脱を得
一切の愛已に盡き、熱惱を調伏し
息滅して安眠を得ば、身心倶に寂滅なり。

時に給孤獨食、前んで佛足を禮し、却て一面に坐す。時に世尊、給孤獨食の爲に種種の方便もて開化説法し、歡喜を得しむるに、即ち坐上に於て法眼淨を得、法を見、法を得、增上果を得、厭患心を生ぜり。世尊に白して言さく、『我今、佛法僧に歸依したてまつり、佛の優婆塞と作らん。自今已去、盡形壽に殺生せず、乃至飲酒せず。唯願くば世尊、衆僧と倶に、我夏安居九十日の請を受けたまへ。』佛、言はく、『我已に王瓶沙の請を受けぬ。』即ち復白して言さく、『願くば來年の請を受けたまへ。』佛、言はく、『我已に王瓶沙の請を受けぬ。』復白して言さく、『大德、願くば後年の請を受けたまへ。』佛、報じて言はく、『若し是の如きの處、淸淨にして憒鬧有ること無く、諸の惡獸無く、人に絶せる林に坐禪するを得べき有らば、如來は當に是の如きの處に住すべし。』即ち佛に白して言さく『世尊、我已に之を知れり。自ら當に時を知るべし。唯願くば世尊、衆僧と我明日の請食を受けたまへ。』時に世尊、默然として請を受けたまふ。給孤獨食、坐より起つて前んで佛足を禮し、遶り已つて去りぬ。時に王瓶沙、給孤獨食が佛及び僧に明日の食を請へりと聞き、即ち信を遣して語つて言はく、『汝に僑客在るも、此れ衆僧、既に多きこと千二百五十人

なり。汝、供を設くるを須ひざるべし。我當に汝が爲の故に食を設くべし』と。時に即ち人を遣し王に答へて言はく、『此れ便ち供養の爲に已に須ひず。我自ら當に辦ずべし。』時に摩竭大長者、給孤獨食が佛及び僧に明日の施食を請へりと聞き、即ち其所に往いて語つて言はく、『汝に僑客在り。此衆僧旣に多し。汝、供を設くることを須ひざるべし。我當に汝が爲に之を辦ずべし。』彼即ち答へて言はく、『長者、此れ便ち供養の爲にし已れば須ひざれ。我自ら當に辦ずべし。』給孤獨食、即ち其家に還り、夜に種種多美の飲食を辦じ、夜過ぎ已り、淸旦に往いて、時の到れるを白す。世尊、衣を著け鉢を持し、千二百五十人の比丘僧と倶に、給孤獨食の家に往き、座に就いて坐したまふ。時に給孤獨食、手もて自ら種種多美の飲食を斟酌して佛及び衆僧に供養し、飽滿なるを得しめたり。食し已つて鉢を捨し、更に卑床を取つて佛前に於て坐す。時に世尊、無數の方便もて給孤獨食の爲に方便說法開化し、歡喜を得しめたまひ、說法を爲し已つて座より起つて去りたまふ。時に給孤獨食、王舍城より舍衞國に還歸す。彼村落城邑に至り、處處に宣令して是の如きの言を作さく、『空處に於て園果を種植し、並に池井を設け、及び橋船を安ず可し。佛、已に出世したまひ、今我請を受けたまひ、舍衞國に於て夏安居したまふ。當に此道に從つて舍衞國に至るべし。汝等をして福を得ること無量ならしめん』と。舍衞國に至り已つて、是の如きの念を作さく、『今此に何處か、近からず、遠からざる行來遊觀する有り、其地平博にして晝は衆閙無く、夜は音聲無く、蚊虻蠅蜂毒螫の屬有ること無きや。我當に之を買うて佛

の爲の故に僧伽藍を立つべし。」即ち是念を作さく、『彼祇陀王子は好園有り。舍衛國に於て、近からず、遠からず、行來遊觀し、其地平博にして晝は衆閙無く、夜は音聲無し。亦蚊虻毒螫の嬈無し。我今寧ろ祇陀王子の所に往いて、求索して之を買ふべし。』彼、即ち王子の所に往き、白して言さく、『佛、已に出世したまふ。天今知るや不や。已に我請を受け、舍衛國に於て夏安居したまはんとす。此園を以て之を賣るべし。我當に百千の金錢を與ふべし。』彼言はく、『賣らず。』復更に重ねて白すること上の如し。『願くば我に園を與へよ。」二百三百四百千の金錢を與ふべし。』彼言はく、『汝、若し金錢を以て側布して地に滿て、間無からしめんとも我亦與へざらん。』給孤獨食言はく、『汝已に價を決せり。』便ち之を受く可し。』王子言はく、『云何が價を決せる。』答へて言はく、『向に金錢を以て側布して地に滿て間無からしめばと言へるは、豈價を決するの言に非ずや。』天便ち王が昔日の誓制を看る可し。』彼即ち王の誓制を看已りて是言を作さく、『便ち價を決せりと爲す』と。即ち語りて言はく、『長者、汝が意に隨へ。』時に給孤獨食、家に還り、人に勅して多くの金錢を出さしめ、祇陀園の中に側布せしむ。餘の少地有り。布金未だ遍からざるに、祇陀は見已つて、便ち是念を作さく、『此は是れ常人に非ず。亦常福田に非ず。乃ち給孤獨食をして之を爲し、珍寶を惜まざらしむること是の如し。』即ち言はく、『長者、汝止めよ、復布金すること勿れ。餘地は我自ら世尊に奉上せんと欲す。』給孤獨食言はく、『便ち意に隨ふ可し。』

【四】房舍に於ける席次禮拜の次第を說く。

爾時、世尊、王舍城より千二百五十の比丘と俱に、人間に遊行して跋闍國に至りたまひ、復轉じて毘舍離に詣りたまふ。時に六群比丘、佛より先に前んで往き、房舍を取る。和尙同和尙阿闍梨同阿闍梨の爲に、知識親厚の爲の故なり。卽ち舍利弗は目連と俱に後より至る。佛言はく、『此は是れ誰の房なる。』六群比丘、言はく、『是れ我和尙同和尙阿闍梨同阿闍梨知識親厚の房なり。』舍利弗、目連は房宿を得ず。外捶の上に宿る。舍利弗、目連、夜を過ぎ已つて、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に住せり。世尊知りたまへども、而も故に問ひたまはく、『舍利弗、目連、臥起安樂なりや不や。』答へて言はく、『安樂なり。』世尊、問うて言はく、『何處に在りてか宿れる。』答へて言はく、『外捶の上に在り。』『何事を以ての故に爾るや。』卽ち具に因緣を以て佛に白す。爾時、世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、『汝等謂ふに、誰か應に第一坐、第一水、第一食を受け、起つて迎逆、禮拜恭敬し、善言し、問訊すべきや。』或は大姓出家の者と言ふ有り。或は顏貌端正なる者と言ふ有り。或は阿蘭若者と言ふ有り、或は乞食者と言ふ有り。或は一坐食者と言ふ有り。或は糞掃衣者と言ふ有り。或は餘食法を作して食せざる者と言ふ有り。或は一摶食者と言ふ有り。或は塚間者と言ふ有り。或は露坐者と言ふ有り。或は樹下者と言ふ有り。或は常坐者と言ふ有り。或は隨坐者と言ふ有り。或は三衣者と言ふ有り。或は能唄者と言ふ有り。或は多聞者と言ふ有り。或は法師者と言ふ有り。或は持律者と言ふ有り。或は坐禪者と言ふ有り。佛、諸比丘に告げたまはく、『汝等、善く聽け、應に與ふ

べからざるを與ふべし。乃往過去世時に、三親友有り。象と獼猴と鵽鳥となり。一尼拘律樹に依つて住せり。彼是念を作さく、『我等共に住し、應に恭敬を興さず、更に相輕慢すべからず、寧ろ年の大小次第尊卑を推して更に相恭敬す可し。若し年長者には、當に尊重し恭敬し供養すべし。』是の如きの法を作し已つて、林間に依つて共に住せり。獼猴と鵽鳥とは共に象に問うて言はく、「汝、事の近遠を憶へりや。」象の言はく「我憶ふに、小時に此尼拘律樹は、我行く時我臍に觸れたり。」象と鵽鳥と獼猴に問うて言はく、「汝、事の近遠を憶へるや。」獼猴答へて言はく、「我憶ふに、小時に此尼拘律樹は手及び頭に擧れり。」象、獼猴に語らく、「汝が生年は我より多し。」象、獼猴と共に鵽に問うて言はく、「汝、事の近遠を憶へるや。」答へて言はく、「我憶ふに雪山王の右面に大尼拘律樹有り。我彼に於て果を食し來り、此に便ち出して即ち此樹を生ぜり。」彼是念を作さく、「鵽の生年は我より多し」と。時に象は即ち獼猴を以て頭上に置き、獼猴は鵽を以て肩上に置き、共に人間に遊行せり。村より村に至り、城より城に至る。而も說法して言はく、「其れ長老を敬ふ者有らば是人は能く法に住し、現世に名譽有り、將來に善道に生ぜん。」爾時、鵽は是の如きの法を說き、人皆隨順し、法訓流布せり。汝等、我法律の中に於て出家し、應に更に相恭敬すべくんば、是の如きの佛法は流布することを得可し。自今已去、長幼に隨ひ、恭敬禮拜し、上座を迎逆し問訊すべし。』時に諸比丘、佛教を聞き、諸比丘は長幼相次ぎ、上座を恭敬せり。彼白衣を禮拜して言はく、『汝、生年我より長ぜり』と。佛、言はく、

『應に白衣を禮すべからず。汝等、應に禮すべく、禮すべからず。一切の女人は應に禮すべからず。前に大戒を受けし者は後に大戒を受けし者を禮すべからず。言は邊罪を犯し、比丘尼を犯し、賊心もて受戒し、二道黃門を壞し、父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心もて佛身より血を出し、非人畜生二根、若は被擧、若は滅擯、若は應に滅擯すべき、一切の非法語は應に禮すべからず。何等の人をか應に禮すべし。少沙彌尼は應に大沙彌尼、沙彌、式叉摩那、比丘、比丘尼を禮すべし。是の如き等の人、塔は應に禮すべし。若し少年沙彌は、應に大沙彌、沙彌尼、式叉摩那、乃至比丘を禮すべし。及び塔を一切應に禮すべし。小式叉摩那は應に大式叉摩那比丘尼比丘を禮すべく、及び塔を禮すべし。年少比丘尼は應に大比丘尼比丘を禮すべし。及び塔も亦應に禮すべし。小比丘尼は應に大比丘尼を禮すべし。大比丘塔も亦應に禮すべし。一切の諸天世人諸魔梵王沙門婆羅門、皆應に如來世尊を禮すべし。塔も亦應に禮すべし。』世尊に既に是教有り。應に塔を禮すべしと。彼便ち白衣の塔廟を禮せり、佛、言はく、『應に白衣の塔廟を禮すべからず。』彼既に白衣の塔廟を禮することを得ず。便ち左に遶りて行くに塔廟神瞋る。佛、言はく、『本の所來處に隨つて行け、故に左に遶りて行くべからず。』諸比丘、是の如きの念を作さく、『沙彌は應に生年を以て次第と爲すべきや。當に出家年を以て次第と爲すべきや。』佛、言はく、『應に生年を以て次第と爲すべし。若し生年等しき者は、應に出家年を以て次第と爲すべし。』彼比丘、先に至り、後に比丘有りて來ること大なり。一夜に前比丘を移す。佛、

【五】作房並に房中の威儀を說く。

言はく、『應に移すべからず、亦起つべからず。中間に在りて坐するを聽す。』既に中間に在りて坐す。復更に相移動し、衆をして亂鬧ならしむ。佛、言はく、『後に來れる者は下坐に在るを聽す。』既に下坐に在り。乃ち白衣の下坐に在り。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼復沙彌の下坐に在り。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に大比丘の下座に在るべし。』彼後に安居して大戒を受け、數以て歳と爲すに及ばず。佛、言はく、『應に爾すべからず。和尙阿闍梨は應に受戒の時節を敎ふべし。是の如きの敎を作せ。若は冬、若は春、若は夏に、汝若干日の若は一月、若は半月、若は一日、若は前食、若は後食時、乃至草影時を得よ。』六群比丘、白衣の家に在り、上座の來るを見るも起たず、此れ僧地に非ずと。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に起つべし。』水邊樹下石邊草上舡上に在りて起たず。上座を避けて言はく、『此れ僧地に非ず』と。佛、言はく、『應に起つべし。』

(五)爾時、居士有り、僧の爲に房を作るも、而も人の住する無し。彼是の如きの言を作さく、『大富長者は多饒の財寶もて僧の爲に房を作り、沙門釋子は便ち中に在りて住す。我曹貧窮なり。誰か當に此に住すべき。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『衆僧、應に比丘の白二羯磨を與ふべし。應に是の如きの與を作すべし。衆中に堪能羯磨者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。大德僧聽け。今僧、此某甲房を以て某甲比丘に與へて料理せしむ。若し僧時到らば、僧ために忍聽せよ。白是の如し。大德僧聽け。此某甲房を某甲比丘に與へて料理せしむ。誰か諸長老の、僧の此某甲房を以て某甲に與へて料理せしむるを忍ばん者は默

忍せよ。誰か忍ばざる者は説け、僧已に忍ばば、某甲房を以て某甲比丘に與へて料理せしむることを覚る。僧、忍んで默然たるが故に是事是の如く持つ。時に諸比丘、房を作らんと欲す。佛、言はく、『聽す。』彼地を平かならしめんと欲す。佛、言はく、『聽す。若し石樹根棘刺有らば應に却くべし。若し坑渠處低下處有らば、應に塡平にすべし。若し鹵水有らば、應に堤障を設くべし。若し地に主有るを恐れ、或は餘言者を致さば、應に決了分明なるべし。若し大樹株若は石有らば、應に堀出すべし。若し出すこと能はざれば燒き去るべし。若し去るべからざれば、燒き已りなば、水若は苦酒を以て澆ぐべし。若は石を以て推打して破出せよ。若し破し難くば、鐵を以て推打して破出せよ。若し復出すべからざる者は、邊に於て大坑を作りて深く埋めよ。』彼平地を欲し、耕すべきことを已り、之を磨平せるも、誰か當に平にすべきやを知らず。佛、言はく、『若は比丘、若は沙彌、若は守僧伽藍人、若は優婆塞、彼墼を須ひて作るを聽す。若は自ら作し、若は人をして作さしめよ。彼墼摸を須ふれば與ふるを聽す。』若は泥、墼摸に著けり。佛、言はく、『應に弊物を以て水中に内にし已つて四邊を拭くべし。』墼を作す處に草有り。佛、言はく、『應に無草處に在るべし。若し墼燥かずば應に反すべし。若し反す時草を斷つも犯せず。墼齊しからざれば、應に刻りて齊しからしむべし。若し燥かば應に之を積むべし。若し天雨の漬かれば、應に上を覆ふべし。若し風、上覆を吹かば、應に木石を以て上を鎭すべし。若し牛羊畜生の上覆草を食はんを患ふれば、應に泥を以てすべし。泥の上に彼戸を須ひんには應に戸を

與ふべし。』彼戶邊に於て龍蛇の像を作れり。佛、言はく、『應に是の如きの像を作るべからず。蒲桃蔓若は蓮華もて像を作るを聽す。』彼戶上に於て華像を作らんと欲す。『作るを聽す。』彼兵馬の像を作る。佛、言はく、『應に作るべからず。』應に紫色若は朱若は五種色を以てすべし。彼倚るに色脫す。佛、言はく、『應に倚るべからず。』彼上座老病比丘及び遠來比丘も倚らざれば身安からず。佛、言はく、『草葉樹皮十種衣の中を以て、一一の衣を以て背後に著き之に倚るを聽す。』彼比丘、晝日に多人處に脇を地に著けて眠る。諸居士見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は自ら覺悟せりと稱するも、而も自ら晝日に脇を地に著けて眠るや。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾るべからず。』彼上座老病遠來の比丘、晝日に眠らざれば疲極せり。佛、言はく、『房內に入り戶を閉ぢて眠るを聽す。』彼病人を驅遣す。佛、言はく、『應に病人を遣すべからず。亦去すべからず。』彼六群比丘、病に託して上座を避けず。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼病比丘、閤上大房中に在りて住す。大小便をもて唾汚穢し、臭處不淨なり。佛、言はく、『病比丘は應に閤上大房の中に在りて住すべからず。應に小房の中に在りて住すべし。若し別に小屋を作れるに、彼病比丘、大小便處に至ること能はず。佛、言はく、『近處に在りて坑を鑿り、大小便處に安ずるを聽す。若し房を出づること能はざれば、屋中に便器を安ずるを聽す。』若し起きて床を離るること能はず。佛、言はく、『床を穿ち孔を作り便器を下に著くを聽す。』彼房中に唾して、灑地を汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼上座

【六八】重ねて祇桓園について。

老病の比丘、數起つて疲極せり。佛、言はく、『唾器を作るを聽す。』彼多人住處に於て虱を捨し地に棄つ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼上座老病の比丘、數數起つて虱を棄つるに疲極せり。佛、言はく、『器若は氈若は劫貝若は弊物若は綿を以て拾うて中に著くを聽す。若し虱走り出でなば、應に筒を作りて盛るべし。』彼、寶を用て筒を作れり。佛言はく、『應に寶を用て筒を作るべからず。牙若は骨若は鐵若は銅若は鉛錫若は芊蔗草若は竹若は葦若は木を用て筒を作るを聽す。虱若し出でなば、應に蓋を作つて塞ぐべし。』彼寶を以て塞を作る。佛、言はく、『應に寶を用て作るべからず。應に牙骨乃至木を用て作るべし。安處無くば、應に縷を以て繫け、床脚の裏に著くべし。』時に比丘房を分てり。比丘有りて破壞せる房を得たり。彼是の如きの意を作さく、『或は我をして修治せしめんとする』と。即ち取らず。佛、言はく、『應に受くべし。力の多少に隨つて應に治すべし。』爾時、世尊、毘舍離より人間に遊行し、跋闍國を經て舍衞國に至りたまふ。千二百五十の比丘と俱なりき。

(六八)時に給孤獨食、世尊の彼より來つて舍衞國に至りたまふと聞き、即ち車に乘じて往迎す。遙に佛の來るを見、即ち下車し、前んで佛所に詣り、頭面に足を禮し、却つて一面に住す。時に世尊、無數の方便もて給孤獨食の爲に、種種說法開化し、歡喜を得しめ已る。世尊に白して言さく、『唯願くば、我明日の請食を受け、祇桓に於て宿りたまへ。』世尊、默然

として之を受けたまふ。時に給孤獨食、佛の受請したまへるを知り已り、禮を作して去り家に還り、卽ち其夜に於て種種肥美の飲食を辦じ、淸旦に往いて時到れるを白す。時に世尊、衣を著け鉢を持し、食堂に往詣し、座に就いて坐したまふ。給孤獨食、手もて自ら種種の美食を斟酌し、佛及び衆僧を供養したてまつり、滿足を得しむ。鉢を捨て金瓶を持し、水を授け已つて佛に白して言さく、『我此祇桓園を以て世尊に奉上せん。唯、願くば之を受けたまへ。』佛、言はく、『居士、汝、此園を持つて佛及び四方僧に奉る可し。何を以ての故に。居士、若は是れ世尊の園園物房舍房舍物衣鉢坐具針筒なり、便ち是れ塔廟なり。一切諸天世人沙門婆羅門魔梵も能く用ふる者無し。』卽ち敎の如く、園を以て佛及び四方僧に奉る。『唯願くば世尊、慈愍もて之を受けたまへ。』爾時、世尊、偈を說いて勸喩したまはく、

園に果樹を種殖し、若は船橋を設け
曠野に泉井を施し、及與び房舍を施す
是の如きの人等は、晝夜に福增益し
如法に常に持戒せば、後、善道に生ずることを得ん。

時に給孤獨食、頭面に足を禮し已り、却て一面に坐す。世尊、無數の方便もて種種に說法開化し、歡喜を得しむ。給孤獨食、法を聞いて歡喜し已り、足を禮して去りぬ。時に祇桓園には牛羊來入して禁限有ること無し。佛、言はく、『塹障を搆作せよ。』彼上座老病の

比丘、行ずる時度ること能はず。佛、言はく、『橋を作ることを聽す。』而も云何が作るやを知らず。『應に板若は木を以て作るべし。若は繩索を安じて連繫せよ。』上座老病比丘、橋を度る時、脚跌いて地に倒る。佛、言はく、『兩邊に索を安じ手もて捉へ、順にして度るを聽す。』若し索を捉ふるが故に地に倒る。『應に兩邊に欄楯を安ずべし。若し塹、牢からずば、應に重ねて籬障を作るべし。若し門無くば、門を作るを聽す。若し籬、堅牢ならざれば、應に牆を擣くべし。牆を作るに須ふる所の者、一切應に與ふべし。若し牢からざれば、應に重ねて樓閣を作るべし。』時に祇陀王子、祇桓の爲に大貴價重門を作らんと欲す。佛、言はく、『作るを聽す。』時に祇桓園樹好からず。佛、言はく、『三種の樹を種うるを聽す。華樹と果樹と藥樹となり。』時に上座、衆に知識せられたる比丘、舍衛に於て食し已つて祇桓に還り熱を患ふ。佛、言はく、『草若くは樹葉を以て障とするを聽す。十種衣の中の一一を障として蔭を作るを聽す。若し故に熱くば、階道の邊を循りて三種の樹を種うべきこと上の如し。』時に祇桓は水を去ること遠し。『渠を作り、水を通ずることを聽す。』渠の壞せんことを患ふ。佛、言はく、『草を以て遮するを聽す。若し草爛壞せば、復應に甎石若は木を以て遮すべし。若し復井を作らんには、井を作るの所須の一切を與ふるを聽す。若し出井泥器破るれば、木を以て四邊を壓し、器を持つて中に著くを聽す。若し故に破壞せば、毛縷囊を以て盛るを聽す。若し故に復破れなば、皮革を以て作るを聽す。若し絕斷せば、皮を以て作るを聽す。』比丘、作るに慣れざれば、手痛を患ふ。『輪を轉じ

て棄くを聽す。若し輪孔壞せば、鐵を以て作るを聽す。若し水還來つて井に入るを患ふれば、應に石若しは甎木を以て四邊を障ふべし。若し洗處の泥を患ふれば、應に甎石を安ずべし。若し小兒の井に墮するを患ふれば、應に木若しは甎石を以て、欄遮を作るべし。若し泥器を棄く繩斷じて井に墮しなば、應に鉤を以て鉤取すべし。』彼井索を安ずる處無し。佛、言はく、『井邊に近く架を作りて上に著くを聽す。』時に祇桓に浴室無し。佛、言はく、『作るを聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『若は四方若は圓若は八角なるを聽す。』彼屋前に在りて作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に邊屏處に在りて作るべし。』彼浴室の冷なるを患ふ。佛、言はく、『戸を作るを聽す。』煙を患ふ。『上に孔を開くを聽す。』闇を患へば、應に窓を開くべく、泥を患ふれば、應に石甎若しは木を以て浴床を作るべし。泥の脚を汚さんを患ふれば、應に石甎を以て、地を砌すべし。若し木頭蹉跌せば、應に鑿もて狗牙を作りて相挿すべし。』時に六群比丘、上座涼を得んと欲せば便ち戸を閉ぢ、熱を得んと欲せば、便ち戸を開く。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『衆僧の所欲に應隨して應に與ふべし。』彼六群比丘、先に浴室に入り、好處に在りて坐せり。上座後に來入するも處無し。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に隨次處に彼上座を坐せしむべし。』其空處に入らず。佛、言はく、『次座者は應に坐すべし。』煙、面を熏ず。『物もて面を遮するを聽す。』『頭熱を患ふ。』『覆ふを聽す。』背熱を患ふ。『遮するを聽す。』若は身汚臭ならば、泥を以て洗ふを聽す。』彼比丘疑うて、敢て香を以て泥中に著かず。佛、言はく、『著くことを

聽す。浴室の裏地、熱を患ふれば、應に澆いで冷かならしむべし。『彼白衣と共に浴す。更相ひに尾を看、某甲は長く、某甲は麤といふ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に白衣と共に浴すべからず。若し佛法僧を稱歎せん者と浴するを聽す。』時に諸比丘、衣を以て露地に著くに、天雨りて漬る。佛、言はく、『疊んで壁上龍杙上若くは衣架上に著くを聽す。』彼煙黑の、衣を汚すを患ふ。佛、言はく、『別に衣屋を作るを聽す。』彼露形もて露形者の爲に身を揩ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形者、不露形者の爲に身を揩ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼不露形者、畏愼して疑ひ、敢て露形者の爲に身を揩はず。佛、言はく、『聽す。』彼露形者、露形者の爲に剃髪す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼不露形者、露形者の爲に剃髪す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形して揚枝を嚼む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形もて手脚面を洗ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形にて食す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形にて大小便す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形者、露形者を禮す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形者、不露形者を禮す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形にて道行す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼露形にて經行す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に祇桓の浴室は水を去ること遠し。『渠を通じ井を鑿ることを聽すこと上の如し。若し水少ければ、應に大に渠を作るべし。』彼水を汲むに手痛を患ふ。『楔榫を安ずるを聽す。』彼水を何處に儲ふるやを知らず。『甕中に著くを聽す。』天雨を

被る時、衣服を澆濕するを患ふ。『井上に屋を安ずるを聽す。』時に比丘、露形にて水を汲む。婦女の來るを見て慚愧して便ち坐す。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘、泉若は渠若は池水の中に在りて浴せるに、時に龍女瞋嫌す。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。四種の覆障もて浴するを聽す。若は石牆壁障處、若は樹木草障處、若は水もて身を障へ、若は衣もて身を障ふるなり、彼上の三處に在りて洗浴する者、若し所須有らば、互に相取與するを聽す。衣を以て身を障ふる者は、一切如法にせよ。浴事を經營せんには作すことを得、若し水少くんば、應に大いに通水處を開くべし。若し水の漏下すること多きを患へんには、應に邊に在つて更に小漏處を作るべし。』諸比丘、露地に浴して患を得たり。佛、言はく、『別に小浴室を作るを聽す。若し地泥なるを患へんには、甎石若は木若は碎石若は沙を安ずるを聽す。若し故に泥なれば、應に決して水を去るべし。』時に諸比丘、露處に溫水せるに、天雨りて衣を濕せり。佛、言はく、『溫水屋を作るを聽す。』時に諸比丘、薪を露地に安ずるに、天雨りて濕せり。佛、言はく、『安薪屋を作るを聽す。』時に比丘有り、露地に煮食を看しに天雨りて衣を濕し、淨人の飲食器物を澆汚せり。佛、言はく、『淨食厨屋を作るを聽す。』時に諸比丘、白衣家に飲食を設けしが爲に、受請して道路を往くに、天雨に遇うて衣服を澆濕せり。佛、言はく、『聚落間に在りて別に僧伽藍處を安ずるを聽す。』時に諸比丘、露處に大小便す。婦人有つて之を見る。比丘疾疾に起ち、大便を竟らず遂に患を成ず。佛、言はく、『厠屋を作る

【七】然火の法を説く。

を聽す。』彼一大便處を安ず。便ずる時多人立待せり。佛、言はく、『應に衆多處を作るべし。若し戶の見るべきは應に障を作るべし。若し更相に看ば、應に隔障を作るべし。』彼上座老病の比丘、大小便せんに起つ時地に倒れたり。『邊に在りて欄架を安ずるを聽す。』彼處處に在りて大便を拭く。或は壁角に在り、或は石上に、或は草上に在り。佛、言はく、『應に爾すべからず。別に洗處を作るを聽す。』彼處處に小便し、地に泥汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に邊一處に在りて小便すべし。若し故に泥汚を患へんには、應に別に小便處を作るべし。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『地を堀りて坑を作り、下に行を安じ瓮を持つて上に著け、瓮底を開いて漏下せしめ、兩邊に木を安ずるを聽す。若し氣臭を患へんには蓋を作りて覆へ。』時に諸比丘、露地に經行せるに、蛇蝎蜈蚣百足有り。未離欲の比丘、見て恐怖せり。佛、言はく、『懸經行處を作るを聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『下に柱を竪て上に板を安じ木閣道を行け。若し風雨日曝を患へんには、屋覆を作るを聽す。

（七）爾時、世尊、拘睒彌に在り、六群比丘、好綵畫もて嚴飾せる房中に於て、火を然せるに、炙烟熏じ、房を汚し、臥具を汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘、冬月に寒を患ふ。『露地に火を燃して炙るを聽す。』露地坐に背冷を患ふ。『外に在て火を燃し、烟盡きなば、炭を持て屋に入らしむるを聽す。』若し相容受せずんば、應に別に燃火堂を作るべし。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『四方作若は圓若は長作を聽す。』彼處

處に胡竈を安ず。佛、言はく、『應に爾すべからず。當に中に在りて火爐を安ずべきを聽す。』時に諸比丘、有輪火爐を得たり。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』誰か當に推行すべきやを知らず。佛、言はく、『沙彌若くは比丘、若くは守僧伽藍人たれ。』彼比丘、吹火に慣れざれば、吹火して患を得たり。佛、言はく、『筒を作りて吹くを聽す。』彼寶を用て筒を作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。牙角骨若は銅鐵舍羅草筒、若は竹葦、若は木を用ひて作るを聽す。』若し筒口の燋げんを患へんには、鐵鍱を安じて竈中の薪火を上に墮應せんを聽す。若し燒手を患へんには、鉗を作れ。』彼寶を用て鉗を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。骨牙銅鐵木を用て作るを聽す。若し頭燒を患へんには、銅鐵鍱を安ずるを聽す。』彼聚火せんと欲せば、把堆聚を作れ、若し種火せんと欲せば、應に火坑を作りて火を安ずべし。若し火滅せんを恐れば、灰を以て上を覆へ。』時に諸比丘、冷水もて面を洗ふに、手脚もて冷を患ふ。佛、言はく、『煖水もて洗ふを聽す。』云何が煖にするやを知らず。佛、言はく、『澡罐に水を盛り、火邊に著けよ。若し澡罐多く、若し火邊に容れずんば、應に三𣗳枝瓶を安じ、水を盛り、上に著きて煖むべし。瓶大にして火を妨ぐれば、應に繩懸を作るべし。若し繩燒くれば、筒を以て繩を盛れ。若し筒燒くれば泥を以て泥せよ。』瀉水の時筒折れぬ。佛、言はく、『應に餘器を以て率取すべし。瀉水瓶中に行り、時に棄水を患へんには、應に瀉水筒を作るべし。若し懸繩斷ぜば、上に鐵鐶鈕を安ぜよ。』時に諸比丘、冬月に洗脚して冷を患ふ。佛、言はく、『應に澡盤洗脚器を安じ、屋裏に在て洗ふべし。

【八】非法座等について明す。

洗脚に須ゆる所は應に與ふべし。』時に比丘、早起して油を脚に塗り已つて、聚落に入りて乞食す。女人、足を接して禮するに汚るれば、手もて比丘の鉢を捉ふ。餘比丘見て之を惡む。諸比丘、佛に白す。佛、言はく『應に早起し油を脚に塗りて聚落に入り乞食すべからず。』諸比丘、脚劈破せり。『足跟足底に油を塗り、塗つて指奇に至るを聽す。』時に衆僧、一の重房を得たり。佛、言はく、『住するを聽す。』爾時、世尊、摩竭國より曠野城に至る。時に六群比丘、世尊の爲に、男女形像を以て文繡し、堂屋を莊校す。佛、言はく、『應に爾すべからず。餘の雜色禽獸の文を用ゆる者を聽す。』時に衆僧、兩房一戸重屋を得たり。佛、言はく、『住するを聽す。』爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。爾時、阿難、別房を得たり。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』

(八)爾時、羅睺羅、那梨林中に在りて住す。時に那梨に居士有り。人を勸化すること無し。自ら意を發して房舍を作り、羅睺羅に施す。時に羅睺羅、此房に住し已つて人間に遊行す。時に彼居士、羅睺羅の房に在りて住し已り、人間に遊行せりと聞き、便ち房舍を以て衆僧に施せり。爾時、世尊、摩竭提より人間に遊行し、那梨林中に至り、座を敷いて坐したまふ。時に羅睺羅、居士が房を以て衆僧に施せりと聞き、即ち世尊の所に往いて頭面に足を禮し已つて却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『那梨に居士有り。人を勸化すること無し。自ら發意して房を作りて我に施せり。我房に於て住し已り、出て人間に遊行せり。後、居士、即ち復房を以て衆僧に施せり。』佛、羅睺羅に告げたまはく、『汝、彼居士の所

一五一九

に往いて語つて、汝、將に我を見て、可呵事不清淨非沙門法若は口說、若は身行ること無からんとするやと言ふを聽す。』時に羅睺羅、世尊の敎を受け已つて、居士の所に往いて、具に居士に向つて如上の語を說けり。居士答へて言はく、『我、汝に可呵責事非沙門法若は口說若は身行の不清淨なる有ることを見ず。』時に羅睺羅、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『世尊、向に勅したまふ所もて、居士が爲に之を說けり。居士我に言つて、我、汝に可呵責事有ることを見ず。沙門法に於て亦不清淨なる、若は口說若は身行有ること無し」と言へり。』時に世尊、是因緣を以て比丘衆を集め、告げて言はく、『汝等善く聽け。非法施非法受非法住有り、如法施如法受如法住有り。云何が非法施非法受非法住なる。或は人有り、自心に喜樂あつて房を作り、一人に施し已つて復衆多人に施す。是を非法施非法受非法住と爲す。一人に施し已つて復以て僧に施すも亦是の如し。一人に施し已るに、僧破して二部と爲し、己が所同部に施與するも亦是の如し。一人に施し已つて異部に施與するも亦是の如し。或は人有り、自心に喜樂もて房を作り、衆多人に施し已つて復衆僧に施す。是を非法施非法受非法住と爲す。衆多人に施し已り、僧破して二部と爲し、己れが所同部に施すも亦是の如し。衆多人に施し已つて異部に施與するも亦是の如し。衆多人に施し已つて一人に施すも亦是の如し。房を作り僧に施し已り、轉じて餘人に施與するも亦是の如し。房を作り已つて己が所同部に施すも亦是の如し。房を作り已つて異部に施與するも亦是の如し。是を非法施非法受非法住と爲す。

【九】四方僧物について。

云何が如法施如法受如法住なる。或は人有り、喜樂もて自ら房を作り、一人に施す。是を如法施如法受如法住と爲す。衆多人に施し、僧に施し、二部僧に施すも亦是の如し。是を如法施如法受如法住と爲す。

(九三)爾時、世尊、迦尸國に於て人間に遊行したまふ。五百の比丘と倶なりき、時に鞞連國に四舊比丘有り。阿濕鞞不那婆娑般陀樓醯那なり。時に四比丘、世尊が五百人と倶に人間に遊行し、當に鞞連に來至したまふと聞く。世尊に二弟子有り。舍利弗と目連も此に來至せん。恐らくは我等を驅つて此出處に出でしめん。我等寧ろ上房を選擇して世尊に與ふべし。餘は分つて四分と爲し、以て私有と爲さん。僧伽藍、僧伽藍物、房舍、房舍物は第一比丘の分と作さん。瓮瓶瓮釜鑊斧鑿燈臺諸雜重物は第二比丘の分と作し、繩床木床大褥小褥臥具雜物は第三比丘の分と作し、餘の林木竹草花果葉は第四比丘の分と作さん。時に四比丘、卽ち上房を選んで世尊を留め、餘は上の如く分つて四分と爲せり。時に世尊、迦尸國より人間に遊行し、鞞連に至り、座を敷いて坐したまひ、舍利弗、目連に告げたまはく、『汝往いて彼舊比丘に語れ。世尊は、五百の比丘と倶に、迦尸國に來りたまふ。汝、今、諸比丘の爲に臥具を敷置す可し』と。舍利弗、目連は世尊の敎を受け已つて、舊比丘の所に往いて所敎の如く、臥具を敷かんことを勅す。彼比丘答へて言はく、『世尊は是れ法主なり。便ち意に隨つて住止したまふ可し。我等先に已に上房を選んで世尊を留めんとするも、餘は分つて四分と爲すこと上の如し。客比丘の臥具無し。時に舍利弗、目連、世尊の所に

往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、此四分物は是れ四方僧物なり。應に分つべからず、賣買するべからず。亦僧の所賣に非ず。衆多人乃至一人の所賣に非ず。若し彼僧衆多人一人が自ら己れに入れ、若は分ち、若は賣買するも、自入を成せず、分つを成せず、賣買を成せず、偸蘭遮を犯す。何等か四方僧物なる。僧伽藍、僧伽藍物、房房物、此は是れ第一分の四方僧物なり。分つべからず。自ら入るべからず。賣買すべからず。若し僧の若は衆多人、若は一人なるも分つことを得ず。自ら入ることを得ず。賣買することを得ず。若は僧の若は衆多人、若は一人も、若は分ち、若は自ら入れ、若は賣買せんも、分を成せず、自入を成せず、賣買を成せず。偸蘭遮を犯す。第二、第三も亦是の如し。第四分中の果菜は分つを聽す。若し花を佛に上る、餘も上に同じ。

四分律卷第五十

【一】前卷に續いて房舍犍度を明す中、重ねて作房を明し、房舍の算理法を說く。

四分律 卷第五十一 第四分之二

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

房舍犍度之餘

〔一〕爾の時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に比丘有り、僧地の中に在りて私房を作る。上座客比丘有り、來り語つて言はく、『起つて上座を避けよ。』彼答へて言はく、『起たず。』問うて言はく、『何が故にや。』答へて言はく、『是れ我私房なり』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に語つて起たしむべし。若し起たん者は善し、若し起たざる者には、應に語つて僧地に還へれと言ふべし。更に理有ること無ければ、僧地を以て入り已れ。』比丘有り。卒に屋を成ぜるに堅牢ならず。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼便ち壽形に一房を經營するも、屋時に成ぜず。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し極上大好重閣堂を作らんにも、十二年經營を聽す。餘は大小、量の宜しきに隨へ。』彼經營人の一切時春夏冬に、僧常營事房を受く。佛、言はく、『應に爾すべからず、夏三月竟つて上座に隨つて分つを聽す。』時に比丘有り。通じて僧伽藍を經營し、便ち處處に房分を取る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に九十日に一處住を取るべし。彼經營人、衆多人の住處に在りて

作す、食堂、溫室、經行堂、客比丘をして作處無からしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し下堂が衆多人の作處なれば、應に下堂に在りて作すべし。若し上堂が衆多人の作處なれば、應に上堂に在りて作すべし。』彼小小經營し、泥壁若は補缺し、若は平地に作る。便ち營事者の房を索む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼沙彌僧伽藍人を差し、便ち營事人と作す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼小房を作り、營事者の房を索む。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し所作の房に、繩床木床を受けん者には、營事房を與ふるを聽す。』彼惡房を作り、便ち營事者房を索む。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し所作房に莊嚴香熏し、所須具足せる者には房を與ふることを聽す。』時に營事比丘有り、房を受け已つて命過せり。諸比丘、此房の誰に屬するやを知らず。佛に白す。佛、言はく、『僧に隨へよ。』時に營事比丘有り。人を遣して僧に白して房を索む。彼比丘、僧中に至つて房を索め已り、營事比丘、便ち命過せり。諸比丘、此房を誰に與ふるやを知らず、佛、言はく、『僧に隨へよ。』營事比丘、人を遣して僧中に房を索め已るに、彼使比丘命過せり。諸比丘、此房の誰に與ふるやを知らず。佛、言はく、『應に彼營事者に與ふべし。』時に營事人、夏安居中に命過せり。諸比丘、此房の誰に與ふるやを知らず。佛、言はく、『僧に隨へ。』時に比丘有り、房を作りて未だ覆はざるを捨行せり。時に客比丘、舊比丘に語つて言はく、『此房を覆ふべし。』舊比丘、答へて言はく、『作者、應に覆ふべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『極大の好重閣房も六年内に覆を作らんを聽す。餘小を成ずる者

は事量の宜きに隨へ。』時に一比丘有り。房を作る。異比丘の覆ふこと有り。彼二比丘、共に先後に屋を治せるを諍ふ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『先に作れる者應に先に治すべし。』時に二比丘有り。共に房を作る。二人共に前後作を諍ふ。佛、言はく、『更互に上座と作りて先に在るを聽す。』時に營事比丘、夏安居に所治房を受け、復餘房を受く。佛、言はく、『應に爾すべからず。即ち所住房もて安居房を作れ。』爾時、世尊、拘睒彌に在り、時の王は優塡、跋難陀、親厚王の與に請はれて拘睒彌に在り、夏安居す。時に跋難陀、請を受けて安居し已り、異處に安居僧有り。大に衣物を得たりと聞き、即ち彼處に往いて少時に住し已り、拘睒彌に還へる。時に王優塡、聞き已つて譏嫌すらく、『云何が跋難陀は我請を受けて夏安居し已り、異處に僧有り、大いに夏安居して衣服を得たりと聞き、而も彼に往いて住し、後還りて此に來るや。』時に諸比丘聞き、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、却りて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、跋難陀釋子を呵責して言はく、『云何が請を受けて拘睒彌に在りて夏安居し、異處僧有りて大いに夏安居して衣物得たりと聞き、便ち彼に往いて住し已り、復此に還るや」と。無數の方便もて呵責し已り、諸比丘に告げたまはく、『異處僧有つて大いに夏安居して衣物を得たりと聞き、而も彼に往いて住せば、即ち此處を失し、彼に於て少住し已つて復此處に還らば、復彼處を失ふ。』爾時、衆僧の房舍、故無くして壞せり。異居士有り、言はく、『若し我に與ふれば、我當に修理すべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『與ふるを聽す。白二羯

磨もて應に是の如く與ふべし。衆中に應に堪能羯磨者を差すべし。上の如くんば是の如く白を作せ。大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ、僧今此房を持して某甲居士に與へて修治せしめ、某甲比丘經營せよ。白すること是の如し。『大德僧聽け。僧今此房を以て、某甲居士に與へ、某甲比丘經營す。誰か諸長老の、僧の此房を持して某甲居士に與へて修治せしめ、某甲比丘の經營せるを忍ぶ者は默忍せよ。誰か忍ばざる者は說け。』僧已に忍んで某甲居士に房を與へて修治せしめ、某甲比丘の經營すること竟んぬ。僧爲に忍んで默然するが故に、是事是の如く持つ。爾時、營事比丘、未だ房を分たざるに、便ち出行せり。諸比丘、即ち後に於て房を分つ。彼營事比丘、還つて問うて言はく、『我營事房を留めしや不や。』彼答へて言はく、『不なり。』即便ち諸比丘を嫌責して言はく、『我未だ房を分たずして出行せり。而も後に於て房を分つ。我此に於て分有り。何が故に我房を與へざるや。』諸比丘、成分、不成分を爲すを知らず。佛、言はく、『成分なり。應に還るを待つべし、彼も亦應に人に囑して取るべし。』時に營事比丘、未だ房を分たずして出行し、餘比丘に囑して房を取るに、而も房の處所を指示せず。彼比丘、營處多し。此比丘、何の房を與取すべきやを知らず。諸比丘、房を分ち已り、彼方に還つて諸比丘に、房を分つこと未だしやを問ふ。答へて言はく、『已に分てり。』『我爲に房を取りしや不や。』答へて言はく、『不なり。』彼即ち嫌責して言はく、『未だ房を分たざるも我出行し、餘比丘に囑して我爲に房を取らしむ。我此に於て分有り。而も我爲に房を取らず。』諸比丘、成分、不成分

爲るを知らず。佛、言はく、『成分なり。應に還るを待つべし。彼も亦應に指授して言ふべし。「某甲房を取れ」と。彼營事比丘、房を取り已つて、後房を分つ時、次に好房を得たれば、便ち前房を捨つ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾るべからず。應に上座に從つて更に分つべし。若し人の取る者無くんば應に與ふべし。』彼比丘、疑うて敢て衆僧の戶鈎鑰若は杖、若は環、若は杙、若は角杓、若は銅杓、若は浴床を捉へず。佛、言はく、『捉ふるを聽す。』彼敢て此住處より此諸物を移して彼處に至らず。佛、言はく、『移すを聽す。五法有り、應に差して僧の爲に分粥すべからず。設し差すも分つべからず。若し愛有り、恚有り、怖有り、癡有り、已分未分を知らざる、是の如きの五法有り。應に差して僧の爲に分粥すべからず。已に差すも分つべからず。五法有り、差して僧の爲に分粥すべし。愛せず、恚らず、怖れず、癡ならず、已分未分を知る。是の如きの五法有つて、應に差して僧の爲に分粥すべし。若し差せば僧の爲に分粥せしむべし。小食を分ち、佉闍尼を分ち、會敷臥具分浴衣分衣を差請せば、取る可く與ふ可し、比丘の使を差し、沙彌の使を差す、一切も亦是の如し。五法有りて僧の爲に分粥せば、地獄に入ること箭を射るが如くならん。愛有り、恚有り、怖有り、癡有り、分未分を知らず、是の如きの五法有つて分粥せば、地獄に入ること箭を射るが如くならん。五法分粥せる有らば、天に生ずること箭を射るが如くならん。愛せず、恚らず、怖れず、癡ならず、分未分を知る。是の如きの五法有つて、僧の爲に分粥せば、天に生ずること箭を射るが如くならん。乃至沙彌の使を差すも亦是の

【二】上に明せる十九犍度以外の雑物を明すに名く。第二十犍度。已下修道の資具を明すに先づ食鉢について。

【時に等】次に剃髪について。

如し。　房舍犍度具足し竟ぬ

雑犍度之一

(二)爾時、世尊、波羅㮈に在したまふ。五比丘、來つて佛所に至り、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『我等應に何等の鉢をか持すべき。』佛、言はく、『迦羅鉢、舍羅鉢を持せんを聽す。』時に比丘有り、僧中に入つて食するに鉢無し。佛、言はく、『比座の與ふるを聽す。若し僧中に此二種鉢有らば借與せよ。』時に比丘有り、蛇、毒を吐けるに、鉢中洗はずして持用つて食し、食し已つて病を得たり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に鉢を洗はずして用て食すべからず。洗ひ已つて用て食するを聽す。』時に諸比丘、髪長し。佛、言はく、『剃るを聽す。若は自ら剃り、若は人をして剃らしめよ。彼剃刀を須ひんには作るを聽す。』彼寶を用て欛を作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。銅鐵を用ひんを聽す。』彼刀を露捉せるに掌護し難し。佛、言はく、『刀鞘を作るを聽す。』彼寶を以て作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。骨牙角銅鐵白鑞鉛錫舍羅草竹葦木を用て作るを聽す。』彼刀鞘を作らんに、動いて刃を壞せんことを患へば、應に物を以て障ふべし。若は毳、若は劫貝、若は犬皮なり。若し墮落せば應に綖を以て連綴すべし。若し手もて捉へんに掌護し難ければ、應に囊を作つて盛るべし。若し囊口より出づれば、應

【時に等】鼻毛について。

【時に等】爪について。

に繩を以て之を繋ぐべし。若し手もて捉へて行かんに、失はんを恐れば、繩もて繫絡して肩に著くべし。』時に比丘、刀刃に卷を用ふ。『手もて上磨するを聽す。』若し故に卷かば應に石もて上磨すべし。手もて石を捉へんに、失はんを恐れば、應に刀を囊中に盛著すべし。若し刀鈍なれば應に刮刃すべし。若は自ら刮し、人をして刮せしむべし。』彼刮刀を用ふ。佛、言はく、『作るを聽す。』時に比丘、髮を剃るに、髮の衣に著くを患ふ。佛、言はく、『承髮器を畜ふるを聽す。』云何が作るやを知らず。竹を織りて作るを聽す。若は木を屈して捲を爲し、樹皮を以て之を鞔し、若は十種衣中、一一の衣もて承髮器を作るを聽す。彼れ承髮器を持つて地に著き、用ふる時、膝上に著くに、泥土衣を汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。繩を以て懸け、若は杙上に安ぜよ。』時に比丘、鼻中の毛長きを患ふ。佛、言はく、『拔くを聽す。若は自ら拔き、若は人をして拔かしめよ。』彼鑷を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼寶を用て作る。佛、言はく、『寶を用て作るべからず。骨牙角銅鐵白鑞鉛錫を用て作るを聽す。若し鑷の頭破れんを患ふれば、頭に鐵を安ずるを聽す。手もて捉ふるに掌護し難くば、剃刀を囊中に著くを聽す。』時に比丘の爪長し。佛、言はく、『剪るを聽す。若は自ら剪り、人をして剪らしめよ。』彼剪爪刀を用ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼寶を用て作る。佛、言はく、『應に寶を用ふべからず、銅鐵を用ふるを聽す。手もて捉へんに掌護し難くば、筒を作りて盛るを聽す。』彼寶を用て筒を作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。銅鐵白鑞鉛錫竹木を用て作るを聽す。筒中

より出づるを患へんには、應に蓋を作つて塞ぐべし。』彼寶を用て蓋を作る。佛、言はく、『應に寶を用ふべからず。銅鐵若は白鑞鉛錫竹木を用ふるを聽す。若し一處に趣著して零落を患へんには、刀を囊中に著くを聽す。』爾時、比丘行り。爪長くして一白衣の家に至る。此比丘、顏貌端正なれば、白衣の婦女、見已つて便ち意を彼比丘に繫け、卽ち比丘に語つて言はく、『我と共に是の如く、是の如きの事を作せ。』比丘の言はく、『大姉、是語を作すこと莫れ。我等が法は應に爾すべからざるなり。』彼婦女の言はく、『若し我に從はずんば、我當に自ら爪を以て身面を壞き、破し已つて我夫の還りし時、當に語つて言ふべし「彼比丘、我を喚んで是の如きの事を作せと、我彼に從はざるに、便ち爪もて爬いて我身面を破ること是の如し」と。』時に比丘、聞き已つて愧懼し、疾疾に其家を出づ。比丘、亦出でしに、其夫も亦外より入る。彼婦、卽ち自ら爬して身面を破り、其夫に語つて言はく、『比丘、我を喚んで是の如き事を作せと。我從はざるに、便ち爬して我身面を破せり』と。其夫卽ち疾疾に比丘を逐ひ、語つて言はく、『汝、我婦を犯さんと欲せるに、我婦從はず。便ち爬して身面を破せしや。』比丘、答へて言はく、『居士、是語を作すこと莫れ。我等が法は應に爾すべからず。』彼便ち言はく、『汝、云何が爾すべからずと言ふや。汝が爪長きこと是の如し。』彼卽ち比丘を打ち、死に次ぐ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に長爪を畜ふべからず。』時に六群比丘、爪を剪つて血を出さしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼爪を剪つて半月形の如くならしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼爪を剪つて頭

【時に等】鬚髮について。

【時に等】眼について。

【時に等】鏡を用ふるの可否「乃至種種飾好について

を尖らしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼爪を磨き光を出さしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼彩色を以て爪を染む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』佛、比丘に語りたまはく、『汝曹は癡人なり。我所制を避けて更に餘事と作す。諸比丘の皮衣に爪を剪るを聽す。』長短幾許に應に剪るべきやを知らず。佛、言はく、『極長も一麥の如く剪るべし。』時に六群比丘、剪刀を以て鬚髮を剪る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼髮を剃りて鬚を剃らず。佛、言はく、『應に鬚髮を剃るべし。』彼鬚を剃り、鬚を剃らず、佛、言はく、『應に鬚髮を剃るべし。』彼髮を拔く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼髮を留む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼髭を撚して翹げしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。汝等は癡人なり、我所制を避けて更に餘事を作す。自今已去、應に鬚髮を盡く剃るべし。』彼比丘、髮長きこと幾許にして剃るべきやを知らず。佛、言はく、『極長も長さ兩指なれ。若し二月に一たび剃らば、此は是れ極長なり。』時に六群比丘、鬚髮を梳る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼油を以て髮に塗る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘、眼瞼を畫く。時に諸居士、見て皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は多欲にして厭く無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らん。猶し白衣の若し。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に是の如く眼瞼を畫くべからず。』時に諸比丘、眼痛を患ふ。佛、言はく、『種種の藥を著くるを聽す。』時に六群比丘、鏡もて面を照し、或は水中に面を照し、或は物を以て摩礕して光を出して面を照らさしむ。時に諸居

士、見て皆共に譏嫌すらく、「沙門釋子は多欲にして厭く無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らん。鏡を以て面を照すこと猶し白衣の如し。」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、「應に爾すべからず。」時に比丘、面瘡を患ふ。佛、言はく、『餘比丘の藥を著くるを聽す。若し獨り一房に在らば、水鏡を以て面を照して藥を著くるを聽す。』彼比丘、身を治し、髮を治す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼比丘、身に唾して揩摩す。佛、言はく、「應に爾すべからず。」彼露地に於て洗浴す。時に諸居士、見て皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は多欲にして厭く無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば、何ぞ正法有らん。露處に洗浴すること、猶し白衣の如し。」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に比丘有り、是の如きの意を作し、自ら推して肩臂を打ち、麤好ならしめんと欲す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼是の如きの意を作して、香を以て身に塗る、香好ならん爲の故なり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘、身汗臭を患ふ。佛、言はく、『刮汗刀を作るを聽す。』彼寶を用て作る。佛、言はく、『應に寶を用ふべからず。骨牙角銅鐵鉛錫舍羅草竹木を用て作るを聽す。」時に六群比丘、刮汗刀を作るに、頭、剃刀形に似たり。刮汗幷に身毛を去らんと欲す。佛、言はく、『應に爾すべからず。亦應に是の如きの刀を畜ふべからず。』時に病瘡比丘、麤末藥を以て患痛を洗ふ。佛、言はく、「細末藥の若は細泥、若は葉華藥を以てするを聽す。」病に隨つて比丘は便ち身もて、病者の種種の瘡乃至患汗臭を洗ふを聽す。」時に六群比丘、耳鐺を著く。佛、

【三】神力を現ずるについて。

言はく、『應に爾すべからず。』時に六群比丘、耳輪の上に珠を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘、耳環を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘、多羅葉若は鉛錫を以て環張を作り、耳孔を大ならしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼六群比丘、耳睡を纏裹す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼鉛錫もて腰帶を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼頸瓔を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼臂脚に玔を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼指環を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼五色の綖絡腋を用て、腰臂に繫く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼指印を著く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』

(三)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に外道六師有り。弟子と共に住せり。時に不蘭迦葉は弟子九萬人と倶なりき。末佉羅瞿舍羅は弟子八萬人と倶なりき、是の如く轉減して乃至尼犍子は、四萬人と倶なりき。時に王舍城に長者有り。是れ六師の弟子なり。大段旃檀木を得たり。卽ち用て鉢を作り、寶を以て絡囊を作つて之を盛り、中庭に於て高標を竪て、其上に安置し、唱へて言はく、『若し此王舍城に沙門、婆羅門有つて、是れ阿羅漢にして神力有らば、此鉢を取つて去るべし。』時に富蘭迦葉、長者の所に至りて語つて言はく、『我は是れ阿羅漢なり。大神力有り、此鉢幷に囊を持て我に與ふべし。』長者語つて言はく、『汝若し是れ阿羅漢、大神力有らば、汝に與へん。汝、往いて取る可し。』彼取らんと欲するも而も得るに由無し。時に末佉羅瞿舍羅、阿夷頭翅舍欽婆羅波瞿迦旃延訕毘羅吒子、尼揵

陀若提子等、長者の所に至り、是の如きの言を作さく、『我は是れ阿羅漢にして神力有り、此鉢幷に囊を以て我に與ふ可し。』長者の言はく、『若し汝、是れ阿羅漢にして大神力有らば、汝に與へん。汝、往いて取る可し。』彼取らんと欲するに、而も得るに由無し。爾時、賓頭盧と大目連とは共に一大石上に在つて坐せり。賓頭盧、目連に語るらく、『汝は是れ阿羅漢なり。世尊は汝を神足第一と記したまふ。汝、往いて取る可し。』目連の言はく、『我は未だ曾て白衣の前に神足を現せず。汝も亦是れ阿羅漢、大神力有り、世尊は汝を師子吼は最も第一爲りと記したまふ、汝、往いて取る可し。』時に賓頭盧、目連の語るを聞き已つて、即ち石を合し、身を虛空に踊らし、王舍城を遶ること七匝なり。國人皆東西に避走して言はく、『石、墮ちんと欲す』と。時に彼長者、閤堂の上に在りて遙に賓頭盧を見るに、虛空の中に在り。即ち合掌して禮を作し、是の如きの言を作さく、『此鉢を取れ、賓頭盧。』賓頭盧、即ち鉢を取る。長者、復言はく、『小しく下住せよ、賓頭盧。』賓頭盧、即ち小しく下住せり。時に彼長者、手中より鉢を取り、美食を盛滿して與ふ。時に賓頭盧、鉢を取り已つて、還、神通力を以て虛に乘じて去りぬ。諸比丘聞く、中に少欲知足にして頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。賓頭盧を嫌責して言はく、『云何が白衣の前に在つて神足を現ぜるや』と。時に諸比丘、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に住し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、知るも而も故に賓頭盧に問ひたまはく、『汝、白衣の前に於て神足を現ぜりや。』答へて言は

く、『實に爾り。』時に世尊、無數の方便もて賓頭盧を呵責したまはく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず。沙門法に非ず。淨行に非ず。隨順行に非ず。應に爲すべからざる所なり。云何が白衣の前に於て神足を現ぜしや、猶し婬女の半錢の爲の故に衆人の前に於て自らを現ずるが如し。汝も亦是の如し。弊木鉢の爲の故に、白衣の前に於て神足を現ぜり。應に白衣の前に於て神足を現ずべからず。若し現ぜば突吉羅なり。比丘は應に旃檀鉢を畜ふべからず。若し畜へば如法に治せよ。若し已に成ずることを得ば、破分して諸比丘に與へ、眼藥を作るを聽す。』時に諸の外道聞いて、『沙門瞿曇は諸比丘を制して、白衣の前に於て神足を現ずることを得ず、彼沙門の制する所は、更に犯さざらしむと。我等今寧ろ、彼所に往いて語つて言ふべし。『汝、沙門瞿曇、自ら阿羅漢を得たりと稱するも、我も亦是れ阿羅漢なり。自ら神通有りと稱するも、我も亦神通有り。自ら大智慧有りと稱するも、我も亦大智慧有り。今共に過人法を神力もて現ず可し。若し沙門瞿曇、一の過人法を現ぜば、我當に二を現ずべし。若し二を現せば、我當に四を現ずべし。沙門瞿曇、四の過人法を現ぜば、我當に八を現ずべし。若し八を現せば、我當に十六を現ずべし。若し十六を現ぜば、我當に三十二を現ずべし。若し三十二を現せば、我當に六十四を現ずべし。若し所現轉た增さば、我現も亦轉た一倍せん』と。時に諸の外道、城街巷の處處に在つて唱へて言はく、『沙門瞿曇は自ら神力有りと稱するも、我も亦神力有り、自ら大智慧有りと稱するも、我も亦大智慧有り。我等、今沙門瞿曇と共に神力もて過人法を捔現せんと欲す。

若し沙門瞿曇一を現ぜば、我當に二を現ずべし。是の如く沙門瞿曇が所現多少なれば、我も當に現ずること轉た一倍を增すべし。』時に王舍城中に一處有り、其地廣大平博なり。時に彼長者、多くの華香瓔珞伎樂幢幡飲食衣服醫藥臥具を持つて、此處に於て外道婆伽婆を供養せんと欲す。時に彼長者、華を取り、外道を供養せんと欲し、手を器に入るに輒ち出づることを得ず、香花瓔珞幢幡伎樂飲食衣服醫藥臥具を取らんと欲するも、所取の手に隨つて、皆器に著して而も出づることを得ず。時に彼長者、華を取つて佛を供養せんと欲する時、手の取る所に隨つて、而も所礙無し。是の如く手の取る所に隨つて乃至醫藥臥具も而も所礙無し。彼是の如きの念を作さく、『未曾有なり、世尊に是の如きの大神力有り』と。時に彼長者、卽ち佛に白して言さく、『唯願くば世尊、大比丘僧と、我明日の請食を受けたまへ。』爾時世尊、默然として請を受けたまふ。時に彼長者、世尊の默然として許可したまふを見、前んで佛足を禮し、佛を遶りて去り、卽ち其家に還り、竟夜に種種肥美の飲食を辦じ、明日淸旦、往いて時到れるを白す。爾時世尊、衣を著け鉢を持し、大比丘僧千二百五十人と俱に、彼長者の家に往きたまふ。時に世尊が動足行處に大神力有り、天は虛空の中に在つて、天の曼陀羅華旃檀末香、天の憂鉢羅鉢頭分摩拘牟頭分陀利華を以て、以て佛の行迹處に散じ、天の伎樂歌頌を作して佛を讚ず。時に彼長者、世尊に隨從して是念を作さく、『今此音聲は、地從り出づると爲んや、上從り來ると爲んや』と。仰いで空中を視、遙に天曼陀羅華乃至分陀利華及び天の伎樂の空中に住在するを見、便ち是念を作

さく、『此音は地從り出でず、乃ち上從り來る』と。時に世尊、長者の家に至つて、座に就いて坐したまふ。時に諸の外道聞き、是の如きの念を作さく、『彼長者は、由來我諸外道を供養せり。今乃ち更に佛及び僧を請じて飮食せしむ。我今寧ろ往いて、彼供具をして不足ならしむ可し』と。卽便ち眷屬と倶に長者の家に往く。守門人、諸の外道が眷屬と倶に來るを見、卽ち往いて長者に白して言さく、『知るや不や。今諸外道、眷屬と倶に來るを。當に入るを聽すべきや不や。』長者の言はく、『入るを聽すこと莫れ。』佛、長者に言はく、『入るを聽す可し。』長者、佛に白さく、『外道は衆多なり、此處は窄狹なり。恐らくは受く容からざらん。』佛、言はく、『但、入るを聽せ。相容受するに足らん。』長者復言さく、『外道は衆多なるも坐處は窄狹にして飮食に限り有り。本千二百五十人の爲に供を設く。今恐らくは供足せざらん。』佛、長者に告げたまはく、『但、入るを聽せ。相容受するに足り、飮食供足せん。』爾時、世尊、神足力を以て、地平正廣、博東西を觀ぜしむるに、時に無數百千の高座、自然にして有り。南西北方も亦復是の如し。時に世尊大比丘僧千二百五十人幷に外道と倶に坐したまふ。時に彼長者、種種の美食を設け、佛比丘僧及び諸の外道を供養し、一切充足し食し已つて鉢を捨て、更に卑床を取り、佛前に於て坐す。時に世尊、長者の爲に、無數の方便もて說法敎化し、歡喜を得しめたまふ。長者の爲に說法し已つて坐より去りたまふ。爾時、諸の外道、眷屬と倶に、瓶沙王の所に往き、頂上に合掌して言はく、『願くば王常勝に白言せん。沙門瞿曇は自ら是れ阿羅漢なりと言ふも、我も亦阿

羅漢なり。沙門瞿曇は自ら神通有りと言ふも、我も亦神通有り。沙門瞿曇は自ら大智慧有りと稱するも我も亦大智慧有り、我等今、沙門瞿曇と共に神力及び過人法を捔勝せんと欲す。若し沙門瞿曇一を現ぜば、我當に二を現ずべし。是の如く沙門瞿曇の所現の多少に隨ひ、我盡く之に倍せん。我今、沙門瞿曇と共に神力過人法を捔現せんと欲す。」時に瓶沙王、佛所に往詣し、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、向の因緣を以て共に世尊に白すらく、『唯願くば世尊、外道と神力過人法を捔現したまへ。』世尊、王に告げて言はく、『且く止みね。我自ら時を知る。現ず可くんば當に現ずべし。明日去るに當り王の所欲に隨はん。』世尊明日、大比丘衆と俱に、王舍城より去りたまふ。時に瓶沙王、五百の乘車を以て種種の美食を載せ、世尊の後に從ふ。時に諸の外道は、世尊が清旦に王舍城を出でて去りたまふと聞き、是言を作さく、『沙門瞿曇は、我等と共に神力を捔すること能はずして便ち去る。王瓶沙、五百乘車に種種の美食を載するは我等の爲にして、彼瞿曇沙門の爲にせず。我曹、今彼に隨つて去り、所至の處に到り、喚んで共に神力過人法を捔す可し。』彼即ち世尊の後に隨つて去る。時に王瓶沙、佛が清旦に、千二百五十の比丘と王舍城從り去りたまふと聞き、王は從八萬四千人と俱に、世尊の後に隨ふ。梵身天釋提桓因、四天王諸天無數百千大衆は世尊の後に隨從す。時に世尊、優禪城に往きたまふ。優禪城の王を波羅殊提と名く。摩竭羅の諸外道、優禪城の諸外道、俱に共に波羅殊提王の所に往き、頂上に合掌し、讃じて言さく、『願くば王常勝、沙門瞿曇は自ら稱して是れ阿羅漢なりと言ふ

も、我も亦是れ阿羅漢なり、自ら稱して神力有りと言ふも、我も亦神力有り、自ら稱して大智慧有りと言ふも、我も亦大智慧有り。我等、王舍城の中に於て求めて共に神力過人法を捔せんとせり。而るに沙門瞿曇は我と神力過人法を捔すること能はず、我等、今共に神力過人法を捔せんと欲す。若し沙門瞿曇一を現ぜば、我當に二を現ずべし。是の如く沙門瞿曇が所現の多少に隨つて、我盡く之に倍せん。』時に王波羅殊提、卽ち佛の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白さく、『善い哉世尊、諸外道と共に神力過人法を現じたまふ可し。』爾時世尊、波羅殊提王に告げて言はく、『且く止みね。我自ら時を知る。現ず可くんば當に現ずべし。明日當に去るべし。王が意に隨へ。』時に世尊、明日清旦に、優禪從り去りたまふ。波羅殊提王、五百乘車に、種種の美食を載せ、世尊の後に從ふ。時に諸外道、世尊の去りたまふと聞き、是の如きの言を作さく、『沙門瞿曇は我と共に神力過人法を現ずること能はずして便ち去る。王が五百乘車に飲食を載するは我等の爲にして、彼の爲ならず。我當に隨つて去り、所至の處に到つて與に共に神力過人法を捔すべし。』彼卽ち世尊の後に隨つて去る。時に王瓶沙、世尊の去りたまふを聞き、八萬四千人と俱に、波羅殊提王は七萬人と俱なり、釋梵四天王諸天大衆は、無數百千の眷屬と圍遶して世尊の後に從へり。世尊、拘睒彌國瞿師羅園中に往いて住したまふ。時に優陀延、王爲り。摩竭國の諸外道、優禪國の諸外道、拘睒彌の諸外道、俱に優陀延王の所に往き、頂上に合掌し、讚じて言はく、『願くば王常勝、是の如く白して言さん。

沙門瞿曇は自ら稱して是れ阿羅漢なりと言ふも、我も亦是れ阿羅漢なり。自ら稱して大神力有りと言ふも、我も亦大神力有り。彼自ら稱して大智慧有りと言ふも、我も亦大智慧有り。摩竭國、優禪國に於て共に神力過人法を捔せんことを求めしに、沙門瞿曇は我と共に、神力過人法を捔すること能はずして去りぬ。我等、今沙門瞿曇と共に神力過人法を捔せんと欲す。沙門瞿曇、一を現せば、我當に二を現ずべし。是の如く彼所現の多少に隨ひ、我盡く之に倍せん。」時に優陀延王、世尊の所に詣りて頭面に足を禮し、却つて一面に住し、此因緣を以て具に世尊に白さく、『善い哉世尊、諸外道と共に神力過人法を捔したまふ可し。』佛、王に告げて言はく、『止みね、止みね、我自ら時を知る。現ず可くんば當に現ずべし。明日當に去るべし、便ち王が意に隨へ。』明日淸旦、便ち去りたまふ。時に王、優陀延、五百乘車に種種の飮食を載せ、世尊の後に隨ふ。時に諸外道、世尊の去りたまふを聞き、便ち是言を作さく、『沙門瞿曇は、我と神力過人法を捔すること能はずして便ち去りぬ、優陀延王が五百の乘車に飮食を載せるは、而も我等が爲にして彼爲ならず。我等今、彼所至の處に隨つて、當に共に神力過人法を捔すべし。』即便ち世尊の後に隨つて去る。時に瓶沙王は八萬四千人と俱に、優禪王は七萬人と俱に、優陀延王は六萬人と俱にして世尊の後に從ひ、釋梵四天王無數百千の諸天大衆は世尊の後に從ふ。爾時世尊、迦維羅衛國尼拘律園中に往いて住したまふ。時に迦維羅衛王は梵施、是れ佛が異母弟なり。摩竭國の諸外道、優禪の諸外道、拘睒彌の諸外道、迦維羅衛國の諸外道、共に梵施王の所に往き、頂

上に合掌して王の當勝を願じ、梵施王に白して言さく、『沙門瞿曇は自ら稱して是れ阿羅漢なりと言ふも、我も亦是れ阿羅漢なり。自ら大神力有りと稱するも、我も亦大神力有り。自ら大智慧有りと稱するも、我も亦大智慧有り。我摩竭國、優禪國、拘睒彌國に於て、沙門瞿曇と神力過人法を捔せんとせり。而も沙門瞿曇は、我と神力過人法を捔すること能はずして便ち去りぬ。我等、今、沙門瞿曇と神力過人法を捔現せんと欲す。若し沙門瞿曇、一を現せば、我當に二を現ずべし。是の如く、沙門瞿曇が所現の多少に隨つて、我盡く之に倍せん。』時に梵施王、佛所に往詣して頭面に足を禮し、一面に在つて坐し、佛に白して言さく、『願くば世尊、神力過人法を現じたまへ。』佛、王に告げて言はく、『止みね、止みね。彼自ら時を知る。現ず可くんば當に現ずべし、明日當に迦維羅衛國を出で去るべし。王が意に隨ふ可し。』世尊、明日清旦に、便ち去りたまふ。爾時梵施王、即ち五百の乘車を以て種種の飲食を載せ、世尊の後に隨ふ。時に諸外道、世尊の去りたまふを聞き、便ち是言を作さく、『沙門瞿曇、我と共に神力過人法を捔すること能はず、我を捨てて去りぬ。梵施王が五百乘車に飲食を載するは、而も我等の爲にして、沙門瞿曇の爲ならず。今當に其所至の處に隨つて、喚んで共に神力過人法を捔すべし。』即ち眷屬と世尊の後を逐ふ。時に王瓶沙、佛の去りたまふを聞き、即ち八萬四千人と倶に、波羅殊提王は七萬人を倶に、優陀延王は六萬人と倶に、梵施王は五萬人と倶に、世尊の後に從ひ、釋梵四天王は諸の眷屬無數百千の天人と世尊の後に從ふ。爾時、世尊、迦維羅衛國より人間に遊行し、

舍衛國の祇桓園中に至つて住したまふ。時に舍衛國は波斯匿を王と爲す。時に摩竭國の諸外道、優禪城の諸外道、拘睒彌の諸外道、迦維羅衛の諸外道、舍衛國の諸外道、皆、王波斯匿の所に往き、頂上に合掌して白して言さく、『願くば王常に勝なれ』と。是の如きの言を作さく、『沙門瞿曇は自ら稱して是れ阿羅漢なりと言ふも、我も亦是れ阿羅漢なり。自ら稱して大神力有りと言ふも、我も亦大神力有り、自ら稱して大智慧有りと言ふも、我も亦大智慧有り。我等、摩竭國、優禪城、拘睒彌、迦維羅衛國に於て、共に神力過人法を捔せんと欲せるに、而も我と共に神力過人法を捔すること能はずして便ち去りぬ。我等今、沙門瞿曇と共に神力過人法を捔せんと欲す。若し沙門瞿曇、一を現ぜば、我當に二を現ずべし。是の如く其所現の多少に隨つて、我盡く之に倍せん。』王波斯匿、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白さく、『善い哉世尊、願くば神力過人法を現じたまへ。』佛、王に告げて言はく、『止みね、止みね、我自ら時を知る。現ずべくんば當に現ずべし。臘月十五日の中に於て、初一日從り十五日に至り、如來は當に神力過人法を現ずべし。大王、若し如來の神力過人法を現ずるを觀んと欲せば、便ち來れ。』時に舍衛國に別處有り。其地平正廣博なり。世尊、彼に往き、座を敷いて坐したまふ。時に梵天王、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛世尊に白して言さく、『我當に世尊の爲に高座を敷くべし。』佛、梵天に告げたまはく、『且く止みね。我自ら時を知る。』天帝釋、四天王、瓶沙王、波羅殊提王、優陀延王、梵施王、波斯匿王、末利夫人、長者利師達多

富羅那、各各是の如きの言を作さく、『我當に世尊の爲に高座を敷くべし』と。佛、告げて言はく、『汝等且く止みね。我自ら時を知る』と。時に諸居士に、外道を信ずる者有り、外道の爲に、價直百千の座を敷く。佛を信樂し、恭敬し、供養する者有り。次第して一日從り十五日に至る、爾時、世尊、東面して時を看たまふ。無數百千の諸座有り、自然にして有り。南西北方も亦復是の如し。中央に自然七寶の師子高座有り。如來上に坐したまふ。時に諸大衆皆悉く座に就く。時に檀越有り。次供日者、佛に楊枝を授く。世尊、爲に受けて嚼み已り、背後に棄著したまふに、卽ち大樹を成じ、根莖枝葉扶踈茂盛せり。時に諸大衆、世尊に是の如きの神力有るを見、皆大に歡喜し、未曾有なるを得、厭離心生ぜり。時に世尊、諸大衆の未曾有なるを得、厭離心を生ぜるを觀たまひ、卽ち無數の方便もて種種に說法し、歡喜を得しめたまふ。時に座上に於て、無數百千人、遠塵離垢し、法眼淨を得たり。此は是れ、世尊が初日に現したまひし神力變化なり。第二日に於て、此樹に花生じ、色香具足し、樹花散落して大衆に周遍し、積つて膝に至る。比丘比丘尼優婆塞優婆私及び餘の大衆、皆此香氣を嗅げり。時に諸大衆、世尊に是の如きの神力變化有るを見、皆大いに歡喜し未曾有を得、厭離心生ぜり。時に世尊、諸大衆が未曾有なることを得、厭離心を生ぜるを觀たまひ、卽ち爲に無數の方便もて種種に說法し、歡喜を得しめたまふ。時に座上に於て無數百千人、遠塵離垢し法眼淨を得たり。此は是れ世尊が第二日に現じたまへる神力變化なり。第三日に於て樹果便ち出で、色香味具足し、其菓搖れざるに自ら落ち、

地に墮つるも壞せず。比丘比丘尼優婆塞優婆私及び諸大衆皆共に之を食せり。此諸大衆、世尊に是の如きの神力變化有るを見、皆大いに歡喜して未曾有なることを得て、厭離心を生ぜり。時に世尊、諸大衆の未曾有なることを得て厭離心を生ぜるを觀たまひ、卽ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得ること上の如し、此は是れ世尊が第三日に現じたまへる神力變化なり。爾時、檀越有り。次で第四日を供する者、世尊に水を授く。時に世尊、卽ち一把水を取り、之を前地に捨てたまふに、佛神力の故に卽ち大池を成ず。其水清淨にして、諸の塵穢無く、之を飮むも患無く、諸雜華、優鉢羅、鉢頭摩、拘牟頭、分陀利華、衆鳥異類鳧雁鴛鴦黿鼉魚鼈水性の屬有り、以て莊嚴を爲せり。時に諸大衆、世尊の神力に是の如きの變化有るを見、皆大いに歡喜し、未曾有なることを得、厭離心を生ぜり。時に世尊、諸大衆の未曾有なることを得、厭離心を生ぜるを觀じ、卽ち爲に說法し、乃至法眼淨を得たること上の如し。爾時、第五日に、其他の四面に各一河を出せり。直流して曲らず、其水恬淨にして而も波浪無し。衆の雜奇の華もて以て莊嚴と爲せり。其流水の聲は說法の音にして、一切衆行は皆悉く無常苦空なり。一切諸法は皆悉く無我涅槃息滅すと。時に諸大衆、世尊の神力に是の如きの變化有るを見、皆大に歡喜して未曾有なることを得、厭離心を生ぜり。時に世尊、諸大衆が未曾有なることを得、厭離心を生ぜるを觀たまひ、卽ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ世尊が第五日の變化なり。第六日に於て、世尊、諸大衆を化して皆一等類ならしめ、差降有ること無し。時に諸大衆、

世尊の神力變化の是の如きを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得、厭離心を生ぜり。時に世尊、諸大衆の未曾有なることを得て厭離心を生ぜるを觀、即ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ世尊、第六日の變化なり。第七日に於て、世尊は空中に在して諸大衆の爲に說法したまふに、但如來の說法の聲のみを聞いて而も形を見ず。時に諸大衆、世尊の神力變化の是の如きを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て厭離心を生ぜり。時に世尊、諸大衆の未曾有なることを得、厭離心を生ぜるを觀、即ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。第八日の時、諸居士の外道を信ずる者、使を遣し諸外道を喚ぶらく、『汝曹、知るや不や。沙門瞿曇、已に神力を現ぜること今に於て八日なり。汝曹、何が故に來らざるや。』彼來らんと欲するも、而も來ることを得ず。時に世尊、諸比丘に告げて言はく、『若し不蘭迦葉を堅鞕皮を以て其身を纒縛し、並に牛もて之を牽かしめ、皮繩斷じ、身形を破壞せしむとも、若し已見を捨てざれば、而も論議を爲すが故に、終に我所に來至すること能はざらん。乃至尼犍子等も亦復是の如し。』時に梵天王、天帝釋に告げて言はく、『諸外道人、自ら世尊と等しと言ふも、而も來つて世尊と神力を捔現すること能はず、今、其高座を破滅す可し。』時に天帝釋、四天王に告ぐらく、『諸外道、自ら世尊と等しと言ふも、而も來つて世尊と神力を捔すること能はず。今、其高座を破滅すべし。』時に四天王、即ち風神雲雨神雷神を召して、是の如きの言を告ぐらく、『諸外道は自ら世尊と等しと言ふも、而も來つて世尊と神力を捔すること能はず。今其高座

を破壞し、散滅して餘無からしむ可し」と。時に風神等、四天王の教を聞き已つて、即ち外道の高座を取り、破散し、滅して餘無からしむ。時に諸外道、風雨飄激を得て即ち草木叢林山谷窟中に入りて、而も自ら藏竄せり。時に露形斯尼外道波梨子波私婆闍伽有り。大石を以て頸に繋け、自ら深淵に投ぜり。時に諸大衆、世尊の神力變化を見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得、厭離心を生ぜり。世尊、即ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ世尊第八日の變化なり。第九日に於て世尊は須彌山上に於て大衆の爲に說法したまふに、但其聲のみを聞いて其形を見ず。時に諸大衆、世尊に是の如きの變化有るを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て、厭離心を生ぜり。世尊、即ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ世尊が第九日の變化なり。第十日に世尊は梵天上に於て說法したまふ。時に諸大衆、但其聲のみを聞いて其形を見たてまつらず。時に諸大衆、世尊に是の如きの變化有るを見たてまつり、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て厭離心を生ぜり。世尊、即ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ如來が第十日の變化なり。第十一日に於て、世尊は大衆の中に於て神足變化を現じたまふ。一身を多身と爲し、多身を一身と爲し、近現處、若くは遠く見ざる處に於てし、若し近くは山障石壁に身過ぐるも礙り無く、空中に遊行すること鳥の飛翔するが如く、地に出沒すること猶し水波の若く、水を履んで而も行くこと、地に遊歩するが如く、身より烟焰を出すこと猶し大火の若く、手もて日月を捫摸し、身は梵天に至

る。時に諸大衆、世尊に是の如きの變化有るを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得。厭離心を生ぜり。世尊、卽ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ世尊が第十一日の神足變化なり。第十二日に於て、世尊は大衆の中に於て、心に念じて說法したまはく「是は念ずべし、是は念ずべからず。是は思惟すべし、是は思惟すべからず。是は斷ずべし、是は修行すべし」と。此時諸大衆、世尊の神足變化の是の如きを見たてまつり、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て厭離心を生ぜり。世尊、卽ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ世尊が第十二日の神足變化なり。第十三日に於て、世尊は大衆の爲に說法教授したまはく、「說法教授者は、一切皆熾然なれ、云何が一切皆熾然なる。眼熾然、色熾然、識熾然、眼觸熾然、眼觸因緣有受の若は苦、若は樂、若は不苦不樂是も亦熾然なれ、誰熾然、貪欲瞋恚癡火も熾然、生老病死憂悲苦惱も熾然なれ、苦緣は是れ生、耳鼻舌身意も亦是の如し。一切皆熾然なれ。」爾時大衆、世尊の是の如きの說法教化を聞き、皆大に歡喜し、未曾有なることを得たり。卽ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。此は是れ如來が第十三日の變化なり。第十四日に於て、次供の檀越は一掬の花を以て世尊に授く。世尊、嗅き已つて空中に擲著したまふに、佛神力の故に、變じて萬四千の華臺樓閣と爲り、華臺樓閣の中に一切皆座有り、佛の左右面に、天帝釋梵、合掌敬禮して偈を說いて言はく、

丈夫王、大人の最無上に敬禮したてまつる

一切は能く知る無し、世尊の所依は禪なり

爾時大衆、世尊の神力變化の是の如きを見たてまつり、皆大に歡喜し、未曾有なることを得たり。世尊、即ち爲に說法したまひ、乃至法眼淨を得たること上の如し。爾時、摩竭瓶沙、次で十五日に供を設く。即ち夜に於て種種の美食を辦じ、夜過ぎ已つて明日、種種の多美飲食を以て佛及び僧に飯じ、幷に波羅殊提王、優陀延王、梵施王、波斯匿王、末利夫人長者須達多富羅那、一切の大衆を皆供養し滿足せしめ、食已つて鉢を捨て、王瓶沙、更に卑床を取つて佛前に於て坐す。時に世尊、加趺坐を壞し、脚を案上に申し、足、案上に至る。時に地、六反十八種の震動を作す。時に世尊、足下に相輪有り、輪に千輻有り。輪郭成就し、輪相具足せり。光明晃曜として輪從り光を出し、光、三千大千國土を照す。時に摩竭王、世尊が足下の輪相の是の如きを見、即ち座從り起ち、偏に右肩を袒き、右膝を地に著け、世尊に白して言さく、「世尊、往昔に何の福德を作してか、此足下に千輻輪相有り、光明晃曜として輪中に光を出し、光、三千大千國土を照すことを得たまへる。」爾時、佛、瓶沙王に告げたまはく、「乃往過去世時に、王有り、利益衆生と名く。閻浮提王爲り。時に閻浮提は、國土豐饒にして人民は熾盛快樂なり。八萬四千の城有り、聚落五十五億有り。時に利益衆生王が所住の城を慧光と名く。東西十二由延、南北七由延、其城廣大にして人民熾盛、財物無限にして嚴飾快樂せり。王の第一夫人は慧事と字く。兒息無し。彼兒の爲の故に、種種諸天、河水池水滿善天、寶善天、日月天、帝釋、梵天王、地水火風神、摩醯首羅天子、

園神林神、巷陌諸神、鬼子母、聚落諸神に禮事し、處處に供養して、願うて子有らんことを求む。後、異時に於て王の第一夫人懷娠せり。女人に三種の智慧有り。男子に欲意有りと看ると知ると、得胎時を知ると、所從得處を知るとなり。時に夫人、即ち王の所に往いて白して言さく、『王知るや不や。我今懷妊せり。』王言はく、『大いに善し』と。即ち夫人の爲に倍增に供養し、最上の飲食衣服醫藥臥具を以てし、一切の所須、皆增一倍せり。十月滿じ已つて一の男兒を生めり。顏貌端正なり。時に兒の生ずる日に、八萬四千の諸城の八萬四千の伏藏、自然に涌出し、藏に銀有る者は銀樹涌出し、根莖枝葉皆是れ白銀なり。藏に金有る者は、金樹涌出し、根莖華葉皆悉く是れ金なり。藏に琉璃有る者、頗梨有る者、亦眞珠有る者、馬瑙有る者、車渠有る者、皆亦是の如し。爾時、國法は、若し兒初めて生ぜば、若は父母爲に字を作り、若は沙門婆羅門爲に字を作る。時に王利益衆生、是念を作さく、『何ぞ沙門婆羅門の爲に字を作すを須ひしや。此兒の母の字は慧事なり。我今寧ろ兒を字して、慧燈と爲す可し。』彼即ち字して慧燈と爲す。時に王、其兒の爲に四種の乳母を置く。一には治身、二には浣衣、三には乳養、四には戲笑なり。治身母とは、身形支節を修治し、浣衣母とは、衣服を浣濯し、身形を洗浴することを爲すなり。與乳母とは、與乳と主知し、遊戲母とは、若し王子が象馬車乘もて遊戲する時に在つて、華香寶物種種の玩弄の具を與へ、共に嬉戲し、孔雀蓋を持して後に在り。娛樂せる王子に快樂を得しむるなり。爾時、世尊、師に偈を說つて言はく、

一切は要ず盡に歸し、高き者は會ず當に墮すべし
生者、死せざること無く、命有るもの皆無常なり
衆生は有數に墮す、一切皆有爲なり
一切諸の世間は、老死せざること有ること無し
衆生は是れ常法なるも、生生皆死に歸す
其所造の業に隨つて、罪福に果報有り
惡業は地獄に墮し、善業は天上に生じ
高行は善道に生じ、無漏涅槃を得ん

時に利得衆生王命終し、王子轉た大にして年八九歲に至る。其母、諸の伎藝、書畫算數戲笑歌舞伎樂、象馬騎乘車を敎學し、射を學しては勇健捷疾、諸の伎藝に於て、皆悉く綜練せり。年十四五に至れる時、諸の群臣、王子の所に至り、白して言さく、『知るや不や。王已に命終したまへば、今次應に王位に登り、王と爲つて敎令を施行せらるべし』と。王子答へて言はく、『我王と爲りて王の敎令を行ずること能はず。何を以ての故に。我前世の時に、曾て國王と爲りて六年を經たり。是因緣を以て、地獄に墮在すること六萬歲なり。是故を以て、今王と爲つて、王の敎令を行ずること能はず。』諸臣言はく、『頗し方便有らば、王と作りて王の敎令を行ずることを得可きや不や』答へて言はく、『有り。』『何者が是なる。』答へて言はく、『若し能く閻浮提の若は男、若は女の能言の者をし

て、皆十善を行じ、不殺生乃至不邪見者ならしめば、我當に王と爲るべし。』時に諸臣、王子の教を聞き已つて、即ち使を遣し書を持つて四方に唱令し、是の如きの言を作さく、『汝等知るや不や。』利益衆生王已に命過し、王子慧燈、次で應に王爲るべきに、是の如きの言を作さく、『我王と爲らず。乃ち閻浮提の若は男、若は女の能言の者をして皆十善を行じ不殺生乃至不邪見者ならしめば、我當に王と爲るべし』と。時に諸の國人、是の如きの教を聞き、盡く十善の不殺生乃至不邪見を修行せり。諸臣、即ち王子慧燈の所に往いて白して言さく、『王子知るや不や。閻浮提人の若は男、若は女の能言の者、皆十善の不殺生乃至不邪見を行ぜるを。今王位に登り、王の教令を行ず可し。』王子言はく、『絹を取つて來れ。』即ち第一白絹を授け與ふるに、自ら頭上に繋けて是の如きの言を作さく、『是の如きの時に是の如きの王有り、善好きや不や。』諸臣答へて言はく、『甚だ善し。』時に諸臣、王に白して言さく、『王が初生の時、八萬四千の藏有つて自然にして出でたり。今取りて王の藏に入る可し。』王の言はく、『何ぞ藏に入るを須ひん。即ち彼四交道頭に於て、沙門婆羅門貧窮孤老に布施し、求索する所の者に隨つて、一切施與す可し』と。時に諸大臣、慧燈王の教を聞き已つて、即ち八萬四千の藏に於て、所在の藏に隨つて四城門中の四交道頭に於て、沙門婆羅門貧窮孤老に布施し、其所索に隨つて、一切に施與せり。時に天帝釋、便ち是念を作さく、『王慧燈は八萬四千城に於て、所在の藏に隨ひ、皆四城門中の四交道頭に於て、沙門婆羅門貧窮孤老に布施し、其所索に隨つて一切に施與せり。將に恐らくは來

つて我座を奪はんとせん。我今寧ろ往いて王慧燈を試む可し。無上道を以て不退轉の故に布施すとせんや、退轉を以てすとせんや」と。彼即ち化して男子と作り、自ら相謂つて言はく、『王慧燈は我等をして十悪の殺生乃至邪見を行せしむ』と。時に諸大臣、皆王所に往いて白して言さく、『王實に國人をして十悪の殺生乃至邪見を行せしめしや』と。王、答へて言はく、『不なり。何を以ての故に。我先に是語を行つて、我王と作らざるも、乃ち閻浮提人の能言の類をして、皆十善の不殺生乃至不邪見を行せしめば、我當に王爲るべし』と。是故に我に是語無し。汝等、今、象乘を嚴駕す可し。我自ら行じて國人を教化せんと欲す。

四分律巻第五十一

四分律　卷第五十二　第四分之三

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

雜犍度之二

【一】前卷の續き先づ神通變化の示現を績いて明す。

(一)時に天帝釋、是の如きの念を作さく、『我應に王をして世間の常乘に乘ぜしむべからず。』即ち天像を嚴駕す。象に六牙有り。牙皆麤大なり。門外に置けり。時に王慧燈、是の如きの象駕を見て、諸大臣に問はく、『此は是れ誰の象なるや。』諸臣答へて言はく、『是れ誰の象なるやを知らず。此は是れ必ず王の象ならん。餘人の有に非ざるなり。願くば王、便ち之に乘ぜらる可し』と。王、即便ち乘ず。王の言はく、『去つて我に示す可し。彼人の我國人をして十惡を行ぜしむと言へる者を。』彼、即ち王に示す。王問うて言はく、『王慧燈は汝をして十惡を行ぜしめしや。』答へて言はく、『實に爾り。』王、復問うて言はく、『方便有らば十善を行ず可きや不や。』答へて言はく、『有り。』問うて言はく、『何者か是なる。』彼、答へて言はく、『若し菩薩生を成就することを得、其肉を食ひ、其血を飲まば、乃ち十善の不殺生乃至不邪見を行ずることを得ん。』時に王慧燈、是の如きの念を作さく、『我無始世已來に於て、衆苦を經歷し、五道に輪轉し、或は截手截脚、截耳鼻出眼截頭を受

くるも、竟に何の益する所か有る』と。即ち利力を取つて自ら股肉を割り、器を以て血を盛り、彼人に授與し、而も之に告げて曰はく、『男子、汝、此肉血を食飲す可し。十善を行ず可し。』時に彼男子、王慧燈の威德に堪へず。即ち沒して現ぜず。忽ち天帝有りて而も前に在つて立ち、王に問うて言はく、『王、今の布施するや、一天下、二三四天下の爲にするや。日月天帝釋魔王梵王の爲にするや。』王、答へて言はく、『我が布施たるや、一天下、二三四天下乃至魔梵王の爲にせず。我、是の如きの意を作さく、布施を行じて、無上正眞一切智を求め、未度者を度し、未解者を解し、未得涅槃者をして涅槃を得しめ、生老病死憂悲苦惱、是の如き等の者を度せんと欲す』と。時に天帝釋、便ち是念を作さく、『我今、王慧燈をして此瘡を以て死せしむるは、甚だ所以に非ず。當に天の甘露を以て、其身上に灌ぐべし』と。即便ち之を灌ぐに、瘡即ち平復すること故の如し。佛、瓶沙王に告げたまはく、『爾時の利益衆生王とは豈異人ならんや、即ち今の文王白淨是なり。時に王の第一夫人とは、今の母摩耶是なり。時の王慧燈とは、即ち我が身是なり。我、前世に於て、閻浮提の無數の人民を教化し、若は男、若は女の能言の者は、皆十善の不殺生乃至不邪見を行ぜしむ。是因緣を以て、足下千輻相の輪郭を成就し、光明晃曜として三千大千國王を照らせり。』爾時、大衆は、世尊に是の如きの神力變化有るを見、皆大に歡喜し、未曾有なることを得て厭離心を生ぜり。世尊は、諸大衆の皆大に歡喜し、厭離心を生ぜるを觀、爲に無數の方便もて說法し、無數百千人は即ち座上に於て遠塵離垢し、法眼淨を得

【二】次に食鉢について。

しめたまふ。此は是れ世尊が第十五日の變化なり。

（二二）爾時世尊、王舍城に在したまふ。時に王瓶沙、諸比丘が宮閣に入出するを聽して、疑難有ること無し。時に王、安人をして屏處に著いて聽かしめ、若し比丘の言說せる所有らば便ち來つて我に語れと。彼重宮閣は、貴價の尸餘婆材を以て柱と爲せり。諸比丘、見已つて是の如きの言を作さく、『乃ち此貴價の材を以て柱を作るや、諸比丘の爲に、鉢を作るも亦佳ならずや』と。時に彼屏處人、聞き已つて、即ち往いて王に白せり。王即ち人に勅して、更に新柱を作り以て取易へ、持つて鉢を作りて諸比丘に施與せり。諸比丘、受けずして言はく、『佛、未だ我等に尸餘婆木の鉢を畜ふるを聽したまはず』と。時に諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に木鉢を畜ふるべからず。此は是れ外道法なり。若し畜へんには如法に治すべし。』時に瓶沙王、石鉢を以て諸比丘に施す。諸比丘、受けずして言はく、『佛、未だ我等に石鉢を畜ふるを聽したまはず』と。佛に白す。佛、言はく、『應に畜ふるべからず。此は是れ如來法の鉢なり。若し畜ふれば偷蘭遮を得ん。』時に瓶沙王、金鉢を作つて比丘に施せり。比丘、受けずして言はく、『世尊、未だ我等に金鉢を畜ふるを聽したまはず。』佛に白す。佛、言はく、『比丘は應に金鉢を畜ふるべからず。此は是れ白衣法なり。若し畜ふれば如法に治すべし。』時に王瓶沙、復銀鉢を作り、琉璃鉢を作り、寶鉢を作り、雜寶もて鉢を作つて、諸比丘に施せり。比丘、受けずして言はく、『佛、未だ我等に是の如きの鉢を畜ふるを聽したまはず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に是の如

きの鉢を畜ふるべからず。此は是れ白衣法なり。若し畜ふれば如法に治すべし。」爾時世尊、婆伽提國に在したまふ。毘舍離跋闍子比丘は、金鉢を畜へたり。佛、言はく、「應に畜ふるべからず。」彼、銀鉢、琉璃鉢を畜へ、寶鉢を畜へ、雜寶鉢を畜ふ。佛、言はく、「應に畜ふべからず。」「汝等は癡人なり。我が所制を遮けて更に餘事を作す。自今已去、一切の寶鉢は應に畜ふべからず。若し畜へんは應に法に治すべし。」爾時、世尊、毘舍離に在したまふ。諸梨奢、大價の摩尼鉢を得たり。旃檀末香を以て鉢に滿らて、世尊に奉る。「大德、願くば慈愍の故に、此摩尼鉢を受けたまへ。」佛、言はく、「梨奢、我應に此鉢を畜ふべからず。」復佛に白して言さく、「願くば慈愍の故に、旃檀末香を受けたまへ。」世尊、即ち受けたまふ。時に諸梨奢、念言すらく、『當に此鉢を持して誰にか與ふべき』と。中に有るが言はく、『不蘭迦葉に與へよ。』或は有るが言はく、『末伽梨瞿舍羅阿夷頭翅舍欽婆羅に與へよ。波休迦旃延に與へよ。刪若毘羅吒子に與へよ。尼揵那耶子に與へよ。薩遮尼揵子に與へよ』と。彼即ち鉢を持つて薩遮尼揵子に與ふ。時に薩遮尼揵子、毘舍離の諸梨奢が大價の摩尼鉢を以て、先に瞿曇沙門に與へ、當に受けざれば後に來つて我に與ふと聞き、彼、憍慢貢高嫉妬の心を懷き、瞋恚して喜ばず、自ら愼護せず、便ち惡言を作さく、「若し汝等をして、諸の梨奢子を殺して舌を鉢に滿たしめば、爾らば、乃ち當に受くべし」と。彼、是念を作さく、「薩遮尼揵子、大に我等種族を傷毀せんと欲せり」と。即ち一石を以て打殺せんとす。彼、自ら料理して前の惡言を解せんと欲せるも、而も語るを聽かずして便

ち打殺せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し語ることを得ば、事必ず解することを得ん。』佛、言はく、『五法攝言有り、自ら理を申ぶることを得ば、咎責せられず、彼をして歡喜せしめ、後に悔恨無からん。』何等か五なる。善者は便ち說き、不善者は說かず、如法なるは便ち說き、不如法なるは說かず。愛言は便ち說き、不愛言は說かず。實を以て說き、虛詐を爲さず、利益の故に說き、無利を以てせず。是の如きの五法攝言有り、自ら理を申ぶることを得ば、咎責せられず、彼をして歡喜せしめ、後に悔恨無からん。卽ち偈を說いて言はく、

　善說者は勝るるに近く、法說に非法無し
　愛語と眞實語とは、利益にして損有ること無し
　善く言を說く者は、己をして熱惱無からしむ
　亦他人を侵さず、是言を善說と爲す
　善く愛言を說かば、彼に所責せられず
　說時に不愛無くば、諸惡も來集せず
　至誠甘露說は、實語と最上と爲す
　眞實なること佛法の如くんば、便ち涅槃に住せん
　佛の說法したまふ可き所は、安隱にして涅槃に至らん
　能く苦際を盡す、此言は最も善說なり

時に瓶沙王、比丘に鐵鉢を布施せり。比丘受けずして言はく、『佛、未だ我等に鐵鉢を畜ふるを聽したまはず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『鐵鉢を畜ふるを聽す。』時に鐵作者の出家せる有り、諸比丘の爲に鉢を作らんと欲し、佛に白す。佛、言はく、『作るを聽す。』彼爐を須ひんと欲す。佛、言はく、『作るを聽す。』彼、堆鉗を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼、韛囊を須ひんとす。『作るを聽す。』彼、錯を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼、鑽器を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼、鑽器諸物の零落せんを患ふ。佛、言はく、『囊を作つて盛り、杙上に龍牙杙上に著くるを聽す。』彼、鉢を畜ふるに、熏せざれば垢を生じ臭を患ふ。佛、言はく、『熏ずるを聽す。』彼、云何が熏ずるやを知らず。『爐若しは竈若しは釜を作り、種種の泥もて塗り、杏子摩子泥を以て裹み、灰を以て地を平にし、熏鉢場を作り、安支に鉢を以て上に置き、鉢爐もて上を覆ひ、灰を以て四邊を擁し、手を按じて堅からしめ、若しは薪、若しは牛屎を以て四邊を擁し、之を燒くを聽す。當に是の如く熏ずることを作すべし。』爾時、世尊、蘊摩國に在りて人間に遊行したまふ。時に信樂せる陶師有り。世尊爲に泥處を指授し、語つて言はく、『此處の土を取れ、是の如きの打を作せ、是の如く曬燥せよ。是の如き泥を作れ、是の如く調せよ。是の如きの鉢を作れ、是の如く指摩せよ。是の如く曬乾し已つて大堅爐を作れ。鉢を安じて中に置き、蓋を以て上を覆うて泥塗せよ。若しは佉羅陀木を以て、若しは棗木を以て、若しは尸賒婆木阿摩勒木を以て、四邊に安じて之を燒け。』彼、即ち佛の所教の如く、隨次に作

して即ち成じ、異貴好の蘇摩鉢を持つて諸比丘に與ふ。比丘、受けずして言はく、『世尊は未だ我等の是の如きの鉢を畜ふるを聽したまはず』と。佛に白す。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』時に世尊、優伽羅村に在り、時に諸比丘、優伽羅鉢を得たるも受けずして言はく、『佛、未だ我等が是の如き鉢を畜ふるを聽したまはず』と。佛に白す。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』爾時、世尊、優伽賒に在したまふ。諸比丘、優伽賒鉢を得たるに受けずして言はく、『佛は未だ我等が此の如きの鉢を畜ふるを聽したまはず。』佛に白す。佛、言はく、『受くるを聽す。』時に世尊、毘舍離に在したまふ。諸比丘、黒鉢を得たるに受けずして言はく、『佛、未だ我等に黒鉢を畜ふるを聽したまはず』と。佛に白す。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』爾時世尊、舍衞國に在したまふ。時に諸比丘、赤鉢を得たるに受けずして言はく、『佛は未だ我等に是の如きの鉢を畜ふるを聽したまはず』と。佛に白す。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』六種の鉢有り、鐵鉢、蘇摩鉢、優伽羅鉢、優伽賒鉢、黒鉢、赤鉢なり。此を總ずれば二種の鉢と言ふ、鐵鉢と瓦鉢となり。一斗半を受く有り、三斗を受くる者有り。此れ應に受持すべし。』彼、鉢を地の墮せんと欲する處に著けり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を石の墮ちんと欲する處に安ぜり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を欄閣の上に安ぜり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を道中に安ぜり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を石上に安ぜり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を行菓樹の下に安ぜり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼

鉢を不平處に安せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、一手もて兩鉢を捉ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。指の中間を隔つるを除く。』彼、一手もて兩鉢を捉へて戸を開く。佛、言はく、『應に爾すべからず。用心をば除く。』彼、鉢を戸扉の後に安せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を戸前に安ず。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢を繩床木床の下に安ず。佛、言はく、『應に爾すべからず。須臾の間を除く。』彼、鉢を繩床、木床の角頭に安ず。佛、言はく、『應に爾すべからず。須臾の間を除く。』彼、立つて鉢を洗へるに、地に墮して破れたり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、故に鉢を失して破れしめ、更に新しき者を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、長物を持つて鉢中に著く、佛、言はく、『一切の物、應に鉢中に著くべからず。』彼、鉢中に畫いて蒲桃蔓蓮華像を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢中に萬字を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢に畫いて己れの名字を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、鉢の四邊若くは口に纏ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼、都て鉢を纏綴せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に兩分を纏ひ、一分を留むべし。若し星孔有らば、多く盡く纏ふべし。』彼、鉢を安じて地に著けて壞熏せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に泥漿を以て地に灑いで安ずべし。若し故に壞熏せんには、應に葉上若は草上に安著すべし。若し故に壞熏せんには、應に鉢支を作るべし。若し復壞熏せんには物を以て底と縵せよ。』彼、寶を以て底を縵す。佛、言はく、『應に寶を用ふべから

ず。應に白鑞鉛錫を以てすべし。』彼、墮落を患ふ。佛、言はく、『應に胡膠若は蠟膠を以てすべし。』彼、鉢を洗はずして便ち擧ぐ。餘比丘見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に洗して擧すべし。』彼、澡豆を以てせず、洗膩して去らず。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に澡豆、若は土、若は灰、若は牛屎、若は泥を用て洗ふべし。』彼雜沙牛屎を以て鉢を洗ひ、鉢を壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に器を以て水を盛り、牛屎に漬け、沙を澄去し、用て鉢を洗ふべし。若は、細末細泥、若は葉、若は華、若は葉を以て之を洗ひ、取つて膩を去らしめよ。鉢に星目孔有つて、食中に入れるを摘出せば、鉢を壞せん。摘出す可きに隨つて便ち摘出せよ。餘は出すべからざれば苦無けん。』彼鉢を洗ひ、乾かざるに擧せよ。垢を生せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に乾かしめ已つて擧すべし。』手もて鉢を捉ふるに護持し難し。佛、言はく、『一鉢囊を作つて盛るを聽す。』囊口を繫がざれば鉢出づ。佛、言はく、『應に縄もて繫ぐべし。』手もて鉢囊を捉ふるに護持し難し。佛、言はく、『應に帶を作つて肩に絡むべし。』時に比丘、鉢を腋下に挾み、鉢口を脇に向け、道行せるに雨に遇ひ、脚趺して地に倒る。鉢、脇を隱せば遂に患を成ず。佛、言はく、『應に爾すべからず。鉢口を外に向くべし。』蘇摩鉢を囊中に出入せんに、破れんことを患ふ。佛、言はく、『應に函若は箱を作つて盛るべし。』彼寶を以て、函若は箱を作る。佛、言はく、『應に寶を以て作るべからず。應に舍羅草若は竹木を以て作るべし。若し鉢相棖せば、應に草樹葉、若は十種衣中の一一の衣を以て、障

【三】菴婆羅菓を食するを聽す。

隔を作るべし。』若は函箱の口より出づ。佛、言はく、『應に蓋を作るべし。彼、寳を用て蓋を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に舍羅草若は竹木を用て作るべし。若し安處堅からざれば、應に帶を以て龍牙杙上に繫ぐべし。』

（三）爾時世尊、王舍城に在したまふ。時に王瓶沙、菴婆羅園に諸比丘の出入を聽して疑難有ること無し。時に六群比丘、守園人の所に至つて語つて言はく、『我菴婆羅菓を須ひんとす。』彼即ち與ふ。復更に索む。次に復更に與ふ。是の如く、遂に彼菓を食し盡せり、後異時に、王、菴婆羅菓を須ひんとす。傍臣に勅して菓を索む。臣即ち勅を受け、守園人の所に至つて菓を索む。彼答へて言はく、『菓盡きたり』と。問うて言はく、『何が故に盡きたるや。』彼答へて言はく、『沙門釋子、食盡せり』と。彼大臣、即ち譏嫌して言はく『沙門釋子は厭足することを知らず、求欲する所多し。自ら我正法を知ると言ふも、是の如くんば、何ぞ正法有らんや。施者厭ふこと無しと雖も、受者應に足ることを知らず。云何が乃ち王菓を食し盡せるや』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に菴婆羅菓を食すべからず。』爾時、諸比丘、乞食して菴婆羅菓汁を得たり。佛、言はく、『飲むを聽す。』彼、成煮せる菴婆羅菓を得たり。佛、言はく、『食するを聽す。』彼、菴婆羅菓の漿を得たり。佛、言はく、『飲むを聽す。若し未だ酒を成せざれば、非時飲を聽さんも、酒を成ぜば應に飲むべからず。若し飲まば應に如法に治すべし。』後、異時に於て菴婆羅菓大に熟せり。阿難、喜んで此菓を食し、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、佛に白

【四】拘執を被る等衣服の義について明す。

して言さく、『菴婆羅菓大に熟せり』と。爾時、世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、諸比丘の爲に隨順說法し、無數の方便もて頭陀端嚴小欲知足にして智慧有る者を讃歎し、諸比丘に告げたまはく、『自今已去、菴婆羅菓を食するを聽す。』

(四)爾時、世尊、拘睒彌に在したまふ。時に六群比丘、反つて拘執を被り、更に相恐戲せり。時に諸居士見て、皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は、厭足することを知らず、自ら我正法を知ると稱するも、反つて拘執を被り、更に相恐戲せること、王大臣の如し。是の如くんば何ぞ正法有らんや。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に反つて拘執を被るべからず亦應に更に相恐戲すべからず。』時に病比丘、拘執を被れるに毛內に在れば、毛瘡に著いて痛を患へぬ。佛、言はく、『裏に襯身衣を著けよ。若し熱を患ふれば、應に反被し、袈裟を以て上に覆ふべし。』時に比丘、衣壞れたり。佛、言はく、『應に補治すべし。』云何が補するやを知らず。佛、言はく、『若は綖を以て縫ひ、若は竝べて綖もて縫ひ、孔處有らば物を以て補へ。』彼孔大なるに、小物を以て補ひ、衣をして縮少ならしむ。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に孔の大小廣さ二指に及ばば補治すべし。若し衣を補す時、縮むを患へば、石を以て四角を鎭めて補せ、若し故に縮まば四角に杙を竪てて之を張れ。若し故に縮まば應に桄を作つて之を張るべし。』云何が作るやを知らず、佛、言はく、『應に木を以て作るべし。』彼繩を須ひて張る。佛、言はく、『與に繩張して之を縫ふを聽す。』何物を以て縫ふやを知らず。佛、言はく、『鳥毛若は簪を以て縫ふを聽す。若し衣細軟

の壞衣ならんには針もて縫ふを聽す。』彼寶を以て、針を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』銅鐵を以て作るを聽す。針もて衣を縫へるに指痛を患ふ。佛、言はく、『揩を作るを聽す。』彼寶を以て指揩を作れり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』銅鐵骨牙角鉛錫白鑞胡膠木を用て作るを聽す。』彼衣を縫ふ時、曲れるを患ふ。繩墨併せて直ならしむべし。』彼絣縷を須ゆ。佛、言はく、『應に與ふべし。』彼染縷を用て衣を絣せんと欲す。『石灰若は赤緒土若は白墠若は墨若は雌黄を須ひよ。一切與ふるを聽す。若し中央不定なれば、應に尺度を以て量るべし。』彼寶を用て尺度を作る。佛、言はく、『應に寶を以て作るべからず。銅鐵を以てし、乃至木を以て作るを聽す。』彼衣を張つて地に著きて縫ふに、塵、衣を坌せり。佛、言はく、『泥漿を以て地に灑ぎ已つて張るを聽す。』彼衣を縫ふ時、鐵を地に刺して壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼除婆羅草の上に於て衣を敷きて縫ふに、草、衣に著けり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼衣を草上葉上に敷き、草葉を合して縫へり。』佛、言はく、『應に爾すべからず。十種衣の中の一一の衣、若は伊梨延陀毳羅毳毳羅毛氎を敷ける上に縫ふを聽す。』彼比丘、繩墨絣綖、尺度縷綖針刀子補衣物の零落せんことを患ふ。佛、言はく、『囊を作つて盛るを聽す。』彼衣桄を擧げざれば雨もて漬かる。佛、言はく、『應に收擧すべし。』何處に擧するやを知らず。佛、言はく、『經行堂の中若は溫室食堂中に安著するを聽す。衣を張れる桄大にして戶受けず、入ることを得ざれば、應に外の雨無き處に置くべし。若し風雨の

【時に等】鉢の修補について。

漂漬する有れば、應に高く懸くべし。」彼衣を補し竟り、衣を解いて餘木を取りて擧せず。佛、言はく、『應に擧すべし。』何處に安著するやを知らず。佛、言はく、『閣下若くは床上に安著せよ。』彼繩索を擧せず。佛、言はく、『應に捲いて衣桁に繫著して之を擧すべし。』時に諸比丘、針の零落せんを患ふ。佛、言はく、『針氈を作るを聽す。』故に零落を患はんには、筒を作るを聽す。』彼寶を以て筒を作る。佛、言はく、『應に寶を用ひて作るべからず。銅鐵乃至竹木を用ひて作るを聽す。』針の筒口より出でんを患ふ。佛、言はく、『應に蓋を安じて塞ぐべし。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ひて作るべからず。銅鐵乃至竹木を用て作るを聽す、若し針鉎せば、應に麯中に著くべし。若し故に鉎を患へば、隨つて餘物に著け、取つて鉎せざらしめよ。』時に諸比丘、針筒刀子碎納縷綖の零落せんを患ふ。佛、言はく、『囊を作つて盛るを聽す。若し此諸物、口從り出づれば、應に繩を以て繫ぐべし。若し手もて捉ふるに、護り難くば、應に帶絡を作つて肩に著くべし。』時に比丘の鐵鉢を穿破せり。佛、言はく、『補するに若は釘を著け、若は朱泥若は樹膠を以て膠するを聽す。』蘇摩鉢穿壞せり。佛、言はく、『湖膠を以て塞ぎ、若は石灰、若は白墡土もてするを聽す。』迦羅黒鉢破れなば、應に鑽もて孔を作り、針を以て牽綴すべし。』彼鑽を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。銅鐵を用ゆるを聽す。』若し縷綖の斷ぜんことを患ふれば、應に筋を用て、若は牛馬の尾毛を用ゆべし。若し蟲の筋綖を噉はんを患へんには、

【五】火を作ることについて。

【六】飲水について。

應に胡膠を以て上に膠すべし。若し食若は水の内に入らんを患ふれば、亦胡膠を以て之を膠せよ。若し復壞せんことを患ふれば、鐵鍱を以て鍱せよ。』

(五)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。諸比丘、阿蘭若處に於て大珠を以て火を出さんとす。賊有り。珠を以ての故に來つて比丘を觸惱せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に阿蘭若處に在り、火珠を以て火を出すべからず。』時に諸比丘、火を須ひんとす。佛、言はく、『比丘の阿蘭若處に於て火衛を作つて火を出すを聽す。火母木を須ひんには作るを聽す。鑽火子を須ひんには作るを聽す。』彼繩を須ひんとす。『所須の物一切を與ふるを聽す。』彼鑽火具の零落せんを患ふ。『囊を作つて盛るを聽す。』安處無ければ濕するを患ふ。『床下若は龍牙杙上に懸著するを聽す。』彼何物を以て火を永くるやを知らず。『應に草若は藥摩若は摩婁者草を以て、若は牛馬屎を以て火を取るべし。』時に比丘、數數火を鑽して手を破り痛を患ふ。佛、言はく、『屏處に於て火珠を以て火を出すを聽す。』

(六)爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。六群比丘、雜蟲水を用ゆ。諸居士見て皆共に譏嫌すらく、『沙門釋子は慈心有ること無し。衆生の命を斷ず。自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に雜蟲水を用ゆべからず。漉水囊を作るを聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『勺形若は三角の如くし、若は横郭を作り、若は漉瓶を作れ。若し細蟲の出でんを患ふれば、沙を囊中に安ずるを聽す。』彼雜蟲の沙を以て陸地に棄つ。佛、言はく、『應に爾すべからず。還、

【七】床について

水中に安著するを聽す。』時に二比丘有り、共に鬪ふ。拘薩羅國に在りて行く、一比丘は漉水囊を持つて水を漉して飮む。共一伴比丘は、從つて囊を借るに與へず。遂に水を飮むことを得ず、患極れり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『有りなば應に與ふべし。比丘は應に漉水囊無くして行くこと乃至半由旬もすべからず。若し無くば、應に僧伽梨の角を以て漉水すべし。』

（七）爾時、世尊、婆祇提國に在したまふ。時に六群比丘、二人同床にして宿れり。餘比丘見て、女人と共に宿れりと謂へるも、後起時に乃ち女人に非ざることを知りぬ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に二人同床にして宿るべからず。』彼疑うて病人と同床せず。佛、言はく、『病人と同床して臥するを聽す。』爾時、世尊、婆祇提國に在したまふ。六群比丘、二人同じき被褥もて臥せり。餘比丘見て女人と共に臥せりと謂へるも、後、起時に方に女人に非ざることを知れり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に二人同じき被褥もて臥すべからず。』時に諸比丘、正に一敷有り。若は草若は葉なり。佛、言はく、『此敷上に各別に敷もて臥し、氈もて臥するを聽す。寒時は正に一被有らば、內に各別に襯身衣を被り、外に通覆するを聽す。』爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に六群比丘、同一の鉢もて食せり。時に諸居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず。自ら我正法を知ると稱するも、是の如くんば何ぞ正法有らん。二人同一の鉢もて食ふこと、猶し王大臣の如し。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に二人同鉢もて食ふべからず。』時に比丘、

【八】其餘の雜事について。

共に一器に飯を盛る。佛、言はく、『應に餘器の中に分つて別食すべし。若し別鉢無くば、食時に半を留めて、彼に與へ、食するを聽す。若し日時過ぎんと欲すれば、一人、一摶食を取り已つて彼人に授與し、食を取らしむるを聽す。』時に六群比丘、亞臥し、案上に枕して食す。時に諸居士見て、皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず。自ら稱して我正法を知ると言ふも、是の如くんば何ぞ正法有らんや。亞臥して食すること、王大臣に似たり。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾るべからず。』時に諸の上座老病比丘、自ら手もて鉢を捉へて食すること能はず。『繩床木床の角頭に著け、若は瓶上に安ずるを聽す。』時に六群比丘、繩床木床の上に於て立てるに、床繩斷じて蓐をして破れしむ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し比丘、所取有り、所舉有らんと欲せば、床榻の上に立つを聽す。』時に諸外道、大繩床もて小繩床を作りて畜ふ。六群比丘、外道が是の如きに法して、繩床を畜ふ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』迦留陀夷は身大なるに、浴室中の床小なれば受けず、彼疑へば敢て外の大床を取らず。小床を作りて浴せり。佛に白す。佛、言はく、『浴室中に大小床を安じて浴するを聽す。』

(八)時に六群比丘、白衣の器なる耕犁若撈を畜ふ。佛に白す。佛、言はく、『應に畜ふるべからず。』彼寶の澡罐澡盤を畜ふ。佛、言はく、『應に畜ふるべからず。』時に比丘有り。耶波徒と名く。或は諸外道の若は火、若は日月、若は不語道種種の外道法に禮事す。諸比丘、

【時に等】執炬について。

佛に白す。佛、言はく、『應に餘の種種外道法に事ふるべからず。』爾時、比丘有り、阿蘭若處に在りて呵食す。餘比丘の語つて言はく、『汝、非時食を犯せり。』彼言はく、『我非時食を犯せず。我呵せしのみ。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『此比丘は適、牛中より此に來生せしのみ。若し其れ爾らずんば久活することを得ず。若し餘比丘に是の如きの病有らば、是の如く以てし、便ち身をして患無きを爲せば、呪食出でんも、未だ出でざるに口還咽むことを得ん。』時に祇桓中に鳥有り、鸚鵡鳥有りて聲を作し、諸の坐禪比丘を亂せり。佛、言はく、『應に聲驚を作して去らしむべし。若は彈弓打木して去らしめよ。』時に諸比丘、夜集まつて布薩處に往いて闇を患ふ。佛、言はく、『執炬を聽す。若し坐處復闇くば、然燈を聽す。彼然燈器を須ひんには與ふるを聽す。油を須ひ、燈炷を須ひんには與ふる聽す。若し明かならざれば、高く炷を出せ。若し油も手を汚さば、箸を作るを聽す。若し箸の火に燒けんを患ふれば、鐵箸を作るを聽す。若し燈炷臥せんを患へんには、炷の中央に鐵柱を安ずるを聽す。若し故に明かならざれば、大いに炷を作るを聽す。若し復故に闇くば、應に室の四角に燈を安ずべし。若し復明ならざれば、應に轉輪燈を作るべし。若し故に明かならざれば、應に室内の四周に燈を安ずべし。若は燈樹を安じ、若は瓶を以て水を盛り、油を安じて上に著き、布もて裹める芥子を以て炷を作りて之を然せよ。』爾時、毘舍佉無夷羅母、人を遣して六種物を送る。獨坐と繩床と火爐と燈籠と掃帚と扇斗となり。諸比丘、受けずして佛に白す。佛、言はく、『受くるを聽す。餘は斗も應に受く

べからず。』時に比丘有り。勇猛と字す。婆羅門の出家なり。世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、『大德、此諸比丘衆が姓、出家の名字亦異にして佛經の義を破せり。願くば世尊、我等、世間の好言論を以て佛經を修理せんことを聽したまへ。』佛、言はく、『汝等は癡人なり。此は乃ち是れ毀損なり。外道の言論を以て而も佛經に雜糅せんと欲するや。』佛、言はく、『國俗言音の所解に隨つて佛經を誦習するを聽す。』爾時比丘有り。拘薩羅國に在つて道行せるに、一屛處に至つて大小便利せんと欲す。時に女人有り。亦屛處に至つて大小便せんと欲す。此處を去ること遠からずして池水有り。時に比丘、彼池水に往いて洗ふ。彼女人も亦彼池水の上に至つて洗ふ。時に諸居士見て、是の如きの言を作さく、『此比丘、彼間より出でて自ら洗ひ、女人も亦爾り。比丘、必ず此女人を犯せり』と。諸比丘、聞いて佛に白す。佛、言はく、『應に是の如きの處に在つて大小便し、人をして疑を生ぜしむるべからず。亦應に池水の上に在つて洗ふべからず。』爾時、跋難陀釋子、向暮に白衣の家に至り、內に在つて坐し、須臾にして便ち出で、主人に語らずして去る。時に賊、白日に其家を伺ひ、暮に門の開けるに遇ひ、卽便ち入つて其家を劫奪せり。家主問うて言はく、『誰か暮に開門して出で去りしぞ。』家人答へて言はく、『是れ跋難陀釋子なり』と。時に諸居士、皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧有ること無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも、乃ち賊と期し、來つて我家を劫めり。是の如くんば何ぞ正法有らん。』時に諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に向暮に白衣の

家に至るべからず。』時に諸比丘、佛事法事僧事塔事病比丘事の爲に、若し檀越、逼暮に比丘を喚べども、疑うて敢て往かず。佛、言はく、『若し是の如き事有らば、應に往くべし。』時に跋難陀釋子、欲意もて女人の爲に法を說かんとす。彼女人察知して卽ち語つて言はく、『汝、何ぞ自ら爲に說法せざるや』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に欲意を以て說法すべからず。』時に六群比丘、女人の與に卜占せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』復人に從つて卜占す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に六群比丘、他と共に物を瞞る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼物を取て便ち取る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘、共に手を携へて道行に在るに、他を撥して地に倒さしむ。時に諸居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず。厭足有ること無し。自ら我正法を知ると言ふも、共に手を携へて道行に在ること王大臣の如し。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘、道路を行くに、人有り、革屣盛油革瓶を施せり。諸比丘、疑うて敢て受けず。佛、言はく、『受くるを聽す。』時に六群比丘、息物を出す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に六群比丘、他に從つて息物を擧す。佛に白す。佛の言はく、『應に爾すべからず。』時に六群比丘、他と共に鬪諍するに反抄衣し、衣もて頸に纏ひ頭を裹み、通肩に衣を被り、革屣を著けて上座と共に語る。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に偏に右肩を露し、革屣を脫し、上座の前に至つて小しく身を曲げ、合掌して是の如きの言を白すべ

【時に等】圓蓋について。

し。「我白する所有らんと欲す」と。上座應に答へて言ふべし、『法の如く、律の如く說け』と。時に跋難陀、道行に在つて好大圓蓋を持す。諸居士道に見て、是れ王若は大臣なりと謂ひ、恐怖して道を避けて去る。彼遠からず諦視して乃ち是れ跋難陀なることを知り、即ち皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は多欲にして厭く無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも、而も大好圓蓋を持して道に在つて行くこと、猶し王大臣の如し。我等をして恐怖して道を避けしむ。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘は應に圓蓋を持して道に在つて行くべからず。亦應に畜ふるべからず。』時に諸比丘、天雨る時、大食上小食上を往き、若し夜集の時、布薩の時、雨に漬り、衣の新染色壞せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『護衣の爲の故に寺内に在り、樹皮若は葉若は竹もて蓋を作ることを聽す。』彼蓋竿を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼寶を用て作る。佛、言はく、『應に寶を用ひて作るべからず。骨牙角白鑞鉛錫木を以て作るを聽す。』彼蓋子を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ひて作るべからず。骨乃至木を用ひて作るを聽す。』彼蓋宏を須ひんとす。佛、言はく、『與ふるを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。骨乃至木を用ひて作るを聽す。』彼覆を作り、頂に蓋せんと欲す。『多羅樹葉摩樓樹葉皮を用ひて覆するを聽す。若し四邊の壞せんを患へんには、重疊を聽す。』彼蓋竿を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ひて作るべか

【時に等】杖について。

らず。骨牙角乃至木を用ひて作るを聽す。』彼蓋竿の長きを作りしに、門中に入出することを得ず。佛、言はく、『應に解脱して作るべし。若し蓋竿の脱せんを患ふれば、應に孔を作りて楔を安ずべし。若は折れ、若は曲らば、鐵を以て楔を作り、頭に鎖を作つて繋ぐを聽す。』時に跋難陀釋子、盛鉢絡嚢中を杖もて貫き、頭肩に荷うて行く、時に諸居士見て、是れ王家人の來れりと謂ひ、恐怖して道を避けて去る。遠からずして是れ跋難陀なることを知り、皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足することを知らず。慚愧有ること無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。亦應に是の如きの杖絡嚢を畜ふべからず。』時に老病比丘、道に行いて地に倒る。佛、言はく、『老病は捉杖するを聽す。杖下頭を患へんには、盡く鐏を作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。骨牙角白鑞鉛錫を用ひて作るを聽す。若し上頭破れなば、亦是の如き等の物を用ひて作るを聽す。』時に六群比丘、空中杖を畜ふ。時に諸居士見て、皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足することを知らず。慚愧有ること無し。自ら我正法を知ると稱するも、乃ち空中杖を持すること、王大臣の如し。是の如くんば何ぞ正法有らん。』時に諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』諸比丘、道を行くに蛇、蠍蜈蚣百足を見たり。未離欲の比丘は皆怖れて佛に白す。佛、言はく、『錫杖を捉へて搖り、若は筒に碎石を盛つて搖して聲を作さしめ、若は破竹を搖して聲を作すを聽す。』時に六群比丘、正大圓扇を捉ふ。諸居

【時に等】扇について。

士見て、皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足することを知らず、慚愧有ること無し。自ら稱して我正法を知ると言ふも、大圓扇を捉ふること王大臣の如し。是の如くんば何ぞ正法有らん』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に畜すべからず。』彼已に成ぜし者を得るに、疑へば敢て受けず。佛に白す。佛、言はく、『受けて與に搭くを聽す。』時に諸比丘、道に在つて行き熱を患ふ。佛に白す。佛、言はく、『樹葉若は枝若は草、十種衣中の一一の衣を以て扇を作るを聽す。』時に六群比丘、皮扇を捉ふ。佛、言はく、『應に畜ふべからず。』六群比丘、縱横せる十木に皮を以て上を縵し、扇を作る。佛、言はく、『應に畜ふべからず。』時に諸比丘、扇壞せり。佛、言はく、『樹皮を以て、若は葉もて補ひ、若は皮もて補ふを聽す。若し墮せば、應に綖を以て縫ふべし。若し穿斷ぜば、應に筋若は綖を以て縫ふべし。若し邊壞せば、應に皮を以て緣すべし。』時に諸比丘、大小食上、若は夜集の時、說戒の時に熱を患ふ。佛、言はく、『大扇を作るを聽す。若は轆轤扇車を作れ。』誰か推すやを知らず。佛、言はく、『比丘若くは沙彌若は守園人若は優婆塞の推すを聽す。』時に六群比丘、織毛氈扇を作つて多くの細蟲若は草を殺せり。時に諸居士見て、皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧有ること無くして衆生の命を害せり。自ら稱して我正法を知ると言ふも氈扇を捉へて衆生の命を害す。是の如くんば何ぞ正法有らん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に是の如きの氈扇を畜ふべからず。』時に諸比丘、蟲草塵露の身上に墮するを患ふ。佛、言はく、『拂を作るを聽す。』云何が作るやを知らず。『草若は樹皮葉を以てし、

【爾時等】算子について。

縷綖を以て作り、若は裁碎せる繒帛もて作るを聽す。』時に比丘有り。尾拂を得たり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『畜ふるを聽す。』爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に優婆離、諸比丘と共に法律を論ぜり。時に諸比丘、共に來つて滅を聽く。他處迮狹なれば相容受せず。佛、言はく、『相降ること三歲なれば共に木床に坐するを聽す。相降ること二歲なれば、共に小繩床に坐するを聽す。新學年少の比丘事數相涉を解せざれば、算子を用ひて記數するを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ゆべからず。骨牙角銅鐵鉛錫白鑞木を用ひて作るを聽す。』彼地に安置して手を汚せり。佛、言はく、『應に地に置くべからず。板上に安ずべし。』彼枚に安じて地に置き已り、復膝上に安じて衣を汚せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。脚を安じて机を作るべし。』彼算子の零落せんことを患ふ。『囊を作つて盛るを聽す。』『繫せざれば口より出づ。』『繩を以て繫げ、杙上龍牙杙上に安ずるを聽す。』

【爾時等】蒜を食ふを聽す。

爾時、世尊、祇桓園中に在したまふ。無數百千衆の與に圍繞せられて說法したまふ。時に比丘有り、蒜を噉ひて佛より遠くに住せり。時に世尊、知りたまふも而も故に阿難に問ひたまはく、『此比丘、何が故ぞ遠くに住せるや。』阿難の言さく、『此比丘、蒜を噉へり。』佛、阿難に言はく、『寧ぞ是の如きの味を貪つて而も法を聽かざるべけんや。自今已去、一切、應に蒜を噉ふべからず。』爾時、舍利弗、風を病む。醫、蒜を服せしめんとす。佛、言はく、『服するを聽す。』

【時に等】負物について。

時に比丘有り。背に物を負うて行く。諸居士、見て皆譏嫌すらく、『沙門釋子は猶し白衣の如し。』背に物を負うて行く。皆慢心

【時に等】起立塔像について。

を生ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に背に物を負うて行くべからず。』時に諸比丘、薪若は染草手屎や紵を須ひんとし、自ら擔持せんと欲す。佛、言はく、『人無き處に擔ふを聽す。若し白衣を見ば、應に下つて地に著け、若は肩上に移すべし。』時に比丘有り。伊梨阿若を衣に著く。諸居士見て皆譏嫌して言はく、『我白衣の如く、是の如き衣を著け、物を擔ふ。皆慢心を生せり。』佛に白す。佛、言はく、『應に是の如きの衣を著くるべからず。亦應に背に物を負うて行くべからず。』時に諸比丘、寺内に於て墼石材木を聚集す。彼畏愼すれば、敢て背負して移徙せず。佛に白す。佛、言はく、『寺内に背負するを聽す。』時に舍利弗、目連般涅槃し已る。檀越有り、是の如きの言を作さく、『若し世尊、我等其爲に塔を起すを聽したまはば、我當に作るべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『作るを聽す。』彼云何が作るやを知らず。佛、言はく、『四方作、若は圓、若は八角作なれ。』何物を以て作るやを知らず。佛に白す。佛、言はく、『石墼若は木を以て作るを聽す。已らば應に泥すべし。』何等の泥を用ふるやを知らず。佛、言はく、『黑泥若は苦泥若は牛屎泥を用ひ、若は白泥を用ひ、若は石灰若は白墡土を用ふるを聽す。』彼塔基を作らんと欲す。佛、言はく、『作るを聽す。』彼華香もて供養せんと欲す。佛、言はく、『四邊に欄楯を作り華香を安じて上に著くを聽す。』彼上に幡蓋せんと欲す。佛、言はく、『懸幡蓋物を安ずるを聽す。』彼塔上に上れるに、護塔神瞋る。佛、言はく、『應に上るべからず。若し上つて所取有るを須ひんには上るを聽す。』彼欄上に上る。護塔神瞋る。佛、言はく、

【時に等】塔供養について。

『應に上るべからず。若し上つて所取有るを須ひんには上るを聽す。』彼杙上龍牙杙上に上る。佛、言はく、『應に爾るべからず。若し上つて所取有るを須ひんには與に上るを聽す。』彼像上に上つて安置供養す。佛、言はく、『應に爾るべからず。應に餘方便を作して蹋上し、蓋を安ずべし。』彼塔を露地にし、華香燈油幡蓋伎樂供養の具を雨漬風飄日曝せば、塵土坌及び烏鳥の不淨もて汚れたり。佛、言はく、『種種屋覆を作るを聽す。』一切屋を作るの所須は應に與ふべし。若し地に塵有らば、應に泥すべし。若は黑泥牛屎泥もてし、若は白を須ひ、石灰泥白墡土泥を以てせよ。彼洗足器を須ひんには與ふるを聽す。』石を須ひて道行を作らんとす。佛、言はく、『作るを聽す。彼地敷を須ひんには與ふるを聽す。』時に外の牆障無ければ牛馬の入ること限り無し。佛、言はく、『牆を作るを聽す。』若し門を須ひんには作るを聽す。』時に舍利弗、目連の檀越、是の如きの念を作さく、『彼二人存在せし時、我常に飲食を供養せり。今已に涅槃せり。若し世尊、我等が上美の飲食を塔に供養するを聽したまはば、我當に送るべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『供養するを聽す。』何の器を用て食を盛るやを知らず。佛、言はく、『金銀鉢、寶器、雜寶器を用ふるを聽す。』云何が持して往くやを知らず。佛、言はく、『象馬車乘に載し、若は舁ぎ、若は頭に載し、若は肩に擔ふを聽す。』時に諸比丘、自ら伎を作し、若は吹貝して供養す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼畏愼すれば敢て白衣をして伎を作さしめず。佛、言はく、『聽す。』彼供養塔飲食の誰か當應に食すべきやを知らず。佛、言はく、『比丘若は

【二】佛の剃髪と佛塔起立について

沙彌若しは優婆塞若し經營作者、應に食すべし。』時に舍利弗、目連の檀越、是念を作さく、『佛、我等に塔を作り供養するを聽したまはば我當に作すべし。』佛、言はく、『聽す。』彼華香瓔珞伎樂幡幡燈油高幢車を須ひんとす。佛、言はく、『作るを聽す。』彼形像を作らんと欲す。佛、言はく、『作るを聽す。』彼云何が舍利を安ずるやを知らず。『應に金塔中、若は銀塔、若は寶塔、若は雜寶塔に安ずべし。若は繒綵を以て裹み、若は鉢肆酰氀婆衣を以て、若は頭頭羅衣を以て裹め。』復云何が持ち行くやを知らず。佛、言はく、『象馬車、乘輦轝に馱載し、若は肩上頭上に擔戴するを聽す。若し傾倒せんと欲せば、應に扶持すべし。』彼自ら伎を作して供養す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼畏愼して、白衣をして伎もて供養を作さしめず。佛、言はく、『聽す。』彼聲聞塔を拂拭せんと欲す。佛、言はく、『應に多羅樹葉若は樓樹葉若は孔雀尾を以て拂拭すべし。』彼に大なる華有り。『塔基の上に、若は[illegible]上、若は龍牙杙上、若は繩中に著くを聽す。若は繩もて貫いて塔簷上に懸著せよ。若し多香泥有らば、手像輪像摩醯陀羅像を作り、若は籐像を作り、若は葡萄蔓像を作り、若は蓮華像を作るを聽す。若し故に餘り有らば、應に地に泥すべし。』

(二)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に世尊を恭敬するが故に、敢て佛の與に剃髪する者無し。正に一の小兒有り。無知なれば、未だ畏るる所有らず。爲に佛を剃髪せり。時に小兒を優波離と字す。佛の爲に剃髪せるに、其父母、世尊の前に在り、合掌して白して言さく、『優波離小兒は世尊の爲に剃髪せり。好しと爲すや不や。』佛、言はく、『善能く剃髪

せり。乃ち身を安樂ならしめんには、而も太しく身を曲ぐ』父母、卽ち語つて言はく、『汝、太しく身を曲ぐること莫れ。世尊をして安からざらしむ。』復佛に問うて言はく、『小兒剃髮せり。好きや不や。』佛、言はく、『善能く剃髮せり。而も身太だ直し。』父母、語つて言はく、『汝、太だ身を直くすること莫れ。世尊をして安からざらしむ。』復、佛に白して言さく、『小兒の剃髮、好きや不や。』佛、言はく、『善能く剃髮せるも、而も入息、太だ麤なり。』父母、語つて言はく、『汝、麤入息すること莫れ。佛をして安からざらしむ。』復、佛に白して言さく、『小兒の剃髮、好きや不や。』佛、言はく、『善能く剃髮せるも、而も出息太だ麤なり。』父母、語つて言はく、『汝、麤出息すること莫れ。佛をして安からざらしむ。』時に小兒優波離、入出息盡きて第四禪に入る。爾時世尊、阿難に告げて言はく、『優波離は已に第四禪に入れり、汝、彼手中の刀を取れ。』阿難、敎を受けて卽ち刀を取る。是時阿難、故き盛髮器を持つて世尊の髮を收む。佛、言はく、『應に故器を以て如來の髮を盛るべからず。應に新器を用ひ、若は新衣若は繒綵、若は鉢𧵡酖嵐婆衣、若は頭頭羅衣もて裹み盛みべし。』時に王子瞿婆離將軍有り。西方に往いて征伐する所有らんと欲す。來つて世尊の鬚髮を索む。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『與ふるを聽す。』彼得たるも云何が安庋するやを知らず。佛、言はく、『金塔中、若は銀塔、若は寶塔、若は雜寶塔繒綵に、若は鉢𧵡酖嵐婆衣、頭頭羅衣もて裹んで安ずるを聽す。』云何が持するやを知らず。佛、言はく、『象馬車乘、若は輦輿、若は頭上、若は肩上に擔ふを聽す。』時

に王子、世尊の髮を持つて去り、所往に征討して勝つことを得たり。時に彼王子、國に還つて世尊の爲に髮塔を起せり。此は是れ世尊が在世時の塔なり。諸比丘、是の如きの言を作さく、『若し世尊、我等に世尊の髮を擔うて行くことを聽したまはば、我等當に持し行くべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『聽す。』云何が安處するやを知らず。佛、言はく、『金塔、若は銀塔、若は寶塔、若は雜寶塔に、若は鉢貰酖嵐婆衣、若は頭頭羅衣もて裹んで安著するを聽す。』云何が持し行くやを知らず。佛、言はく、『象馬車乘輦轝、若は肩上、若は頭上に擔戴せよ。』彼腋下に世尊の塔を挾む。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼反抄衣もて頸に纒ひ、頭を裹み、通肩して衣を被り、若は革屣を著けて、世尊の塔を擔へり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に偏に右肩を露し、革屣を脫し、若は頭に戴かせ、若は肩上に世尊の塔を擔うて行くべし。』彼世尊の塔を持つて大小便處に往けり。佛、言はく、『應に爾すべからず、應に淸淨に持すべし。』彼大小便處に洗はず、世尊の塔を持せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に淨者をして持たしむべし。』彼如來の塔を安じて不好房中に置き、己は上好房の中に在つて宿れり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に如來の塔をば安じて上好房の中に置き、己は不好房に在つて宿るべし。』彼如來の塔を安じて下房に置き、己は上房に在つて宿れり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に如來の塔を安じて上房に在り、己は下房の中に在つて宿るべし。』彼如來の塔と共に同屋に宿れり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼守護堅牢ならんが爲の故に、而も畏愼して敢

て共に宿らず。佛、言はく、『杙上若は龍牙杙上若は頭邊に安じて眠るを聽す。』時に諸の優婆塞、是念を作さく、『若し世尊、我等及び世尊の、現在に塔を起つるを聽したまはば、我當に起立すべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『作るを聽す。』云何が作るやを知らず。佛、言はく、『應に四方若は八角若は圓に作るべし。』復、何物を以て作るやを知らず。佛、言はく、『應に塼石若は木を以て作るべし。一切は上法の如し。乃至地敷も亦上の如し。』彼幢を用ひんとす。佛、言はく、『幢を作るを聽す。若は師子幢、若は龍幢、若は犎牛幢を作れ。』彼塔の四邊に籬障無ければ、牛羊踐蹋して礙ふる無し。『應に籬障を作ること上の如くなるべし。』時に諸の外道、塔廟に常に飲食もて供養を作せり。諸の優婆塞、是の如きの念を作さく、『若し世尊、我に上好食の供養を送ることを聽したまはば、我當に作すべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『作るを聽すこと上の如し。』誰か應に此食を食すべきやを知らず。佛、言はく、『塔作者應に食すべし。』時に諸の外道、常に外道の塔廟を莊嚴し供養せり。諸の優婆塞、是の如きの念を作さく、『若し世尊、我等をして世尊の塔を莊嚴し、供養することを聽したまはば、我當に作すべし。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『作るを聽すこと上の如し。』彼世尊の塔の內に在つて宿れり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔を守らん爲の故なるも、畏愼して敢て塔內に在つて宿らず。佛、言はく、『若し守視せんが爲の者には內に宿るを聽す。』彼塔內に於て物を藏せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼堅牢ならん爲の故に、塔內に於て物を藏せんと欲する

も、而も畏愼して敢てせず。佛、言はく、『聽す。』彼革屣を著けて塔內に入る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼革屣を著け塔を旋りて行く。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼富羅を著けて塔內に入る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼富羅を捉へて塔內に入る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼畏愼して敢て富羅を著け塔外を旋りて行かず。佛、言はく、『聽す。』彼塔の下に於て食せるに汚穢せり。佛、言はく、『應に塔下に食すべからず。』時に諸比丘、塔を旋る時、若し房舍の時、若は浴池の時、衆多僧が集會の處所、迮狹にして相容受せず。彼、畏愼して敢て塔下に在つて坐して食せず。世尊、塔下に在つて坐するを聽したまはずと。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『塔下に坐して食するを聽すも、應に汚穢不淨ならしむべからず。』時に諸比丘、云何するやを知らず。佛、言はく、『不淨なる業物を以て脚邊に聚著し、食し已らば持ち出すを聽す。』彼、死屍を持つて塔下を過ぎたり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔下に於て死人を埋めたり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔下に於て死屍を燒けり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔前に於て死屍を燒けり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔の四面に於て死屍を燒き、臭氣をして入らしめたり。護塔神瞋る。佛、言はく、『應に塔の四面に於て死屍を燒き、臭氣をして入らしむべからず。』彼死人の衣若は床を持つて、塔下に從つて過ぎたり。護塔神瞋る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼糞掃衣を著くるも、比丘畏愼して、敢て糞掃衣を持つて塔下に從つて過ぎず。『世尊に是の如きの教有り。』死人の

衣を持つて塔下を過ぐるを聽さずと。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し淨洗染せるに香を以て之を熏ずるは聽す。』彼塔下に於て大小便せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔前に於て大小便せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔の四邊に於て大小便し、臭氣をして來入せしむ。護塔神瞋る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔下に於て楊枝を嚼めり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔の四邊に於て楊枝を嚼めり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔前に於て楊枝を嚼めり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔下に於て涕唾せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔前に於て脚を舒べて坐せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼塔前に於て涕唾せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。若し僧伽藍内、塔を離つれば、中間に在つて舒脚して坐するを聽す。』爾時世尊、拘薩羅國に在したまひ、千二百五十の比丘と人間に遊行せり。都子婆羅門村に往いて一異處に到れり。世尊笑ひたまふ。時に阿難、是念を作さく、『今世尊、何の因緣を以てか笑ひたまふや。世尊は因緣無きを以て笑ひたまはず』と。偏に右肩を露し、革屣を脫し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『世尊は無因緣を以て笑ひたまはざるに、向に何を以ての故に笑ひたまへるや。願くば之を知らんと欲す。』佛、阿難に告げたまはく、『乃往過去世の時に、迦葉佛有り。般涅槃し已つて、時に翅毘伽尸國王有り。此處に於て、七歲七月七日に大塔を起し已る。七歲七月七日に大供養を與へ、二部僧を象陰の下に於て坐せしめ、第一饌を供せり。時に此處を去ること遠からず、一農夫

有りて田を耕せり。佛、彼田に往き、一摶の泥を取り、來つて此處に置き、而も偈を說いて言はく、

設し百千の瓔珞を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず
設し金百千摶を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず
設し金百千擔を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず
設し金百千抱を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず
設し金百千壁を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず
設し金百千巖を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず
設し金百千山を以てし、皆是れ閻浮檀金ならんも
一摶の泥を以て、佛の爲に塔を起つるの勝るるには如かず

時に諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、皆一摶の泥を以て此處に著き、卽ち大塔を成せ

り。時に諸比丘、屋内の臭を患ふ。佛、言はく、『應に灑掃すべし。若し故に臭くば香泥を以て泥せよ、若し復臭くば、應に屋の四角に香を懸くべし。』時に世尊、毘舍離に在したまふ。時に衆僧、大に飲食供養を得たり。諸比丘不節して遂に患を成ぜり。佛、言はく、『應に服藥すべし。彼吐下を須ひんには、應に吐下を與ふべし。彼粥を須ひんには粥を與へよ。野鳥肉を須ひんには應に與ふべし。』爾時耆婆童子、衆僧の病を治せんとし、佛及び僧の爲に吐下藥を作り、粥及び野鳥肉羹を作れるに、供足すること能はず。世尊の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に住し、世尊に白して言さく、『大德諸比丘、病を得たり。若し諸比丘の浴室を作つて浴するを聽したまはば、病を少くすることを得べし。』時に世尊、默然として聽可したまふ。時に耆婆童子、佛の聽可したまふを知り、卽ち座より起ち前んで佛足を禮し、佛を遶つて去りぬ。時に世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、而も方便隨順説法を爲し、頭陀端嚴少欲知足の、出離を樂ふ者を讃歎したまひ、諸比丘に告げたまはく、『諸比丘の浴室を作つて洗浴するを聽す』と。

四分律卷第五十二

四分律　巻第五十三　第四分之四

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

【一】前巻の續、先づ覆鉢不與往反言語羯磨を明す。

雜揵度之三

(一)爾時慈地比丘、來つて毘舍離國に至る。彼の諸の離奢と親友知識たり。諸の大離奢、慈地比丘の毘舍離に來至せるを聞き、卽ち往いて問訊せるに、慈地比丘、而も答ふることを應ぜず。彼言はく、『長老、我何の犯す所あつてか、故に相問訊せるに而も答を見ざるや。』彼卽ち答へて言はく、『我何を用てか汝等と共に語るを爲さん。沓婆摩羅子は輕慢もて我を惱ませるに、而も汝等の佐助することを見ず。』彼卽ち言はく、『我當に何の方便を作してか沓婆摩羅子をして汝を惱まさざらしむべきや。』答へて言はく、『若し汝往いて佛及び衆僧の大集時を伺ひ、彼に往いて是の如きの言を作せ、「大德、是の如きの事有るは、不善不隨順なり、威儀に非ず、時を得ず。我等、此處を淸淨安樂と謂ひて恐怖有ること無きに、而も反つて憂惱を生ずること、猶し水の火を生ずるが如し。何を以ての故に。沓婆摩羅子、我婦を侵犯せり。衆僧、當に和合すべくんば、與に滅擯を作せ」と。是の如くんば、則ち來つて我を惱まさざらん。』則ち答へて言はく、『此れ何の難きことか有らん。』彼

大離奢、佛大衆の所に往いて、上の如きの言を說く。時に沓婆摩羅子は佛を去ること遠からずして坐せり。時に佛、知りたまへるも、而も故に沓婆摩羅子に問ひたまはく、『汝、彼離奢の語れるを聞けりや不や。』答へて言はく、『聞けり。唯佛のみ之を知りたまふ。』佛、沓婆摩羅子に語りたまはく、『汝、是の如きの答を作すべからず。實には當に實を言ふべく、虛には當に虛を言ふべし。』時に沓婆摩羅子、佛語を聞き已つて座より起ち、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『我生れてより已來、未だ曾て夢中にも婬を犯さず。而も況んや覺せるをや。』佛、言はく、『善い哉、善い哉、沓婆摩羅子、此は是れ好答なり。』爾時世尊、諸比丘に告げて言はく、『汝等、彼大離奢に問へ、無根の不淨法を以て此沓婆摩羅子淸淨比丘を謗ること莫れ。無根の不淨法を以て淸淨比丘を謗らば、大重罪を得ん。』時に諸比丘、世尊の教を聞き、即ち大離奢と共に相詰問すらく、『汝可しく實を說け、此事云何、無根の不淨法を以て沓婆摩羅子を謗ること莫れ。無根の不淨法を以て淸淨比丘を謗らば、大重罪を得ん。』時に諸の大離奢、諸比丘の詰問を得已つて、便ち是言を作さく、『沓婆摩羅子、淸淨にして不淨行有ること無し。此は是れ慈地比丘が我を教へしのみ』と。諸比丘聞くに、中に少欲知足にして頭陀を行じ學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。彼大離奢を譏嫌して言はく、『沓婆摩羅子は實に不淨行無きに、云何が無根の不淨を以て謗れるや。』諸比丘、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、比丘僧を集め、無數の方便を以て大離奢を呵責して言はく、

『汝が所爲は非なり。隨順行に非ず、淸淨行に非ず。云何が無根の不淨法を以て沓婆摩羅子を謗れるや。』無數の方便を以て呵責し已つて諸比丘に告げたまはく、『自今已去、大離者の與に覆鉢不與往反言語を作し白二羯磨を作せ。白衣家に五法有り。應に與に覆鉢を作すべし。父に孝順ならず。母に孝順ならず。沙門を敬はず、婆羅門を敬はず、比丘に供事せず、是の如きの五法有らば、應に與に覆鉢を作すべし。五法有り。應に與に覆鉢を作すべからず。何等か五なる。父に孝順し、母に孝順し、沙門を恭敬し、婆羅門を恭敬し、比丘に敬事するなり。是の如きの五法有らば、應に與に覆鉢すべからず。復十法有り。衆僧は應に與に覆鉢を作すべし。比丘を罵謗し、比丘の爲に損減を作し、無利益を作し、方便もて住處無からしめ、比丘を鬪亂し、比丘の前に於て佛法僧を惡しく說き、無根の不淨法を以て比丘を謗り、若は比丘尼を犯せる、是の如きの十法有らば、僧は應に與に覆鉢を作すべし。是の如き九八七六五四三二一法もて比丘を罵謗せば、僧は應に覆鉢を作すべし。是の如きの一法有らば、僧は應に與に覆鉢を作すべし。應に是の如く作すべし。衆中、應に堪能なる羯磨者を差し、上の如く、是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此大離者は沓婆摩羅子の淸淨なるに、而も無根の波羅夷法を以て謗れり。若し僧時到らば僧ために忍聽せよ。僧、今此大離者の爲に覆鉢不相來往を作せ。白是の如し。大德僧聽け。此大離者は、沓婆摩羅子の淸淨なるに、而も無根の波羅夷法を以て謗れり。今僧、爲に覆鉢不相往來を作す。誰か諸長老、僧が大離者の爲に覆鉢不相往來を作すを忍ばば默然せよ。誰

か忍ばざる者は說け、僧已に忍ばば、大離耆の爲に覆鉢不相往來を作し竟んぬ。僧ために忍んで默然たるが故に、是事是の如く持つ。僧の使を差して大離耆の所に往き、是の如きの言を語るを聽す。僧、汝が爲に覆鉢不相往來を作し、白二羯磨を作すと。八法有る者は應に使を差して往くべし。能く聽き、能く說き、自ら解し、能く他をして解せしめ、能く受け、能く憶持して謬失無く、好惡義を別つ。是の如きの八法有る者は、應に差して僧使と爲すべし。而も偈を說いて言はく、

若し大衆の中に在つて、心に怯弱有ること無く
所說も亦增さず、敎を受くるも損減無く
言に錯亂有ること無く、問時に移動せず
是の如きの比丘有らば、僧使と爲るに堪任せり

阿難は是の如きの八法有り。差して僧使と爲すを聽す。彼大離耆に語れ。今僧、汝が爲に覆鉢不相往來、白二羯磨を作さん。衆中に堪能なる羯磨者を差し、上の如く、是の如きの白を作せ。大德僧聽け、若し僧時到らば僧ために忍聽せよ。僧今、阿難を差して僧使と爲し、大離耆の所に往いて語つて言はく、今僧、汝が爲に覆鉢不相往來を作すと。白、是の如し。大德僧聽け、僧今阿難を差して僧使と爲し、大離耆の所に往いて、是の如きの言を作す。僧、今汝の爲に覆鉢不相往來を作す。誰か諸長老の、僧の阿難を差して僧使と爲すを忍ぶ者は默然せよ。誰か忍ばざる者は說け。僧已に忍び、阿難を差して僧使と爲し、

彼大離奢の所に往いて語つて言はく、「僧、汝が爲に覆鉢不相往來を作し竟んぬ」と。僧ために忍んで默然たるが故に、是事是の如くに持てり。』爾時阿難、衣を著け鉢を持し、彼大離奢の家に往く。時に大離奢、外門屋下に在りて頭を梳れり。遙に阿難の遠く來れるを見、疾疾に髪を收め、前んで阿難を迎へ白して言さく、『大德、善い哉、願くば前んで舍に入れ。』阿難報じて言はく、『我應に汝の家に入つて、床坐飮食の供養を受くべからず。』離奢言はく、『大德阿難、何を以ての故に。』答へて言はく、『僧已に汝が爲に覆鉢不相往來を作すが故に。』離奢の言はく、『何事を以ての故に。』阿難、卽ち爲に具に因緣を說く。彼卽ち言はく、『大德阿難、是の如くんば便ち我を殺さんと爲るや』と。尋いで卽ち悶絕して地に倒れ、久しくして乃ち醒悟め、還起つて手を以て眼を押き、阿難に白して言さく、『我當に何の方便を作してか、我覆鉢を解いて、還相往來すべきや。』阿難の言はく、『汝、應に往いて衆僧に懺悔すべし。』時に大離奢、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて覆鉢を解き、還相往來せんことを乞ふ。時に諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『若し大離奢、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて覆鉢を解き、還相往來せんことを乞はば、應に爲に解き、白二羯磨を作し、衆中に堪能羯磨者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け。今僧、大離奢の爲に覆鉢不相往來を解かんとす。彼衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて覆鉢不相往來羯磨を解かんを乞はんとす。若し僧時到らば僧ために忍聽せよ。僧今大離奢の爲に解覆鉢還相往來を作す。」白、是の如し。「大德僧聽け。僧、大離奢の爲

【一二】更に雑事を明す中、先づ野火についての作法。

に覆鉢不相往來を作すも、彼衆僧に隨順して敢て違逆せず。僧に從つて覆鉢不相往來羯磨を解かんと乞ふ。今、僧、大離者の爲に覆鉢を說き、還相往來せん。誰か、諸の長老の、僧、彼大離者の爲に覆鉢を解き、還相往來せんを忍ふ者は默然せよ。誰か忍ばざる者は說け。僧已に忍んで、彼大離者の爲に覆鉢を解き、還相往來し竟んぬ。僧ために忍んで默然たるが故に是事是の如く持てり。

(一二)時に迦留陀夷、阿蘭若處に在りて住せり。彼道路に於て草を燒く。火勢蔓莚し、遂に乃ち王波斯匿の鹿苑を燒けり。時に居士、皆譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧有ること無く、衆生の命を斷ぜり。彼自ら我正法を知ると言ふも、王の鹿苑を燒けり。是の如くんば何ぞ正法有らんや。』諸比丘往いて、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘、道路を行くに草有りて妨礙す。佛、言はく、『竹を以て草を壓し、若は石、若は木もて上に鎭すると聽す。』時に祇桓外に野火有り、燒けて蔓莚して來至す。諸比丘、云何がするを知らず、卽ち佛に白す。佛、言はく、『中間の草を逆除し、若は坑塹を作つて斷じ、若は土を以て滅するを聽す。』若し逆燒せる時、比丘の羸老なる有り、絡囊の鉢に盛る無く、杖無ければ行くこと能はず。彼是念を作さく、『我當に云何がすべき。』諸比丘に白す。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『僧、彼老比丘に杖と絡囊との白二羯磨を與ふることを聽す。應に是の如く與ふべし。衆中、應に堪能羯磨者を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け。此某甲比丘は羸老なれば、絡囊の鉢を盛る無く、杖無くして行くこと能はず。

【爾時等】下非法如法羯磨について

【爾時等】祝福呪咀について

彼僧に從つて杖と絡囊とを乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽し、某甲比丘に杖と絡囊とを與へよ。」白、是の如し。「大德僧聽け。此某甲比丘は衰老なり。杖絡囊無くして行くこと能はず。今、僧に從つて杖と絡囊とを乞ふ。僧、今此比丘に杖と絡囊とを與へんとす。誰か諸の長老の、僧が某甲比丘に杖と絡囊とを與ふるを忍ぶ者は默然せよ。誰か忍ばざる者は說け。」僧已に忍び、某甲比丘に杖と絡囊とを與へ竟んぬ。僧ために忍んで默然たるが故に、是事是の如く持つ」

爾時舍利弗、衆僧が非法羯磨を作すを見るも、同意者無ければ、默然して之に任ぜんと欲す。佛、言はく、「默然たるを聽す。五法有り。應に默然すべからず、若し如法羯磨なるに而も心に同じからず、默然として之に任じ、若は小罪を見るも而も默然し、爲に別住を作すも、而も默然し、戒場の上に在るも而も默然す。是の如き五法に默然たる者は非法なり。五法有り、應に默然すべし。他の非法を見て而も默然し、伴を得ざるも默然し、犯重なるも而も默然し、同住にも默然し、同住地に在るも默然たり。是の如きの五法は應に默然すべし。五事有り、應に和合すべし。何等か五なる。若し如法なれば應に和合すべし。若し默然なれば之に任じ、若し欲するをば與へ、若し可信人に從つては聞き、若し先に中に在らば默然として坐す。是の如きの五事は應に和合すべし」。爾時世尊、祇桓の中に在し、無數衆の與に說法したまふ。時に世尊嚏せり。諸比丘、呪願して言はく、「長壽なれ。」諸比丘比丘尼、優婆塞優婆夷も亦言はく、「長壽なれ」と。大衆、遂に便ち鬧亂せり。佛、

【爾時等】帶について。

言はく、『應に爾すべからず。』」時に居士有り、噎せり。諸比丘、提愼すれば敢て長壽を言はず。居士、皆譏嫌して言はく、『我等噎せるに、諸比丘は長壽を呪願せず』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『長壽を呪願することを聽す。』」時に諸居士、比丘を禮す。比丘、提愼すれば敢て長壽を言はず。世尊、我呪願を聽したまはずと。諸居士、皆嫌うて言はく、『我等、比丘を禮せるも、比丘は我等の長壽を呪願せず』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『長壽を呪願するを聽す。』」爾時六群比丘、小事有り。便ち呪咀を作して言はく、『我若し是の如きを作さば、當に地獄餓鬼畜生に墮すべく、佛法の中に生ぜざらん。若し餘人是の如き事を作さば、亦當に地獄餓鬼畜生に墮すべく、佛法の中に生ぜざらん。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。是の如きの語を作すを聽す。若し我是の如き事を作さば、南無佛せん。若し汝、是の如き事を作さば、亦言へ、南無佛と。』」爾時六群比丘、腰帶を畜へ、頭に耳を安ず。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼革帶を畜ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』六群比丘、闍提那帶を畜ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼雜綵帶を畜ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。汝等は癡人なり。我所遮を避けて更に餘事を作す。自今已去、是の如きの一切の帶は應に畜ふべからず。』時に六群比丘、長廣帶を畜ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。腰帶の廣さ三指、腰を遶ること三周なるを作ることを聽す。』彼六群比丘、大染眞色もて帶を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼錦帶を作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼白帶を作る。佛、言はく、

【爾時等】瓦器について。

【時に等】誦呪について。

【時に等】口耳の事について。

『應に爾すべからず。』袈裟色の帶を作ることを聽す。爾時、信樂ある陶師有り。種種の器を作つて諸比丘に與ふ。比丘敢て受けず。佛に白す。佛、言はく、『受くることを聽す。二種の器有り。應に畜ふるべからず。瓦坐床と瓦斛瓦斗升合となり。』爾時、跋難陀釋子、陶師の家に往き、瓦器の上に在りて髀を累ねて坐せるに、器破れ、仰いで地に倒れ、形露る。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に瓦器の上に坐すべからず。亦應に白衣の家にて髀を累ねて坐すべからず。』時に六群比丘、外道の安置舍宅吉凶符書呪、技節呪、刹利呪、尸婆羅呪、知人生死吉凶呪、解諸音聲呪を誦す。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼他に教ふ。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼此を以て活命せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘の口臭し。佛、言はく、『應に楊枝を嚼むべし。楊枝を嚼まざれば五事の過有り。口氣臭し。味を別たず。熱癊を增益す。引食せず。眼明かならず。楊枝を嚼まざれば是の如きの五過有り。楊枝を嚼めば五事の利益有り。一に口氣臭からず。二に味を別つ。三に熱癊を消す。四に引食す。五に眼明けし。楊枝を嚼むに是の如き五事の利益有り。』世尊、既に楊枝を嚼むを聽したまふ。彼長き楊枝を嚼めり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼雜葉者を嚼めり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』彼純ら皮を嚼めり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に比丘有り。短き楊枝を嚼めり。佛を恭敬するが故に便ち咽み、即ち以て患を爲せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。極短なるも長さ四指なれ。』彼多人行處に於て楊枝を嚼み、若は溫室に在り、

【爾時等】鳥獸を畜ふることについて。

若は食堂に在り、若は經行堂に在り。諸比丘見て之を惡み、往いて佛に白す。佛、言はく、『應に爾すべからず。三事行り、應に屛處に在るべし。大小便すると、楊枝を嚼むとなり。是の如きの三事は應に屛處に在るべし。時に諸比丘の舌上多垢なり。佛、言はく、『刮舌刀を作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。』骨牙角銅鐵白鑞鉛錫舍羅草竹葦木を用ふるを聽す。』彼洗はずして便ち擧す。餘比丘、見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に洗ふべし。』彼洗ひ已るも曬燥せず。便ち擧するに生なれば壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に諸比丘、食物の齒間に入るを患ふ。佛の言はく、『摘齒物を作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に寶を用ひて作るべからず。骨牙角乃至竹木を用ひて作るを聽す。』彼用ひ已つて洗はずして便ち擧す。諸比丘、見て皆之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に洗ふべし。』彼洗ひ已るも曬燥せず、便ち擧するに生なれば壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に之を燥擧せしむべし。』時に諸比丘、耳中に垢有るを患ふ。佛、言はく、『挑耳篦を作るを聽す。』彼寶を用ひて作る。佛、言はく、『應に爾すべからず。骨牙角乃至竹木を用ひて作るを聽す。』彼用ひ已つて洗はずして便ち擧す。諸比丘、見て之を惡む。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に洗ひ已つて之を擧すべし。』彼燥せず、便ち擧するに生なれば壞せり。佛、言はく、『應に爾すべからず。應に燥し已つて之を擧せしむべし。』爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。時に諸比丘、多く鸚鵡鳥、鸜鵒鳥を畜ふ、初夜後夜に鳴喚し、諸比丘の坐禪を亂

【爾時等】刀劍を把持すると騎乘とについて。

せり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく『應に是の如きの鳥を畜ふべからず。』爾時、世尊、拘睒彌に在したまふ。時に跋難陀釋子、狗子を畜ふ。諸比丘を見て吠ゆ。比丘、佛に白す。佛、言はく『應に畜ふべからず。』爾時、世尊、婆祇提國に在したまふ。時に毘舍離婆闍子比丘、羆子を畜ふ。比丘の衣鉢坐具針筒を裂破し、乃ち復比丘の身體を傷けたり。諸比丘、佛に白す。佛、言はく『應に畜ふべからず。』爾時、世尊、毘舍離國に在したまふ。時に諸の離奢、象馬車乘輦輿に乘じ、刀劍を捉持し、來つて世尊を見たてまつらんと欲す。彼刀杖を留めて寺外に在り、内に入つて問訊す。時に六群比丘、外に出で、輒ち彼象馬車乘輦輿に乘じ、刀劍を捉持して共に戲す。時に諸居士、見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足することを知らず。慚愧有ること無し。乃ち彼象馬車乘に乘じ、刀劍を捉持して共に戲すること、猶し國王大臣の如し。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘は應に象馬車乘輦輿に乘りて而も共に戲笑すべからず。比丘亦、應に刀劍を捉持すべからず。』時に諸の上座老病比丘あり、此住處從り彼處に至ること能はざるも、畏愼して敢て騎乘せず。佛、言はく、『歩挽車に乘じ、若は男子乘一切畜生乘亦男なるを聽す。』彼命難、淨行難有るも、畏愼して敢て騎乘して避走せず。佛、言はく、『若し是の如きの難有らば、象馬に乘じて避くるを聽す。』時に諸の白衣、刀劍を持ち來り、諸比丘に寄せて藏せんとす。比丘、畏愼して敢て受けず。『世尊に是の如きの教有り、刀劍を持するを聽さず』と。佛に白す。佛、言はく、『檀越の牢堅ならん爲の故に藏擧するをば聽す。』

【三】下重ねて大小持戒犍度を說いて其功德を述ぶ。

(三)爾時、世尊、拘睒彌國に在したまふ。王、優陀延、是れ賓頭盧が親厚の知識なり。王、朝哺に當に往いて問訊す。時に不信樂なる婆羅門大臣有りて王に從ふ。王に白して言さく、『云何が大王、朝哺に此下賤業の人を問訊したまふや。而も王を見るも起たず。』王、即ち報じて言はく、『明日清旦、當に往くべし。若し故に起たずんば、當に其命を奪ふべし。』王、明日清旦に便ち賓頭盧の所に往く。遙に王の來るを見て便ち是念を作さく、『此王、今惡心を懷いて來る。若し我起たずんば、當に我命を奪ふべく、我今若し起たば、彼王位を失はん。若し我起たずんば、當に我命を奪ひて而も地獄に墮すべし。此王をして地獄に墮せしめんや。王位を失はしめんや。』尋いで復念言すらく、『寧ろ位を失はしめんも、地獄に墮せしむべからず』と。即便ち起つて遠く迎へ、先づ意に問訊して言はく、『善來大王。』王、問うて言はく、『汝、今何が故に起つて我を迎ふるや。』答へて言はく、『汝が爲の故に起つなり。』王の言はく、『昨日は何が故に起たざりしや。』答へて言はく、『亦、汝の爲の故なり。』王、問うて言はく、『云何が我爲なるや。』答へて言はく、『汝、昨日は善心もて來れるに、今日は惡心を懷いて來る。若し我起たずんば當に我命を奪ふべし。若し我命を奪はば必ず地獄に墮せん。我念言すらく、「此王は惡心を持つて來る。若し我起たずんば、當に我命を奪ふべし。若し我起たば、必ず王位を失はん。若し我命を奪はば、必ず地獄に墮せん。寧ろ當に王位をして失はしむべくも、地獄に墮せしめざれ」と。是故に起つのみ。』王、問うて言はく、『我當に位を失ふべきや。』答へて言はく、『失ふ。』王、復問

うて言はく、『幾日にして當に失ふべきや。』答へて言はく、『却後七日ならん。』時に王、即ち拘睒彌に還へり、城塹を修治し、穀食柴薪を收檢し、軍衆を聚集し、城を守りて警備せり。數日を過ぎて言はく、『今日は是れ初日なり。』是の如く乃至七日して、是の如きの言を作さく、『沙門の語は虚なり』と。便ち諸の婇女を恆水の中に在るの船に乘せて遊戲せり。時に慰禪王、國内に七年雨らず。彼摩竭國王瓶沙に出水の珠有り、若し此珠を出せば天即ち降雨すと聞き、彼便ち四部の兵を興して王舍城に往き、城を圍んで住す。彼城牢固なれば、餘の方便もては得べきに非ず。唯水穀飲食の盡くれば、乃ち得べきのみ。時に城内に多方便智慧の大臣有り。教へて竹葦を以て池中に著き、衆蓮華をして孔中に在つて生じて竹上に出でしむ。時に彼大臣、瓶沙王の所に至つて白して言さく、『王今知るや不や。王舍城は牢固なり。餘の方便もては得べきに非ず。唯水穀盡くれば乃ち得べきのみ。今應に人を遣して波羅殊提王に語り、是の如く言ふべし。「今且く停るべし。象馬車乘刀劍もて共に鬪ふべからず。汝、今衆華優鉢羅鉢頭摩拘頭摩分陀利華を用ひて共に鬪ふべし。我も亦當に是の如き華を以て共に鬪ふべし。汝、復飯摶を作つて、相打つて共に鬪ふべくんば、我も亦飯摶を作つて共に鬪はん」と。王の言はく、『爾る可し。』時に即ち使を遣し、波羅殊提王の所に往き、具に上の言を說く。彼是念を作さく、『王舍城は牢固なり。唯水穀飲食の盡くること有つて得べきのみ。而も城内の水穀飲食は豐多なり。彼即ち使に報じて言はく、『我城の爲の故に來らず。我國内は七年雨らず。汝が國中に水珠有り、若し此

珠を出せば時に天即ち降雨すと聞き、是を以ての故に來る。』使、答へて言はく、『大王、今初時に何ぞ珠を須ふと言はざるや。若し珠を須ゆと言はば、我即ち應に與ふべし。王、今去る可し。尋いで當に珠を送るべし。王、即ち軍を還へして拘睒彌國に向ふ。彼王憂陀延が婇女と遊戯する聲を聞き、即ち傍人に問うて言はく、『戯聲ある是何人ぞ。』傍臣、答へて言はく、『大王知るや不や。王憂陀延、諸の婇女と船に乘じて恆水の中に遊戯せるを。是れ彼が戯聲なり。』王、即ち傍人に勅すらく、『聲を作すこと勿れ。象を恆水の邊に放て。』彼即ち第一白衛象守象人を放つ。時に王憂陀延の大臣、出でて白象を見、王に白して言さく、『野象有り。』王、即ち人に勅して言はく、『聲を作すこと勿れ。船を牽ひて岸に近けよ。』彼即ち岸に近く。王憂陀延、善く調象法術を知り、即ち術を誦して彈琴し、前に往いて象を取る。時に守象人、即便ち王を捉ふ。王甚だ恐怖す。彼王に問うて言はく、『怖るるや。』王言はく、『我怖る。』彼言はく、『王、怖るること勿れ。波羅殊提王は王を喚べり』と。王更に恐怖し、念言すらく、『波羅殊提、將に我幷及び侍從を殺すこと無からんとするや』と。即便ち之を繫ぎ、衛送して波羅殊提王の所に往く。問うて言はく、『汝怖るるや。』答へて言はく、『怖る。』王の言はく、『怖るること勿れ。汝、我兒瞿波羅に調象術を敎へ、並に我女に彈琴を敎ふ可し。』彼將ゐられて慰禪國に至り、七年の中脚に鎖せらる。時に跋難陀釋子、拘睒彌舍彌跋提夫人の所に來つて慰禪國の憂陀延の所に至り、王憂陀延の信を持して夫人の所に往く。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『比丘は應に白衣の爲に作使すべ

からず。若し作さば突吉羅なり。』時に彼、王兒に調象術を教へ、女に彈琴を教ふ。後、異時に於て遂に王女と共に通ず。拘波羅王子之を知つて、彼是念を作さく、『若し我王に白せば、必ず其命を奪はん。彼は是れ我師なり。我を教ふるに辛苦せり。此は是れ王女、彼は是れ王なり。得て爾るべきのみ』と。即ち覆藏して人に語らず。後、王憂陀延、逃走せんと欲す。即ち自ら疾行の牸象を嚴にす。拘婆羅、之を知り、便ち是念を作さく、『彼自ら疾行象を嚴にす。必ず逃走せんと欲す。若し我王に白せば、必ず其命を奪はん。此は是れ我が師なり。我を教ふるに辛苦せり。』遂に藏して人に語らず。彼王女を安じて象上に置く。象上に於て飮むに、琉璃器を失す。未だ地に至らざる頃に、已に鬱禪より拘睒彌國に至る。王、即ち奢彌跋提大人の所に至り、是の如きの言を語るらく、『我、彼に在りて繫がれし時に誓つて言はく、「當に八婆羅門を供養し、一切の所須をして皆具足せしむべし」と。今之を償へんと欲す。便ち辦具すべし。』大人の言はく、『若し是の如くんば、諸の象馬車金銀七寶王及び我身の一切、當に如許所有を盡くすも、並に一人に與ふべく、彼亦都て受くとも猶厭足すること無けん。』王の言はく、『今當に云何がすべき。』大人の言はく、『此摩訶迦旃延は是れ大婆羅門種なり。今之に請ふ可く、並に更に餘の七婆羅門種比丘を請ひ、王が如許の供具を以て此八人に與へなば、彼が法として受けず。若し與へんも亦受けざらん。』王の言はく、『爾る可し。』時に王憂陀延、即ち迦旃延の所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐す。時に迦旃延、種種の方便もて、王の爲に說法し歡喜を得しむ。時に

王、聞法して歡喜し已り、是の如き言を白さく、『願くば我明日の請食を受けよ。己れを通じて八人なり。』時に迦旃延、默然として之を受く。時に王、迦旃延が默然として受請せるを見已つて、座より起ち、頭面に足を禮し歡喜して去りぬ。王、其家に還へり、種種多美の飲食を辦じ、明日清旦、往いて時の至れるを白す。時に大迦旃延、清旦に衣を著け鉢を持し、己を通じて八人と、王憂陀延の宮に往き、座を敷いて坐す。王、憂陀延、手もて自ら種種多美の飲食を斟酌し、飽足することを得しめ、食し已つて鉢を捨て、金瓶を取て水を盛りて之に授け、象を以て布施す。迦旃延言はく、『止めよ、止めよ。』王は此をもて便ち供養を爲し已らんも、我等は應に是の如きの供養を受くべからず。』復、車馬人兼金銀琉璃頗梨眞珠車𤥭馬瑙七寶を以て布施す。迦旃延の言はく、『止めよ、止めよ。此を便ち供養と爲さんも、我等、應に是の如きの供養を受くべからず。』時に王憂陀延、即ち迦旃延の足を禮し已つて、更に卑床を取つて坐す。時に迦旃延、種種に王の爲に說法し、歡喜を得しめ已り、坐より起つて去り、寺內に還つて諸比丘に白す。諸比丘、佛に白す。佛、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘の爲に大小持戒揵度を說きたまふ。『如來出世應供正遍知明行足爲善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊は、一切の諸天世人沙門婆羅門天魔梵王衆の中に於て、而も自ら覺悟證知し、人の爲に說法したまふ。初語亦善く、中語亦善く、下語亦善し。文義具足して淨行を開顯せり。若し居士、居士子の聞き、若し復餘の種姓生者、彼正法を聞かば便ち信樂を生じ、信樂心を以て而も是念を作さん、『我今居

家に在つて妻子に繫縛せられ、純ら梵行を修することを得ず、我今、寧ろ鬚髮を剃除し、袈裟を披らき、信を以て家を捨し、非家道に入るべし」と。彼出家人と同じく飾好を除捨し、諸比丘と同戒なり。殺生せざれ、刀杖を放捨し、常に慚愧有つて衆生を慈念す。是を不殺生と爲す。偸盜を捨せよ、與ふるは便ち取り、與へざるは取らず。其心清淨にして盜意有ること無し、是を不偸盜と爲す。婬不淨行を捨せよ。梵行を修し、勤めて精進し、欲愛に著せず、清淨香潔にして住す。是を捨婬不淨行と爲す。妄語を捨せよ。如實にして世を欺詐せず、是を不妄語と爲す。兩舌を捨せよ、若し此語を聞くも傳へて彼に至らず。若し彼語を聞くも、傳へて此に至らず、相壞亂せず、若し離別有らば善く和合を爲し、親愛に和合して常に歡喜せしめ、和合の言を出し、所説に時を知る、是を不兩舌と爲す。麤惡の言を離れよ。所言麤獷にして他人を苦惱し、瞋恚を生せしめて而も喜樂せず。是の如きの麤惡の言を斷除せば、言則ち柔軟に、怨害を生ぜず、能く利益を作し、衆人は愛樂し、其言を聞くを樂ふ。常に是の如きの利益善言を出す。是を不麤惡言と爲す。無利益語を離れよ。知時語實語利益語、法語、律語、滅諍語もて緣有るには說け。所言に時を知る。是を離無利益語と爲す。不飲酒なれ、放逸處を離れよ。華香瓔珞を著けざれ。歌舞倡伎せざれ、亦往いて觀聽せざれ、高廣床上に坐せざれ、非時に食せざれ、若は是れ一食なれ。金銀七寶を把持せざれ、妻妾童女を取らざれ。奴婢象馬車乘鷄狗猪羊を畜養し、田宅園觀に一切の諸物を儲積し、畜養せざれ、欺詐輕秤小斗せざれ。惡物を合和せざれ。治生販賣

せざれ。他の肢節を斷じ、殺害繫閉し、他の錢財を斷じ、役使もて業と作し、言は輒ち虛詐し諍訟を發起し、他人を棄捨す。是の如き諸の不善事行を斷除せよ。則ち時を知つて非時に行ぜざれ。腹を量つて食し、身を度つて衣よ。足るを取るのみなれば衣鉢自ら隨ふこと、猶し飛鳥の羽翮身具せるが若し、比丘も是の如きは所去の處なり。衣鉢の身に隨ふこと、餘の沙門婆羅門の他の信施を受くるが如く、種種餘積の飲食衣服香味觸法を求む。是の如きの無厭足事を離れよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、種子を聚集し、樹木鬼神を村に種殖す。是の如きの事を離れよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、但方便を作して、諸の利養の、象牙雜寶高廣大床、種種の文繡被褥、及與び雜色の諸皮を求む。是の如きの利養を離れよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、但方便を作して自ら嚴身なるを求め、酥油もて身を摩し、香水もて洗浴し、香を以て身に塗り、香澤もて頭を梳り、好華鬘を著け、染眼して紺色ならしめ、種種に面首を莊嚴し、色綖を肩に繫け、通中の杖を捉へ、刀劍並に孔雀蓋を執持し、珠を以て扇と爲し、鏡を以て自ら照し、雜色の革屣を著け、純白の衣を著く。能く是の如き莊嚴の事を離れよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、專ら嬉戲の爲にす。棊局掉掩樗蒲八道十道或は復拍石す。是の如き種種の嬉戲を斷除せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、但妨道の法を說く。王事賊事鬪戰軍馬事大臣事騎乘事園觀出入事臥起事女人事衣服飲食事親里事國土事思憶世間入大海事を說く。是の如き一切の妨道の業を斷除せよ。

餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、無數の方便もて但諛諂美辭を作すのみ。現相を數贊し利を以て利を求む。是の如き邪命諛諂を捨せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、常に共に講論し諍言す。或は園觀に在り、或は浴地に在り、或は講堂に在り、我是の如きの法律を知るも、汝は所知無し。汝は邪道に趣き、我は正道に趣く。前言を以て後に著け、後言もて前に著く、我能く忍ぶも汝は忍ぶこと能はず。我汝に勝てり、汝は但狂言のみ。汝と共に論議して我今勝つことを得たり。能く問はんものは便ち問へ。是の如きの一切の諍事を除斷すべし。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、但方便を作して使命を爲さんことを求む。若は王王大臣婆羅門若は居士の爲に通信し、此處より彼處に往き、彼より此に還へる。此信を持して彼に往き、彼信を持して此に來る。自ら是を作し、他をして是を作さしむ。能く是の如きの使命事を遠離せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、但種種の鬪戲を爲すのみ。或は弓もて鬪ひ、或は刀もて鬪ひ、或は杖もて鬪ひ、或は毬もて鬪ひ、或は狗もて鬪ひ、或は猪と鬪ひ、或は羖羊と鬪ひ、或は羝羊と戰ひ、或は鹿と鬪ひ、或は象と鬪ひ、或は馬と鬪ひ、或は駝と鬪ひ、或は牛と鬪ひ、或は犎牛もて鬪ひ、或は水牛もて鬪ひ、或は女人と鬪ひ、或は男子と鬪ひ、或は童男童女と鬪ふ。是の如き一切の嬉戲鬪事を斷除せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、妨道の法を行じて邪命に自活するのみ。男女好惡相を瞻相し、種種畜生もて以て利養を求む、是の如き種種の妨道の法を斷除せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが

如きは、妨道の法を行じて邪命に自活するのみ。鬼神を召喚し、或は復驅遣し、種種に厭禱す。是の如き妨道の法を斷除せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、妨道の法を行じて邪命に自活するのみ。或は人の爲に病を呪ひ、或は惡術を誦し、或は好呪を誦し、或は背病を治し、若は出汗を爲し、或は針を行じて病を治し、或は鼻を治し、或は下部の病を治す。是の如き邪命妨道の法を除斷せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、妨道の法を行じて邪命に自活するのみ。行藥して人病の或は吐し或は下するを治し、男を治し、女を治す。是の如きの妨道の法を除斷せよ、餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、妨道の法を行じて邪命に自活するのみ。或は火を呪し、或は行來を呪して吉利ならしめ、或は刹利呪を誦し、或は鳥呪を誦し、或は枝節呪を誦し、或は安置舍宅符呪を誦し、若は火燒鼠嚙物にも能く解呪を爲し、或は別死生書を呪し、或は別夢書を誦し、或は手を相し、肩を相し、或は天人の問を誦し、或は別鳥獸音聲書を誦す、是の如き妨道の法を除斷せよ、餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、邪命に自活するのみ。天時を瞻相し、或は雨るべしといひ、或は雨らずと言ひ、或は穀貴なりと言ひ、或は穀賤なりと言ひ、或は多病と言ひ、或は少病と言ひ、或は恐怖と言ひ、或は安穩と言ひ、或は地動ずと言ひ、或は彗星現ずと言ひ、或は月蝕といひ、或は不蝕と言ひ、或は日蝕と言ひ、或は不蝕と言ひ、或は星蝕と言ひ、或は不蝕と言ひ、或は月蝕には、是の如きの好報有り、是の如きの惡報有りと言ひ、日蝕、星蝕も亦是の如し。是の如きの邪命

法を除斷せよ。餘の沙門婆羅門の他の信施を食するが如きは、妨道の法を行じ、邪命に自活するのみ。或は言はく、此國は當に勝つべく、彼國は如かじと。或は言はく、彼國は勝ち此國は如かずと。或は此勝ち彼如かずと。或は言はく、彼勝ち此如かずと。是の如きの吉凶好惡を瞻る。是の如きの妨道の法を除斷せよ。彼此事の中に於て聖戒を修集し、內に所著無く、其心安樂なり。眼に色を視ると雖も而も相を取らず。眼色が劫する所と爲らず。眼根堅固寂然にして而も住す。貪欲する所無く、而も憂患無し。諸惡不善法を漏らさず、戒品を堅持し、能善く眼根を護る、耳鼻舌身意も亦是の如し。是の如き六觸入の中に於て、善學し、護持し、調伏して止息することを得しむること、猶し平地の四交道頭に、象馬車乘を駕するに、善調御者の左に轡を執り、右に鞭を持ち、善學護持し、善學調伏し、善學止息せしむるが若し。比丘も亦是の如し。六觸入の中に於て善學護持し、善學調伏し、善學止息せしむ。彼に是の如きの聖戒有り、聖眼根を得、食するに止息を知り、亦貪味せず、以て其身を養ひ、而も貢高憍慢ならず、自ら身を支ふることを取つて、苦患無からしむ。淨行を修することを得るが故に、苦消滅し、新なる苦は生ぜず。增減有ること無く、有力無事に、身を安樂ならしむること、猶し男子女人の身の患瘡に、藥を以て之を塗り、取つて瘡を差せしむるが如し。比丘の食するに、以て足ることを知り、取るに身を安からしむるも、亦復是の如し。譬へば、人の膏油を以て車に膏し、財物の爲の故に轉載して、至到する所有らしめんと欲するが如し。比丘の食するに止足を知り、取るに身を支へしむ

るも亦復是の如し。比丘に是の如きの聖戒有り、聖諸根を得、食中に於て能く止足することを知り、初夜にも、後夜にも精進覺悟せよ。若し晝日に在つては若は行じ、若は坐し、常に爾も一心に諸蓋を除かんことを念じ、彼初夜に於ても、若は行じ、若は坐し、常に爾も一心に諸蓋を除かんことを念じ、彼中夜に於ても右脇を側にし、脚を累ねて臥し、念じて當に時に起つべく、繫想は明に在り、心に錯亂無し、後夜に至つて、便ち起つて思惟し、若は行じ、若は坐し、常に爾も一心に諸蓋を除かんことを念ず。比丘に是の如きの聖戒有らば、聖諸根に逮び、食するに止足することを知り、初夜にも後夜にも精進覺悟せよ、常に爾も一心なれば念に錯亂無けん。云何が比丘の念ずるに錯亂無けん。比丘、是の如く內身身念處を觀じ、精進に懈らざれば念に錯亂無く、慳貪世間の憂惱を調伏せん。外身身念處を觀じ、精進に懈らざれば念に錯亂無く、慳貪世間の憂惱を調伏せん。內外身身念處を觀じ、精進に懈らざれば、念に錯亂無く、慳貪世間の憂惱を調伏せん。受心法も亦是の如し。是を比丘の念無錯亂と爲す。云何が比丘、一心なる。若は行步入出に、左右視瞻し、屈申俯仰し、衣鉢を執持し、飯食を受取し、大小便利し、睡眠覺悟し、若は坐し若は立つに、若し所說有り、若し復寂然なる、是の如きの一切に常に爾も一心なる、是を一心と爲す。譬へば人有り、大衆と共に行き、若は前に在り、若は中に在り、若は後に在り、常に安樂を得て而も畏れ有ること無きが如し。比丘も亦復是の如し。行步入出乃至默然にも、常に爾も一心なれ。比丘に是の如きの聖戒有らば、聖諸根を得、食するに止足することを

知り、初夜にも後夜にも精進覺悟し、常に一心に錯亂有ること無し。樂んで阿蘭若處樹下に在つて住し、或は山窟に處するを樂ひ、若は露地糞聚の邊に在り、若は塚間水岸の間に在り、彼乞食し還へり已つて洗足し、衣鉢を安置し、結跏趺坐し、直身正意に、念を繫けて前に在り、慳貪を斷除し、心に與に俱せず、瞋恚を斷除して怨嫉有ること無く、心、無瞋に住し、淸淨にして恚無く、常に慈愍有り。睡眠を除去し、與共に俱せず、繫想、明に在り。念に錯亂無く、掉悔を除斷して與共に俱せず、內心寂滅に掉悔の心淨に、疑を除斷す。已に疑を度せば、其心一向に善法に在り。譬へば奴有るの大家の、姓を與へて安穩に奴を脫せしめんに、彼自ら念言すらく、「我先には是れ奴、而も今解脫安穩なり。已に自在を得たれば、復人に從はず」と。是因緣を以て便ち歡喜を得、其心安樂たるが如し。又人有り、他の財物を擧して而も治生を行じ、能く利息を得、還本既に畢るも、復餘在有り、以て妻子を養活するに足る。彼自ら念言すらく、「我先に擧債し、以用て治生して而も利息を得たり。既に還本することを得て復餘在有り、妻子を養ふに足る、我今便ち自在を得たれば、復人を畏れざらん」と。是因緣を以て便ち歡喜を得其心安樂なるが如し。人の久しく病み、病より差ゆることを得、食飲消化し、身に色力有り。彼是念を作さく、「我先に病有り、而も今差ゆることを得、飯食消化して身に色力有り」と。是因緣を以て便ち歡喜を得、其心安樂なるが如し。人の久しく牢獄に閉ざされ、獄より安穩に脫することを得、彼是念を作さく、「我先に繫閉せられ、今已に脫することを得たり、復畏るる所無し」と。

是因緣を以て便ち歡喜することを得て、其心安穩なるが如し。人の多く財寶を持し、大曠野を度るに、賊劫に遭はず、安穩に過ぐることを得たり。彼是念を作さく、「我先に多く財寶を持ち、曠野に從つて過ぐることを得、而も今復提る所無し」と。是因緣を以て便ち歡喜を得、其心安樂なるが如し。比丘に五蓋有るも亦復是の如し。奴の債を負うて久しく病み、獄に在り、大曠野を行くが如し。自ら見るに未だ諸結を斷ぜず、心を染汚ならしめ、慧力明かならず、彼即ち欲惡不善の法を捨て、覺觀と倶にして喜樂を受け、初禪に入ることを得たり、彼喜樂を以て身に潤漬し、遍滿盈溢して不遍處無し。人の巧に浴器と細末藥を盛り、水を以て之に漬け、和合して相得んに、其水潤漬して不潤なること有ること無く、而も零落無きが如し。比丘の初禪に入ることを得るも、亦復是の如し。喜樂身に遍じて空處有ること無し。此は是れ、最初の現身得樂なり。何を以ての故に。不放逸精進不懈念無錯亂樂處寂靜なるに由るが故なり。彼覺觀を捨て便ち内に信を生じ、心一處に在り、無覺無觀、心定喜樂なれば、第二禪に入る。彼心定喜樂を以て身に潤漬し、遍滿盈溢して不遍處無きこと、猶し山頂の泉水の中より出でて、東西南北より、及び上より來らざるが如し。即ち此池中より清冷なる水出でて一池を潤漬し、遍滿盈溢して空處有ること無し。比丘の第二禪に入るも亦復是の如し。心定喜樂に遍滿盈溢す。此は是れ第二現身得樂なり。彼れ捨喜心もて護念の樂に住し、身に快樂を受け、聖の所說の如く護念快樂なれば、第三禪に入る。彼身に於て喜無く、樂を以て潤漬し、遍滿盈溢して空處有ること無し。譬へば優

鉢羅華拘頭摩分陀利華の如し。生じて地に出づと雖も、而も未だ水より出でず、根莖華葉は水中に潤漬して空處有ること無し。比丘の第三禪に入るも亦復是の如し。離喜住樂、身に潤漬して不遍處無し。此は是れ第三禪に現身快樂所遊戲處を得るなり。彼苦樂憂喜を捨し、先づ不苦不樂を斷じ護念清淨に第四禪に入る。身心清淨に具滿盈溢し、不遍處無きこと、男子女人の沐浴淨潔に、被るに新白の淨衣を以てし、不覆の處有ること無きが由若し。比丘の第四禪に入るも、亦復是の如し。其心清淨にして身に遍滿し、空缺處無し。彼第四禪に入つて心、掉動せず、亦懈怠せず、愛恚と相應せず、無動地に住す。譬へば密屋の如し、内外を泥もて治し、堅く戸嚮を閉ぢて風塵有ること無く、内に於て燈を然じ、人非人風鳥の扇動すること無ければ、其燈焔は直上して、曲戾有ること無く、恬定にして然えん。比丘の第四禪に入るも、亦復是の如し。掉動有ること無し。心に懈怠無く、愛恚と相應せざれば、已に無動地に住す。此は是れ第四禪現身得樂所遊戲處なり。何を以ての故に。不放逸精進不懈念不錯亂樂處寂靜なるに由るが故なり。彼定心清淨なることを得ば、垢穢有ること無く、柔軟調伏にして無動地に住し、自ら身中に於て心を起し、能く異身を化作す。肢節具足し諸根無闕に、時に即ち之を觀ず。此身色は四大の合成なり。彼身色は化有なり。此四大身色は異なり、彼化身四大色は異なるも、此四大身色の中より起り、心の化作にして、彼身諸根の肢節具足せり。譬へば人有り、鞘中に刀を抜くが如し。彼是念を作さく「此は是れ鞘、此は是れ刀なり。刀異り鞘異るも、此鞘の中より刀を抜い

て出せるなり」と。亦人の篋中より蛇を出すが如し。彼是念を作さく「此は是れ篋、此は是れ蛇なり。篋異り蛇異るも、此篋の中より蛇を出せるのみ」と。譬へば人有り、簏より衣を出すが如し、彼是念を作さく「此は是れ簏、此は是れ衣なり、簏異り、衣異るも、簏中より衣を出せるのみ」と。比丘も亦復是の如し。此は是れ比丘が初勝法なり。何を以ての故に、不放逸精進不懈念無錯亂樂寂靜なるに由るが故なり。彼定心清淨なるを以て乃至不動地に入る、已が四大色身の中より、心を起して化身を化作し、一切の諸根肢節具足す。彼是念を作さく「此身は是れ四大の合成なり。彼身は化に從つてのみ有り。此四大色身は異なり。彼化の四大色身は異なり。此心、此身に在り、此身に依つて此身を繫ぐ。譬へば、琉璃摩尼珠の瑩治せるは、甚明清淨無垢なるが如し。若し青黃赤の縷を以て之を貫けば、有眼の男子は掌に置いて觀じ、此は是れ珠、此は是れ縷なり。珠は異、縷は異なるも、此珠は繫つて縷に在り。比丘も亦復是の如し。此四大色身より心を起して化身を化作し、一切諸根肢節具足せり。而も是念を作さく「此身は是れ四大の合成なり。彼身は化に從つて有り、此四大色身は異なり。彼化の四大色身は異なり。此心は此身に在り、此身に依て此身に繫る」と。此は是れ比丘第二の勝法なり。何を以ての故に。不放逸精進不懈念無錯亂樂寂靜なるに由るが故なり。彼定心清淨なるを以て、乃至無動地に入る。一心に神通智證を修習すれば、彼便ち能く種種の變化を作し、一身を以て無數の身と爲し、無數の身を還一身と爲す。身能く飛行して、石壁皆過ぎ、觸礙する所無く、虛空を行くが

如し。空中を行住すること鳥の飛翔するが如く、地に出沒すること水の涌沒するが如し。或は烟となり、或は焰となり、若は大火積となり、手に能く日月を捫摸し、身は梵天に至る。譬へば陶師の善く泥を調和し、意の所造に隨ひ、何の器を作らんと欲すると、便ち能く之を成じ、而も利益有るが如し。譬へば巧匠の善能く木を治し、意の所造に隨ひ、自在に之を成じて利益有るが如し。譬へば治象牙師の善能く牙を治め、意の所作に隨ひ、自在に之を成じて而も利益有るが如し。譬へば金師の、善く眞金を錬し、意の所作に隨つて自在に之を成じて而も利益有るが如し。比丘も亦復是の如し。定心清淨にして無動地に至り、意の所作に隨ひ、乃ち梵天に至る。此は是れ比丘が第三の勝法なり。彼定心清淨なるを以て乃至無動地に入る。一心に修習して天耳智を證し、彼天耳清淨にして人耳に過出し、二種聲を聞く。人と非人となり。譬へば城郭國邑の中に於て講堂有り、廣大高顯なるも、聰耳の人有り、中に在つて聽力を勞せずして、種種の音聲を聞くが如し。比丘も亦復是の如し。心定なるを以ての故に、天耳清淨にして人非人の種種の音聲を聞くことを得るなり。此は是れ比丘の第四勝法なり。彼定心清淨なるを以て、乃至無動地に入る。一心に修習して他心智を證せば、彼外の衆生心を知る、有欲無欲有垢無垢有癡無癡廣心略心小心大心定心亂心縛心解心上心無上心、皆悉く之を知る。譬へば自喜せる男子女人の、水鏡を以て自ら照すに、見ることを得ざる無きが如し。比丘も亦復是の如し。定心清淨なるを以ての故に、外の一切衆生の心の所念を知る。此は是れ比丘が第五の勝法なり。彼

定心清淨なるを以て乃至無動地に入る。一心に宿命智證を修習すれば、便ち能く宿命無數若干種の事を憶識し、能く一生十生百生千生無數百千生を憶ふ。劫燒都て盡き、國土還生ず。我、彼に在りて生じ、名字も是の如く、種も是の如く、姓も是の如く、食も是の如く、壽命も是の如く、在世も是の如し。壽盡くるも是の如く、受苦樂も是の如し。彼より命終して復彼に生ず。是の如く展轉して此に來生す。是の如きの形色相貌無數種種に、皆悉く憶識す。譬へば人有り、己の村落より他國に往至し、彼間に在つて若は行じ、若は住し、若は語り、若は默し、彼國より復餘國に往き、若は行じ、若は住し、若は語り、若は默す。是の如く展轉して復其國に還へり、多力を勞せず。而も能く行く所の諸國を憶識し、我此國より乃ち彼國に往き、彼國內に在つて是の如く行じ、是の如く住し、是の如く語り、是の如く默せり。彼國より復彼國に至り、彼國に在つて是の如く行じ、是の如く住し、是の如く語り、是の如く默せり。是の如く展轉して、還本國に至るが如し。比丘も亦是の如し。能く定心清淨なるを以て乃ち無動地に至る。宿命智證を以て能く無數百千劫の種種衆事を憶ふ。此は是れ比丘が第一明を得るなり。無明を斷滅し、明法生ずれば、闇已に去り、明曉法存す。此は是れ比丘の憶宿命智證明なり。何を以ての故に。不放逸精進不離心無錯亂樂處寂靜なるに由るが故なり。彼定心清淨なるを以て乃ち無動地に至る。一心に修習して衆生の死此生彼を見るの智を證すれば、彼天眼清淨なれば、衆生の死此生彼を見、形色好醜善惡諸道尊貴卑賤を、衆生が所造の業報因緣に隨つて、皆能く

之を知る。此の如きの人は、身惡行口惡行心惡行を造り、賢聖を誹謗し、邪見なり。邪見の報を以ての故に地獄餓鬼畜生に墮す。是の如きの衆生は身に善を行じ、口に善を行じ、心に善を念じ、賢聖を誹謗せず、正見なり。正業を修習すれば、身死して天上人中に生ずることを得。是の如く天眼清淨なれば、衆生の死此生彼を見、衆生が所造の業因に隨つて皆悉く之を知る。譬へば廣大平地の四交道頭に高顯なる大堂有り、明眼の人有つて中に在り、衆生が東方より來つて西方に至り、西方より東方に往き、南方より北方に往き、北方より南方に往くを見るが如し。比丘も是の如し。定心清淨なるを以て乃ち無動地に至る。衆生の死此生彼を見るの智を證すれば、天眼清淨なるを以て衆生の死此生彼を見、乃至は衆生が所造の業報の因緣に隨つて、皆悉く之を知るなり。此は是れ比丘が第二明を明せるなり。無明を斷じ、明法生ずれば、闇已に至り、明曉法存す。此は是れ衆生の死此生彼を見るの智證明なり。何を以ての故に。不放逸精進不懈心不錯亂樂寂靜なるに由るが故なり。彼定心清淨なるを以て乃ち無動地に至る。一心に無漏智證を修習すれば、彼如實に苦聖諦集盡道諦を知り、如實に有漏漏集漏盡を知り、如實に趣漏盡道聖諦を知る。彼是の如く知り、是の如く見、欲漏有漏無明漏に從つて心に解脫を得。已に解脫智を得、我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じ、更に復生ぜず。譬へば清水の中に木石魚鼈水性の屬有り、東西に遊行す。有眼者の之を觀るに、木石魚鼈の、此は是れ木石、此は是れ魚鼈の東西に遊行すと見るが如し。比丘も亦復是の如し。

定心清淨なるを以て無動地に至り、無漏智證を得、乃至復更に生ぜず。此は是れ比丘が第三明を得るなり。無明を斷じ、明法生じ、闇法去り、明曉法存す。是を無漏智明と爲す。何を以ての故に。不放逸精進不懈念無錯亂樂處寂靜なるに由るが故なり　雜犍度具足し竟ぬ。

四分律卷第五十三

四分律 巻第五十四 第四分之五

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

集法毘尼五百人

【一】ここには滅後、比丘中には異説を立つる者あるを憂ひ、大迦葉が五百の比丘を集めて、法毘尼を結集せるを説く。

(一)爾時世尊、拘尸城末羅園婆羅林の間に在して般涅槃したまふ。諸々の末羅子、佛舍利を洗ひ已つて淨劫貝を以て裹み、復五百張疊を持つて次で而も之を纏ひ、鐵棺を作つて香油を盛滿し、舍利を安じて中に置き、蓋を以て上を覆ふ。復木槨を作つて鐵棺を安じて中に著き、下に衆の香薪を積めり。時に末羅子の中の標首を爲す者、火を持つて之を然す。時に天即ち火を滅す。餘の大末羅子、展轉して皆大炬を以て之を然す。時に天亦皆之を滅せり。阿那律、末羅子に語らく、『乃爾ち疲苦すべからず。諸天、汝等の火を滅す』と。即ち阿那に問うて言はく、『大德、諸天は何が故に火を滅せるや。』答へて言はく、『摩訶迦葉、波婆拘尸城に在り、兩國中間の道に在つて行く。大比丘衆五百人と俱なり。彼是念を作さく、「我當に未燒の佛舍利を見ることを得べきや不や」と。諸天、迦葉が心に是の如く念ずるを知り、是故を以て火を滅せるなり。』末羅子の言はく、『大德阿那律、今便ち小しく停めん、彼諸天の意を遂げん。』と。爾時摩訶迦葉、彼二國の中間に在つて道を行く。大

比丘僧五百人と倶なりき。時に異尼犍子有り、世尊が般涅槃時の曼陀羅華を持つて、道に在つて行けり。時に迦葉、遙に見て問うて言はく、『汝等、何所よりか來れるや。』彼答へて言はく、『我拘尸城より來る。』復問うて言はく、『我世尊を知るや不や。』答へて言はく、『識れり。』復問はく、『今故に世に在したまふや不や。』答へて言はく、『在世したまはず、般涅槃したまうてより來已に七日なり。我彼より此華を持つて來れり。』時に迦葉之を聞いて喜ばず。中に未離欲の比丘有り。世尊已に涅槃を取りたまふと聞き、便ち自ら地に投ず。譬へば樹を斫つて根を斷ずるに、樹の倒るるが如し。此諸の未離欲の比丘も亦復是の如し。啼哭して言はく、『善逝涅槃せり。何ぞ乃ち太だ早きや。世間の明眼、何ぞ乃ち速に滅せるや。我曹が所宗の法、何を得てか便ち盡くるや』と。或は宛轉して地に在る有り。猶し圓木の如し。此諸の未離欲の比丘も亦復是の如し。啼哭憂惱して言はく、『善逝涅槃せり。何ぞ乃ち太だ早きや』と。爾時、跋難陀釋子有り。衆中に在つて諸比丘に語つて言はく、『長老、且く止みね。大に憂愁啼哭すること莫れ。我等、彼摩訶羅の邊に於て解脱することを得ん。彼在せし時、數我等に敎ふらく、是は應、是は不應、當に是を作すべし。當に是を作すべからずと。我等今や便ち自在を得たれば、作さんと欲せば便ち作し、作さざらんと欲せば便ち作さざらん』と。時に大迦葉、之を聞いて悦ばず。即ち諸比丘に告げて言はく、『且く起つて疾く夜鉢を捉へよ。時に往かば世尊の舍利の未だ燒かざるに及び、當に見たてまつることを得べし。』諸比丘、迦葉の言を聞き、即ち疾疾に

衣鉢を執持す。是に於て大迦葉、五百人と倶に、拘尸城に往き已り、城を出でて醯蘭若河を渡り、天觀寺に往き、阿難の所に至り、語つて言はく、『阿難、我世尊の舍利の未だ燒かざるに及んで、之を見たてまつらんと欲す。』阿難、答へて言はく、『世尊の舍利の未だ燒かざるに及ばんと欲し、而も之を見たてまつらんと欲するも、見ることを得べきこと難し。何を以ての故に。世尊の舍利は已に洗浴したてまつり、裹むに新劫貝を以てし、復、五百張疊を以て次で之を纏ひ、置いて鐵棺に在り。香油を盛滿し、木槨の中に著き、下に衆の香薪を積み、今之を燒かんと欲するに垂んとす。是故に見ること得べきこと難し。』時に大迦葉、漸く前んで佛舍利の積所に往くに、棺槨即ち自ら開き、世尊の足現ず。時に大迦葉、世尊が足下の輪相に垢汚あるを見、即ち阿難に問はく、『世尊の顏容端政に、身は金色を作せるに、誰か足下の輪相を汚せるや。』阿難、答へて言はく、『大德迦葉、女人の心軟なれば、前んで佛を禮したてまつる時、泣涙上に墮つるの手もて、世尊の足を捉へたり。』大迦葉之を聞いて悦ばず。即ち世尊の足を禮す。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆私、諸天大衆も亦佛足を禮したてまつるに、時に世尊の足、還棺中に內りて現ぜず。時に大迦葉、哀歎して偈を說き、棺を遶ること七匝せるに、火燒けざるに自ら然えたり。時に大迦葉、舍利を燒き已つて、此因緣を以て、比丘僧を集めて告げて言はく、『我先に道行に在りし時、跋難陀の諸比丘に語れるを聞くに、是の如きの言を作さく、「長老、且く止みね。復、愁憂啼哭すること莫れ。我等、今復摩訶羅の邊に於て解脫を得ん。彼世に在せし時、我等

を教呵して、是は應に爾すべし、是は應に爾すべからず。應に是を作すべし。應に是を作すべからずと。今我等已に自在を得たれば、作さんと欲するは便ち作し、作さざらんとせば便ち作さざらん」と。我等、今共に法毘尼を論ず可し。外道の以て餘言譏嫌を致さしむること勿れ。沙門瞿曇の法律は烟の若し。其れ世尊の在せし時は皆共に戒を學せるも、而も今滅後に戒を學する者無し。諸長老、今、比丘の多聞智慧の是れ阿羅漢なる者を料差す可し。』時に即ち差して四百九十九人を得たり。皆是れ阿羅漢、多聞智慧者なり。時に諸比丘の言はく、『應に阿難を差して衆中に在るべし。』大迦葉の言はく、『阿難を以て數中に在ること勿れ。何を以ての故に。阿難は愛恚怖癡有り。愛恚怖癡有り。是故に應に數中に在らしむべからず。』時に諸比丘、復言はく、『此れ阿難は是れ佛を供養したてまつれる人なり。常に佛に隨つて行く。親しく世尊に從つて所教の法を受く、彼必ず處處に世尊に疑問じたてまつりしならん。是故に今や應に數に在らしむべし。』即便ち數に在らしむ。諸比丘、皆是念を作さく、『我等當に何處に於てか集つて法毘尼を論じ、多饒の飲食臥具の乏しきこと無かるべきや。』即ち皆言はく、『唯王舍城の房舍のみ、飲食臥具衆多なり。我等今宜しく共に往いて彼に集り、法毘尼を論ずべし。』時に大迦葉、即ち白を作さく、『大德僧聽け。此諸比丘は僧の爲に差す所なり。若し僧時到らば、僧ために忍聽せよ。僧、今、王舍城に往き、集つて共に法毘尼を論ぜん。白是の如し。』白を作し已つて、倶に毘舍離に往く。時に阿難、道行に在り。靜處に心に自ら念言すらく、『譬へば新生の犢子の、猶故

に乳を飲むも、五百の大牛と共に行くが如く、我も今亦是の如く、學人の作有る者、而も五百の阿羅漢と共に行かん」と。時に諸長老、皆毘舍離に往く、阿難も毘舍離に在つて住す。諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆私、國王、大臣、種種沙門、外道、皆來つて問訊し、多人衆集せり。時に跋闍子比丘有り。大神力有り。已に天眼知他心智を得たり。是の如きの念を作さく、『今阿難、毘舍離に在り。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆私、國王、大臣、種種沙門、外道、皆來つて問訊し、多人衆集せり。我今寧ろ阿難を觀察す可し。是れ有欲と爲んや、無欲と爲んやと。』即便ち阿難を觀察せるに、是れ有欲にして是れ無欲に非ず。復念言すらく、『我今當に其をして厭離心を生ぜしむべし。將に阿難をして厭離心を生ぜしめんと欲す。』即ち偈を說いて言はく、

靜に空樹の下に住し、心に涅槃を思ひ
坐禪して放逸すること莫れ、多說すとも何の作す所ぞ

時に阿難、跋闍子比丘が厭離を說けるを聞き已つて、即ち獨處に精進して放逸ならず。寂然無亂なり。是れ阿難の未曾有法なり。時に阿難、露地に在つて繩床を敷き、夜に多く經行し、夜過ぎ明相出でんと欲する時、身疲極せり。念言すらく、『我今疲極せり。寧ろ小しく坐すべし。』念じ已つて即ち坐し、坐し已つて方に亞臥せんと欲す、頭、未だ枕に至らざる頃に、其中間に於て心に無漏解脫を得たり。此は是れ阿難が未曾有法なり。時に阿難、阿羅漢を得已つて、即ち偈を說いて言はく、

種種說を多聞し、常に世尊を供養したてまつれり
已に生死を斷じ、瞿曇今臥せんと欲す。

時に諸比丘、毘舍離より王舍城に往き、是の如きの言を作さく『我等先づ當に何等をか作すべき。當に先づ房舍臥具を治すべしと爲んや。先に法毘尼を論ずとせんや。』皆言はく、『先づ當に房舍臥具を治すべし』と。即便ち房臥具を治す。時に大迦葉、此因緣を以て、比丘僧を集む。中に陀薩羅迦葉有り、上座と作り、長老婆婆那は第二上座爲り、大迦葉は第三上座爲り。大周那は第四上座爲り。時に大迦葉、僧事を知り、即ち白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば僧爲に忍聽せよ。僧今集まつて法毘尼を論ぜんとす。』白是の如し。時に阿難、即ち座より起つて偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して大迦葉に白して言さく『我親しく佛に從つて聞き、佛語を憶持せり。自今已去、諸比丘の爲に雜碎戒を捨せん。』迦葉問うて言はく、『阿難、汝、世尊に問ひたてまつりしや不や。何者か是れ雜碎戒なると。』阿難、答へて言はく、『時に我愁憂して無賴なれば、失して世尊に問ひたてまつらず、何者か是れ雜碎戒なりと。』時に諸比丘、皆言はく、『來れ我當に汝に雜碎戒を語るべし。』中に或は言ふ有り。四波羅夷を除ける、餘は是れ雜碎戒なりと。或は言ふ有り。四波羅夷十三事を除ける、餘は皆是れ雜碎戒なりと。或は言ふ有り。四波羅夷十三事二不定法を除ける、餘は皆是れ雜碎戒なりと。或は言ふ有り。四波羅夷十三事二不定法三十事を除ける、餘は皆是れ雜碎戒なりと。或は言ふ有り。四波羅夷乃至九十事を

除ける、餘は皆是れ雜碎戒なりと。時に大迦葉、諸比丘に告げて言はく、『諸長老、今や衆人の言は各不定なり。何者か是れ雜碎戒なるやを知らず、自今已去、應に共に立制すべし。若し佛、先に制したまはざる所は、今應に制すべからず。佛の先に制したまへる所は、今應に卻くべからず。應に佛の所制に隨つて學すべし。』時に即ち共に此の如き制限を立てぬ。

大迦葉、阿難に語つて言はく『汝、佛法の中に於て先に女人を度せんことを求めしは、突吉羅罪を得、今應に懺悔すべし。』阿難、答へて言はく、『大德、此は我故作に非ず。摩訶波闍波提は佛に於て大恩有り。佛母命過して世尊を長養せり。大德迦葉、我今此に於て自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるを以ての故に、今當に懺悔すべし。』大迦葉、復言はく、『汝、世尊をして三たび反請せしむ。汝は供養を作すの人、而も作さずと言ふは、突吉羅罪を得、今當に懺悔すべし。』阿難、迦葉に答へて言はく、『我故に作さず、佛の爲に供養人と作るは難し。是故に能はずと言へるのみ。我此中に於て自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるを以ての故に、今當に懺悔すべし。』迦葉、復言はく、『汝、佛の爲に僧伽梨を縫ひ、脚躡を而も縫へるは、突吉羅罪を得、今應に懺悔すべし。』阿難、答へて言はく、『大德迦葉、我慢にして而も故に作せしに非ず。更に人の捉ふること無かりしが故に爾りしのみ。我此に於て自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるが故に、今當に懺悔すべし。』迦葉、復言はく、『世尊、涅槃を取りたまはんと欲し、三反汝に告ぐ。汝は世尊の住世の

若は一劫、若は過一劫ならんを請ひ、無數人をして利益を得しめ、世間諸天人民を慈愍し、安樂を得しめんとせず。汝は突吉羅罪を得、今應に懺悔すべし。』阿難、答へて言はく、『大德迦葉、我故作に非ず。魔、我心に在り。我をして佛の住世を請はざらしむ。我此中に於て自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるが故に、今當に懺悔すべし。』迦葉、復言はく、『世尊の在せし時、汝に從つて水を索めたまへども、汝は與へず。突吉羅罪を得、今應に懺悔すべし。』阿難、答へて言はく、『我故作に非ず。時に五百の乘車有つて、水中に從つて過ぎたれば、其水甚だ濁れり。恐く世尊、之を飲みたまはば、患を作したまはん。是故に與へず。』迦葉、復言はく、『汝、但應に與ふべし。若は佛の威神もて、或は復諸天、能く水を淸淨ならしめん。』阿難の言はく、『我此中に於て、自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるが故に、今當に懺悔すべし。』迦葉、復言はく、『汝、世尊に何者か是れ雜碎戒なるやを問ひたてまつらず。突吉羅罪を得、今應に懺悔すべし。』阿難の言はく、『我故作に非ず。時に我愁憂無賴にして、失して世尊に何者か是れ雜碎戒なりやを問ひたてまつらざりき。我此中に於て自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるが故に、今當に懺悔すべし。』迦葉、復言はく『汝は女人を遮せず。佛を汚さしむ。突吉羅罪を得、今應に懺悔すべし。』阿難、答へて言はく、『我故に作せしに非ず。女人心軟なれば、佛足を禮せし時に、泣淚の手もて佛足を汚せり。我此中に於て自ら有罪とは見ざるも、大德を信ずるが故に、今當に懺悔すべし。』時に大迦葉、即ち白を作して言はく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧

爲に忍聽せよ。僧、今優波離に法毘尼を問はん。白是の如し。』時に優波離、卽ち白を作さく、『僧、大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今上座大迦葉をして問ひ、我をして答へしむ。白是の如し。』時に大迦葉、卽ち問うて言はく、『第一波羅夷は本何處に起り、誰か先に犯せしや。』優波離、答へて言はく、『毘舍離に在り。須提那迦蘭陀子の初犯なり。』『第二は復何處に起りしや。』答へて言はく、『王舍城に在り、陀尼伽比丘陶師子の初犯なり。』復問はく、『第三は本、何處に起りしや。』答へて言はく、『毘舍離婆裘河の邊に在り、比丘の初犯なり。』復問はく、『第四は本、何處に起りしや。』答へて言はく、『毘舍離婆裘河の邊に在り、比丘の初犯なり。』復問はく、『第一僧殘は本、何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、迦留陀夷の初犯なり。是の如く展轉して所起處に隨ふこと、初分說の如し。』復問はく、『第一不定法は、本何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、迦留陀夷の初犯なり。第二も亦爾り。』復問はく、『尼薩耆は本何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、六群比丘の初犯なり。是の如く展轉すること亦初分說の如し。』復問はく、『初波逸提は本、何處に起りしや。』答へて言はく、『釋翅瘦象力釋子に在り、比丘の初犯なり。是の如く展轉すること初分說の如し。復問はく、『波羅提提舍尼は本、何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、蓮華色比丘尼に因つて起る。第二第三第四も初分說の如し。』復問はく、『第一衆學法は、本、何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、六群比丘の初犯なり。是の如く展轉すること初分說の如

し。』比丘尼の別戒は律所說の如し。』復問はく、『最初に大戒を受くることを聽せしは、本、何處に起りしや。』答へて言はく、『波羅㮈に在り、五比丘なり。』復問はく、『最初に說戒を聽せしは、何處に在りや。』答へて言はく、『王舍城に在り、諸の少年比丘の爲なり。』復問はく、『初めて安居を聽せしは、本、何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、六群比丘に因つて起る。』復問はく、『初の自恣は、本、何處に起りしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、六群比丘に因て起る。』是の如く展轉して問ひ、乃ち毘尼增一に至る。時に彼、卽ち比丘の一切事を集め、並に一處に在つて比丘律と爲し、比丘尼事を並に一處に在つて比丘尼律と爲し、一切受戒法を一處に集め受戒揵度と爲し、一切の布薩法を一處に集めて布薩揵度と爲し、一切の安居法を一處に集めて安居揵度と爲し、一切の自恣法を一處に集めて自恣揵度と爲し、一切の皮革法を一處に集めて皮革揵度と爲し、一切の衣法を一處に集めて衣揵度と爲し、一切の藥法を一處に集めて藥揵度と爲し、一切の迦絺那衣法を一處に集めて迦絺那衣揵度と爲し、二律並に一切揵度、調部、毘尼增一を都て集めて毘尼藏と爲す。時に大迦葉、卽ち白を作さく、『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今阿難に法毘尼を問はん。』白是の如し。』時に阿難、卽ち復白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今大迦葉をして問ひ、我をして答へしむ。白、是の如し。』大迦葉、卽ち阿難に問うて言はく、『梵動經は何處に在つて說きしや。增一は何處に在りて說きしや。增十は何處に在つて說きしや。世界成敗經は何處に在つて說

きしや。僧祇陀經は何處に在つて說きしや。大因緣經は何處に在つて說きしや。天帝釋問經は何處に在つて說きしや。』阿難、皆答ふらく、『長阿含に說くが如し。彼即ち一切の長經を集めて長阿含と爲し、一切の中經を中阿含と爲し、一事より十事に至り、十事より十一事に至るを增一と爲し、雜比丘、比丘尼、優婆塞、優婆私、諸天、雜帝釋、雜魔、雜梵王を集めて雜阿含と爲す。是の如く、生經、本經、善因緣經、方等經、未曾有經、譬喩經、優婆提舍經、句義經、法句經、波羅延經、雜難經、聖偈經、是の如きを集めて雜藏と爲し、有難無難繫相應作處を集めて阿毘曇藏と爲す。時に即ち集めて三藏と爲す。時に長老富羅那、王舍城の五百阿羅漢の共に法毘尼を集むと聞き、即ち五百比丘と俱に王舍城に往き、大迦葉の所に至り、是の如きの言を語らく、『我聞く、大德は五百阿羅漢と共に法毘尼を集むと。我も亦其次に豫在して聞法せんと欲す。』時に大迦葉、此因緣を以て比丘僧を集め、此比丘の爲に、更に優婆離に問ひ、乃至集めて三藏と爲すこと、上の所說の如し。彼言はく、『大德迦葉、我盡く此事を忍可す。唯八事を除くのみ。我親しく佛より聞けり。憶持して忘れず。佛は內宿內煮自煮自取食を聽したまふ。早起して食を受け、彼より食を持し來れる、若は雜菓、若は池水所出の食す可き者、是の如きは皆餘食法を作さずして食することを得るを聽したまへばなり。』大迦葉、答へて言はく、『實に汝の所說の如し。世尊は、穀貴き時、世人民飢食して乞求するも、得難きを以て、比丘を慈愍したまふが故に、此八事を聽したまふ。時に世、還豐熟にして飲食多饒なるに、佛、還制して聽したまはず。』彼、復是言を

作さく、『大德迦葉、世尊は是れ一切知見なり。應に制し已れるを還開き、開き已れるを復制すべからず。』迦葉、答へて言はく、『世尊は是れ一切知見なるを以ての故に、宜しく制し已れるを還開き、開き已れるを復制すべし。富羅那、我等是の如きの制を作さん。是佛の制したまはざる所は應に制すべからず。是れ佛の制したまふ所は則ち應に却くべからず。佛の所制戒の如く、應に隨順して學すべし。』王舍城に在つて五百の阿羅漢、共に法毘尼を集む。是故に言はく、法毘尼を集むるに五百人有りと。

【一】ここには滅後百年の三藏結集の因緣を明す。

七百集法毘尼

〔一〕爾時、世尊、般涅槃したまひて後百歲、毘舍離跋闍子比丘、十事を行じて言はく、『是法は淸淨なり。佛の聽應したまひし所なり。兩指もて抄食し、聚落の間に得る、寺內に得る、後に聽可する、常法を得る、和を得る、鹽と共に宿ることを得る、闍樓羅酒を飮むことを得る、不截の坐具を畜ふることを得る、金銀を受くることを得るとなり。』彼布薩の日に於て、檀越の金銀を布施せるに、而も共に之を分つ。時に耶舍迦那子有り、毘舍離比丘が是の如きの事を行ぜるを聞き、卽ち跋闍子比丘の所に往き、檀越の布薩の時、衆僧に金銀を布施するを勸むるを見る。僧中に唱令して、伽那子比丘に與ふ。卽ち言はく、『我受けず。何を以ての故に。沙門釋子は、應に金銀を受取すべからず。沙門釋子は珠寶を棄捨し、飾

好を著けず。」彼餘日に於て分を作し已り、送つて伽那子比丘に與ふ。伽那子比丘の言はく、『我須ひず、我先に言へり、沙門釋子は珠寶を捨棄し、飾好を著けずと。』彼卽ち言はく、『毘舍離の優婆塞瞋れば、汝、往いて敎化して喜ばしめよ。』」時に卽ち使を差して共に往く。耶舍伽那子比丘、毘舍離優婆塞の所に至り、是の如く語つて言はく、『汝、實に我語を瞋れるや。我言はく、沙門釋子は金銀を受取せず、珍寶を棄捨し、飾好を著けずと。』優婆塞に語つて言はく、『世尊、王舍城に在せし時、王宮中に王の群臣を集め、是の如きの語を說かく「沙門釋子は、應に金銀を受取することを得、珍寶を捨せず、飾好を著けざるに非ざるべし」と。時に彼衆中に大長者有り、珠髻と字す。諸大臣に語つて言はく「是言を作すこと勿れ、沙門釋子は金銀を受取し、珠寶を捨せず、飾好を著けざるに非ずと。何を以ての故に。沙門釋子は、應に金銀を受取すべからず。珠寶を棄捨し、飾好を著けざるなり」と。時に珠髻長者、諸大臣の爲に解說し、各〻解を得て歡喜せしむ。珠髻長者、後、異時に於て世尊の所に往き、頭面に足を禮し、却て一面に坐し、先の因緣を以て具に世尊に白して言さく、「我卽ち爲に解說し、各〻歡喜せしむ。世尊、我是言を說けり、將に聖旨に違失すること無からんとするや。如法の敎ならざるや。」佛、言はく、「長者、汝が所說の如きは如法如實なり。世尊の敎法に違せず。何を以ての故に。沙門釋子は、應に金銀を受取すべからず。珠寶を除捨し、飾好を著けず。其れ金銀を受取する者有らば、則ち五欲を受く。若し五欲を受けなば、則ち沙門釋子の法に非ず。長者、汝、若し沙門釋子

の、金銀を捉持せるを見ば、決定して應に沙門法に非ずと知るべし。我是說を作して、竹葦草木の爲の故に金銀を求乞するをば聽せるも、終に自ら金銀を受取すべからず」と。是故に離奢、此因緣を以て、沙門釋子は應に金銀を受取すべからず。珠寶を棄捨し、飾好を著けず、離奢、復、異時に於て、世尊祇桓の中に在したまふ。諸比丘に告げたまはく、「四事有るが故に、日月をして不明ならしむ。何等をか四と爲す。阿修羅烟雲塵霧是なり。四事の爲に、日月を不明ならしむ、是の如く、沙門婆羅門も亦四事有り。汚染塵穢し、沙門婆羅門をして光顯有ること無からしむ。何等か四なる。或は沙門婆羅門有り。飲酒を除斷すること能はず。此は是れ第一の塵穢なり。或は沙門婆羅門有り、愛欲法を行じて捨離すること能はず、此は是れ第二塵穢なり。或は沙門婆羅門有り、金銀を受取し、飾好を捨てず、此は是れ第三の穢塵なり。或は沙門婆羅門有り、邪命を以て自活して除斷すること能はず。此は是れ第四塵穢なり。是を四事と爲す。此四事を以ての故に、沙門婆羅門をして汚穢不明にして光顯有ること無からしむ。世尊爾時、即ち偈を說いて言はく、

貪欲の垢に汚さるる、沙門婆羅門は
愚癡に覆蓋せられ、好色に愛著し
飲酒し散亂心なれば、復愛欲法を行ず
金寶瓔を受取するは、此を無智者と爲す
沙門婆羅門の、邪命を以て自活するは

佛、此を說いて結と爲す、日に雲翳の出づれば
光顯滅曜無きが如く、不淨純垢汚なれば
盲冥闇に閉ざされ、愛奴の所使なり
惡不善の業を造る、癡何ぞ能く道を行ぜん
怨憎甚だ增益し、更に未來身を受けん。

是故に離者、此因緣を以ての故に。汝等當に知るべし。沙門釋子は、應に金銀を受取すべからず。飾好を除去す。我是語を說くに、汝、此事を以て我を信ぜざるや。』彼離者の言はく、『我不信を爲すに非ず。我汝を信樂すること有り。汝、此毘舍離に住すべし。我當に衣服飮食醫藥所須の物を供給すべし。』時に伽那子比丘、諸の離者の與に解說し、歡喜を得しめ已つて、彼使比丘と倶に、婆闍子比丘の所に還る。遂に伽那子比丘の來るを見、即ち使比丘に問うて言はく、『伽那子比丘は已に解喩して、諸離者に信を得しや。』答へて言はく、『爾り。』即ち言はく、『彼已に伽那子を信樂し、我等を持つて沙門釋子に非ずと作せり。』婆闍子比丘、問うて言はく、『何が故なるや。』即ち具に先の因緣を說けり。彼毘舍離比丘、伽那子比丘に問うて言はく、『汝、先に衆僧を罵る。罪を見るや不や。』答へて言はく、『我衆僧を罵らず。』彼即ち和合して、與に擧を作す。伽那子比丘、是念を作さく、『我此に諍事せり。若し長老離婆多を得ば、我の與に伴者と作り、便ち如法滅を得べし』と。彼即ち餘人に問うて言はく、『離婆多は何處に在るや。』彼即ち答へて言はく、『聞

く、婆呵河の邊に在り』と。即ち婆呵河の邊に往くに、離婆多は在らず。彼即ち問はく、『離婆多は何處に在りや。』彼即ち答へて言はく、『聞く、伽那慰闍國に在り』と。即ち彼國に往く。既に至れるに離婆多、復在らず。復問はく、『離婆多は何處に在りや』と。答へて言はく、『僧伽賒國に在り。』即ち復彼國に往く。離婆多を見るに、衆僧の集れるに値ふ。離婆多供養の弟子に問うて言はく、『汝が大德長老離婆多は、衆僧の中に往きしや不や。』答へて言はく、『當に往くべし。』時に離婆多、集僧の中に往き、說法を聽き已り、夜半後に尼師壇を捉へて屋に還る。時に耶舍伽那子、亦僧中に在り、集つて法を聽き已り、夜半後に尼師壇を捉へて、離婆多の所に往く。彼是念を作さく、『今正に是れ時なり。當に具に先の因緣を說いて、其をして得聞せしむべし。』彼即ち離婆多に問うて言はく、『大德上座、二指抄食を得しや不や。』彼還問うて言はく、『云何が二指抄食なる。』答へて言はく、『大德長老、足食し已つて威儀を捨し、餘食法を作さざるなり。二指抄食を得しや不や。』離婆多の言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在つて制せしや。』答へて言はく、『舍衞國に在つて、餘食法を作さずして食せり。是を以ての故に制せり。』復問うて言はく、『大德長老、村間に得るや不や。』彼還問うて言はく、『云何が村間に得るや。』答へて言はく、『大德長老、足食し已つて威儀を捨て、餘食法を作さざるなり。』村中間に往いて食することを得るや。』離婆多の言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在て制せるや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食せり。是を以ての

故に制せり。』彼問うて言はく、『大德長老、寺內に得るや不や。』彼還問うて言はく、『云何が寺內に得るや。』答へて言はく、『大德長老、寺內に在つて別衆羯磨を得るなり。』離婆多の言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在つて制せるや。』答へて言はく、『王舍城に在つて、布薩揵度中に制せり。』『大德長老、後聽可を得べきや不や。』還問うて言はく、『云何が後聽可を得るや。』答へて言はく、『大德長老、界內に在つて別衆羯磨し已つて後聽せり。』離婆多の言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せるや。』答へて言はく、『王舍城に在り、布薩揵度の中に制せり。』復問はく、『常法を得るや不や。』還問うて言はく、『云何が常法を得るや。』答へて言はく、『大德長老、此は是を作し已らば、是れ本來の所作と言ふ。』彼答へて言はく、『比丘知るや不や。應に修多羅毘尼を觀じ、法律を撿挍すべし。若し毘尼を觀ぜず、法律を撿挍せざれば、而も法に違反せん。若し已作せば應に作すべからず、未作も亦應に作すべからず。若し修多羅毘尼を觀じ、法律を撿挍せば、修多羅と相應し、法律と相應し、本法に違せず、若は已作、若は未作、應に作すべし。』復問うて言はく、『大德長老、和を得るや不や。』彼還問うて言はく、『云何が和を得るや。』答へて言はく、『大德長老、足食し已つて威儀を捨て、酥油蜜生酥石蜜酪を以て一處に和して食することを得るや不や。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『舍衛國に在り、餘食法を作さずして食せり。是を以ての故に制せり。』復問はく、『大德長老、鹽と共に宿

ることを得るや不や。』彼還問うて言はく、『云何が鹽と共に宿ることを得る。』答へて言はく、『大德長老、共宿鹽を用て食中に著きて食することを得。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在てか制せしや。』答へて言はく、『舍衛國に在り、藥犍度中に制せり。』復問うて言はく、『大德長老、闍樓羅酒を飲むことを得るや不や。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『拘睒彌國に在り、長老娑伽陀比丘に因つて制せり。』復問はく、『大德長老、不割截坐具を畜ふることを得るや不や。』答へて言はく、『應に畜ふべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『舍衛國に在り。六群比丘に因つて制す。』復問はく、『大德長老、金銀を受取することを得るや不や。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『王舍城に在り。跋難陀釋子に因つて制す。」』彼言はく、『大德長老、毘舍離婆闍子比丘、此十事を行じて言はく、「清淨如法、是れ佛の聽したまふ所なり」と。彼檀越を勸め、布薩時に於て衆僧に金銀を施さしめ、分物して人に分けしむ。」』彼言はく、『汝、餘人に語ること莫れ。何を以ての故に。恐らくは諸比丘の所見不同にして、而も和合比丘に與へざればなり。汝、阿呼恆河山中に往くべし。彼處に三浮陀比丘有り。是れ我同和上なり。六十波羅離子比丘と共に住す。彼皆勇猛精進にして無所畏を度せり。此因緣を以て共に彼爲に說き已らば共に期せん。婆呵河の邊に我も亦當に往くべし。』時に耶舍伽那子比丘、即ち彼山中に往き、三浮陀の所に至

り、此因緣を以て具に彼に向つて之を說かく、『婆呵河の邊を期す。大德離婆多も亦當に來るべし。』時に毘舍離婆闍子比丘、耶舍伽那子比丘、人間に往いて伴黨を求索すと聞き、彼卽ち大に毘舍離の好衣を持し、離婆多の弟子の所に往き、語つて言はく、『我大德離婆多の爲の故に、此好衣を持して來り與へんとするも、今止めて復與へず。卽ち倶與せん。汝、取る可し。』彼言はく、『止めよ、止めよ、我受けざらん。』彼復慇懃に逼つて受けしむ。彼遂に便ち受く。既に受け已れるに、是言を作さく、『長老、彼波夷那波梨二國の比丘共に諍へり。世尊出でて波夷那國に在したまふと。善い哉長老、能く我爲に大德上座に白せよ。波夷那波梨二國の比丘共に諍へり。世尊出でて波夷那に在したまふと。善い哉大德、當に波夷那比丘を助くべし。』と。彼卽ち答へて言はく、『大德長老、離婆多は尊重なり。我難し、敢て言はざらん。』彼卽ち強いて之を逼つて止まず。便ち離婆多の所に往き、是の如きの言を白さく、『大德、彼波夷那波梨二國の比丘共に諍へり。世尊出でて波夷那に在したまふと。願くば大德、波夷那比丘を助けたまへ。』彼卽ち答へて言はく、『汝癡人、我を持つて不淨部中に在らしむ。汝去れ。復汝を須ひざらん。』彼遣を得已つて、便ち毘舍離婆闍子比丘の所に往き、是の如く語つて言はく、『長老、我先に汝に語れり。大德離婆多は尊重なれば、爲に言ふべきこと難し。我語ること能はずと。今大に責めらる。』彼問うて言はく、『何等をか說ける。』彼言はく、『已に我を遣せり。』復問うて言はく、『汝、幾の臘なる。』答へて言はく、『十二歲なり。』問うて言はく、『汝、十二歲、猶故に遣を怖畏する

や。』答へて言はく、『我供養を受けず、云何が畏れざらん。』時に彼離婆多及び諸比丘、是くの如く語らく、『我等、今當に諍所起の處に往くべし。』即ち船に乘じて恆水の中に從つて往く。時に天熱く、疲極せり。船に住し、岸邊蔭下に在りて息す。時に婆提村に長老有り、道行に在り。是の如きの念を作さく、『我今此に諍事有り。當に修多羅毘尼を觀、誰か法語にして誰か非法語なるやを知るべし。』彼即ち修多羅毘尼を觀、法律を撿挍して、便ち波梨國比丘は是れ法語、波夷那比丘は非法語なるを知る。時に天有り、身を現ぜずして讚じて言はく、『善い哉、善男子、汝が所觀の如し。波梨比丘は如法語、波夷那比丘は非法語なり。』時に諸の長老、即ち共に毘舍離に往く。毘舍離に長老有り。一切去と字す。是れ閻浮提中の最上座なり。時に三浮陀、離婆多に語つて言はく、『今、一切去上座の屋中に往いて宿り、具に此事を說いて、其をして聞くことを得しめん。』時に二人、即ち共に相隨ひ、往いて彼屋に至る。時に一切去長老、夜坐禪し思惟するに、夜已に久し。離婆多、是念を作さく、『此上座は年已に老い、氣力羸劣なり、而も久しく坐すること是の如し。況んや我當に是の如く坐するを作さざるべけんや。』時に離婆多、即便ち坐し、思惟して夜に至ること久し。一切去長老、是念を作さく、『此客比丘は遠來して疲極せるに、猶故に坐禪思惟せること是の如し。況んや我而も久しく坐せざらんや。』時に彼長老、即ち復久しく坐して思惟すらく、『夜已に過多なり』と。離婆多に語つて言はく、『長老、汝、此夜に何法を思惟せるや。』答へて言はく、『我先に白衣たりし時、嘗て慈心を習へり。此

夜に思惟して慈三昧に入れり。」彼即ち言はく、『汝、此夜に小定に入れり。何を以ての故に。慈心三昧は是れ小定なり。』即ち復問うて言はく、『大德一切去、此夜に何法を思惟せるや。』答へて言はく、『我先に白衣たりし時、空法を習へり。我此夜に多く空三昧に入れり。』彼言はく、『大德、此夜に大人の法を思惟せり。何を以ての故に。大人の法は空三昧に入ればなり。』彼是念を作さく、『今正に是れ時なり。先の因緣を說いて、其をして知ることを得しむべし。』彼問うて言はく、『大德長老、一指抄食することを得るや不や。』問うて言はく、『云何が一指抄食することを得るや。』答へて言はく、『大德、足食し已つて威儀を捨て、餘食法を作さず。一指抄食を得て食せり。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り。』餘食法を作さずして食せば、是を以ての故に制せり。』是の如く一一に說き、乃至布薩の時、金銀を受取して、分物して人に分けしむること、上に說くが如し。彼即ち言はく、『餘人に語ること勿れ。恐らくは人心不同にして、和合することを得ざらん。』一切去上座、第一上座爲り、三浮陀は第二上座、離婆多は第三上座、婆搜村は是れ第四上座なり。阿難は皆其和尚爲り。時に長老一切去、僧事を知るの時、上座即ち白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。今僧、法毘尼を論ぜん。白、是の如し。』時に波夷那比丘、波梨比丘に語つて言はく、『汝等、今平當人を出す可し。』彼即ち言はく、『上座一切去、離婆多、耶舍、蘇蔓那、是れ平當人なり。』波梨比丘、波夷那比丘に語つて言はく、『汝等も亦應に平當人を

出すべし。』彼即ち言はく、『長老三浮陀婆搜村長老沙留不闍蘇摩、是れ平當人なり。』是中に阿夷頭比丘有り。勸化するに堪任せり。彼諸比丘言はく、『此比丘を持つて數中に在くべし。何を以ての故に。彼所處に在つて、當に我等の爲に勸化すべければなり。』即ち數中に著く。彼諸の上座、是念を作さく、『我等、若し衆中に在つて此事を問はば、恐らくは更に餘の諍事を生ぜん。誰が語か是にして、誰が語か非なるやを知らざればなり。我等、今寧ろ差次して別處に在り、共に平論す可きや。』彼諸の長老、是念を作さく、『我等、何の別處に於てか而も此事を平宜すべき』と。即ち言はく、『當に婆梨林中に於てすべし。』時に一切去長老、即ち白を作さく、『大德僧聽け、此の如きは僧所學の比丘と爲す。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。婆梨林の中に於て法毘尼を論ぜん。餘比丘は中に在らず。白是の如し。』是の如く白を作し已り、羯磨に二三の比丘を差すべく、餘の比丘を取り、婆梨林中に至らんと欲す。時に一切去上座、此因緣を以て比丘僧を集む。是の如きの諸の上座、皆集まる。時に一切去上座、即ち白を作さく、『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。今僧、法毘尼を論ぜん。白是の如し。』時に離婆多、即ち白を作さく、『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今一切去上座に法毘尼を問はんとす。白是の如し。』時に上座一切去、即ち復白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今離婆多の問に、我をして法毘尼を答へしめんとす。白是の如し。』離婆多、問うて言はく、『大德上座、二指淨を得るや不や。』即ち還問うて言はく、『云何が二

指淨なる。』答へて言はく、『大德長老、足食し已つて威儀を捨て、三指抄食を得て食するなり。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『舍衞國に在つて餘食法を作さずして食せり。是を以ての故に制せり。』此は是れ第一事なり。法に非ず、毘尼に非ず、佛の所教に非ざるなり。別處に平宜し已つて一舍羅を下さん。是の如く一一に撿挍して乃ち十事に至る。法に非ず、毘尼に非ず、佛の所教に非ず、皆舍羅を下せり。彼諸の長老、是語を作さく、『我等が如きは、今別處に於て此事を平宜し已り、今復僧中に於て是の如く撿挍せんと欲す。何を以ての故に。衆人をして皆知らしめんが故なり。』彼諸の長老、皆毘舍離に往く。時に一切去上座、即ち比丘僧を集め已つて、白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今法毘尼を論ぜん。白是の如し。』長老離婆多、即ち白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今一切去上座に法毘尼を問はんとす。白是の如し。』時に一切去上座、即ち白を作さく、『大德僧聽け。若し僧時到らば、僧爲に忍聽せよ。僧、今離婆多をして法毘尼を問ひ、我をして答へしめんとす。白是の如し。』離婆多、即ち問うて言はく、『大德長老、二指淨を得るや不や。』彼問うて言はく、『云何が二指淨を得るや。』答へて言はく、『大德長老、足食し已つて威儀を捨し、餘食法を作さず、二指抄食を得て食するなり。』答へて言はく、『應に爾すべからず。』問うて言はく、『何處に在りて制せしや。』答へて言はく、『舍衞國に在り、餘食法を作さずして食せり。是故に制せり。此は是

れ第一事なり。法に非ず、毘尼に非ず、佛の所教に非ず。僧中に於て撿挍し已つて、一舍羅を下さん。』是の如く一一に撿挍して、乃ち十事に至る。法に非ず、毘尼に非ず、佛の所教に非ず。僧中に於て撿挍し已つて、皆舍羅を下せり。毘舍離に在りし七百の阿羅漢の集つて、法毘尼を論ぜし故に、七百集法毘尼と名く。

四分律卷第五十四

四分律 卷第五十五 第四分之六

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

調部之一

【一】邪婬の犯戒なるも場合によつては不犯なることを明す。

(一)爾時、世尊、毘舍離に在したまふ。時に優波離、即ち座より起ち、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『須提那迦蘭陀子は故に不淨行を行せり。是れ波羅夷を犯せりや不や。』佛、言はく、『優波離、最初に未だ制戒せざれば、犯さざるなり。』爾時婆闍子比丘、愁憂して樂まず、淨行を樂まず、即ち家に還り、故に不淨を行ぜり。彼是念を作さく、『世尊、諸比丘の爲に制戒したまへるは、若し比丘、不淨行を犯し、婬欲法を行ぜば、波羅夷を得、共に住せずと。我憂愁して樂まず、淨行を樂まず。故に不淨を行ぜり。我將に波羅夷を犯せざる無からんとするや、云何なるやを知らず。』即ち同伴比丘に語るらく、『世尊、諸比丘の爲に制戒したまへるは、若し比丘不淨行を犯し、婬欲法を行ぜば、波羅夷を得て共に住せずと。而も我憂愁して樂まず、淨行を樂まざれば、家に還つて故に不淨を行ぜり。我將に波羅夷を犯せざる無からんとするや。善い哉長老、我爲に佛に白すべし。佛の所敎に隨つて我當に奉行すべし。我若し復、佛法の中に

於て得て淨行を修することを得ば、我當に之を行ずべし。』時に彼比丘、卽ち佛所に往き、頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時、此因緣を以て比丘僧を集め、無數の方便もて婆闍子比丘を呵責して言はく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず、沙門法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず。爲すべからざる所なり。云何が癡人、淨行を樂まずして而も家に還り、故二と不淨を行ず、入れば便ち波羅夷を犯せり。共に住せず。若し餘比丘有つて、愁憂して樂まず、淨行を樂まざる者は、戒を捨して去るを聽す。若し復、佛法に於て淸淨行を修せんと欲せば、還出家し、大戒を受くることを聽さん。』爾時優波離、坐より起つて偏に右肩を袒き、右膝を地に著け、合掌して世尊に白して言さく、『是道に道想を作す、犯せりと爲すや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』復問はく、『是道に疑ふ、是れ犯ずるや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』復問はく、『是道に非道想する、是れ犯ずるや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』復問はく、『非道に道想する、是れ犯ずるや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』復問はく、『非道に疑ふ、是れ犯ずるや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』復問はく、『是男に女想を作し不淨を行ずる、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』復問はく、『是女に男想を作し不淨を行ずる、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』復問はく、『此女人と通じ、彼女人の想を作し、共に不淨行を行ずるは、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『此男に於て彼男想を作し、共に不淨を行ずる、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波

羅夷なり。』時に比丘有り。女象と不淨を行ず、彼疑ふらく、『是れ波羅夷を犯せりや不や』と。佛、言はく、『犯せり。』是の如く、牸牛牛馬駝鹿驢羊猪狗鵰鳥孔雀雞、是の如きの一切は盡く波羅夷なり。爾時、世尊、毘舍離に在したまふ。時に一の乞食比丘有り。林間に在つて住す。雌の獼猴有り、林間に行く。此比丘、人間に出でて乞食し、持して林中に還つて食し、餘食有るを此獼猴に與へしに、獼猴遂に便ち親近隨逐し、東西乃至手もて捉えて去らず。時に比丘、即ち共に不淨を行ず。時に衆多の比丘、房舍臥具を按行して次で彼林中に至る。彼獼猴、來つて諸比丘の前に在つて住し、尾を擧げて相を現ず。彼諸比丘、是の如きの念を作さく、『此雌獼猴、今我等の前に在つて相を現ずること是の如し。將に餘比丘有つて此獼猴を犯せること無からんとせんや。』即ち屏處に隱在して之を伺ふ。時に乞食比丘、食を持して林中に還り、食し已つて餘食を持して獼猴に與ふ。獼猴食し已つて共に不淨を行ず。彼諸比丘觀見して即ち問うて言はく、『長老、佛は比丘の不淨を行ずることを得ざるを制せざりしや。』彼答へて言はく、『佛は人女において制せるも畜生を制せず。』時に諸比丘、佛所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時此因緣を以て比丘僧を集め、彼乞食比丘を呵責して言はく、『汝が所爲は非なり。威儀に非ず、沙門法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何が乃ち獼猴と共に不淨を行せる。入れば便ち波羅夷なり。癡人共に住すべからず。』爾時優波離、坐より起つて偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して世尊に白して

言さく、『大德、若し比丘、餘の畜生と不淨を行ぜば、是れ波羅夷を犯ずるや不や。』佛、言はく、『犯ず。』爾時、世尊、王舍城に在したまふ。難提比丘有り。坐禪して世俗心解脱することを得。第四禪より覺し已る。時に魔天女、即ち前に在つて立つ。比丘捉へて犯さんと欲す、魔女便ち外に出づるに、比丘も亦隨つて外に出づ。彼屋の欄外に出づるに、比丘も亦隨つて屋の欄外に出づ。彼中庭に出づるに、比丘も亦隨つて中庭に出づ、彼寺外に出づるに比丘も亦寺外に出づ。寺外に死騲馬有り。彼死馬所に於て便ち滅し、天形を現ぜず。時に難提比丘、便ち死馬形に於て不淨行を行じ、不淨行を行じ已つて都て覆藏するの心有ること無し。即ち是念を作さく、『世尊、諸比丘の爲に戒を制し、不淨を行ずることを得ざれ。若し不淨を行ぜば波羅夷なり。共に住せずと。而も我今不淨を行じ、都て覆藏するの心有ること無し。將に波羅夷を犯ずること無からんとするや。我當に云何がすべき。』即ち同伴の比丘に語らく、『世尊、諸比丘の爲に戒を制し、若し比丘不淨を行ずれば波羅夷を得、共に住せずと。而も我今不淨を犯じて都て覆藏するの心無し。將に波羅夷を犯ずること無からんとするや。善い哉長老、我爲に佛に白せよ。佛の所教に隨つて我當に奉行すべし。』時に諸比丘、佛所に往いて頭面に禮を作し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時此因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、『今僧、難提比丘に波羅夷戒を與へよ。白四羯磨は是の如く與へよ。彼比丘、應に僧中に往いて革屣を脱し、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して是の如きの白を作すべし。『大德僧聽け、我難提

比丘は婬欲の法を犯じ、都て覆藏するの心無し。今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ。願くば僧、爲に慈愍の故に、我に波羅夷戒を與へよ。」是の如く第二第三說せよ。衆中に應に堪能羯磨の人を差し、上の如く是の如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此難提比丘は婬欲の法を犯じ、都て覆藏の心無し。今、僧に從つて波羅夷戒を乞ふ。若し僧、時到らば僧爲に忍聽せよ。僧今難提比丘に波羅夷戒を與ふ。白是の如し。大德僧聽け、此難提比丘、婬欲の法を犯じ、都て覆藏するの心無し。今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ。僧今難提比丘に波羅夷戒を與ふ。誰か諸長老、僧、難提比丘に波羅夷戒を與ふるを忍せば默然せよ。誰か忍せざる者は說け。」是れ初羯磨なり。第二、第三も是の如く說け。僧已に難提比丘に波羅夷戒を與へ竟んぬ。僧忍じて默然たるが故に是事是の如く持つ。波羅夷戒を與へ已らば應に隨順行すべし。是中隨順行法とは、應に人に大戒を授け、及び人に依止を與ふべからず。應に沙彌を畜ふべからず。應に教授比丘尼を受くべからず。設し差すも往いて教ふべからず。僧の爲に說戒すべからず。僧中に在つて毘尼を問答すべからず。僧差使を受けて知事人と作すべからず。僧差を受け、別處に事を平斷すべからず。僧差使の命を受くべからず。早く聚落に入り暮に逼つて還るべからず。比丘に親附すべからず。外道白衣に親附すべからず。比丘法に隨順すべし。餘の俗語を說かざれ。更に此罪を犯すべからず。餘も亦應せず。若は相似し、若は此に從つて生じ、若は此を重ぬれば、非羯磨なるべからず。非羯磨とは清淨比丘は敷座洗足水水器、革屣を拭き、身を揩摩し、及び禮拜迎送問訊を受くべから

ず。清淨比丘は衣鉢を捉持することを受くべからず。清淨比丘を擧し、爲に憶念を作すも、自ら言ふことを作すべからず。他語を助くべからず。說戒自恣を遮るべからず。清淨比丘と諍ふべからず。與波羅夷戒比丘は、僧が說戒及び羯磨の時、來不來にも犯ずること無し。』諸比丘、是の如きの語を作さく、『比丘に波羅夷戒を與へ已つて復重ねて犯ぜば、應に更に波羅夷戒を與ふることを得べきや不や。』佛、言はく、『應に滅すべからず。應に滅擯すべし。』爾時比丘有り。體軟弱なり。男根を以て口中に内る、彼疑ふらく、『我將に波羅夷を犯ずること無からんとするや。』佛、言はく、『犯ず。』時に比丘有り。藍婆那と字す。男根長し。持ちて大便道中に内る。彼疑ふらく、『我將に波羅夷を犯せざらんとするや。』佛、言はく、『犯ず。』時に比丘有り。男根起つ。異比丘卽ち持ちて自ら口中に入る。此比丘以て樂しと爲さず。卽ち却けて受けず。疑を生ず。『我將に波羅夷を犯ずること無からんとするや。』佛、言はく、『汝は犯ぜず、彼比丘犯ず。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に至る。白衣家に小兒の眠る有り。男根起つ。比丘卽ち持して自ら口中に内れ已つて疑ふ。『我將に波羅夷を犯ずること無からんとするや。』佛、言はく、『犯ず。』時に比丘有り。餘比丘を捉へて共に婬を行ず、彼疑ふ。『我、將に波羅夷を犯ずること無からんとするや。』佛、問うて言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『受けたり。』佛、言はく、『二俱に波羅夷なり。』時に比丘有り。沙彌と共に婬を行ず。疑ふらく、『我將に犯ずること無からんとするや。』佛、言はく、『汝、沙彌、樂みを受けし

や不や。』答へて言はく、『受けたり。』佛、言はく、『二俱に犯ず。』時に沙彌有り。大比丘を捉へて共に婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『比丘、汝樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『受けたり。』佛、言はく、『二俱に犯ず。』時に沙彌有り。沙彌と共に婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『受けたり。』佛、言はく、『二俱に犯ず。』時に比丘有り。强ひて比丘と共に婬を行じ、樂みを受けず、還出して疑ふ。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『受けず。』佛、言はく、『汝犯無し、入る者は犯ず。』時に比丘有り。强ひて沙彌を捉へて婬を行じ、樂みを受けず、還出して疑ふ。佛、言はく、『汝、沙彌樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『受けず。』佛、言はく、『汝は犯せず、入る者は犯ず。』時に沙彌有り。强ひて比丘を捉へ、婬を行じて樂みを受けず、還出して疑ふ。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝は犯せず、入る者は犯ず。』時に沙彌有り、强ひて沙彌を捉へて婬を行じて樂みを受けず。還出して疑ふ。佛、言はく、『汝沙彌、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝は犯せず。入る者は犯ず。』時に比丘有り、自身の根壞して所覺無し。彼是念を作さく、『我觸を覺せざれば、婬を行ずるも犯ずること無きを得ん』と。彼即ち婬を行じ已つて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷を犯ず。』時に比丘有り。男根起たず。念言すらく、『我婬を行ずるも犯ずること無けん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷を犯ず。』時に比丘有り。是念を作さく、『我眠れ

る女人と婬を行ぜんも、彼覺樂せざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷を犯ず。』時に比丘有り。是念を作さく、『醉女人と婬を行ぜんも、彼覺樂せざれば犯ずること無きを得ん』と。即ち共に婬を行じて疑ふ。佛、言はく、彼覺樂せ『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我顛狂女人と婬を行ぜんも、彼覺樂せざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我瞋恚有る女人と共に婬を行ぜんも、彼樂みを受けざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我苦痛有る女人と共に婬を行ぜんも、彼樂みを受けざれば、犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我身根壞せる女人と共に婬を行ぜんも、彼覺樂せざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我強ひて女人を捉へて共に婬を行ぜんも、彼樂みを受けざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我強ひて黃門を捉へて婬を行ぜんも、彼樂みを受けざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。是念を作さく、『我男子を捉へて婬を行ぜんも、彼樂みを受けざれば犯ずること無きを得ん』と。即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時

に女人有り。强ひて比丘を捉へて婬を行ず。比丘、樂みを受けず、還出して彼疑ふ。佛、言はく、『比丘、汝樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝は犯せず。』時に黃門有り。强ひて比丘を捉へて共に婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『比丘、汝樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『受けず。』佛、言はく、『汝犯せず。』時に男子有り。强ひて比丘を捉へて共に婬を行ず。彼樂みを受けず還出して疑ふ。佛、言はく、『比丘、汝樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝、犯せず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。比丘を捉へて大便道、若は口中に婬を行ず。彼身に樂みを受け、還出して疑ふ。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受く。』佛、言はく、『二倶に波羅夷なり。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。比丘尼、沙彌、沙彌尼、式叉摩那を捉へ、大小便道、口中に婬を行ず。彼樂みを受け還出して疑ふ。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受く。』佛、言はく、『二倶に犯ず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。比丘を捉へて大便道、口中に婬を行ず。彼樂みを受けずして疑ふ。佛、言はく、『汝、比丘、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝は犯せず、彼犯ず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼を捉へて大小便道、口中に婬を行ず。彼樂みを受けず、還出して疑ふ。佛、言はく、『汝沙彌尼、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝犯せず、彼犯ず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭

若行り。眠れる比丘を捉へて大便道口中に婬を行ず。彼眠つて覺らず。覺むる時亦知らず。彼疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、覺めしや不や。」答へて言はく、『覺めず。』佛、言はく、『汝、犯ぜず、彼犯ず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。眠れる比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼を捉へて大小便道口中に婬を行ず。彼眠つて覺めず。覺めし時も亦知らず。彼疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、覺めしや不や。」答へて言はく、『覺めず。』佛、言はく、「汝沙彌尼は犯ぜず、彼犯ず。」時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。眠れる比丘の大便道、口中に於て婬を行ず。彼眠より覺むるも樂みを受けず。還出して彼疑ふ。佛、言はく、「汝、樂みを受けしや不や。」答へて言はく、「樂みを受けず。」佛、言はく、『汝は犯せず入る者犯ず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。眠れる比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼の大小便道口中に於て婬を行ず。彼眠つて覺めず、覺め已つて樂みを受けず、疑ふ。佛、言はく、「汝、樂みを受けしや不や。」答へて言はく、「樂みを受けず。」佛、言はく、『汝は犯ぜず、彼入る者犯ず。』時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。眠れる比丘の大便道、口中に於て婬を行ず。彼眠つて覺めず。覺め已つて知り、樂みを受け、還出して疑ふ。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、「受く」と。佛、言はく、「二俱に犯ず。」時に惡比丘、惡沙彌、惡阿蘭若有り。眠れる比丘尼、式叉摩那、沙彌、沙彌尼の大小便道、口中に於て婬を行ず。彼眠つて覺めず。覺めて乃ち知り樂みを受く。佛、言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、「樂みを受く。」佛、言はく、『二俱に犯ず。』時に蓮華色比

丘尼、晝日に戸を關せずして眠る。賊、屋に入り婬を行じ已つて去る。彼眠つて覺めず。覺め已つて不淨の、身を汚すを見る。彼是念を作さく、『我身不淨に汚るる有り。將に有人の我を婬犯すること無からんと爲んや』と。彼疑ふ。佛、言はく、『犯せず、比丘尼は應に晝日に戸を關せずして眠るべからず。』爾時、難陀比丘尼有り。晝日に華樹下の衆人の戲處に於て、賊有りて捉へ婬犯す。彼疑ふ。佛、言はく、『汝、難陀、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『大德、熱鐵の體に入るが如し。』佛、言はく、『犯ずること無し。比丘尼は應に是の如きの處に住すべからず。』爾時乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に至る。彼門下に小狗子を繫ぐ。比丘を見て便ち聲を作す。比丘慈愍もて解きて放ち去る。比丘復餘處に往く。故に見て喚び共に不淨を行ず。彼是念を作さく、『我他の狗子を放ち去り已つて波羅夷を犯ず。便ち故に共に不淨を行ず』と。諸比丘是の如きの念を作さく、『此比丘は犯、前と爲んや、犯、後と爲んや。』佛、言はく、『前に犯ぜず、後に犯ず。而も他の狗子を放つて去らしむべからず』と。時に比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣の家に往き、豚子有つて水中に溺るるを見る。比丘を見て便ち聲を作す。比丘慈愍もて卽ち出して放ち去る。復餘處に往き、故の私通せる女人を見、喚んで共に不淨を行ず。彼是念を作さく、『我他の豚子を放ち去り已つて波羅夷を犯ず、便ち共に不淨を行ぜり。』餘比丘是念を作さく、『此比丘は犯、前と爲んや。犯、後と爲んや。』佛、言はく、『前に犯ぜざるも後に犯ず。而も應に是の如き事を作すべからず。』時に異女人有り。屠牛處に往いて肉を買ひ、

持ち行く。鴟鳥行り、其肉を抄撮して空中に在り。乞食比丘の鉢中に失墮す。彼女人之を見、卽ち語つて言はく、『大德、此は是れ我肉なり。持ち去ること莫れ。』比丘答へて言はく、『我鉢中に墮す。汝が肉に非ず』と。持ち去つて還らず。前行して婬女を見たり。此比丘を喚んで共に不淨を行ず。彼是念を作さく、『我向に他の肉を持ち來り、已つて波羅夷を犯ず。卽ち此女人と共に不淨を行ず。』諸比丘是念を作さく、『彼比丘は犯前と爲んや、犯後と爲んや。』佛、言はく、『前に犯ずること無くして、後に犯ず、而も應に是の如きの肉を受くべからず。』時に比丘有り。狗の口中に於て婬を行じ、彼疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。衣を褰げて小便す。狗有り。小便を舐り、以て漸く前んで男根を含む。彼樂みを受けず、卽ち還出して便ち疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『犯ぜず。』時に比丘有り。衣を褰げて小便す。狗有り、小便を舐り、復前んで男根を含む。彼樂みを受け已り、還出して疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受く。』佛の言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘有り。衣を褰げて伊羅婆提河を渡る。魚有り。男根を含む。彼樂を受けず。還出して疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず』。佛、言はく、『犯せず。』時に比丘有り。衣を褰げて伊羅婆提河を渡る。魚有り、男根を含む。彼樂みを受け還出して疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言さく、『樂みを受く。』佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』

時に比丘有り。大小便道中間に婬を行ず。彼疑ふ。佛、言はく、「偷蘭遮なり。」䏶中、曲脚間、臍道、乳間、腋下、耳鼻中、瘡孔中、縄床木床間、大小褥間、枕邊に在り、地泥搏間、君持口中に在るも、若は道想、若は疑はば、一切偷蘭遮なり。」爾時乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣の家に往く。童女有り、門内に在つて仰臥して睡る。彼是念を作さく、「我若し男根もて婬犯せんとして入るれば便ち波羅夷ならん。」即ち足の大指を以て彼女根の中に内れて疑ふ。佛、言はく、「偷蘭遮なり。」時に比丘有り。缺口なり。異比丘有り。男根を以て口中に内る。彼樂みを受けず出で疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、樂みを受けしや不や。」答へて言はく、「樂みを受けず。」佛、言はく、「汝は犯せず、入れたる者は犯ずるなり。自今已去、若し缺口せる時は應に手を以て障口すべし。」時に比丘有り。浴室の中に於て異比丘の後に身を揩す。此比丘の身軟なり。異比丘即ち欲心を生じ、便ち共に婬を行ず。彼樂みを受けず、還出して彼疑ふ。佛、言はく、「汝、樂みを受けしや不や。」答へて言はく、「樂みを受けず。」佛、言はく、「汝は犯無し、彼入れたる者は犯ず。」爾時世尊、舍衛國に在したまふ。比丘有り、晝日に戸を閉せずして眠り、男根起つ。時に衆多の女人有り、僧坊に詣り觀看し、彼比丘の屋に至り、比丘の仰眠して男根起つを見る。見已つて慚愧し、疾疾にして出づ、諸女人中に賊女有つて共に行く。賊女、屋に入り、即ち比丘形の上に於て婬を行ず。婬を行じ已つて華鬘を持つて男根の頭に繫けて去る。彼比丘眠つて覺めず。覺め已つて不淨の、身を汚し男根に華鬘有るを見、便ち是の如きの念を作さく、

『乃ち不淨の、身を汚す有り。男根に華鬘有り。將に女人有つて我に於て婬を行ずること無からんとするや疑し。』佛、問うて言はく、『汝、覺めしや不や。』答へて言はく、『覺めず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』而も應に晝日に戶を闔せずして眠るべからず。』時に舍衞國に比丘比丘尼の母子の夏安居する有り。母子數數相見る。既に數相見、倶に欲心を生ず。母、兒に語つて言はく、『汝、此より出で、今還此に入らば、犯ずること無きを得可し。』兒、即ち母の言の如くし、彼疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り、死せる女人の上に於て婬を行じ、彼疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』若し多く壞せざるは波羅夷なり。若し半ば壞せば偸蘭遮なり。若は多く壞し、若は一切壞せば偸蘭遮なり。若は骨間も偸蘭遮なり。』爾時蘇摩優婆私、比丘に語つて言はく、『男根女根倶に遮して婬を行ぜんに、犯ずること無きを得べし。』比丘即ち言の如く婬を行じ已つて疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に蘇摩優婆私有り。比丘に語つて言はく、『汝、我と共に婬を行ぜんに、外に於て出精せば犯ずること無きを得べし』と。即ち言の如く婬を行じ已つて疑ふ。佛言はく、『汝、波羅夷なり。』時に婬女有り。比丘に語つて言はく、『汝、樹葉を以て男根を裹みて婬を行せば、犯ずること無きことを得べし』と。即ち言の如く婬を行じ已つて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』爾時比丘、塚間に在つて行く。遂に死せる女人の身を見る。猶衣服莊嚴せり。即便ち婬を行じ已つて疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に比丘の守房有り。小女有り。來つて時到れるを白す。比丘即ち捉へて婬を行じ、彼女

根を破し大便道と通ぜしめ、即便ち命終す。彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『殺を犯ぜざるも婬を犯ず。波羅夷なり。』時に比丘有り。木女像身中に於て婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮を犯ず。』壁上の女像形に於て婬を行ず。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』時に比丘有り。天女と共に婬を行じ已つて疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。阿修羅女、龍女、夜叉女、餓鬼女、若は畜生、能變化者女と婬を行ずる、一切波羅夷なり。』時に比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に至つて乞食す。時に天大に雨る。女人有り、低身して潦水を除決するに形露る。彼是念を作さく、『我其身に觸れず、但男根を以て入れば犯ずること無きを得ん。』念じ已つて即便ち婬を行じて疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』爾時世尊、舍衛國に在したまふ。比丘有り。阿蘭若處に至り、晝日に眠る。時に取薪女人有り、比丘形の上に於て婬を行じ已つて去り、比丘に遠からずして住す。比丘覺め已つて身の不淨もて汚れたるを見、念言すらく、『此女必ず我身上に於て婬を行せしならん。』疑を生ず。佛問うて言はく、『汝覺めしや不や。』答へて言はく、『我覺めず。』佛、言はく、『犯せず。比丘は應に是の如きの處に住して晝日に眠るべからず。』爾時世尊、波羅提國に在したまふ。比丘有り、阿蘭若處に往いて晝日に眠る。擔草女人有り。比丘形の上に於て婬を行ず。比丘知覺せざれば已つて樂みを受けず。即ち之を捋け已つて女人を打つ。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、樂みを受けしや不や。』答へて言はく、『樂みを受けず。』佛、言はく、『汝犯

ぜず、女人を打つは突吉羅を得。』時に世尊、瞻婆國に在したまふ。比丘有り。阿蘭若處に至り、晝日に思惟し繫念して前に在り、此比丘は是れ阿羅漢なり、風患有つて男根起つ。時に賊女有り。強ひて比丘と共に婬を行ず。比丘、是の如く語らく、『阿羅漢は猶欲有つて男根起つや。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『五事の因緣有つて男根をして立たしむ。大便の急なると、小便の急なると、風患と、慰周陵伽蟲の嚙めると、欲心有るとなり。是を五事と爲す。若し阿羅漢の欲心有つて男根起つ者は、是處有ること無し。』爾時世尊、王舍城に在したまふ。王子無畏、男根に病有り。女人をして之を含ましめ、後差することを得たり。差することを得已つて即ち此女人の口中に於て婬を行ず。此女人愛戀して樂まず、便ち是念を作さく、『若し王瓶沙來る時、我當に覆頭露形して王の前に在つて住すべし。若し王、我に問うて、汝狂人なりや、何が故に乃ち作すこと是の如きやと言はば、我當に答へて言ふべし。狂ならず。是れ王子所須の故に、我今覆護す。何を以ての故に。王子は常に我口中に於て婬を行ずれば、是故に覆護すと。』後異時に王瓶沙、無畏の所に往く。時に女人、先の所念の如くし、王の前に於て是の如く住す。王問うて言はく、『汝狂なりや、何が故に是の如くなる。』女、答へて言はく、『我狂ならず、是れ王子の所須なり、是故に覆護するのみ。』王、即ち無畏を喚び來り、語つて言はく、『汝、云何が乃ち侍女の口中に於て欲を行ずるや。』無畏、之を聞いて甚た以て慚愧す。後異時に於て王子無畏言はく、『此女人罪有り。』黑衣を著けて城門の邊に安置することを爲し、是の如きの言を作さく、『若

【二】次に不與取の犯戒不犯戒を說く。

の是の如きの病行る者は、當に此婬女の口中に於て婬を行せば差することを得べし』と。時に諸比丘、是の如きの言を作さく、『若し病を治せんが爲の故に、男根を以て彼女人の口中に著き含ましむるも犯せざるや。』佛、言はく、『波羅夷なり。』爾時に城有り。婆樓越者と名く。王を海と字す。婬女に罪有り。王、是言を作さく、『女根の兩邊の肉を剝いで此を以て罰と爲せ。』と。卽便ち之を剝ぐ。諸比丘、是の如きの言を作さく、『若し生人の骨間に於て婬を行ぜば、犯を爲すや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』

(二)爾時世尊、王舍城に在したまふ。優波離、座より起ち、偏に右肩を露し、右膝を地に著け合掌して佛に白して言さく、『大德、陀尼伽陶師子は王瓶沙の材木を取る。與へざるに取るは是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『最初未だ制戒せざれば犯せず。』復佛に白して言さく、『大德、若は空處他所守護物を、若は五錢を取り、若は五錢に過ぐる、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『他物他物想に若は五錢、若は五錢に過ぐるを與へざるに取らば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『他物と疑ひ、若は五錢を取り、若は五錢に過ぐる、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』非他物他物想に五錢を取り、若は五錢に過ぐるも偷蘭遮なり。』『非他物と疑ひ五錢を取り、若は五錢に過ぐ、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』若し他物他物想に減五錢を取らば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『若し他物と疑ひ減五錢を取らば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『非他物他物想に減五錢を取らば、是れ犯なり

や不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『非他物と疑ひ滅五錢を取る、是れ犯なりや不や。』
佛、言はく、『突吉羅なり。』『若し女想を作し、男物の五錢、若は過五錢を取らば、是れ犯
なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『若し男想を作し、女物の五錢、若は過五錢を
取らば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』若し此女想を作し、餘の女物
を取らば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『若し此男想を作し、餘の男
物を取らば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』爾時世尊、波羅㮈に在した
まふ。時に世、穀貴く人民飢餓し、乞食するも得難し。時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著
け鉢を持し、白衣の家に往く。女人有り、器に飯を盛り、地に置き已つて還屋に入る。比丘、
左右を看るに人を見ず。是念を作さく、『我此食を取らば我に於て益有らん。』即ち持つて
去り、後疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取るや。』答へて言はく、『盜心を以て
取る。』佛、言はく、『若し價直五錢なるを取るも、本處を離れなば波羅夷なり。』乾飯魚
肉倶闍尼も是の如し。一切の直五錢なるを取るも、本處を離るれば波羅夷なり。』時に乞食
比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持して白衣の家に往き、銅杅有るを見る。左右を看るに人
を見ず。念言すらく、『此れ我に於て益有らん。』即ち持ち去つて疑有り。佛、問うて言
はく、『汝、何の心を以て取れるや。』答へて言はく、『盜心もて取る。』佛、言はく、『若し價
直五錢なるを取るも、本處を離れなば波羅夷なり。』時に比丘有り。浣衣處に於て他衣を取
り、持ち去つて疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取れるや。』答へて言はく、『盜

心を以て取る。』佛、言はく、『價直五錢なるを取るも、本處を離れなば波羅夷なり。』時に比丘有り。浣衣處を去ること遠からずして貴價衣の曬れたる有るを見、即ち憶識して去る。念言すらく、『還時に當に取るべし』と。便ち疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『方便もて五錢を求むれば、未だ本處を離れざるも偸蘭遮なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持して白衣家に往き、門屋の下に貴價衣の曬るるを見、脚を以て側に轉じ、彼を看て疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『方便もて五錢を求むれば、未だ本處を離れざるも偸蘭遮なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持して白衣家に往き、獨坐床有るを見る。左右を看るに人を見ず。自ら念ずらく、『此は我に於て益有らん』と。即便ち持ち去つて疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取れるや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に往き、獨坐床幷びに衣有るを見る。左右を看るに人を見ず。自ら念ずらく、『此は我に於て益有らん』と。持ち去つて彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『價直五錢なるを取るも本處を離れなば波羅夷なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に往き、獨坐床有るを見、暫く取用して坐し疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『暫く取るも盜心もてするに非ず。』佛、言はく、『犯ずるこ

と無し。應に主を問はずして輒くも取用すべからず。』時に比丘有り、他塔廟中の衣を取りて疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取れるや。』答へて言はく、『糞掃衣を以て取る。』佛、言はく、『犯ずること無し。應に他塔廟中の莊嚴衣を取るべからず。』時に比丘有り、賣縺人と共に行く。彼比丘に語つて言はく、『長老、汝等は關を度るに輸稅せず。今此縺を以て長老に託し關を度らんと欲す。』時に比丘、卽ち爲に之を過ぎ便ち疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『價直五錢なるも關を過ぐれば便ち波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて一人を遣り、他物を取らしむるに、五錢を得、若は五錢に過ぎたり。彼疑ふ。佛、言はく、『一切波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて一人を遣り他物を取らしむ。中に疑ふ者有るも而も遮せず。卽ち往いて物を取るに、五錢を得、若は五錢に過ぎたり。彼疑ふ。佛、言はく、『一切波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて一人を遣り他物を取らしむ。中に疑ふ者有つて卽ち遮すに、彼、故に往いて取り、五錢を得、若は五錢に過ぎたり。彼疑ふ。佛、言はく、『遮せる者は偸蘭遮なり。遮せざる者は波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り、方便もて一人を遣り他物を盜ましむ。卽ち往いて五錢を取り、若は五錢に過ぐるも、滅五錢を得たり。彼是念を作さく、『我等滅五錢を得たり。波羅夷を犯ぜざらん』と。佛、言はく、『本取物處に依る。直五錢なるも波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて一人を遣り、五錢を取り、若は五錢に過ぐ、還つて共に分ち、各滅五錢を得たり。彼是念を作さく、『我等滅五錢を得

たり。波羅夷を犯ぜざらん。』佛、言はく、『通じて一分を作すも盡く波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて共に一人を遣り他物を取らしむ。彼往いて滅五錢を取り、此に來至して五錢を得たり。彼是念を作さく、『我等五錢を得たれば波羅夷なり』と。佛、言はく、『本取物處に依る、偸蘭遮なり。』時に比丘有り。彼聚落物を取り、城に來入して疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心もてす。』佛、言はく、『五錢を取るも本處を離れなば波羅夷なり。』時に比丘有り。他の經を盜む。是念を作さく、『佛語は價無し。應に紙墨の直もて計るべし』と。彼疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以て取りしや。』答へて言はく、『盜心を以て取る。』佛、言はく、『五錢を取るも本處を離れなば波羅夷なり。』時に王家の勇健人有り。信樂を以ての故に世尊に從つて出家す。異破戒比丘有り。誘誑して言はく、『長老、彼某甲村中に多くの財物有り、亦健人有り。而も汝彼に勝ぐ。今共に往いて彼財物を取るべし。』即ち答へて言はく、『爾るべし。』彼比丘、語り已つて便ち去ること遠からず、此比丘、是念を作さく、『我信樂もて出家す。應に是の如きの惡事を作すべからず』と。彼破戒比丘、異時に於て復來り語つて言はく、『今共に往いて彼財物を取るべし。』答へて言はく、『我往かず。』問うて言はく、『何を以ての故に。』答へて言はく、『我汝に於て去りし後、思惟して是念を作さく、我應に信を以て出家して是事を作すべからずと。是を以ての故に往かず。』復異時に彼破戒比丘、彼村に往いて他物を盜み、各各分ち已つて一分と作して此比丘に送與す。此比丘答へて言はく、『我先に是の如きの言を

作さず。信を以て出家せば應に是の如きの事を作すべからざるや。』疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』即ち具に因縁を以て佛に白す。佛、言はく、『犯ずること無し。』先は然るべきも、彼は突吉羅なり。』時に比丘有り。他衣を盜まんと欲し、而も錯つて已が衣を取り、疑ふ。佛、言はく、『汝、偸蘭遮なり。』時に比丘有り、他衣を盜取し併せて已が衣を得たり。疑ふ。佛、言はく、『已が衣は偸蘭遮、他衣は波羅夷なり。』時に比丘有り。他に物を盜取せられ、而も彼盜者の物を奪ふ。疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に衆多の白衣有り。塚間に在つて衣を脫し一處に置いて死人を埋む。糞掃衣比丘有り。謂はく、『是れ糞掃衣』と。即ち持ち去る。諸の白衣、見已つて語らく、『大德、我衣を持ち去ること莫れ。』彼答へて言はく、『我是れ糞掃衣と謂へり』と。即ち衣を置いて去る。疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『糞掃衣の想を以てす。盜心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。若し多くの衣聚有らば、應に糞掃衣想を作すべからず。』時に比丘有り、塚を去ること遠からずして行く、遂に多くの糞掃衣有るを見、即ち聚集して去る。言はく、『還つて當に取るべし。』餘の糞掃衣比丘、見て是れ糞掃衣なりと謂ひ、即ち持ち去る。彼比丘還つて衣を見ず。寺内に至るに比丘の浣治すること有るを見る。即ち語つて言はく、『汝、我衣を偸む。盜を犯せり』と。彼答へて言はく、『我盜取せず。糞掃衣なるのみ。』彼疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『糞掃衣を作して取る。』佛、言はく、『犯せず。』而も應に糞掃衣を取聚すべ

からず。』時に居士有り。塚を去ること遠からずして行く。遙に大價の糞掃衣有るを見、卽ち往いて取り草中に置いて去る。言はく、『還つて當に取り某甲比丘に與ふべし。』時に糞掃衣比丘有り。見て卽ち持ち去る。彼居士還つて衣を見ず。寺中に至るに比丘の浣治せるを見る。卽ち語つて言はく、『汝、我衣を盜む。』比丘答へて言はく、『我汝が衣を盜まず。糞掃衣を取るのみ』と。疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『糞掃衣を作して取る。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に是の如きの處の糞掃衣を取るべからず。』時に牧牛人有り、衣を脫して頭前に置いて眠る。糞掃衣比丘有り。見て是れ死人なりと謂ひ、是念を作さく、『世尊は比丘の完死人の衣を取るを聽したまはず』と。卽ち死人の臂骨を取らんとして頭を打つ。彼覺め起きて言はく、『大德、何が故に我を打つや。』比丘の言はく、『我汝は是れ死人なりと謂へり。』彼牧牛人の言はく、『汝、寧ぞ我死生を別たざるべけんや。』卽ち比丘の熱手を打つ。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『死人を打し、破して衣を取らしむべからず。』時に衆多の小兒有り。衣を脫して一處に置き、土堆の戲を作す。糞掃衣比丘有り。見て卽ち持ち去る。諸の小兒、見て語つて言はく、『我衣を持ち去ること莫れ。』比丘答へて言はく、『我是れ糞掃衣なりと謂へり』と。置いて去り疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取りしや。』答へて言はく、『糞掃衣を以て取る。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も聚糞掃衣を取るべからず。』時に六群比丘、石蜜を以て小兒と誘誑し、人間に將ゐて賣らんと欲す。父母之を見、卽ち比丘に問う

て言はく、『太德、何の所說かある。』彼答へて言はく、『所說無し。』即ち小兒を留めて去り、彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心もてす。』佛、言はく、『直五錢なるも本處を離れなば波羅夷なり。』時に比丘有り。盜心もて他分物籌を倒易し、彼疑ふ。佛、言はく、『舉籌は便ち波羅夷なり。』時に比丘有り。他分物籌を盜んで疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも、本處を離れなば波羅夷なり。』時に比丘有り。側に他籌を轉じて疑ふ。佛、言はく、『方便もて五錢を取るも、未だ本處を離れざれば偸蘭遮なり。』時に比丘有り。再び物を盜取するも五錢に滿たず。彼是の如きの念を作さく、『我前後五錢に滿たず。波羅夷を犯せず。』佛、言はく、『前後五錢に滿つれば波羅夷なり。』時に祇桓を去ること遠からず、居士有つて耕す。客比丘有り、見て語つて言はく、『此は是れ僧地なり。耕すこと莫れ。』彼答へて言はく、『僧地に非ず。我地なるのみ。』比丘、復語つて言はく、『是れ僧地なり。汝、耕すこと莫れ。』居士即ち犁を放つて去る。是の如きの言を作して言はく、『我自ら地有るも而も耕すことを得ず。』彼客比丘、祇桓に入り舊比丘に問はく、『居士有り、此を去ること遠からずして耕す、此は是れ誰の地なるや。』答へて言はく、『是れ彼居士の地なり。』舊比丘の言はく、『汝、何が故ぞ問ふや。』即ち具に因緣を說き、便ち疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせるや。』具に因緣を說く。佛、言はく、『汝、犯ずること無し。而も應に是の如きの事を作すべからず。』時に優波離、座より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け、佛に白して言さく、『若し滅損の意を作し、五錢

を取り、若し過五錢ならんに、自ら取り、若し人をして取らしめ、自ら斷壞し、若し人をして斷壞せしめ、自ら破し、若し人をして破せしめ、若し燒き、若し埋め、若し色を壞す、是れ犯なりや不や。」佛、言はく、「一切波羅夷なり。」時に比丘有り。分地するに他の標相を移す。彼疑ふ。佛、言はく、「汝、何の心を以てせしや。」答へて言はく、「盜心を以てす。」佛、言はく、「標相を移すに、若し直五錢なるも波羅夷なり。」爾時に、衆の僧園に水無く荒野せり。六群比丘、他田水を決して僧園中に著けて疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、何の心を以てせしや。」答へて言はく、「盜心もてす。」佛、言はく、『波羅夷なり。」時に比丘有り。檀越家有り。田に水無く荒野す。彼他水を決して檀越の田中に著けて疑ふ。佛、言はく、「波羅夷なり。」時に比丘有り。白衣家と怨有り。彼他田水を決して之を棄て、田を毀廢せしめ、彼疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。」時に比丘有り。他水を盜み、彼疑ふ。佛、言はく、「直五錢なるも波羅夷なり。」諸比丘、疑うて敢て渠水泉陂池水を取らず。佛、言はく、「若し人の所護に非ずんば犯ぜず。」時に比丘有り。旃陀羅と字す。鬪諍の事有り。貴價の蘇摩鉢有り。彼諍事を以ての故に常に憂愁を懷き、是の如きの語を作さく、「若し能く我諍事を滅する者有らば、當に此鉢を與ふべし。」と。時に阿夷頭比丘有り。聰明了了にして善く諍事を滅す。即ち彼爲に滅諍し已つて鉢を持つて去る。此比丘、鉢を失せりと謂ひ、便ち行いて求覓して阿夷頭の手中に捉ふるを見る。即ち語つて言はく、「汝、我鉢を偷めり。」と。彼即ち答へて言はく、『我汝の鉢を偷まず。汝自ら要言有り。若し能く我諍事

を滅する者有らば、當に此鉢を持つて與ふべしと。是故に我取るのみ。』彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取れるや。』彼具に因緣を答ふ。佛、言はく、『汝は犯せず、而も應に是の如きの物を受くべからず。』時に比丘有り。婆修達多と字す。僧伽梨有り。復比丘有り。語らずして輒ち著し聚落に入つて乞食す。耶輸伽と字す。彼衣を失せりと謂ひ、便ち行いて求覓して婆修達多の著せるを見る。卽便ち之を捉へて言はく、『汝、盜を犯す』と。彼答へて言はく、『我汝が衣を盜まず、親厚の意を以て取るのみ』と。彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『親厚の意を以て取る、盜心もてせるには非ず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に非親厚に於て親厚の意を作して取るべからず。』時に比丘有り。淸淨と字す。僧伽梨有り。須陀夷比丘有り。主を問はずして輒ち著し、聚落に入つて乞食す。主、衣を失せりと謂ひ、便ち行いて求覓するに、須陀夷の著せるを見る。卽ち捉へて語つて言はく、『汝、我衣を取る。盜を犯す』と。彼答へて言はく、『我盜まず、借りて著せるのみ』と。彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『借りて著けしのみ。盜心もてせるには非ず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に主を問はずして輒ち著けて聚落に入るべからず。』時に比丘有り。他の梨菓を取つて疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも本處を離れなば波羅夷なり。閻婆菓、波梨婆菓、蒲桃、種種の菓も、若し直五錢なれば一切波羅夷なり。』時に比丘有り。他の梨菓を搖がして、墮して損減せしめんと欲す。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。若

し揺がして閻婆菓、波梨婆菓、蒲桃、種種の菓を墮して損減せしめんと欲せば、一切波羅夷なり。』時に比丘有り。他の胡荽を盜んで疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』時に比丘有り。甘蔗を盜んで疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』時に比丘有り。他の菜を取り、疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』時に比丘有り。他の蓮華を取り、疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』鉢頭摩、頭頭摩、拘頭摩、分陀利華も、直五錢なるも波羅夷なり。若し復折壞して他を損減せんと欲せば、直五錢なるも波羅夷なり。時に他の守視人及び賊有り。比丘に佉闍尼食を與ふ。比丘、是の如きの意を作して言はく、『此れ彼食に非ず』と。受けず。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『此は即ち是れ檀越食なり。手を淨洗して之を受食するを聽す。』時に比丘有り。他の藕根を取り、疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』時に比丘有り。他の所守護林中に在り、材を取り、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。盜心無根なるに他食を取り、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。無根に他食を取り、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心無し。』佛、言はく、『犯ずること無きも、妄語なるが故に波逸提なり。』時に比丘有り、比丘を遣りて繩床を盜取せしむ。彼使比丘、不盜と謂ひ、即ち爲に床を取り來つて疑ふ。佛、言はく、『方便もて教ふる者は波羅夷なるも、使者は犯せず。』時に比丘有り。比丘を遣して繩床を取らしむ。彼の使、盜取なりと謂ひ、即ち床を取り來り、疑ふ。佛、言はく、『取る者は波羅夷なり。教ふ

る者は犯ずること無し。』時に衆多の比丘有り。輿有り。六群比丘と共に行く。六群比丘、是念を作さく、『前に住處に到り、當に彼輿を盜取すべし』と。佛、言はく、『若し此處に在つて盜まば波羅夷なり。若は道中に在り、若は住處に至つて盜むも亦波羅夷なり。』時に六群比丘有り。恆水の中に流船有るを見て是念を作さく、『我等、此船を盜取せば身手を勞せざる可し』と。彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせるや。』即ち具に因緣を答ふ。佛、言はく、『但意に犯ずること無きのみ。而も應に是の如きの意を生ずべからず。』比丘有り。他船を盜取し、此岸より彼岸に至り、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』彼岸より此岸に至り、水に順ひ、若は水に逆ひ、若は水中に沈み、若は牽ゐて陸地に著け、若は他船を解いて處を離る。一切波羅夷なり。若し方便もて解せんと欲するも、處を離れざれば偸蘭遮なり。時に二比丘有り。阿夷羅婆提河中に往いて浴し、貴價衣ある簏の水に隨つて流下するを見る。一比丘、見て便ち言はく、『此簏は我に屬す。』第二の比丘、言はく、『簏中の物、我に屬す。』即ち共に貴價衣を取得し、便ち疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『糞掃衣の想もてす。』佛、言はく、『犯せず。應に水中の糞掃衣を取るべからず。』時に比丘有り。金花鬘を盜み、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に祇桓中に衆多の鳥有り。巢住す。後夜に至つて鳴喚し、諸の坐禪比丘を亂す。舊比丘有り。守園人を遣し鳥巢を除去す。彼鳥巢の中に於て金有り、碎帛有るを見、持ち來つて舊比丘に與ふ。彼疑ふ。佛、言はく、『鳥獸は無用なれば犯ずること無し。而も是の如きの

物を受くるべからず。』時に祇桓中に鼠穴有り。比丘、守園人をして壞せしむ。彼、鼠穴中に於て藥碎帛を得、持ち來つて比丘に與ふ。比丘疑ふ。佛、言はく、『畜生は用無ければ犯ずること無し。而も應に是の如きの物を受くるべからず。』時に寺を去ること遠からずして村有り。諸鼠、村中を往き、胡桃を取り來り、寺內に在つて大聚を成ず。六群比丘、盜心を以て取食し、彼疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に祇桓を去ること遠からず獵師有り。機撥を安じて鹿を捕ふ。機中に死鹿有り。六群比丘、盜心を以て取食し、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。晝日に阿蘭若處に往く。賊有り、牛を繫して樹に在り。牛、比丘を見て泣淚す。比丘、慈念もて便ち解放し去る。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『慈心を以てす。盜意無し。』佛、言はく、犯ずること無きも、應に是の如きの事を作すべからず。』時に比丘有り。晝日に阿蘭若處に往く。賊有り、牛を縛して中に置く。比丘、左右に人を見ざれば念言すらく、『此れ我に於て益有らん』と。即ち牛を解いて牽去す。去ること遠からず、還意念を得、便ち言はく、『我何ぞ此牛を用ひんや』と。即ち放ち去る。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『直五錢なるも、處を離れなば波羅夷なり。』時に豹有り。鹿を捉ふ。鹿、瘡を被り、來つて寺に入つて死す。諸比丘取食し、疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。』時に獵師有り、鹿を捕ふ。鹿來つて寺に入る。獵師、鹿を尋ねて來り、諸比丘に問うて言はく、『是の如く、是の如きの鹿を見しや不や。』

諸比丘の見ざる者、見ずと言ふに、彼即ち處處に求覓して得たり。時に獵師、即ち比丘を瞋嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧有ること無し。妄語軟調なるに、自ら我正法を知ると稱す。鹿を見て而も見ずと言ふ。是の如くんば何ぞ正法行らんや。』諸比丘疑ひ、佛に白す。佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り。波利迦羅衣を盗取し、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。盗心もて他の波利迦羅衣を擧し、處を離れしめ、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。盗心もて側に波利迦羅衣を轉じ、疑ふ。佛、言はく、『方便もて五錢を求めんに、未だ處を離れずんば偷蘭遮なり。』時に比丘有り。繩床木床大小褥枕氈被、若は瓶若は澡罐、若は杖、若は扇を盗む。佛、言はく、『直五錢なるも一切波羅夷なり。』時に比丘有り。繩床を倒易して言はく、『此も亦是れ僧、彼も亦是れ僧なり』と。佛、言はく、『應に倒易すべからず。』時に比丘有り。木床大小褥、若は枕を倒易し、『此も亦是れ僧、彼も亦僧なり。』氈被瓶澡罐杖扇もて言はく、『此も亦是れ僧、彼も亦是れ僧なり』と。佛、言はく、『應に爾すべからず。』時に比丘有り。他石を盗み、彼疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』材木竹葦叉、若は草婆婆草樹皮、若は他の所守護の樹葉花菓を盗斬し、彼疑ふ。佛、言はく、『直五錢なるも一切波羅夷なり。』時に比丘有り。他の衣架上より衣を盗取し、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。盗心もて他の衣架上の衣を擧し架を離れしめ、疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。盗心もて他の架上より側に衣を轉じて疑ふ。佛、言はく、『方便もて五錢を

に、盜心もてせば偸蘭遮なり。』時に比丘有り。他の衣架上の帶を取り、幷に架を合取し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心を以てす。』佛、言はく、『直五錢なるも處を離れなば波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。六群比丘と白衣家の内に在つて共に坐食す。白衣は大價衣を以て敷いて座と爲す。中に一六群比丘有り。盜心もて脚を以て轉側して疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『盜心もてす。』佛、言はく、『方便もて五錢を求めんに、未だ處を離れざれば偸蘭遮なり。』

四分律卷第五十五

【一】前に續いて不與取の犯戒不犯戒を明す。

四分律　卷第五十六　第四分之七

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

調部之二

(一)時に差摩比丘尼有り。檀越家有り。彼弟子其家に往いて檀越に語つて言はく、『阿姨、差摩は五斗の胡麻子を須ひんとす』と。檀越の言はく、『得可きのみ』と。卽ち之を與ふ。彼弟子、胡麻を得て自ら食す。後、異時に於て差摩比丘尼、晨朝に衣を著け鉢を持し、檀越家に往き、座を敷いて坐す。檀越問はく、「胡麻子は美しや不や。」彼答へて言はく、「何等か胡麻なる。」檀越、卽ち具に本末を說く。差摩比丘尼、還つて彼弟子比丘尼に語つて言はく、「汝、我五斗胡麻を盜めり」と。弟子答へて言はく、「我盜まず、親厚の意を以て取るのみ」と。疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、何の心を以てせしや。」答へて言はく、「親厚の意もて取る。」佛、言はく、「犯すること無し。而も應に非親厚の意に親厚の意を作して取るべからず。妄語を以ての故に波逸提を得ればなり。」時に差摩比丘尼に檀越家有り。其弟子、其家に往いて語つて言はく、『阿姨、差摩は三種の藥粥を須ひんとす。』彼言はく、『得可きのみ。』卽便ち與ふ。彼得て便ち自ら食す。後時に差摩比丘尼、晨朝に衣を著けて鉢を

持し、其家に往き座を敷いて坐す。檀越問はく、「阿姨、三種の薬粥は美しや不や。」彼即ち言はく、「何等か三種の薬粥なる。」檀越即ち具に爲に本末を說く。若摩、還つて彼比丘尼弟子に語つて言はく、「汝は我三種の薬粥を盗めり。」彼、答へて言はく、「我盗まず、親厚の意を以て取るのみ」と。彼疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、何の心を以て取りしや。」答へて言はく、「親厚の意もて取る。」佛、言はく、「犯ずること無し。而も應に非親厚に親厚の意を作して取るべからず。妄語を以ての故に波逸提を得ればなり。」時に比丘有り。和尚の依闍尼分を取る。和尚語つて言はく、「汝、我分を食す。盗を犯ず。」答へて言はく、「我盗まず、親厚の意もて取るのみ」と。彼疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、何の心を以てせしや。」答へて言はく、「親厚の意もて取る。」佛、言はく、「犯ずること無し。而も應に非親厚の意に親厚の意を作して取るべからず。」時に比丘有り。陶師を檀越と爲す、檀越語つて言はく、「大徳、器を須ひんとせば便ち見語せよ。」彼答へて言はく、「爾る可し。」其檀越、起ち去つて家に還る。更に異人有り、賣器處に來至して賣器す。後時に比丘瓶を須ひんとし、即ち他瓶を取つて持ち去る。彼比丘に語つて言はく、「大徳、我瓶を持ち去ること莫れ」と。比丘の言はく、「此は是れ某甲の瓶なり。某甲、先に我に語つて言はく、『若し器を須ひんには便ち取れ』と。是故に我取るのみ。」彼言はく、「此は某甲の瓶に非ず。」比丘、即ち瓶を放つて去り、疑ふ。佛、問うて言はく、「汝、何の心を以てせしや。」即ち具に因緣を說く。佛、言はく、「犯ずること無し。而も應に主に問はずして取るべからず。」

時に比丘有り。沽酒家を檀越と爲す。檀越、比丘に語つて言はく、『大德、若し甑を須ひんには取れ』と。答へて言はく、『爾るべし。』時に檀越、卽ち家に還へる。更に異人有り、沽酒處に在つて住す。後に比丘、甑を須ひんとし來つて取り去る。彼語つて言はく、『大德、我甑を持ち去ること莫れ。』比丘、言はく、『此は是れ某甲の甑なり。某甲、先に見語すらく、甑を須ひんには便ち取れと。是故に取るのみ。』彼言はく、『此は某甲の甑に非ず。』比丘、甑を放つて去り、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』具に因縁を答ふ。佛、言はく、『犯せず。而も應に主を問はずして他物を取るべからず。』時に比丘有り。估客を檀越と爲す。語つて言はく、『大德、若し所須有れば便ち取れ。』と。答へて言はく、『爾るべし。』彼估客、家に還へる。後更に異人有り。此處に在つて賣物す。後比丘、米を須ひんとし、卽ち米を取つて持ち去る。彼語つて言はく、『大德、我が米を持ち去る。』彼語つて言はく、『大德、我米を持ち去ること莫れ。』比丘の言はく、『此は是れ某甲の米なり。先に我に語つて言はく、若し所須有らば便ち取れと。是故に我取るのみ』と。彼言はく、『此は某甲の米に非ず。』比丘、卽ち米を置いて去り、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』具に因縁を答ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に主に問はずして取るべからず。』時に賣衣人有り。檀越爲り。檀越語つて言はく、『大德、衣を須ひんには便ち取れ』と。答へて言はく、『爾るべし。』彼檀越命過す。兒の在る有り。比丘、衣を須ひんとし、卽ち衣を取つて持ち去る。彼言はく、『大德、我衣を持ち去ること莫れ。』

比丘の言はく、『是は糞甲の衣なり。先に我に語つて言はく、衣を須ひんとせば、便ち取れと。』彼答へて言はく、『糞甲已に死せり』と。比丘、衣を放つて去り、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』具に因縁を答ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に主を問はずして取るべからず。』

爾時世尊、毘舍離に在したまふ。不信樂の離奢有り。幣物を以て五錢を裹み、糞聚間に置き、人を遣して彼に伺はしめ、若し取者を見ば將來せんとす。時に糞掃衣の比丘、見て是を糞掃衣なりと謂ひ、即ち取つて嚢中に著す。時に彼使人、見已つて語つて言はく、『糞甲離奢喚ぶ。』と。比丘、答へて言はく、『去らん。』去つて離奢所に至る。離奢問うて言はく、『大德、寧に錢寶を捉ふべきや不や。』比丘答へて言はく、『應ぜず。』『汝、何が故に取れるや。』答へて言はく、『我取らず。』彼言はく、『出して之を看よ。』彼即ち嚢中より出し示す。此比丘慚愧す。餘比丘も亦爾り。此因縁を以て具に世尊に白す。世尊、言はく、『諸比丘、善く聽け。若し比丘有り、是の如きの糞掃衣を取らんと欲せば、應に左足指を以て右足指に躡し、牽解して看るべし。若し不淨有らば之を出し、淨き者は持ち去れ。』爾時世尊、舍衛國に在したまふ。迦留陀夷、阿夷婆提河中に在つて浴す。迦留陀夷、先に岸上に出で、錯つて六群比丘の衣を著けて去る。六群比丘、後より出づるに、河岸上に己が衣を見ず。迦留陀夷の衣を見る。便ち言はく、『彼盜を犯ず。我等の衣を取るに、即ち現前に於てせず、滅擯を作す。』時に迦留陀夷之を聞き、疑を生じ、世尊の所に往き、頭面に足を

禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て其に世尊に白す。世尊、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『是れ已が衣と謂ひ、盜心を以てせず』と。佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に衣を看ずして便ち著すべからず。亦應に不見前に呵責を作すべからず。若は擯し、若は衣止し、若は遮して白衣家に至らざれ。若は擧、若は滅擯の羯磨を、若し作すも成ぜずんば突吉羅を得。』爾時比丘有り。風飄衣を得て彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取れるや。』答へて言はく、『糞掃衣を以てし、盜心を以て取らず。』佛、言はく、『犯ずること無し。應に風飄及び糞掃衣を取るべからず。』爾時、居士有り。衣を浣ひ已つて牆上に著きて曬す。糞掃衣の比丘、見て是れ糞掃衣なりと謂ひ、即ち持して去る。時に居士、見て語つて言はく、『大德、我が衣を持し去ること莫れ。』比丘言はく、『我是れ糞掃衣なりと謂へり。』即ち衣を放つて去り、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以て取りしや。』答へて言さく、『糞掃衣として取る。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に牆上に於て、若は籬上、若は塹中に糞掃衣を取るべからず。』時に居士有り。衣を浣ひ已つて籬上に著きて曬す。一六群比丘有り。盜心もて持し去り、彼疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に衆多の賊有り。舍衞城を出で、祇桓を去ること遠からず、晝日に飮酒し、日入り已つて餘酒を樹間に舉著し、舍衞城に入る。時に六群比丘、祇桓を出でて盜心もて取り飮んで疑ふ。佛、言はく、『汝、波羅夷なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し檀越家に往くに、天瀑雨に遇ふ。水に飄ふ種種の脂あり。彼忿言すらく、

『此求めずして得、以て藥と爲すべし』と。卽ち取つて之を服し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『糞掃として取り、盜心には非ず。』佛、言はく、『犯すること無きも、應に水中の糞掃物を取るべからず。受けずして服さば波逸提なり。』時に比丘に檀越家有り。異比丘有り、語つて言はく、『我汝が檀越家に往いて何の所說をか欲するや。』答へて言はく、『汝が說に隨へ。』彼比丘、五十兩の石蜜を須ひんとす。檀越家に至り、語つて言はく、『某甲比丘、五十兩の石蜜を須ひんとす』と。檀越の言はく、『得べし』と。卽ち之を與ふ。此比丘、得て便ち自ら食し、彼比丘に與へず。後異時に彼比丘、往いて檀越家に詣る。檀越、語つて言はく、『大德、石蜜は好しきや不や。』比丘問うて言はく、『何等か石蜜なる。誰か石蜜と爲す』と。檀越、卽ち具に本末を答ふ。彼比丘、還つて此比丘に語つて言はく、『汝は盜を犯す。我石蜜を取る』と。彼答へて言はく、『我盜を犯ぜず。汝、我に語つて言はく、汝が說に隨へと。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『應に是の如きの語を作すべからず。應に說言すべく、是語を說け。』是時比丘有り。他薪を盜み、彼疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。他の薪を盜み、疑ふ。佛の言はく、『直五錢なるも波羅夷なり。』爾時、畢陵伽婆蹉に檀越有り。檀越に二小兒有り。黠了して人を畏れず。畢陵伽婆蹉、家に至る時、小兒便ち脚を抱き、婉轉して戯す。後異時に此二小兒、賊の爲に偷み去らる。時に畢陵伽婆蹉、晨朝に衣を著け鉢を持し、檀越家に至つて座を敷いて坐す。小兒の父母、涕泣流淚して言はく、『小兒、賊の爲に

偸み去らる。若し今在らば、當に來り大德の脚を捉へて戯るべし。』即ち答へて言はく、『屋內に於て處處に求覓すべし。』彼父母求覓するも得ず。時に畢陵伽婆蹉、還つて寺內に至り房中に入り、思惟入定し、念、身に在り、清淨過人天眼を以て小兒を見るに、賊偸んで恒水中に在り、船に乘じて去る。見已つて、譬へば人の臂を屈申する頃の如きに、寺內より沒して恒水の賊船中に至つて立つ。時に小兒、見て即ち歡喜し、來つて脚を抱く。婆蹉、即ち神足を以て小兒を持ち來り閣上房中に著かしめ、檀越の所に至つて敷座して坐す。時に父母、涕泣して言はく、『若し我兒在らば、今や當に大德の脚を抱いて戯るべし。』答へて言はく、『閣上房中に於て覓むべし。』彼言はく、『已に求覓せるも得ず。』畢陵伽婆蹉言はく、『但更に覓めよ。』彼即ち更に閣上房中に於て覓め得す。時に兒の父母、大いに歡喜して言はく、『我兒、賊の爲に偸まる。而も今畢陵伽婆蹉、我爲に將來せり』と。時に諸比丘聞く。中に少欲知足もて頭陀を行じ、學戒を樂しみ、慚愧を知る者有り。畢陵伽婆蹉を嫌責して言はく、『云何が賊の他兒を偸み去るを、而も奪ひ來るや。』畢陵伽婆蹉、聞き已つて嫌ふ。佛の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、知りたまふも而も故に問ひたまはく、『汝、何の心を以て取れるや。』答へて言さく、『慈心もて取る。盜意有ること無し。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に是の如きの事を作すべからず。』爾時、比丘有り。商勝と字す。檀越家有り。檀越病む。比丘來つて問訊す。彼に二小兒有り、黠了す。時に檀越、寶藏を示し已つて此比丘に處所を語

【二】次に殺生の犯戒と不犯戒との場合に由て異ることを明す。

り、語つて言はく、『此二小兒長大し已り、若し勝るる者には此寶處を示せ』と。是に於て便ち命過す。時に高勝比丘、後に此二兒の勝るる者を看て即ち寶處を示す。時に一小兒、涕泣して寺内に來至し、阿難に語つて言はく、『大德、此高勝比丘を看よ。我父の遺財の二人分を以て倂せて一人に與ふ。』時に阿難、高勝比丘に語つて言はく、『汝、云何が他父の遺財の二人分を以て一人に與へしや。高勝、汝去る可し。應に汝と同じく布薩すべからず。』時に阿難、六布薩を經るも、與に共同せず。時に高勝比丘、羅睺羅と伴黨爲り。時に羅睺羅、晨朝に衣を著け鉢を持し、迦維羅衞國に至る。舍夷婦女、拘梨婦女に是の如く語つて言はく、『汝曹、男女を將ゐて阿難の前に著すべし。若し小兒啼かば、阿難當に言ふべし。小兒を將ゐ去れと。汝等當に是の如きの言を語るべし、我等小兒を將ゐ去ること能はず。乃至阿難當に高勝比丘の語を聽すべし。』時に諸婦女、羅睺羅を遣し去り、男女を將ゐて阿難の前に著す。時に小兒啼く。阿難言はく、『小兒を將ゐて去れ』と。時に諸女人言はく、『我等小兒を將ゐて去ること能はず。乃至高勝比丘の語を受けよ』と。阿難、慈心もて即ち言はく、『高勝、汝が事云何ぞ。』高勝即ち爲に具に因緣を說く。阿難の言はく、『汝去れ。乃至突吉羅を犯せず。』

(二)爾時、世尊、毘舍離に在したまふ。優波離、坐より起つて偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『大德、諸比丘、婆裘河の邊に在つて不淨觀を作し、身を厭うて自殺す。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『初め未だ制戒せざれば犯ずること無

し。』『人に人想を作すは是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『人を疑ふ。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『人に非人想を作すは是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『非人を疑ふ。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大德、若し女想を作して男命を斷ぜば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『大德、若し男想を作して女命を斷ぜば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『若し此女想を作して彼女命を斷ぜば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『大德、若し此男想を作して彼男命を斷ぜば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『若し刀を持つ人を求覓せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『若し命を斷ずれば犯なり。』爾時、比丘有り。檀越家病む。往いて問訊す。彼檀越の婦、顏容端正なり。比丘、見已つて欲心繫著す。比丘語つて言はく、『我と共に是の如きの事を作す可し。』其婦の言はく、『大德、是語を作すこと莫れ。我夫存在するに是の如きの惡事を作すことを欲せず。』比丘、卽ち其夫に向つて死の快きことを歎す。彼夫卽ち死し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。檀越病む。往いて問訊す。檀越の婦端正なり。比丘見已つて欲心繫著し、語つて言はく、『我と共に是の如きの事を作すべし。』其婦の言はく、『我夫存在するに、是の如きの事を作すことを欲せず。』と。比丘卽ち彼夫に藥を與へて死せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、

『波羅夷なり。』時に比丘有り。檀越病む。往いて問訊す。檀越の婦端正なり。比丘、見已つて欲心繫著し、語つて言はく、『我と共に是の如きの事を作せ。』其婦の言はく、『我夫存在せるに、是の如きの事を作すことを欲せず』と。比丘卽ち其夫に吐下藥を與へ命を斷ぜしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。檀越病む。往いて問訊す。檀越の婦端正なり。比丘見已つて欲心繫著し、語つて言はく、『我と共に是の如きの事を作せ』と。其婦の言はく、『我夫存在せるに、是の如きの事を作すことを欲せず。』比丘卽ち非所應の食を與へて命を斷ぜしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。檀越病む。往いて問訊す、檀越の婦端正なり。比丘見已つて欲心繫著し、語つて言はく、『我と共に是の如きの事を作せ。』其婦の言はく、『我夫存在せるに是の如きの事を作すことを欲せず。』比丘卽ち其夫に非藥を與へて命を斷ぜしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。檀越病む。往いて問訊す。比丘の形貌端正なり。其婦見て欲心繫著し、意を比丘所に繫け、語つて言はく、『大德、我と共に是の如きの事を作す可し。』比丘答へて言はく、『大姉、是語を作すこと莫れ。我應ぜざる所なり。汝が夫存在せるに、云何が是の如き惡事を作すや。』其婦、是の如きの言を作さく、『我夫未死の間は與共に和合することを得ず』と。卽ち其夫に藥を與へ、命を斷

ぜしむ、夫既に死し已つて比丘に語つて言はく、『我夫已に死せり。我と共に是の如きの事を作す可し。』比丘の言はく、『大姉、是の如きの語を作すこと莫れ。我應ぜざる所なり。』彼婦語つて言はく、『我汝が爲の故に夫の命を斷ず。云何が是の如きの事を作さざらんや。』比丘之を聞いて疑を生じ佛に白す。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』即ち具に因緣を說く。佛、言はく、『犯ずること無し。吐下藥、非所應食、非藥も亦是の如し。』

時に婦人有り。夫行いて在らず。他邊に娠を得たり。即ち家の常所供養の比丘の所に至り語つて言はく、『我夫在らざるに他邊に娠を得たり。我に藥を與へて之を墮せ』と。比丘即ち呪食して之を與へて食せしむ。彼墮胎することを得たり。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に婦人有り。夫行いて在らず。他邊に娠を得たり。即ち家の常所供養の比丘の所に往いて語つて言はく、『大德、我夫行いて在らざるに他邊に娠を得たり、我に藥を與へて之を墮せ。』比丘即ち呪藥を與へて胎墮せしむ。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』細末藥を呪し、華鬘を呪し、熏香衣服を呪し、胎を呪するも亦是の如し。一切波羅夷なり。』時に婦人有り。夫行いて在らず。他邊に娠を得たり。常に所供養の比丘尼の所に往いて語つて言はく、『阿姨、我夫行いて在らざるに他邊に娠を得たり。我に藥を與へて之を墮せ。』比丘尼の言はく、『大姉、我藥を解せず。』『汝來れ、汝の與に腹を按ぜん』と。即ち爲に之を按じて胎

堕せしむ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に婦人有り、夫行いて在らず。他邊に娠を得たり、常に供養する所の比丘尼の所に往いて語つて言はく、『阿夷、我夫行いて在らざるに他邊に娠を得たり。我に薬を與へて之を堕せ』と。比丘尼の言はく、『我薬を解せず。來れ、汝が與に之を噛まん』と。即ち胎處に當つて之を噛み堕せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『殺心を以てす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に婦人有り、夫行いて在らず。他邊に娠を得たり。常に供養する比丘の所に往いて語つて言はく、『大徳、我夫行いて在らざるに、他邊に娠を得たり、我に薬を與へて之を堕せ。』比丘即ち過度の吐下薬を與ふるに、母死して兒活く。彼疑ふ。佛、言はく、『母死するは犯無し。方便もて堕胎せんと欲して死せざるは偸蘭遮なり。』時に比丘有り。病人の起つを扶くるに病者命過し、疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。若し坐するを扶けて命過するも犯ずる無し。若し洗浴を爲す時命過するも犯ずる無し。若し服薬する時命過するも犯ずること無し。』時に比丘の長く病める有り。時に瞻病者厭患して非所應の食を與へて命を斷ぜしめ疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘の長く病める有り。瞻病者厭患し、即ち非薬を與へて命過せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘の長く病める有り。多く器物有り。瞻病者貪

利なれば即ち非所應の食を與へて命過せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘の長く病める有り。多く財物有り。瞻病者貪利なれば即ち非藥を與へて命過せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。腋下に癰腫有り。比丘有つて爲に之を按ず。彼語つて言はく、『按ずること莫れ、按ずること莫れ』と。而も故に爲に之を按じて止まず、遂に便ち命過して疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を共てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も是の如く強按すべからず。』時に比丘の通身に腫ある有り。比丘有り。急躁藥を以て之に塗る。彼言はく、『止めよ、止めよ、塗ること莫れ。我熱痛を患ふ。』彼言はく、『小しく忍べ。當に除差することを得べし』と。之を塗ること止まず。遂に便ち命過し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に是の如く強塗すべからず。』時に比丘有り。蔭中より病比丘を移して日中に至る。彼病者命過し、疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。日中より蔭處に至るも亦犯ずること無し。』病者自ら蔭中より日中に至り、日中より蔭中に至らんと欲して病者命過せり。彼扶くる者疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。』病人自ら屋を出でんと欲すれば扶けて屋を出でしめ、自ら屋に入らんと欲すれば扶けて屋に入らしめ、而も命過せんも扶くる者に犯無し。病人を扶

けて大便處に至り命過せんも、若は扶けて屋に還へり命過せんも、盡く犯無し。病人を扶けて小便處に至り命過せんも、若は屋に還へり命過せんも、盡く犯無し。』時に比丘に虐を患ふもの有り。比丘有り、強いて上を壓す。彼病者、言はく、『壓すること莫れ。壓すること莫れ』と。之を壓して已まず、遂に便ち命過し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に是の如く強壓すべからず。』時に比丘の病める有り。餘比丘往いて問訊し、衣を撥して面を看る。問うて言はく、『長老、病少しく差ゆるや不や。』彼言はく、『撥すること莫れ。撥すること莫れ』と。彼之を撥して已まざれば、遂に便ち命過し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に強いて撥すべからず。』時に衆多の比丘有り。方便もて一人を遣し、彼命を斷ぜしむ。即ち往いて命を斷じ、彼疑ふ。佛、言はく、『一切波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて一人を遣し他命を斷ぜしむ、中に一人有り。疑ふも而も遮せず。彼便ち往いて命を斷じ、疑ふ。佛、言はく、『一切波羅夷なり。』時に衆多の比丘有り。方便もて共に他命を斷ず。中に一人有り、疑ひて即ち遮す。而も故に往いて命を斷ぜしめ、疑ふ。佛、言はく、『遮する者は偸蘭遮なり。遮せざる者は波羅夷なり。』時に賊有り。比丘の衣鉢針筒坐具を盜取す。時に比丘即ち賊を捉へて壓治し、遂に命過せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、

言はく、『犯ずること無し。而も應に壓治すべからず。』時に賊有り。比丘の衣鉢坐具針筒を盜む、比丘、賊を捉へ得て、地窖中に內著せるに、遂に命過し、彼疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に爾るべからず。』時に惡比丘有り。比丘の衣鉢坐具針筒を盜む。餘比丘の言はく、『此惡比丘は比丘の衣鉢坐具針筒を盜めり。應に捉へ取り、與に法語を說くべし』と、卽ち捉へ取り、打つて熟手せしむ。後遂に命過し、彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も受大戒人を打つは波逸提なり。』時に比丘有り。白衣と共に諍ふ、比丘卽ち官に語つて言ふ。時に大臣有り。捉へて繫閉せしむるに、遂に獄中に命過せり。彼疑ふ。佛、言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯せず。而も言ふ人は突吉羅なり。』時に比丘有り、獼猴を殺す。彼疑ふらく、『我人命を斷せば波羅夷なり』と。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『犯ずること無し。畜生の命を斷ずるは波逸提なり。』時に比丘有り。彼比丘と共に諍ふ。彼比丘病む。此比丘往いて問訊せず。餘比丘之を察すらく、『此比丘は病比丘と先に怨有り。今來つて問訊するは必ず異有らん』と。時に此比丘、卽ち病者に非藥を與へて命過せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。比丘と諍ふ。彼比丘、人間に往いて病を得たり。此比丘、言はく、『汝、人間に行くと雖も猶

得脫せず」と。即ち往いて問訊す。餘比丘、之を察すらく、『此比丘は先に病比丘と怨有り。今來つて問訊するは必ず異有らん』と。此比丘、即ち病者に非藥を與へ命過せしめ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心もてす。』佛、言はく、『波羅夷なり。非食を與へ、二種有るも亦是の如し。』爾時、偸羅難陀比丘尼、晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に往く。一小兒の在る有り。碓屋中に睡る。偸羅難陀、往くに彼歩碓杵に觸る。杵小兒の上に墮ち即ち命過せり。疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。應に他の碓杵に觸るべからず。』時に偸羅難陀比丘尼、晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に往く。小兒有り、碓臼の邊に在つて眠る。偸羅難陀、他の碓臼に觸るるに、臼轉じて小兒を壓殺し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に他の碓臼に觸るべからず。』時に偸羅難陀比丘尼、晨朝に衣を著け鉢を持し、白衣家に往く。床上に小兒の眠る有り。偸羅難陀、看ずして坐す。檀越の婦言はく、『阿姨、小兒の上に坐すこと莫れ。』彼聞かず便ち坐す。小兒即ち死し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に白衣家に床座を見ずして坐すべからず。』爾時、舍衞國に檀越有り。佛及び僧に明日食せんことを請ひ、即ち夜に於て種種多美の飲食を辦具し、晨朝に往いて時至れるを白す。世尊、衣を著け鉢を持し、千二百五十の

比丘と倶に檀越家に至り、座に就いて坐す。諸佛の常法は、衆未だ集らざれば飲食を受けず。時に晩出家の比丘有り。兒を將ゐて出家す。小食の時餘の白衣家に往きしに、諸比丘、其兒に問うて言はく、『汝が父は何處に往いてか去れる。乃ち世尊を待つて食せざらしめしや。』彼言はく、『知らず。』比丘語つて言はく、『汝、往いて求覓せよ。』彼求覓して之を得たり。兒、父に語つて言はく、『何處に往いてか來る。父を待つを以ての故に、佛、衆僧をして受食することを得ざらしむ。』其父瞋り、即ち兒を捉ふるに、兒自ら解推し、父を地に倒し即ち命過せしむ。彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に父を推すべからず。』時に母有り。比丘を捉ふるに、比丘自ら解して即ち推す。母却つて地に倒れ即ち命過し、彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に母を推排すべからず。』時に父有り、比丘を捉ふるに、比丘自ら解して推却す。父地に倒れて命過し、彼疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に推すべからず。』兒の比丘を捉へ、姉の比丘を捉へ、故この比丘を捉ふるも亦是の如し。』時に故姉有り。其妹に語つて言はく、『何んぞ比丘に從つて衣食を索めざる。』彼言はく、『出家せるを以て、從て所索有ることを欲せず。』『若し我に比丘處を示さば、我當に汝が爲に索むべし。』彼即ち處を示す。彼比丘に語つて言はく、『汝、何ぞ我妹に衣食を與

へざる」と。即ち前んで比丘を捉ふ。比丘推却して自ら解するに彼地に倒れて命過し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に推すべからず。』時に男女有り、比丘を捕ふ。比丘推却して自ら解するに彼地に倒れて命過し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に推すべからず。』時に比丘尼寺を去ること遠からず男子有り、手を截り、脚を截らる。時に比丘尼、蘇毘羅漿を持つ。彼を去ること遠からずして行く。彼見已つて語つて言はく、『阿姨、我に漿飲を與へよ。』比丘尼即ち與ふ。彼飲んで便ち死し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘尼寺を去ること遠からず、人有り、手を截り、脚を截らる。比丘尼、水を持ち、彼を去ること遠からずして行く。彼見已つて語つて言はく、『阿姨、我に水飲を與へよ。』即ち與ふるに飲み已つて便ち死す、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘尼寺を去ること遠からず。人有り、手を截り、脚を截らる。比丘尼有り、蘇毘羅を持ち彼を去ること遠からずして行く。彼見已つて語つて言はく、『阿姨、我に蘇毘羅を須ひて瘡を洗へ。或は小差を得ん』と。即ち共に洗はしむ。洗ひ已つて便ち死し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無

し。而も應に與に洗ふべからず。水を持つて洗ふも亦是の如し。』時に比丘尼寺を去ることと遠からず、人有り、手脚を截らる。比丘尼有り、毘蘇羅を持ち彼を去ること遠からずして行く。比丘尼是念を作さく、『若し蘇毘羅を以て彼瘡を洗へば或は早死せしめん』と。即ち爲に之を洗ふに便ち死す。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てす。』佛、言はく、『波羅夷なり。水を持つて與に洗ふも亦是の如し。』爾時、衆多の比丘有り。六群比丘と耆闍崛山に在り、共に木片を破して屋を覆ふ。一六群比丘有り。尖頭の木片を提へて直に人に當つて擲ぐるに、木、彼身に入つて過ぎ、即便ち死し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。而も應に人に當つて直に木を擲ぐべからず。應に横に擲ぐべし。』時に經營比丘有り。僧房を作れるに誤つて石を失し、比丘の上に墮し即ち死す、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。並、若は木頭槫拱櫨棟種種材木を失して墮するも亦是の如し。』爾時、耆闍崛山に牧牛人有り。放牛す。一六群比丘、石を以て彼牛角を打つに行逆つて牧牛人の上に墮し、即ち死す。疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。畜生不能變者を打たば突吉羅なり。』爾時、比丘有り。耆闍崛山中に在り。崩石を墮して道行の人を打つに死す、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯

【三】妄語について。

ずること無し。而も崩石すべからず。若し因緣有つて石を取らんと欲すれば當に人に避けよと語るべし。』時に比丘有り。捨戒して下業に墮せんと欲す。彼是念を作さく、『我應に已に佛法の中に於て出家せば、是の如きの惡事を作すべからず』と。即ち摩頭山頂に往いて自ら身投するに、斫竹人の上に墮し、比丘は活き、彼人死す、疑ふ。佛、言はく、『彼人の死するは犯無し。方便もて自殺せんと欲するは偸蘭遮なり。』時に比丘有り。休道して下業に墮せんと欲す。是の如きの念を作さく、『我佛法中に於て出家せば、應に是の如きの惡事を作すべからず』と。彼波羅呵那山頂に上り、自ら身を投ずるに斫竹人上に墮し、彼死して比丘は活く、疑ふ。佛、言はく、『彼人の死するは犯無し。方便もて自殺せんと欲するは偸蘭遮なり。』時に比丘有り。蘇毘羅漿を持つて塚を去ること遠からずして行く。尖標頭人語つて言はく、『我に此漿飲を與へよ。』比丘即ち與ふるに飲み已つて便ち死し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『殺心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り。水を持ち塚を去ること遠からずして行く。尖標頭人の言はく、『我に水飲を與へよ。』即ち與ふるに飲み已つて便ち死し、疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。』時に顛狂比丘有り。人を殺し後還醒め了り、疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。若し心錯亂して苦痛に惱まさるるは、一切犯ずる無し。』

(三)爾時、世尊、毘舍離に在したまふ。時に優波離、坐より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して世尊に白して言さく、『大德、婆裘河邊の比丘は食の爲の故に、眞實なら

す、己有に非ざるに白衣の前に於て自ら說いて上人法を得たりと歎ず。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『初め未だ制戒せざれば犯ずる無し。』時に比丘有り。增上慢もて自ら記し、後精勤懈らざれば增上勝法を證せり。彼是念を作さく、『世尊、諸比丘の爲に制戒したまふも、若し比丘自ら知らざるに、自ら上人法を得たりと稱し、我是を知り、是を見たりと。後異時に於て若しは問、若は不問なるは淸淨なるを求めんが爲の故なるに、是言を作さく、我知らず、見ずと。而も知見すと言ふは虛誑妄語なり。比丘波羅夷なれば共に住せず。我增上慢もて自ら記せるを以て後精勤懈らざるに增上勝法を得たり。我當に云何がすべき』と。卽ち因緣を以て具に同意比丘に向つて說かく、『善い哉長老、我爲に世尊に白せ。世尊の敎に隨つて我當に修行すべし。』諸比丘、往いて佛所に詣り、頭面に足を禮し却て一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、爾時此因緣を以て比丘僧を集め、而も爲に隨順說法したまひ、無數の方便もて頭陀端嚴少欲知足もて出離を樂ふを讃歎したまひ、諸比丘に告げたまはく、『增上慢は犯無し。』諸比丘、佛に白して言さく、『大德、若し不能變化畜生の前に於て自ら上人法を得たりと稱せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『大德、人に人想を作す、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『人に疑ふ、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『人に非人想を作す、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『非人に人想を作す、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『非人に疑ふ。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮な

り。』『大德、若し男前に女想を作さば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『波羅夷なり。』『若し此女前に於て彼女想を作さば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『若し說いて了了ならば波羅夷なり。若し不了了ならば偸蘭遮なり。』『此男前に於て彼男想を作さば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『若し說いて了了ならば波羅夷なり。說いて不了了ならば偸蘭遮なり。若は手印もてし、若は使もてし、若は書もてし、若は現相もて了了知ならしめば波羅夷なり。不了了知ならしめば偸蘭遮なり。』『大德、若し天龍阿修羅乾闥婆夜叉餓鬼畜生能變化者の前に於て自ら上人法を得たりと稱すれば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『說いて了了ならば偸蘭遮なり。不了了ならば突吉羅なり。手印、使、書、現相もて了了知ならしめば偸蘭遮なり。不了了ならば突吉羅なり。』時に比丘有り。人前に自ら稱して上人法を得たりと言ひ、疑ふ。佛、言はく、『說いて了了ならば波羅夷なり。不了了ならば偸蘭遮なり。』此に向つて說かんと欲するに乃ち彼に向つて說かば一切波羅夷なり。時に衆多の比丘有り。拘薩羅國に於て遊行す。時に信樂能相の婆羅門有り、見已つて是の如きの言を作さく、『大德阿羅漢來る』と。比丘問うて言はく、『汝、何の所說ぞや。』答へて言はく、『大德、應に飲食衣服醫藥所須の具を受くべし。』比丘、言はく、『是理有り』と。比丘疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り。自ら根力覺意禪定解脫三昧正受を得たりと說く。比丘疑ふ。佛、言はく、『波羅夷なり。』時に比丘有り。人の爲に根力覺意禪定解脫三昧正受を說き、而も自ら得たりと言はず、比丘疑ふ。佛、言はく、『犯ずること

と無し。』時に比丘に檀越有り。比丘語つて言はく、『常に汝の爲に說法する者は是れ阿羅漢なり。』檀越即ち問うて言はく、『大德、何の所說かある。』便ち默然たり。比丘疑ふ。佛、言はく、『不了了なるは偷蘭遮なり。』時に比丘に檀越有り。比丘語つて言はく、『數汝の家に至る者は是れ阿羅漢なり。』檀越即ち問うて言はく、『大德、何の所說かある。』便ち默然たり。比丘疑ふ。佛、言はく、『不了了なるは偷蘭遮なり。』時に比丘に檀越有り、比丘に語つて言はく、『數汝の座に坐する者は是れ阿羅漢なり。』即ち問うて言はく、『大德、何の所說かある。』便ち默然たり。比丘疑ふ。佛、言はく、『不了了なるは偷蘭遮なり。』時に比丘に檀越有り。比丘に語つて言はく、『數汝の食を受くる者は是れ阿羅漢なり。』檀越問うて言はく、『大德、何の所說かある。』彼便ち默然たり。疑ふ。佛、言はく、『不了了なるは偷蘭遮なり。』時に檀越有り。常供養の比丘に語つて言はく、『若し大德是れ阿羅漢なれば僧伽梨を脫せよ。』比丘即ち脫し現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』時に檀越有り。常供養の比丘に語つて言はく、『大德、若し是れ阿羅漢なれば僧伽梨を著けよ。』比丘即ち著け現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』時に檀越有り。常所供養の比丘に語つて言はく、『大德、若し是れ阿羅漢なれば繩床に坐す可し。』彼即ち坐して現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』時に檀越有り。常所供養の比丘に語つて言はく、『大德、若し是れ阿羅漢なれば起て。』彼即ち現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』時に檀越有り。常所供養の比丘に問うて言はく、

『大德、若し是れ阿羅漢なれば閣屋に上れ。』」彼即ち上つて現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、「偷蘭遮なり。」時に檀越有り。常所供養の比丘に語つて言はく、『大德、若し是れ阿羅漢なれば下る可し。』」比丘即ち下つて現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、「偷蘭遮なり。」時に比丘有り、檀越有り。比丘に語つて言はく、「數汝が爲に說法する者は是れ佛弟子聲聞なり。」檀越問うて言はく、「大德、何の所說かある。」彼默然たり、疑ふ。佛、言はく、『不了なるは偷蘭遮なり。數檀越家に入り、若は坐を受け、若は食を受くるも亦是の如し。』」時に檀越有り。常供養比丘に語つて言はく、「若し大德是れ佛弟子聲聞なれば僧伽梨を脫せよ。」即ち脫して現相するも語らず、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり、僧伽梨を著け若は坐し、若は起ち、閣屋に上り、若は下るも亦是の如し。』」時に目連、諸比丘に告ぐらく、「『業報の因緣もて神足を得』と。」諸比丘の言はく、『目連、汝は業報の因緣もて神足を得と言ふも、是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり。比丘に非ず。』」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是れ業報の因緣有れば神足を得、目連に犯無し。』時に目連、諸比丘に告ぐらく、「業報の因緣もて天耳識宿命知他心天眼を得」と。諸比丘の言はく、『目連、汝は業報の因緣もて天耳乃至天眼を得たりと言ふも是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり。比丘に非ず。』」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、「業報の因緣有つて天耳を得、乃至天眼を得、目連に犯無し。」時に目連、諸比丘に告ぐらく、『諸長老、是の如きの衆生有り、虛空より過ぐるに其身骨相觸るるの聲を聞く。』

諸比丘、目連に語つて言はく、『大徳、汝は是の如きの衆生有り、虚空より過ぐるに其身骨の相觸るる聲を聞くと言ふも、是處有ること無し。虚つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり。比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是の如きの衆生有り。目連に犯無し。』爾時目連、諸比丘に告ぐらく、『我有る衆生を見るに擧身に針を以て毛と爲し、自ら其身に於て或は出で、或は入り、苦を受くること無量に、號哭して大に喚ぶ。』時に諸比丘、目連に語つて言はく、『汝は是の如きの衆生有りと見んも、是處有ること無し。虚つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり。比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『我先に亦是の如きの衆生を見たり。而も我說かず。何を以ての故に。恐くは人信ぜざればなり。其信ぜざる者は、長夜に苦を受けん。此衆生、王舍城の中に於て兩舌鬪亂を意び、此惡業の因緣を以て地獄中に墮し、百千萬歲を經るも、諸の苦痛を受け、此餘罪の因緣を以て是の如きの形を受く。是故に目連に犯無し。』爾時目連、諸比丘に告げて言はく、『我有る衆生を見るに屎中に沒在し、大苦痛を受け、號哭大喚す』と。諸比丘、目連に語つて言はく、『汝は自ら是の如き衆生有つて屎中に沒在し、大苦痛を受け、號哭大喚するを見ると言ふも、是處有ること無し。虚つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり。比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『我先に亦是の如きの衆生を見たり。而も我說かず。何を以ての故に。恐くは人の信ぜざればなり。其信ぜざる者は長夜に苦を受けん。此衆生は波羅㮈國に在り、迦葉佛の時に婆羅門爲り。時に佛及び僧を請ひ、屎を以て槽に

盛満し已つて、人を遣し往いて時到れるを白す。語つて言はく、「汝、此を食し此を飲むべし。意に隨つて持ち去れ」と。此惡業の因縁を以て泥犂中に墮し、百千萬歳に大苦痛を受く。餘罪の因縁もて屎中に沒在せり。是故に目連に犯無し。」爾時目連、諸比丘に告ぐらく、『我有る衆生を見るに、鐵床の上に坐す。鐵床より火出でて擧身倶然し、衣鉢坐具針筒も亦皆倶然す。』諸比丘、目連に語つて言はく、『汝は是の如きの衆生の苦を受くること是の如きを見んも、是處有ること無し。虚つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり。比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『我先に亦是の如きの衆生の苦を受くること是の如きを見たり。而も我說かず。何を以ての故に。恐くは人の信ぜざればなり。其信ぜざる者は長夜に苦を受けん。此衆生は過去世の時に波羅㮈國に在り。迦葉佛の時なり、惡比丘、此因緣を以て地獄中に墮し、百千萬歳に諸の苦痛を受く。餘業の因緣も此身に受く。是故に目連に犯無し。惡比丘尼惡式叉摩那惡沙彌沙彌尼の苦を受くるも亦是の如し。』爾時目連、諸比丘に告ぐらく、『我有る衆生を見るに、其身熱爛し、衆蠅封著して苦痛もて大喚せり。』諸比丘、目連に告げて言はく、『汝、是の如きの衆生有つて苦を受くること是の如きを見んも、是處有ること無し。虚つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘往いて佛に白す。佛、言はく、『我先に亦是の如きの衆生を見たり。而も我說かず。何を以ての故に。恐くは人信ぜざればなり。其信ぜざる者は長夜に苦を受けん。此衆生は是れ迦陵伽王の第一夫人なり。嫉妬を以ての故に、熱沸せる油を以て第二夫人の

眠れる時、以て其頂に灌ぐ。此業報の因縁を以て地獄の中に墮し、百千萬歳に諸の苦痛を受く。餘の業因緣も此身に受く。是故に目連に犯無し。』爾時目連、諸比丘に告ぐらく、我阿修羅宮殿の城郭の海底に在るを見たり。而も水其上に懸かるも其宮城に入らず』と。諸比丘、目連に語つて言はく、『汝は自ら阿修羅宮城の海底に在り、四邊及び上に而も水の入ること無しと言ふも、是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是の如きの事有り。阿修羅宮城の四面及び上に四種の風有りて水を持す。住風、持風、不滅風、牢繫風なり。是故に目連に犯無し。』爾時目連、諸比丘に告ぐらく、『我是の如きの衆生有るを見たり。骨無く、皮無く、肉無く、血無く、不淨有ること無く、亦疲極無し。女は而も産せず』と。諸比丘、言はく、『目連、汝は自ら是の如きの衆生有り、乃至女は産せずと言ふも、是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是の如きの衆生有り、目連に犯無し。』爾時世尊、王舍城に在したまふ。時に大目連、諸比丘に告げて言はく、『諸長老、我空慧定に入れるに、伊羅婆尼象王の難陀池水に入るの聲を聞けり』と。諸比丘の言はく、『大德目連、汝、言はく、「空慧定に入つて伊羅婆尼象王の難陀池水に入る聲を聞く」と。大德の空慧定に入つて而も音聲を聞く、是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是定有るも而も不清淨なり。目連に犯無し。』時に目

連、諸比丘に告げて言はく、『我空慧定に入り、八萬四千の象の曼陀延池水に入るの聲を聞く』と。時に諸比丘、目連に語るらく、『大德、自ら言はく、「空慧定に入つて彼諸象の曼陀延池水に入るの聲を聞く」と。大德の空慧定に入つて而も音聲を聞く。是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘往いて佛に白す。佛、言はく、『是の如きの定有り。但不淸淨なり。而も目連に犯無し。』爾時目連、諸比丘に告ぐらく、『我空慧定に入り、彼象王の蘇池水に入る聲を聞けり』と。時に諸比丘、目連に語るらく、『汝は自ら空慧定に入り、彼象王の蘇池水に入る聲を聞くと言ふも、何ぞ空慧定に入ること有つて而も聲を聞くこと有らん。是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是の如きの定有るも淸淨に非ず。目連に犯無し。識慧定處無所有慧定處も亦是の如し。』時に目連、諸比丘に告ぐらく、『諸長老、北方に池有り。阿耨達と名く。其水淸淨にして垢穢有ること無し。中に分陀利華有り。車輪の如し。其根は車軸の如し。之を折るに汁出づ、色白きこと乳の如し。其味は蜜の如し。』諸比丘、言はく、『汝、自ら言つて北方に是の如きの池有りと、是處有ること無し。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『北方に是の如きの池有り。目連の所說の如し、目連に犯無し。』時に目連、諸比丘に告ぐらく、『北方に池有り、阿耨達と名く。彼を去ること遠からず更に一池有り。曼陀延と名く。縱廣五十由旬なり。其水淸淨にして

垢穢有ること無し。中に金色の蓮華有り。大さ車輪の如し。』諸比丘、言はく、『目連、汝の所說の如く是の如き池有りとは是處有ること無し。』時に大目連、神足力を以て彼に往き、華を取り寺に還つて屋內に置在し、諸比丘を喚んで語つて言はく、『北方に池有り。阿耨達と名く。池を去ること遠からず曼陀延池有り、中に金色の蓮華有り、車輪の如し。』諸比丘の言はく、『目連、是處有ること無し。』虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』時に目連卽ち屋に還り、華を取つて諸比丘に示し、語つて言はく、『諸長老、此華は如實なりや不や。』諸比丘復言はく、『汝は是れ阿羅漢なり。神足力有れば或は能く化作せん、眞實に非ず。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『目連の所說は如實なり、犯無し。』時に目連、諸比丘に告ぐらく、『北方に池有り、阿耨達と名く。水、彼地より流來して此に涌出す。』諸比丘、目連に語つて言はく、『汝は北方に池有り、阿耨達と名く。水、彼より流來して此に涌出すと說くも、世尊に是の如きの言有り、本に依つて而も彼池水の淸冷なるを知るも、而も今此水熱沸して垢濁せりと。事、相應せず。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『目連の所說の如く、而も此水は小地獄を經過し來つて王舍城に涌出す。是故に熱沸して垢濁せり、目連に犯無し。』時に目連、諸比丘に告ぐらく、『此水の出處の下に池水有り。淸冷水彼より來る。』諸比丘、言はく、『目連、汝是の如きの語を作すも、世尊の所說の如くんば、本に依つて知

るに此水熱沸し下水は清冷なりと。事相應せず、虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『目連の所說の如し、沸水出處の下に池水有り、清冷にして垢濁有ること無し。水彼より來り、小地獄を經過し來り、王舍城に湧出す。是故に熱沸して垢有り、目連には犯無し。』時に拘薩羅國王波斯匿、摩竭王阿闍世、二國の中間に在つて共に戰ふ。波斯匿王、阿闍世の軍を破す。時に大目連、諸比丘に告ぐらく、『波斯匿王と阿闍世王と二國の中間に共に戰ひ波斯匿王勝つも、後に阿闍世王、復更に軍を起して、共に戰ひ、阿闍世、還勝を得ん。』時に王舍城、國內に告令す。阿闍世王、波斯匿王を破すと。諸比丘、目連に語つて言はく、『汝の言はく、「波斯匿王は阿闍世王と共に戰ひ、波斯匿王、阿闍世王を破す」と。而も今摩竭國內に告令して言はく、阿闍世王、波斯匿王を破すと。目連、虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。」諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『是の如きの事有り。波斯匿王、阿闍世王を破し、阿闍世王、後更に軍を起し波斯匿王を破す。目連は前を見て後を見ず、目連に犯無し。』阿闍世王の毘舍離と共に戰ふも亦是の如し。」爾時世尊、目連に告げたまはく、『汝、止みね、止みね。復說くを須ひざれ。諸比丘は汝の語を信ぜざらん。何を以ての故に。諸比丘信ぜざるが故に多罪を得しむればなり。』時に世尊、諸比丘に告げたまはく、『汝等當に信ずべし。是の如く阿羅漢比丘には大神力有り。疑つて信ぜざること勿れ。長夜に苦を受けん。』中に比丘有り。名けて嚴好と曰ふ。諸比丘に告げて言はく、『諸長老、

【四】不淨を失するについて。

我五百劫の事を憶ふ』と。諸比丘、言はく、『世尊は未だ曾て自ら憶五百劫事を說きたまはず。而も汝自ら說く。虛つて上人法を得たりと稱するは波羅夷なり、比丘に非ず。』佛、諸比丘に白す。佛、言はく、『嚴好比丘は一生の事を憶ふ、我は無數生種種の事を憶ふ、乃至受形相類の言說する所有らば、皆悉く之を憶ふ。佛、言はく、『嚴好比丘には犯無し。』

(四)爾時世尊、舍衞國に在したまふ。優波離、座より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け合掌して佛に白して言さく、『大德、迦留陀夷は故に不淨を弄出す。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『最初に未だ制戒せざれば犯無し。』時に比丘有り。散亂心もて眠り、夢中に不淨を失し、夢中に於て識了す。彼是念を作さく、『世尊、比丘の爲に制戒したまふ、故に不淨を弄失するは僧伽婆尸沙なりと。而も我散亂心もて眠り、夢中に不淨を失し、自覺憶識す。我將に犯せざる無からんとするや。云何なるやを知らず』と。此因緣を以て具に諸比丘に白す。『善い哉長老、我爲に佛に白せ。若し佛に敎有らば我當に修行すべし』と。時に諸比丘、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、此因緣を以て具に世尊に白す。世尊、此因緣を以て比丘僧を集め、告げて言はく、『散亂心もて眠るに五の過失有り。夢に惡事を見、諸天は衞護せず、心に法を憶せず、繫想明に在らず、夢中に不淨を失す。散亂心もて眠るに此五過失有り。住心にして眠るに五功德有り、惡夢を見ず。諸天は衞護し、心に樂法を思ひ、繫想明に在り、不淨を失せず。是の如く住心にして眠るに五事の功德有り。若し夢中に失せば犯せず。』時に比丘有り。夢中に憶識して不淨を弄出し、彼疑ふ。

佛、言はく、『犯せず。』時に比丘有り、邪憶念もて不淨を失す。佛、言はく、『犯せず。若し美色を見て觸れずして不淨を失するも犯せず。』時に比丘有り。憶念して不淨を弄失し、彼疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り。憶念して弄するも而も失せず、疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に女人有り、比丘の前を捉ふるに、彼動身し不淨を失す、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に女人有り、比丘の前を捉ふるに、不動身なるも不淨を失せり、疑ふ。佛、言はく、『突吉羅なり。』比丘の後を捉へて二事有るも亦是の如し。時に女人有り、比丘の足を執つて禮し、動身して不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に女人有り、比丘の足を執つて禮し、不動身なるも、不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『突吉羅なり。』時に女人有り、難陀の足を禮す。難陀、多欲なれば不淨を失し女人の頭上に墮す。時に女人慚愧し、難陀も亦慚愧す。諸比丘、佛に白す。佛、言はく、『難陀に遮身衣を作るを聽す。』時に比丘有り、行く時男根衣涅槃僧に觸れ、不淨を失す。佛、言はく、『犯せず。若は大小便の時失するも犯せず。若は冷水、若は煖水中に洗つて失するも犯せず。』時に比丘有り、男根を以て水に逆ひ憶想するに身動ずれば不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り、男根を以て水に順じて憶想するに身動ずれば不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り、水を以て男根に灑ぎ憶想するに、身動ずれば不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り。男根風に逆ふに憶想して身動じ、不淨を

失し、疑ふ。佛の言はく、『僧伽婆尸沙なり。』若は風に順じ、若は口に男根を啣むで憶想し、身動じて不淨を失し、憶想して空しく身を動じ不淨を失して疑ふ。佛、言はく、『是の如きの一切は僧伽婆尸沙なり。』時に母有り、比丘兒身を捉ふるに不動なるも不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『突吉羅なり。』姉の比丘を捉へ、故に私通處婬女の比丘を捉ふるも亦是の如し。』時に比丘有り。骨間を憶想して不淨を弄失し、疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に比丘有り。浴室中に細末藥を以てし、若は泥もて身を揩し、誤つて觸れて不淨を失し、疑ふ。佛、言はく、『犯せず。若は大喚する時、若は用力作時に不淨を失するも犯せず。』時に比丘有り、大小便中間を憶想して不淨を弄失し、疑ふ。佛、言はく、『若し道想を作し、若し疑はば偸蘭遮なり。若し非道想に疑はずんば僧伽婆尸沙なり。是の如く、股間膝間に於てし、若は臍、若は脇邊、若は乳間、若は腋下、若は耳鼻中、若は髮中、若は繩床木床間、若は大小褥間、若は枕間、若は地、若は泥摶間、若は君持口中、是の如き一切に若し道想に若し疑はば偸蘭遮なり。若し非道想に疑はずんば僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り。樂の爲の故に憶想して不淨を弄失し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。樂の爲の故に、自試の爲の故に、福德の爲の故に、祠の爲の故に、善道の爲の故に、施さん爲の故に、種の爲の故に、戲の爲の故に、力の爲の故に、顏色の爲の故に、當に審定作すべくんば、一切僧伽婆尸沙なり。』

四分律卷第五十六

四分律　巻第五十七　第四分之八

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

調部之三

【一】前巻の續き摩觸の場合を明す

(一)爾時世尊、舍衞國に在したまふ。優波離、坐より起ち偏に右肩を露し右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『大徳、迦留陀夷は女人身と相觸る、是れ犯なりや不や。』佛言はく、『初め未だ制戒せざれば犯せず。』『大徳、若し男子身と相觸るれば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『大徳、若し黄門と身相觸るれば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大徳、若し二根人と身相觸るれば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大徳、若し畜生不能變化者と身相觸るれば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『人女に人女想もてする是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』『人女に疑ふ是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『人女に非人女想もてする、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『非人女に人女想もてする、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『非人女に疑ふ、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大徳、若し女想を作して男身と相觸るれば、是れ犯な

りや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『若し男想を作して女人と身相觸るれば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『此女身と相觸れ、餘の女想を作すは是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』『此男身と相觸れ、餘の男想を作すは是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『天女龍女阿修羅女夜叉女餓鬼女とし、畜生能變化者の女身と相觸るる、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に女人有り。比丘の足を捉へて禮す。覺觸受樂せば身を動じ、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に女人有り、比丘の足を捉へて禮す。覺觸受樂するも身を動ぜず、疑ふ。佛、言はく、『突吉羅なり。』時に女人有り、比丘の足を捉へて禮す。覺觸受樂せば足の大指を動し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に女人有り、笑つて比丘を捉ふ。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝覺觸受樂せしや不や。』答へて言はく『不なり。』佛、言はく、『犯ずること無し。比丘の笑つて女人を捉ふるも亦是の如し。』時に比丘有り。牸牛の尾を捉へて水を渡り、水を渡り已つて方に是れ牸牛なることを知り、比丘疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。應に牸牛の尾を捉へて水を渡るべからず。』時に比丘有り。欲心もて女人の衣角を捉へて疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に比丘有り、欲心もて女人身上に就て、女人の嚴身具を捉へて疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に比丘有り。欲心もて女人の尻を抄して疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に母有り、比丘を捉ふるに、彼覺觸受樂有れば、身を動ぜず、疑ふ。佛、言はく、『突吉羅なり。姊故二姪女も亦是の

如し。』時に比丘有り、欲心もて女人の髮を捉へて疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に大童女有り。水に漂はさる。比丘見已つて慈念もて卽ち接出して疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝、覺觸受樂せりや不や。』答へて言はく、『不なり。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に摩香女人有り。水に漂はさる。比丘見て、慈念もて卽ち接出して疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、覺觸受樂せりや不や。』答へて言はく、『不なり。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り、死女人身の未だ壞せざる者と身相觸れて疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。若し多く壞せざる者と身相觸るるも僧伽婆尸沙なり。若し半ば壞せる者と身相觸るるも偸蘭遮なり。若し身多く壞せる者、若は一切壞せる者と身相觸るるも偸蘭遮なり。』時に女人有り、卻つて床に倚る。比丘、欲心もて床を動し、疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に比丘有り。欲心もて女人の手を捉へ、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り、欲心もて女人の脚を捉へ、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に女人有り。比丘の手を捉ふ。比丘覺觸受樂し、身を動じて疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝覺觸受樂せしや不や。』答へて言はく、『爾り。』佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。女人の比丘の脚を捉ふるも亦是の如し。』時に比丘有り。戲笑して女人の手を捉へ、疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝覺觸受樂せりや不や。』答へて言はく、『不なり。』佛、言はく、『犯せず。脚を捉ふるも亦是の如し。』時に女人有り。戲笑もて比丘の手を捉ふ。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝、覺觸受樂せりや不や。』答へて言はく

『不なり。』佛、言はく、『犯無し。脚を捉ふるも亦是の如し。』時に比丘有り。欲心もて女人の衣角を捉へて牽く。比丘疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に比丘有り、欲心もて女人と共に衣を抖擻し、疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』時に比丘有り。欲心もて女人の耳環を就捉し、疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』華鬘を捉へ、釵を捉ふるも、一切偸蘭遮なり。』時に比丘有り。雨中に女人と共に行く。泥に滑つて女人脚跌し地に倒れ、比丘も亦脚跌して地に倒れ女人の上に墮し、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、覺觸受樂せりや不や。』答へて言はく、『不なり。』佛、言はく、『犯無し。比丘の地に倒れ、女人の上に墮するも亦是の如し。』時に比丘有り。雨中に女人と共に行く。倶に脚跌して地に倒る。相觸れて婉轉し、還相離れ、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、覺觸受樂せりや不や。』答へて言はく、『不なり。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り、手もて女人の大小便道間に觸れ、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。若は股間、膞間、若は曲膝間、若は脇邊、若は乳間、若は耳中、若は鼻中、若は瘡中、一切僧伽婆尸沙なり。』時に比丘有り、小沙彌を捉へて摩捫嗚し疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『愛するが故なり、欲心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。應に爾るべからず。』時に比丘有り、比丘尼と身相觸れ、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。式叉摩那、沙彌尼も亦是の如し。』時に比丘有り、蘇毘羅漿を持つて道に在つて行く。故に、喚んで共に不淨を行じ、卽ち其女根を示す。彼卽ち蘇毘羅漿を以て之に灑いで言はく、『臭

【二】麤惡語綺語の場合を明す。

物は還臭物に著く』と。疑ふ。佛、問うて言はく、『比丘、汝何の心を以てせしや。』答へて言はく、『其意を折辱せんとなり。欲心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。應に爾るべからず。』水を持つて道に在つて行くも亦是の如し。』時に婬女有り。比丘を喚んで共に不淨を行じ、女根を以て比丘に示す。比丘、石を以て彼女根を打ち、疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『其意を折辱せんとなり。』欲心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』女人を打つは突吉羅なり。時に女人有り、木に倚る。比丘、欲心もて木を動し、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』若は繩床、若は坐床、若は企床、若は梵、若は石、若は樹、若は橡、一切偷蘭遮なり。』時に女人有り。輿に乘つて行く、比丘、欲心もて輿を動し、疑ふ。佛、言はく、『偷蘭遮なり。』輦若は舡をするも亦是の如し。』時に女人有り。比丘の背を捉ふ。彼還顧するに是れ女人なるを見、覺觸受樂し、疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』

(二)爾時、世尊、舍衛國に在したまふ。優波離、座より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『大德、迦留陀夷麤惡語せり。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『初め未だ制戒せざれば犯無し。』『大德、若し男子と麤惡語せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『若し黃門と麤惡語せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『若し二根人と麤惡語せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『若し畜生不能變者と麤惡語せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『大德、人

女に人女想もて麤惡語せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』『人女に疑ふ、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『人女に非人女想する是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『非女人に人女想する是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大德、若し女想に男子と麤惡語せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大德、男想に女人と麤惡語する、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』『大德、若し此女想を作して彼女と麤惡語するは疑し。』佛、言はく、『若し說いて了了なれば僧伽婆尸沙なり。不了了なれば偸蘭遮なり。手印信書相もて了了に知なれば僧伽婆尸沙なり、不了了知なれば偸蘭遮なり。』『大德、若し此男想を作し彼男と麤惡語せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『大德、若し天女龍女阿修羅女夜叉女餓鬼女畜生能變化女と麤惡語せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『說いて了了なれば偸蘭遮なり、不了了なれば突吉羅なり。手印信書相もて說いて了了に知らしめば偸蘭遮なり。不了了知なれば突吉羅なり。』時に比丘有り。女人に向つて麤惡語し疑ふ。佛、言はく、『說いて了了なれば僧伽婆尸沙なり。不了了なれば偸蘭遮なり。此に向つて說かんと欲し、錯つて彼に向つて說かば、一切僧伽婆尸沙なり。』時に婬女有り。比丘を喚び共に不淨を行じ其女根を示す。比丘、言はく、『汝、女根を斷ち破壞し、臭爛燒燋して墮せしめ、驢と是の如きの事を作せ』と。疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言さく、『彼を折辱せんとなり。欲心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無

し。悪言を以てするは突吉羅なり。』迦留陀夷は性、麤悪語を好むことを爲す。佛、言はく、『性、麤悪語を好むは突吉羅なり。』六群比丘、性、麤悪語を好む。佛、言はく、『突吉羅なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し白衣家に往き、檀越の婦に語つて言はく、『得べきや不や。』彼即ち言はく、『大德、問はば何等を得べきや不や。』比丘默然として答へず、疑ふ。佛、言はく、『說いて不了了なれば偸蘭遮なり。』時に乞食比丘有り、晨朝に衣を著け鉢を持し白衣家に往き、檀越の婦に語つて言はく、『我と來れ。』彼即ち問うて言はく、『何等をか與ふる。』比丘默然たり、疑ふ。佛、言はく、『說いて不了了なれば偸蘭遮なり。若し我に與ふべきや不やと言ひ、若は有ると言ひ、若は何等に似たりと言ふも、說いて不了了なれば一切偸蘭遮なり。』時に比丘に檀越有り、檀越、婦に語つて言はく、『某甲比丘所須有らば、便ち與へよ。』婦答へて言はく、『爾る可し。』是に於て檀越、即ち比丘所に往いて語つて言はく、『我已に婦に勅して言はく、若し某甲比丘所須有らば便ち與へよと、大德、所須有らば往いて索むべし。』比丘、言はく、『爾る可し。』後比丘衣を著け鉢を持して檀越の家に往き、座を敷いて坐す。』檀越の婦、比丘に語つて言はく、『夫我に勅すらく、某甲比丘に所須有らば便ち與へよと、大德、今所須有らば便ち說け。』比丘言はく、『汝、俱に一切を我に與ふること能はざらん。』婦、答へて言はく、『大德、何等か一切與ふること能はざらん。』比丘默然として疑ふ。佛、言はく、『說くも不了了なれば偸蘭遮なり。』時に比丘に檀越有り。檀越、婦に勅して言はく、『某甲比丘の所須有らば便

ち與へよ。』檀越、即ち比丘所に往いて語つて言はく、『我已に婦に勅して言はく、大德に所須有らば便ち與へよと。大德、若し所須有らば往いて索めよ。』比丘、言はく、『爾る可し。』比丘後時に衣を著け鉢を持し、檀越家に往き、座を敷いて坐す。檀越の婦言はく、『我夫已に我に勅して言はく、某甲比丘に所須有らば便ち與へよと。大德、今所須有らば便ち說け。』比丘、言はく、『汝、一切を能く與へんも唯此事有つて與ふること能はざらん。』『彼即ち其心を知つて答へて言はく、『一切能く與へん、此も亦能く與へん』と。比丘疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』時に比丘に檀越有り。檀越、其婦に語つて言はく、『某甲比丘に一切の所須有らば便ち與へよ。』檀越、比丘の所に往いて語つて言はく、『我已に婦に勅して某甲比丘に一切の所須有らば便ち與へよと。大德、若し所須有らば往いて索めよ。』比丘、言はく、『爾る可し。』後異時に於て衣を著け鉢を持し、其家に往き、座を敷いて坐す。檀越の婦、語つて言はく、『我夫已に我に勅して言はく、某甲比丘に一切所須有らば便ち與へよと。大德、今所須有らば便ち說け。』比丘の言はく、『汝、應に一切を與ふべからず。』彼問うて言はく、『大德、何等か應に一切を與ふべからざるや。』比丘、默然として疑ふ。佛、言はく、『說くも不了ならば偷蘭遮なり（次句と此句と同じ。『正しく以て汝一切を與ふべしと言ふも、此事は與ふべからざらん。』彼言はく、『此事も亦能く與へん』と。比丘疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』）時に乞食比丘有り、晨朝に衣を著け鉢を持し、檀越家に至るに男根起つ。檀越婦に語つて言はく、『增益せり。』彼問うて言はく、『何等か增益せる。』默然として疑ふ。佛、言はく、『說くも不了なれば偷蘭遮なり。』時に比

丘有り。式叉摩那を檀越と爲す。彼數犯戒し、比丘の前に於て懺悔す。比丘、言はく、『汝、慚愧無し、不淨行を犯ぜり。』比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『教授せんが爲の故なり。欲心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り。童女有つて檀越と爲す。數犯戒し比丘に語る。比丘、言はく、『汝に慚愧無し、持戒を犯ぜる者なり』と。比丘疑ふ。佛、問うて言はく、『汝、何の心を以てせしや。』答へて言はく、『教授を以ての故なり。欲心を以てせず。』佛、言はく、『犯ずること無し。』時に比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し白衣家に往く。女人有り、消酥形露る。比丘見已つて語つて言はく、『汝、消酥なりや。』彼、言はく、『大德、爾り。我消酥なり。』比丘默然として疑ふ。佛、言はく、『說くも不了了なれば偸蘭遮なり。』時に乞食比丘有り。晨朝に衣を著け鉢を持し白衣家に往く。時に赤衣を著せる女人有つて形露る。比丘見已つて語つて言はく、『汝、赤衣を著くるや。』彼答へて言はく、『大德、我赤衣を著く』と、彼默然として疑ふ。佛、言はく、『偸蘭遮なり。』爾時、世尊、波羅㮈に在したまふ。時に比丘有り、婬女を檀越と爲す。比丘に語つて言はく、『大德、若し此事を須ひんとせば便ち說け』と。彼默然たり。婬女の言はく、『大德、今、須ひんや。何が故に默然たる。』彼疑ふ。佛、言はく、『犯ずること無し。』爾時世尊、舍衞國に在したまふ。外道女人有り、形貌端正なり。比丘見已つて意を繫くること彼に在り。後異時に此女人祇桓を去ること遠からずして行く。比丘、言はく、『汝多作なりや。』彼答へて言はく、『實に爾

【三】自ら慢ずると供養するとについて明す。

り、多作なり。』比丘疑ふ。佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』

(三)爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。優波離、座より起つて偏に右肩を露し、右膝を地に著け、世尊に白して言さく、『大德、迦留陀夷は女人の前に於て自ら身を讃歎せり。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『初め未だ制戒せざれば犯せず。』『大德、若し男子の前に於て自ら身を讃歎せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『大德、若し黃門の前に於て自ら身を讃歎せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『大德、若し二根人の前に於て自ら身を讃歎せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『若し畜生不能變化者の前に於て自ら身を讃歎せば是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『突吉羅なり。』『人女に人女想する、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』『人女に疑ふ、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『人女に非人女想する、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『非人女に疑ふ、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『大德、若し女想を作して男子の前に於て自ら身を讃歎せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『大德、若し男子の前に於て女想を作さば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偷蘭遮なり。』『大德、若し此女想を作して彼女の前に於て自ら身を讃歎せば、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『說いて了了なれば僧伽婆尸沙なり、不了了なれば偷蘭遮なり。手印信書相もて了了知ならしめば僧伽婆尸沙なり。不了了なれば偷蘭遮なり。』『大德、若し此男前に於て彼男想を作さば是れ犯なりや不や。』佛、

【四】媒嫁をなすこと、夫婦間の不和合を和解せしむるとについて。

言はく、「突吉羅なり。」「大德、若し天女龍女阿修羅女夜叉女餓鬼女畜生女の前に自ら讃歎せず、是れ犯なりや不や。」佛、言はく、「説いて了了なれば偷蘭遮なり。不了なれば突吉羅なり。手印信書相もて説いて了知ならしめば偷蘭遮なり。不了ならば突吉羅なり。」時に比丘有り。檀越有り、檀越、婦に語つて言はく、「若し某甲比丘に所説有らば、其所説に隨つて汝當に供養すべし。」と。婦、言はく、「爾る可し。」婦に語り已つて比丘所に往き語つて言はく、「我已に婦に勅して言はく、某甲比丘に若し所説有らば比丘の語に隨つて供養せよと。大德、若し所須有らば往いて索む可し。」比丘、言はく、「爾る可し。」と。後、異時に於て比丘、晨朝に衣を著け鉢を持し、其家に往き、座に就いて坐す。檀越の婦、語つて言はく、「我夫已に我に勅して言はく、某甲比丘に所説有らば所説に隨つて供養せよと。大德、今若し説くこと有らば便ち説け。」比丘、語つて言はく、「汝、俱に一切を供養すること能はざらん。」彼問うて言はく、「大德、云何が一切を供養すること能はざらん。」比丘默然として疑ふ。佛、言はく、「説くも不了なれば偷蘭遮なり。」此中の四句は上の如く麤惡語中に同じ、上は麤惡語を以てし、此には供養を以てするを異と爲すのみ。今略して一句を出す、復煩文を須ひず、故に出さざるなり。時に比丘有り。女人を檀越と爲す。其家に至つて語つて言はく、「姉は此事最上第一なり、身も慈、口も慈、心も慈なり。持戒行善法の比丘を供養せよ。」と。彼疑ふ。佛、言はく、「犯ずること無し。」

(四)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に優波離、座より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け合掌して佛に白して言さく、「大德、迦羅比丘は媒嫁するに、男に向つて女を歎説し、

女に向つて男を歎說す。若は婦事を爲し、若は私通事を爲す。是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『初め未だ制戒せざれば犯せず。』『若し語を受けて往いて說き、而も彼語を持つて還る、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『僧伽婆尸沙なり。』『若し語を受けて彼に向つて說き、語を持せずして還る、是れ犯なりや不や。』佛、言はく、『偸蘭遮なり。』若し彼に向つて說くを聞き、語を持せずして還るも偸蘭遮なり。若し語を受けずして往いて彼に向つて說き、彼語を持つて還るも偸蘭遮なり。若し語を受くるも彼に向つて說かず、彼語を持たずして還らば突吉羅なり。若し語を受けずして彼に向つて說き、語を持せずして還らば突吉羅なり。』時に比丘有り、檀越家有り。其婦を喪うて未だ久しからず、比丘往いて問訊す。檀越に二兒有り。比丘語つて言はく、『汝、何ぞ更に婦を取らざる。』檀越の言はく、『恐くは我小兒をして辛苦せしめん。若し某甲童女を得ば我當に取るべし。』時に比丘、即ち彼童女の所に往き、語つて言はく、『我某甲居士より言を聞く。我若し某甲童女を得ば當に取つて婦と爲すべしと。』童女の言はく、『若し我を須ひて婦と爲さば、我も亦彼を須ひて夫と爲さん。』比丘、卽ち檀越の所に還り、語つて言はく、『我彼女の言を聞くに、若し我を須ひて婦と爲さば、我も亦彼を須ひて夫と爲さんと。』比丘、更に語を持せずして還り、疑ふ。佛、言はく、『若し聞いて而も彼に向つて說くも、語を持せずして還らば偸蘭遮なり。摩香女人も亦是の如し。』時に居士有り。僧伽藍中に往いて諸比丘に語つて言はく、『大德、我爲に語れ』と。諸比丘、言はく、『居士、何の語をか說かんと欲する。』彼、言は

く、『我爲に某甲居士に我に女を與へて婦と作せと語れ』と。比丘、言はく、『居士、當に汝が爲に語るべし』と。即ち一比丘を差して白二羯磨を作し、彼居士の所に往いて語つて言はしむ。『居士、我汝が爲に衆僧の語を說かん。』彼、言はく、『大德僧、何をか勅せらるるや。』比丘、言はく、『衆僧、言はく、汝が女を以て某甲居士に與へて婦と作せと。』彼言はく、『大德、僧勅を奉じて與ふべし。』時に使比丘、僧伽藍中に還り、僧に白す。僧即ち彼居士に告げて知らしめ、比丘疑ふ。佛、言はく、『一切僧伽婆尸沙なり。』時に檀越有り。僧伽藍中に往いて諸比丘に語つて言はく、『大德僧、我爲に語れ。』比丘、言はく、『居士、何語をか說かんと欲する。』彼、言はく、『我爲に某甲比丘に、汝が女を以て我爲に婦と作せと語れ。』比丘、言はく、『當に汝が爲に語るべし。』即ち一比丘を差して白二羯磨を作さしむ。使、彼居士の所に往いて語つて言はく、『居士、我汝が爲に衆僧の語を說かん。』彼居士、言はく、『大德僧、何をか勅せらるるや。』比丘、言はく、『衆僧、汝に語るらく、汝の女を以て某甲居士に與へて婦と作せと。』彼、言はく、『大德、僧勅を奉じて當に與ふべし。』使比丘此念を作さく、『我今若し還つて衆僧に白せば、恩我に在らず』と。即ち自ら往いて彼居士に語り已つて疑ふ。佛、言はく、『衆僧は偸蘭遮なり。使比丘は僧伽婆尸沙なり。』時に檀越有り。常供養比丘の所に往き、比丘に語つて言はく、『我爲に某甲居士に語れ、汝が女を以て我に與へて婦と作せと。』比丘、言はく、『居士、當に汝が爲に語るべし。』比丘即ち彼居士の所に往いて語つて言はく、『汝、女を以て彼某甲居士に與へて婦と作す可

し。』居士、言はく、『我女已に他に與へたり。』若は他に已に將ゐ去れりと言ひ、若は死せりと言ひ、若は賊偷み去れりと言ひ、若は無しと言ふ。比丘、居士の所に還つて是の如きの語を語る。『一切偷蘭遮なり。』時に檀越有り。常供養の比丘に語つて言はく『汝、我爲に某甲比丘に語れ、女を以て我に與へて婦と作す可しと。』比丘、言はく、『當に汝が爲に語るべし。』比丘、卽ち彼居士の所に往いて語つて言はく、『汝、女を以て彼某甲居士に與へて婦と作す可し。』居士、言はく、『我女に癩病有り』と。若は癰と言ひ、若は白癩有りとし、若は乾枯病有りと言ひ、若は狂と言ひ、若は痔病と言ひ、若は常に血出病有りと言ひ、若は足下常熱病有りと言ふ。比丘還つて居士に是の如きの言を語り已つて疑ふ。佛、言はく、『一切僧伽婆尸沙なり。』時に居士有り、婦と共に闘ひ、驅つて婦を出す。卽ち常供養比丘の所に往いて語つて言はく、『大德、夫我と共に闘ひ、驅出せらる。我今共に懺悔せんと欲す。』比丘、卽ち和合の爲に懺悔せしめ、疑ふ。佛、言はく、『懺悔の爲の故なれば犯無し。』時に婦人有り。夫と共に闘ひ已つて出去る。常供養比丘の所に往いて語つて言はく、『我夫と共に闘ひ已つて外に出づ。今懺悔せんと欲す。』比丘、卽ち往いて和合し懺悔せしめ、疑ふ。佛、言はく、『懺悔の爲なれば犯無し。』時に婦人有り。夫と共に闘ひ、語つて言はく、『汝、若し我を須ひて婦と爲さずんば當に須ひずと言へ。』夫、言はく、『我汝を須ひて婦と爲さざらん』と。卽ち驅出し、常供養の比丘所に往き、語つて言はく、『我夫と共に闘ふ。我夫に語つて言はく、若し我を須ひて婦と爲さずんば、當に須ひ

て婦と爲さずと言へと。夫、言はく、須ひずと。卽ち我を驅つて出す。今懺悔せんと欲す。』比丘卽ち和合し懺悔せしめ、疑ふ。佛、言はく、『懺悔の爲の故ならば犯無し。』時に居士有り、婬女を取つて婦と爲す。先に常に此女人と住反する者、見已り語つて言はく、『我汝と是の如き、是の如きの事を作さんと欲す。』と。餘人語つて言はく、『此れ復婬女と作らざらん。今已に某甲居士の爲に婦爲ればなり』と。彼人卽ち強ひて將ゐて共に婬を行ず。時に夫、聞き已つて卽ち驅出す。便ち常所供養比丘の所に往いて語つて言はく、『我自ら居士の爲に婦と作りてより已來、未だ曾て他の男子と犯ぜず。唯此賊有つて強ひて牽ゐて我を犯ぜり。我今夫と共に懺悔せんと欲す』と。比丘、卽ち往いて和合し、夫と共に懺悔せしめ、疑ふ。佛、言はく、『懺悔の爲の故なれば犯無し。』時に居士有り。婬女に所須を給す。常供養比丘の所に往き語つて言はく、『我爲に某甲婬女に語れ、某處に在つて我を待てと。』比丘、言はく、『爾る可し。』卽ち婬女の所に往いて語つて言はく、『某甲居士、汝に語らく、某處に在つて待てと。』比丘疑ふ。佛、言はく、『先には和合を以てなれば犯無し。白衣の使と爲るは突吉羅なり。』時に居士有り。彼童女を占護して既に婦を迎へず。又余に嫁するを聽さず。時に女、常供養比丘に語つて言はく、『大德、我爲に某甲居士に語れ、我父母、汝より奪ひ、我を持つて餘人に與へんと欲す。汝、若し我を迎ふべきや。若は我を放つべきやと。』比丘、言はく、『爾る可し。』彼比丘、卽ち居士の所に往き語つて言はく、『某甲童女、言はく、我父母、汝を奪つて更に餘人に與へんと欲す。汝今當に迎ふ

【五】誹謗語をなすについて。

べし。若は當に之を放つべし』と。彼疑ふ。佛、言はく、「彼先に已に言つて誓へば犯無し。白衣の使と爲るは突吉羅なり。」時に居士有り。彼童女を占護して既に婦を迎へず。又餘嫁を聽さず。彼父母、言はく、「知らず、誰か某甲比丘に語つて此童女を迎へて去らしむべきや。若は當に餘嫁せしむるを聽すべきや。」彼家の常所供養比丘狂病なり。便ち言はく、『我當に爲に語るべし。』比丘、即ち彼居士の所に往き、頭を捉へて語つて言はく、「汝、某甲童女を迎へよ。若は當に放ち去るべし。」後還心を得て疑ふ。佛、言はく、「顚狂心亂痛惱に纏はる所は一切犯無し。」

(五)爾時、世尊、王舍城に在したまふ。優波離、座より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け合掌して佛に白して言さく、「大德、齊婆摩羅子は淸淨なるに、慈地比丘は無根を以て之を謗れり。是れ犯なりや不や。」佛、言はく、「初め未だ制戒せざれば犯無し。」「大德、若し無根の法を以て淸淨比丘を謗らば、是れ犯なりや不や。」佛、言はく、「僧伽婆尸沙なり。」時に比丘有り。女人と樹下に在つて坐す。餘比丘語つて言はく、「汝、女人を婬犯せり。」彼答へて言はく、『我犯せず、共に樹下に坐せるのみ。』彼謗る者疑ふ。佛、言はく、「眞實語の爲の故にし、毀謗することを欲せざるは犯無し。」時に比丘有り。家に在つて故に共に通ず。異比丘有り。餘比丘と相似す。此相似比丘に語つて言はく、「汝は故に犯せり。」彼言はく、『我犯せず。彼の故に犯せる比丘の我と相似せるのみ。』彼疑ふ。佛、言はく、「實の爲の故にし、以て毀謗せざるは犯無し。」時に比丘有り。婬女を檀越と

爲す。餘比丘語つて言はく、『汝、婬女を犯せり。』彼、言はく、『是れ我檀越なり。犯せず。』と。彼疑ふ。佛、言はく、『實の爲の故にし以て毀謗せざるは犯無し。婦女若は童女若は黄門若は比丘尼若は式叉摩那沙彌尼も亦是の如し。時に比丘有り。小沙彌を捉へて摩捫鳴す。餘比丘語つて言はく、『汝、沙彌を犯せり。』彼、言はく、『我犯せず、摩捫して之を鳴せしのみ。』彼疑ふ。佛、言はく、『實の爲の故にし、以て毀謗せざるは犯無し。』時に比丘有り。比丘の腰帶を取る。彼、言はく、『汝、我帶を盜めり。』彼、言はく、『我盜まず、親厚の意を以て取るのみ。』彼疑ふ。佛、言はく、『實語の爲の故にし、以て毀謗せざれば犯無し。』時に比丘有り。無根の僧伽婆尸沙を以て他を謗じ、疑ふ。佛、言はく、『波逸提なり。』

【一】毘尼に關する説法の足らざるを補足したもの。非法に法を説くべからざる等を明す

毘尼増一之一

（一）是の如く我聞けり、一時、佛、舍衛國の祇桓精舍給孤獨食園に在したまふ。時に世尊、諸比丘に告げたまはく、『汝等諦に聽け、善く之を思念せよ。若し比丘相似の文句を説いて法毘尼を遮せば、此比丘多人をして利益を得ざらしめ、諸の苦業を作し以て正法を滅す。若し比丘、文句に隨順し、法毘尼に違せず。此の如きは比丘、多人を利益し、衆の苦業を作さしめず、正法久住せん。是故に諸比丘、汝等當に文句に隨順すべし。増減して

法毘尼に違せしむること勿れ。當に是の如く學すべし。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し受持せり。佛、言はく、『若し比丘非法に法を說き、法に非法を說く。此の如くんば比丘、多人をして利益を得ざらしめ、衆の苦業を作し、以て正法を滅せん。其れ比丘有つて非法說を非法と言ひ、是法說を是法と言ふ、此の如くんば比丘、多人を利益し、衆の苦業を作し、正法をして久住せしめん。是故に汝等當に此敎に隨順すべく、非法を當に非法と言ひ、是法說を是法と言ふべし。當に是の如く學すべし。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜し、信樂し、受持せり。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『若し比丘、毘尼に非ざるを說いて是れ毘尼と言ひ、是毘尼を說いて非毘尼と言はば、多人をして利益を得ざらしめ、衆の苦業を作し、以て正法を滅せん。若し比丘、非毘尼を說いて非毘尼と言ひ、是毘尼を說いて是毘尼と言はば、多人を利益し、苦業を作さず、正法をして久住せしめん。是故に汝等當に此敎に隨ふべし。非毘尼を非毘尼と說き、是毘尼を是毘尼と說き、當に是學を作すべし。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。佛、諸比丘に告げたまはく、『若し比丘、非制に而も制し、是制に便ち斷ず。是の如くんば漸漸に戒をして毀壞せしめ、多人をして利益を得ざらしめ、衆の苦業を作し、以て正法を滅せん。若し比丘、非制に制せず、是制に斷ぜず、是の如くんば漸漸に戒を成就せしめ、多人を利益し、苦業を作らず、正法をして久住せしめん。是故に汝等非制は制すべからず。是制は斷ずべからず。當に所制戒に隨つて學すべし。』諸比丘、聞いて歡喜信樂し、受持せり。

【二】如來出世して一義のために結戒し、羯磨を制するを明す。

（二）爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『如來の出世は衆の過失を見るが故に、一義を以て諸比丘の爲に結戒し、僧を攝取したまふ。此一義を以ての故に、如來は諸比丘の爲に結戒したまふ。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し受持す。乃至正法久住し句句も亦是の如し。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『如來の出世は一義を以ての故に、諸比丘の爲に呵責羯磨を制し、僧を攝取したまふ。是一義を以ての故に如來出世し、諸比丘の爲に呵責羯磨を制したまふ。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。乃至正法久住し、句句も亦是の如し。是の如く擯羯磨、依止羯磨、遮不至白衣家羯磨行り、不見罪擧羯磨、不懺悔羯磨、惡見不捨羯磨を作し、法律の所制を檢校し、依止を制受し、梵罰を制し、擧を制し、憶念を制し、求聽を制し、自言を制し、阿耨婆陀を制遮し、說戒を制遮し、自恣を制遮し、戒を制し、說戒を制し、布薩を制し、布薩羯磨を制し、自恣を制し、自恣羯磨を制し、白白羯磨を制し、白二羯磨を制し、白四羯磨を制し、與覆藏與本日治與摩那埵與出罪を制し、四波羅夷を制し、十三僧伽婆尸沙、二不定法、三十尼薩耆、九十波逸提、四波羅提提舍尼、式叉迦羅尼、七滅諍を制す。一一の句は呵責羯磨の如し。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『一語を說けば便ち捨戒を成ず。是の如きの言を作せ、我佛を捨すと。是の如き一語を作さば、便ち捨戒と爲す。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。法を捨し、僧を捨し、和上を捨し、同和上を捨し、阿闍梨を捨し、同阿闍梨を捨し、諸淨行比丘を捨し、戒を捨し、毘尼を捨し、學事を捨し、我は是れ白衣なりとし、我は

【三】以下種種の二種の法について明す。

是れ守園人なりと憶ひ、我は是れ優婆塞と憶ひ、我は是れ沙彌と憶ひ、我は是れ外道、是れ外道弟子と憶ひ、我は非沙門釋子法を憶ふ。一一の句も亦是の如し。

(三)爾時佛、諸比丘に告げたまはく、「二種の犯有り、一は輕、二は重なり。是を二種の犯と爲す。」佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜し信樂し、受持す。復二事有り、一は輕にして有餘、二は輕なるも羯磨を作すことを得。復二事有り。波羅夷と僧伽婆尸沙なり。復二事有り。波羅夷と偸蘭遮なり。復二事有り、波羅夷と波逸提なり。復二事有り。波羅夷と波羅提提舍尼なり。復二事有り、波羅夷と突吉羅なり。復二事有り、波羅夷と惡說なり。僧伽婆尸沙乃至惡說も亦是の如し。偸蘭遮乃至惡說も亦是の如し。波逸提乃至惡說も亦是の如し。波羅提提舍尼乃至惡說も亦是の如し。突吉羅惡說も亦是の如し。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、「二見有り、出家人は應に行ずべからず。非法に法を見、法に非法を見る。復二見有り。毘尼に非毘尼と言ひ、非毘尼に毘尼と言ふ。復二見有り。非犯に犯を見、是犯に非犯を見る。復二見有り。輕に重を見、重に輕を見る。復二見有り。有餘に無餘を見、無餘に有餘を見る。復二見有り。麤惡に非麤惡を見、非麤惡に麤惡を見る。復二見有り。舊法に非舊法を見、非舊法に舊法を見る。復二見有り、制に非制を見、非制に制を見る。復二見有り。是說に非說を見、非說に說を見る。復二見有り。酒に非酒を見、非酒に酒を見る。復二見有り。飲に非飲を見、非飲に飲を見る。復二見有り。食に非食を見、非食に食を見る。復二見有り。時に非時を見、非時に時を見る。復二見有り。淨に不淨を見、不

淨に淨を見る。復二見有り。重に非重を見、非重に重を見る。復二見有り。難に非難を見、非難に難を見る。復二見有り。無蟲に蟲を見、蟲に無蟲を見る。復二見有り。破に不破を見、不破に破を見る。復二見有り。種に非種を見、非種に種を見る。復二見有り。已解義に未解を見、未解義に已解を見る。復二見有り。怖に不怖を見、不怖に怖を見る。復二見有り。道に非道を見、非道に道を見る。復二見有り。可行に非行を見、非行に可行を見る。復二見有り。出離に不出離を見、不出離に出離を見る。復二見有り。棄に不棄を見、不棄に棄を見る。復二見有り。世間常と見、世間無常と見る。復二見有り。世界有際と見、世間無際と見る。復二見有り。是身是命身異命異なり。復二見有り。如來に滅度有り、如來に滅度無し。復二見有り。無如來滅度有り。無如來滅度有るに非ず。佛法内に於て是の如きの二見有り。出家人は應に修行すべからず。若し修行せば如法に治せん。』佛說是の如し。諸比丘聞き、歡喜信樂し受持せり。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『二種の毘尼有り、有犯毘尼と有諍毘尼となり。復二種の毘尼有り。犯毘尼と結使毘尼となり。復二毘尼有り。比丘毘尼と比丘尼毘尼となり。復二毘尼有り。方毘尼と遍毘尼となり。是を二種の毘尼と爲す。』佛說是の如し。諸比丘聞き、歡喜信樂し、受持せり。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『二種人有り、不安樂に住す。一に急瞋、二に懷恨なり。復二法有り。一に急性、二に難捨なり。復二法有り。一に慳、二に嫉妬なり。復二法有り。一に欺詐、二に諂曲なり。復二法有り。一に自高、二に憙諍なり。復二法有り。一に好飾、二に放逸なり。復

二法有り。一に慢、二に增上慢なり。復二法有り。一に貪、二に恚なり。復二法有り。一に自譽、二に毀他なり。復二法有り。一に邪見、二に邊見なり。復二法有り。一に有難教、二に不受訓導なり。是の如きの二種人は不安樂に住す。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『有學比丘心未だ無學に至らざれば、常に求めて修習せば勝法を增進す。二法有り、多利益を得、未だ得ざるは能く得、未だ入らざるは能く入り、未だ證せざるは能く證す。何等か二なる。善く犯し、善能く犯を除くなり。是の如き學人は心未だ無學に至らざるも常に求めて修習すれば勝法を增進す。此二法有つて多く利益を得、未だ得ざるは能く得、未だ入らざるは能く入り、未だ證せざるは能く證す。是故に汝等、當に是の如きの法を勤修し習學すべし。』佛說是の如し、諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。善く入定し、善く出定するも亦是の如し。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『比丘有り、心未だ無學に至らざるも、常に求めて修習せば、勝法を增進す。二法有り、多く利益を得、未だ得ざるは能く得、未だ入らざるは能く入り、未だ證せざるは能く證す。何等か二なる。可厭處に厭を生じ、已厭をば正憶念して斷す。是の如きの學人は心未だ無學に至らざれども常に求めて修習し、勝法を增進す。此二法有つて多く利益を得、未だ得ざるは能く得、未だ入らざるは能く入り、未だ證せざるは能く證す。是故に汝等、可厭處に厭を生じ、已厭をば當に正憶念して斷ずべし。』而も偈を說いて言はく、

明者は厭處に在らば、能く厭離心を生じ

無畏なれば恐怖せず、能く斷ずる者は聖を得ん
比丘は正念に斷ずれば、無上正道を得
終に復退轉せず、涅槃に住することを得ん。

佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜し、信樂し受持す。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『破戒は二道に墮す。地獄と畜生中となり。持戒は二道に生ず。天及び人中に生ずるなり。屏處に惡業を造らば生じて二道に墮す。地獄と及び畜生となり。屏處に善業を造らば二道に生ずることを得、天と及び人中に生ずるなり。邪見は二道に生ず、地獄と及び畜生となり。正見は二道に生ず、天と及び人中に生ずるなり。佛の聖弟子は天人中の尊貴なり。二法有つて解脫を得ず。一に犯戒、二に不見犯なり。二法有つて身に解脫を得、一に不犯、二に見犯なり。二法有つて解脫を得ず。犯じて罪を見ず、犯を見るも如法に懺悔せず。二法有り。自ら解脫を得、一に犯罪を見、二に犯じて能く如法に懺悔す。二法有つて解脫を見ず。一に見罪するも如法に懺悔せず、二に若し如法に懺ずるも彼受けず。二法有つて自ら解脫を得、一に見罪して能く如法に懺す。二に如法に懺する者を彼能く如法に受く。縛不縛も亦是の如し。二種の淸淨有り。一に不犯、二に懺悔なり。』佛說是の如し。諸比丘、聞いて歡喜信樂し、受持す。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『二種人有つて如來を謗ず。一に不信樂もて憎嫉す、二に信樂有るも不解受持なり。是故に我今汝等に告げて此義を知らしむ。如來を謗らば大重罪を得、若し一切諸天及び世人若は魔梵王沙門婆羅門を謗らば

其罪輕し、如來を謗らば其罪最も重し。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。『復二種有り、如來を謗ず。一に非法を法と言ひ、二に法を非法と言ふ。二種有つて如來を謗らず。一に非法を非法と說き、二に法を是法と說く。二種有つて如來を謗ず。一に非毘尼を毘尼と說き、二に是毘尼を非毘尼と說く。二種有つて如來を謗らず。一に非毘尼を非毘尼と說き、二に是毘尼を毘尼と說く。二種有つて如來を謗ず。一に非制に制と言ひ、二に是制を而も斷ず。二種有つて如來を謗らず。一に非制を非制と言ひ、二に是制を斷ぜず。二法有つて如來を謗る。一に非法を法と言ひ、二に法を非法と言ふ。二種有つて如來を謗らず。一に非法を非法と言ひ、二に法を是法と言ふ。乃至說を非說と言ふも亦是の如し。二處、二事、二見も亦是の如し。復二法有り、如來の善教を受けざるも亦是の如し。復二法有り、如來に違するも亦是の如し。復二法有り、堅持して如來と諍ふも亦是の如し。復二法有り、如來を奉ぜざるも亦是の如し。復二法有り、如來に値はざるも亦是の如し。復二法有り、如來所に於て麤獷にして慈心有ること無きも亦是の如し。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『二衆有り、一に法語衆、二に非法語衆なり。何等か非法語衆なる。衆中に法毘尼を用ひず、佛の所教を以て說かず、教に應ずるも教へずして住し、滅に應ずるも滅せずして住す。是を非法語衆と爲す。何等か法語衆なる。衆中に法毘尼を用ひ、佛の所教に隨つて說き、教に應ぜば教へて住し、滅に應ぜば滅して住す。是を法語衆と爲す。此二衆中、法語衆を我讚歎して尊と爲す。』佛

說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。復二衆有り。如法衆と不如法衆となり。何等か不如法衆なる。衆中に若し非法者力有り、如法者力無く、非法者伴を得、如法者伴を得ず。非法羯磨を作し、法羯磨を作さず。非法毘尼羯磨を作し、毘尼羯磨を作さず。非法を便ち行じ、是法を行ぜず、是を非法衆と爲す。何等か如法衆なる。若し衆中に如法者力有り、非法者力無く、如法者伴を得、不如法者伴を得ず、法羯磨を作し、非法羯磨を作さず、毘尼羯磨を作し、非毘尼羯磨を作さず、是法を行じ、非法を滅す。是を如法衆と爲す。此二衆の中、如法衆を我讃歎して尊と爲す。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。二衆有り、等衆と不等衆となり、亦是の如し。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『若し國の法王力弱ければ衆賊熾盛なり。爾時、法王は安樂に出入することを得ず、邊國の小王は敎令に順ぜず、國界人民も亦安樂に出入せず。生業休廢し、憂苦損減し、利益を得ず。是の如くんば非法比丘は力有り、是法比丘は力無く、如法比丘は安樂を得ず、若し衆中に在つては亦語ることを得ず、若は空處に在つて住す。是時非法羯磨を作し法羯磨を作さず、非毘尼羯磨を作して毘尼羯磨を作さず、非法を便ち行じ、是法を行ぜず。彼勤行精進して未得を得しめ、未入を入らしめ、未證を證せしめず。則ち諸天人民をして利益を得ず、長夜に苦を受けしむ。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『若し國の法王力強ければ衆賊力弱く、皆來つて歸伏し或は復逃竄す。時に法王安樂に出入し、憂患有ること無く、邊國の小王は敎令に順從し、境內

の人民亦安樂を得、生業自恣し諸の憂苦無く、多く利益を得、損減有ること無し。是の如くんば如法比丘は力を得、非法比丘は力無く、非法比丘は如法比丘の所に來至し、敎令に隨順して敢て違逆せず、若は當に逃竄すべく衆惡を作さず。爾時如法比丘は安穩に樂を得、若し僧中に在らば語を得、若は空處に在つて住して如法羯磨を作し、非法羯磨を作さず、毘尼羯磨を作し非毘尼羯磨を作さず、是法を便ち行じ、非法を行ぜず。勤修精進なれば未得を能く得、未入を能く入り、未證は能く證し、則ち諸天人民をして大利益を得しむ。」佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。爾時、舍利弗、諸比丘に告ぐらく、『諸長老、若し鬪諍有らんに、擧他比丘及び有罪比丘、自ら觀察せざれば、當に知るべし、此諍は遂に更に增長し、法の如く、毘尼の如く除滅することを得ず、諸比丘は安樂ならざらん。若し比丘共に諍はんに、擧他比丘及び有罪者、各自ら過を觀ぜば、當に知るべし、此諍は復增長深重ならず、法の如く、毘尼の如く除滅することを得、諸比丘便ち安樂に住することを得ん。諸比丘、云何が自ら過を觀ずるや。有罪比丘是念を作さく「我已に是の如きことを犯せり。彼我犯の非なるを見る。我若し犯せずんば彼我犯の非なるを見ることを得ざらん。我犯ずるを以ての故に彼をして我を見せしむ。我今自ら悔過すべく、彼をして復惡語を以て我を呵せざらしめん。我若し是の如くんば善法を增長せしめん」と。是を比丘能く自ら其過を觀ずと爲す。云何が擧他比丘自ら其過を觀ずるや。彼是の如きの念を作さく、「彼比丘の犯は非なり、我をして見ることを得しむ。若し彼の犯非ならずんば我

則ち見ざらん。彼犯非なるを以ての故に我をして見ることを得しめたり。若し彼自ら能く至誠に懺悔せば我をして惡言を出ださしめず、是の如くして善法を增長せしめん」と。是を擧他比丘の自ら其過を觀ずと爲す。若し比丘に諍事有らば、擧他比丘有罪比丘、能く是の如く自ら其過を觀ずることを作せ。當に知るべし、此過復增長せず。法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く、諸比丘は安樂住を得ん。』舍利弗、是の如きの語を說けるに、諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『二種の癡有り。一に犯罪、二に不見犯なり。是を二種の癡と爲す。復二種の智有り、一に不犯罪、二に見犯罪なり。是を二種の智と爲す。復二種の癡有り。一に不見犯罪、二に犯罪を見るも如法に懺悔せず、是を二種の癡と爲す。復二種の智有り。一に犯罪を見、二に罪を見れば能く如法に懺悔す、是を二種の智と爲す。復二種の癡有り。一に罪を見るも如法に懺悔せず。二に如法に懺悔するも彼受けず。復二種の智有り。一に罪を見て如法に懺悔す。二に如法に懺悔するを彼受く。是を二種の智と爲す。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持す。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『諸比丘に過失有るを以ての故に、世尊は二義を以て鬪諍法を制したまふ。一に難調人を調せしめ、二に慚愧を知る者をして安樂を得しむ。此二義を以ての故に、世尊は諸比丘の爲に鬪諍法を制したまふ。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し受持せり。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『擧他比丘の他罪を擧せんと欲せば應に二法を修すべし。一に眞實、二に不瞋なり。應に是の如きの二法を修すべし、

被擧比丘も亦應に是の如きの二法を修すべし。一に眞實、二に不顚なり。佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し受持せり。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、二比丘に二法有つて疾に正法を滅す。非法を法と說き、法を非法と說く。乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り。善法を生ずること能はず。法非法より乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り。比丘自ら破壞犯罪し、數有智者に呵責せられ多く衆罪を得、法非法より乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り、比丘の地獄に墮すること猶し射箭するが如し。法非法より乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、二法有つて正法をして久住せしむ。非法を非法と說き、是法を是法と說く。乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り。比丘は能く諸善を生ず。非法を非法と說き、是法を是法と說く。乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り、比丘自ら破壞せず、犯罪せず、智者の爲に呵責せられず、福を受くること無量なり。非法を非法と說き、是法を是法と說く、乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り。比丘の疾に生天を得ること猶し射箭するが如し。非法を非法と說き、法を是法と說く、乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。比丘に二法有らば應に擧すべし。非法を法と說き、法を非法と說く、乃至說不說も亦是の如し。爲に憶念を作し、自言を作し、遮阿毱婆陀、遮說戒、遮自恣を作すも

亦是の如し。二處、二事、二見も亦是の如し。復二法有り。比丘如法に擧せ。非法を法と說き、法を非法と說く。乃至說不說も亦是の如し、二處、二事、二犯も亦是の如し。憶念を作し、自言を作し、遮阿毘婆陀、遮說戒、遮自恣を作すも亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。復二法有り。比丘は應に與に呵責羯磨を作すべし。非法を法と說き、法を非法と說く。乃至說不說も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。擯羯磨、依止羯磨、遮不至白衣家羯磨、擧羯磨も亦是の如し。二處、二事、二犯も亦是の如し。二法有つて有漏を增長す。慚づ可きを慚ぢず、非慚を反つて慚づ。此二法有つて有漏を增長す。復二法有り。有漏を增長せず。慚づべきを慚ぢ、非慚を慚ぢず。復二法有つて有漏を增長す。不淨を淨と見、淨を不淨と見る。是二法有つて有漏を增長す。復二法有つて有漏を增長せず。不淨を不淨と見、淨を淨と見る。是二法有つて有漏を增長せず。復二法有つて有漏を增長す。不犯を犯と見、犯を不犯と見る。是二法有つて有漏を增長す。復二法有つて有漏を增長せず。不犯を不犯と見、犯を犯と見る。是二事有つて有漏を增長せず。復二法有つて有漏を增長す。輕きを重しと見、重きを輕しと見る。是二法有つて有漏を增長す。復二法有つて有漏を增長せず。輕きを輕しと見、重きを重しと見る。是二法有つて有漏と增長せず。復二法有つて有漏を增長す。無餘を有餘と見、有餘を無餘と見る。是二法有つて有漏を增長す。復二法有つて有漏を增長せず。無餘を無餘と見、有餘を有餘と見る。是二法有つて有漏と增長せず。復二法有つて有漏を增長す。非法を法と

見、法を非法と見る。是二法有つて有漏を増長す。復二法有つて有漏を増長せず。非法を非法と見、是法を是法と見る。是二法有つて有漏を増長せず。復二法有つて有漏を増長す。非制なるを制し、是制を便ち斷ず。是二法有つて有漏を増長す。復二法有つて有漏を増長せず。非制を制せず、是制を斷ぜず。是二法有つて有漏を増長せず。二語の捨戒有り。我佛を捨す、法を捨す、乃至我沙門釋子に非ず、上の如し。如來出世して衆の過失を見たまふが故に、二義を以て諸比丘の爲に制戒したまふ。一に僧を攝取し、二に僧をして歡喜せしむ。復二法有り、一に不信者をして信ぜしめ、二に已信者をして増長せしむ。復二法有り。一に難調者は調を得、二に慚を知るの比丘安樂住を得。復二法有り。一に正法を久住せしめ、二に毘尼を攝取す。復二法有り。一に現在世怨を斷じ、二に未來世怨を斷ず。復二法有り。一に現在有漏を滅し、二に未來有漏を滅す。復二法有り。一に現在恐怖を滅し、二に未來恐怖を除く。復二法有り。一に現在重罪を斷じ、二に未來重罪を斷ず。復二法有り。一に現在不善法を斷じ、二に未來不善法を斷ず。此二義の爲の故に世尊は諸比丘の爲に制戒したまふ。復二法有り。二義の爲の故に世尊は呵責羯磨を制したまふ。一に僧を攝取し、二に僧をして歡喜せしむ。乃至現在不善法未來不善法を斷ずるも亦是の如し。是の如く一一句乃至七滅諍も呵責羯磨法の如し。佛説是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。

四分律卷第五十七

四分律　巻第五十八　第四分之九

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

毘尼増一之二

(一)爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『三羯磨有つて一切の羯磨を攝す。何等か三なる。白羯磨、白二羯磨、白四羯磨なり。是を三羯磨と爲し、一切の羯磨を攝す。』佛説是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。爾時、世尊、王舍城に住したまふ。諸比丘に告げたまはく、『三非法有つて憶念毘尼を與ふ。何等か三なる。若し比丘重罪を犯せば、若は波羅夷、若は僧伽婆尸沙、若は偸蘭遮なり。時に餘比丘言はく、「波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯す」と。問うて言はく、「汝、波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼言はく、「根本を見ず、諸長老、我波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶はず、難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸比丘、故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて憶念毘尼を請ふ。若し僧、彼に憶念毘尼を與ふれば、是を非法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し比丘有り、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せんに、時に餘比丘、波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと言ひ、餘比丘に問うて言はく、「汝、波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼言は

【一】以下三法について明す。

く、「根本を見ず。諸長老、我是の如きの重罪を犯せりと憶はず、我小罪を犯せり、當に懺悔せば清淨なるべし、諸長老、難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧、憶念毘尼を與ふれば、是を非法に憶念毘尼を與ふと爲す。若し比丘有つて重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せんに、餘比丘詰つて言はく、「汝、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や、」彼言はく、根本を見ず。諸長老、我重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶はず、我小罪を犯じ已に懺悔せば清淨なり。諸長老、難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘、故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。僧、若し與へて憶念毘尼を作さば法に非ず。是を三種非法與憶念毘尼と爲す。三種如法與憶念毘尼有り。若し比丘、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せざるに、餘比丘に重罪波羅夷僧伽婆遮沙偸蘭遮を犯せりと言ひ、問うて言はく、「汝、是の如きの重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼犯せりと憶はざれば便ち是言を作さく、「諸長老、我是の如きの重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶はず。諸長老、難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘、故に難詰して止まざれば彼憤く憶念して僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。僧、若し憶念毘尼を與ふれば、是を如法與憶念毘尼と爲す。若し比丘、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せざるに、餘比丘、重罪波羅夷僧伽婆尸沙を犯せりと言ひ、問うて言はく、「汝、波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や」彼言はく「犯せりと憶はず、」便ち是言を作さく、「長老、我是の如きの重罪波羅夷僧伽

婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶はず。我小罪を犯せり。當に如法に懺悔せば淸淨なるべし。諸長老、難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼廣く憶念して僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧、憶念毘尼を與ふれば、是を如法與憶念毘尼と爲す。若し比丘重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せざるに、餘比丘は重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと言ひ、問うて言はく「汝、是の如きの重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼犯せりと憶はざれば、便ち是言を作さく、「長老、我是の如きの重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶はず、我小罪を犯せるも已に懺悔し、淸淨なり。諸長老、難詰して我に問ふこと莫れ」と。而も諸比丘故に難詰して止まざれば彼廣く憶念して僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。僧若し憶念毘尼を與ふれば、是を三種如法與憶念毘尼と爲す。復三非法有らば不癡毘尼を與へよ。若し比丘、癡狂ならざるに而も詐つて癡狂と爲し、多く不淨行非沙門法を犯す。餘比丘の言はく「汝、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せり」と。彼是言を作さく、我顚狂心亂なるをもて多く不淨行非沙門法を犯せるも、此は我故作に非ず、是れ癡狂なるが故のみ。諸長老、難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧、不癡毘尼を與ふれば是を非法與不癡毘尼と爲す。若し比丘癡狂ならざるに而も詐つて癡狂と作り、多く不淨行非沙門法を犯す。餘比丘、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと言ひ、問うて言はく、「汝、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼言はく「我先に癡狂心亂も

て多く不淨行非沙門法を犯せるも我故作に非ず、是れ癡狂の故に作せるのみ。人の夢中事を憶ふが如し、我も亦是の如し。諸長老、爲に難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。僧若し不癡毘尼を與ふれば、是を非法與不癡毘尼と爲す。若し比丘癡狂ならざるに而も詐つて癡狂と爲り、多く不淨行非沙門法を犯せんに、餘比丘言はく、「重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せり」と。問うて言はく「汝、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼言はく「我先に癡狂なるが故のみ。人の高きより墜下して少草木を攬るが如し。難詰して我に問ふことを爲すこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是を非法與不癡毘尼と爲す。是を三非法與不癡毘尼と爲す。復三種如法與不癡毘尼有り。若し比丘狂癡なるが故に多く不淨行非沙門法を行ぜんに、彼後還心を得たり。餘比丘言はく、「汝、是の如きの重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼言はく「我先に癡狂なるが故に多く不淨行非沙門法を行ぜるも、我故作に非ず。是れ狂なりし故のみ。諸長老、難詰して我に問ふことを爲すこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼癡狂止まり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是を如法與不癡毘尼と爲す。若し比丘狂癡なるが故に多く不淨行非沙門法を犯じ、彼後還心を得たり。餘比丘言はく、「汝、是の如きの重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や。」彼言はく、「我先に狂癡なるが故に、多く不淨行非沙門法を犯せ

るも我故作には非ず、是れ癡狂なりし故のみ。人の夢中の所作を憶ふが如し。諸長老、爲に難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。僧若し不癡毘尼を與ふれば是を如法與不癡毘尼と爲す。若し比丘狂癡なるが故に多く不淨行、非沙門法を犯せんに、餘比丘言はく、「汝、重罪波羅夷僧伽婆尸沙偸蘭遮を犯せりと憶ふや不や」と。彼言はく、「我先に狂癡なりしが故に多くの不淨行、非沙門法を犯せるも我故作には非ず、是れ狂癡なりしのみ。我憶ふに、人の高きより墜下して少草木を豎るが如し。諸長老、爲に難詰して我に問ふこと莫れ。」而も諸比丘故に難詰して止まざれば、彼僧に從つて不癡毘尼を乞ふ。若し僧不癡毘尼を與ふれば、是を如法與不癡毘尼と爲す。是を三如法與不癡毘尼と爲す。三種の調法有り。呵責と擯出と依止となり、是を三種調法と爲す。三滅法有り。用多人語罪處所草覆地なり。是を三滅法と爲す。復三法有り。應に比丘を喚んで著して前に現ぜしむべし。已らば白を作し然る後に三羯磨を作せ。我是の如きの法を說いて處所羯磨成就を得たり。若し比丘、鬪諍を喜ばば、僧は應に與に三種羯磨を作すべし。若は呵責羯磨、若は擯羯磨、若は依止羯磨も亦せよ。」佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『三法有り、應に與に三法を受くべからず。一に破戒、二に破見、三に破威儀なり。是の如きの三法有り。應に與に大戒を受くべからず。三法有り、應に與に大戒を受くべし。不破戒と不破見と不破威儀となり。是の如きの三法有り。應に與に大戒を受くべし。比丘に三法有り。僧は應に

與に呵責羯磨を作すべし。破戒と破見と破威儀となり。是の如きの三法有り。僧は應に與に呵責羯磨を作すべし。若は擯羯磨、依止羯磨、遮不止白衣家羯磨、擧羯磨も亦是の如し。被擧人に三法有り。應に爲に羯磨を解すべからず、見るべきを見ず、懺すべきを懺せず、捨すべきを捨せず。是の如きの三法有り。應に爲に羯磨を解すべからず。被擧者に三法有り。應に爲に羯磨を解すべし。見るべきを見、懺すべきを懺し、捨すべきを捨す。是三法有り。應に爲に羯磨を解すべし。被擧人に三法有り。應に爲に羯磨を解すべからず。見るべきを見ず、懺すべきを懺せず、信ずべきを信ぜず。是の如きの三法有り、應に爲に羯磨を解すべからず。被擧人に三法有り。應に爲に羯磨を解すべし。見るべきを見、懺すべきを懺し、信ずべきを信ず。是の如きの三法有り。應に爲に羯磨を解すべし。比丘に三法有り。應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。白衣の前に在つて佛法僧を毀呰す。是の如きの三法有り。應に與に遮不至白衣家羯磨を作すべし。比丘の與に遮不至白衣家羯磨を作す時、應に三法を以て量宜すべし。稱量比丘稱量白衣稱量事なり。三法有り。稱量比丘稱量白衣稱量羯磨なり。三法有り。稱量比丘稱量白衣稱量犯なり。復三法有り。實と實ならざると、作すと作さざると、與に遮不至白衣家羯磨を作すべきと與に遮不至白衣家羯磨を作すべからざると、是を與比丘三事量宜に遮不至白衣家羯磨を作すと爲す。復三法有り。呵責羯磨を作せば、非法非毘尼羯磨は成ぜず處所を得ざるなり。何等か三なる。擧を作さず、憶念を作さず、自言を作さず、是を三と爲す。復三法有り。不犯と不可懺罪

を犯ずると、若は已に懺罪せるとなり。是を三と爲す。復三有り。擧を作さざる非法別衆なり。復三有り。憶念を作さず、非法別衆なり。復三有り、自言を作さざる非法別衆となり。復三有り。非法別衆を犯ぜざるなり。復三有り。不可懺罪を犯ずる非法別衆なり。復三有り。犯罪已懺非法別衆なり。是の如きの三法有り。呵責を作さば非法非毘尼羯磨は成ぜず處所を得ざるなり。三法有り、呵責を作さば如法如毘尼に羯磨成就し處所を得ん即ち上句に反ず。是に復頻文せず、故に出さざるのみ。三事有り。精を弄出し、僧伽婆尸沙を犯ず。若は憶念し、若は弄し、若は不淨を失す。是の如きの三事有つて僧伽婆尸沙を犯ず。復三事有り。若は憶念し、若は弄し、若は青色不淨を出さんと欲し、若は青不淨を失するは僧伽婆尸沙なり。若は憶念し、若は弄し、若は青不淨を出さんと欲し、乃ち黃不淨、若は赤、若は白、若は黑、若は酪漿色不淨を出さば僧伽婆尸沙なり。若は憶念し、若は弄し、乃至酪漿色不淨を出さんと欲して若し出さば僧伽婆尸沙なり。若は憶念し、若は弄し、酪漿色不淨を出さんと欲して乃ち青赤白黑不淨を出さば僧伽婆尸沙なり。是の如きの樂の爲の故にし、藥の爲の故にし、出さんと試みん爲の故にし、福德の爲の故にし、祀天の爲の故にし、善道の爲の故にし、施さん爲の故にし、種子の爲の故にし、憍恣の爲の故にし、試力の爲の故にし、顏色の爲の故にし、輕慢の爲の故にせば、一切僧伽婆尸沙なり。內色に於けるも亦是の如し。外色に於けるも亦是の如し。內外色に於けるも亦是の如し。若は水、若は風、若は虛空に於けるも亦是の如し。三種人犯有り。不癲狂不錯亂不痛惱なり。是を三種人犯と爲す。三種人不

犯有り。若は顚狂錯亂痛惱なり。是を三種人不犯と爲す。三種衆生有り。婬を行ぜば波羅夷を犯ず。人非人畜生なり。是を三種衆生の婬を行ぜば波羅夷なりと爲す。復三種有り。婦女と童女と二根となり。復三有り。婦女と童女と黃門となり。復三有り、婦女と童子と男子となり。復三有り、男子と二根と黃門となり。復三種婦女に於て婬を行ぜば波羅夷を犯ず。人婦女非人婦女畜生婦女なり。童女も亦是の如し。二根も亦是の如し。黃門も亦是の如し。男子も亦是の如し。人婦女の三處に婬を行ぜば波羅夷なり。大小便道口中なり、非人婦女畜生婦女人童女非人童女畜生童女人二根非人二根畜生二根も亦是の如し。三種作盜有り、波羅夷を犯ず。若は自取し、若は現前指示取し、若は使を遣して取る。復三有り。不作已有想取と不暫取と非親厚取となり。復三有り。若は他物、若は他物想、若は擧して本處を離るるなり。三種斷命波羅夷有り。若は人に人想を作し、若は身を以て、若は口を以て命を斷ず。是を三種斷命波羅夷と爲す。三種斷人命有り。波羅夷を犯ぜず。人に非人想を作し、若は身を以てし、若は口を以て命を斷ず。是を三種斷人命不犯波羅夷と爲す。三種自稱得上人法波羅夷有り。得せざるに得すと言ひ、入らざるに入ると言ひ、證せざるに證すと言ふ。是を三種と爲す。復三種有り、身犯、口犯、身口犯なり。是を三と爲す。此中に三犯に更に復四句の界名有り。一句に三種相を言ひ、二句に三種呪を言ひ、三句に二非處儀を言ひ、四句に三摂命を言ふ。復三有り。貪恚癡なり。是を三と爲す。復三有り。身欲口欲身口欲なり。是を三と爲す。復三有り。身恚口恚身口恚なり。是を三と爲す。復三有り。身癡口癡身口癡なり。是を三と爲す。復三有り。身欲害口欲害

身口欲害なり。是を三と爲す。恚癡も亦是の如し。三種人犯有り。一に僧、二に衆多人、三に一人なり。三種人懺悔有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人の應に懺悔を受くべき有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人の尼薩耆を犯ずる有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。尼薩耆を犯ぜば應に三種人の前に在つて捨すべし。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人の應に尼薩耆を受くべき有り、若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種默然有り。知つて默然する有り。知らずして默然する有り。癡にして默然たる有り。三種住有り。戒住見住羯磨住なり。復三有り、戒住見住威儀住なり。復三有り。戒住見住命住なり。復三種人諍有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人起諍有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人捨諍有り、若は僧、若は衆多人、若は一人なり。應に三種人の前に捨すべし。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人滅諍有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり、三種人の滅諍すべき有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人の滅諍を得る有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。比丘に三種止語有り。應語比丘は破戒破見破威儀なり。擧他比丘は應に三事を以てすべし。若は見、若は聞、若は疑なり。三種覆有り。破戒を覆ひ、破見を覆ひ、破威儀を覆ふ、三種發露有り。破戒破見破威儀なり。三種懺悔有り。破戒破見破威儀なり。三種放逸羯磨有り。破戒羯磨、破見羯磨、破威儀羯磨なり。三學有り。增戒學增心學增慧學なり。是を三學と爲す。復三學有り。威儀學淨行學波羅提木叉學なり。是を三學と爲す。爾時

衆多比丘有り。世尊の所に往いて頭面に足を禮し却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、『大德、是法の主を説いて學と言ふ。云何が學と爲すや。』佛、諸比丘に告げたまはく、『戒を學すが故に學と言ふ。』『云何が戒を學するや。』『增戒學增心學增慧學、是故に學と言ふ。彼增戒學增心學增慧學の時、調伏を得、貪欲瞋恚愚癡盡く、彼貪欲瞋癡盡くるを得已つて不善を造らず。諸惡に近かず、是故に學と言ふ。』佛説是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。爾時佛、諸比丘に問ひたまはく、『汝、云何が學する。云何が學と爲す。』諸比丘、佛に白して言さく、『大德、是法の根本なるを法の主と爲す。世尊の向に説きたまふ所の如くんば、我等受持するが故に學と言ふ。』復三學有り、增戒學增心學增慧學なり。此三學を學せば須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢果を得。是故に當に勤めて精進し此三學を學すべし。爾時阿難、波羅梨子城雞園中に在り。時に孔雀冠婆羅門有り。阿難の所に至り、問訊し已つて一面に在つて坐し、阿難に白して言さく、『沙門瞿曇は何が故に諸比丘の爲に增戒學增淨行學增波羅提木叉學を制せるや。』阿難答へて言はく、『爾る所以は貪欲瞋恚愚癡を調伏して盡さしめんが爲の故に、世尊は諸比丘の爲に制戒したまふ。』復問うて言はく、『若し比丘阿羅漢漏盡を得ば、彼何の學する所ある。』阿難答へて言はく、『貪欲瞋恚愚癡盡くれば不善を造らず、諸惡に近かず、所作已に辦ぜるを名けて無學と爲す。』婆羅門の言はく、『向の所説の如くんば便ち無學と爲すや。』阿難答へて言はく、『是の如し。』阿難の説くこと是の如ければ孔雀冠婆羅門聞き已り、歡喜信樂し受持せり。爾時世尊、摩竭國崩

伽彌村中に在したまひ、諸比丘の爲に無數の方便もて戒法を說きたまふ。時に舊住比丘有り。迦葉姓中に於て出家す。此比丘、世尊の說法を聞いて信樂を生ぜず、愁憂して樂しまず。『世尊は數我等を恐れしむ』と。是に於て世尊、王舍城に移往したまふ。去ること未だ久しからずして彼迦葉比丘、心に自ら悔恨すらく、『我に利無く、善を得ず、世尊は諸比丘の爲に無數の方便もて說戒したまひしに、而も我信樂を生ぜず、愁憂して樂まずして言はく、世尊は數我等を恐れしむ。我今寧ろ世尊の前に於て至誠に悔過すべきや。』時に彼比丘、卽ち衣鉢を持し王舍城に往き、世尊の所に至つて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、此因緣を以て具に世尊に白し、坐より起つて頭面に足を禮し、至誠に悔過して言はく、『大德、我愚癡無智不善なり。而に世尊は諸比丘の爲に無數の方便もて戒法を說きたまひしも、而も我不信樂を生じ心に憂惱を懷いて言はく、世尊は數我等を恐れしむと。唯願くば大德、我悔過を受けたまへ。』佛、比丘に告げて言はく、『汝自ら愚癡無智不善なるを懺悔す、我諸比丘の爲に說戒せしに、汝は自ら信樂せず、心に憂惱を懷いて言はく、世尊は數我等を恐れしむと。我法中に於て能く至誠に如法に懺悔せば便ち增益を得ん。汝懺悔して應に厭離心を生ずべし。汝比丘、至誠に如法に懺悔せよ。我爲に之を受けん。』時に彼迦葉比丘、佛の足を禮し已り却つて一面に坐す。佛、告げて言はく、『若し上座既に戒を學せず、亦戒を讚歎せざれば、若し餘比丘の學戒を樂しみ、戒を讚歎する者有らんも、亦復時を以て勸勉讚歎すること能はざらん。迦葉比丘、我是の如きの上座を讚歎せず。何を以ての故に。

若し我讚歎せば諸比丘をして親近せしめん。若し新近する者有らば餘人をして其法を習學せしめん。若し其法を習學する有らば長夜に苦を受けん。是故に迦葉比丘、我是の如きの上座の過失を見るが故に讚歎せず。若し中下座も亦是の如し。此上中下座は是れ不如法の者なり。其次に應に上中下座の如法なる者有るべし。上句に反す。是復頓文ならずや。故に出さざるなり。即ち佛說是の如し。迦葉比丘歡喜信樂し受持せり。爾時、佛、諸比丘に告げたまはく、『譬へば驢有り、群牛と共に行くが如し。自ら言はく、我も亦是れ牛、我も亦是れ牛と。而も驢毛は牛脚に似ず、牛音聲に似ず、亦牛に似ず。而も牛と共に行き、自ら言はく、是れ牛と。是の如きの癡人有り。如法比丘に隨逐して自ら言はく、我は是れ比丘なりと。此癡人は增戒增心增慧有ること無きに善比丘の如く衆僧と共に行き、自ら言はく、我は是れ比丘なりと。是故に汝等、當に勤めて增戒增心增慧を修習すべし。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。爾時世尊、毘舍離に在したまふ。跋闍子比丘有り、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、『半月所說の戒は多し。我是の如きの多戒を學すこと能はず。』佛、告げて言はく、『汝に三戒を學するを聽す。增戒增心增慧學なり。若し汝、是の如く三戒を學せば便ち貪欲瞋癡盡くる處に至ることを得、不善を造らず、諸惡に近かず。』比丘、言はく、『大德、願樂受持せん。』時に拔闍子比丘、世尊の略教を聞き已つて獨り靜處に在り。精勤して放逸ならず、初夜にも後夜にも繫意思惟し、所爲出家せば修習すること久しからざるに、無上淨行現前することを得、我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、復受生せず、跋闍子

比丘は自ら阿羅漢を得たりと知れり。佛說是の如し、諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。

爾時佛、諸比丘に告げたまはく、「三學有り、增戒學增心學增慧學なり。何等か增戒學なる、若し比丘、戒を尊重し、戒を以て主と爲し、定を重んぜず、定を以て主と爲さず、慧を重んぜず、慧を以て主と爲さず。彼此戒に於て若し輕をも犯せば懺悔せよ。何を以ての故に。此中破器破石の如きに非ざるが故に、若し是れ戒を重んぜば便ち應に堅持すべし。善く戒に住して應親近行、不毀闕行、不染汚行なれ。常に是の如く修習せば、彼下五使を斷じ、上涅槃に於て復此に還らず。若し比丘、戒を重んじ、戒を以て主と爲し、定を重んじ、定を以て主と爲し、慧を重んぜず慧を以て主と爲さざるも上の如し。若し比丘、戒を重んじ、戒を以て主と爲し、定を重んじ、定を以て主と爲し、慧を重んじ、慧を以て主と爲さば、彼漏盡き、無漏心解脫慧解脫を得、現在前に於て自ら得證を知り、我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて復此に還らず。滿足行者は具滿成就し、不滿足行者は不滿足成就を得ん。我此戒を說くに唐捐行ること無し。」佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。復三學有り、增戒增心增慧學なり。何等か增戒學なる。若し比丘有り。戒行を具滿し、少しく定行を行じ、少しく慧行を行ぜば、彼下五使を斷じ、便ち上涅槃に於て復此に還らず。若し是の如き處に至ること能はざるも、能く三結の貪欲瞋恚愚癡を薄くし、斯陀含を得、世間に來生し便ち苦際を盡くす。若し是の如き處に至ること能はざるも能く三結を斷じ、須陀洹を得て、惡趣に墮せず、決定して道を取り、七た

びて天上に生じ、七たび人中に生じて便ち苦際を盡くす。若し比丘、戒行を具滿し、定行を具滿し、少しく慧行を行ずるも亦上の如し。若し比丘、戒行を具滿し、定行を具滿し、慧行を具滿するも亦上の如し。復三學有り、增戒學增心學增慧學なり。何等か增戒學なる。若し比丘、波羅提木叉戒を持し威儀を成就し、輕戒を畏愼し、重きこと金剛の若し、等しく諸戒を學す。是を增戒學と爲す。何等か增心學なる。若し比丘、能く欲惡を捨し、乃至第四禪に入ることを得ば、是を增心學と爲す。何等か增慧學なる。若し比丘、如實に苦諦を知り、集盡道を知る、是を增慧學と爲す。復三學有り。增戒增心增慧學なり。增戒增心は上の如し。增慧學とは若し比丘、內に貪欲有るは如實に之を知り、內に貪欲無きは如實に之を知り、若は未生の貪欲は如實に之を知り、若は未生の貪欲の後生するは如實に之を知り、若は已生の貪欲の能斷せるは如實に之を知り、若は未生の貪欲を生ぜざらしむるは如實に之を知る。瞋恚睡眠調悔疑も亦是の如し。彼比比是念を作さく、我眼色に於て貪欲瞋恚有るは如實に之を知り、貪欲瞋恚無きは如實に之を知り、眼色に於て未生の貪欲瞋恚の不生なるは如實に之を知り、眼色に於て未生の貪欲瞋恚の而も生ずるは如實に之を知るが如く、眼色に於て已生の貪欲瞋恚の斷滅は如實に之を知るが如く、眼色に於て已に斷ぜる貪欲瞋恚の後に復生ぜざるは如實に之を知るが如く、耳鼻舌身意も亦是の如し。復次に比比、內に念覺意有るは如實に之を知り、內に念覺意無きは如實に之を知り、未生念覺意の不生は如實に之を知るが如く、未生念覺意の而も生ずるは如實に之を知るが如く、已生の

念覺意の修習滿足は如實に之を知るが如く、是の如く法覺意精進覺意猗覺意定覺意喜覺意護覺意も亦是の如し。復三聚有り。持戒聚定聚慧聚なり。毘尼に三答有り。我是の如く見、是の如く聞き、是の如く忍ぶ。比丘に三法滅正法有り。非制に制し、是制を便ち斷じ、所制に隨はずして行ず。比丘に復三法有り、正法を滅せず。即ち上句に反する是なり。三處有つて妄語を具滿す。前に妄語を作さんと欲するを知り、妄語の時是れ妄語なるを知り、妄語竟に妄語を作すと知る、復三種有り。實語を具足す。即ち下句に反する是なり。三種使有り。一使二增使三に滅使なり。云何が使と爲す。若し使、能く教を受けて增せず滅せず、所聞に隨つて說かば是を使と爲す、云何が增使なる。若し使、教を受けて增益過說せば是を增使と爲す。云何が滅使なる。若し使、教を受けて具足して說かずんば、是を滅使と爲す。復三子有り。等子と增子と不等子となり。云何が等子なる。若し父母に信戒施慧有り。子も亦信戒施慧有らば、是を等子と爲す。云何が增子なる。若し父母に信戒施慧有ること無きに而も子に信戒施慧有り。是を增子と爲す。云何が不等子なる。若し父母に信戒施有らんも而も子に信戒施無し。是を不等子と爲す。而も偈を說いて言はく、

等子と及び增子と、應に是の如きの子を求むべし
不等子を求むること勿れ、在家は增益無し
彼子常に如法なれば、善行の優婆塞なり
持信戒を成就し、布施して慳嫉ならざれば、月の雲翳無きが如く、在衆も亦是の如く

なれ。

復三病有り。或は病有り、若は隨意食を得、若は得ず、若は隨病藥を得、若は得ず、若は隨意好瞻病人を得、若は得ざれば病人倶に死し、病より差ゆること能はず。或は病人有り、是の如し。或は病人有り、若は隨意食を得、若は得ず、若は隨病藥を得、若は得ず、若は隨意好瞻病人を得、若は得ざれば此病人は死せず。病より差ゆることを得、或は病人有り、是の如し。或は病人有り、隨意食を得ず、隨意病藥を得ず、隨意好瞻病人を得ざれば此病人は死し、病より差ゆること能はず。若し隨意食を得、隨意病藥を得、好瞻病人を得ば彼病者は死せず、病より差ゆることを得。或は病人有り、是の如し。是中病人の隨意食を得ず、隨病藥を得ず、隨意好瞻病人を得ざれば此病人死し、病より差ゆることを得ること能はず。若し隨意食を得、隨病藥を得、隨意好瞻病人を得ば、此病人は死せず、病より差ゆることを得。我是が爲の故に病者に隨意食隨病藥好瞻病人を與ふることを聽す。此病因緣を以ての故に餘の病人も亦應に瞻視供養を與ふべし。三種の癡有り。一に犯罪、二に不見罪、三に見罪を如法に懺悔せず。是を三種の癡と爲す。三種の智慧有り。一に不犯罪、二に犯罪能見、三に見罪能懺悔なり。三種の癡有り。一に犯罪不見、二に見犯罪不懺悔、三に不如法懺悔なり。彼三種の智慧有るを受けず。（即ち上句に反する是なり。）三種の安居有り。前安居中安居後安居なり。聖法律の中に於て歌戲すること猶し哭するが如く、舞ふこと狂者の如く、戲笑すること小兒に似たり。三種不淨肉有り。應に食すべからず。若は見聞疑し

己の爲に作す。三種淨肉有り、應に食すべし。見聞疑せず、己の爲に作さず。三種布薩有り。十四日、十五日、月の初日なり。三種人布薩有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人の布薩を作す有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。三種人の應に布薩を作すべき有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。或は知つて作し、或は知らずして作し、或は見て作す。或は知つて作し、或は知らずして作し、或は癡にして作す。或は身に或は口に或は身口に俱に三種有り。應に犯罪を平斷すべし。一に戒序、二に制、三に重制なり。三法有り。平斷不犯なり。戒序に制に重制なり。三種淨有り、三種不淨有り、三種の聽有り、三種の不聽有るも亦是の如し。三種不恭敬有り、佛法僧なり。後三種不恭敬有り。佛法戒なり。三不恭敬有り。佛法定なり。復三不恭敬有り、佛法父母なり。三不恭敬有り。佛法善法なり。恭敬に三有り。三句なり。即ち上句に反する是なり。復三種學有り、一に不見、二に不懺悔、三に惡見不捨なり。三法有り。僧應に覆鉢を作すべし。比丘の前に在つて佛法僧を謗毀するなり。復三念有り。佛念法念僧念なり。復三念有り。佛念法念戒念なり。復三念有り。佛念法念施念なり。復三念有り。佛念法念天念なり。復三成就有り。持戒成就定成就解脫成就なり。復三有り。戒成就定成就見解脫慧成就なり。復三賤法有り。刀賤衣賤色賤なり。復三懷色有り。青黑木蘭なり。復三法有り。持律と名く、波羅提木叉戒を持し、多聞を具足し二部戒を誦し、通利無礙なり。復三有り。波羅提木叉を持し、多聞を具足し、廣く毘尼を誦して通利無礙なり。復三有り。波羅提木叉戒を持し、多聞を具

【二】次に四種法について。

足し、毘尼中に住して動ぜず。復三有り。波羅提木叉戒を持し多聞を具足し、善巧方便もて能く諍事を滅す。復三辯有り、比丘辯不放逸辯請淨行辯なり。復三種自恣有り。十四日十五日月の初日なり。復三種人の自恣有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。復三種の自恣を作す有り。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。復三種人有り、應に自恣を作すべし。若は僧、若は衆多人、若は一人なり。復三種有り。若は知、若は不知、若は見なり。復三種有り。若は知、若は不知、若は癡なり。復三種有り。若は身、若は口、若は身口俱なり。復三種有り。若は見聞疑なり、復三語捨戒有り。佛を捨し、法を捨し、僧を捨するなり。是の如きの三三を句と爲す、乃至沙門釋子に非ず。復三種義有るが故に、如來は出世して諸比丘の爲に制戒したまひ、僧を攝取するより三三を句と爲し、乃至正法久住す。三種の義有るが故に如來は出世し諸比丘の爲に呵責羯磨を制したまふ、僧を攝取するより三三を句と爲し、乃至正法久住も亦是の如し。呵責より乃至七滅諍も亦是の如し。

〔二〕爾時世尊、婆闍國地城中に在して諸比丘に告げたまはく、『我四種の廣說を說かん。汝等善く聽け。當に汝が爲に說くべし。』諸比丘、言はく、『大德、願くば之を樂聞せん。何等か四なる。』『若し比丘是の如く語らんに、諸長老、我某村某城に於て親しく佛より聞いて受持せり。此は是れ法、是れ毘尼、是れ佛教なりと。若し彼比丘の說を聞くも、便ち嫌疑を生ずべからず。亦呵すべからず。應に文句を審定すべし。已らば應に修多羅毘尼を尋究し法律を檢校すべし。若し彼比丘の說を聽いて修多羅毘尼を尋究し、法律を檢校する

時、若し修多羅毘尼と相應せず、法に違背せば應に彼比丘に語るべし。「汝が所說は佛の所說に非ず、或は是れ長老が審に佛語を得ざるならん。何を以ての故に。我修多羅毘尼法律を尋究するに、修多羅毘尼法律と相應せず。法に違背せり。長老、復誦習することを須ひざれ。亦餘比丘を教ふること莫れ。今應に捨棄すべし」と。若し彼比丘の說を聞いて修多羅毘尼法律と尋究する時、若し修多羅毘尼法律と相應せば、應に彼比丘に語つて言ふべし。「長老が所說は是れ佛の所說なり。審に佛語を得たり。何を以ての故に。我修多羅毘尼法律を尋究するに、與共に相應して違背せず。長老、應に善く持つて誦習し餘比丘に教ふべし。忘失せしむること勿れ」と。此は是れ初廣說なり。復次に若し比丘是の如く語らんに、「長老、我某村某城和合僧中上座前に於て聞けり。此は是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教なり」と。彼比丘の說を聞く時、應に嫌疑すべからず。亦應に呵すべからず。應に文句を審定し修多羅毘尼を尋究し法律を檢校すべし。若し彼比丘の說を聞いて修多羅毘尼法律を尋究する時、與に相應せず、法に違背せば、應に彼比丘に語つて言ふべし。「長老、此は佛の所說に非ず。是れ彼衆僧及び上座の審に佛語を得ざりしならん。長老も亦爾り。何を以ての故に。我修多羅毘尼法律を尋究するに與に相應せず、法に違背せり、長老、復誦習することを須ひざれ。亦餘比丘に教ふること莫れ。今當に之を棄つべし」と。若し彼比丘の語を聞いて修多羅毘尼法律を尋究せんに、與に相應して法に違背せざれば、應に彼比丘に語つて言ふべし。「長老、是は佛の所說なり。彼衆僧上座及び長老も亦審に佛語を

得たり。何を以ての故に。我修多羅毘尼法律を尋究せるに而も與に相應して違背有ること無し。長老、應に善く持つて誦習すべし。亦餘人に教へて忘失せしむること勿れ。此は是れ第一の廣說なり。次の第三句は知法毘尼摩夷衆多比丘所聞よりなり、亦是の如し。第四句は知法毘尼摩夷一比丘所聞よりなり。亦是の如し。是を四廣說と爲す。」佛說是の如し。諸比丘聞いて信樂歡喜し、受持せり、爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『衆僧に四種の斷事人有り。何等か四なる。或は寡聞無慚なる有り、或は多聞無慚なる有り、或は寡聞有慚なる有り、或は多聞有慚なる有り。是中斷事比丘の寡聞無慚なる者は僧中に在つて言說斷事す。僧は應に種種苦切呵責して無慚者をして後更に爾らざらしむべし。若し彼斷事人の多聞無慚なる者は僧中に在つて言說斷事す。僧は應に種種に苦切呵責し、彼無慚者をして後更に爾らざらしむべし。是中斷事比丘の有慚寡聞者は僧中に在つて言說斷事す、僧は應に苦切呵責すべからず。應に佐助開示して彼有慚者をして後僧中に於て言說斷事せしむべし。是中斷事比丘の有慚聞者は僧中に在つて言說斷事す、僧は應に呵責すべからず。彼說を聽き已らば應に共善哉を讚じ、有慚者をして後僧中に於て言說斷事せしむべし。復四斷事比丘有り。或は無慚にして經文を誦せず、或は無慚にして經文を誦す、或は有慚にして經文を誦せず、或は有慚にして經文を誦す。無慚にして經文を誦せざる者に三失有り。彼無慚失可呵失不誦經文失なり。是を斷事人の三失と爲す。無慚にして經文を誦する者に二失有り。無慚失に可呵失なり。彼經文を誦すれば失せず。是を斷事比丘の二失と爲す。有慚にして經文を誦せざる者に一失有り。彼不誦經文の失なり。彼有慚不失

なれば可呵不失無し。是を斷事比丘の一失と爲す。有慚にして經文を誦する者には失無し。彼有慚不失なれば可呵不失有ること無し、經文を誦するも亦失無し。是を斷事比丘の第一最勝無失と爲す。破戒の四句も亦是の如し。破見の四句も亦是の如し。破正命の四句も亦是の如し。破威儀の四句も亦是の如し。（此中特連に三比丘有り、分物を四分す。房舍提度中の如し。法異らざるが故に出さざるなり。）爾時佛、王舍城に在したまふ。時に優波離坐より起つて偏に右肩を露し、右膝を地に著け合掌して佛に白して言さく、『大德、說いて破僧といふも、幾の名を齊りてか破僧と爲す。誰か我合僧を破するや。』佛、優波離に告げたまはく、『若し比丘有つて犯せるに彼不犯なりと言ひ、若し不犯なるに彼犯ずと言ひ、輕きに重しと言ひ、重きに輕しと言ふ。若し比丘、此四事に於て便ち伴を求索し、若は人をして求めしめ、界內に於て別部の布薩羯磨說戒する、是を齊りて名けて破僧と爲し、是を破和合僧と爲す。』優波離復問はく、『云何が和合僧なる。僧破し已らば誰か和合と爲す。』佛、優波離に告げたまはく、『若し比丘有つて犯ぜるを彼犯せりと言ひ、若し犯せざれば彼犯せずと言ひ、輕きを輕しと言ひ、重きを重しと言ふ。彼比丘、此四事に於て伴を求めず、人をして求めしめず。別部の羯磨布薩說戒をせず、是を齊りて和合僧と爲し、是を僧破已還和合と爲す。』爾時、世尊、舍衞國に在したまふ。時に舍衞比丘共に鬪諍す。阿尼樓陀に弟子有り、婆夷と字す。獨り僧中に於て語り、獨り諍事に當る。時に阿尼樓陀衆に在つて一語教呵を說かず。爾時阿難、世尊の所に往いて頭面に足を禮し、一面に在つて住す。世尊知りたまふも而も故に阿難に問ひたまはく、

『諍事』に滅せしや未だしや。』阿難答へて言はく、『諍事何んが滅することを得可き。阿尼樓陀の弟子、僧中に在つて獨語して獨り諍事に當る。而も阿尼樓陀僧中に在つて曾て一語を以て呵責せず。』佛、阿難に告げたまはく、『阿尼樓陀、何時か能く此諍事を滅せんや。豈、汝、舍利弗目連が事に非ざらんや。』爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『惡比丘に四法有り、僧破を見て歡喜す。何等か四なる。是惡比丘破戒惡法なり。彼惡比丘是念を作さく、我破戒惡法なり。若し餘比丘の我を知ることを得ば、和合して我爲に滅擯を作し、餘比丘有つて我爲に伴と作らんと。惡比丘に是初法有り。僧破を見て歡喜す。復次に惡比丘邪命自活し、是念を作して言はく、「我邪命自活し餘比丘をして我を知らしむ、和合僧は我爲に滅擯を作し。餘比丘有つて我爲に伴と爲らんと。是を惡比丘の第二に僧破を見て歡喜すと爲す。復次に惡比丘は多く利養恭敬を求め是念を作さく、「我利養恭敬を求め餘比丘をして我を知らしむ、和合僧我爲に滅擯を作すも餘比丘有つて我を助けて伴と爲る」と。是を惡比丘の第三に僧破を見て歡喜すと爲す。復次に惡比丘邪見邊見にして是念を作さく、「我邪見邊見にして餘比丘をして我を知らしむ。和合僧我爲に滅擯を作さんも餘比丘有つて我を助けて伴と爲す」と。是を惡比丘の第四に僧破を見て歡喜すと爲す。四種の作法有り。前に非法を作し後にも非法を作す、前に非法を作し後に法を作す、前に法を作し後に非法を作す、前に法を作し後にも法を作す。何等か前非法作後非法作なる。前非法起事を教呵すべきを教呵せずして住し、滅擯すべきを滅擯せずして住する、是を前非法作後非法作と爲す。

何等か前非法作後法作なる。若し非法作者有つて前非法起事せば、彼教訶すべくんば訶して後住し、滅擯すべきを滅擯して後住す。是を前非法作後法作と爲す。何等か前法作後非法作なる。若し比丘如法に起事せるに、教訶すべきを教訶せずして住し、滅擯すべきを滅擯せずして住す。是を前如法作後非法作と爲す。何等か前如法作後如法作なる。若し比丘前如法に起事せるに、教訶すべきを教訶し、滅擯すべきを滅擯して後住す。是を前如法作後如法作と爲す。四種の供養有り。一に飲食、二に醫藥、三に衣服、四に是所須者に與ふ。復四種利法有り。非法に求むるに非法に與へ、非法に求むるに法に與へ、法に求むるに非法に與へ、法に求むるに法に與ふ。云何が非法求非法與なる。或は比丘有り。周旋往反して沙門法を作さず、非法を說いて利養不淨を求む。彼、是の如きの不淨を作して利養を求め、偏に爲す所有り。是を取るも是を取ること莫し。爾許を取るも爾許を取ること莫し。是を取り來るも是を取り來ること莫し。爾許を持ち來るも爾許を持ち來ること無し。此に與ふるも彼に與ふること莫し。爾許に與ふるも爾許に與ふること莫し。彼に與ふべし、彼に與ふべからず。是を非法求利養非法與と爲す。云何が非法求法與なる。或は比丘有り。周旋往反して非沙門法を作し、非法を說いて利養を求めて清淨ならざるも、上の如き偏爲を作さず、是を非法求法與と爲す。云何が法求非法與なる。或は比丘有り。周旋往反して沙門法を說き非法を作さず、利養を求め清淨なるも、上の如きの偏爲を作す。是を法求非法與と爲す。云何が法求法與なる。或は比丘有り。周旋往反して沙門法を說いて非法

を作さず、利養を求めて淸淨に、上の如きの偏爲を作さず、是を法求法與と爲す。四法有り。他の爲に大戒を受くべからず。增戒增心增慧學を知らず、廣く二部戒を誦せず。是くの如きの四法有り、他の與に大戒を受くべからず。四法有り、應に他の爲に大戒を受くべし。即ち上句に反する是なり。四法有り、應に他の爲に大戒を受くべからず。增戒學を知らず、增心學を知らず、增慧學を知らず。廣く毘尼を誦せず。是の如き四法は應に他の爲に大戒を受くべからず。復四法有り。應に他の爲に大戒を受くべし。即ち上句に反する是なり。復四法有り。應に他の爲に大戒を受くべからず。增戒增心增慧學を知らず。毘尼を誦すと雖も決了すること能はず。是の如きの四法は應に他の爲に大戒を受くべからず。復四法有り、應に他の爲に大戒を受くべし。即ち上句に反する是なり。復四法有り。應に他の爲に大戒を受くべからず。二百五十戒を持たず、多聞ならず。若し弟子に惡見有らんも弟子を敎化して惡見を捨し善見を修習せしむること能はず。十歲を滿せずして是の如きの四法有らば、應に他の爲に大戒を受くべからず。復四法有り。應に他の爲に大戒を受くべし。即ち上句に反する是なり。四法有り。名けて持律と爲す。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知る。復四法有り。犯を知り、不犯を知り、有餘を知り、無餘を知る。復四法有り。犯を知り不犯を知り、麤惡を知り、不麤惡を知る。復四法有り。可懺罪を知り、不可懺罪を知り、懺悔淸淨を知り、懺悔不淸淨を知る。復四諍有り。言諍、覓諍、犯諍、事諍なり。四犯提有り。若し是の如きの男子の來る有らんに、髮を被り、黑衣を著し、刀を持て大衆の中に至つて是の如きの言を作さく、我極大重

惡闡頭罪を作せり。汝等が憙ふ所に隨つて我當に作すべしと。時に諸大衆、即ち提縛して惡聲の鼓を打つて死相を現ずることを爲し、順路唱令して右門より出で、殺處に至つて之を殺す。智人見已つて是の如きの語を作さく、此人惡極重死罪を造れり。我今當に自ら勅し並に餘人を教ふべし。是の如きの重惡死罪を作すこと莫れと。是の如く比丘比丘尼は波羅夷法に於て大恐畏を生じ、是の如きの念を作さく、若は未だ波羅夷を犯ぜず、終巳つて犯ぜず、若は犯ずるも都て覆藏心無く如法に懺悔せんと、此は是れ第一の犯畏なり。是の如きの男子有り。髮を被り黑衣を著け、合鞘刀を持つて大衆の中に至つて言はく、我惡不善を作せり。衆人の憙ぶ所に隨つて我當に作すべしと。時に彼衆人、即ち刀を奪取して之を打ち、驅つて右門より出でしむ。智人有つて見、是の如きの言を作さく、此人は惡罪を作せり。我今當に自ら勅し並に人に教ふべし。是の如きの惡罪を作すこと莫れと。是の如くんば比丘比丘尼の僧殘法に於て大恐畏を生じ、是の如きの念を作さく、若は未だ僧殘を犯ぜず、終に犯せず、若し犯ずるも尋いで即ち懺悔せんと。此は是れ第二の犯畏なり。是の如きの男子有り。髮を被り黑衣を著け、杖を持つて大衆の中に至つて語つて言はく「我惡不善を作せり。衆人の憙ぶ所に隨つて我當に作すべし」と。衆人即ち其杖を取つて之を打ち、驅けて右門より出でしむ。智人有り、見て是の如きの言を作さく「此人は惡罪を作せり。我今自ら勅し並に人に教へん。是の如きの惡を作さざれ」と。是の如きの比丘比丘尼は波逸提に於て大恐畏を生じ、未だ犯ぜざれば終に犯ぜず、若し犯ずるも尋いで即ち懺悔

せん。此は是れ第三の犯畏なり。是の如きの男子有り。髮を被り黑衣を著け、衆人の所に至り合掌して是の如きの言を作さく「我惡不善を作せり。衆人の憙ぶ所に隨つて我當に之を作すべし」と。時に衆人種種に呵責して驅つて右門より出しむ。智人有り、見て是の如きの言を作さく「此人は是の如きの惡を作せり、我今當に自ら勅し、並に人に教ふべし。是の如きの惡を作さざれ」と。是の如くんば比丘比丘尼の波羅提提舍尼に於て恐畏を生じ、若し未だ犯せざれば終に犯せず、若し犯ずるも尋いで即ち懺悔せん、此は是れ第四の犯畏なり。四種の犯人有り。若し比丘犯罪せんに、餘比丘の語つて言はく「汝犯罪を見るや不や」と。彼言はく「見ず」と。比丘復語つて言はく「長老、若し罪を見ば當に懺悔すべし」と。此は是れ第一犯人なり。若し比丘犯罪せんに、餘比丘の語つて言はく「長老、汝犯罪を見るや不や」と。彼言はく「見ず」と。比丘復語つて言はく「若し罪を見ば當に僧中に懺悔すべし」と。此は是れ第二の犯人なり。若し比丘犯罪せんに、餘比丘、語つて言はく、「長老、犯罪を見るや不や」と、彼言はく「見ず」と。比丘復語つて言はく「若し長老罪を見ば、當に此僧中に於て懺悔すべし」と。此は是れ第三犯人なり。若し比丘犯罪せんに、餘比丘、語つて言はく「長老、汝犯罪を見るや不や」と。彼言はく「見ず」と。時に僧應に都て捨棄すべく、是の如きの言を語るらく「汝が意に隨つて所至の處に去れ、汝を擧せんと欲せば彼當に汝が爲に擧を作し、憶念を作し、自言を作し、汝が阿㝹婆陀を遮し、說戒を遮し、自恣を遮すべし。調馬師の惡馬の調し難きは、即ち轠杙驅棄すべきが如し。此比

丘も亦復是の如し。一切捨棄せよ」と。是を亦四犯人と爲す。爾時世尊、王舍城耆闍崛山に在したまふ。優波離、座より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、「大德、年少比丘の前に在つて懺悔せんに、内に幾の法有つてか應に懺悔すべきや。」佛、言はく、「内に四法有つて應に懺悔すべし。偏に右肩を露し、革屣を脱し、胡跪合掌して犯ずる所の名を説き、『我某甲罪を犯せり、今長老の前に於て懺悔せん』と。彼語言すべくんば、應に改悔し厭離心を生ずべくんば、答へて言はく、『爾り』と。上座の比丘は下座の比丘に於て是の如きの四法有り、應に懺悔すべし。四波羅提提舍尼有り、上說の如し。四波羅夷も上說の如し。四羯磨有り。非法別衆羯磨、非法和合衆羯磨、法別衆羯磨、法和合衆羯磨、是を四羯磨と爲す。是中非法別衆羯磨は應に爾るべからず、非法和合衆羯磨も應に爾るべからず、法別衆羯磨も應に爾るべからず。法和合羯磨は應に爾るべし。是れ我聽す所なり。非法別衆羯磨は羯磨を成ぜず、非法和合衆羯磨は羯磨を成ぜず、法別衆羯磨も羯磨を成ぜず。法和合羯磨のみ羯磨を成ず。非法別衆羯磨は處所を得ず、非法和合衆羯磨も處所を得ず、法別衆羯磨も處所を得ず。法和合羯磨のみ處所を得。四種の布薩有り。三語布薩、清淨布薩、說波羅提木叉布薩、自恣布薩なり。四妄語有り。波羅夷妄語、僧殘妄語、波逸提妄語、毘尼阿毘婆羅妄語なり。四衆有り。比丘衆、比丘尼衆、優婆塞衆、優婆夷衆なり。復四衆有り。刹利衆、婆羅門衆、居士衆、沙門衆なり。復四衆有り。四天王衆、忉利天衆、魔衆、梵衆なり。復四衆有り。愛恚怖癡衆なり。復四衆有り。不愛不恚不

怖不癡業なり。四種の智慧不斷事人有り。人有り、身に惡を現ぜずして口に現ず。人有り、口に惡を現ぜずして身に現ず。人有り、身口に惡を現ず。人有り、身口に惡を現ぜず。云何が身不現惡口現なる。或は人有り、身に惡を現ぜざるも口言もて指授して與共に同見なり。是を身不現惡口現と爲す。云何が口不現惡身現なる。人有り、身に惡を現ずるも口もて指授せず、與に同見ならず。是を口不現惡身現と爲す。云何が身不現惡口不現惡なる。人有り、身に惡を現ぜず、口もて指授せず、與に同見ならず。是を身口不現惡と爲す。云何が身口現惡なる。人有り、身に惡を現じ、口語もて指授し與に同見なり。是を身現惡口現惡と爲す。是を四種有智不斷事人と爲す。比丘に四法有り。自損して犯ずる有り、有智者の爲に責められ、多罪を得しむ。何等か四なる。有愛有恚有怖有癡なり。比丘に是四法有つて而も自ら損じ、有智者の爲に責められ多罪を得しむ。比丘に四法有り、自ら損ぜず上句に反する、是なり。四法有り、非道に趣く。有愛有恚有怖有癡なり。是を四と爲す。四法有り、非道に趣かず。即ち上句に反する、是なり。四法有り。差して分粥人を作すべからず、未だ差せざるには差しすべからず、若し已に差せば應に分つべからず。有愛有恚有怖有癡なり。四法有り、差して分粥人と作すべし。即ち上句に反する、是なり。小食を分ち、佉闍尼食を分ち、差會し、若は臥具を敷き、臥具を分つ、雨浴衣を分ち、分衣取與に比丘使を差し、乃至沙彌使を差すも亦是の如し。四法有り、直に地獄に入ること猶し射箭の如し。即ち上の諸知事を差する、是なり。四非法遮說戒有り。無根破戒破見破威儀破正命 を遮す。是を四と爲す。四如法遮說戒有り。有根破戒破見破

威儀破正命を違す。是を四如法遮説戒と爲す。四清淨有り。持戒清淨、見清淨、威儀清淨、正命清淨なり。是を四清淨と爲す。四依止法有り、糞掃衣乞食樹下坐腐爛藥なり。是を四依止法と爲す。四種損法有り。或は智有つて能く忍ぶ、或は智有つて能く親近す。或は智有つて能く解し、或は智有つて能く斷ず。是を四種損法と爲す。」

四分律卷第五十八

四分律　卷第五十九　第四分之十

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

毘尼增之三

【一】前卷に續いて四種法を明す。

(一)爾時世尊、波羅㮈に在したまふ。世尊知るも故に阿難に問ひたまはく、『我穀貴時に於て諸比丘を慈愍するが故に四事を放捨す。内宿内煮自煮自取食なり。今諸比丘故に食するや。』阿難、佛に白して言さく、『故に食す。』佛、阿難に言はく、『食すべからず。若し食せば如法に治せよ。』佛、阿難に告げたまはく、『我穀貴時なるを以て諸比丘を愍むが故に此法を聽す。朝に小食を受けんに、彼より持ち來れる若は胡桃菓等及び水中の可食物、是の如き等を故に食するや。』阿難答へて言はく、『爾り。』佛、言はく、『應に食すべからず、若し食せば如法に治せよ。四法有り。呵責羯磨を作す。法に非ず、毘尼に非ず、羯磨は成ぜず、處所を得ず。何等か四なる。無根、破戒、破見、破威儀、破正命なり。是を四法と爲す。四法有り、呵責羯磨を作せ。法の如く、毘尼の如く、羯磨成就し處所を得。(即ち上句に反する、是なり。)四大賊有り。何等か四なる。或は大賊有り、是の如きの意を生ずらく、若し百人千人を得ば、某甲城邑を破せんと。異時に於て、百人千人を得、彼城邑を破せり、是の如く惡比丘

も是念を作さく、我何處にか當に百人衆千人衆を得て、某甲城邑に於て遊行すべきと。彼異時に於て百人若は千人を得、彼城邑を遊行せり。是を第一の大賊と爲す。復次に大賊有り、淨行に非ざるに自ら是れ淨行と言ふ。是を第二の大賊と爲す。復次に大賊有り、口腹を以ての故に、眞實ならず、已が有に非ざるに大衆の中に於て故に妄語を作して自ら上人法を得たりと稱す。是を第三の大賊と爲す。復大賊有り、僧華果菜蔵を以て、以て自ら活命す。是を第四の大賊と爲す。四信法有り。若し比丘、城廓村落に於て、多く不淨行非沙門法を作すも、是中に隨順して居士を教授し信ぜしむべし。彼比丘、此比丘に語つて言はく、汝、某甲城邑村落に於て多く不淨行非沙門法を作せり。汝、當に還つて彼居士を教化して信ぜしむべし。若し汝、隨順して居士を教化して信ぜしむること能はずんば、汝は此に在つて住することを得ず。若し能く隨順して居士を教化せば汝が此に在つて住するを聽さん。若し復隨順して居士を教化して信ぜしむること能はずんば、諸比丘は汝と同じく羯磨し、説戲自恣共住同一坐せず。小食大食の上に於て次坐を以てせず、亦迎逆執手禮拜問訊すること無けん。若し汝、能く隨順して居士を教化し信ぜしむれば、當に汝と同じく羯磨し乃至禮拜問訊すべしと。是を四信法と爲す。若は居士、居士兒も亦是の如し。四非聖法有り。見ざるに見たりと言ひ、聞かざるに聞けりと言ひ、觸れざるに觸れたりと言ひ、知らざるに知ると言ふ。是を四非聖法と爲す。四聖法有り。（即ち上句に反する、是なり。）四非聖法有り。見しを見ずと言ひ、聞けるを聞かずと言ひ、觸れしを觸れずと言ひ、知れる

【二】下五種法について明す。

を知らずと言ふ。是を四非聖法と爲す。四聖法有り。即ち上句に反する、是なり。四語捨戒有り。佛を捨し、法を捨し、僧を捨し、和尚を捨す。是を四語捨戒と爲す。是の如く佛法僧を捨するを首と爲し、乃至沙門釋子に非ざる四四を句と爲すも亦是の如し。四利の義を以ての故に如來は出世したまひ、諸比丘の爲に制戒したまふ。僧を攝取し乃至正法久住す。四四を句と爲すも亦是の如し。四利の義有るが故に如來は出世し、諸比丘の爲に呵責羯磨を制したまふ。僧を攝取し乃至正法久住す。四四を句と爲すも亦是の如し。乃至七滅諍も亦是の如し。

(二)爾時世尊、王舍城に在したまひ、諸比丘に告げたまはく、一五法有り、應に人に大戒を授くべからず。若は戒無く、定無く、慧無く、解脱慧無く、見解脱慧無し。是五法有り、應に人に大戒を授くべからず。復五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。自ら戒無く、定無く、慧無く、解脱慧無く、見解脱慧無く、亦人をして戒定慧乃至見解脱慧に住せしむること能はず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。不信無慚無愧懈怠多忘なり。是の如きの五法有り、應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。増戒増心増慧學を知らず、白を知らず、羯磨を知らざるなり。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。威儀戒を知らず、増淨行を知らず。

波羅提木叉戒を知らず、白を知らず、羯磨を知らざるなり。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。犯を知らず。犯じ已つて懺悔することを知らず、犯じ已つて懺悔清淨なることを知らず、白を知らず、羯磨を知らざるなり。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず、五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。有難法を知らず、無難法を知らず、白を知らず、羯磨を知らず、十歳を滿ぜず、是五法有らば、應に人に大戒を授くべからず。五法有り、應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。人に增戒學增心學增慧學を教ふること能はず。瞻病人と作ること能はず、亦瞻病人に與ふること能はず、若は差し、若は乃至死す。若し十歳を滿ぜざるに是五法有らば、應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り、應に人に大戒を授くべからず、人に增戒學增心學增慧學を教ふること能はず、瞻病人と作ること能はず、亦瞻病人を與ふること能はず、若は差し若は乃至死し、若は十歳を滿ぜず、是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復、五法有り。應に人に大戒を授くべからず。弟子に增戒儀戒、增淨行、增波羅提木叉戒を教ふること能はず、若は弟子に惡見有らんも、方便もて教へて惡見を捨し、善見に住せしむること能はず、若は十歳を滿ぜず、是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授

くべし。(即ち上句に反する、是なり。)復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。犯を知らず、不犯を知らず、輕を知らず、重を知らず、廣く二部の毘尼を誦せず。是五法有り、應に人に大戒を授くべからず。五法有り、應に人に大戒を授くべし。(即ち上句に反する、是なり。)復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。具に波羅提木叉戒を持せず、多聞せず、弟子に毘尼阿毘曇を教ふること能はず。十歳を滿ぜず。是五法有り、應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。(即ち上句に反する、是なり。)復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。具に波羅提木叉戒を持せず。弟子に毘尼阿毘曇を教ふること能はず。若し弟子に惡見有らんも教へて惡見を捨し善見に住せしむること能はず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。(即ち上句に反する、是なり。)復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。弟子に毘尼阿毘曇を教ふること能はず。若し弟子に惡見有らんも教へて惡見を捨し善見に住せしむること能はず。若し弟子の所住處を樂しまざるも移して樂處に至らしむること能はず。若し弟子に疑悔心の生ずること有らんに、佛法の如くに開解すること能はず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。(即ち上句に反する、是なり。)復五法有り、應に人に大戒を授くべからず。弟子に毘尼阿毘曇を教ふること能はず。若し弟子に惡見有るも教へて惡見を捨し善見に住せしむること能はず、若し所住處を樂しまざるも移して樂處に至らしむること能はず。若は十歳を滿ぜず。是五法有り、應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。(即ち上句に反する、是なり。)復五法有り。應

に人に大戒を授くべからず。波羅提木叉戒を知らず。亦說くこと能はず。布薩を知らず、布薩羯磨を知らず。十歲を滿せず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り、應に人に大戒を授くべからず。善く犯を知らず。善く犯を懺悔することを知らず。善く入定せず。善く出定せず、十歲を滿ぜず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。犯を知らず、不犯を知らず、輕を知らず、重を知らず、十歲を滿せず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。具に波羅提木叉戒を持せず。多聞せず、弟子に增戒學を敎ふること能はず。瞻病すること能はず、瞻病人を與ふること能はず、若は差し乃至死し、廣く二部の毘尼を誦せず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべし。具に波羅提木叉戒を持せず。多聞せず。弟子に增戒學を敎ふること能はず。若は弟子の所住處を樂しまざるあるも移して樂處に至らしむることは能はず、堅く毘尼に住せず。是五法有り。應に人に大戒を授くべからず。五法有り。應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に人に大戒を授くべからず。具に二百五十戒を持せず。多聞せず。弟子に增戒學を敎ふること能はず。弟子に疑有るも佛法の如くに解釋すること能はず、諍事を決斷すること能はず。是五法有り。應に人に大戒

を授くべからず。五法有り、應に人に大戒を授くべし。即ち上句に反する、是なり。是の如きの增心學增慧學增威儀學增淨行學增波羅提木叉學なり。是の如きの五五を句と爲すこと上の如し。若し比丘調順無畏にして語言に堪能ならんに、自ら此事有り。亦能く弟子を教ふ。是の如きの人は應に人に大戒を授くべし。應に他に依止を與ふべし。應に沙彌を畜ふべし。教授比丘を授差すべし。若し已に差せば應に教授すべし。五種人有り。大戒を受くることを得ず。自ら邊罪を犯ず、比丘尼を犯ず、若は賊心もて戒を受け、內外道黃門を破すと言ふ。是五法有り。是人は應に大戒を授くべからず、復五種人有り。應に大戒を受くべからず。父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心もて佛身血を出す。是五法有り。應に大戒を受くべからず。五種の黃門有り。生黃門、形殘黃門、妬黃門、變黃門、半月黃門なり。是れ五種黃門と爲す。五種病人有り、應に大戒を受くべからず。癩若は癰疽白癩乾枯顚狂なり。是の如きの五種病人有り。應に大戒を受くべからず。五種清淨無難有り。應に大戒を受くべし。是丈夫は債を負はず、奴に非ず、年二十に滿ず、父母聽す。是の如きの五清淨無難は應に大戒を受くべし。五法有り。人に依止を與ふ。若は能と言ひ、若は可と言ひ、若は是と言ひ、若は善自修行と言ひ、若は不放逸と言ふ。是を五種に依止法を與ふと爲す。五種の與人依止法有り。若は善哉と言ひ、若は好と言ひ、若は起と言ひ、若は去と言ひ、若は與依止と言ふ。是を五種與依止と爲す。五法有り。應に依止無くして住すべからず。戒無く、定無く、慧無く、解脫慧無く、見解脫慧無し。是五法有り、應に無依止にして住すべからず。五法有

り。應に無依止にして住すべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。若は戒無く又自ら學戒を勤修すること能はず、定無く、慧無く、解脱慧無く、見解脱慧無く又自ら戒定慧解脱慧見解脱慧を勤修すること能はず。是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。應に無依止にして住すべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。具に二百五十戒を持せず、多聞せず、自ら毘尼阿毘曇を學すること能はず、若し惡見心生ずるも開解して善見を習ふこと能はず。是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。應に無依止にして住すべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。具に二百五十戒を持せず、多聞せず、毘尼阿毘曇を學すること能はず、五歲を滿ぜず、是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。應に無依止にして住すべし。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。自ら毘尼阿毘曇を學すること能はず、惡見生ずるも捨して善見に住すること能はず、若し所住處を樂しまざるあるも移して樂處に至らしむること能はず、疑悔心生ずること有るも如法に開解すること能はず。是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。無依止にして住することを得。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。自ら增戒增心增慧學を勤修すること能はず、病有るも自ら將養すること能はず、亦他をして己の爲に瞻病せしむること能はず。年五歲に滿ぜず。是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。無依止にして住することを得。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無

依止にして住すべからず。自ら威儀戒を勤修すること能はず、淨行を增し、波羅提木叉戒を增すること能はず、惡見有るも捨して善見に住すること能はず、年五歲に滿たず。是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。無依止にして住することを得。即ち上句に反する是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。諍を知らず、諍起を知らず、諍滅を知らず、向諍滅を知らず、年五歲に滿たず、是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。無依止にして住することを得。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。犯を知らず、懺悔を知らず、善人定を知らず、善出定を知らず、年五歲に滿たず。是五法有り、應に無依止にして住すべからず。五法有り。無依止にして住することを得。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。應に無依止にして住すべからず。犯を知らず、不犯を知らず、輕を知らず、重を知らず、廣く二部毘尼を誦せず。是五法有り。應に無依止にして住すべからず。五法有り。無依止にして住することを得。即ち上句に反する、是なり。復五法有り。依止を失す。若は驅出し、若は去り、若は休道し、若は休んで依止を與へず、若は戒場上に至る。是五法有り、依止を失す。復五法有り、依止を失す。若は死し、若は去り、若は休道し、若は休んで依止を與へず、若は五歲、若は過五歲なり。是五法有り、依止を失す。復五法有り、依止を失す。若は死し、若は去り、若は休道し、若は休んで依止を與へず、若は本和尚を見る。是五法有り、依止を失す。復五法有り、依止を失す。若は死し、若は去り、若は休道し、若は休んで依止を與へず、若は和尚阿闍梨命過す。是五法

有り、依止を失す。復五法有り、依止を失す。若は死し、若は去り、若は休道し、若は休んで依止を與へず。若は和尚阿闍梨休道す。是五法有つて依止を失す。復五法有り、依止を失す。若は死し、若は去り、若は休道し、若は休んで依止を與へず、若は還つて本和尚に隨ふ。是五法有り、依止を失す。五法有り、弟子を驅遣す。若し和尚、弟子に語つて言はく、今汝を驅して去らしむ。汝應に我房に入るべからず。汝應に復我を營勞すべからず。復我所に至ること莫れ、共に語らずと。是を和尚の五法もて弟子を驅遣すと爲す。阿闍梨に五法有り、弟子を驅遣す。語つて言はく、今汝を驅つて去らしむ。汝、復我房に入ること勿れ。應に復我を營勞すべからず。應に我に依止すべからず。共に語らずと。是を阿闍梨の五法もて弟子を遣ると爲す。弟子に五法有り、和尚阿闍梨の爲に驅遣せらる。無慚無愧、教呵すべからず、威儀に非ず、恭敬せず。弟子に是五法有り。和尚阿闍梨の爲に驅遣せらる。復五法有り、無慚無愧に教呵すべからず、惡知識に親しみ、數婬女家に往く、是五法有り、和尚阿闍梨の爲に遣らる。是の如く喜んで婦女家、大童女家、黄門家、若は比丘尼間、若は式叉摩那間、若は沙彌尼間、捕鳥獵人間に往く。是の如き等を上の四事に足して五五を句と爲すも婬女句の如し。五種與欲有り。一に言與欲、二に我の爲の故に欲を說き、三に身相に現じ、四に口語に、五に身相口語に現ず。是を五種與欲と爲す。五種失欲有り。若し受欲比丘の死し若は休道し若は外道に至り、若は別部僧中に往き、若は戒場上に至つて明相を出す。是五種有つて與欲を失す。五種與清淨與自恣有り。亦是の如し、若し失するも亦是の如し。如來出世し、諸比丘に過失有るを見たまふが故に五種の利義を以て臥具法を制護したまふ。

風飄雨漬日曝塵坌せしめず、垢汚せしめず、是を五と爲す。和尚に五非法有り。弟子懺悔して去るべく、應に和尚に語つて言ふべし。我如法を和尚は知らず、我不如法も亦知らず、若し我犯戒せんも捨して教呵せず、若し犯ずるも亦知らず、若し犯じて懺悔するも亦知らず。和尚に是の如きの五法有り、弟子應に懺悔して去るべし。毘尼に五事答有り。一に序、二に制、三に重制、四に修多羅、五に隨順修多羅なり、是を五と爲す。五法有り。名けて持律と爲す。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、廣く二部戒を誦す、是を五と爲す。復五法有り。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、廣く毘尼を誦す、是を五と爲す。復五法有り。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、毘尼に住して動ぜず、是を五と爲す。復五法有り。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、諍事起を善能く除滅す、是を五と爲す。五種持律有り。戒序四事十三事二不定を誦し、廣く三十事を誦す。是れ初持律なり。若は戒序四事十三事二不定三十事を誦し、廣く九十事を誦す、是れ第二持律なり。若は廣く戒毘尼を誦す、是れ第三の持律なり。若は廣く二部戒毘尼を誦す、是を第四持律と爲す。若は都て毘尼を誦す、是れ第五持律なり。是中春秋冬は應に上四種に依つて持律すべし。若し依住せざれば突吉羅なり。夏安居は應に第五に依つて持律すべし。若し依住せずんば波逸提なり。持律人に五功德有り。戒品堅牢にして善く諸冤に勝れ、衆中に於て決斷して畏無し。若し疑悔有るも能く開解し、善く毘尼を持ち、正法をして久住せしむ、是を五と爲す。五種賊心有り。黑闇心邪心曲戾心不善心常に他物を盜

むの心有り、是を五と爲す。復五種賊有り。決定取恐怯取寄物取見便取倚託取なり、是を五と爲す。復五種有り。罪人と同業に、若は人を教授して賊と作らしめ、若は復賊の爲に先に看て財物處所を知り、還つて處を示し、若は賊の爲に物を守り、若し賊の爲に邏道す、是を五と爲す。復五種犯有り。波羅夷僧伽婆尸沙波逸提波羅提提舍尼突吉羅なり、是を五と爲す。亦五種制戒と名く。亦五犯聚と名く。若は五犯を知らず、見ざる者は我此人を愚癡と說く。波羅夷僧伽婆尸沙波逸提波羅提提舍尼突吉羅、是を五種犯、五種制戒と爲すも亦是の如し。五犯聚も亦是の如し。若し五犯の波羅夷僧伽婆尸沙波逸提波羅提提舍尼突吉羅を知らず、見ざる者は、僧應に與に呵責羯磨を作すべし。五種制戒も亦是の如し。五犯聚も亦是の如し。復五種犯有り。或は犯有り、自心に念じて懺悔す。或は犯有り、小罪なるも他に從つて懺悔す。或は犯有り、中罪なるも亦他に從つて懺悔す。或は犯有り。重罪なるも他に從つて懺悔す。或は罪有り、懺悔すべからず。五法有り。僧は應に與に呵責羯磨を作すべし。破戒破見破威儀若は佛及び法を毀つ、是を五と爲す。復五法有り。破戒破見破威儀佛及び僧を毀つ、是を五法と爲す。應に與に呵責羯磨を作すべし。是の如く擯羯磨遮不至白衣家羯磨若は擧羯磨も亦是の如し。五法有り。呵責羯磨を作すも法に非ず、毘尼に非ず、羯磨を成ぜず、處所を得ず。何等か五なる。擧を作さず、憶念を作さず、自言を作さず、非法別衆、是を五と爲す。復五法有り。若は不犯、不可懺を犯じ、若は犯じ已つて懺し、非法別衆、是を五法と爲す。羯磨は成ぜず、處所を得ず。復五如法有り。羯磨

成就し、處所を得。（即ち上句に反する、是なり。）被呵責羯磨人は五事有り、應に作すべからず。（呵責犍度中に說くが如し。）被擧人に五法有り。應に爲に解すべからず。若は比丘を罵謗し、方便もて比丘の爲に損減無利を作し、無住處を作る、若は界內界外に在つて善比丘の禮拜供養を受け、無比丘處に在つて住す。是五法有り。解擧羯磨を作すべからず。復五法有り。應に解擧羯磨を作すべし。（即ち上句に反する、是なり。）若し比丘不見罪擧羯磨を被らば、應に五事を以て自ら觀察すべし。若し我罪を見ざれば、比丘は我と共に羯磨說戒自恣同一房宿せず、共に同一に小食大食上に坐せず、大小の次第に隨はず、執手禮拜恭敬訊問せず。是を不見罪擧羯磨を被る者は此五事を以て自ら觀察すと爲す。不懺悔羯磨惡見不捨擧羯磨を被る。（亦是の如し。）他の爲に不見罪擧羯磨を作す者は、亦應に此五事を以て自ら觀察すべし、不懺悔不捨惡見擧羯磨、（亦是の如し。）比丘に五法有り。僧應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべからず。父母に孝ならず、沙門婆羅門を恭せず、善く受語せず、是五法有り。應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべからず。五法有り。應に爲に遮不至白衣家羯磨を作すべし。（即ち上句に反する、是なり。）復五法有り。應に與に遮不至白衣家羯磨を作すべし。喜んで白衣を罵謗し、方便もて白衣家の爲に損減を作し、利益無く、無住處と作り、白衣と鬪亂す、是を五法と爲す。復五法有り。白衣の前に在つて佛法僧を毀ち、白衣を罵り、下業を作し、若は白衣を調誑す、是を五法と爲す。比丘に五法有り、白衣をして信ぜざらしむ。（上の鬪亂白衣の句の如し。）比丘も復五法有り。白衣をして信ぜざらしむ。（上の調誑白衣の句の如し。）白衣に五法有り。僧は應に與に覆鉢を作すべからず。若は父母に孝ならず、

沙門婆羅門を敬せず、比丘に事へず、是を五と爲す。白衣に五法有り、僧は應に與に覆鉢を作すべし。即ち上句に反する、是なり。五法有り。僧は應に覆鉢を作すべし。比丘を罵謗し、比丘の爲に損減を作し、無利益を作し、無住處を作し、比丘を鬪亂せしむ、是を五と爲す。復五法有り。比丘の前に於て佛法僧を毀ち、無根の不淨行を以て比丘を謗り、比丘尼を犯ず、是を五と爲す。五事有り。毀呰せば波逸提罪を得。義を以てせざるが故に。法を以てせざるが故に。毘尼を以てせざるが故に。教授を以てせざるが故に。親を以てせざるが故なり。是五事有つて毀呰せば波逸提を得。復毀呰するも波逸提を得ざる有り。即ち上句に反す。若し比丘僧、差すに五事を以てせず、未受大戒人に向つて他犯を說かば波逸提を得。若は名字を、若は種姓を、若は相を、若は衣を、若は房舍を說く、是を五事と爲す。五處に婬を行ずること有れば波羅夷を犯ず。婦人童女二根黃門男子なり、是を五と爲す。五種盜有り、波羅夷を犯ず。若は身取し、若は指示して取り、若は使を遣して取り、若は重物し、若は本處を移す、是を五と爲す。復五事有り。若は已有想に非ず、不暫取、不親厚取、若は重物し、本處を移す、是を五と爲す。復五有り。是他有、作他想、若は重物、若は盜心を作し、若は本處を移す、是を五と爲す。死人に五不好有り。一に不淨、二に臭、三に有恐畏、四に人恐畏して惡鬼をして便りを得しむ、五に惡獸非人の所住處なり、是を五と爲す。犯戒人に五の過失有り。身口意業の不淨有り。彼死屍の不淨なるが如く、我此人を說くも亦是の如し。或は身口意業に不淨惡聲の流布する有り。彼死屍の如く臭氣從出す。我此人を說くことも

亦復是の如し。彼に身口意業の不淨有り。諸善比丘は畏避せん。彼死屍の如く人をして恐怖せしむ。我此人を說くも亦復是の如し。身口業意の不淨有り。諸善比丘之を見て惡心言を生ぜしむ。我云何が乃ち是の如きの惡人を見るやと。人の死屍を見て恐畏を生じ、惡鬼をして便りを得しむるが如し。我此人を說くも亦復是の如し。身口意業の不淨なる者有り。不善人と共に住す。彼死屍處の惡獸非人と共住するが如し。我此人を說くも亦復是の如し。是を犯戒人の五事過失は彼死屍の如しと爲す。不忍辱人に五の過失有り。一に凶惡にして忍ばず、二に後に悔恨を生ず、三に多人を愛せず、四に惡聲流布す、五に死して惡處に墮す、是を五と爲す。能忍辱人の五の功德有り。即ち上句に反する、是なり。向火に五の過失有り。一に人をして顏色無からしむ、二に力無し、三に人の眼をして闇からしむ、四に人をして多く閙集せしむ、五に多く俗事を說く、是を五と爲す。常に喜んで白衣家に往反する比丘に五の過失有り。一に比丘に囑せずして便ち村に入る。二に欲意有つて男女の中に在りて坐す、三に獨坐す、四に屛處覆處に在つて坐す、五に無有知男子の女人と說法すること五六語に過ぎず、是を五と爲す。復五有り。一に數女人を見る、二に既に相見、相附近す、三に轉た親厚なり、四に已に親厚なれば欲意を生ず、五に已に欲意有れば或は死罪を犯じ、若は死罪に次ぐ、是を五と爲す。散亂心もて眠るに五過失有り。若は惡夢を見、諸天衞護せず、心に法を思はず、意を繫けて明に在らず、不淨を失す。是を五と爲す。不散亂心もて眠るに五の過失有り。即ち上句に反する、是なり。飮酒に五の過失有り。顏色無し、體に力無し、眼闇し、

憙んで瞋相を現ず、財物を失す、是を五と爲す。復五事有り。病を生じ、鬪諍を益し、惡名流布し、智慧轉た少く、死して惡道に墮す、是を五と爲す。破戒に五の過失有り。自ら害し、智者の爲に呵せらる。惡名の流布する有り。臨終時に悔恨を生ず、死して惡道に墮す、是を五と爲す。持戒に五の功德有り。即ち上句に反する、是なり。復五事有り。先に未だ得ざる所の物は得ること能はず、既に得るも護らず、若は所在衆に隨ひ、若は刹利衆婆羅門衆若は居士衆若は比丘衆の中に於て愧恥有り。無數由旬內の沙門婆羅門共惡を稱說す。破戒惡人は死して惡道に墮す。是を五と爲す。持戒に五の功德有り。即ち上句に反する、是なり。楊枝を嚼まざるに五の過失有り。口氣臭し、善く味を別たず、熱癊消えず、食を引かず、眼明ならず、是を五と爲す。楊枝を嚼むに五事好有り。即ち上句に反する、是なり。食粥に五事好有り、飢を除き、渴を解し、宿食を消し、大小便通利し、除風す、是を五と爲す。經行に五好事有り、遠行に堪え、能く思惟し、少病に、食飲を消し、定を得て久住す。五種食有り、飯、乾飯、麨、肉、魚なり。五種鹽有り。靑鹽、黑鹽、毘茶鹽、嵐婆鹽、支都毘鹽なり、是を五と爲す。復五種鹽有り。土鹽、灰鹽、赤鹽、石鹽、海鹽なり、是を五と爲す。佉闍尼食に五事有り、應に食すべからず。若は非時、若は不淨、若は不與、若は不受、若は餘食法を作さず、是を五と爲す。五事有り、應に食すべし。即ち上句に反する、是なり。五種受食有り。身もて與ふれば身もて受け、衣もて與ふれば衣もて受け、曲肘もて與ふれば曲肘もて受け、器もて與ふれば器もて受け、時因縁有れば地に置いて取る、是を五と爲す。復五有り。身もて與ふれば身もて受

け、或は身もて與ふるに物もて受け、或は物もて與ふるに身もて受け、或は物もて與ふるに物もて受け、或は遙に擲げ與へて得んに手中に墮す、是を五と爲す。五種淨菓有り。火淨、刀淨、若は瘡淨、若は鳥淨、若は不任種淨なり、是を五と爲す。復五有り。若は少皮を剝ぎ、若は都て剝ぎ、若は腐爛し、若は破し、若は瘀なり、是を五と爲す。五種の脂有り、羆脂、魚脂、驢脂、猪脂、失首摩羅脂なり、是を五と爲す。五種皮有り、應に用ふべからず。師子皮、虎皮、豹皮、獺皮、猫皮なり、是を五と爲す。復五種皮有り。人皮、毒蟲皮、狗皮、錦文蟲皮、野狐皮なり、是を五と爲す。五種皮有り、應に畜ふべからず。象皮、馬皮、駝皮、牛皮、驢皮なり、是を五と爲す。復五有り。羖羊皮、白羊皮、鹿皮、熊皮、伊師皮なり、是を五と爲す。五種肉有り、應に食すべからず。象肉、馬肉、人肉、狗肉、毒蟲獸肉なり、是を五と爲す。復五有り。師子肉、虎肉、豹肉、熊肉、羆肉なり、是を五と爲す。五種說戒有り。或は說序し已つて應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞くが如し。若已に戒序を說き、四波羅夷を說き竟らば應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞くが如し。序を說き、四波羅夷を說き、十三僧殘を說き已らば、應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞くが如し。序、四波羅夷、僧殘、二不定を說き已らば、應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞くが如し、若は廣說す、是を五と爲す。復五有り。若し序、四波羅夷を說き竟らば、應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞けるが如し。若は序、四波羅夷、僧殘を說き竟らば應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞けるが如し。

若は序、四波羅夷、僧殘、二不定を說き竟りなば應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞くが如し。序、四波羅夷、僧殘、二不定、三十尼薩耆波逸提を說き竟らば、應に僧に白して言ふべし。餘は僧の常に聞けるが如し、若は廣說す、是を五と爲す。復五有り。序、四波羅夷、僧殘を說き竟らば應に僧に白して言ふべし。餘は常に僧の聞けるが如し。是の如く一一に增し乃至波逸提に若は廣說す、是を五と爲す。五法有り。應に差して分粥人と爲すべからず。若し已に差せば應に分つべからず。上の房舍揵度中に說けるが如し。五事の因緣を以て功德衣を受け畜ふることを得、長衣、離衣、宿別衆食、展轉衣、囑せずして村に入る。此五事の因緣有つて功德衣を受く。功德衣を受け已つて五事を得。即ち上句に反する、是なり。五事の因緣有り僧伽梨を留む。若は恐怖有り、若は疑つて恐怖有り、若は雨り、若は雨るべしと疑ふ、若は經營して僧伽梨を作り、若は浣ひ、若は染め、若は深く藏擧す、是を五事の因緣の僧伽梨を留むと爲す。五事の因緣を以て雨衣を留む。若は界外に請食を受け、若は水を渡り、若は病み、若は飽食し已り、若は經營して雨衣を作り、若は浣ひ、若は染め、若は深く藏擧す。此五事の因緣を以て雨衣を留む。夏安居し竟らば應に五事を作すべし。自恣、應に界を解すべく、應に還つて結界すべく、功德衣を受け、應に臥具を分つべし、是を五と爲す。比丘に五法有り、應に共に親厚を作すべからず。若は鬪諍を憙び、若は多く業を作し、若は衆中の勝比丘と共に諍ひ、若は遊行を憙んで止めず、止むるも人の爲に說法して人に善惡を言示せず、是を五と爲す。五法有り。應に共に親厚を作すべし。上句に反する、是なり。五法有り。

應に差して比丘尼を教授すべし。若は具に波羅提木叉戒を持し、多聞善巧言し、慈心もて辯說し了了に聽者をして解することを得しめ、佛の爲に出家して重罪を犯ぜず。二十臘若は二十を過ぐ、是を五と爲す。五法有り、正法を疾滅せしむ。何等か五なる。比丘有り。諦に受誦せず、憙んで忘誤し、文は具足して以て餘人に教へず、文既に具せず、其義に闕有り、是を第一の疾滅正法と爲す。復次に比丘有り。僧中の勝人上座爲り、若は一國の宗とする所、而も多く戒を持たず、但諸の不善法を修し、戒行を放捨し、勤めて精進せず、未だ得ざるに得、未だ入らざるに入り、未だ證せざるに證し、後生年少比丘は其行を倣習し、亦多く破戒し不善法を修し、戒行を放捨し亦勤めて精進ならず、未得に得、未入に入り、未證に證す、是を第二の疾滅正法と爲す。復次に比丘有り。多聞にして法を持ち、律を持ち、摩夷を持つも、所誦を以て餘比丘比丘尼優婆塞優婆私に教へず、便ち命終す。彼既に命終して法をして斷滅せしむ。是を第三の疾滅正法と爲す。復次に比丘有り。教授すべきこと難く、善言を受けず、忍辱すること能はず、餘の善比丘も即ち捨置す、是を第四疾滅正法と爲す。復次に比丘有り。鬪諍し共に相罵詈することを憙び、彼此諍ふに言口は刀劍の如く、互に長短を求む、是を第五の疾滅正法と爲す。復五法有り。正法をして久住せしむ。（上句に反する是れなり。）比丘に五法有り。應に將ゐて作行を作すべからず、大に前に在つて行くを憙び、大に後に在るを憙び、人語次を抄斷することを喜び、善惡語を別たず、善語を稱せず、美惡言を稱せず、如法に利を得るも時を以て彼が爲に受けず。是五法有り、應に

將ゐて伴行と作すべからず。五法有り、應に將ゐて伴行と作すべし。上句に反する是れなり。比丘に五法有り、而も自ら損減す。犯有れば有智者の爲に呵せられ罪を得ること無量なり。人を染汚して清淨ならざらしめ、彼爲に犯を作し無犯を作さず、若は彼自言不如自言法治を受け、言說を知らず、遠近損減す、是を五と爲す。復五法有り。自ら損減せず。上句に反する是れなり。復五法有り、自ら損減す。言ふべき所を解せず、亦善く憶識せず、彼語の難ずべきを難ぜず、若し彼難じ來るも解すること能はず、共に波羅提木叉戒を持せず、是を五と爲す。復五法有り、自ら損減せず。上句に反する是れなり。復五法有り、自ら損減す。憙んで瞋恚し、放捨せず、他語を增益し、不善語を受け、善語を離る、是を五と爲す。復五有り、自ら損減せず。上句に反する是れなり病人に五法有り、瞻視し難く、五法有り、瞻視し易く、五法有り、應に病人の衣を受くべし。上の衣揵度中に說くが如し比丘に五法有り。人の疑惑を生じ乃ち阿羅漢に至る。何等か五なる。若し比丘、數婬女家婦人家大童女家黃門家比丘尼家に往く、是を五と爲す。比丘に五法有り、白衣の憙ばざる所なり。憙んで白衣に親しみ、憙んで白衣を瞋り、强ひて白衣家に至り、憙んで白衣と竊語し乞求を喜ぶ、是を五と爲す、白衣の憙見せざる所なり。五法有り、白衣は憙見す。上句に反する是れなり

爾時、世尊、王舍城に在したまふ。時に優波離、坐より起ち偏に右肩を露し、右膝を地に著け合掌して佛に白して言さく、「年少比丘、上座比丘の前に在つて懺悔せんに幾の法有りや。」佛、優波離に告げたまはく、「五法有り、偏に右肩を露し、革屣を脫し、足を禮し、右膝を地に著け、合掌して應に罪名種性を說いて是の如きの語を

作すべし。我某甲比丘、是の如き、是の如きの罪を犯ぜり。長老に從つて懺悔せんと。上座應に答へて言ふべし。自ら汝が心を責めて厭離を生ぜよと。彼人答へて爾りと言へ。年少比丘の上座の前に在つて懺悔せんに、應に是五法を以てすべし。「優波離、復問ひたてまつらく、「年少客比丘は上座舊比丘を禮せんに、應に幾の法を以てすべきや」。佛、告げて言はく、「年少客比丘は應に五法を以て上座舊比丘を禮すべし。應に偏に右肩を露し、革屣を脱し、右膝を地に著け、上座の兩足を捉へて言ふべし。大德、我和南すと。是を五法と爲す。年少舊比丘の客上座比丘を禮するも亦是の如し。五種人有り、應に禮すべからず。自ら言はく、邊罪を犯ぜり、比丘尼を犯ぜり、賊心もて受戒せり、破二道黃門なりと。是を五と爲す。復五法有り。父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、僧を破し、惡心もて佛身血を出す。是を五と爲す。比丘に復五種威儀不應禮有り。若は大便し、若は小便し、若は露身し、若は剃髮時、若は說法時なり。是を五と爲す。復五有り。若は楊枝を嚼み、若は洗口し、若は食し、若は飲し、若は食菓するなり。是を五と爲す。上座若は次座に五法有り、鬪諍比丘に於て利益無し。具に二百五十戒を持せず、多聞ならず、廣く二部戒を誦せず、問答すること能はず、如法に教呵し及び滅擯を作して歡喜することを得しむること能はず。善能く鬪諍事を滅せず、是を五と爲す。復五法有り、上座若くは次座の鬪諍比丘に於て利益有り（上句に反する是れなり）五法有り。名けて大賊と爲す。長壽にして大罪を作せば、繫縛を被らず。何等か五なる。若し住するも定處無く、好作有り。若は刀杖多く、若は大富にして、多く財寶

行り。彼是念を作さく、若し我を捉へん者行らば、當に多く財寶を與ふべしと。若は大人親友行り、若は王、若は大臣に依止し、彼是念を作さく、若し我を捉へん者行らば、王及び大臣は當に我を佐助すべし。若は遠處に於て賊を作して還る。是を五と爲す。是の如く破戒比丘に五法行り。長壽なれば多く衆罪を作る。速に他の爲に擧せられず、若は住するに定處無く、伴黨行り、若は多聞、若は聞いて能く憶持す。是の如きの多聞行り、初中下の言悉く善し。文行り、義行り。具に淨行を說く。是の如きの法中に於て能く憶持して善心に思惟し深く正見に入ること能はず、若は能く衣服飮食臥具醫藥を得、彼是念を作さく、若し我を擧せん者行らば、我當に多く物を與ふべしと。若は大人行り、親厚たり。若は上座、若は次座に彼是念を作さく、若し我を擧せん者行らば上座次座當に我を佐助すべしと。若は空野中に在つて住し、大家に來至して利養を求覓す。是を五法と爲す。破戒比丘は長壽にして多く衆罪を爲し、速に他の爲に擧せられず。五非法行り。說戒を遮し、無根波羅夷僧伽婆尸沙波逸提波羅提提舍尼突吉羅を遮す。是を五と爲す。五如法行り。說戒を遮す。上句に反する是れなり 五非法の提籌行り、若し斷事を解せずして籌を受け、若は同意無くして籌を受け、若は善比丘無くして籌を受け、若は非法に、若は別衆に籌を受く。是を五と爲す。五如法受籌行り。上句に反する是れなり 五非法默然行り。五如法默然行り。五法和合行り。上の犍度中に說くが如し 五法捨棄行り 拘睒彌犍度中に說くが如し 爾時、佛、優波離に告げたまはく、『汝等數數他比丘の罪を擧ぐること莫れ。何を以ての故に。他比丘を擧せん者の身威儀不淸淨にして而も

【爾時等】正法疾滅並に久住の因緣を明す。

他罪を擧せば、即ち彼語を生ず。長老、先づ自ら身を清淨ならしめよと。優波離、比丘若し身威儀清淨にして他罪を擧せば彼語を生ぜず。若は言不清淨、命不清淨も亦是の如し。復次に優波離、若し寡聞にして修多羅を知らずして他罪を擧せば、即ち彼語を生ず。問うて言はく、「長老、此事は云何、此れ何の義有りや」と。即ち分別して彼問に答ふること能はず。即ち彼語を生ず、「長老、先づ修多羅を誦し、然る後當に知るべし。」優波離、若し比丘多聞にして修多羅を誦せば便ち彼語を生ぜず。復次に優波離、比丘寡聞にして毘尼を誦せずして他罪を擧せば、彼問言を生ず、長老、此れ何の所說ぞや。何に因つて起るや。若し所起處を說くこと能はざれば、復彼語を生じて言はく、「長老、且く先づ自ら毘尼を誦習せよ」と。優波離、若し比丘多聞にして毘尼を誦習して彼罪を擧せば、彼問を生ぜず。優波離、若し比丘に是五法有らば、應に時を以て如法に彼罪を擧すべし。」時に優波離、信樂し、歡喜受持せり。爾時世尊、迦陵伽國蘇羅林中に在したまふ。時に長老波摩那、世尊の所に詣り、頭面に足を禮し却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、「大德、何の因緣を以てか如來の滅後に正法疾滅して久住せざるや。復何の因緣を以てか正法滅せずして久住することを得るや。」佛、波摩那に告げて言はく、「如來の滅後に比丘の佛法僧及び戒定を敬はざれば、是因緣を以て正法疾滅して久住せず。波摩那、如來の滅後に、若し比丘の佛法僧及び戒定を敬ふ有らば、是故を以て正法滅せずして久住することを得ん。」爾時世尊、金毘羅國王園中に在したまふ。時に長老金毘羅、世尊の所に詣り頭面に足を禮し、却つて一面に

坐し、世尊に白して言さく、『何の因縁を以て如來の滅後に正法疾滅して久住せざるや。』亦上問の答の如く異らず。爾時異比丘有り、佛の所に往いて頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『大德、何の因縁を以てか正法疾滅して久住せざるや。』佛、比丘に告げたまはく、『若し比丘、法律中に在つて出家せんに、至心に人の爲に說法せず、亦至心に法を聽いて憶持せず、設ひ復憶持せんも義趣を思惟すること能はず、彼義を知らざれば如法に修行すること能はず、自利すること能はず、亦人を利せず。』佛、比丘に告げたまはく『是因縁有り、法をして疾滅して久住せざらしむ。』『大德、復何の因縁を以て法をして久住して疾滅せざらしむるや。』上句に反する即ち是れなり時に異比丘有り。世尊の所に往き頭面に足を禮し、却つて一面に坐し、『善い哉大德、我爲に略して說法したまへ。我當に獨り靜處に在つて勤修精進して放逸ならざるべし。』佛、比丘に告げたまはく、『汝若し世法を知らば出離することと能はず。若し有受を知らば、越度すること能はず、若し有欲を知らば無欲なることを得ず。若し有結を知らば無結を得ず、若し親近生死を知らば無親近を得ず。汝比丘、決定して應に知るべし。此は法に非ず、毘尼に非ず、佛の所教に非ず。若し比丘、汝此法を知らば、是れ出離なり。世法に非ず。是れ越度なり、受法に非ず。是れ離欲なり、有欲に非ず。是れ無結なり、有結に非ず。是れ生死に近かず、親近に非ず。汝比丘、應に決定して此法を知るべし。是れ法なり、是れ毘尼なり。是れ佛の所教なり。』時に彼比丘、世尊の略說教授を聞き、即ち獨り靜處に在りて勤行精進して放逸ならず、初夜後夜に警意思惟し、一心

に道品の法を修習し、所爲信樂に出家して道を行ぜば、未だ久しからずして現世に阿羅漢を證成することを得、我生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて復此に還らず。彼比丘、自ら阿羅漢を得しことを知れり。佛、是の如きの法を說きたまふに、諸比丘聞いて信樂し、歡喜受持せり。爾時異比丘有り。世尊の所に往いて頭面に足を禮し却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『善い哉大德、我爲に略說したまへ、我當に獨り靜處に在つて勤修精進して放逸ならざるべし。』佛、比丘に告げたまはく、『若し汝有法を知り、多欲ならしめて少欲ならしめず、厭ふこと無からしめて知足せず、難護ならしめて易護ならず、難養ならしめて易養ならず、愚癡ならしめて智慧無し。比丘、汝應に是の如きの法を知るべし。法に非ず、毘尼に非ず、佛の所教に非ず。若し比丘、有法を知らば、少欲ならしめて多欲ならず、知足ならしめて無厭ならず、易護ならしめて難護ならず、易養ならしめて難養ならず、智慧有らしめて愚癡ならず、比丘、汝應に決定して知るべし。是れ法なり。是れ毘尼なり、是れ佛の所教なり。』時に彼比丘、佛の略說を聞き已つて即ち獨り靜處に在つて思惟すること上の所說の如し。

四分律卷第五十九

【一】前卷に續いて五種の法を說く

四分律　卷第六十　第四分之十一

姚秦罽賓三藏佛陀耶舍竺佛念等と共に譯す

毘尼增一之四

(一)爾時、佛、諸比丘に告げたまはく『若し我聽す所は波陀舍阿㝹波陀舍便闍那阿㝹便闍惡叉羅阿㝹惡叉羅なり。應に是の如く作すべし。我聽さざる所の如くんば波陀舍阿㝹波陀舍便闍那阿㝹便闍惡叉羅阿㝹惡叉羅なり。應に呵すべし。應に隨順すべからず、應に是の如く作すべし。我所遮の如くんば波陀舍阿㝹波陀舍便闍那阿㝹便闍那惡叉羅阿㝹惡叉羅なり。應に作すべからず、我遮せざる所の如くんば波陀舍阿㝹波陀舍便闍那阿㝹便闍那惡叉羅阿㝹惡叉羅なり。應に隨順すべく、呵すべからず。』爾時舍利弗、五百の比丘と俱なり。摩訶波闍波提比丘尼は五百の比丘尼と俱なり、阿難分坻は五百の優婆塞と俱なり、毘舍佉母は五百の優婆私と俱なり、拘睒彌揵度中に說くが如し。爾時佛、諸比丘に告げたまはく、『比丘の僧中に至るに先づ五法行り、應に慈心を以てすべく、應に自ら卑下すること塵を拭ふ巾の如くすべし、應に善く坐起を知るべし。若し上座を見ば應に安坐すべからず、若し下座を見ば應に起立すべからず、彼僧中に至らば雜說を爲して世俗事を論ずべからず。若は

自ら說法し、若は人を請じて說法し、若し僧中に不可事有るを見ば、心安忍ならずも應に默然を作すべし、何を以ての故に。僧の別異ならんを恐るるが故なり。比丘は應に先づ此五法有るべし。然る後僧中に至れ。舍利弗、此五法有り。比丘の僧中に在るも應に語るべからず。復五法有り。僧中に在つて應に語るべし。此中に六法有り。上の爲白損滅中に說くが如し。他罪を擧するに五法有り。具に二百五十戒を持し、多聞し、語言を善くし、憶念有り、智慧有り、是を五と爲す。五法有り、應に他罪を擧すべし。慈悲心有り、欲利益有り、增長せしめ、懺悔清淨ならしむ。是五法有り、應に他罪を擧すべし。他罪を擧せんと欲せば應に五法有るべし。上の遮犍度中に說けるが如し。五非法の擧有り、非時に時を以てせず、不實に實を以てせず、損減して利益無し、麤獷にして柔和ならず、瞋恚にして慈心を以てせず。是を五と爲す。五如法擧有り。上句に反する是れなり不善に善もてし、非毘尼に是毘尼もてし、世間に出世間てもし損減し利益を作す。亦是の如く說く。五句語有り。第三句無し、時と非時と、此句に第三無し。實と不實と此句に第三無し。損減し利益有り。此句に第三無し。麤獷柔和此句に第三無し。瞋恚慈心此句に第三無し。是を五句と爲す。第三無し、五語の捨戒を說く。佛を捨し、法を捨し、僧を捨し、和上を捨し、同和上を捨す。是の如く五五を句と爲し、乃至沙門釋子に非ず。如來出世し過失有るを見るが故に五利義を以て諸比丘の爲に制戒し、僧を攝取し、僧をして歡喜せしめ、僧をして安樂ならしめ、不信者をして信ぜしめ、信者を增長せしむ。是を五と爲す。乃至正法久住も亦是の如し。

【二】下六種の法について明す。

如來出世し諸比丘の過失有るを見るが故に五利義を以て諸比丘の爲に呵責羯磨を制し、僧を攝取し、僧を歡喜せしめ、僧を安樂ならしめ、不信者をして信ぜしめ、信者を增長せしむ。是を五と爲す。乃至正法久住の五五を句と爲すも亦是の如し。乃至入滅諍も亦是の如し。

(一)六非法遮說戒有り。無根破戒作不作破見破威儀を遮するも亦是の如し。是を六と爲す。六如法遮說戒有り。上句に反する是れなり　六法有り。應に教授比丘尼を差すべし。具に二百五十戒を持し、多聞し、廣く二部戒毘尼を誦し、善能く語言し辯說義句了了なり。佛の爲の故に出家して重罪を犯ぜず、若は二十臘若は二十を過ぐ。是六法有り。應に教授比丘尼を差すべし。比丘、比丘の爲に疑を作すに六法有り。若は所生の年を以てし、若は臘數を以てし、若は大戒を受くるを以てし、若は羯磨を以てし、若は犯じ、若は法を以てす。是を六と爲す。六犯所起處有り。或は犯有り、身に由つて起り心口もてするに非ず。或は犯有り、口に起し身心を以てせず。或は犯有り、身口より起り心を以てせず、或は犯有り、身心より起り、口もてするに非ず。或は犯有り、口心より起り身もてするに非ず、或は犯有り、身口心より起る。是を六と爲す。鬪諍に六根本有り。中阿含に說くが如し。六處盜犯波羅夷有り。若は自ら取り、若は指授し、若は遣使し、若は重物を盜心を以て移して本處を離れしむ。是を六と爲す。復六非己有想有り。不暫取想、非親厚想、若は重物は盜心を以て移して本處を離れしむ。是を六と爲す。

【三】下七種の法について明す。

(三)七非法遮説戒有り。無根波羅夷乃至無根惡説を遮す。是を七と爲す。七犯聚有り。波羅夷乃至惡説なり。是を七と爲す。七種精有り。青色乃至醋漿色なり。是を七と爲す。七滅諍有り、上の戒文中に說くが如し。七法有り。名けて持律と爲す。犯を知り、不犯を知り、輕を知り、重を知り、有餘を知り、無餘を知り、廣く二部戒毘尼を誦す。是を七と爲す。復七有り。六句は前に同じ、第七句は廣誦毘尼を以て一句と爲す。是を七と爲す。復七有り。六句は前に同じ、第七句は毘尼に住し不移不動なるを以て一句と爲す。是を七と爲す。復七有り。六句は前に同じ。第七句は善能滅諍事を以て一句と爲す。是を七と爲す。復七有り。六句は前に同じ。第七句は自識宿命種種所使を以て一句と爲し、是を七と爲す。復七有り。六句は前に同じ、第七句は天眼の衆生の此に死し、彼に生ずるを見るを以て一句と爲す。是を七と爲す。復七有り。六句は前に同じ、第七句は漏盡得無漏心解脱慧解脱現世得果證我生已盡梵行已立所作已辦終不還を以て此を一句と爲し、是を七と爲す。七不恭敬有り。佛法僧戒定父母善法を敬せず、是を七と爲す。七恭敬有り。上句に反する是れなり 七語捨戒有り。佛法僧を捨し、和尚を捨し、同和尚を捨し、阿闍梨を捨し、同阿闍梨を捨す。是を七と爲す。乃至沙門釋子に非ざるも亦是の如し。七義を以ての故に如來出世して諸比丘の爲に制戒し、僧を攝取し、僧を歡喜せしめ、僧を安樂ならしめ、不信者を信ぜしめ、信者を增長せしめ、調し難きを調せしめ、慚愧者は安樂を得。是を七と爲す。是の如く七七を句と爲す。乃至正法久住も是の如し。七義を以ての故に如來は出世し、諸比丘の爲に呵責

【四】下八種の法について明す。

羯磨を制したまふ。僧を攝取するより七七を何と爲し、乃至正法久住も亦是の如し。乃至七滅諍も亦是の如し。呵責羯磨を何と爲すが如し。

（四）八非法遮說戒有り。無根破戒作不作、破見作不作、破威儀作不作、破正命作不作、是を八と爲す。八如法遮說戒有り。上句に反する是れなり　八法有り。應に教授比丘尼を差すべし。具に二百五十戒を持し、多聞し、二部戒毘尼を誦し、善能く語言し辨義句字了了に、大姓出家刹利婆羅門居士、若は形顏端政、佛の爲の故に出家して重罪を犯せず、若は二十臘、若は二十臘を過ぐ。是を八と爲す。八不可過法有り。比丘尼揵度中に說くが如し。白衣に八法有り。應に與に覆鉢を爲すべし。比丘を罵謗し、損減を作し、利益無し、無住處を作し、比丘と鬪亂し、比丘の前に在りて佛法僧を毀つ。是を八と爲す。比丘に八法有り。白衣をして信ぜざらしめ、白衣を罵謗し、損減を作し、利益無く、無住處を作し、白衣と鬪亂し、白衣の前に在つて佛法僧を毀つ。是を八と爲す。比丘に是八法有り。應に與に遮不至白衣家羯磨を作すべきこと上說の如し。八法有り。應に差して使伴と作すべし。能く聞き、能く說き、自ら解し、他を解せしめ、能く受け、能く持し、失無く、好惡を知つて義趣を說く。是を八と爲す。爾時世尊、瞻婆城伽伽池邊に在したまふ。白月十五日說戒時に露地に於て坐し、衆僧と俱に前後に圍遶せられたまふ。時に比丘有り。彼比丘の見聞疑罪を擧せんに、罪を擧す時に當つて彼比丘乃ち餘の語答を作す。便ち瞋恚を起す。佛、諸比丘に告げたまはく、『應に審定して彼人に問ふべし。彼人、佛法の中に於て所任無く、

増長する所無く、譬へば農夫の如し。田苗稊稗參生して苗葉相類を別たずして妨害を爲し、乃至莠實するも、方に非穀の異を知る。既に非穀を知つて卽ち根本を耘除す。何を以ての故に。善苗を害せんことを恐るるが故なり。比丘も亦復是の如し。惡比丘有り、行來坐起して衣鉢を攝持し、善比丘の如くして別たず、乃至罪を出さず。時に既に其罪を出さば、方に比丘中に稊稗の異を知る。既に其異を知らば應に和合して爲に滅擯を作して之を除くべし。何を以ての故に。恐くは善比丘を妨げんが故なり。譬へば農夫の如し。治穀の風に當らば簸揚し、好穀を留めて其下に聚め、秕穀は風に隨つて之を除く。何を以ての故に。恐くは好穀を汚さんが故なり。是の如く惡比丘の行來入出も、善比丘の如く別たず、乃至罪を出さず、時既に其罪を出さば方に比丘中の秕穀穢惡を知り、既に知り已らば應に和合して爲に滅擯を作し、之を除くべし。譬へば人有つて木を須ひて井欄を作るが如し。城中より出で手もて利斧を提へ、彼林中に往いて遍く諸樹を扣くに、若し其實中なる者は其聲貞實に、若し是れ空中なる者は其聲虛にして甚なり。而も彼空樹の根莖枝葉は眞實なる者の如くして異らず。扣く時に於て方に內空なるを知る。既に內空と知らば卽便ち斫伐して枝葉を截落し、先づ麤朴を去り、然る後斫劖細治するに內外倶に淨なり。以て井欄を作る。是の如く惡比丘も、行來出入に衣鉢を攝持し、威儀は善比丘の如く異らず。乃至罪を出さず、時既に其罪を出さば方に沙門中の垢穢稊稗空樹を知る。若し知り已らば卽ち應に和合して滅擯を作すべし。何を以ての故に、恐らくは善比丘を妨害せんが故なり。而し

て偈を說いて言はく、

同住して性行を知り、嫉妬して瞋恚を憙ぶ
人中に善語を說き、屏處には非法を造る
方便して妄語を作し、明者は能く貫知す
稊稗は應に除棄すべし、及び空中の樹を以て
自ら是れ沙門と說く、虛空なるは應に滅擯すべし
已に滅擯を作し竟らば、行惡非法者も
清淨者も共に住す。當に知るべし、是れ光顯なり
和合せば共に滅擯し、和合せば苦際を盡くさん

佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し受持せん。

爾時佛、諸比丘に告げたまはく、我今汝等の爲に八種惡馬及び八種惡人を說かん。汝曹諦聽せよ。何等か八なる。或は惡馬有り、勒を授け、鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、反つて兩轅に倚傍して前進せず。或は惡馬有り。勒を授け鞭を與へて其をして去らしめんと欲せんに、而も顚蹶して地に倒れ、既に其膝を傷け、又轅槅を折る。或は惡馬有り、勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も更に却行して進まず。或は惡馬有り。勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も更に非道に趣き輪を破し、軸を折る、或は勒を授け鞭を與へ其を去らしめんと欲せんに、御者を畏れず、鞭を畏れず、方

便もて銜を嚙み、騁突して禁制すべからず。或は惡馬有り。勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も雙脚もて人立し、沫を吐く。或は惡馬有り。勒を授け勒を與へて其を去らしめんと欲せんに、或は蹲り、或は臥す。是を八と爲す。何等か是れ八種惡人なる。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに、而も彼比丘便ち言はく、我憶せず、我憶せずと。猶し惡馬の勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も更に觝躓して去らざるが如し。我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに、而も彼比丘、犯ぜりと言はず、不犯と言はず、默然として住す。猶し惡馬の勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、兩轅に倚傍して前進せざるが如し。我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに、彼是言を作さく、長老も亦自ら是罪を犯ぜり。云何が能く他罪を除かんと。猶し惡馬に勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も更に顚蹶して地に倒れ、既に其膝を傷け又轅槅を折るが如し。我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに彼比丘是言を作さく、長老白癡なり、猶し人の教を須ひて而も我に教へんと欲するがごとしと。猶し惡馬に勒を授け鞭を與へ其を去らしめんと欲せんも更に却行するが如し、我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに、而も彼便ち餘事を說いて答反して瞋恚を生ず。猶し惡馬の勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに而も非道に趣き軸を折り輪を破するが如し。我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに、而も彼比丘衆

僧を恐れず亦犯を恐れず、而も擧罪者の語を受けず、便ち坐具を捉へて肩に置きて去り呵制すべからず、猶し惡馬に勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も御者を畏れず、亦鞭を恐れず、銜を嚙み驕突して禁制すべからざるが如し。我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り、彼見聞疑罪を擧せんに、而も彼比丘、左に欝多羅僧を抄つて僧中に在り、手を擧げ大語すらく、乃ち汝等をして我を教授せしむるや。猶し惡馬の勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も更に雙脚もて人立して沫を吐くが如し。我此人を說くも亦復是の如し。或は比丘有り。彼見聞疑罪を擧せんに、彼比丘の言はく、長老も亦我に衣鉢臥具醫藥を與へず、何が故に我を教ふるやと。彼即ち戒を捨し、下道を取つて諸比丘の所に至り、是言を作さく、大德、我已に休道せり。意に於て快きやと。猶し惡馬の勒を授け鞭を與へて其を去らしめんと欲せんに、而も更に蹲臥するが如し。我此人を說くも亦復是の如し。是を八種惡人と成す。我已に八種惡馬八種惡人を說けり。世尊の所應なり。諸弟子を慈愍して我已に具說せり。汝、今當に空處樹下に往在して禪定を修習すべし。放逸を爲して後に悔恨を致すこと莫れ。此は是れ我が教誡なり。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。爾時世尊、拘薩羅國に在したまひ、千二百五十の比丘と俱に人間に遊行し、中道に於て大聚火の熾然せる有るを見、見已つて即ち下道し、一樹下に在て敷座して坐し、諸比丘に告げたまはく、『汝等彼大聚火の熾然せるを見るや不や。若し人有つて彼火を捉へ、押摸して之を嗚せしめんに、即ち其皮肉を燒き筋骨消盡す。若

し復人行り。刹利女婆羅門女毘舍女首陀羅女を捉へ捫摸して之を鳴せんに、是の如きの二事、何れか善と爲すや。』諸比丘、佛に白さく、『大德、若し彼刹利等の女を捉へて捫摸して之を鳴す。此事善と爲す。何を以ての故に。若し火を捉へんに卽ち皮肉を燒爛し筋骨消盡し大苦痛を得、堪耐すべからず。』佛、諸比丘に告げたまはく、『我今汝に告げん。寧ろ此火を捉へて捫摸して之を鳴らし、其皮肉を燒き筋骨消盡せんも此事を善と爲す。何を以ての故に。此因を以ては三惡道に墮せざればなり。若し沙門に非ざるに自ら是れ沙門なりと言ひ、淨行に非ざるに自ら是れ淨行なりと言ひ、戒を破して惡を行じ、都て持戒威儀無し。邪見覆處して罪を作し、內容腐爛せるに外に完淨を現じ、人の信施を食し、信施を消せざるが故に、三惡道に墮し長夜に苦を受けん。是故に應當に淨戒を持ち人の信施を食すべし。飲食衣服臥具醫藥一切の所須を、能く施主をして大果報を得しめよ。所爲出家して沙門を作らば亦成就を得ん。汝等比丘、寧ろ熱鐵を以て脚を刺すと、當に信樂せる善男子善女人の接足作禮を受くべきやと、是の如きの二事に何者か善と爲す。』諸比丘、佛に白して言さく、『寧ろ信樂せる善男子善女人の接足作禮を受けん、何を以ての故に。熱鐵を脚に刺さば大受痛を受けんが故なり。』佛、諸比丘に告げたまはく、『我今汝に告げん。寧ろ熱鐵を以て脚を刺さん。何を以ての故に。此因を以ては三惡道に墮せざればなり。若し沙門に非ざるに自ら是れ沙門なりと言ひ、淨行に非ざるに自ら是れ淨行なりと言ひ、戒を破し惡を行じ、都て持戒威儀無く、邪見覆處して罪を作し、內容腐爛せるに外に完

淨を現じ、人の信施を食せんも、信施を消せざるを以ての故に三惡道に墮し、長夜に苦を受けん。是故に當に淨戒を持つて人の信施を食すべし。乃至一切の所須は上說の如し。施者をして大果報を得しめよ。所爲出家して沙門と作らば亦成就を得ん。汝等比丘、寧ろ熱斧を以て自ら其身首を斬らんと、當に信樂せる善男子善女人の手もて身を捫摸せられんと、是の如きの二事を何者か善と爲す。』諸比丘、佛に白して言さく、『大德、寧ろ信樂せる善男子善女人の手もて身を捫摸せんを受けん、何を以ての故に、熱斧もて身首を斬らば大苦痛を受けんが故なり。』『我今汝に告げん。寧ろ熱斧もて自ら其身首を斬らんも此事を善と爲す。何を以ての故に。此因を以ては三惡道に墮せざればなり。餘は上句に說くが如し。比丘、汝等寧ろ熱鐵を以て衣と爲し身を燒爛し盡さんと、當に信樂する善男子善女人の種種の好衣を受著すべきと、是の如きの二事、何れか善と爲すや。』諸比丘、佛に白して言さく、『大德、寧ろ彼種種の好衣を受けん。何を以ての故に、熱鐵衣は身を燒き大苦痛を受けんが故なり。』佛、諸比丘に告げたまはく、『我今汝に語らん。寧ろ熱鐵を以て衣と爲して身を燒かん。何を以ての故に。此因を以ては三惡道に墮せず、餘は上句に說くが如し。比丘、汝等寧ろ熱鐵丸を呑んで五藏を燒爛して下より出さんと、當に信樂ある善男子善女人の飲食供養を受くべきやと、是の如きの二事、何れか善と爲すや。』諸比丘の言さく、『寧ろ彼飲食供養を受けん。何を以ての故に、熱鐵丸を飲まば大苦痛を受けんが故なり。』佛、諸比丘に告げたまはく、『我今汝に告げん。寧ろ熱鐵丸を飲まん。何を以ての故に。

【五】下九種の法について明す。

此因を以ては三惡道に墮せざればなり。餘は上句に說くが如し。種種の粥を受くるも亦是の如し。汝等比丘、寧ろ熱鐵床上に在りて坐し、自ら身を燒いて燒爛せんと、當に信樂ある善男子善女人の種種好床臥具を受けて上に在るべきやと、是の如きの二事、何れか善と爲すや。』諸比丘、佛に白して言さく、『寧ろ彼種種好床臥具を受けん、何を以ての故に。熱鐵床上に自ら身を燒いて燒爛せば大苦痛を受けんが故なり。』佛、諸比丘に告げたまはく、『我今汝に語らん、寧ろ熱鐵床上に坐臥して身を燒くことを受けん。何を以ての故に。此因を以ては三惡道に墮せざればなり。餘は上句に說くが如し。汝等比丘、寧ろ熱鐵屋中に在て住し身を燒かんと、當に信樂ある善男子善女人の房舍を受けて中に在て止宿すべきと、是の如きの二事、何れか善と爲すや。』諸比丘、佛に白さく、『寧ろ彼房舍を受けて止宿せん。何を以ての故に、彼熱鐵房中に在らば大苦痛を受けんが故なり。』『我今汝に告げん。寧ろ彼熱鐵房中に在て身を燒いて爛盡せん。何を以ての故に。此因緣を以ては三惡道に墮せざればなり。餘は上句に說くが如し。』爾時世尊、此語を說きたまふ時、六十の比丘沸血して面孔より出で、六十の比丘は捨戒休道し、六十の比丘は無漏心解脫を得たり、衆多比丘有つて遠塵離垢し法眼淨を得たり。

(五)白衣家に九法有り。未だ檀徒と作らざれば應に作すべからず、若し其家に至らんも應に坐すべからず。何等か九なる。比丘を見るも、憙んで起立せず、憙んで禮を作さず、憙んで比丘に坐を請ぜず、比丘の坐するを憙ばず、設ひ所說有るも受けず、若し衣服飲食所須

【六八】下十種の法について明す。

の具有らんも比丘を輕慢して與へず、若し多く有らんも少く與へ、若は精細なる行るも麤惡を與へ、或は恭敬せずして與ふ。是を九法と爲す。應に白衣家に往くべからず。復九法有り。未だ檀越と作らざるも應に檀越と爲すべく、已に作さば應に往いて坐すべし。（上句に反する是れなり）九不如法遮説戒有り。無根破戒作を遮し、不作を遮し、作不作を捨し、破見破威儀も亦是の如し。是を九と爲す。九如法遮説戒有り。（上句に反する是れなり）九語捨戒有り。佛を捨し、法を捨し、僧を捨し、和尚を捨し、同和尚を捨し、阿闍梨を捨し、同阿闍梨を捨し、諸梵行を捨し、戒を捨す。是を九と爲す。是の如きの九九を句と爲し、乃至沙門釋子に非ざるも亦是の如し。如來出世して過失有るを見たまふが故に、九利義を以て諸比丘の爲に制戒し、僧を攝取し乃至未來有漏を斷ず。是を九と爲す、如來出世し過失有るを見たまふが故に九利義を以て諸比丘の爲に呵責羯磨を制したまふ。僧を攝取するより乃至未來有漏を斷ず。是を九と爲す。乃至九滅諍も亦是の如し。

（六八）十種衣有り。拘舍衣劫貝衣欽跋羅衣芻摩衣叉摩衣舍㝹衣麻衣翅夷羅衣拘遮羅衣差羅衣差羅波尼衣なり。是十種衣は、應に染めて袈裟色と作すべし。衣持に十種有り。糞掃衣牛嚼衣鼠嚙衣燒衣月水衣初產衣神廟衣塚間衣願衣立王衣往還衣なり。是を十と爲す。十非法遮説戒有り。波羅夷に非ず、波羅夷説中に入らず、捨戒に非ず、捨戒説中に入らず、如法僧要に隨ひ、如法僧要を呵せず、如法僧要呵説中に隨はず、不見不聞不疑破戒、不見不聞不疑破見、不見不聞破威儀、是を十と爲す、十如法遮説戒有り。（上句に反する是れなり）復十非法遮説戒

有り。邊罪を犯ぜず、邊罪說中に入らず、比丘尼を犯ぜず、犯比丘尼說中に入らず、賊心もて受戒せず、賊心受戒說中に入らず、破二道ならず、破二道說中に入らず、黃門に非ず、黃門說中に入らず、是を十と爲す、十如法遮說戒有り（上句に反する是なり。）十法有り。應に教授比丘尼を差すべし。具に二百五十戒を持し多聞し、廣く二部戒毘尼を誦し、善巧語言あり、辯說了了なり。大姓出家刹利婆羅門居士、形貌端政に、比丘尼に恭敬せられ、比丘尼に說法を爲すに堪へ、歡喜を得しめ、佛の爲の故に出家して袈裟を著けて重罪を犯ぜず、若は二十臘、若は過二十臘なり。是を十と爲す。爾時佛、優波離に告げたまはく、『汝等、數他比丘の罪を擧ぐること莫れ。何を以ての故に。若し身威儀清淨ならざるに、他比丘の罪を擧せば、卽ち彼語言を生ぜん。長老、先づ自ら身威儀を淨めよと。優波離、若し比丘、身威儀清淨ならんに、他語を生ぜず、若し言不清淨、命不清淨、多聞ならず、廣く二部毘尼を誦せざるも亦是の如し（上の五法中に說くが如し。）復次に優波離、擧他比丘は復應に五法を修習すべし。時を以てし、非時を以てせず、實を以てし、不實を以てせず、利益もてし損減を以てせず、柔軟もてし麁獷を以てせず、慈心もてし瞋恚を以てせず。優波離、擧他比丘に此十法有り、然る後應に擧すべし。十非法受籌有り。不解事に受籌し、如法者と與共ならざるに受籌し、非法者を多からしめんと欲して受籌し、多非法者有るを知つて受籌し、僧破せしめんと欲して受籌し、僧を破せんと欲するを知りて受籌し、小罪を以て受籌し、所見の如くならずして受籌し、非法に受籌し、別衆に受籌す。是を十と爲す。十如法受籌

有り。（上句に反する是なり。）上句に反する是なり。如來出世して過失有るを見たまふが故に、十義を以て諸比丘の爲に制戒したまふ。僧を攝取するより乃至正法久住す。是を十と爲す。十種人有り。應に禮すべからず、自ら邊罪を犯せり、比丘尼を犯ぜり、賊心もて受戒す。破二道なり、黃門なり。父を殺せり、母を殺せり、阿羅漢を殺せり、僧を破し惡心もて佛身血を出せりと言ふ。是を十と爲す。比丘に十種威儀有り。應に禮すべからず。大行時、小行時、若は裸身、若は剃髮、若は說法、若は楊枝を嚼み、若は洗口し、若は飲み、若は食し、若は噉菓す。是を十と爲す。飲酒に十の過失有り。色惡少力眼明かならず、喜んで瞋を現じ、財を失し、病を增し、鬪諍を起し、惡名の流布する有り、智慧無く、死して地獄に墮せしむ。是を十と爲す。出家人の王宮に入つて婇女間に至るに十過失有り。若し王と夫人と和合せる時、比丘宮に入つて婇女間に至らんに、夫人は比丘を見て笑ひ、比丘は夫人を見て亦笑ふに、王は是れ言を作して言はく、比丘若し已に是事を作せり、若は當に此を作すべしと。是れ出家人が王宮婇女間に入るの初過失なり。復次に若し王の醉へる時、夫人と和合せんを憶はず、後夫人に娠有り。王、是意を作して言はく、比丘宮に來入せり、是れ比丘の所爲なりと。是れ第二の過失爲り。復次に王太子、反いて王を殺さんと欲せんに、王、是意を作さん。比丘、我宮內に來入せば是れ其が所教なりと。是れ第三の過失なり。復次に王內に在るに、祕密の言、以て外に聞ゆれば、王、是念を作さん、比丘我宮內に來入せり。是れ其が所傳ならんと。是れ第四の過失なり。復次に王、若し寶、若は似寶を失せ

んに、王、是を作さん。比丘、我宮內に來入せり。是れ其取去ならんと。是れ第五の過失なり。復次に王、或は賤人を以て高位處に在らしめんに、外、喜ばざる者、是言を作さん。比丘、宮に入る。是れ其所作なりと。是を第六の過失と爲す。復次に王、高位者を以て下賤に處在せんに、外、喜ばざる者、是言を作さん、比丘宮に入る。是れ其所作なりと。是れ第七の過失なり。復次に無事因緣非時に、王、四部兵を集む。其喜ばざる者是言を作さん。比丘宮に入る。是其所作ならんと。是を第八の過失と爲す。復次に王、或は兵を集め、中路にして還へる、其喜ばざる者是言を作さん。比丘宮に入る。是れ其所作なりと。是を第九の過失と爲す。復次に若し王、宮婇女間に在り、好象馬有る端政の女人出づ。見て則ち心に愛著を生ずるは比丘の法に非ず。是を第十の過失と爲す。十法有り。應に人に大戒を授くべからず。弟子に增戒增心增慧學增威儀增淨行增波羅提木叉學を敎ふること能はず、敎へて惡見を捨し善見に住せしむること能はず、弟子住處を樂しまざるに移して樂處に至らしむること能はず、若は疑悔の生ずること有らば法の如く、毘尼の如く開解決斷すること能はず、若は十臘を滿ぜず。是を十と爲す。十法有り、應に人に大戒を授くべし（上句に反する是なり。）十法有り、應に人に大戒を授くべからず、具に二百五十戒を持せず、多聞ならず、弟子に阿毘曇毘尼を敎ふること能はず、惡見を捨し善見に住せしむること能はず、波羅提木叉を知らず、波羅提木叉說を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず、若は十歲を滿ぜず。是を十と爲す。十法有り。應に人に大戒を授くべし（上句に反する是なり、）十法の不應遮別處

諍事有り。具に二百五十戒を持たず、多聞ならず、廣く二部戒を誦せず、善巧語言もて人を開解せしめず、問答教呵し、如法に滅擯して歡喜を得しむること能はず。設し諍の起ること有らんも善く滅せず、波羅提木叉を知らず、波羅提木叉說を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず。是を十と爲す。十法の應差別處斷事有り（上句に反する是なり。）十法の不應差別處斷事有り。六句は上の如し。斷了せる鬪諍事を解せず、諍起を知らず、諍滅を知らず、趣滅諍道を知らず。是を十と爲す。十法應差別處斷事有り（上句に反する是なり。）時に阿難座より起ち、偏に右肩を露し、右膝を地に著け、合掌して佛に白して言さく、『大德、何の因緣を以てか僧をして未だ諍事有らずして諍事を生じ、已に諍事有るに除滅せざらしめんや。』佛、阿難に告げたまはく、『擧他比丘の不犯に犯と言ひ、犯に不犯と言ひ、輕に重と言ひ、重に輕と言ひ、非法に法を說き、法に非法を說き、非毘尼に毘尼を說き、是毘尼に非毘尼を說き、制せざるに制し、是制を斷ず。此因緣を以て僧をして未だ諍事有らずして諍を生ぜず、已に諍事有らんも除滅することを得しむるなり。』阿難、復佛に問うて言さく、『大德、何の因緣を以て僧をして未だ諍事有らざるには諍を生ぜず、已に諍事有らば而も除滅することを得しむるや。』佛、阿難に答へたまはく、（上句に反する是なり。）佛、阿難に告げたまはく、『十種諍根有り、應當に之を知り、善く方便を作して除滅することを得しむべし。何等か十なる（上句に反する是なり。）時に優波離、座より起ち偏に右肩を露し右膝を地に著け、合掌つて佛に白して言さく、『大德、說いて破僧と言はば、齊つて幾の名をか破僧と爲す。誰か破和合僧な

【七】次に十一種の法について。

【八】下更に種種の法について。

る。」佛の答へたまはく、『十事は上句の如し。此十事を以て伴黨を求索し、若は他をして別部說戒布薩羯磨を求めしむ。是を齊つて破僧と爲し、名けて破和合僧と爲す。」

(七)優波離、問ひたてまつらく、『和合僧とは上句に反する是なり。十一語有り、戒を捨し、佛を捨し、法を捨し、僧を捨し、和尙を捨し、同和尙を捨し、阿闍梨を捨し、同阿闍梨を捨し、淨行比丘を捨し、波羅提木叉を捨し、毘尼を捨し、學事を捨す。是を十一と爲す。是の如き十一を句と爲し、乃至沙門釋子に非ざるも亦是の如し。」

(八)爾時世尊、不尸城林中に在したまひ、諸比丘に告げて言はく、『若し比丘が所在の處に、鬪諍し、共に相罵詈し、口に刀劍を出し互に長短を求むること莫れ、之を憶うて樂しまず。況んや能く彼に住せんをや。汝等決定して應に三法の疾滅するを知るべし。應に三法の增長するを知るべし。何等か三なる。出離を念じ、無瞋恚を念じ、無嫉妬を念ず。此三事は疾に斷滅せよ、何等か三法の遂增長する。貪欲念、瞋恚念、嫉妬念なり。此三法は增長す。是故に所在の處に若は鬪諍し共に相罵詈し、口に刀劍を出して互に長短を求む。之を憶うて樂しまず、況んや能く彼に住せんをや。是故に汝等、決定して應に知るべし、三法損減し三法增長することを。若し比丘、所在の處に共に鬪諍せず上句に反する是なり。其れ鬪諍に二有り。二俱に忍ばず。心に垢穢を懷き、互に相增害して瞋恚を增長し、善く調伏せず、相受教せず、亦恭敬を失す、當に知るべし、此諍轉た增して堅固なれば、法の如く、律の如く、佛の所教の如くして滅することを得ず。若し比丘鬪諍せんに、彼此俱に忍ばば心に

垢穢を懷かず、相憎害せず、瞋恚を增長せずして善く調伏し、更に相受敎し、恭敬を失せず、當に知るべし、此諍にして堅固ならざれば法の如く、律の如く、佛の所敎の如くして滅することを得ん。若し比丘共に諍ひ二共に忍ばざれば、心に垢穢を懷き、互に相憎害し、瞋恚を增長して善く調伏せず、相受敎せず、亦恭敬を失せん。若し諍事起る時、七滅諍の一一法を以て諍事を滅せずんば、當に知るべし。此諍轉た復增長堅固にして、法の如く、律の如く、佛の所敎の如くして滅することを得ざらんを。若し諍を如法に滅することを得れば（上句に反する是なり。）若し比丘鬪諍せんに、上中下座と共事を平宜せざれば、則ち修妬路毘尼法律に入らず、與に相應せず。若し諍事起らん時七滅諍法を以て一一に滅せざれば、當に知るべし、此諍は而も增長堅固なることを致し、法の如く、律の如く、佛の所敎の如くにして滅することを得ざらん。若は諍事を法の如く滅することを得ん（上句に反する是なり。）若し持法持律持摩夷者と共に諍事を平宜せざれば、諍事增長するも亦上句に說くが如し。若は諍事如法に滅す（上句に反する是なり。）爾時世尊、優波離に告げたまはく、「汝等、數他比丘の罪を擧ぐること莫れ、何を以ての故に。若し他罪を擧せんに、身清淨ならず、口清淨ならざれば即ち他語を生ぜん、「長老、先づ自ら身口清淨なれ」と。優波離、若し比丘身口清淨ならんに他語を生ぜず。復次に優波離、他比丘を擧せんに、命清淨ならず、寡聞なるに修多羅を誦せずして若し他罪を擧せば、即ち他語を生ぜん。「長老、先づ自ら其命を清淨ならしめて修多羅を誦せ」と。若し優波離、他比丘を擧せんに命清淨に多聞にして修多

羅を誦せば、他語を生ぜず。復次に優波離、他比丘を擧せんに多聞ならず、毘尼を知らず、言辯了ならず、喩へば白羊の如くして若し他罪を擧せば、則ち他語を生ぜん。「長老、先づ毘尼學語を學せよ」と。若し優波離、他比丘を擧せんに、多聞にして毘尼を誦し、語言了了なれば則ち他語を生ぜず。是故に優波離、比丘は應に是知を作すべし。若し此比丘、愛有り、我を恭敬せば即ち罪を擧すべし。愛無く恭敬有るも應に擧すべし。恭敬無く愛有るも應に擧すべし。若し愛無く、恭敬無くんば、能く惡を捨し善に就かしめて應に擧すべし。若し愛無く恭敬無く、亦惡を捨し善に就かしむること能はざるも、而も彼に所重の比丘の尊敬信樂する者有らば、能く惡を捨し善を行ぜしめ、應に擧すべし。若し愛無く、恭敬無く惡を捨し善を行ぜしむること能はず、復所重比丘の尊敬信樂する者有ること無くんば、惡を捨し善を行ぜしむること能はず、優波離、僧は即ち應に都て捨置し驅棄すべくんば語つて言へ、長老、汝が所去處に隨へと、彼當に汝が爲に擧を作し、憶念を作し、自言を作し、阿菟婆陀を遮し、說戒を遮し自恣を遮すべし。譬へば調馬師の惡馬の調し難きは即ち轠杙驅棄すべきが如し。此比丘も亦復是の如し。是の如きの人は先づ其に從つて求聽すべからず、此即ち是れ聽なり。』作說是の如し。優波離聞いて歡喜信樂し、受持せり。優波離、佛に問うて言さく、『大德、比丘は事を起さんが爲には幾の法を以てするや。』佛、答へて言はく、『比丘が事を起さんが爲には三事を以てせよ。破戒と破見と破威儀となり。』『優波離、復問はく、『此三事を以て事を起すに復幾の法を以てか作擧と作すや。』佛言はく、

『三事を以てす。見聞疑を擧すなり。』優波離、復問はく、『三事を以て事を起し、三法を以て擧を作すに、內に幾法有つてか然る後に擧すべき。』佛、言はく、『內に五法有り、應に作擧すべし上說の如く、時を以てし、非時を以てせず。是の如きの五法なり。爾時世尊、跋闍國池水邊に在したまふ。諸比丘に告げたまはく、『汝等、我衣服飲食疾病醫藥床臥具の爲にして法を說くと謂ふや。』諸比丘、佛に白して言さく、『我等敢て是の如きの意を生ぜず、謂はく、世尊は衣服乃至臥具の爲の故に說法したまふと。』佛、言はく、『若し是を以てせざれば何の心もて作すと爲す。』諸比丘答へて言はく、『我等、是の如きの意を作す。世尊は衆生を慈念したまふが故に說法を爲したまふと。』佛、言はく、『汝等、若し實に是の如きの心有らば、我覺悟證知する所の法、四念處四正勤四神足四禪五根五力七覺意八聖道を應に歡喜和合して修學すべし。若し歡喜和合して修學せんに、餘比丘の犯戒有らば應に疾疾に擧すべからず。應に自ら觀察すべし。自らを惱ましめず、亦人を害せしめず、彼犯罪者、若し瞋恚を喜ばず、怨嫌を結ばず、覺悟を難ぜざれば、自ら能く除罪し、能く不善を捨し善法に住せん。若し作すこと是の如くんば復應に宜く量ふべし。若し自ら惱み已つて然も彼人を害せず、彼罪有らば瞋恚を喜ばず、悟り難からんも疾に能く除罪し、能く不善を捨し善法に住す。彼比丘應に是念を作すべし。我小惱を得たるも彼に於て害無く、愛利益有り。能く不善を捨し善法に住せしむ。則ち應に罪を擧すべし。比丘、是念を作す。我他罪を擧せば當に自ら惱むことを得べし。然も彼を害せず、彼罪有る者喜んで瞋恚せば解悟を得易く、能く疾に罪を捨せん。

餘は上に說くが如し。比丘復是念を作す。若し他罪を舉せんに我に於て惱害を得、彼罪有る者、喜んで瞋恚せば解悟すべきこと難し。疾く罪を捨せず。若し我罪を舉せんに爲に憶念を作し、當に餘外語を以て我に答へて瞋恚を生ずべし。是の如くんば人便ち應に捨置すべし。復舉すべからず。是の如くんば比丘和合歡喜し、阿毘曇中に於て種種の諍語有り、應に語言あるべし。「諸長老、所說の文義相應せり、應に共に諍ふべからず」と。餘比丘有り。人に共言を信用せらるる者、應に語言有るべし。「長老、所說の文義相應せり。應に共に諍ふべからず」と。復更に餘比丘有り。人に言を信用せらるる者、亦應に是の如きの語を語るべし。復是言を作さん。「長老、所說の文異にして義同なり。此は是れ小事のみ。共に鬪諍すること莫れ」と。若し多人に信ぜられ、共言を信用せらるる者有らんに、應に是の如きの言を語るべし。復更に多人に言を信用せらるる者有らんに、亦應に是の如きの言を語るべし。復是言を作さく「長老、所說の文同じく義異れるも亦是の如し」と。復是の如きの語を作さん。「長老、所說の文義倶に異なり、共に鬪諍すること莫れ」と。多人に言を信用せらるる者有り。應に是の如きの言を語るべし。復更に言に信用有る者も亦應に是の如きの言を語るべし。若し是の如く作さば和合衆僧に諍事の起ること有り。應に和合して共に集まるべし。共に集り已らば應に是の如きの觀察を作すべし。若し共に鬪諍せば沙門法に於て留難を作すや不や。汝の謂は云何と。餘比丘の正理を見る者、應に是言を作すべし。鬪諍法は沙門法に於て卽ち是れ留難なり。復問うて言はく「若し見有らば是

れ呵すべきや不や」と。彼言はく、「我意に謂ふに、沙門法に於て留難を作さば、即ち是れ呵すべし。」復問うて言はく、「若し沙門法に於て留難を作さば是れ可呵法ならば、能く善根を進めて沙門果を得るや不や。」正理を見る比丘有り。言はく、「我意に謂ふに、呵すべきも善根を進むること能はず、沙門果を得ること能はず」と。若し是の如きの諍事滅を作さば、應に彼比丘に語つて言ふべし。「汝、我等が爲に此諍事を滅せり」と。彼比丘、應に答へて言ふべし。「我他心を知らず、但佛所に於て信樂有り。」世尊、時を以て我爲に說法したまひ、最上勝妙もて善惡を開示したまふ。我如きは世尊の所に從つて是の如きの法を聞き、今汝の爲に說くのみと。若し彼比丘聞き已つて便ち諍事を捨す。」比丘、是の如きの說を作す時、自ら己れを高くせず、亦人に下らず、是の如くんば餘比丘の能く呵す者有ること無けん。」佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり。十三種人有り。未だ大戒を受けざれば應に受くべからず。若し受くれば應に滅擯を作すべし。自ら言はく、邊罪を犯ず、比丘尼を犯ず、賊心もて受戒す、二道黃門を破す。父を殺す。母を殺す、阿羅漢を殺す。僧を破す。惡心もて佛身血を出すと。非人と畜生と二根と。是を十三種人の未だ大戒を受けずんば應に受くべからず、若し受くれば應に滅擯すべしと爲す。爾時佛、優波離に告げたまはく、「汝等數他比丘の罪を舉すること莫れ。何を以ての故に。若し比丘數他罪を舉ぐるに身清淨ならざれば則ち他語を生ぜん。長老、先づ自ら身を淨めよと若し舉他比丘の身清淨なれば他語を生ぜざらん。是の如く口清淨ならず、命清淨な

らず、多聞ならず、毘尼を誦せず、修多羅を觀察せず、言、辯了ならず、喩へば白羊の若し。善比丘の身業に於て慈無きも亦是の如し。復次に優波離、若し比丘他罪を出さんと欲せば、罪有らしめざれ、犯有らば便ち擧し、犯せざれば擧せず、彼比丘の自言を取つて與に自言を作せ。善能く言說辯了なれば利益有らん。復次に優波離、擧他比丘に復應に五法有るべし、時を以てし、時を以てせず。（是の如きの五法は上說の如し。）優波離、若し比丘に此十七法有らば應に他罪を擧すべし。二十二法有り、應に人に大戒を授くべからず。法を知らず、非法を知らず、乃至說不說を知らず、可懺罪を知らず、不可懺罪を知らず、懺悔を知らず、懺悔清淨を知らず、是二十二法有り、應に人に大戒を授くべからず。二十二法有り。應に人に大戒を授くべし。（上句に反する是なり。）爾時佛、諸比丘に告げたまはく、「二十二種行を以て是れ平斷事人を知る。具に二百五十戒を持し、多聞にして善く阿毘曇毘尼を解し、人と諍はず、亦此事に堅住せず、應に呵すべき者は呵し然る後住す。敎ふべきには敎へて後住し、應に滅擯すべきは滅擯して然る後住し、不愛、不恚、不怖、不癡、此部の飲食を受けず、亦彼部の飲食を受けず、此部の衣鉢坐具針筒を受けず、亦彼部の衣鉢坐具針筒を受けず、此部に供給せず、亦彼部に供給せず、此部と共に村に入らず、亦彼部と共に村に入らず、與に期要を作さず、亦彼に至つて後來り、後に坐せず。此二十二種有つて是れ平斷事人なることを知る。』佛說是の如し。諸比丘聞いて歡喜信樂し、受持せり（毘尼增一具足し竟る。）

四分律卷第六十

昭和七年七月十日印刷
昭和七年七月十日發行

昭和新纂國譯大藏經 論律部第十二卷

不許複製

編纂者 昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市神田區一ツ橋通町二番地
合名會社 東方書院
代表者 十藏寺宗雄

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者 井波康三郎

發行所 東京市神田區一ツ橋通町二
合名會社 東方書院
電話九段三八四二
振替東京六八六一一

印刷所 西村由太郎 ・ 製本所 眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 4207